

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第69集

角 江 遺 跡 II

遺物編 2 (木製品)

平成3～7年度二級河川新川住宅宅地関連公共施設整備促進
(中小)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第69集

角江遺跡 II

遺物編 2 (木製品)

平成3~7年度二級河川新川住宅宅地関連公共施設整備促進
(中小)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



臼（上：256下：257）



琴 (左:436 中:435 右:437)

序

角江遺跡は、平成2年度の確認調査の結果をもとに現地調査3ヵ年（平成3年度から平成5年度）及び資料整理・報告書作成2ヵ年（平成6年度から平成7年度）の5ヵ年にわたる調査が実施された浜松市の佐鳴湖南西に位置する弥生時代中期から後期を中心とする遺跡である。今回の報告は、その調査中に出土した遺物に関する成果をまとめたものである。既刊の「角江遺跡」（1991年）に続くもので、「角江遺跡II遺構編」（1996年）と並行し、「角江遺跡II遺物編2（木製品）」として報告する。

角江遺跡から出土した弥生時代の土器・土製品、木製品、石器・石製品などの出土品は、種類・量とも豊富であり、角江遺跡が拠点集落であったことを推定させる内容である。木製品に関しては、弥生時代の農耕文化を象徴する木製農耕具をはじめとして、臼や堅杵、船、舟形木製品、また特に4突起の板作り琴と8突起の槽作り琴が話題となった。また多量に出土した鍬・鋤の未製品資料は豊富な木材資源から、盛んに農耕具の生産活動が行われていたことを立証するものである。この他、線刻が施された絵画土器、人面付壺形土器、銅鐸形土製品、立体的に表現された鳥形土製品、有孔磨製石包丁、銅鐸の舌（石製）などの出土品は、弥生時代の文化圏及び交流を探る貴重な資料であり、全国的にも注目されるものが少なくない。角江遺跡の調査に際し、今までの課題に迫る資料の探究とその成果の周知を図ることは私どもの使命であり、喜びでもあることを改めて感じる次第である。

なお、調査の実施及び報告書の作成・刊行にあたっては、静岡県浜松土木事務所・静岡県教育委員会・浜松市教育委員会の各位、ならびに御多忙の中にも関わらず出土資料の鑑定及び玉稿を頂いた東北大学助教授・鈴木三男、放送大学助教授・笠原 淳両氏の多大な援助・協力に深く感謝の意を表すとともに、調査及び資料整理に従事した本所員ならびに作業に参加された多くの方々の労苦に感謝するものである。

1996年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 斎藤 忠

例　　言

- 1 角江遺跡IIの発掘調査報告書は、遺構編1冊、遺物編3分冊（「遺物編1（土器・土製品）」、「遺物編2（木製品）」、「遺物編3（石器・金属製品）」）の4分冊構成である。本書は、静岡県浜松市入野町字角江に所在する角江遺跡の発掘調査報告書「角江遺跡II 遺物編2（木製品）」であり、角江遺跡出土木製品の調査結果及び成果を報告するものである。
- 2 調査は、二級河川新川住宅地閑連公共施設整備促進（中小）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 調査期間は、現地発掘調査3ヶ年（平成3年4月1日から平成6年3月31日）及び資料整理・報告書作成2ヶ年（平成6年4月1日から平成8年3月31日）である。
- 4 調査体制は、次のとおりである。

平成3年度（現地発掘調査）

所長 斎藤 忠、 常務理事 鈴木 熟、 調査研究部長 山下 晃、
調査研究二課長 栗野克巳、 調査研究員 内藤朝雄、中山正典、塙本裕巳

平成4年度（現地発掘調査）

所長 斎藤 忠、 常務理事 鈴木 熟、 調査研究部長 山下 晃、
調査研究一課長 平野吾郎、 調査研究員 内藤朝雄、塙本裕巳、嘱託技術員 中嶋郁夫

平成5年度（現地発掘調査）

所長 斎藤 忠、 常務理事 鈴木 熟、 調査研究部長 植松章八、
調査研究一課長 佐野五十三、 調査研究員 塙本裕巳、中川律子（旧姓 伊藤） 嘱託技術員
（10月まで） 中嶋郁夫

平成6年度（整理作業・報告書作成）

所長 斎藤 忠、 常務理事 鈴木 熟、 調査研究部長 小崎章男、
調査研究一課長 佐野五十三、 調査研究員 中川律子（旧姓 伊藤）、青木 修 嘱託技術員 中
嶋郁夫

平成7年度（整理作業・報告書作成）

所長 斎藤 忠、 副所長池谷和三、 常務理事 三村田昌昭、 調査研究部長 小崎章男、
調査研究一課長 佐野五十三、 主任調査研究員 中嶋郁夫（5月まで*兵庫県へ災害派遣）
調査研究員 篠原充男、中川律子（旧姓 伊藤）、岩本 貴（6月より）、 技術職員 勝又直人

- 5 本書は、調査研究員 中川律子（旧姓 伊藤）が執筆し、編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。なお、遺物写真撮影は、楠華堂 楠本真紀子（4×5判、スライド）、技術職員 杉山すず代（6×7判）が行った。
- 6 すべての出土資料及び調査資料は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 7 資料整理・本書作成にあたり、出土資料に関して、次の方々に御教示及び御指導を頂いた。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順、敬称略）

笠原 潔、鈴木三男、山田昌久

目 次

カラー図版1 白（上：256 下：257）

カラー図版2 琴（左：436 中：435 右：437）

序

例言

目次

挿図目次

挿表目次

図版目次

特論挿表・図版目次

第I章 資料整理の方法	1
第1節 資料の概要	1
第2節 資料整理の流れ	2
第II章 木製品	6
第1節 中・近世	6
第2節 平安時代	13
第3節 奈良時代	18
第4節 古墳時代	19
第5節 弥生時代	22
第6節 繩紋時代	180
第III章 まとめ	181

特論1 静岡県浜松市角江遺跡出土木製品の樹種 東北大学理学研究科 鈴木三男

(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所

特論2 角江遺跡出土の琴ならびに琴状木製品 放送大学 笠原 深

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 整理作業工程図	2
第2図 木製品計測模式図	3
第3図 木製品実測図凡例	4
第4図 曲物井戸（2SE10下層）出土木製品	7
第5図 素掘り井戸（4SF01）出土木製品	9
第6図 中世の遺構出土木製品	10

第7図	中・近世の遺構・包含層出土木製品	11
第8図	曲物井戸（3SE23）出土木製品	14
第9図	曲物井戸（3SE23・3SE21）出土木製品	15
第10図	曲物井戸（3SE22）出土木製品	16
第11図	素堀井戸（9SF25）出土木製品	18
第12図	切り賣き井戸（3SE04）出土木製品1	20
第13図	切り賣き井戸（3SE04）出土木製品2	21
第14図	農具1（直柄平鋏1）	29
第15図	農具2（直柄平鋏2）	30
第16図	農具3（直柄平鋏3）	31
第17図	農具4（直柄平鋏4）	33
第18図	農具5（直柄又鋏1）	34
第19図	農具6（曲柄平鋏1）	36
第20図	農具7（曲柄平鋏2）	37
第21図	農具8（曲柄平鋏3）	38
第22図	農具9（曲柄平鋏4）	39
第23図	農具10（曲柄又鋏1）	40
第24図	農具11（曲柄又鋏2）	41
第25図	農具12（一本鋏1・組み合わせ平鋏1）	43
第26図	農具13（組み合わせ平鋏2）	44
第27図	農具14（組み合わせ平鋏3・組み合わせ又鋏1）	45
第28図	農具15（鋤の柄）	46
第29図	農具16（未製品1）	49
第30図	農具17（未製品2）	50
第31図	農具18（未製品3）	51
第32図	農具19（未製品4）	52
第33図	農具20（未製品5）	53
第34図	農具21（未製品6）	54
第35図	農具22（未製品7）	55
第36図	農具23（未製品8）	56
第37図	農具24（未製品9）	57
第38図	農具25（曲柄1）	59
第39図	農具26（曲柄2）	61
第40図	農具27（曲柄3）	62
第41図	農具28（曲柄4）	63
第42図	農具29（曲柄未製品1）	65
第43図	農具30（曲柄未製品2）	66
第44図	農具31（曲柄未製品3）	67
第45図	農具32（鎌・鎌柄）	69
第46図	農具33（鎌）	70
第47図	農具34（臼1）	72

第48図 農具35（臼2）	73
第49図 農具36（小型臼）	74
第50図 農具37（堅杵）	76
第51図 農具38（横槌）	77
第52図 農具39（その他農具）	79
第53図 工具1（直柄・直柄未製品1）	81
第54図 工具2（直柄未製品2）	82
第55図 工具3（曲柄1）	84
第56図 工具4（曲柄2）	85
第57図 紡織具（織機・編台他）	87
第58図 運搬具1（船）	89
第59図 運搬具2（櫛状木製品1）	91
第60図 運搬具3（櫛状木製品2）	92
第61図 運搬具4（櫛状木製品3）	93
第62図 運搬具5（櫛状木製品4）	94
第63図 運搬具6（アカカキ状木製品1・背負子）	96
第64図 運搬具7（アカカキ状木製品2）	97
第65図 漁撈具（網粹（クモ））	99
第66図 武器1（弓1）	101
第67図 武器2（弓2）	102
第68図 武器3（弓3）	103
第69図 武器4（楯・矢）	105
第70図 食事具・装身具（杓子・匙・木履）	107
第71図 容器1（高杯1）	109
第72図 容器2（高杯2）	110
第73図 容器3（槽1）	112
第74図 容器4（槽2・盤）	113
第75図 容器5（その他容器）	115
第76図 遊戯具（琴）	117
第77図 祭祀具1（武器形他）	118
第78図 祭祀具2（舟形）	120
第79図 雜具（腰掛・各種部材）	121
第80図 建築材1（梯子1）	123
第81図 建築材2（梯子2）	125
第82図 建築材3（梯子3）	126
第83図 建築材4（梯子4）	127
第84図 建築材5（鼠返し・柄材）	129
第85図 建築材6（柱・台輪）	131
第86図 建築材7（垂木1）	133
第87図 建築材8（垂木2）	134
第88図 建築材9（各種部材1）	135

第89図	建築材10（各種部材2）	136
第90図	建築材11（各種部材3）	137
第91図	土木材（矢板）	139
第92図	用途不明木製品1（有頭棒状木製品1）	141
第93図	用途不明木製品2（有頭棒状木製品2）	142
第94図	用途不明木製品3（有頭棒状木製品3）	143
第95図	用途不明木製品4（有頭棒状木製品4）	144
第96図	用途不明木製品5（有頭棒状木製品5）	145
第97図	用途不明木製品6（棒状木製品1）	147
第98図	用途不明木製品7（棒状木製品2）	148
第99図	用途不明木製品8	149
第100図	用途不明木製品9	150
第101図	用途不明木製品10	151
第102図	用途不明木製品11	152
第103図	用途不明木製品12	153
第104図	用途不明木製品13	155
第105図	用途不明木製品14	157
第106図	用途不明木製品（668）拡大図・線刻紋様模式図	158
第107図	用途不明木製品15	159
第108図	用途不明木製品16	160
第109図	用途不明木製品17	161
第110図	用途不明木製品18	162
第111図	用途不明木製品19	163
第112図	用途不明木製品20	164
第113図	用途不明木製品21	165
第114図	用途不明木製品22（加工痕資料）	166
第115図	用途不明木製品23（整形板材1）	167
第116図	用途不明木製品24（整形板材2）	168
第117図	用途不明木製品25（樹皮製品）	169
第118図	用途不明木製品26（籠編物）	170
第119図	運搬具（櫈）	180

挿表目次

第1表	角江遺跡の木製遺物種類別一覧表（近世～繩紋時代）	1
第2表	中・近世遺構・包含層出土木製品	12
第3表	平安時代遺構及び古墳時代後期～平安時代初頭包含層出土木製品	17
第4表	古墳時代遺構出土木製品	19
第5表	弥生時代の木製品一覧表1	23
第6表	弥生時代の木製品一覧表2	25

第7表	弥生時代の木製品一覧表3	25
第8表	方形周溝墓周溝内出土木製品	25
第9表	溝（S D）出土木製品	25
第10表	畦畔出土木製品	26
第11表	弥生水田出土木製品	27
第12表	弥生時代出土木製品1	171
第13表	弥生時代出土木製品2	172
第14表	弥生時代出土木製品3	173
第15表	弥生時代出土木製品4	174
第16表	弥生時代出土木製品5	175
第17表	弥生時代出土木製品6	176
第18表	弥生時代出土木製品7	177
第19表	弥生時代出土木製品8	178
第20表	弥生時代出土木製品9	179

図版目次

- 図版1 曲物井戸（2SE07・2SE10下層）出土木製品
- 図版2 素堀り井戸（4SF01）出土木製品・木簡及び舟形木製品
- 図版3 中世遺構・包含層出土木製品（漆椀・曲物）
- 図版4 中・近世遺構・包含層出土木製品
- 図版5 曲物井戸（3SE23）、曲物井戸（3SE21～23）検出状況
- 図版6 曲物井戸（3SE21～23）出土木製品
- 図版7 素堀り井戸（9SF25）出土木製品・出土状況、剃り貫き井戸（3SE04）検出状況
- 図版8 剃り貫き井戸（3SE04）出土木製品
- 図版9 農具（直柄平鋤）、平鋤（60）出土状況
- 図版10 農具（直柄平鋤）
- 図版11 農具（直柄平鋤）
- 図版12 農具（直柄平鋤）
- 図版13 農具（直柄又鋤）
- 図版14 農具（曲柄平鋤）
- 図版15 農具（曲柄平鋤）
- 図版16 農具（曲柄平鋤）
- 図版17 農具（曲柄平鋤）
- 図版18 農具（曲柄又鋤）
- 図版19 農具（一木鋤・組み合わせ平鋤）
- 図版20 農具（組み合わせ平鋤・又鋤）
- 図版21 農具（鋤の柄）
- 図版22 農具（未製品）
- 図版23 農具（未製品）

- 図版24 農具（未製品）
図版25 農具（未製品）
図版26 農具（未製品）
図版27 農具（曲柄）
図版28 農具（曲柄）
図版29 農具（曲柄）
図版30 農具（曲柄未製品）
図版31 農具（曲柄未製品）
図版32 農具（鎌・鎌柄）、鎌柄（249）出土状況
図版33 農具（鎌）
図版34 農具（臼）、臼（256・257）出土状況
図版35 農具（小型臼）
図版36 農具（豎杵）
図版37 農具（横槌・その他農具）
図版38 工具（直柄・直柄未製品）
図版39 工具（直柄未製品）
図版40 工具（曲柄）
図版41 工具（曲柄）
図版42 紡織具（織機・縞台）、食事具（杓子・匙）
図版43 運搬具（船）、船（317）出土状況
図版44 運搬具（櫂状木製品）
図版45 運搬具（櫂状木製品）
図版46 運搬具（櫂状木製品）、櫂状木製品（339・340）出土状況
図版47 運搬具（アカカキ状木製品・背負子）
図版48 運搬具（アカカキ状木製品）
図版49 漁撈具（網枠(クモ)）
図版50 武器（弓）
図版51 武器（弓・矢・楯）
図版52 装身具（木履）
図版53 容器（高杯）
図版54 容器（高杯）
図版55 容器（槽）
図版56 容器（槽・盤その他容器）
図版57 容器（その他容器）
図版58 遊戯具（琴）
図版59 遊戯具（琴）、雜具（腰掛・各種部材）
図版60 祭祀具（武器形他）、舟形（446）・杖？（439）出土状況
図版61 祭祀具（舟形）
図版62 祭祀具（舟形）
図版63 祭祀具（舟形）
図版64 弥生時代の木製品出土状況

- 図版65 建築材（梯子）
 図版66 建築材（鼠返し・枠材）
 図版67 建築材（柱・台輪）
 図版68 建築材（垂木）
 図版69 建築材（各種部材）
 図版70 建築材（各種部材）
 図版71 建築材（各種部材）
 図版72 用途不明木製品（有頭棒状）
 図版73 用途不明木製品（有頭棒状）
 図版74 用途不明木製品（有頭棒状）
 図版75 用途不明木製品（棒状）
 図版76 用途不明木製品（棒状他）
 図版77 用途不明木製品
 図版78 用途不明木製品
 図版79 用途不明木製品
 図版80 用途不明木製品
 図版81 用途不明木製品
 図版82 用途不明木製品
 図版83 用途不明木製品
 図版84 用途不明木製品
 図版85 用途不明木製品
 図版86 用途不明木製品（整形板材他）
 図版87 用途不明木製品（加工痕資料他）
 図版88 用途不明木製品（加工痕資料）
 図版89 用途不明木製品（樹皮製品）
 図版90 用途不明木製品（籠編物）

特論挿表・図版目次

特論 1	185
表 1. 角江遺跡の木製品の樹種構成	201
表 2. 角江遺跡の木製品の樹種組成の特徴	202
表 3. 角江遺跡の木製品の種別の樹種構成	205
表 4. 角江遺跡の農耕具の樹種	206
表 5. 渔労運搬具の樹種	206
表 6. その他の木製品の樹種	207

- 図版 1 角江遺跡出土木製品顕微鏡写真
 図版 2 角江遺跡出土木製品顕微鏡写真
 図版 3 角江遺跡出土木製品顕微鏡写真

- 图版4 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版5 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版6 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版7 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版8 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版9 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版10 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版11 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版12 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版13 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版14 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版15 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真
图版16 角江遺跡出土木製品顯微鏡写真

第Ⅰ章 資料整理の方法

第1節 資料の概要

角江遺跡は弥生時代中期から近世までの遺構・遺物を合わせ持つ複合遺跡である。本編は角江遺跡から出土した木製遺物を資料集成し掲載すること目的とし、実測図版と写真図版及び観察表を収録している。本書を利用するにあたり、出土した木製品の概要とその掲載方法について解説する。

角江遺跡から出土した木製品は総数2025点にのぼる。このうち中・近世に属する木製品は56点、平安時代のものは24点、奈良時代1点、古墳時代10点、及び古墳～平安時代までの包含層から出土したものが7点ある。残る1926点は弥生時代に属する木製品であり、その多くは調査区の南側で検出された自然流路(SR01、註1)で出土したものである。他に、その下層の縄紋時代の流路から木製品が1点出土している。

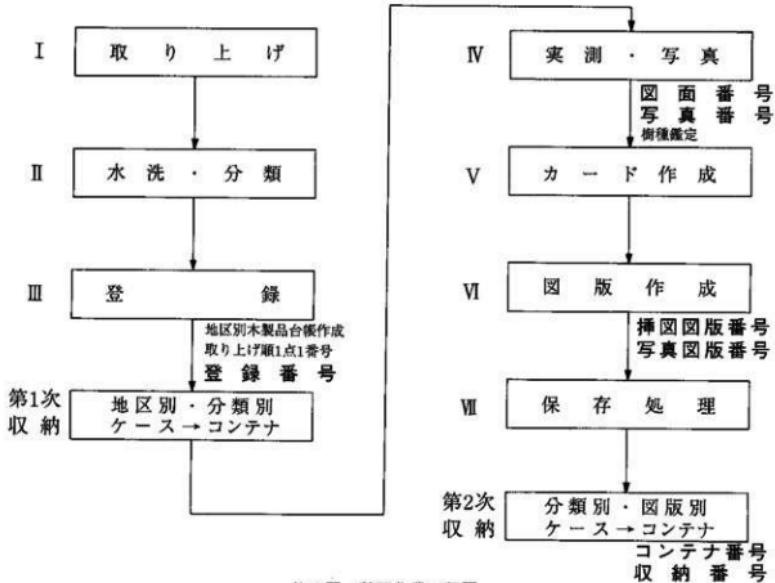
まず近世から古墳時代にかけて出土した木製品の種類は、漆椀・曲物などの容器をはじめ井戸戸に使われた大型の曲物や井戸枠などの土木材がある。しかし用途が特定できないものが大半を占めている。その他、数は少ないが農具や装身具・祭祀具・運搬具などがある。そのほとんどは遺構に伴って出土し、共伴した土器などから時期を決定している。2～6層までの遺物包含層(註2)は主に水田の客土・床土として使われていたところだが木製品の出土量は極めて少ない。

弥生時代の遺構や包含層から出土した木製品の種類の中心は農耕具であり、特に鉗・鋤は豊富な器種と数量を持ち県内でもこれまでに例を見ない。しかし注目されるのは農耕具に限らず、工具や容器、運搬具、紡織具、武器、漁獵具、建築材など、当時の生活に欠かせないものだったであろうあらゆる木の道具が見つかっていることである。遺構に伴って出土したものは118点ある。その代表的なものは1号方形周溝墓の南側周溝(5・6 SD07)から出土した組み合わせ鉗や、11号方形周溝墓の西側周溝(9SF31)の底から出土した一木鋤?、また調査区北側で検出された二重に並行している溝(5・6、9SD33、SD34)からは、建築材の柱や梯子が出土した。この他には調査区の南側で検出された弥生時代後期の水田(8層上部水田・8層下部水田)では、畦畔の中から建築材と思われる多量の木製品が出土した。遺構から出土した木製品はそれぞれ一覧表にまとめている。

弥生時代に属する木製品の約9割は前述した自然流路(SR01)から出土した。自然流路(SR01)の堆積層は『角江遺跡II(遺構編)』に掲載された層位名にならっている。第I層を弥生時代後期前葉とし、第II層を中期後半～後期前葉、第III層を中期後半、第IV層を中期中葉～中期後半、第V層を中期初頭～中期中葉としている。これ以外の層位名の表記については、「SR01・上層」を弥生時代後期、「SR01・中

第1表 角江遺跡の木製遺物種類別一覧表(近世～縄紋時代)

種類	点数	種類	点数	種類	点数
農具	249	武具	33	祭祀具	13
工具	19	食事具	5	雑具	2
紡織具	5	装身具	3	建築材	90
運搬具	42	容器	80	土木材	30
漁獵具	10	遊戯具	3	用途不明木製品	1441
				総点数	2025



第1図 整理作業工程図

層」、「SR01・下層」、「SR01 北縁・ラミナ層」を弥生時代中期として扱っている。自然流路 (SR01) からは製品のほか、とりわけ農耕具の未製品資料が出土していることが注目される。未製品は削材の段階から製材・整形段階を経て、分割成形されるまでの良好な資料がそろっている。

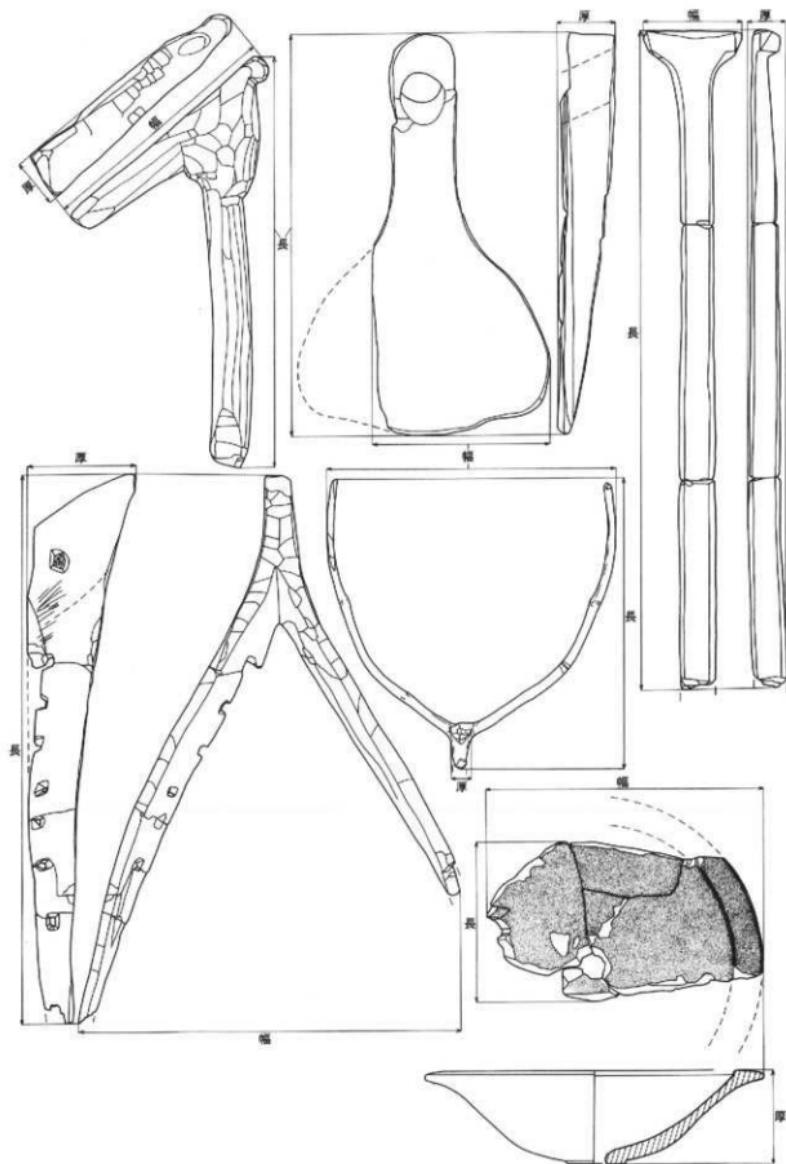
繩紋時代に相当する木製品は、自然流路の底からほぼ完形に近い櫛が1点出土している。

本書は第2章で近世から繩紋時代まで各節ごとに本文・挿図版、出土資料の一覧表を掲載している。第3章では若干の考察を加え、巻末に写真図版を掲載している。

今回の資料整理では、2025点中、製品を中心に854点の木製品について、東北大学理学研究科 鈴木三男氏に樹種同定を依頼した。その結果は「特論1」「静岡県浜松市角江遺跡出土木製品の樹種」として掲載した。また、音楽の町浜松市内の遺跡から出土した楽器として話題となった「琴」については放送大学 竜原 淳氏（音楽学）に考察を依頼し、その成果を「特論2」に掲載した。

第2節 資料整理の方法

現地で取り上げた角江遺跡の木製品は水洗い後、原則として1~11区までの地区ごとに1点につき1つの番号を付けて登録している。登録番号は1 mm方眼のマイラー用紙に出土した地区・グリッド・層位・遺構とともに記入し遺物に括り付けている。木製品の場合、遺物本体に登録番号を注記することができないため、作成した登録台帳に略測図を書いている。その後、地区別・器種別に分類した遺物は、シーラーパック（註3）、または濃度0.5%のホウ酸・ホウ砂液に浸けたままコンテナに仮収納される（第1次収納）。以上の作業は平成3年度から5年度にかけての現地調査の段階で行った。



第2図 木製品計測模式図

遺物の出土量が多く現地調査事務所での保管が困難となったため、木製遺物の保管場所を資料整理事務所へ移し、平成5年度後半から徐々に図化作業を開始した。資料整理では実測・写真撮影・樹種同定などの作業を円滑に進めるために、現地で作成した登録台帳とは別に略測図台帳を作成している。略測図台帳は器種ごとに分けて作成し、仮収納されたコンテナ番号や略図・計測値を入れ、実測、撮影の作業が終了したものから図面番号や写真的ネガ番号を記入していく。資料整理段階ではこの略測図台帳をもとに遺物の保管・管理を行った。

平成6年度から本格的に図化作業を進めた。木製品の原図は1mm方眼のマイラー用紙を使用した。通常、原図は原寸大だが、70cm～1mを超える大型品は1/2縮尺の原図を作成した。原図は木の持つ自然な質感は極力省略し、人為的痕跡や二次的痕跡を中心に図化した。また原図の断面図には年輪を模式的に図示した。完成した原図には「角江WN1」と図面番号が付けられる。

木製品の写真撮影は4×5判サイズを使用している。白黒4×5判を基本とし、必要に応じてカラースライドでも撮影している。また記録保存のため白黒6×7判での撮影も行っている。ネガフィルムには写真番号をつけて所定のファイルへ保管し、焼き付け(ペタ焼)は収納されたネガフィルムの順にカーボ化し写真台帳としている。なお写真番号の重複を避けるため、ネガ番号を記入する際、必ずフィルムサイズを明記している。



黒 漆



炭 化



黒 色 領 料



樹 皮



赤 色 領 料



圧 痕・装 着 痕

第3図 木製品実測図凡例

木製遺物は樹種同定をするため標本プレパラートを作成している。標本プレパラートには作成順に標本番号がつけられる。なお本遺跡の標本プレパラートの作成と標本の顕微鏡写真及びその写真図版の作成については、当研究所の保存処理担当である主任調査研究員 西尾太加二、宇野昭男と技術職員 森田直美があたった（註4）。

原則として図化した木製遺物はすべてカード化している。遺物カードには原図の複写と焼き付けた写真を添付し、出土地点や登録番号、図面番号、写真番号などその遺物に関する情報を所定の位置へ記入してある。またこれと並行して遺物カードに記載されたデータをパソコンへ入力する作業も行った。入力されたデータは当研究所の情報処理で作成された遺物のデータベースに組み込まれ、必要に応じていつでも検索が出来るようになっている。

報告書の作成にあたっては、挿図図版は1／4縮尺を基本としている。大型の建築材などは1／8もしくは1／10縮尺で掲載した。挿図図版は時代別に器種ごとに組み、第4～119図までを掲載している。法量は基本的に最大値を計り、その計測方法は第2図に示した。計測値は一覧表に掲載している。挿図に使用した漆、炭化、顔料、樹皮、圧痕・装着痕などの表記方法はスクリーントーンを用いた。第3図の凡例を参照されたい。

写真図版は図版1～90までを巻末にまとめて掲載した。出来る限り多くの遺物を掲載するため集合写真を多用している。また遺構に伴って出土した木製品や柄と身が装着された状態で出土した農具など、必要に応じて現地での出土状況も掲載している。写真図版の縮尺は任意である。なお挿図図版番号は通し番号で、文中で使用する番号や写真図版番号・一覧表と同一番号を付している。

木製品は原図作成と写真撮影、標本プレパラートを作成したものから保存処理を行っている。角江遺跡の木製品の場合、約65%が広葉樹であることや芯持ち材が多いことから、真空凍結乾燥法（FD法）またはPEG加熱含浸法による保存処理を行っている。保存処理後は分類別・図版別にコンテナへ収納し（コンテナ番号）、一定の温度・湿度を保った収蔵庫へ保管される（収納番号・第2次収納）。

註1 自然流路（SR01）は調査区の南側位置、ほぼ東西方向に流れる旧河川跡で1区から2区にまたがって検出されている。縄文時代の晩期から形成され、弥生時代後期までに埋没したと考えられる。詳細は遺構編参照。

註2 2層は近世水田、3層は近世水田床土、4・5層は中世水田、6層は古墳後期～平安初期水田。

註3 木製遺物の保管方法は通常水漬けだが、遺物の残存状態の良いものはシーラーパックを活用した。シーラーパックは比較的の残存状態の良い針葉樹材には有効だが、広葉樹材の使用は避けたほうが望ましい。

註4 作成された標本プレパラートと顕微鏡写真は（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所の保存処理で保管している。

第II章 木製品

第1節 中・近世

近世

7区の近世包含層(2・3層、註1)から下駄(第7図31)が1点出土している。樹種はクリで柾目材を使っている。欠損部分が多くほとんど原形を揃めないが、現存長は21.6cmを測る。鼻緒孔は前壺が1.4cm、後壺が0.7cm。裏面に約0.5cmの段差があることから連歯下駄と考えられるが、歯にあたる部分に木釘が數ヶ所残っている。木釘は前壺に1ヶ所、後壺に2ヶ所あり孔径は0.3cmを測る。

中世

1 遺構出土木製品

A 曲物井戸(2SE01~07、09、10)

2SE01~07、09、10はいずれも中へ大型の曲物を井戸枠としている曲物井戸である。調査では中世に属する曲物井戸は9基検出されている。このうち2SE01~02・05は残存状態が悪く、遺物として取り上げることが不可能であったため現存しない。また2SE09は井戸枠が抜き取られていたため木質遺物は現存しない。

井戸枠が現存する2SE03は直径約45cm、高さ約16cmほどの曲物を据えている。側板の内側には木目と直交するケビキが全面に見られる。側板と底板とを固定したと思われる木釘も不規則な間隔で残っている。

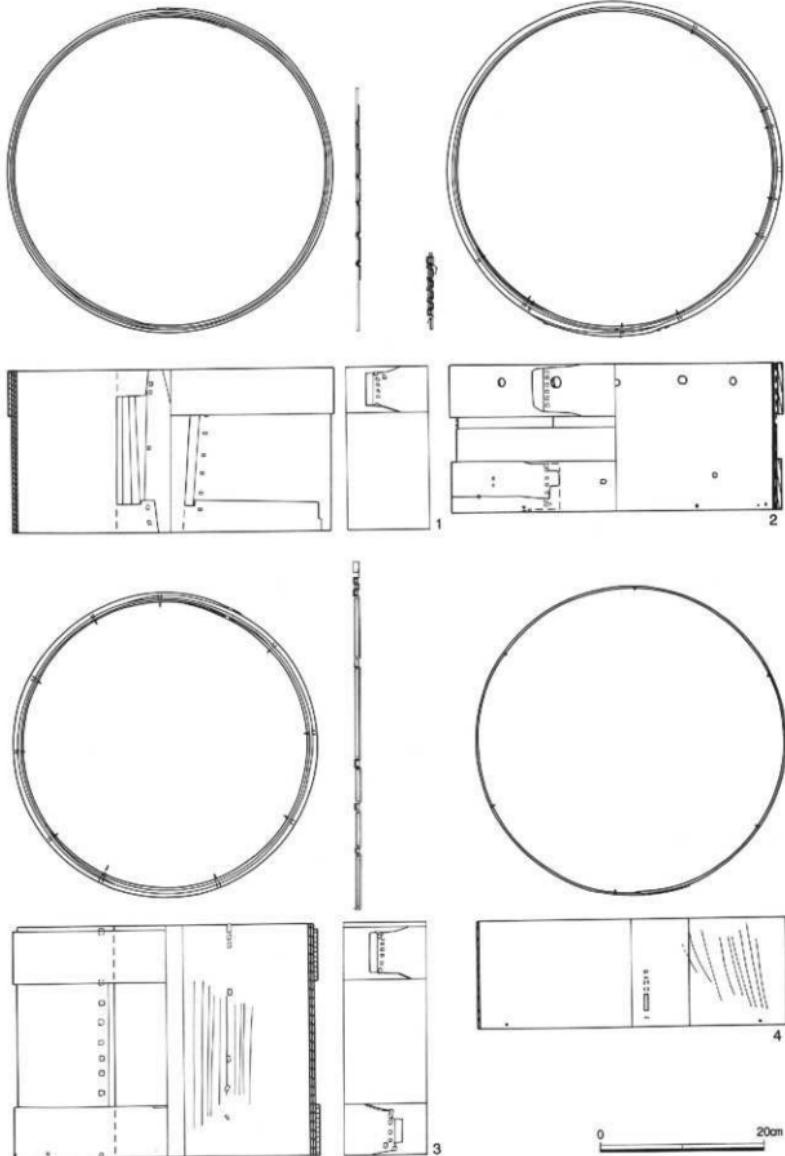
2SE04も直径約45cm前後、高さ約12cmほどの曲物が据えられていた。側板内側には木目と直交するケビキがある。

2SE06は直径約43cm内外、高さ約50~55cmで曲物は計3段に積まれていた。側板内面は木目方向よりや斜平行のケビキが刻まれている。井戸の内部上面からはほぼ完形の土鍋(遺構縦第30図4)が1点出土している。

2SE07は曲物が重なるように3段積まれていた。上段の最大径は約50cm内外、最下段の径が約40cm、井戸枠全体の高さは50cmを測る(図版1)。

2SE10の上面は割石を組んで井側を構築した石組の井戸で、井側の南側には土坑一面に礫を敷き詰めている。この敷石の下層から石組井戸より古い時期の曲物井戸が2基並んで検出されている。曲物井戸枠(第4図1~4)は、材はいずれもヒノキの板目。東側に位置する曲物は上段(1)が復元外径39.8cm、内径37.5cm、器高は20.0cmを計る。側板の綴じ合わせは相対し、その内面には垂直方向のケビキが入っている(綴じ合わせは模式図参照)。籠には底板・側板との結合孔は見られない。下段の曲物(2)は復元外径が40.8cm、内径は38.4cm、器高は18.0cmと一番大型のものである。籠も上下段に残り、木釘孔は上段に12ヶ所、下段に7ヶ所ある。内面は垂直方向と斜め方向のケビキが入っている。

西側上段の曲物(4)は復元外径37.75cm、内径37.35cm、器高13.2cmを計る。木釘穴は均等に6ヶ所あり、うち2ヶ所に木釘が残っている。西側下段の曲物(3)は復元外径37.2cm、内径34.8cm、器高は28.5cm。側板は合わせ目を薄くし、合わせ目が対面になるよう二重になっている。合わせ目内面には平行にケビキが入っている。籠は先を細く削り側板の対面で綴じ合わせている。合わせ目は薄く削られ、



第4図 曲物井戸（2SE10下層）出土木製品

上面にケビキを入れてある。側板・蓋とともに縦紐に沿って刻線が入っている。下側の蓋には角形の木釘が不均等に10ヶ所打ち込まれ、うち9ヶ所に木釘が残存している。

B 素堀井戸（4SF01）出土木製品

素堀井戸4SF01の底面から漆椀・木筒ほか9点の木製品が出土している。第5図5はケヤキ材の漆椀。内・外面とも黒漆が塗布されている。口縁部と高台はいずれも欠損している。8は木筒でヒノキ材を使っている。縦割れている片面側にうっすらと墨書きが見えるが文字の解読はできない。6、7、9～13は用途不明の木製品。6はスギ材で復元直径が約3.8cm、側縁辺には加工痕が残る。カキゾコタイプの曲物底板のミニチュア製品か。10の表面には無数の細く浅い刃物痕がある。11の方形の孔は貫通していない。

C 土坑（2SF28・30・32・34・39、9SF21）出土木製品

土坑2SF32の底層からは14・15の漆椀が出土している。いずれも内・外面は黒漆塗りで、内面中央と外側面に朱漆で紋様が描かれている。底部内側にはツメ痕と思われる傷がある。23は2SF28から出土した箸状木製品。2SF30は土堤状土坑だが、その土堤部分から漆椀片(16)と松葉のシガラ状のものが出土している。19の漆椀と20の円形曲物の底板は9SF21出土。19は接合点はないが同一個体と思われる。20は表面側に浅い刃物痕が無数に見られる。21は2SF34底層から出土した漆椀。底部はほぼ完全に近い形で残っている。その他2SF39からは用途不明の木片が2点出土している（図版4）。

D 溝（2SD03）出土木製品

2SD03からは17・18の木製品が2点出土している。17の樹種はクロマツで、半裁した材から上下面を簡単に削って作られている。下半分が欠損しているが、切り込みは枘孔ではなくL字形になっていた可能性がある。18は木筒のようなヒノキ材の薄板だが墨書きの痕跡は見られない。

E 柱穴出土木製品

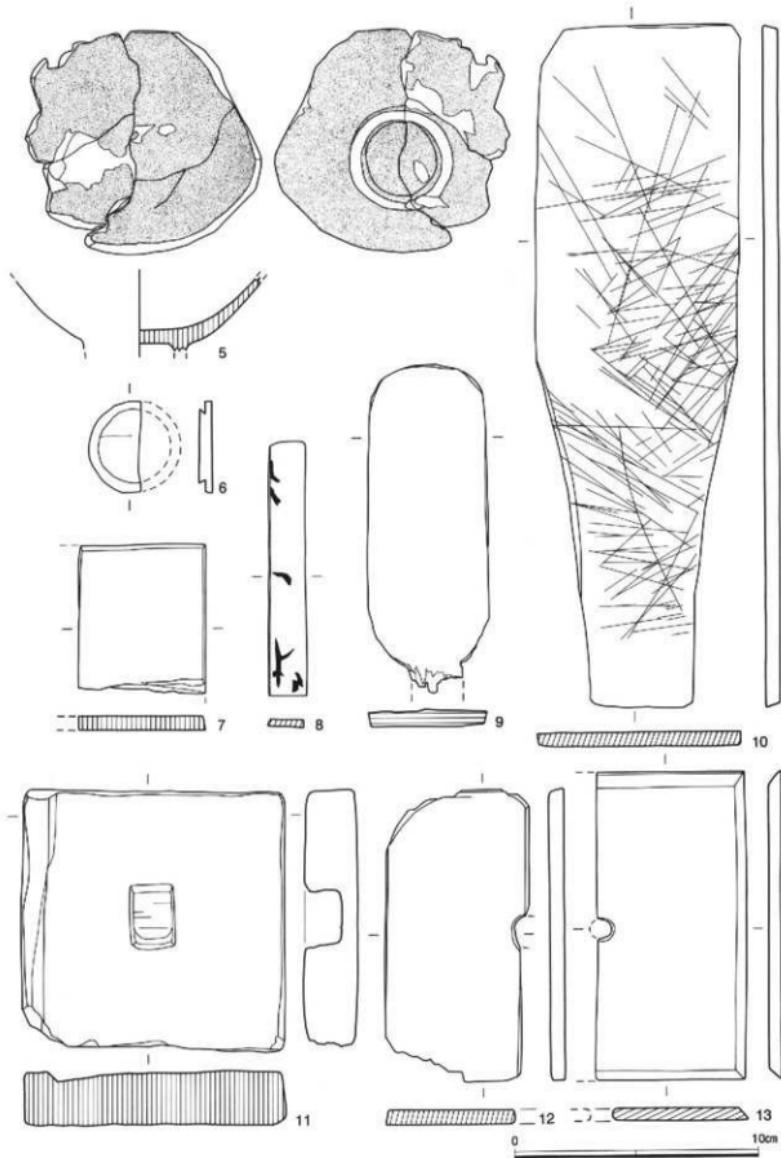
木質遺物が出土した柱穴は2区と4区を合わせて8ヶ所ある。このうち柱根が残っていたのは6ヶ所ある（法量・樹種等は第2表を参照）。いずれも芯持ちの丸太材で樹種はクロマツ、スダジイ、ヒノキなどすべて異なる。2SP615では箸状木片（22）、2SP583からは漆椀（24）が1点出土している。24は著しく風化しているが内面側に黒漆が塗布され、輪轂挽きの痕跡が見られる。

F その他

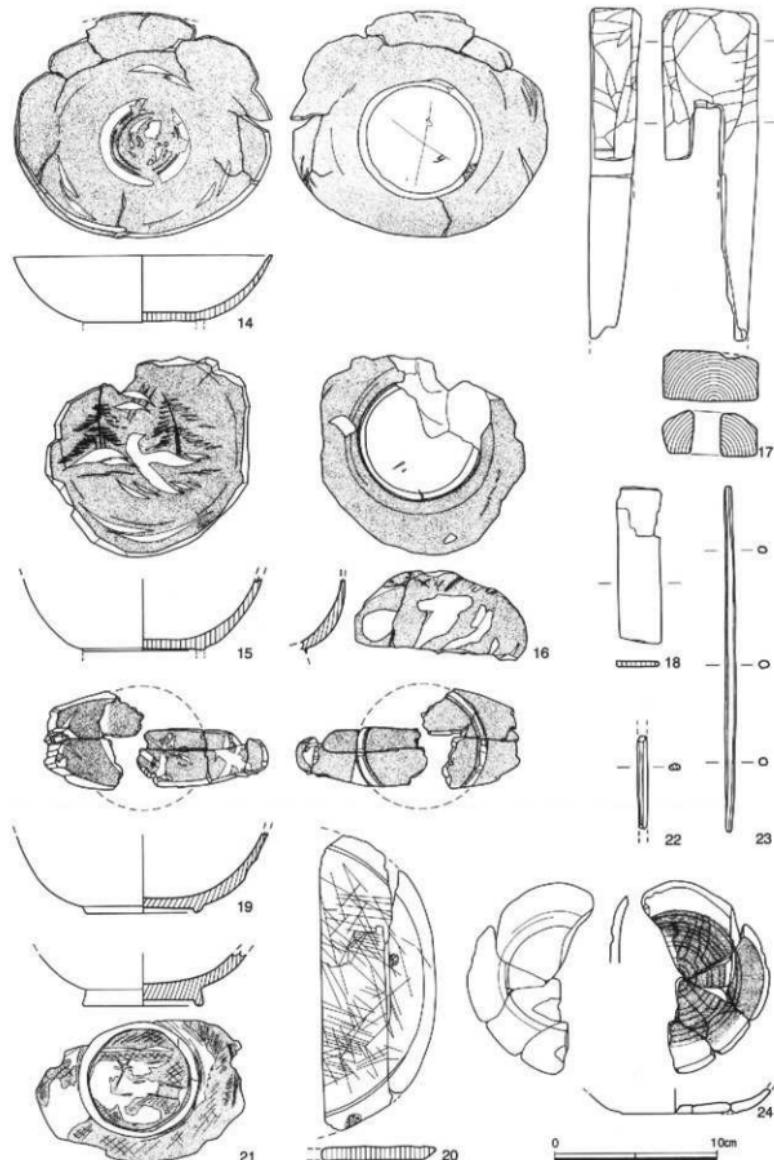
溝状遺構4SD03は弥生時代後期の遺構に属するが、中世の遺物の可能性がある小型円形曲物が1点出土している（30）。底板はクレゾコタイプのもので側板も付いて残存していた。

2 包含層（4・5層）

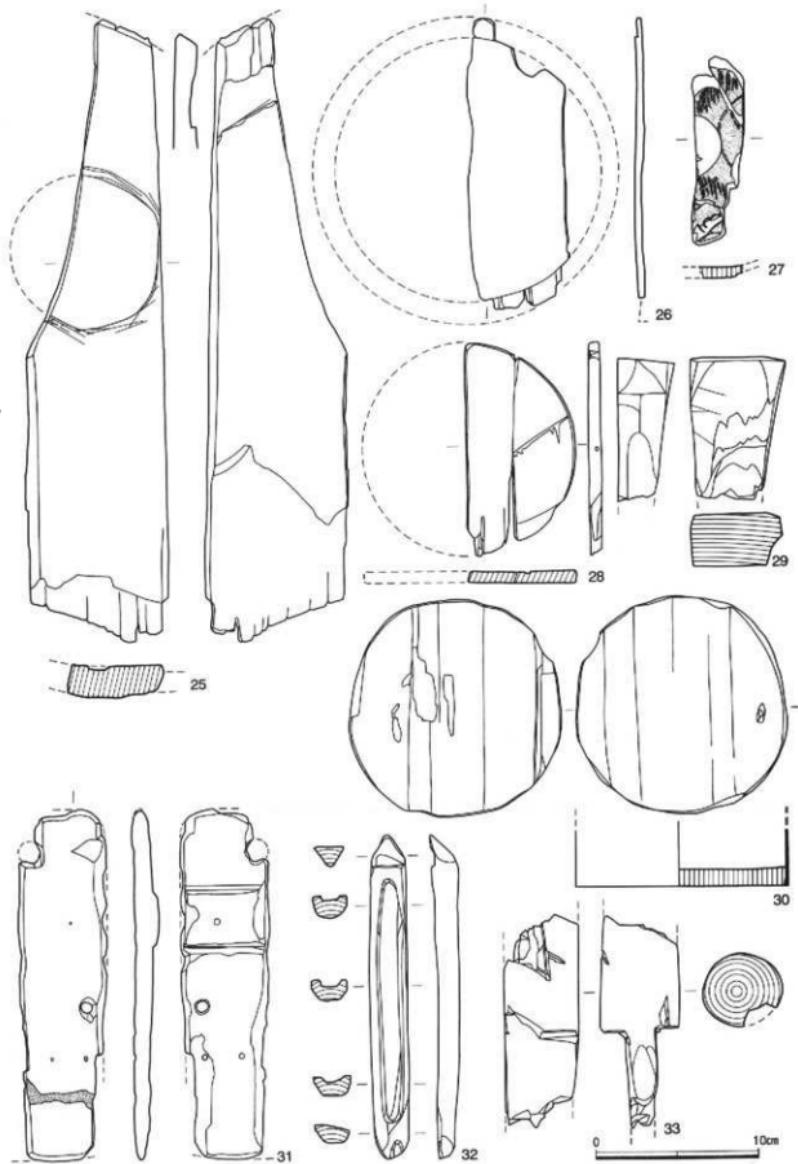
中世の包含層（4・5層、註2）他からは10点の木製品が出土している（第2表）。25は5層から出土した用途不明品。表面には円形（直径9.5cm）に削り出された部分があり、まわりに刃物痕が顕著に残っている。裏面にはカキゾコの曲物底板のようなL字形の切り込みがある。曲物底板から別の用途に転用されたものか。27は漆椀片。黒漆の上に朱漆で紋様が描かれている。28はクレゾコタイプの曲物底板で木釘孔が1ヶ所ある。32も4層から出土したほぼ完形の舟形木製品。一方の先端を尖らせてあり、さらにその上面は削られ段差が作り出されている（図版2）。舟の舳先を表現してあるものと考えられる。その他、用途の特定できないヒノキ材の板状木製品や蜜柑割りされたスギ材の先端を削って尖らせた杭などが包含層から出土している。



第5図 素堀り井戸(4SF01)出土木製品



第6図 中世の遺構出土木製品



第7図 中・近世の遺構・包含層出土木製品

註1 2層は近世水田（灰色粘土層）、3層は近世水田床土（小礫混り灰色粘土層）。

註2 4層は中世水田（黒色砂質シルト層）、5層も中世水田（黒褐色シルト層）。

第2表 中・近世遺構・包含層出土木製品

遺構・層位	同番	遺物名	測定	木取り	大きさ(cm)			備考
					横径	幅(α)	厚さ(cm)	
3-3層	31	下縁	クリ	板目	21.60	5.50	1.60	W7-165 前縁孔径1.4cm 後縁孔径0.7cm 木軸孔径0.3cm
3SE01		井戸(円形曲物)						
3SE02		井戸(円形曲物)						
3SE03		井戸(円形曲物)	ヒノキ	板目	65.00	8.50	0.40	W2-54
3SE04		井戸(円形曲物)						W3-55
3SE05		井戸(円形曲物)	ヒノキ	板目	35.50	5.20	0.40	W2-211
3SE06		井戸(円形曲物)						W2-12
3SE07		井戸(円形曲物)	ヒノキ	板目	49.00		4.60	W2-13
3SE09		井戸(円形曲物)						
3SE10	1	井戸(円形曲物)	ヒノキ	板目	39.80		2.00	W2-1 東面井戸・上段
3SE10	2	井戸(円形曲物)		板目	40.80		1.80	W2-1 東面井戸・下段
3SE10	3	井戸(円形曲物)	ヒノキ	板目	37.20		2.85	W2-2a 西面井戸・下段
3SE10	4	井戸(円形曲物)	ヒノキ	板目	37.75		13.20	W2-2b 西面井戸・上段
4SF01	5	漆椀	ケヤキ	楢木取り板目	4.20			W4-11 黒漆仕り
4SF01	6	用途不明木製品	スギ	板目	3.70	2.20	0.50	W4-6 復元直徑3.8cm
4SF01	7	用途不明木製品	ヒノキ	板目	6.10	5.20	0.60	W4-10
4SF01	8	木鏡	ヒノキ	板目	10.40	1.50	0.35	W4-17 番寄有り
4SF01	9	用途不明木製品	ヒノキ	板目	13.40	5.00	0.70	W4-5
4SF01	10	用途不明木製品	ヒノキ	板目	27.90	8.30	0.60	W4-7
4SF01	11	用途不明木製品	ヒノキ	板目	10.80	10.80	2.20	W4-8
4SF01	12	用途不明木製品	ヒノキ	板目	11.90	5.90	0.70	W4-9
4SF01	13	用途不明木製品	ヒノキ	板目	12.60	6.10	0.60	W4-12 孔径0.9cm
2SF32	14	漆鏡	ケヤキ	楢木取り板目	15.80	7.70	4.00	w2-10 黒漆仕り 桜様朱漆
2SF32	15	漆椀	トヨリコ真	楢木取り板目	7.40			W2-9 黒漆仕り 桜様朱漆
2SF30	16	漆椀	ケヤキ	楢木取り板目				W2-8 黒漆仕り 桜様朱漆
2SF30	17	用途不明木製品						W2-66 大型角材
2SF30	18	用途不明木製品	アマツツ					W2-36a シガフ(松葉)
2SD03	17	用途不明木製品	クロマツ	芯持ち材	20.40	5.80	3.10	W2-104
2SD03	18	木鏡?	ヒノキ	板目	9.60	2.70	0.40	W2-645
9SF21	19	唐鏡	クロマツ	楢木取り板目	7.40			W9-212 黒漆仕り 板根朱漆
9SF21	20	円形曲物(漆椀)	ヒノキ	板目	18.00	7.10	0.80	W9-213 一般化
2SF34	21	漆椀	クリ	楢木取り板目	7.30			W2-7 黒漆仕り
9SF30	22	著伏木製品		板目	6.80	0.50	0.40	W9-2115
2SF28	22	著伏木製品	ヒノキ斜	板目	21.20	6.70	0.50	W2-643
2SF29	23	用途不明木製品	ヒノキ	板目	12.20	4.40	0.30	W2-196
2SF29	24	用途不明木製品	ヒノキ	板目	7.20	2.00	0.70	W2-630
2SF615	22	著伏木製品	ヒノキ	板目	6.70	0.60	0.40	W2-2116
2SF643	24	漆鏡	ケヤキ	楢木取り板目	11.80	7.00	1.60	W2-634 黒漆仕り
4SF28	25	漆鏡	クロマツ	芯持ち材				W4-15
4SF28	26	杜枝	アラマツ	芯持ち材				W4-14
4SF28	27	杜枝	スダジイ	芯持ち材				W4-13
2SP27	28	桟橋	コララ節	芯持ち材	22.00	11.00	10.00	W2-101
2SP50	29	桟橋	二葉松節	芯持ち材	30.00	14.50	12.00	W2-79
2SP122	30	桟橋	ヒノキ	芯持ち材	41.00	13.00	13.00	W2-80
5番	25	用途不明木製品	ヒノキ	板目	38.40	8.80	2.10	W1-7 切り込み復元直徑9.5cm
5番	26	用途不明木製品	ヒノキ	板目	21.00	3.00	1.00	W1-9
5番	27	漆椀			4.00	3.50		W1-8-1
5-5等	28	用途不明木製品	ヒノキ	板目	30.00	6.50	0.50	W1-927
4番	27	漆椀	クリ	楢木取り板目				W1-3 黒漆仕り 桜様朱漆
4番	28	円形物(底板)	ヒノキ	板目	13.10	6.70	0.80	W7-1 復元直徑13.1cm 木軸孔0.25cm
4番	32	舟底木製品	ヒノキ	板目	19.90	2.40	1.80	w1-4
4番	33	状	スギ	板目	135.00	11.40	6.80	W1-5
4番	34	用途不明木製品	ヒノキ	板目	12.50	2.50	1.70	W1-1
南北トレーナ内	29	用途不明木製品	コウヤマキ	板目	8.70	5.80	3.50	W4-1
4SD08	30	円形物(底板)	ヒノキ	板目	13.40	13.00	3.50	W4-4

第2節 平安時代

1 遺構出土木製品

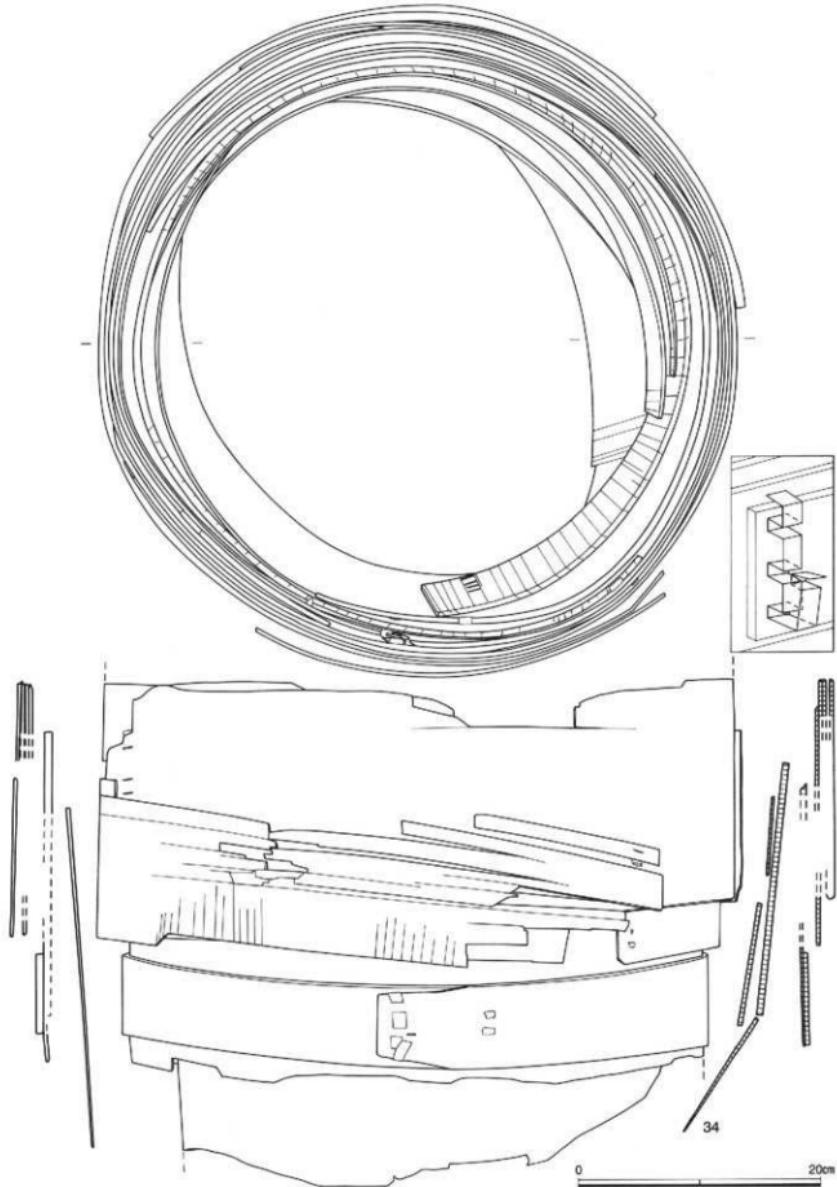
A 曲物井戸 (3SE21・22・23) の曲物井戸枠

平安時代に属する井戸は3基検出されている。いずれも大型の曲物を井戸枠としている、所謂、曲物井戸である。曲物井戸は比較的近接しており3SE21と3SE22はほぼ東西に並んで、その2mほど南側に3SE23が検出された(図版5)。それぞれの遺構についての詳しい記述は遺構編に掲載されているため、大型の曲物とそれと付属する木製品についてのみ触ることとする。

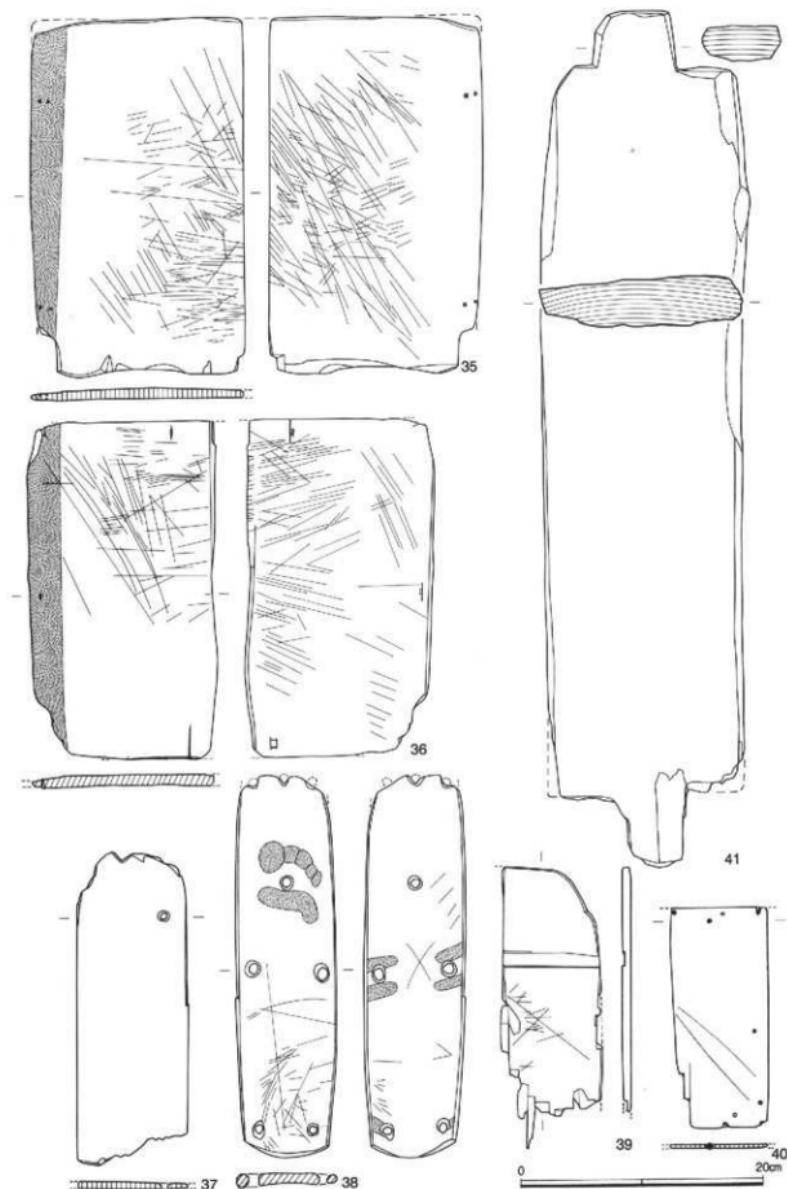
3SE21は径の小さいものから順番に大きなものへ合計5段の曲物を積んで井戸枠としている。いちばん上段の曲物は梢円形で直径が長いところで約63cm、短いところで約50cm、器高10cm、2段目は直径約53cmで高さ7.5cm、3段目は直径約50cmで器高8cm、4段目は直径約4.7cmで器高10~15cm、最下段は直径約44cmで器高37cmを測る。いずれも針葉樹の板目材を剥いた薄板で作られた曲物で樹種はヒノキを使っている。井戸枠に付属するものとして同遺構の掘り方の東側上面から板状の木製品(第9図41)が出土している。スギの板目材で長さ70.4cm、幅17.2cm、厚さが4.2cmある。上端と下端に縦横約5cm×6cmの突起を作り出している。作り出し部分と表面(木表)以外はすべて割り面で特に顕著な加工痕は見られない。

3SE22は3SE21の西隣から出土した。遺構の一部に後世のコンクリート杭が打ち込まれていたため、本体は現地で崩壊てしまっている。曲物は合計4段が組まれていた。上段の曲物は直径約58cmのほぼ正円形で器高17~20cm、2段目は直径約57cmで器高10cm、3段目は直径約49cmで器高9~12cm、最下段は直径約46cmで器高30cmを測る。樹種はヒノキ。上段枠の外側には5箇所に縦板が打ち込まれていた(42~46)。縦板の位置は特に一定の規則性はない。縦板として使われていたものはほとんどが曲物の底板状の木製品で、個体数になると5枚分ある。いずれも8~20cm前後幅の板を何枚か組み合わせて一枚の曲物底板としているもので樺皮または木釘で固定されていたものと考えられる。ほとんどがクレゾンの底板であったと考えられる。42は円形だったと仮定して直径を復元すると約97cmの大型の底板だった可能性がある。下半部は遺構面から露出していたため著しく風化している。上半部は両面とも加工痕が見られ、一ヶ所綴じ皮部分があり幅1.2cmの樺皮が残っている。45は復元直径は約55.2cmで、合計5枚の板からなる底板だったと考えられる。左から、AとBはそれぞれ約15cm前後の板で、平面に1ヶ所、側面に4ヶ所の木釘で固定されている。木釘の材質は竹筈類。Cも接合しないが同一個体と考えられるもので幅8.7cm、平面上に1ヶ所木釘の跡がある。底板の側面にも側板を固定した木釘の跡が14ヶ所ほどあり約2~5cm間隔で打ち込まれている。木釘の大きさは約0.3cmほどで方形や梢円形がある。43は復元直径が約37.6cmの底板で、幅22.6cmの板で合計3枚の板からなる底板だったと考えられる。表面に直線状の傷が見られるが木釘や綴じ皮の痕跡はない。44は復元直径が約34.6cm。側縁辺には木釘が3ヶ所あり3cm前後の間隔で打ち込まれている。46は復元直径が約39.4cm、幅8.0cmの板で組み合わせ式の底板の一部と考えられる。木釘は左側面の裏側に1ヶ所、右側面に径0.3cmの木釘孔が2ヶ所、側縁辺には径0.3cm、長さ1.6cmの木釘孔が1ヶ所残っている。

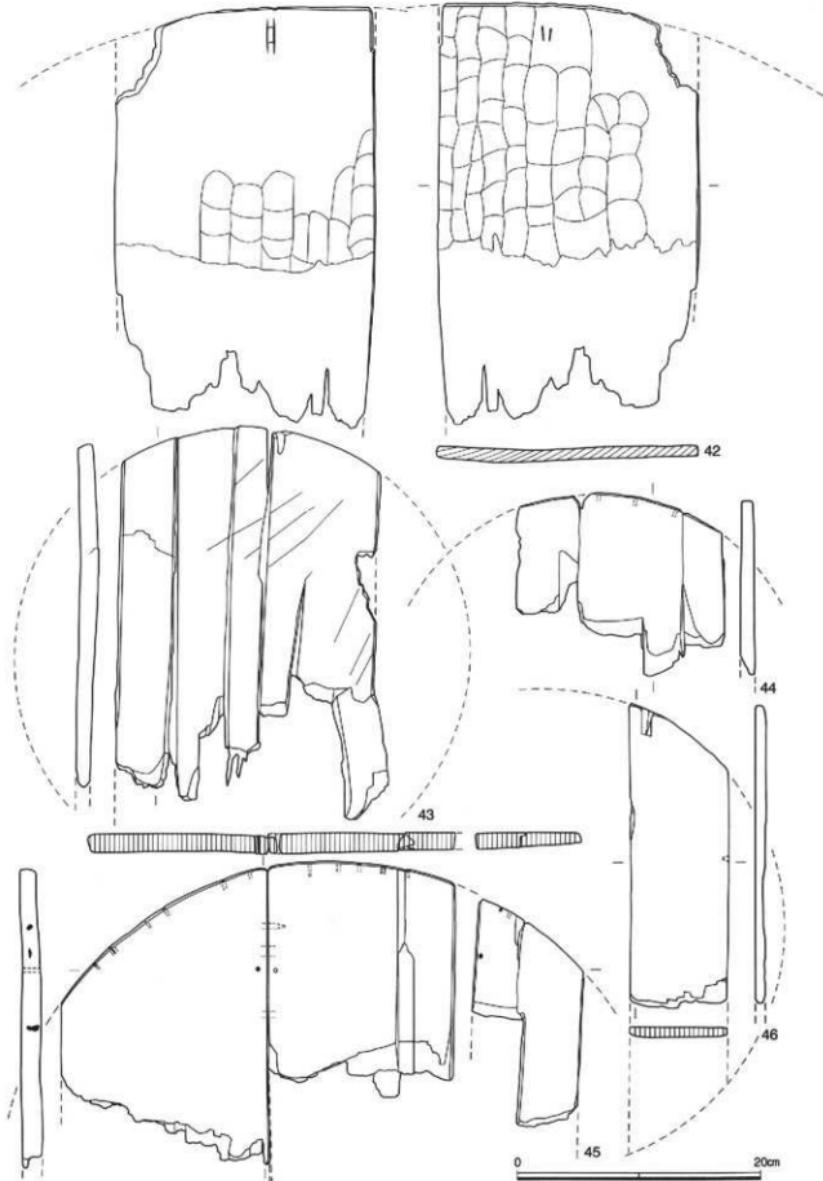
3SE23は3つの井戸の内で最も新しい(34)。曲物は概ね2段に組まれているが、現存する状態で見るに数個体の曲物の側板を幾重にも重ねて一個体の井戸枠としている。最大直径が55.2cm、短径53.1cm、残存している高さは41.5cmを測る。上段の枠がいちばん大きく、下段に下がるほど径が小さくなる。曲物の内面と外面には縁に対して直交する縦方向に平行してケビキを入れているが、ケビキは特に内面の厚みのある側板に顕著に見られる。側板の厚みは0.2cm~0.7cm、重なり合う側板は樺皮で綴じられている。



第8図 曲物井戸（3SE23）出土木製品



第9図 曲物井戸（3SE23・3SE21）出土木製品



第10図 曲物井戸（3SE22）出土木製品

る。桿皮の縫じ方は模式図参照。上段枠の外側には残存するもので4個所以上に縫板が打ち込まれていた。縫板の位置はほぼ東西南北である。底面付近の曲物の側板が設置時にすでに破損していたため、曲物の底板などの板状木製品を斜めに差し込み隙間を自然石で補強していたと考えられる。縫板として使われていたものは様々で、田下駄の足板や有孔板、縫じ皮のある板状の木製品などがある。しかしウレタン工法で取り上げた井戸枠の解体時には合計15個体の縫板が見つかった(35~40他)。35と36は同じような形態のヒノキ材の板状木製品で、いずれも両面に無数の刃物痕がある。35は左側に別部材が当たっていたような圧痕があり、そこに2つ並んだ方形の貫通孔(約0.1~0.2cm幅)が上下2ヶ所に穿たれている。圧痕は幅1.5~2.8cm、段差は0.1cmにも満たない。36は同じような圧痕が右側の裏面にあるが、貫通孔はなく板面上に約0.5~0.7cm幅の縫じ皮が3ヶ所ある。37は直径1.0cmの円形孔が1ヶ所あるヒノキ材の板状木製品。38は輪かんじき型田下駄の足板で上部が僅かに欠損しているがほぼ完形に近い。形態はほぼ長方形で、上部に3つ、足板中央に緒孔3つ、下部には2つの円形の穿孔がある。表面の緒孔の周囲には足指の跡が鮮明に残っている。緒孔と足指の形状から右足用と思われる。裏面中央には緒孔を挟んでやや右上がりに二条平行している横木の圧痕がある。また下部の2孔には足板と輪とを緊縛した時の圧痕がある。表・裏の表面には無数の刃物痕がある。39は上部側面がやや丸く削られているヒノキ材の板状木製品で真ん中付近に長軸に直交する方向に溝が切り込まれている。溝の縦断面は台形を呈する。欠損部分が多く用途は不明。40は木釘孔が8カ所あるヒノキの薄板状木製品。このうち4ヶ所に木釘が残っている。木釘はいずれも直径約0.3cmの円形。木釘孔の配列に規則性はない。そのほか縫板として使われていた木製品が9点あるがいずれも用途不明でヒノキ材の薄板状木製品である。

2 包含層(6層)出土木製品

6層(註1)は古墳時代後期から平安時代初頭の包含層にあたる。6層からは7点の木製品が出土している。26はクレゾコタイプの曲物底板。風化が著しく変形している。33はクロマツの芯持材だが用途は不明。その他スギ・コウヤマキの板状木製品がある。

第3表 平安時代造構及び古墳時代後期~平安時代初頭包含層出土木製品

遺構・層位	回番	遺物名	樹種	木取り	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	備考
3SE23	34	井戸(円形底部)	ヒノキ	板目	55.20		41.50	W3.9
3SE23	35	用道不明木製品	ヒノキ	板目	28.80	17.70	1.00	W3.9 W.2 0.1×0.2cmの孔4ヶ所
3SE23	36	用道不明木製品	ヒノキ	板目	27.80	15.70	1.10	W3.9 S-1 縫じ皮3ヶ所
3SE23	37	用道不明木製品	ヒノキ	板目	28.90	9.20	0.60	W3.9 E-2 孔径0.5cm
3SE23	38	輪かんじき型田下駄	ヒノキ	板目	31.40	8.30	1.10	W3.9 W.5-2 孔径0.7~1.0cm
3SE23	39	用道不明木製品	ヒノキ	板目	23.20	8.40	0.80	W3.9 W.1 滑り止め
3SE23	40	用道不明木製品	ヒノキ	板目	18.20	8.10	0.30	W3.9 S-E-1 木釘孔径0.3cm
3SE23	41	用道不明木製品	ヒノキ	板目	19.50	4.30	0.45	W3.9 N-W.1
3SE23		用道不明木製品	ヒノキ	板目	22.00	3.60	0.30	W3.9 W.5-3
3SE23		用道不明木製品	ヒノキ	板目	24.70	9.40	0.15	W3.9 W.5-1
3SE23		用道不明木製品	ヒノキ	板目	16.00	2.30	0.40	W3.9 E-1
3SE23		用道不明木製品	ヒノキ	板目	51.30	6.50	0.45	W3.9 N-3
3SE23		用道不明木製品	ヒノキ	板目	28.00	5.50	0.40	W3.9 N-2
3SE23		用道不明木製品	ヒノキ	板目	28.50	6.00	0.30	W3.9 N-1
3SE23		用道不明木製品	ヒノキ	板目				W3.9 円形曲物底板?
3SE23		用道不明木製品	ヒノキ	板目				W3.9
3SE21		井戸(円形底部)	ヒノキ	板目				W3.10
3SE21	41	用道不明木製品	スギ	板目	70.40	17.20	4.20	W3.12
3SE22		井戸(円形底部)	ヒノキ	板目				W3.11
3SE22	42	円形物(底板)	ヒノキ	油け-板目	34.50	21.50	1.40	W3.11.9 復元直徑37.4cm
3SE22	43	円形物(底板)	スギ	板目	32.40	22.60	1.80	W3.11.7 復元直徑37.6cm
3SE22	44	円形物(底板)	ヒノキ	板目	14.30		1.20	W3.11.6 復元直徑34.6cm
3SE22	45	円形物(底板)	ヒノキ	板目	24.60		2.00	W3.11.8 木釘(竹茎綱) 復元直徑55.2cm
3SE22	46	円形物(底板)	ヒノキ	板目	25.00	8.00	0.90	W3.11.5 復元直徑39.4cm
6層	26	円形物(底板)	ヒノキ	板目	17.20	6.30	0.70	W2.21.7 復元直徑18.9cm
6層	33	用道不明木製品	クロマツ	芯持材	13.00	4.80	4.50	W2.19.5
6層		用道不明木製品	スギ	板目	28.90	14.20	1.55	W2.18.8 回版4
6層		用道不明木製品	コウヤマキ	板目	16.50	1.80	1.60	W7.69 回版4
6層		用道不明木製品	スギ	板目	18.50	3.60	2.00	W2.20.6 回版4
6層		用道不明木製品	スギ	板目	37.00	6.50	1.00	W2.20.6 回版4
6層		樹皮			10.00	7.00		W2.4

第3節 奈良時代

1 遺構出土木製品

A 素掘井戸 (9SF25) 出土木製品

奈良時代の素掘井戸 (9SF25) から背負子が1点出土している(第11図47)。同遺構内からはこの他に土鏡や自然木などがある(図版7)。背負子は二葉松類のV字状に枝分かれした部分を使っており、股部の角度は55°ある。表面は磨かれたように滑らかで非常に残存状態が良い。最大長は22.05cm、最大幅25.5cm、軸部の最大直径は5.4cmをはかる。幹の部分は長さ15cmほどで先端に向かって表面が削られて細くなっている、下方は枝股のすぐ下で折損している。枝分かれした部分の長さは約23cmで最大直径は3.05cm、先端は丸く削り込んである。その先端から11cmほど下には上面側にだけ先端方向に向かって削り込まれた痕跡がある(図版7拡大写真)。また股部近くの軸部に紐ずれか意図的に入れられたものか、斜めに窪んだ部分がある。静岡県内には同一形態をもつ資料は浜松市伊場遺跡(6世紀後～9世紀初頭)、同梶子遺跡(6世紀中葉～9世紀)、磐田市御殿・二之宮遺跡(古墳後期～平安前期)、沼津市雌鹿塚遺跡(弥生後期)がある。

B 曲物井戸 (2SE08)

2SE08は井戸底部に曲物を井戸枠として据えている。遺構平面図と断面図は遺構編に紹介されている。直径約42cm、器高約22cmほどの曲物を据え、暗灰色粘土砂で裏込めされている。曲物はヒノキの板目材を倒いた薄板を使い、内面には斜格子状にケビキが入っている。

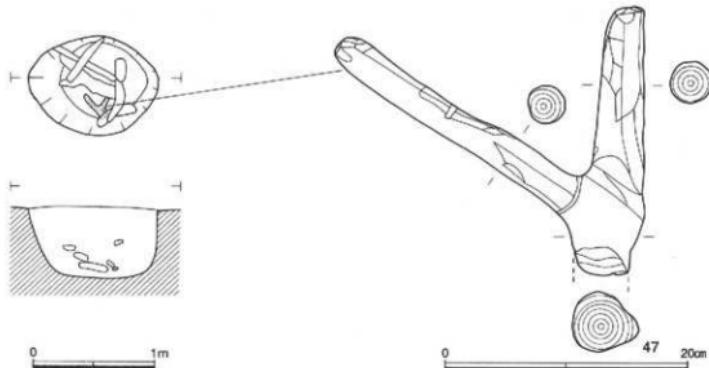
参考文献

浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編1』1978年3月31日

磐田市教育委員会『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告I』1981年3月31日

沼津市教育委員会『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書II』1990年3月25日

浜松市文化協会『梶子遺跡 IX』1994年3月



第11図 素掘井戸 (9SF25) 出土木製品

第4節 古墳時代

1 遺構出土木製品

A 剃り貫き井戸 (3SE04)

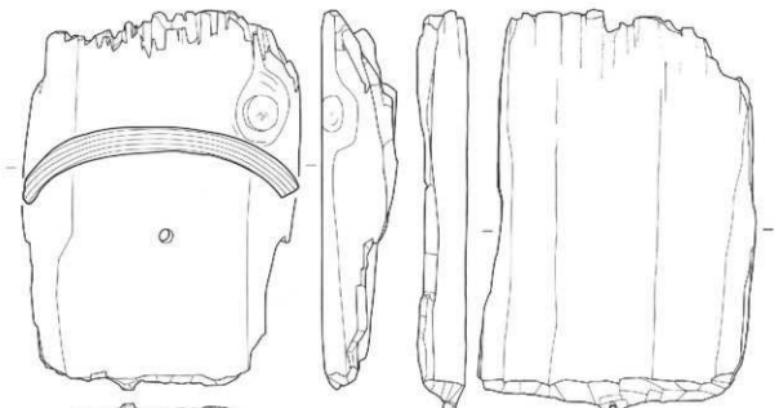
3区で検出された古墳時代後期の井戸(3SE04)は、丸太を剃り貫いたものが井戸枠として据えられていた。井戸枠は直径約90~120cm、高さ約80cmの掘り方のなかに据えられ、周りを黒色砂で埋められていた(図版7)。井戸枠は高さ約60~70cmで、最大直径約50~60cm、モミの大木から切り出された丸太を縦に置き、周りを厚さ約4cmほど残して内部を剃り貫かれている。検出された当初からばらばらに崩れており、接合した状態での図化作業が不可能だったため破片のまま個別に実測した(48~54)。それぞれ上端部は遺構面から露出していたため劣化が著しい。下端部は残存状態が良く刃物痕が顕著に残っている。内面と外面の両面から下端に向かって削られているため断面はV字状になっている。また剃り貫いたときの加工痕も内面側に顕著に残っている。内面の痕跡から刃幅4~6cmほどの手斧で加工されたものと考えられる。井戸枠は当初一本の丸太を剃り貫いたものと思われたが、各々の破片を観察してみると側面に加工された痕跡があることから、丸太のまま剃り貫かれたものではなく、一旦、丸太を分割して内側を削り、別々に井戸掘り方へ差し込まれた可能性がある。

据えられた井戸枠には東側に一個所、縦方向に隙間があいており、そこに別材の板が2枚、隙間を埋めるように枠の内側に差し込まれていた。56はヒノキの板目材で長さ79.4cm、幅17.1cm、厚さ2.1cm。上部の1/3ほどは劣化しているが両面にはわずかに加工痕が見られる。下部は両面から薄く削られており、切り欠きがある。下端部と切り欠き部分には黒い付着物がある。板の中央右寄りには縦2.4cm、横1.6cmの方形の枘孔がある。表面には孔の下6cm位から先端にかけて板の半分ほどの幅で圧痕が見られる。57はヒノキの板目材で56とほぼ同じ位置に枘孔がある板で、縦74.5cm、横17.0cm、厚さ1.2cm、枘孔は縦2.2cm、横2.1cmを測る。

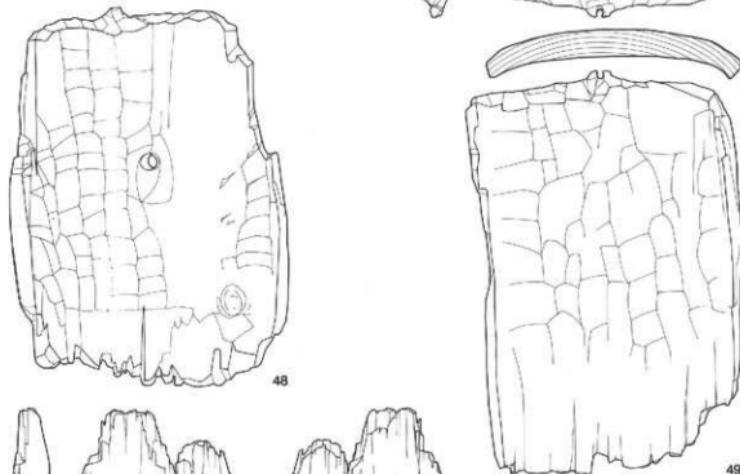
同遺構からはこの他にも縦28.4cm、幅9.5cm、厚さ1.5cmのクヌギ節材の加工板(55)が出土しているが用途は不明である。また井戸の掘り方内から農具と思われるクヌギ節の木製品(293)が出土している。形態から弥生時代の膝柄歛の身部分と考えられる。井戸を構築した際、下層から掘り上げられた可能性がある。

第4表 古墳時代遺構出土木製品

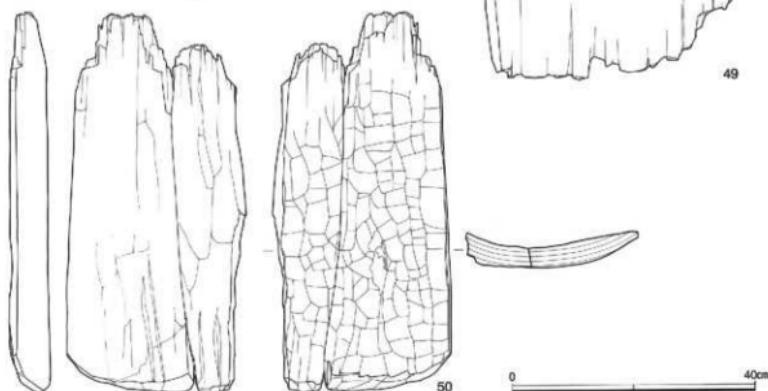
遺構・層位	番号	遺物名	樹種	木取り	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
				口徑	底径	高さ		
3SE04	48	井戸(くりぬき井戸)	モミ	板目	62.20	46.00	12.40	W5-4 井戸枠一枚板
3SE04	49	井戸(くりぬき井戸)	モミ	板目	66.30	45.70	8.60	W5-5 井戸枠一枚板
3SE04	50	井戸(くりぬき井戸)	モミ	板目	62.50	29.40	6.70	W5-2 井戸枠一枚板
3SE04	51	井戸(くりぬき井戸)	モミ	板目	61.30	22.10	4.70	W5-5 井戸枠一枚板
3SE04	62	井戸(くりぬき井戸)	モミ	板目	73.00	15.90	6.15	W5-3 井戸枠一枚板
3SE04	53	井戸(くりぬき井戸)	モミ	板目	73.00	25.50	3.80	W5-2 井戸枠一枚板
3SE04	63	井戸(くりぬき井戸)	モミ	板目	61.40	28.70	5.50	W3-9 井戸枠一枚板
3SE04	65	用途不明木製品	クヌギ節	板目?	28.40	9.50	1.50	W3-1
3SE04	66	用途不明木製品	ヒノキ	板目	79.50	17.10	2.10	はぞ孔2.4×1.6cm
3SE04	67	用途不明木製品	ヒノキ	板目	74.50	17.20	1.20	はぞ孔2.2×2.1cm



48

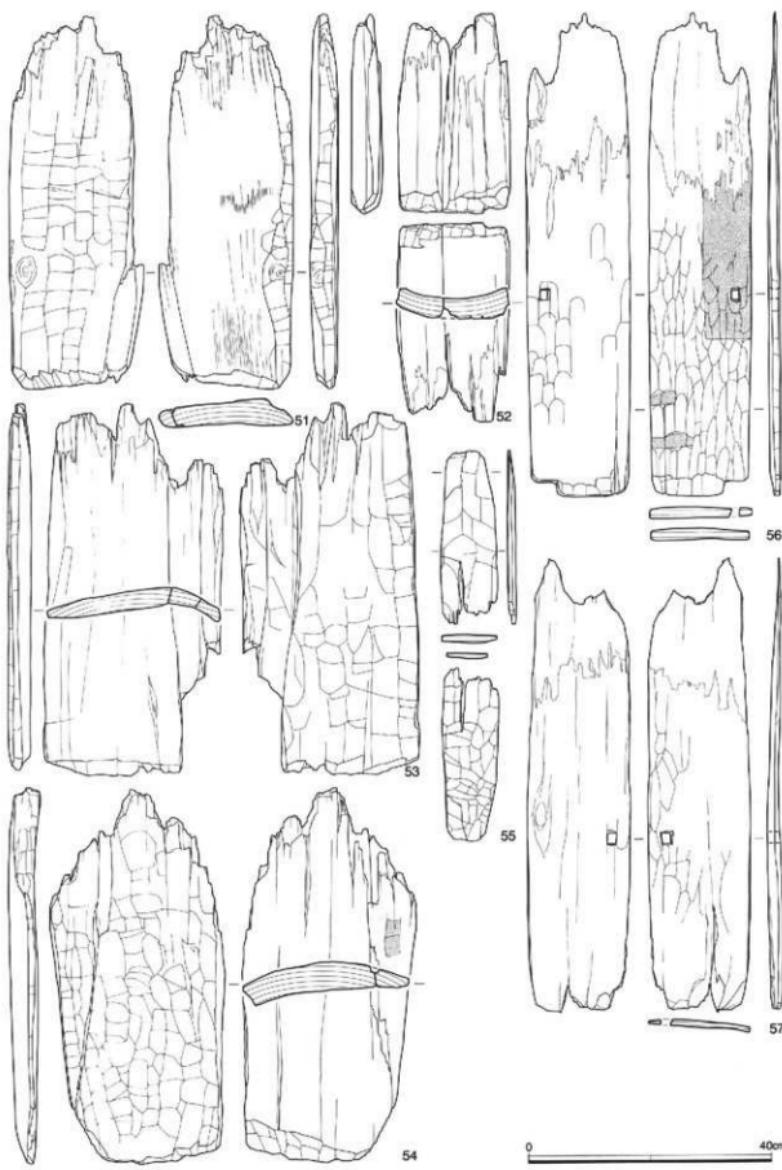


49



50 0 40cm

第12図 刺り貫き井戸 (3SE04) 出土木製品1



第13図 刺り貫き井戸 (3SE04) 出土木製品2

第5節 弥生時代

弥生時代

角江遺跡で出土した木質遺物のなかでもっとも多く出土したのは弥生時代中期～後期の木製品で、総数1926点である。このうち本書に実測図や写真を掲載した木製品は、第5表の通り865点あり（註1）、個々のデータは挿図版の順に第12～20表にまとめた。第6表は実測図や遺物写真はあるものの用途の特定が出来ず、本書に掲載しなかった木製品の一覧表である。第7表も本書に掲載できなかったもので、主に分割・製材段階の未製品を段階別に分類し区ごとに集計したものである。以上の合計が弥生時代の木製品の総点数である。

本遺跡から出土した弥生時代の木製品は大きく分けて、方形周溝墓、溝状遺構、水田畦畔などの遺構から出土したものと、自然流路（SR01）の包含層から出土したものとに分けられる。前者の遺構に伴つて出土した木製品は118点ある。総点数から比べた割合では13.66%に過ぎず、圧倒的に後者の自然流路（SR01）の包含層から出土したものが多い。また弥生時代の木製品はこれらの一覧表を見ても3区、4区、5・6区、9区、10区の出土量が非常に少なく、自然流路（SR01）のかかる1区、2・11区、7区に集中していることがわかる。そこで本節では、まず方形周溝墓や溝状遺構、水田畦畔から出土した木製品をそれぞれ一覧表にまとめて、遺構の概説や出土状況を解説した。続いて自然流路より出土している木製品が多いことから、前述の遺構から出土した木製品も含めて、挿図版は器種ごとにまとめ、これに沿って記述した。これらの挿図版に相対する表は第5節の最後に収録している（第12～20表）。また写真図版は巻末に掲載した。なお、挿図版のなかで個々に付けられた個体番号は本文中に出てくる番号や表及び写真図版と対応している。

収録した木製品に関する分類名称や部分名称は『木器集成図録（近畿原始編）』（註2）の名称にならっている。また文中に出てくる遺構名・層位名は、「角江遺跡II」の報告書ではすべて統一されている。遺構の詳細や各遺構から出土した木製品の出土状況図については『角江遺跡II（遺構編）』にある。また出土状況写真は一部本書の写真図版にも収録してある。

1 方形周溝墓

調査では弥生時代中期に属する方形周溝墓が調査区北側を中心に18基、後期に属する方形周溝墓が1基検出されている。このうち1号・11号方形周溝墓から木製品が各1点づつ出土している（第8表）。

9区で検出された11号方形周溝墓の西側周溝（9SF31）では、スリットの入った鋤の身（139）が出土している。139は自然木とともに周溝の底面に貼り付くように発見された（図版19）。

1号方形周溝墓の南側周溝（5・6SD07）でもやはり鋤の身（141）が出土している。出土した遺構からこれらの鋤を農具と考えるには疑問がある。周溝が廐棄場所となって他の木製品が多量に出土していたならば問題はないが、他に目立った遺物もなくほぼ単独で出土したような状態から見ても、周溝を掘削したときに使われた土木具の可能性も考えられるのではないだろうか。

2 溝状遺構

調査区の北端、5・6区、9区にまたがってほぼ東西方向に平行した2本の溝が検出されている（5SD33、5SD34）。この溝は弥生時代中期の遺構で7点の木製品が出土している（第9表）。北側の溝（5SD34）からは曲柄又鍬の歯が2点（133・134）と梯子（454）、用途不明木製品の棒状木製品（585）、ほかに自然木が多数出土している。133・134は溝状遺構の上層より出土しており確実に中期の

第5表 弥生時代の木製品一覧表1

	1区	2・11区	3区	4区	5・6区	7区	9区	10区	計	
農具	鋤	28	37		2	12			79	
	鋤	8	7		1	1	1		18	
	鋸歯未製品	4	24			3			31	
	曲柄	18	10			4			32	
	曲柄未製品	5	16			11			32	
	鋸	3	2						5	
	鋸	1	5						6	
	臼	5	4			3			12	
	堅杵	11	9			3			23	
	横槌	1	1			3			5	
	その他の農具	1	1	1		2			5	
	石斧の柄	7	8			4			19	
紡織具	刀杼		2						2	
	編み台	1	1						2	
	縫越具	1							1	
運搬具	船	1				1			2	
	櫛状木製品	19	5			3			27	
	アカカキ状木製品	6	2			1			9	
	背負子	1							1	
漁獵具	網枠（タモ）	4	6						10	
武具	弓	9	17			1			27	
	楯	4							4	
	矢	1				1			2	
食事具	匙		1						1	
	杓子形木製品	1							1	
装身具	木履	2							2	
容器	高杯	7	1			4			12	
	槽	8				4			12	
	盤	2				1			3	
	その他の容器	21	7			8			36	
遊戯具	琴	1	2						3	
祭祀具	武器形他	3	1			1			5	
	舟形	4	2			1			7	
雑具	腰掛	1							1	
	各種部材	1							1	
建築材	椽子	9	8		1	3	2		23	
	鼠返し	1							1	
	柱	1	2	1			1	1	6	
	台輪					2			2	
	垂木	8	2			4			14	
	各種部材	25	7			6			38	
土木材	矢板	1	5						6	
用途不明木製品	有頭椎	54	26			13			93	
	棒状木製品	34	10		1	4			49	
	製品他	58	30	1		21			110	
	加工痕資料	4	2			1			7	
	整形板	9	10						19	
	樹皮製品・樹皮	17	41						58	
	籠編物		1						1	
総計		411	315	2	1	5	126	4	1	865

農具であるとは言いがたい。梯子(454)は9区の北東端で溝を渡るために架けられたような状態で出土した(図版64)。454は上部寄りを棒状の木で支えられている。585は針葉樹材で四角形に面取りされている。南側の溝(5SD33)からは梯子が2点(453、他1点)、柱1点(481)、ほか自然木も多数出土している。453は縦半分が欠損しており、溝の西側でやはり溝に渡すような状態で出土した。他1点はネムノキ材の梯子片である。柱(481)は2mを超える大型品で、溝のほぼ底面から出土した(図版64)。

他に1SD01(9層面溝)から用途不明木製品が1点出土している。

3 畦畔

弥生時代後期の8層下部水田面から2条の畦畔が検出されている(1SK02、1SK01・7SK01)。これらの畦畔から計25点の木製品が出土している(第10表)。1SK02は調査区の西南隅で検出された畦畔で、この畦内から杭で止められた横木が多量に出土した。この横木のなかに自然木とともに11点の木製品が確認された。内訳は堅杵(277)、用途不明木製品(601・631・760、他6点)、杭が1点ある。堅杵(277)は風化が著しく進んでいる。用途不明木製品では細い棒状のものが多い。1SK01・7SK01は自然流路(SR01)の南側、1区と7区にまたがって検出された一条の畦畔である。ここでは14点の木製品が出土した。直柄又歛(85)、槽(408)、台輪(482・483)、垂木(493・496)、その他建築材(518、他1点)、用途不明木製品(633・746、他3点)、杭が1点ある。又歛(85)は後期の畦畔から出土しているが状況から中期の遺物とも考えられる。槽(408)はひどく風化しているが把手付きの槽であったと思われる。台輪(482・483)はいずれも3m近い大型品である。482は畦と平行に、483は少し離れたところで出土しているが畦畔の横木として使われていたものであろう。近くから垂木(493・496)も見つかっている。用途不明木製品も加工された板材が多いことから、廃材となった建築材を畦畔の横木として利用しているものと思われる。

4 弥生水田

8層上部水田と8層下部水田は弥生時代後期に形成された水田と考えられる。この8層上・下部水田から出土した木製品は多く、合計84点ある(第11表)。主だった木製品は、農具では直柄平歛(79)、曲柄平歛(114・116)、農具曲柄(199・211・213・215)が出土している。その他、加工斧の柄(311)や織機(316)、船(318)、丸木弓(360)、楯(387)、木履(394・395)、槽(417)がある。また梯子や垂木などの建築材や用途不明木製品も多数出土した。一部畦畔の横木として使われていた木製品もこの中に含まれているものと思われる。しかし調査では自然流路(SR01)第III層が水田北側の堤防の底面にあり8層面へ連続しているところが認められ、耕作土である8層には第III層と同時期の遺物が含まれていることから(註3)、出土した木製品も中期の製品が含まれている可能性が高い。

5 自然流路(SR01)

調査区の南側、砂堤列の南縁に沿って東西方向に流れる自然流路である。SR01は弥生時代中期以前には幅約30m、深さは約1.4mあったものの、徐々に河幅を狭めていき、弥生時代後期には幅約5m、深さ約0.5mほどになる。この流路からは古墳時代以降の遺物はほとんど出土していないことから、SR01は弥生時代後期で埋没してしまったと考えられる。木製品はSR01に堆積していた第I層(弥生時代後期前葉)及び第III層(中期後半)に多く、砂堤列側や第II層(中期後半～後期前葉)が形成する中洲の周囲に比較的集中して出土している。出土した木製品は歛・鍤を中心とした農耕具や工具、紡織具、運搬具、漁獵具、武具、食事具、装身具、容器、遊戯具、祭祀具、雜具、建築材、土木材などその量や器種は県内ではこれまでに類を見ないほど豊富である。特に大量に出土した未製品資料は切り出された木から製

第6表 弥生時代の木製品一覧表2

	1区	2・11区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	9区	10区	不 明	計
用途不明木製品		1					2					1
道具の可能性あり	11	9										22
柄の可能性あり	4	1										5
建築材の可能性あり	1											1
構造材の可能性あり	5											5
縛皮付き	3											3
棒状木製品	13	1										14
有孔板材	4	4					1					9
角材	3	1					3					7
整形板	31	22					17				1	71
加工品 広葉樹	22	16					7					45
加工品 針葉樹	14	7					2					23
加工痕資料	5	1					9					15
その他	97	44					7					148
総 計	213	107	0	0	0	0	48	0	0	1		369

第7表 弥生時代の木製品一覧表3

	1区	2・11区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	9区	10区	不 明	計
用途不明木製品												36
角材	24	12										
棒状板	22											22
棒状角	5	2										7
棒状	2	8										10
斜め切断	5											5
丸太	30	23					4					57
半裁材	12	7										19
ミカン切り	43	43					1					87
板材	17	19					1					37
棒状芯持ち	64	71					5			1	141	
製材板	59	99					15					173
薄板		4										4
整形板	4	5					11			1	21	
加工痕資料	12	4					1					17
その他	25	20					12					57
総 計	324	317	0	0	0	0	50	0	0	2		693

第8表 方形周溝墓周溝内出土木製品

遺物	大項目	中項目	小項目	年代	通傳・位置	木取り	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備	号	登録番号
133	鳥具	鷹	鷹	弥生	SF31-11号室後部	板目	アカガシ板実	30.30	10.30	1.00	ア 3866 平盤 柄部 平明X1.9 孔10.3X4.0		W9-6
141	鳥具	鷹	鷹	弥生	1号方引周溝裏側後部	板目	アカガシ板実	33.80	21.00	2.70	ア 4103 平盤 柄部2.9X2.6 條孔直徑1.5"		W6-72-73

第9表 溝(S D) 出土木製品

遺物	大項目	中項目	小項目	形狀	通傳・位置	木取り	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備	号	登録番号	
133	鳥具	鷹	又鷹	板目	SDD1-SDD6-3	板目	アカガシ板実	82.80	10.00	2.00	ア 4116		W9-74	
134	鳥具	鷹	又鷹	板目	SDD1-SDD6-2	-4等	板目	アカガシ板実	39.80	4.90	2.40	ア 4025		W9-70
453	建築材	板子	板子	板目	SDD1	板目	クリ	187.50	13.00	7.00	ア 3558	後造4.2	後造4.2 鶴と表との間隔33.6~35.5	
454	建築材	板子	板子	板目	SDD4-T等	板目	エビラハ風	181.40	14.00	4.70	ア 3556	後造2.4	後造2.4 鶴と表との間隔33.4~30.3	
481	建築材	柱	柱	板目	SDD3	志村材	イママキ	256.60	13.40	12.00	ア 4570	裏手出し板柱68.8X9.2X6.6	W9-3	
585	用途不明木製品	棒状木製品	棒子	板目	SDD4-SDD6-2		ホムノキ	21.80	1.00	1.20			W9-71	
					SDD3-SDD7-下層			31.00	13.00	3.50	ア 4092			

材され、板材に整形されたものからある程度の段階までつくられた鋸・鏝・曲柄他の未製品まである。集落内で農耕具等が製作されていたことを裏付ける貴重な資料であろう。出土量が多いため詳細は器種ごとの解説で述べる。

6 その他の遺構

木製品が出土している遺構はこのほかに柱穴、湧水点、土坑などがある。

柱根が出土した柱穴は3ヶ所あった。2区のII7グリットで検出された柱穴からはクリ材の柱根、3SP711(後期)ではユズリハ属の柱根、10SP49(後期)ではクリ材の柱根が出土した。いずれも芯持材を使っているが、風化が著しく進み原形を留めないため樹種同定のみを行い本書には掲載しなかった。

湧水点は2SD25(SD42)と7SX02から木製品が出土している。2SD25(SD25)では上層(後期)で用途不明木製品(562・676)と籠編物(764)が、第III層(中期)で削物片が2点出土した。7SX02(中期)では削物片と用途不明の棒状木製品が各1点出土した。

1SF01は土坑と思われたが自然流路(SR01)の第III層が溜まっていたところであり弥生時代中期代となつた。槽の破片1点、用途不明木製品(559・681・762、他1点)が出土している。2SF37は後期の土坑で曲柄未製品(242)が出土している。

以下、器種ごとに解説する。

註1 運搬具の櫛のなかに縄紋時代の櫛が1点含まれている。

註2 上原真人『木器集成図録(近畿原始編)』奈良国立文化財研究所 1993.3.30

註3 塚本裕巳・中嶋郁夫『角江遺跡 平成5年度発掘調査概報(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994.3.31

第10表 畦畔出土木製品

番号	大分類	中分類	小分類	年代	遺構	性質	直徑(φ)	幅(Φ)	厚さ(△)	名	備考	器種番号	
45	鳥居	鳥居	又戸	古戸	2SD25(後期内)木製品	柱根	アカガシ	12.0	5.0	2.0	T-4023 鳥居・斜面斜柱	鳥居・斜面斜柱の脇から出土した可能性あり(鳥居)	W1-010
745	用途不明木製品	用途不明	木製品	古戸	3SP711(後期)	柱根	ヒノキ	10.0	3.0	2.0	T-4161 用途不明	用途不明	W1-027
746	用途不明木製品	用途不明	木製品	古戸	3SP711(後期)	柱根	ヒノキ	10.0	3.0	2.0	T-4171 用途不明	用途不明	W1-028
747	土井村	柱	柱	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	10.0	3.0	2.0	T-4571		W1-025
748	用途不明木製品	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	10.0	3.0	2.0	T-4572 用途不明	用途不明	W1-027
749	鳥居	鳥居	柱	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4181 鳥居	鳥居	W1-029
750	春母	春母	春母	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4182 春母	春母	W1-030
751	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4183 用途不明	用途不明	W1-031
752	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4184 用途不明	用途不明	W1-032
753	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4185 用途不明	用途不明	W1-033
754	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4186 用途不明	用途不明	W1-034
755	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4187 用途不明	用途不明	W1-035
756	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4188 用途不明	用途不明	W1-036
757	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4189 用途不明	用途不明	W1-037
758	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4190 用途不明	用途不明	W1-038
759	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4191 用途不明	用途不明	W1-039
760	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4192 用途不明	用途不明	W1-040
761	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4193 用途不明	用途不明	W1-041
762	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4194 用途不明	用途不明	W1-042
763	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4195 用途不明	用途不明	W1-043
764	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4196 用途不明	用途不明	W1-044
765	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4197 用途不明	用途不明	W1-045
766	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4198 用途不明	用途不明	W1-046
767	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4199 用途不明	用途不明	W1-047
768	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4200 用途不明	用途不明	W1-048
769	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4201 用途不明	用途不明	W1-049
770	鳥居	鳥居	柱	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4202 用途不明	用途不明	W1-050
771	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4203 用途不明	用途不明	W1-051
772	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4204 用途不明	用途不明	W1-052
773	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4205 用途不明	用途不明	W1-053
774	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4206 用途不明	用途不明	W1-054
775	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4207 用途不明	用途不明	W1-055
776	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4208 用途不明	用途不明	W1-056
777	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4209 用途不明	用途不明	W1-057
778	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	アリ	15.0	7.0	3.0	T-4210 用途不明	用途不明	W1-058
779	土井村	柱	柱	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4571	柱根	W1-059
780	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4572	柱根	W1-060
781	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4573	柱根	W1-061
782	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4574	柱根	W1-062
783	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4575	柱根	W1-063
784	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4576	柱根	W1-064
785	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4577	柱根	W1-065
786	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4578	柱根	W1-066
787	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4579	柱根	W1-067
788	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4580	柱根	W1-068
789	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4581	柱根	W1-069
790	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4582	柱根	W1-070
791	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4583	柱根	W1-071
792	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4584	柱根	W1-072
793	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4585	柱根	W1-073
794	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4586	柱根	W1-074
795	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4587	柱根	W1-075
796	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4588	柱根	W1-076
797	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4589	柱根	W1-077
798	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4590	柱根	W1-078
799	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4591	柱根	W1-079
800	用途不明	用途不明	木製品	古戸	3SD25(後期)	柱根	ヒノキ	14.0	3.0	1.0	T-4592	柱根	W1-080

第11表 弥生水田出土木製品

A 農具

a 鋏

鋏の製品は79点確認され、本遺跡で出土した木製品の種類別では最も点数が多い。大半が自然流路(SR01)の包含層から出土し、弥生時代中期初頭から後期の段階に属するものである。ここではほぼ同一の遺構から出土していることもあり、柄の着柄法と鋏身の形態分類を行い、その分類ごとに図版に掲載した。

鋏はまず装着される柄の形態、つまり、直柄(註4)に装着されるものか、曲柄(註5)に装着されるものかで分類した。分類する時のポイントは直柄鋏には柄孔があること、曲柄鋏は軸部を持つことを根拠とした。その他、装着部分が欠損している場合は、これまでの前例にならって形態の特徴によってどちらかに分けた。さらにこれを「平鋏」と「又鋏」とに分け、「平鋏」は身の部分が平ら(偏平)であること、「又鋏」は身が二又以上の又部を持つことを分類の基準とした。この分類に従って鋏は「直柄平鋏」、「直柄又鋏」、「曲柄平鋏」、「曲柄又鋏」の4つに分けた。なお「直柄平鋏」のなかには小型の鋏(註6)も含まれている。以下、各分類名称ごとに順を追って個別に解説する。

直柄平鋏

58~82(第14~17図)までの25点が直柄平鋏に含まれる。このうち59・60・75・76・78の5点は柄が装着された状態で出土した。72~76は通称小型鋏と呼ばれる。8層上部水田から出土した79を除き、すべて自然流路(SR01)から出土した。58~76は自然流路(SR01)の第II~V層から出土したもので弥生時代中期初頭~中期後半に属する。77は層位不明。78~82は自然流路(SR01)第I層より出土したもので弥生時代後期に属する。

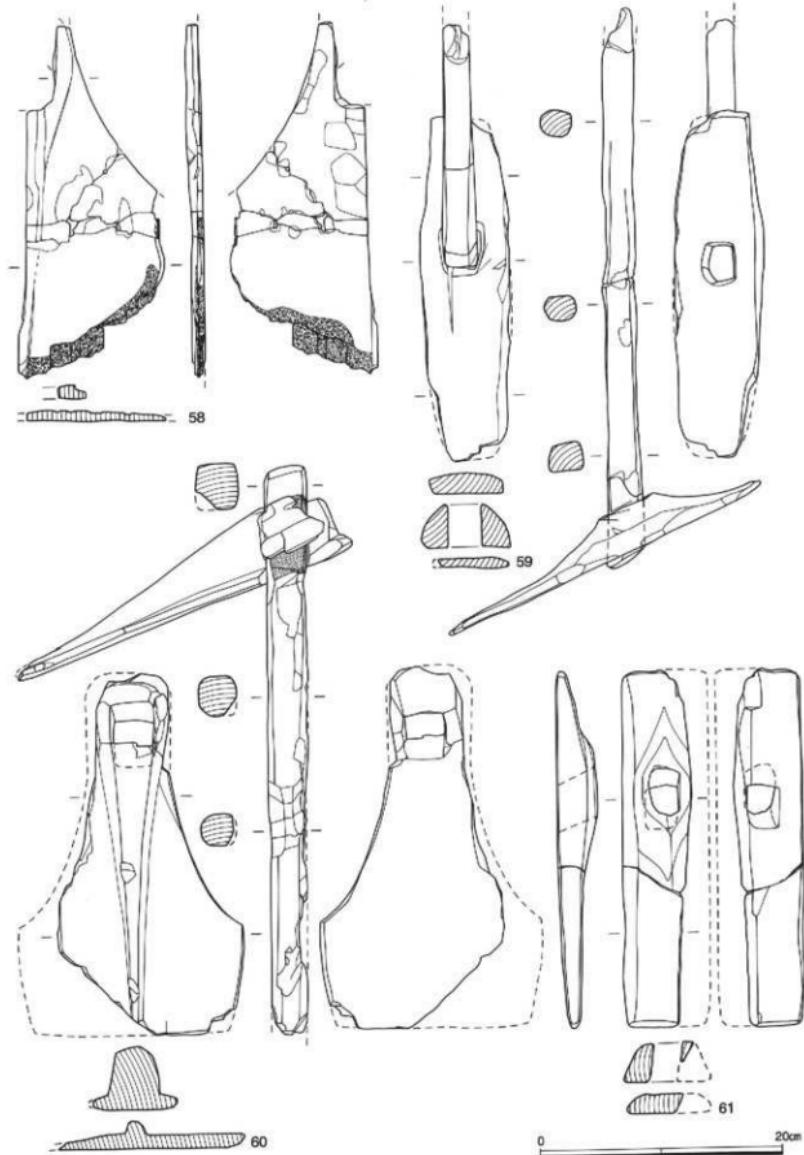
樹種はただ1点の柾目材のコナラ節(77)の他はすべて柾目材のアカガシ亞属である。直柄平鋏の身はアカガシ亞属に限定していると言ってもよいほどこれに集中している。直柄の材はサカキが3点、ツブライジ1点、ヌルデ1点である。78以外は芯持材ではない。後述する曲柄でもサカキが多用されているがカシ類で作られた柄がまったく存在しないのが特徴とも言える。

鋏の平面形態は大雑把に身幅の広いもの(58・60、78・79)と狭いもの(59・61・65・70・77)とに分けられる。ただし本項では破損した資料が多く厳密には分けきれないため細分はしなかった。また柄孔の周囲に頑丈な舟型隆起をつくり出した製品が数多く見られる(58・60・62~69、78~82)。舟型隆起は後面の平坦面から平均4cmほど隆起している。

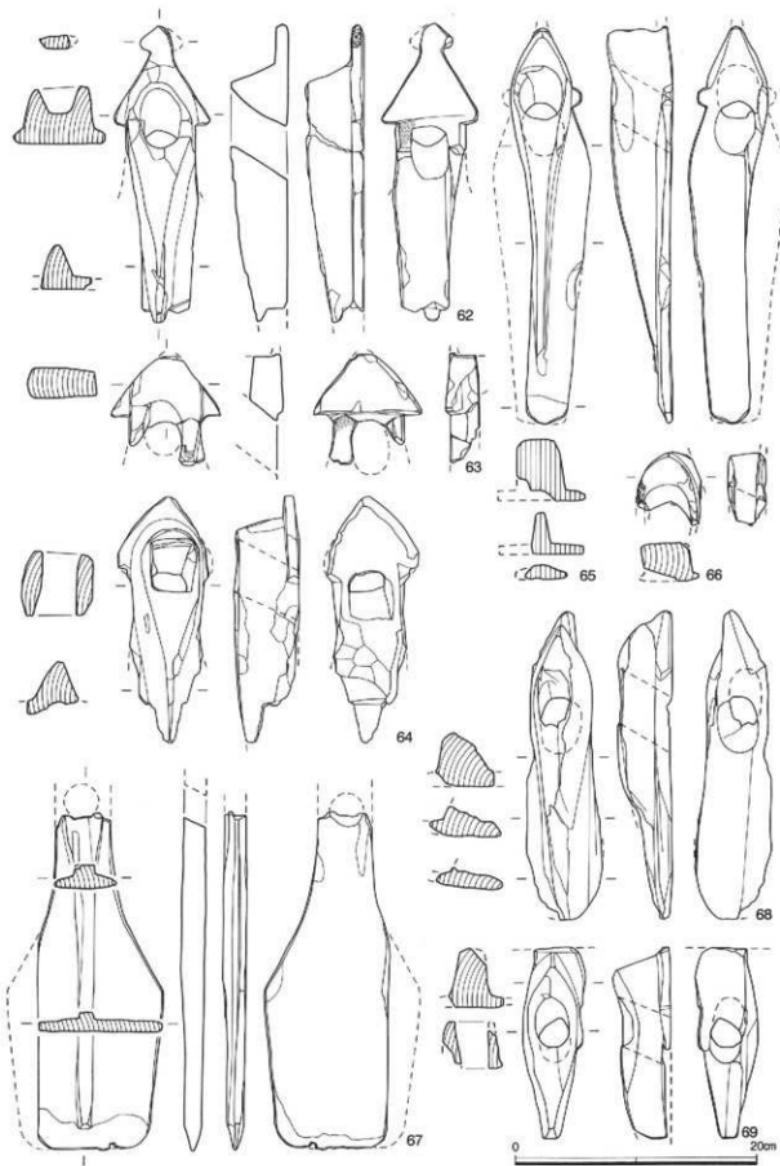
柄孔の形態は中期の平鋏のうち大型の鋏で59~61・64・71・77、小型の鋏では75・76は明らかに方形を呈する。方形の柄孔は約3割の平鋏に見られる。特に限られた時期にあるものではなく、特定の器種に限定されているというわけでもない。ただ直柄が装着している例を見ても柄の基部の断面は円形~梢円形なのに対し、柄の頭部の断面は明らかに方形を呈する。しかしこれまでのところ後期の平鋏では方形柄孔はない。

着柄角度は貫通する柄孔の角度で計測している。銳角に装着される場合の角度は51°~70°、平均着柄角度は約63°、鈍角に装着された59は114°である。

59は前述したように鈍角に着柄された平鋏である。柄の頭部は基部よりもやや太めにつくられている。柄の長さは46.8cm。基部先端は欠損している。通常の鋏の用途よりも鋸に近い用途なども考えられる。60は典型的な舟型隆起を持つ平鋏が装着された状態で出土したものである(出土状況写真は図版9)。残存している柄の長さは約47cm。柄の頭部はやや太めにつくられ、先端から約28cm下に約6cm幅ほど細目に削り込んだ部分がある。使い込まれていたためか磨滅している。62~69も舟型隆起を持つ平鋏であるが、62~64は身の上端部が三角形につくり出されている。特に62はギボシ形の突起がある。同じようなギボシ形の突起は63・65にもあったものと思われる。また62は前面の柄孔の上部に圧痕がある。63は



第14図 農具 1 (直柄平鋤 1)



第15図 農具2 (直柄平鋸2)



第16図 農具3（直柄平鋤3）

前面側の柄孔の上には0.4cmほど段差がつくり出されている。そのすぐ下、ちょうど柄孔の両脇にはなにかを押し当てていたような圧痕が見られる。65は幅の狭い平歛で頭部には柄孔の両脇と上端部に突起があったものと思われる。これらは装飾的な意味でつくり出されたものか、または何か別のものを装着するための装置であった可能性もある。70・71・77は身幅が10cm前後で舟型隆起を持たない平歛。しかしこれも柄孔の周辺はやや隆起している。72~76は東海地域に局地的に分布する小型歛である。身の長さは12~16cm、幅も7cm前後。平面形は楕円形~隅丸方形、柄孔周囲は厚みがあり隆起しているいずれもよく似た形態である。75・76には柄が装着されていた。76の柄の頭部は太めの方形に加工され、基部は頭部より細目の楕円形、装着角度は68°をはかる。柄が装着された例から小型歛が歛として単独に使われていたことが分かる。

78以降は後期の平歛でいずれも舟型隆起を持つ。柄孔はすべて円形で、78には柄も装着状態で残っていた。柄はヌルデの芯持ち材で著しく風化している。身の上端部は三角形状の突起をつくり出している。79の頭部上端も欠損しているがギボシ形の突起があったものと思われる。80・81も頭部の上端部分。78・79は復元すると20cm前後幅の広い歛で、刃先はかなり使い込まれたものらしく磨滅している。

直柄又歛

83~94(第18図)までの12点が直柄又歛に含まれる。水田の大畦群(SK01)基本層8層から出土した85を除き、すべて自然流路(SR01)から出土した。83は層位不明。84・86は自然流路(SR01)第I層より出土したもので弥生時代後期に属する。85は弥生時代中期としたが畦群から出土していることから後期の可能性もある。87~94は自然流路(SR01)の第II~IV層から出土したもので弥生時代中期中葉~中期後半に属する。樹種はアカガシ亜属が9点、コナラ節2点、クヌギ節1点である。やはりアカガシ亜属が主体的に選択されている。

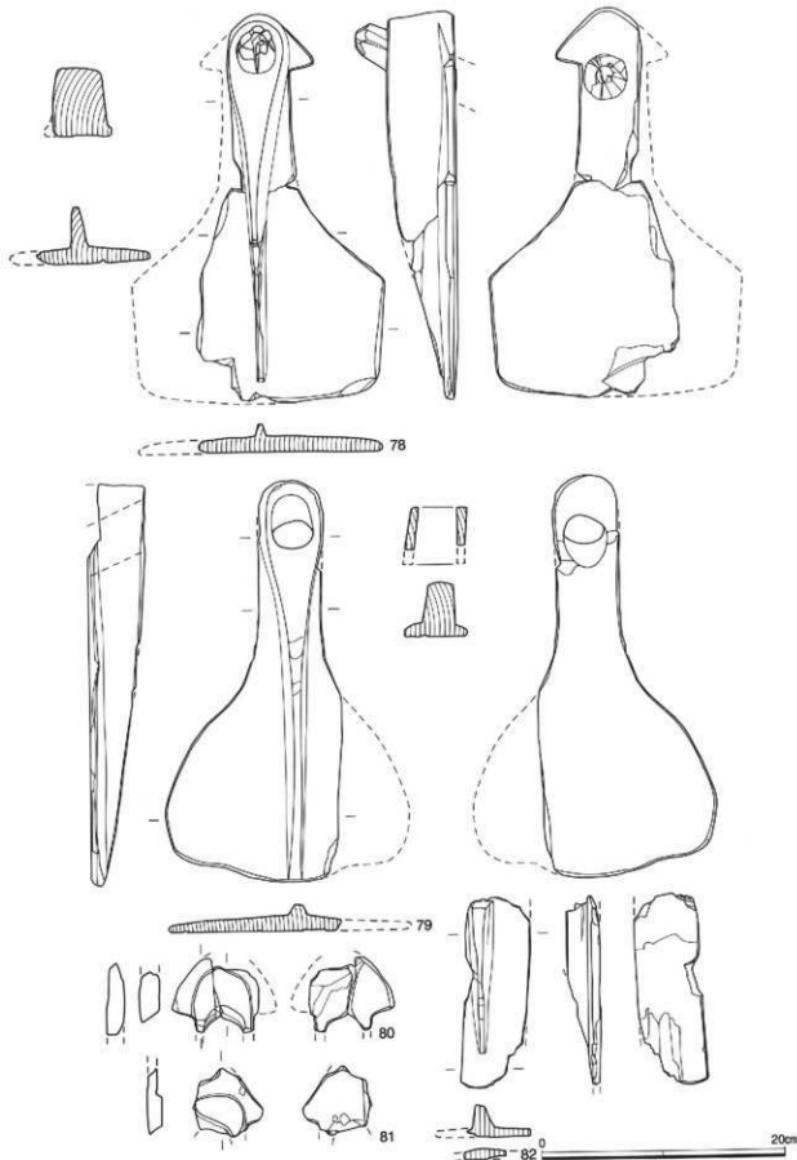
直柄又歛の身は欠損しているものが多く、全体形を復元できるものは数少ない。大部分が頭部を丸くつくり出し、刃先がフォーク状になっていたものと思われる。例外では84・91が頭部幅が狭く裾が広がり又部が分かれている。柄孔の周囲は舟型状の隆起がつくり出されたものではなく、やや厚めになり膨らみを持っている。刃部の本数は4本歛から7本歛の多又歛であったと思われる。また前面の頭部と刃部の境には0.3~0.7cmほど段差をつけて加工している(85・87~89・92)。柄孔の形状は頭部を丸くつくり出した又歛が横長の長方形で、頭部の幅が狭く裾に広がる又歛は円形である。着柄角度は方形孔で約67°~82°、円形孔で約64°~71°となっている。

83~84は5~6本歛であったと思われる。85は6本歛の又歛で歯の付け根から先端まで最大14.8cmとほぼ完全に残っている。前面側の齒の付け根には段差がつくり出されている。復元すると87は4本歛、88は6~7本歛になるものと考えられる。89は後面刃部の歯が斜めにすり減っている。使い込まれたためであろうか。91は全体形が三角形をしていたものと思われる。刃部は欠損しているが、柄孔のすぐ下から5本歛をつくり出している。92は4本歛であろう。93~94は火を受け炭化しているが、歯がつくり出されていることから又歛と分かる。

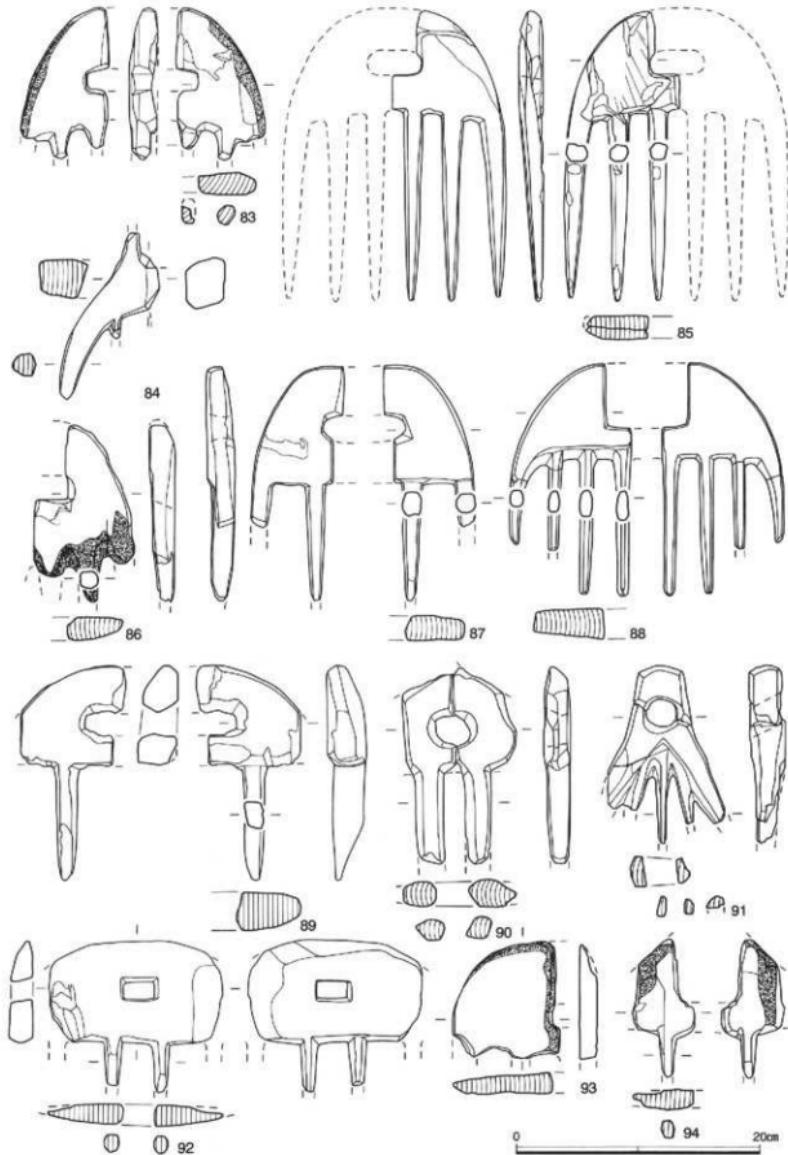
曲柄平歛

95~124(第19~22図)までの30点が曲柄平歛に属する。8層上・下部水田から出土した114・116や杭列(SA01)から出土した115を除き、すべて自然流路(SR01)から出土した。95~113は自然流路(SR01)の中層及び第III~IV層から出土したもので弥生時代中期中葉~中期後半に属する。114~116は弥生時代後期の遺構より出土し、117~124は自然流路(SR01)第I層より出土したもので同じく後期に属する。樹種はアカガシ亜属が8点、クヌギ節が11点、コナラ節が10点ある。珍しい樹種ではクロマツが1点ある(107)。直柄歛に比べて樹種の選択が幅広く、アカガシ亜属に代わりクヌギ・コナラ節の材が目立つ。

曲柄平歛は通称膝柄歛とも呼ばれる。このうち曲柄を伴うものは112で、材はサカキ。後述する曲柄で



第17図 農具4 (直柄平鍬4)



第18図 農具5 (直柄又鋤1)

もっとも使われている材と同種である。曲柄鍔の形態の特徴は曲柄を装着する軸部と刃部とからなることである。95～113までの弥生時代中期の平鍔は東海地域では典型的なものだが、後期に属する平鍔は形状が様々に異なっている。軸部の長さは12.2～22.8cm、平均で約17.4cm、身(刃部)の長さは15.2～32.2cm、平均21.3cmある。軸部と身との長さの比率は4.5：5.5。ただし刃部は使い減りするため未使用時の比率とは限らない。軸部の長さの平均17.4cmは「曲柄」の装着面の長さ平均20.2cmと比べ一回り小ささい。同じように軸部の幅は3.0～6.0cmで平均4.34cm、「曲柄」の装着面の幅の平均3.6cmと比べやや大きい。

軸部の形態も様々で数種類のタイプがある。軸部先端は大きく軸頭を残しているもの(95・107・111)や、軸頭と着柄軸との間を削り段になっているもの(112)、着柄軸を削り込んで突起をつくり出したものの(113～115)などといった形態のものがある。着柄軸の前面は鍔台の装着面と同じく平坦になっているが、後面は影らみを持ち断面形が半月形になっているものが多い。さらに着柄軸の前面には105・106のように鍔台の装着部が刃部のほうにまで削り込まれていたり、107のように途中に段が切り込まれていたりと精巧につくられている。これらの細部加工は曲柄と身とを固定し、より頑丈に結縛するための工夫であろう。

曲柄の項目で詳しく述べるが、曲柄鍔の軸部自体に角度ではなく、鍔身の前面は平坦である。曲柄鍔は装着される柄の角度で装着角度が決まる。農耕具の曲柄として掲載した製品の角度は45°～71°、その平均は約54°であった。鍔身と柄がセットで出土した112は曲柄の角度が53°である。

刃部は特に刃先が消耗していくことから製作直後の形態で比較することはできないが、あまり影響を受けない肩の形を見てみると、はっきりとした肩をつくり出しているもの(97・99・107・122)や、肩が小さくなじて肩のもの(95・96・106・108・116・117他)、小さな肩を持つもの(111～113・115・121)、なかにはほとんど肩がないもの(105・108)などがある。

98は接合点はないが同一個体と思われる。軸部の付け根に圧痕がある。99は一部炭化しているが加工痕が良好に残っている。106は刃先が磨化している。105・107は使い込まれているためか刃先が著しく磨滅している。特に107に見られる使用痕は刃先に直交する方向であるため、この鍔の運動方向が分かる。107はただ1点、クロマツ材の板目材を使っている異質なものである。111は完形品。使い込まれて刃先が磨滅している。112は一番大型の膝柄鍔。113は前面炭化している。117は刃部の幅が広く復元すると約21cmの五角形の広鍔になろう。後面には舟型隆起状の加工がある。119・122なども中期には見られない形態の膝柄鍔である。いずれも軸部があるため曲柄鍔に分類した。122は軸部途中の両脇がくびれている。123・124も膝柄鍔の軸部と考えたが、木製楔の可能性もある。

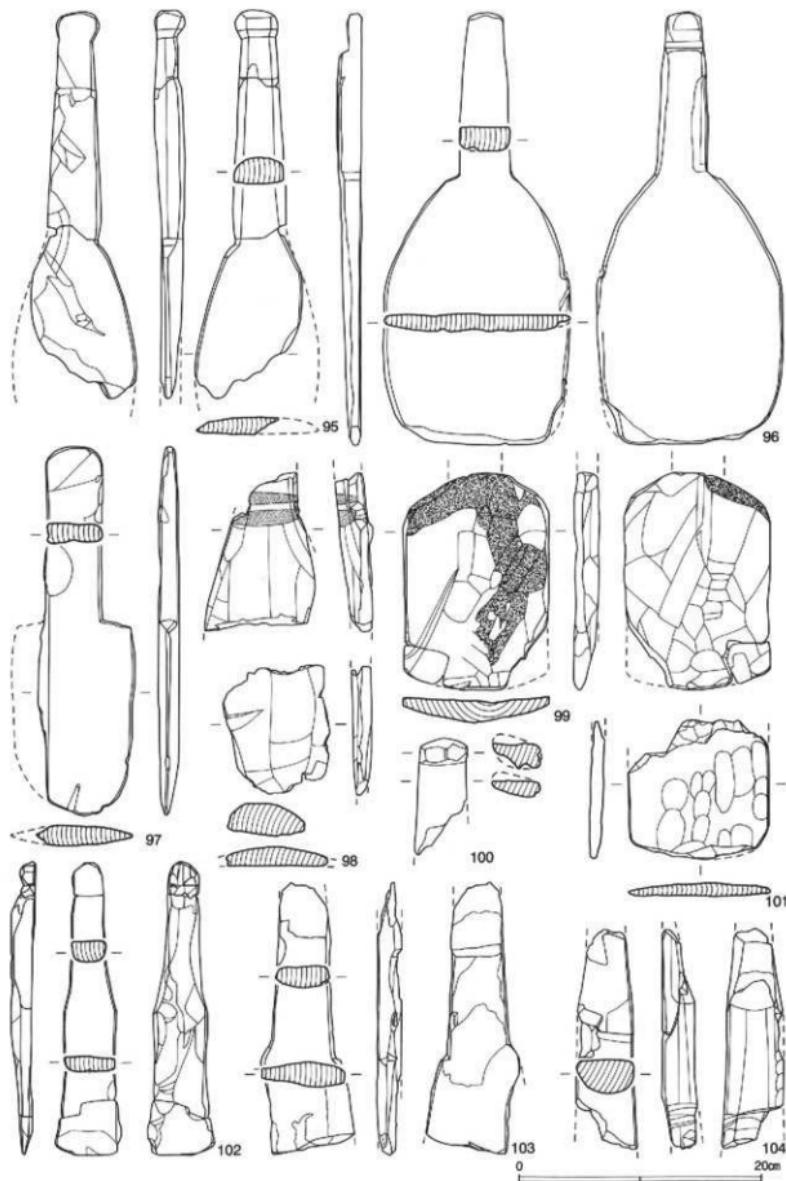
なお、曲柄平鍔(膝柄鍔)は平成2年度に行われた調査でも1点出土している(註7)。

曲柄又鍔

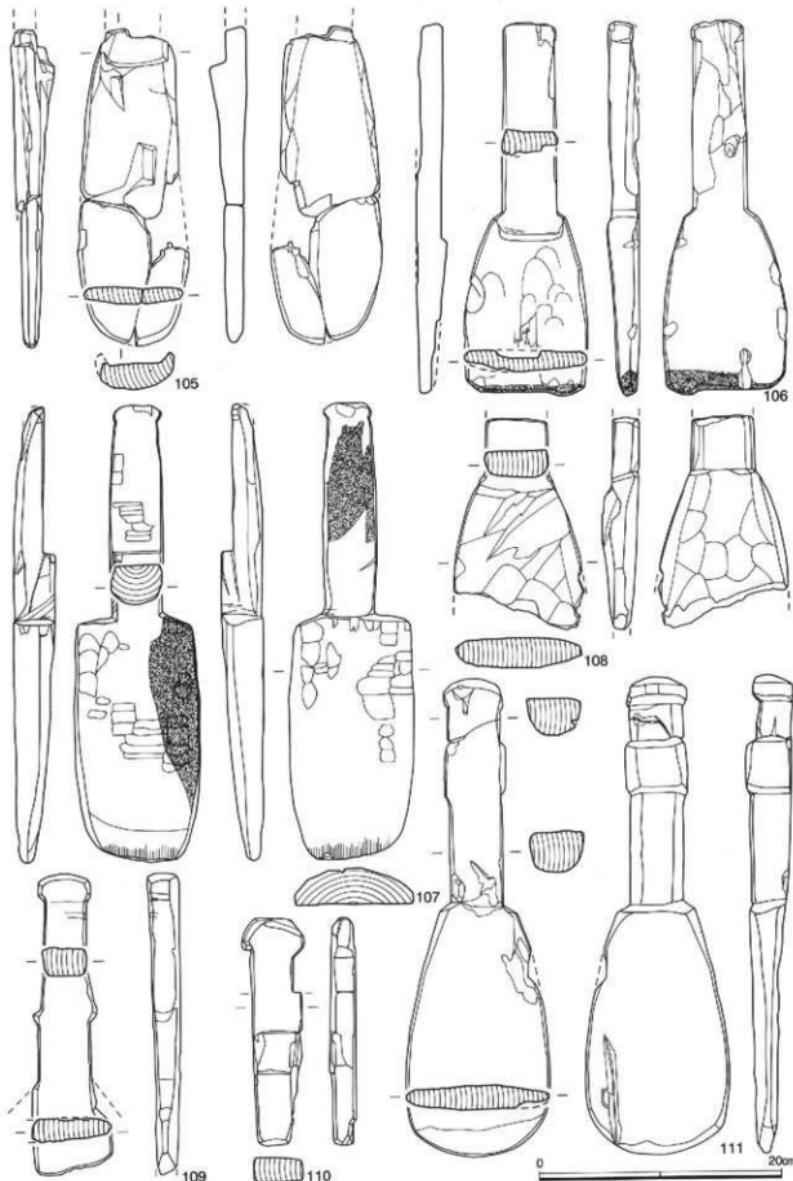
125～136(第23・24図)までの12点が曲柄又鍔に含まれる。調査区北端側の溝状遺構(5SD33・5SD34)より出土した133・134を除くほかは、自然流路(SR01)から出土した。125～132は自然流路(SR01)第1層より出土したもので後期に属する。135・136は各々、第III層・第II層より出土し中期に属する。樹種はアカガシ亞属が主体であり、クヌギ節も少數見られる。

曲柄又鍔は他に比べ個体数が少ない。また中期の資料が少なく後期の資料が多いのは他の鍔には見られない傾向である。基本的には軸部を持つ又鍔を「曲柄又鍔」としたが、軸部が欠損しているものは形態の特徴からこれらに含めているものもある。以下、個別に解説する。

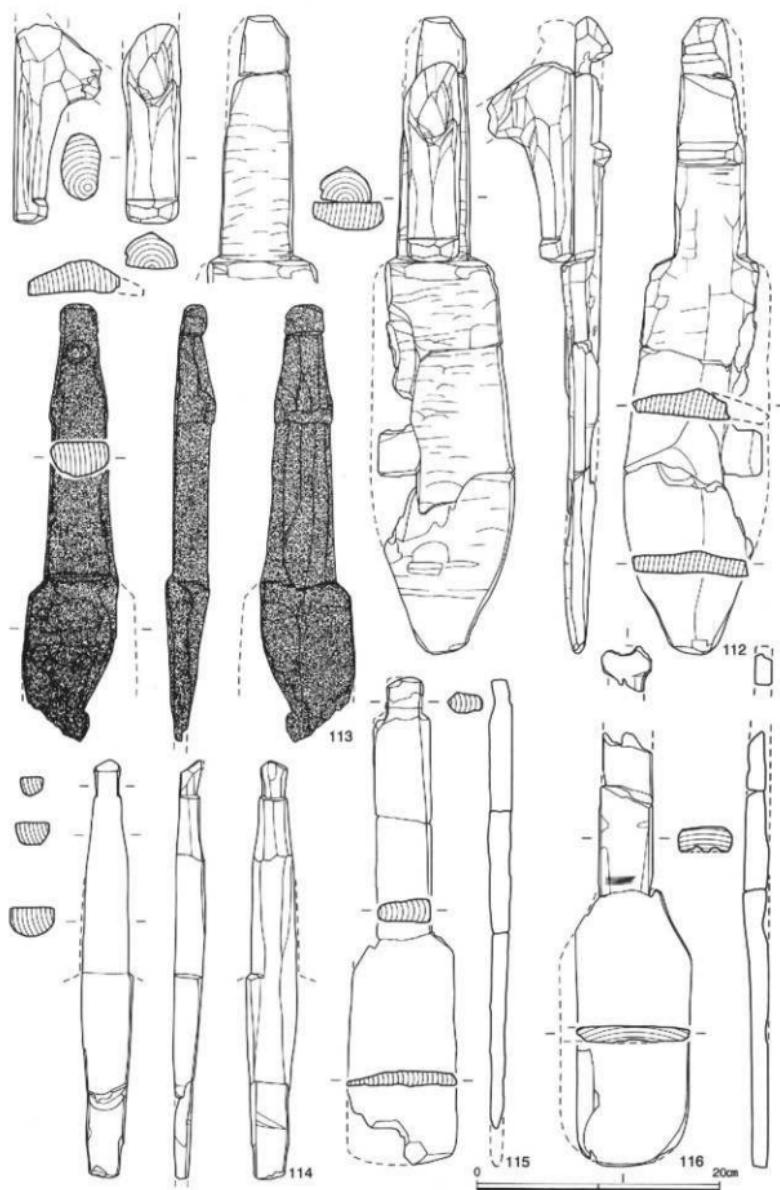
125は肩があり軸部と刃部の境がはっきりとした二又鍔である。刃先は欠損しているが、扁平な板状で一方の刃幅は約6cmほどある。刃先は欠損しているため形状は不明。126は三又になると思われる。前面側は扁平に整形され、後面はやや丸味を帯びている。刃はやや厚めの長方形である。127は三又鍔と思



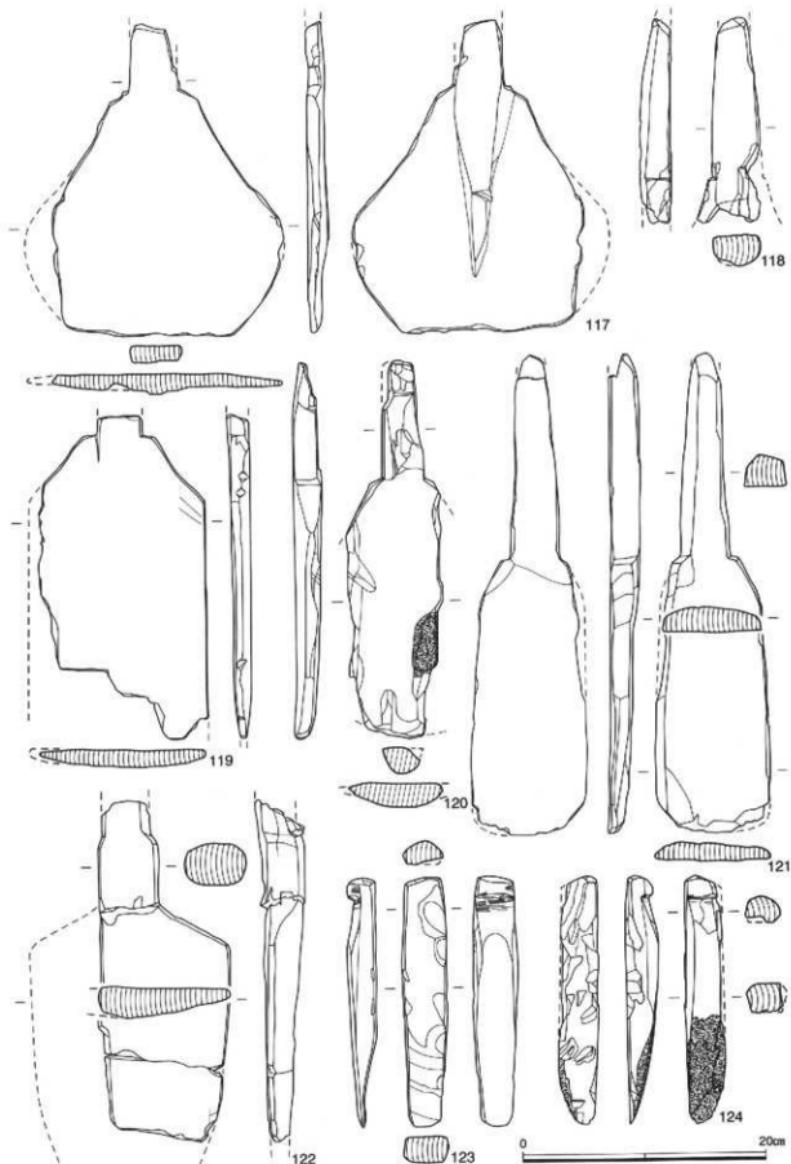
第19図 農具6（曲柄平鋤1）



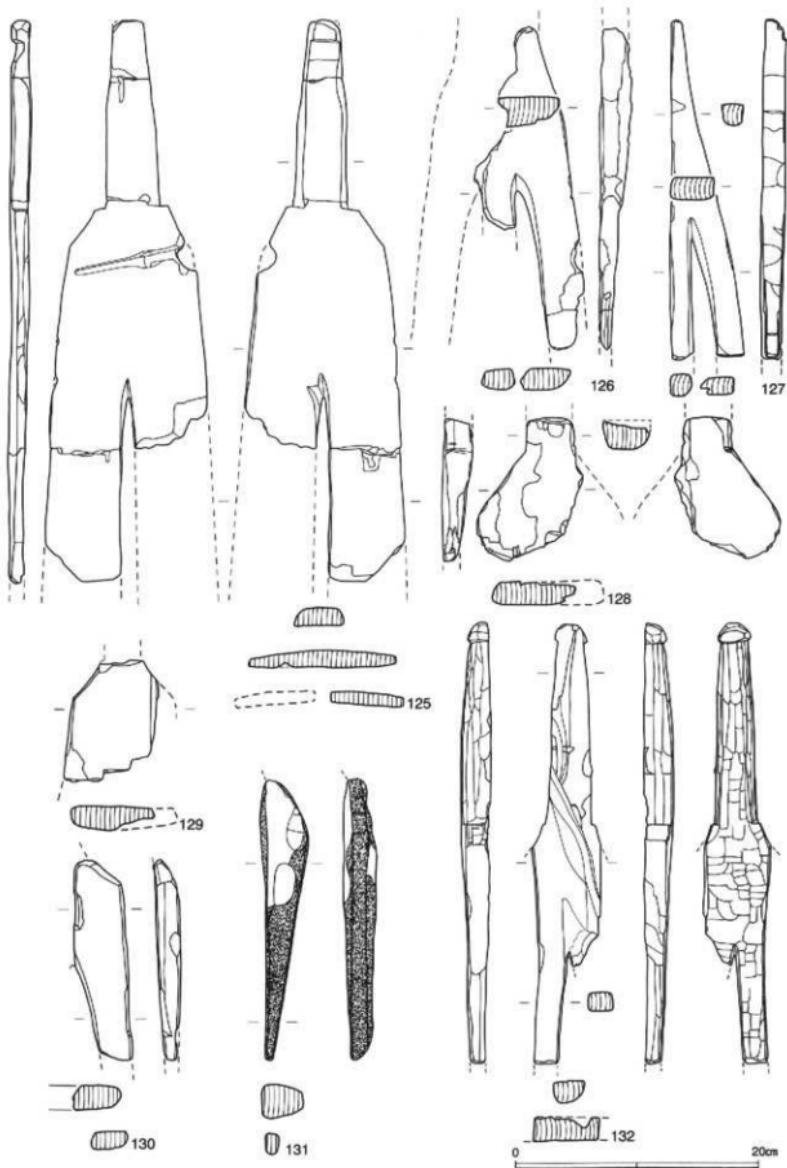
第20図 農具 7 (曲柄平鋤 2)



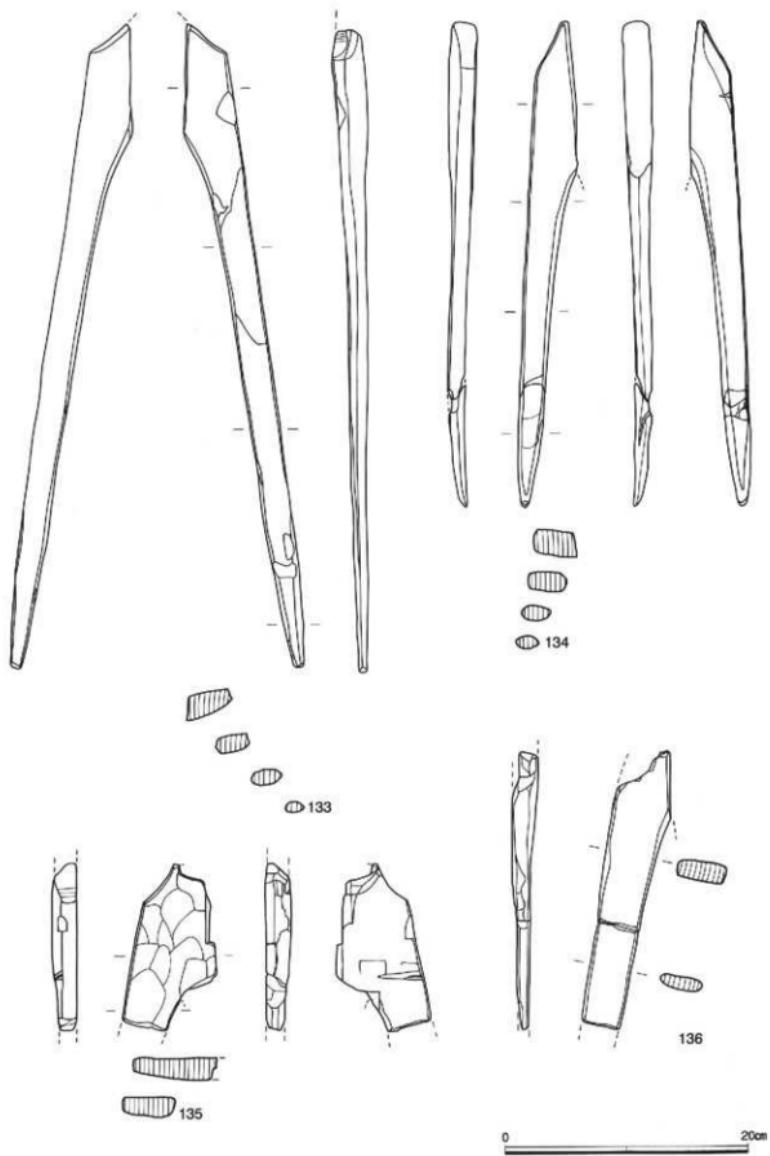
第21図 農具8 (曲柄平鋤3)



第22図 農具9（曲柄平鋤4）



第23図 農具10（曲柄鋤1）



第24図 農具11（曲柄叉鋤2）

われるもので縦に半折している。又部分が一ヶ所残っているが両側面には再加工された刃物痕がある。再加工後の用途は不明。131は前面炭化しており樹種も同定できなかった。132は小さな肩を持つ又鋤である。軸部はほぼ完全に近く先端に緊縛するときのための突起がつくり出されている。断面は半月形を呈する。刃部は又部分が一ヶ所残っており、刃先の断面は方形である。特に後面に細かい加工痕が顕著に残っている。

133・134は調査区の北側で検出された溝状遺構（5SD33・5SD34）から出土したものであるが、確実に中期に属する農具とは言いがたい。両者とも刃先片だが先端まで残っている。133は刃先が使用によって磨滅している。134は先端から8cm程のところで折損している。135・136も形態の特徴から曲柄又鋤に分類した。

註4 農耕具、特に鋤・鋤の用語や部分名称、またその分類方法は『木器集成図録 近畿原始編』に集成された上原真人氏の分類を引用した。

註5 「直柄」に対して「曲柄」と言う言葉を用いた。「曲柄」は膝柄と反柄に分類されるが「身だけでは、装着した柄が膝柄か反柄か判断できない…」（上原 1993）理由から「曲柄」に統一した。

註6 通称、小型鋤と言われている。

註7 中山正典他『角江遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991.3

b 鋤

遺跡内で確認された鋤の製品は18点ある。このうち137～144が一木鋤を含む平鋤、145～147が又鋤、残る148～154までの7点は鋤の柄である。出土総点数が79点あった鋤に比べて鋤の出土量は極めて少ない。鋤も大半が自然流路（SR01）の包含層から出土したものであり、弥生時代中期初頭から後期の範疇に属する。鋤は「一木式」と「組み合わせ式」とに分類した。その分類からさらに「平鋤」、「又鋤」に分けている。鋤の柄は断片でしか見られない。それも把手状に加工しているものに限られている。ほかにもこれらとは異なる形状の把手があったことも考えられる。鋤柄は一木式や組み合わせ式といった分類には関係なく柄だけ集成して図版に掲載した。

鋤に使われる材も他の農具と同様にアカガシ亜属が主体的に選択されているが、クヌギ節・コナラ節もあり、なかにはクスノキなどの異材もある。柄に使われている材もツブライジを除いてはアカガシ亜属が最も多い。

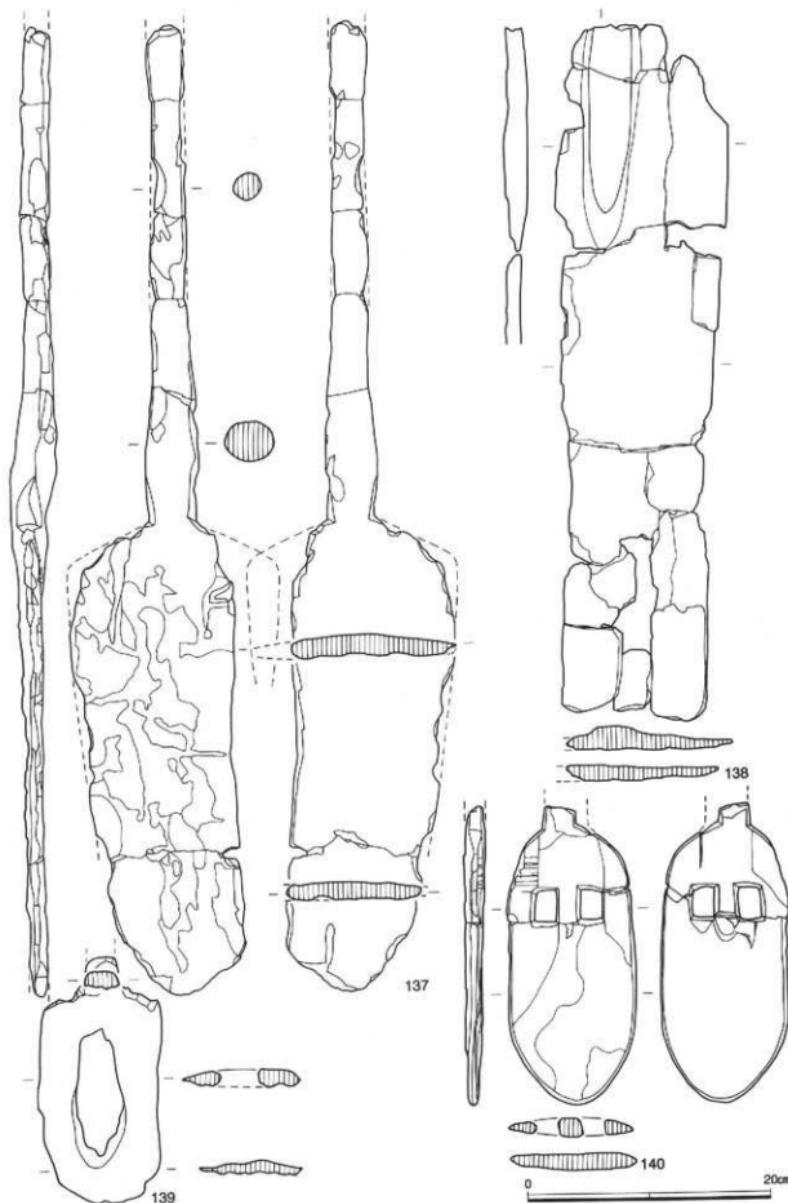
一木鋤（平鋤）

一木式の鋤は137・138の平鋤である。いずれも弥生時代後期に属する。137は唯一、全体形が分かる一木鋤だが、風化が著しく進んでいる。把手先は無く形状は分からぬ。柄の残存長は41cm。柄の付け根から5cmほど上が膨らみを持ち、この部分が全体に比べて頗丈になっている。身は38.9cm、全体に後面側に反っている。先端に向かってやや細くなり、なで肩だが大きな肩を持つ。138は風化欠損がさらに著しく、ほとんど原形を留めていない。しかし上部に舟形状の隆起部分を持ち薄手のつくりであることから一木鋤と分類した。舟形状の隆起から柄につながると考えられる。

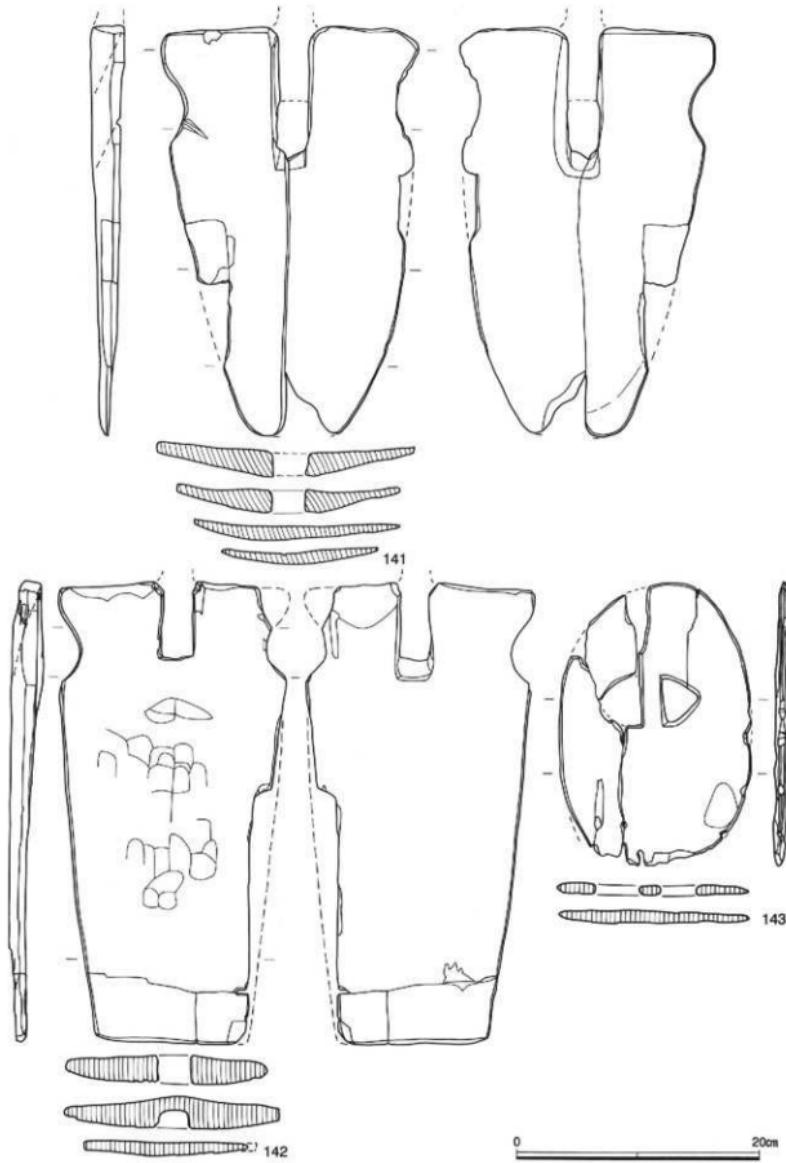
139は11号方形周溝墓の西側周溝（9SF31）底面から出土した鋤と思われる製品である。風化がひどく乾燥してやや収縮しているが真ん中に大きくあいたスリットと柄のあった痕跡が残っている。非常に小型であり一木鋤に含めてもいいものかどうかは疑問である。

組み合わせ平鋤

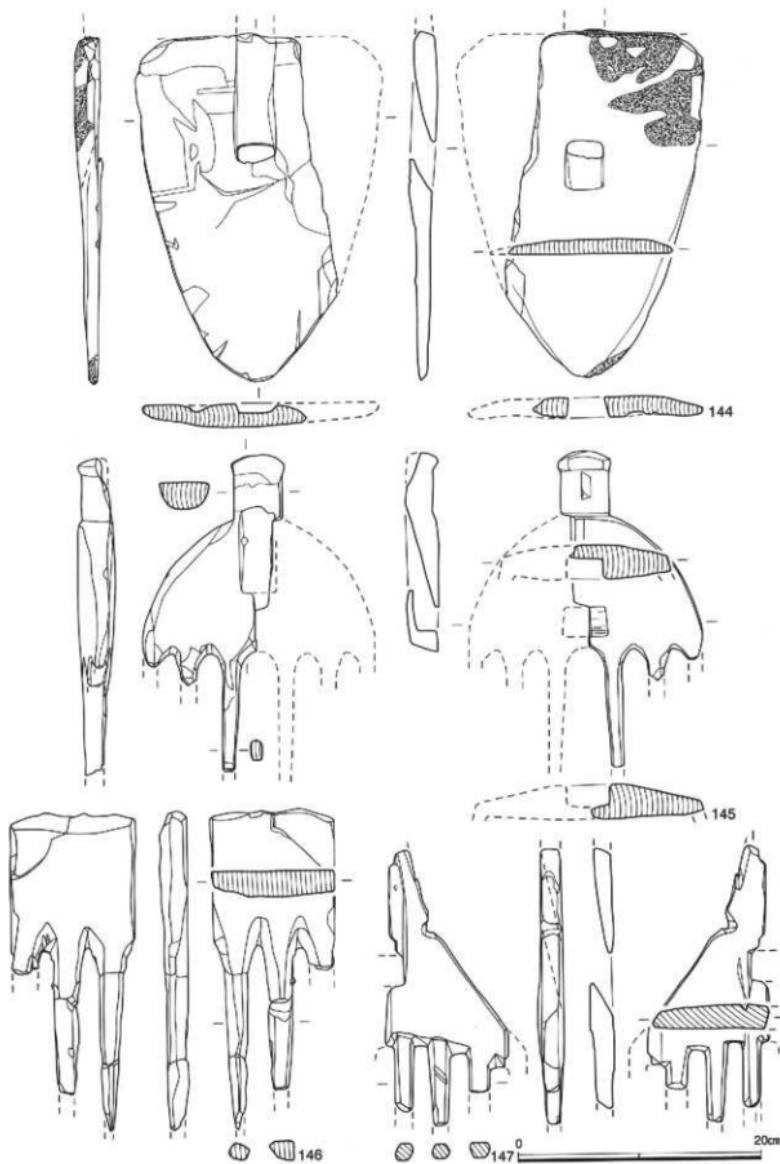
140～147を組み合わせ式の鋤とした。このうち平鋤は140～144、又鋤は145～147である。140～143は弥生時代中期、144は出土地点不明、145は後期、146・147は中期に属する。実測図の側面図に入れた破



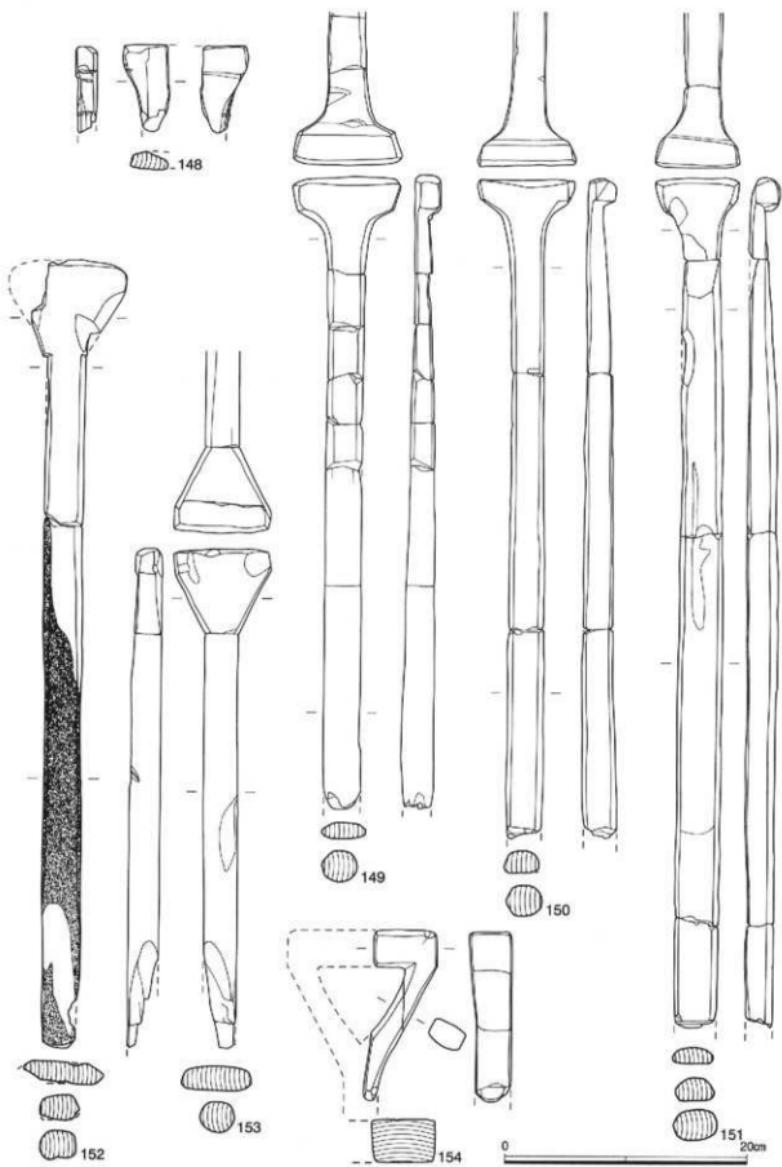
第25図 農具12 (一木鋤1・組み合わせ平鋤1)



第26図 農具13（組み合わせ平鋤2）



第27図 農具14 (組み合わせ平鉗3・組み合わせ又鉗1)



第28図 農具15（鍔の柄）

線は着柄推定線である。

140～144は平鋸である。140・143はいわゆる「柄下端を紐結合で固定する組み合わせ鋸」と考えられる。いずれも丸肩で、身の上部に方形または三角形の枘孔が2孔づつある。140は細身の小判形で上部に柄または軸状の突起があるが欠損している。143も梢円形でまん中よりやや上に底辺で向き合った二等辺三角形の孔があいている。柄又は軸状の突起はない。薄身で細身の形状であることや樹種が他と異なることなどから鋸以外の用途も考えられる。141・142はほぼ同形態の鋸である。いずれも着柄軸が欠損しているが隨があることから組み合わせ鋸に分類した。左右水平にのびた肩を持ち、肩下の左右側面がくびれている。141は1号方形周溝基の南側周溝(5・6SD07)の底面から出土したものである。右半分が著しく風化している。刃縁部分の磨滅が激しく特に先端は使い込まれたためかすり減って変形しているものと思われる。着柄角度は157°。身の断面は後面がやや窪み前面の中央が膨らんでいる。142は下方に向かって幅狭になる長方形を呈する。身の断面は中央がやや膨らむ。上部は2.5cmほどの厚みがあるが刃縁にいくほど身が薄くなる。着柄角度は164°。141に比べ柾の長さが短い。144は出土した地点が不明となってしまった製品だが区・グリッドから自然流路(SR01)で出土したものであろう。身は肩が左右水平につくり出され逆三角形を呈する。刃部は使用による磨滅が著しい。前面の一部が炭化している。

組み合わせ又鋸

145～147は又鋸である。145は唯一、後期に属する鋸身である。約1/2程度しか残存していないが原形を復元することができる。緊縛部を浅く彫り窪めた着柄軸を持ち、着柄角度は164°を測る。丸肩で6本歯の又鋸と思われる。復元最大幅は19.4cmほどになる。後面には欠損しているが肩に幅1cm程の縁があり、まん中はほぼ平坦になっている。前面は中央に膨らみを持っている。全体、非常に精巧につくられた鋸と言える。146・147は中期に属する又鋸である。146は三又以上の鋸と思われる。柄の形態は不明。上部と側面は二次加工を受けた可能性がある。147は肩がほとんど無いが、柄孔角度が168°の柾があるため鋸に含めている。復元すると8本歯になるものと思われる。側面に近づくにつれ歯と身の付け根は斜め方向に下がっている。後面は歯の付け根部分に段差をつけた加工を施してある。柄孔上部に柄装着時の圧痕が認められる。肩上部に緊縛用の溝があり柄と身をくくりつけた場所と思われる。

鋸の柄

7点ある鋸の柄のうち、148～152が弥生時代後期、153・154が弥生時代中期と、後期に属する柄が圧倒的に多い。しかし前述したように鋸の柄と認められるものは把手状に加工しているものに限られ、ほかにこれらとは異なる棒状または有頭棒状などの形態の把手があったことも考えられる。このため鋸の柄の個体数は増える可能性もある。

148は逆三角型の把手である。前面側に0.2～0.3cmの段差がつくられ、右側面には直交方向の圧痕がある。149～151は全く同形態の鋸柄で把手はT字型を呈する。前面側には握りやすいように0.7～1.2cmほどの段差が付けられている。柄の断面は上方は扁平で薄く下方に行くほど円形に近くなる。152も逆三角型の鋸柄と思われる。把手は薄身で柄の付け根には角が付けられている。柄は火を受け炭化している。

153・154は逆三角型把手である。153は前面にほんのわずか段差がある。154は逆三角型の中央に孔があいている。角は磨いてあり丸みを持っている。かなり大型で頑丈な把手と思われる。木取りは他の農具と異なる板目である。

a' 鋸未製品・b' 鋸未製品

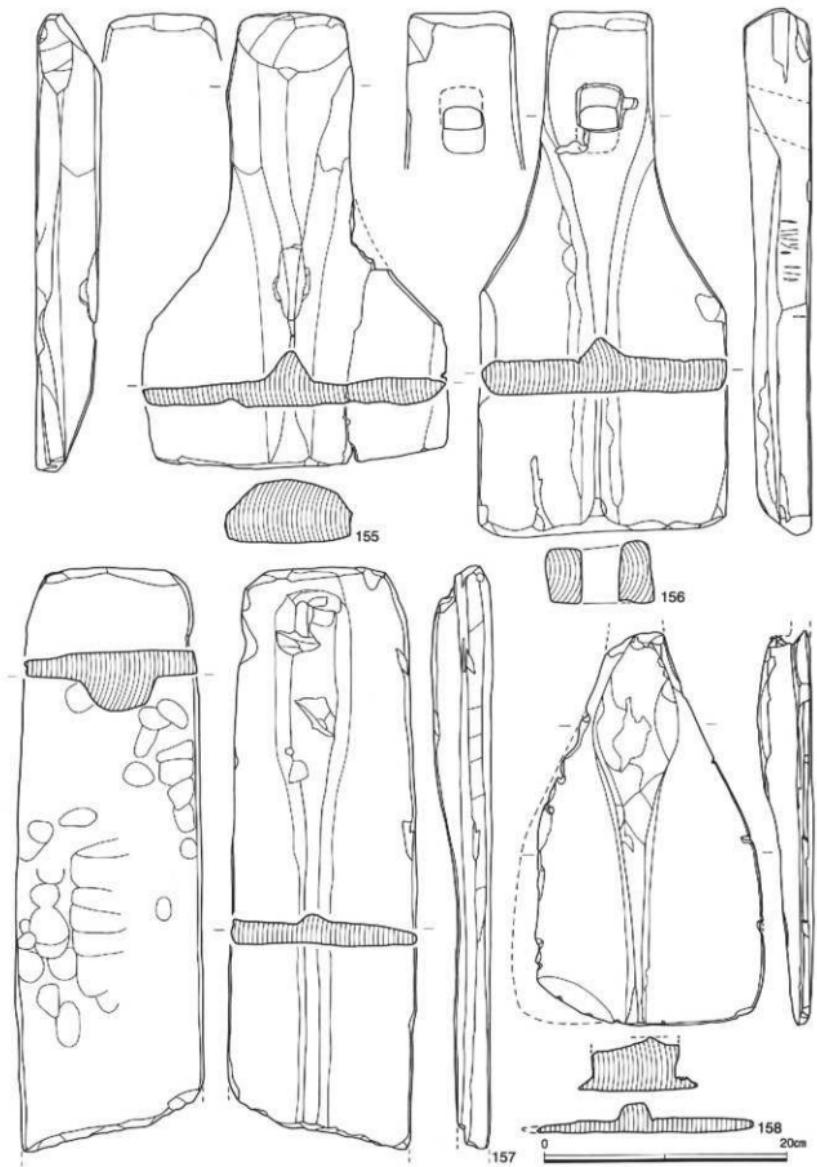
角江遺跡では鋸・鋸の製品の他にその未製品が多量に出土している。その一部を第29～37図に掲載した。「一部」というのは、ここに掲載した未製品がある程度個別に形状をつくり出している段階の未製品に限られているということであり、これ以前の段階は本書に掲載していない。鋸・鋸は完成品にいたる

までのあいだ、伐採された丸太から板を切り出し、個別の寸法に切断して形を削り出すなど、いくつかの行程を経ている。その行程の順を追っていくと初段階として立木を伐採した丸太の段階(丸太材)、次にこれを半裁し(半裁材)、さらに細かくミカン割りする(ミカン割り)。この状態では断面がイチョウ形になっているため出張りを切り落とし扁平な板状にする(製材)。そしてさらに板の両側面の形を整え板材となる(整形)。ここに未製品として掲載したものは既に整形された板材から必要な寸法に切断され明らかに鍬や鋤の未製品と判断できる段階のものである。遺跡からは丸太材から整形段階までの木製品も出土しているが、その点数は膨大なものとなるため本書には掲載しきれず割愛した(註8)。掲載した未製品はすべて自然流路(SR01)同じ遺構から出土したものであるため、類似形態ごとにまとめ図版を分けた。

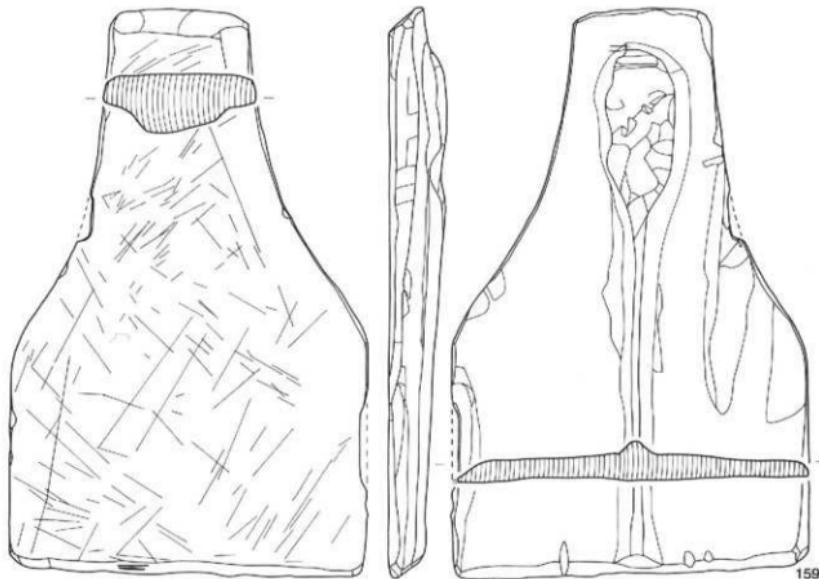
第29～32図の155～166は舟型隆起を持つ直柄鋤の未製品と考えられる。すべて自然流路(SR01)より出土している。155は自然流路の第I層で弥生時代後期に属する。156～166は第II～IV層までの包含層より出土したものすべて弥生時代中期に属する。155は未穿孔の鍬未製品で、最大幅が25.2cmと幅広だが、肩部分のカーブが長く刃部は全体の1/3程度である。156は柄孔が穿孔された段階の未製品である。直柄が装着される鍬未製品のなかで柄孔があるものは156しかない。柄孔は3.8×3.5cmの方形で、着柄角度は70°。上端部は板材から切断された時の痕跡が残っている。舟型隆起の表面が平坦に残っていることから5.4cmの厚みは整形された板材のときの厚さと考えられる。157はやや幅狭の未製品である。前面側には約2cm前後の刃物で加工された痕跡が残っている。158の未製品はかなり加工が進んでいる。形状はなで肩で幅広、舟型隆起は上下端部を尖らせている。159は舟型隆起の上端が丸く加工され、上下端部には整形板から切断された痕跡が残っている。前面には無数の線状の刃物痕がある。160の上端部は前後左右から加工されている。162は復元すると最大幅が20cmほどになる。164は舟型隆起のある鍬未製品と思われるが最大厚が7.7cmと厚く、他の製品である可能性もある。165は他に比べて小型で、舟型隆起はつくりだされていない。166は二連の鍬未製品。上方には大きな筋があり特に目立った加工はされていない。下方は既に肩部分のカーブが抉り込まれ、舟型隆起が削り出されている。分割すると上方は約46cm、下方は約44cmほどの長さになる。ほぼ中央部分には切断されかけたのか荒い刃物痕がある。鍬・鋤などの農耕具が整形された長い板材から分割されてつくられていたことを示す好資料である。

第33図にまとめた未製品は長方形で舟型隆起が明確につくり出されていない。167～170はすべて自然流路から出土し弥生時代中期に属する。167は中心よりやや上部に橢円形状に隆起した部分がある。隆起は明確な稜線をもっていないが、この隆起部分に柄孔が穿られるものと思われる。器面や端部は加工が進み薄手になっている。168は滴形の隆起がある未製品である。上下端部には切断または端部仕上げの加工痕が顕著に残っている。後面の右端にはミカン割り材を製材したときのものと思われる稜線がある。169にも橢円形状の隆起があり167の前段階くらいの未製品であろう。170は前面の上寄りに隆起があり、器面調整の加工痕が顕著に残っている。これらは直柄を装着する未製品であろうが鍬か鋤の判別はできない。

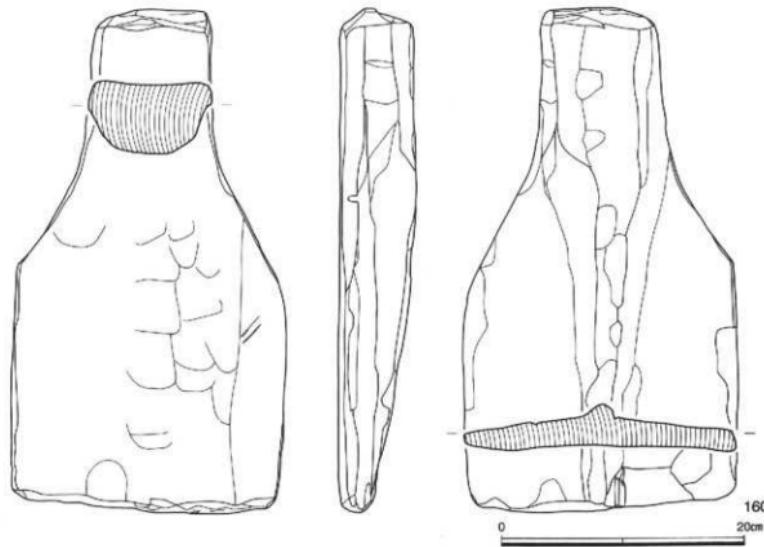
第34～37図の171～185は曲柄を装着する軸部と肩がつくり出されている。171～172は後期の資料。173～185は中期に属し、身の幅が狭いことから曲柄平鋤(膝柄鋤)の未製品であろう。171は軸部が11.4cm、幅が広く刃部は薄手で、農具には珍しいクリ材である。前面は加工痕がはっきりとし、後面は前面炭化している。172は乾燥がひどくひび割れている。大型で刃部は薄手。173～177は肩をつくり出し軸部と刃部の境がはっきりとしている。173の前面側は加工面が顕著に残っている。上端は四方から刃物で切り込まれ最後折り取られたようになっている。174は軸部と思われるが、刃部は途中で切断されている。175は形状から明らかに膝柄鋤の未製品であるが、木取りが農具にはあり得ない板目で後面は樹皮で覆われている。下方は斜めにカットされている。176は刃部の先端尖らせ気味加工してある。177の厚めな軸



第29図 農具16（未製品1）



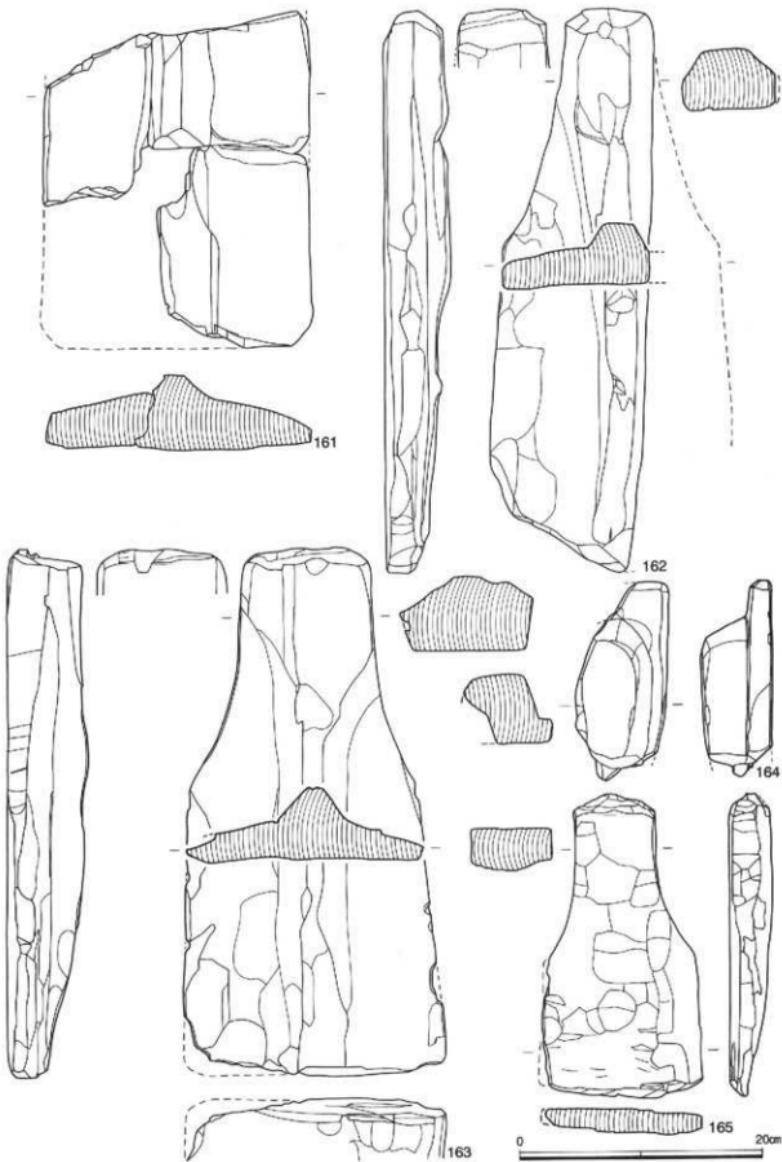
159



160

0 20cm

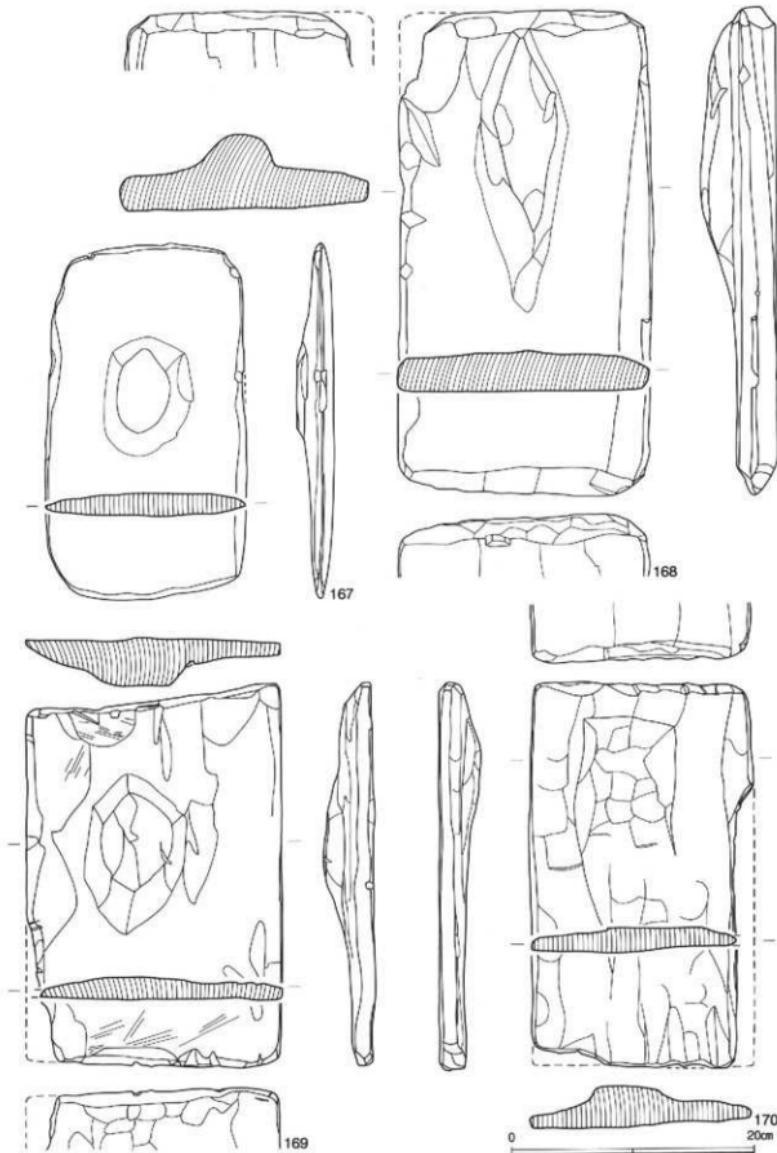
第30図 農具17（未製品2）



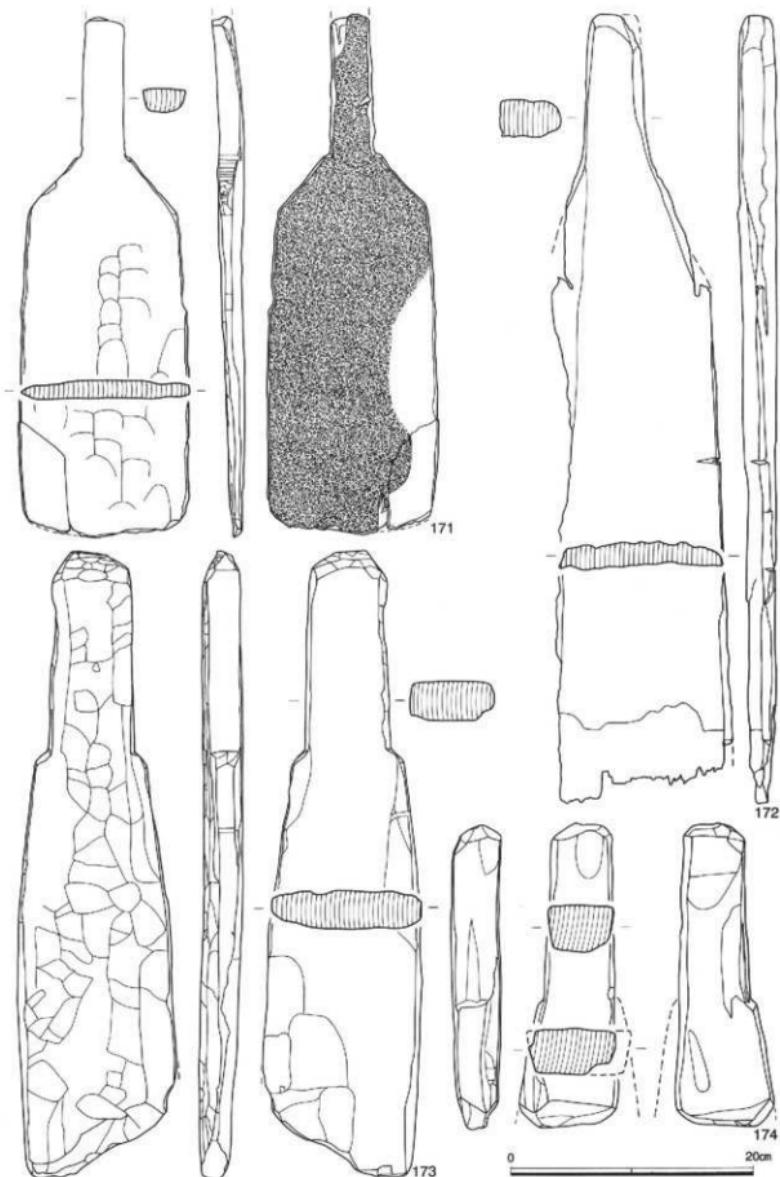
第31図 農具18（未製品3）



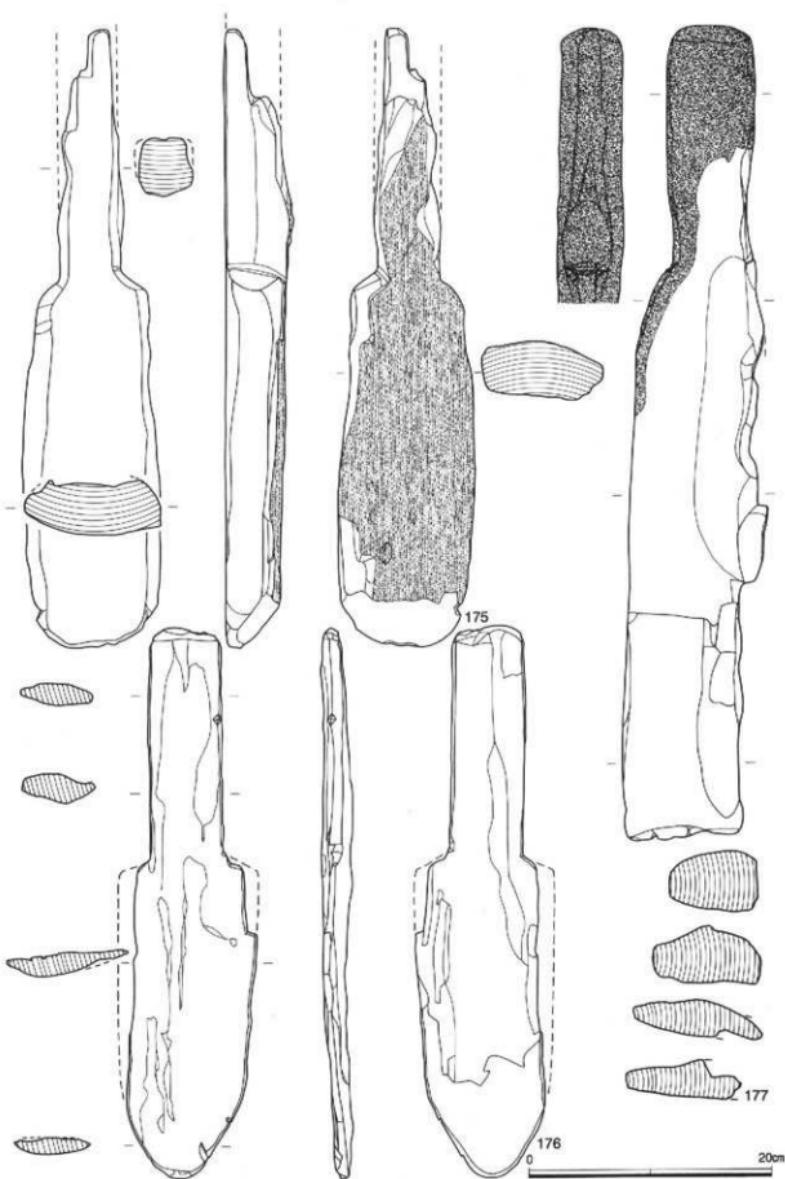
第32図 農具19（未製品4）



第33図 農具20（未製品5）



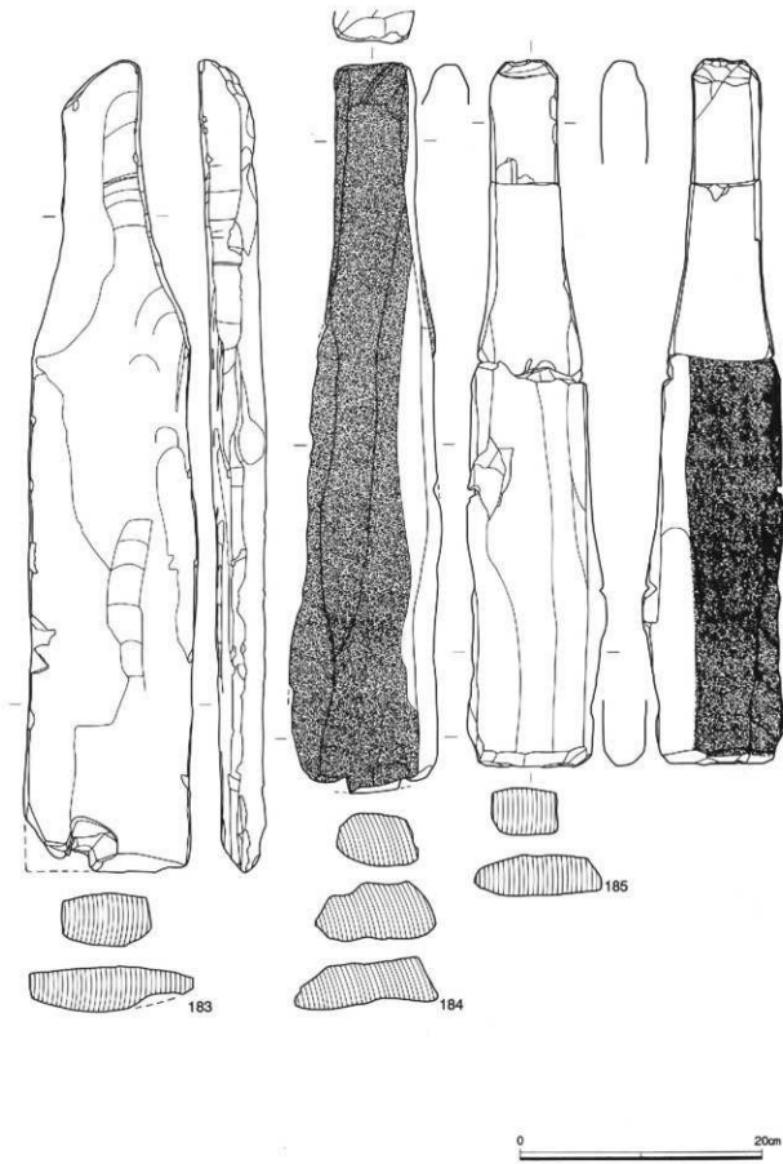
第34図 農具21（未製品6）



第35図 農具22（未製品7）



第36図 農具23（未製品 8）



第37図 農具24 (未製品9)

部は炭化している。側面は風化が激しい。178～185はほとんど同じ形態をしている。肩はつくり出しておらず斜めにカットされ、最大長も50cm前後である。178の軸部断面は長方形を呈するが刃部は中心に稜線をもつため山形になっている。製材段階にカットされたときの面が残ったものと思われ、181・182の稜線も同様であろう。182は上端から15cm程のところに切り込まれた刃痕が見られるためここで切り落とそうとしたのではないかと思われる。184は前面炭化している。右側面は木の辺材面である。185の一部も炭化している。

註8 丸太材から整形段階までの木製品他の点数は第7表にまとめてある。

c 鋼の柄

農具の柄は「直柄」と「曲柄」とに分けている。「直柄」は単独で出土した場合、それと判断することは非常に難しい。本書でも確実に「直柄」と確認できるのは着柄状態で出土した59・60・75・76・78の5点に限られている（註9）。そのためここでは「曲柄」を中心に集成した。

曲柄は製品が32点+着柄状態1点（112）、未製品が32点、合計65点ある。第38～44図までに掲載したうち、第38～41図は製品、第42～44図は未製品を掲載し、さらにそのなかを弥生時代中期と後期に分けた。曲柄は鍛台の装着面が平坦に加工されていることや身と柄とを緊縛して固定するための紐かけが上下につくり出されていることなどを完成品の基準とした。装着面の長軸方向の長さは16.8～30.6cm、幅は2.6～4.8cm、長さ×幅の平均は20.2×3.6cmになる。未製品はこれらの整形が未完成のものである。しかし未製品は歎の柄だけでなく工具の曲柄とも形態が共通している。未製品の段階でこれを分けることは難しいことから、曲柄の未製品のなかには工具柄の未製品も含まれている可能性があることもあらかじめ記しておく。

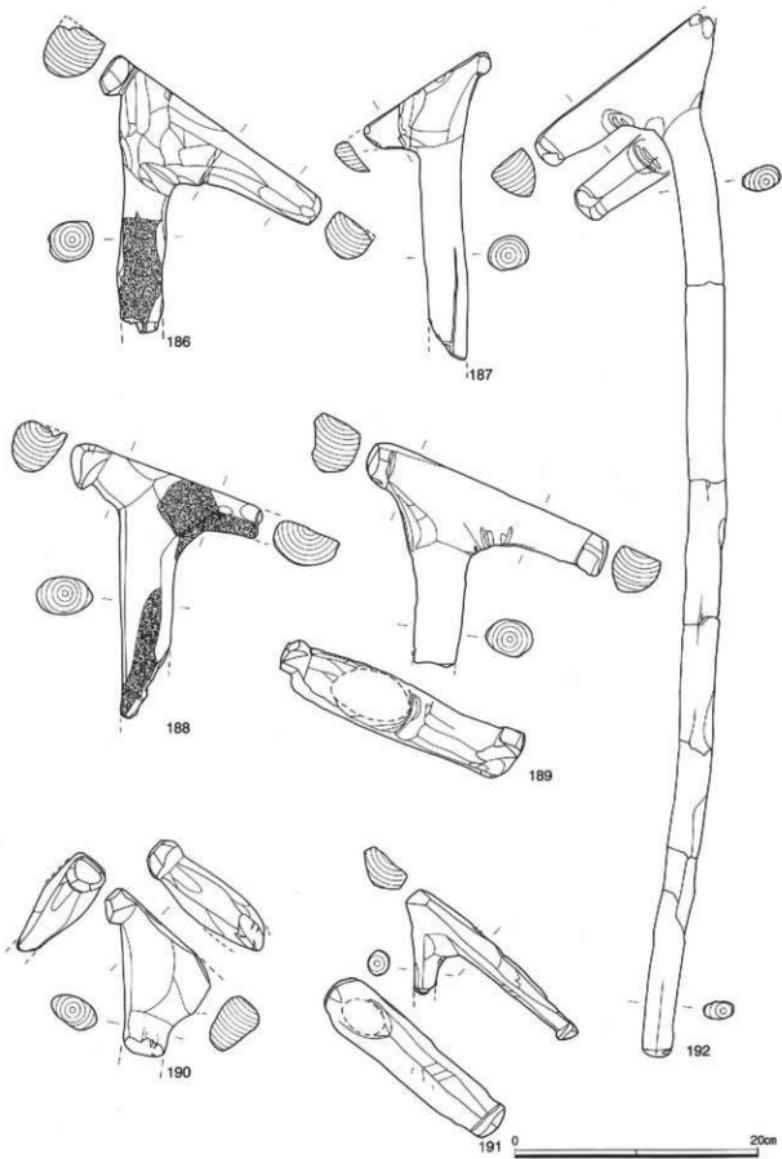
直柄

前述したように本遺跡内で確実に直柄と言えるものは5点に限られている。直柄は単独で出土してもそれと判断することは難しく、ほとんど見過ごしてしまう場合が多い。本書でも出土した棒状の木製品は用途不明木製品として出来るだけ掲載するよう努めた（第97・98図他）。これらの用途不明木製品のなかに直柄が含まれている可能性もある。

第14図59はサカキ材の直柄である。木取りは芯持ちではない。柄の頭部は断面が方形に近く整形され、基部に行くほど梢円形となっている。また頭部は太く基部に行くほど細くなる。基部は途中で折損している。60はツブラジイ材で木取りは芯持ちでない。やはり柄の頭部断面が方形で、基部に行くほど円形に近くなっている。後面から約2.6cmほど突出している。身が装着されている部分は圧痕がある。頭部から約25cmほど基部寄りには浅く削られた部分があり使用のためか磨滅している。基部は途中で欠損している。第16図75・76は小型歎の柄でいずれもサカキ材である。75は芯持ち材。柄孔部分のみ残っているが柄孔の形状から断面は方形と思われる。76の柄は芯持ち材ではない。長さは18.9cmほど残り基部は欠損している。柄孔付近だけが方形で圧痕が付いている。軸は円形になる。第17図78は芯持ちのヌルデ材である。かなり風化しているが柄孔の形状から断面は円形と思われる。

曲柄

第38図186～192、第21図112は弥生時代中期に属する曲柄の製品である。すべて自然流路（SR01）第II～IV層の包含層から出土した。曲柄の材質はサカキ材が多いが、ヒサカキ、クリ、クヌギ節も含まれている。着柄角度は52°～71°で平均は60°である。186は台部がほぼ完全で上の紐かけはあるが下の紐かけはつくり出されていない。かわりに台部前面側の緊縛部分に段差が付いている。全体に加工痕が明瞭に残り握りも磨かれている。握りの一部は炭化している。187の上の紐かけには緊縛痕が残っている。握り



第38図 農具25（曲柄1）

も丁寧に磨かれて残存状態が良い。188も表面が炭化している。上の紐かけ部分や装着面に緊縛痕がある。189は上・下に紐かけがつくり出されている。190は上の紐かけが残っている。全体に細身のつくりで装着面の幅も狭い。191は台部が薄身で、紐かけは磨滅して黒くなっている。クヌギ材で上の紐かけ部分がないことから工具柄の可能性も考えられる。192は上の紐かけが欠損しているだけではほぼ完形品である。握りの先端部には特別な加工は無く、丸く磨滅している。最大長は86cmを測る。

第39~41図193~215、他2点は弥生時代後期に属する曲柄製品である。8層上部水田から出土した198~199・211~213・215の5点を除いて、他20点は自然流路(SR01)第I層出土である。サカキ材が96%と圧倒的に多用されている。着柄角度は45°~65°、平均は52.17°である。台部は細身で下の紐かけが無いタイプが多い。193は握りが92.6cmと全体残っている。断面は楕円形で全体に磨かれている。基部はくびれて有頭状になっている。また握りの表面には一部直交方向の圧痕が見られる。194は風化がひどく握りの先端も完結しているか分からぬ。上の紐かけがつくれられ装着面が長い。195は握りの付け根に段をつけて加工してある。握りは楕円形で綺麗に磨かれている。196は残存状態が良く器面に細かい加工痕が顕著に残っている。下の紐かけは無く、装着面は平らに削られ前面側に幅広くなる。197は風化しているが紐かけに残っている緊縛痕は観察できる。台部の先端が炭化している。198は上の紐かけ部分の破片。199は上・下の紐かけがある。台部が太く頑丈で装着面が長い。握りの付け根に段をつくり出している。握りは短かく先端は尖らせるように削ってある。200は台部は完全に残り、握りはやや歪み途中で折損している。201は欠損部分が多く部分的に炭化している。202は全面に炭化している。203は上の紐かけ部分の破片。204は上の紐かけに緊縛痕が残っている。下の紐かけは無く先端は尖らせてある。205は接合点はないが同一個体と思われる。握りの先端は加工されているため完結していると思われるが一部接合不可のため長さの計測は不可能。206の台部には圧痕があるが緊縛痕か。握りは先端部を欠く。207~215はほとんど同形態の曲柄で、握り基部も残っているものが多く、最大長は100cmを超える。やはり上の紐かけだけあり、下は薄く平らになるか先端が尖る。握りの表面の節は削って研磨され、端部に特別な加工はない。207の端部は完結している。208は握りの表面が磨かれている。台部に紐かけはないが欠損しているのかもしれない。209は風化してひどく歪んでいる。上の紐かけはある。210は台部の半分が欠損しているが、握りは完全な長さで残っている。握りは真っ直ぐに伸び、表面は磨かれている。211はほぼ完形。上の紐かけには加工時の刃物痕と緊縛痕のような圧痕がある。212は握りの一部が接合不可のため長さの測定が出来ない。しかし乾燥して収縮しているがほぼ完形に近いものと思われる。上の紐かけはつくられてはいるが引っかかるほど突出していない。装着面の下端部はかなり細くなっている。213もほぼ完形。台部も下端部が薄く平坦に削り込まれている。握りは太く、途中大きく湾曲している。214も完形品。上・下の紐かけがつくれられていない。215は握りが一部接合不可のため長さは不明確。上の紐かけの突起が小さくはっきりしない。装着面は土圧のためかやや歪んでいる。他2点はいずれも装着部の破片だが紐かけ部分があることから鍼の柄とした。

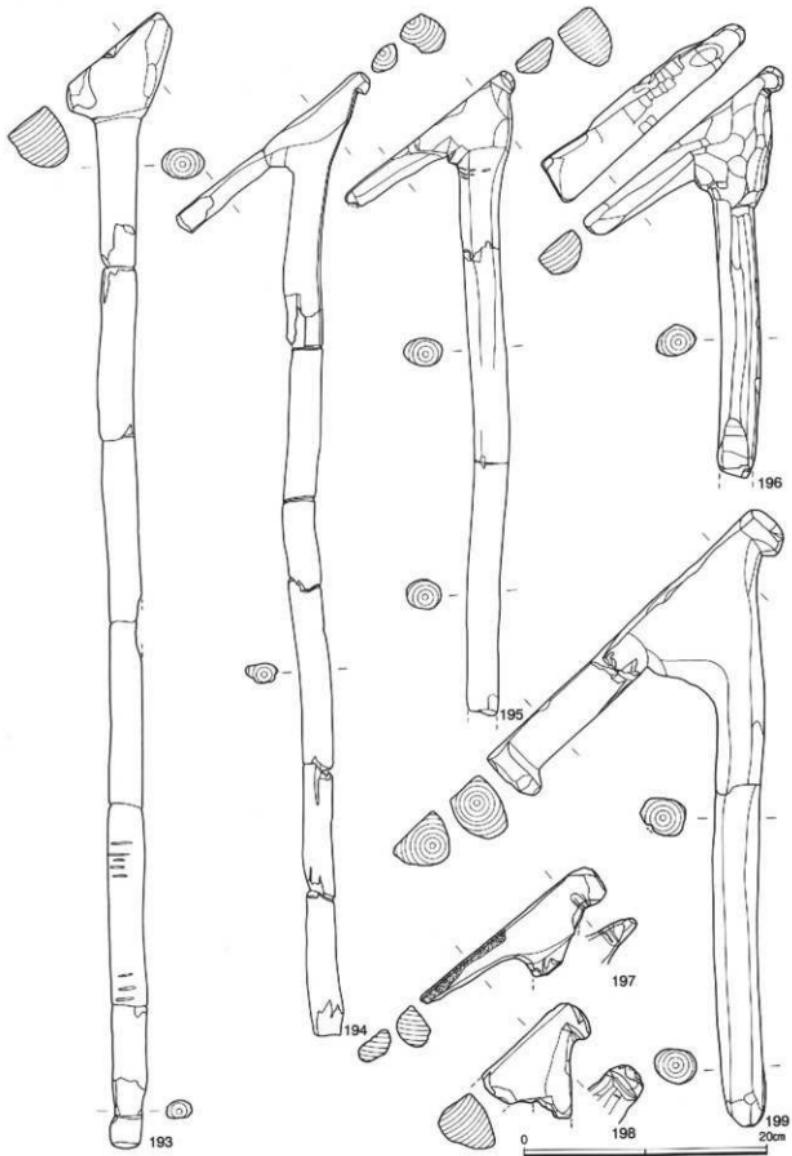
平成2年度の調査でも曲柄の破片が1点出土している(註10)。握りの付け根部分だが、欠損が激しく原形を留めない。

註9 直柄平鍼の項、または第12表参照。

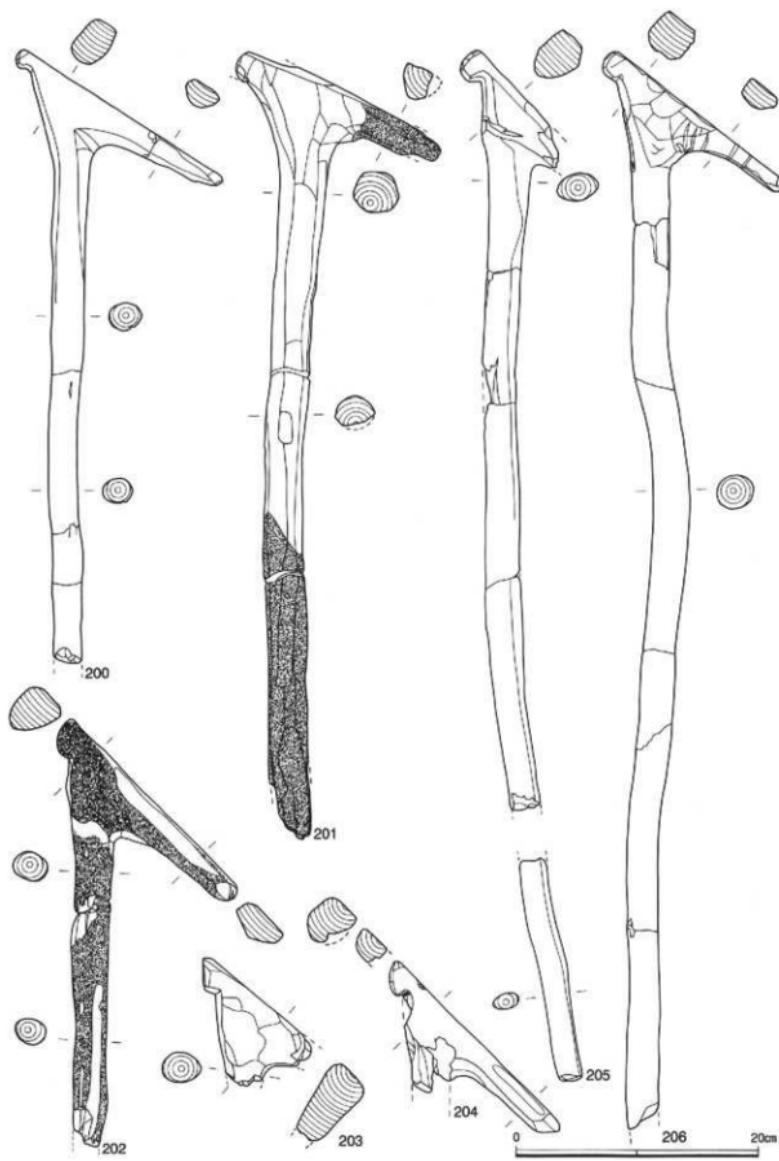
註10 註7に同じ。中山正典他「角江遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991.3

c'柄未製品

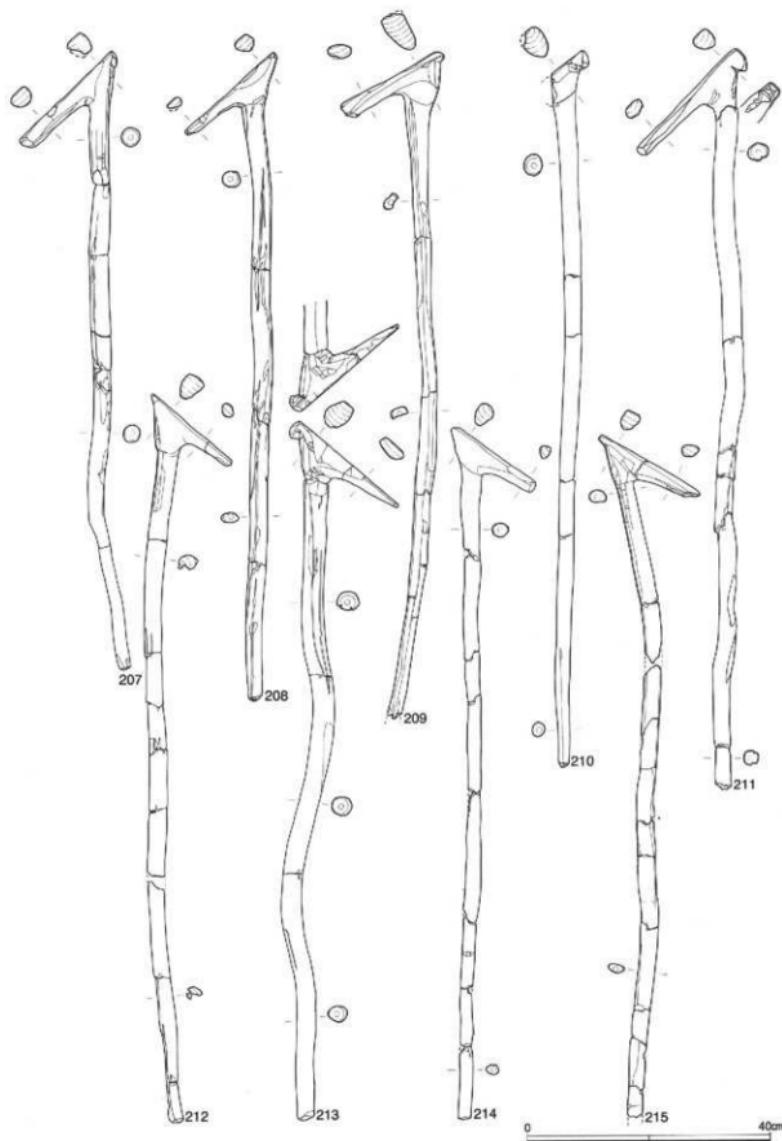
第42・43図216~236、他3点を含む計24点は弥生時代中期に属する曲柄未製品である。すべて自然流路(SR01)の包含層中から出土している。使われている木材はクヌギ節が41.7%、サカキが37.5%、そ



第39図 農具26（曲柄2）



第40図 農具27 (曲柄3)



第41図 農具28（曲柄4）

の他ユズリハ属、エノキ属、タイミンタチバナ、スダジイも見られる。クヌギ節は工具の柄に使われる場合が多く、前述したように工具の柄の未製品も含まれている可能性がある。曲柄歎の柄の材は「サカキ」、工具の柄の材には「クヌギ節」という選択の傾向があると言えようか。着柄角度は43.5°～70°で、平均60.37°である。216は表面にまだ樹皮が付いている。台部の上端面と下端面は斜めに切り落とされている。217の装着面は平らに加工されている。握りの端部も切断された痕がある。218・219は接合点はないが同一個体である。219も上端面と下端面が切削され、装着面も平らに加工されている。また側面には大きな刃物痕が残っている。220・221はほとんど自然木のままで所々樹皮も残っている。222も握りに樹皮が付着し装着部も丸太のままだが台部の上端面は切り落とされている。223・225は台部のみだが加工が進んでいる。224は完成品には見られないような形状になっている。台部や握りが太いことから未製品に入れたが工具の柄の可能性もある。226・227は全面に加工痕がある。227は握りの途中で折損し装着面も削面のままである。228の握りは断面が梢円形になっている。229は樹種の同定が不可能だった。230も自然木に近い。231・232は台部がかなり細身に加工されている。233～235はほぼ全面に樹皮が付着している。233は台部が丸木のままだが上・下端面が切り落とされている。234・235の装着面は削面のままである。しかし233と同じように端面が加工されている。236の装着面は平らに加工されている。側面にも刃物痕が残る。

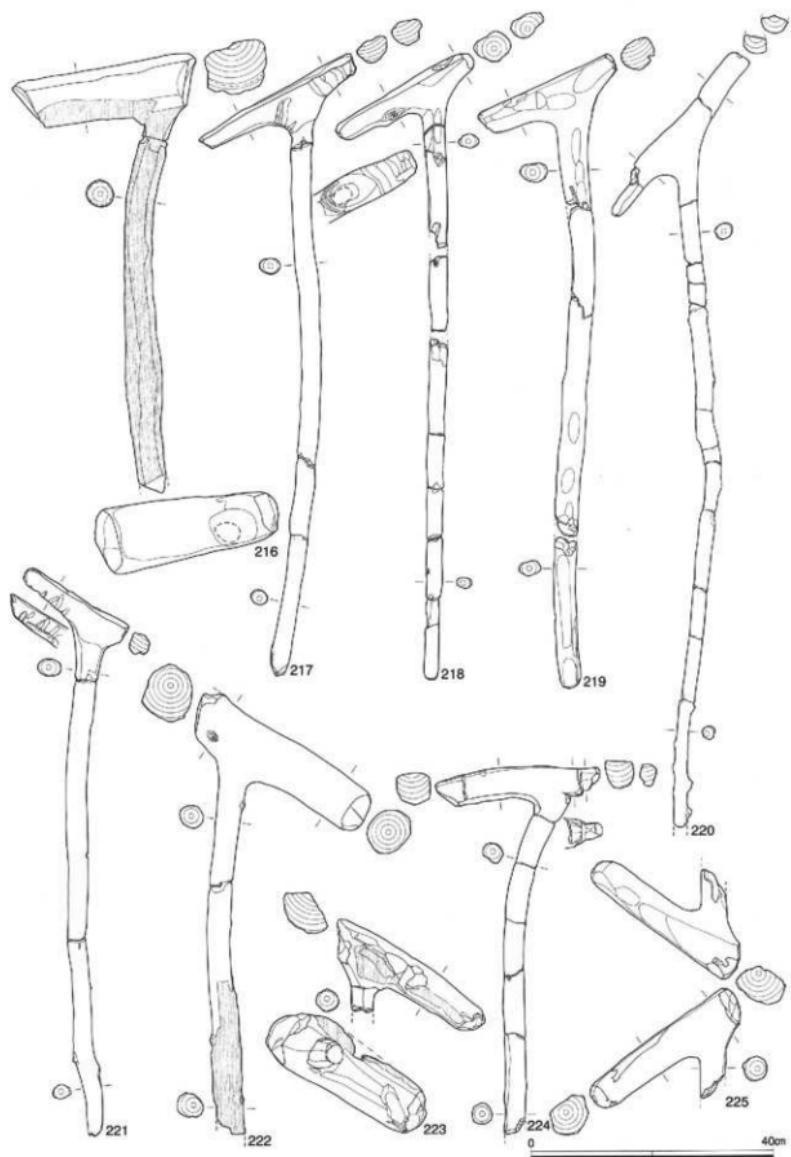
第44図237～244は弥生時代後期に属する曲柄未製品である。242は土坑（2SF37）から出土している。その他は自然流路の包含層より出土した。樹種はサカキのほかクヌギ節、ユズリハ属がある。着柄角度は42°～72°と幅広く、平均すると59.83°となる。237は全体に歪みが激しく押しつぶされたようになっている。装着面は平坦に加工され、わずかに残っている握りは磨かれている。238の握りも磨かれ、付け根は0.2cmほど一段高くなっている。台部の欠損部分近くには緊縛痕らしき圧痕がある。239は欠損風化が著しく進んでいる。240の装着面も平坦に加工されている。237～240には上の紐かけがつくり出された痕がない。241の装着面は平坦で台部にも加工痕がある。握りは途中折れているが先端部は完結している。242は風化して加工痕が見えない。243の表面は自然面で、台部の上端面は周囲から切り込まれ中心は折り取られたようになっている（図版30）。244は全体に炭化している。台部は丸太のままだが上・下端面は切断した痕跡が明瞭に残っている。

d 錪

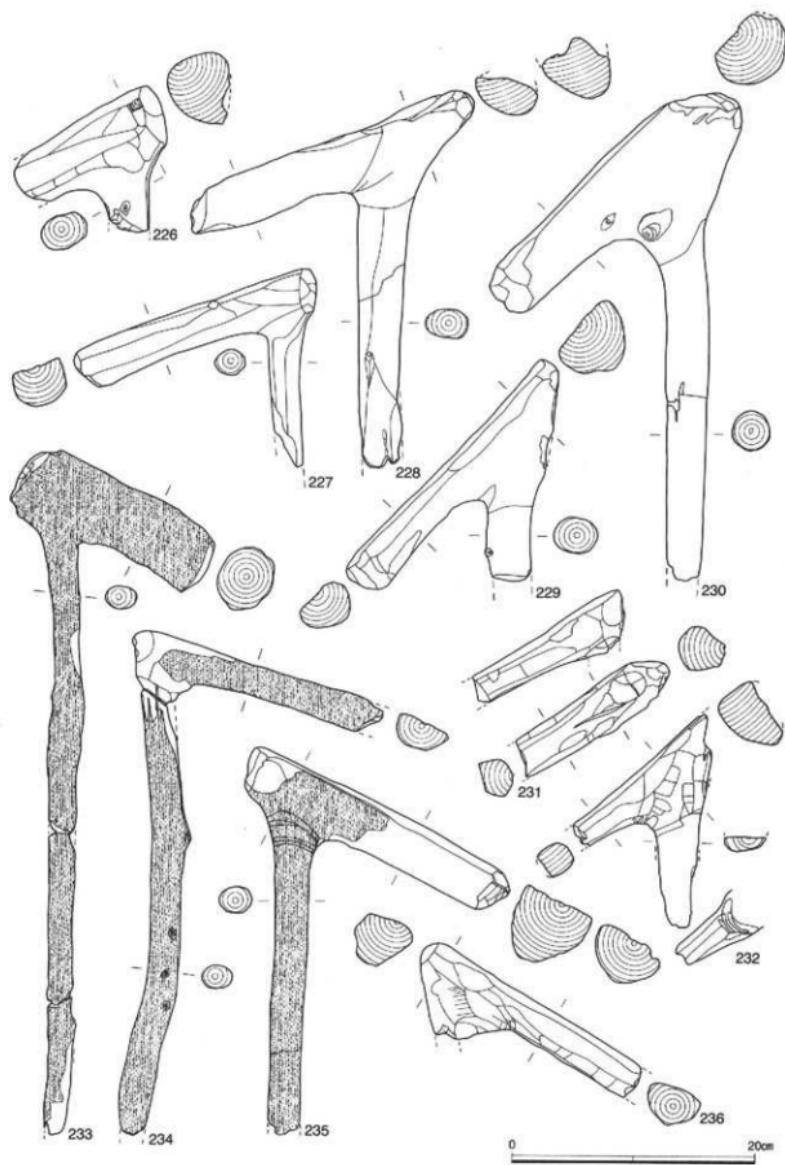
第45図にまとめたものは錐または錐柄と思われるものである。全て自然流路（SR01）から出土している。

245～248は弥生時代中期に属する。245・246は両方とも樹種はイヌマキで、つくりや形態もよく似ている。いずれも直径3cm強の丸木を使用し、表面は磨かれ、先端からまん中付近まで縦に亀裂が入っている。上端部は一見、有頭状になっているが右面側と左面側からしか削られていない。下端部は245は右面側しか削られておらず、ちょうど右手で握った時に引っかかる。246は全周削られ有頭状になっている。上部の亀裂に別材を挟み込んで緊縛されたものと考えられる。しかし器面に压痕や緊縛痕はみられない。247・248は木錐と思われる。両方ともクヌギ節で枝分かれした部分を使っている。曲柄に似ているが頭部が板状に仕上げられ、その先端は尖っている。柄は基部まで残っているが基部に突起状の加工はされていない。柄の太さは2.8cm前後にまで削られ磨いて仕上げてある。247は刃部の先端が欠損しているが、刃縁は10cmほどあったものと思われる。最大長は37.2cm、柄と刃の角度は鈍角になる。248はほぼ完形に近い。最大長は48.6cm。柄の下半部は炭化している。刃部は背が面をつくり出しているのに対し刃縁は両面から削られ刃を付けている（図版32）。刃縁と柄の角度はほぼ直角になる。

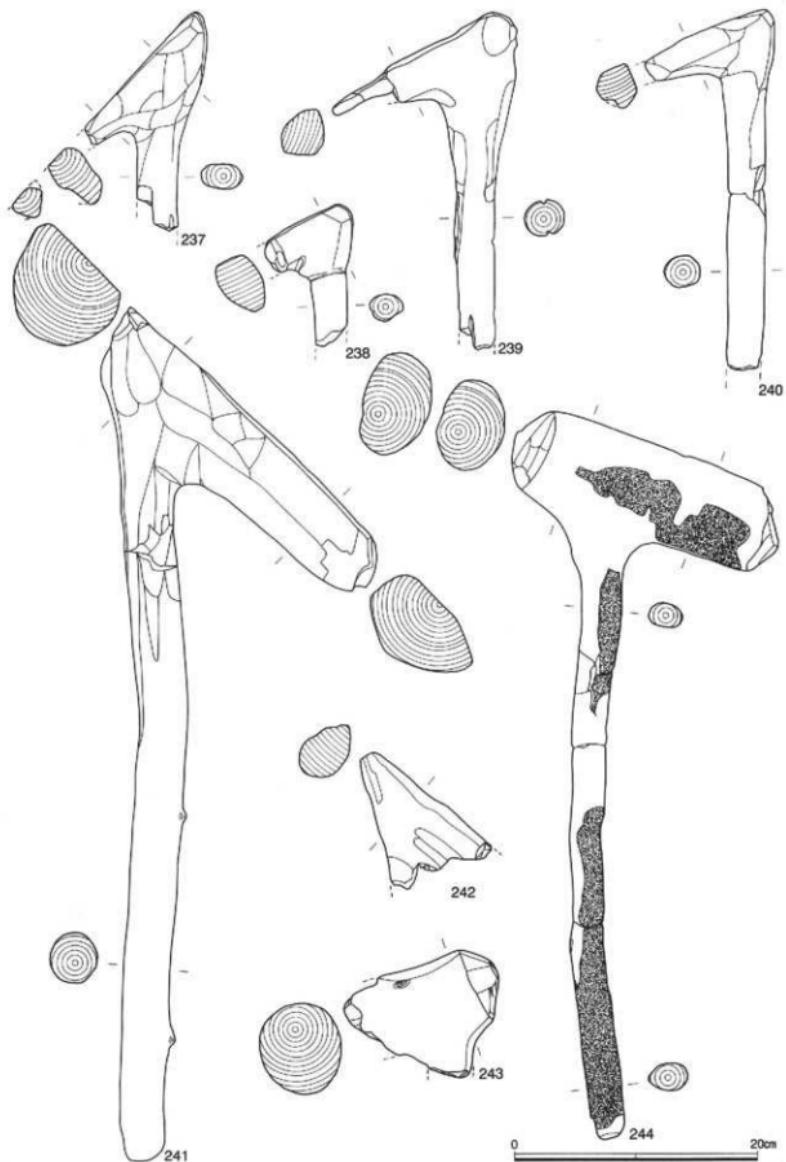
249は後期に属する。イヌガヤ材。ほぼ完形の錐柄で遺跡内の木製品のなかでは最も残存度が良く逸品



第42図 農具29（曲柄未製品1）



第43図 農具30（曲柄未製品2）



第44図 農具31（曲柄未製品3）

と言える。装着孔の方向や手前側に反っていることから右利き用の鎌と思われる。器面には加工痕が顯著に見られるが仕上げに表面を磨いてある。装着孔は下面側は4.0×1.3cm、上面側は3.3cmとやや狭くなっている。孔の内部は0.7~0.8cm幅の刃物で加工されている。左側面側の刃部装着位置には四角い窓のような孔が切り込まれていたと思われる。はめ込まれた刃の材質は装着孔から判断することは難しい。

e 鎌

第46図に掲載した5点は鎌（註11）と判断した。全て自然流路（SR01）の包含層中から出土している。第Ⅰ層から出土した弥生時代後期のものが1点、第Ⅲ~Ⅳ層から出土した弥生時代中期のものが3点ある。樹種は251~253はクリ材で板目、254はエノキ属、255はクスノキで芯持ち材である。樹種を見る限り特定されてはいない。いずれもほぼ完形に近い形状で出土している。最大長が約20cm前後の製品が多い。鎌の形態の特徴は厚みを持った磨り板とやはり厚みのある長方形の把手が付くことである。250~254はいずれも磨り板上面は平坦で、後面が丸みを持った曲面状になっている。251~254には各々1ヶ所把手孔がある。把手孔は方形で左右両側面側から穿孔されている。この他250・255などは舟型隆起を持つ鎌の未製品と間違えやすい。最大の相違点は鍔・鋒などの農具は必ず柾目材を用いるのに対し、鎌は芯持ち又は板目材を使用することである。のことから鍔・鋒などと区別している。以下、個別に解説する。

250は磨り面の欠損風化が著しい。把手は梢円形状になっている。木取りは板目。251は磨り板上面は平坦で磨り板の後面は前後に反っている。木取りは板目で把手上面側が木表。252はほぼ完形品で、磨り板が最も厚く磨り板の後面はかなり使い込まれたように磨滅している。木取りは板目。253は他に比べてやや小型だが磨り板が曲面状に反る特徴を持っている。芯持ち材。254もこれまでと同じ特徴を持った鎌である。把手にはやや粗雑にあけられた方形の把手孔がある。この把手孔の上部に二筋の圧痕が見られる。繩紐状のもので緊縛されていたと思われる。木取りは板目で把手上面側が木表。255は当初、鍔の未製品と考えていたが木の芯材部分であることから農具から外した。磨り板後面がすり減っていないことから鎌の未製品とも考えられる。

平成2年度の調査でも把手孔の無い細身の鎌が1点出土している（註12）。

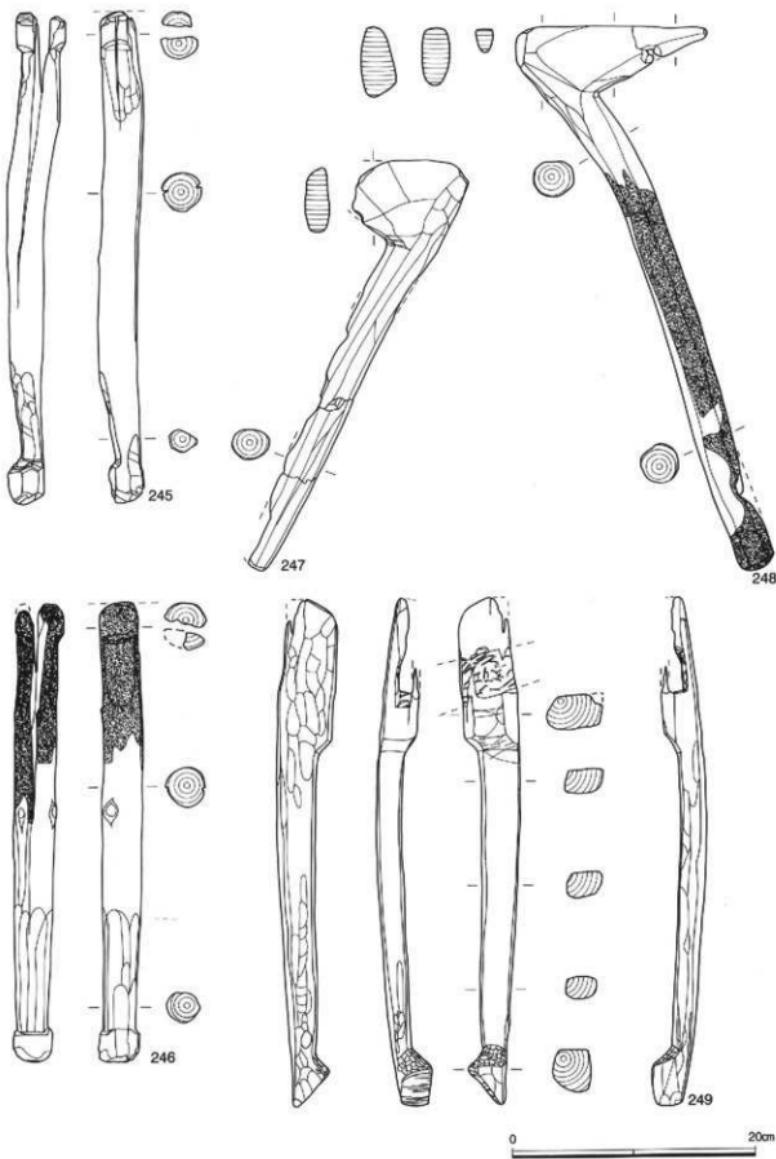
註11 鎌は『木器集成図録 近畿原始編』の掲載方法にならない、「農具」の項目に掲載した。また各部名稱もこれにならっている。しかし図面上で前後の区別はしていない。

註12 註7に同じ。中山正典他『角江遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991.3

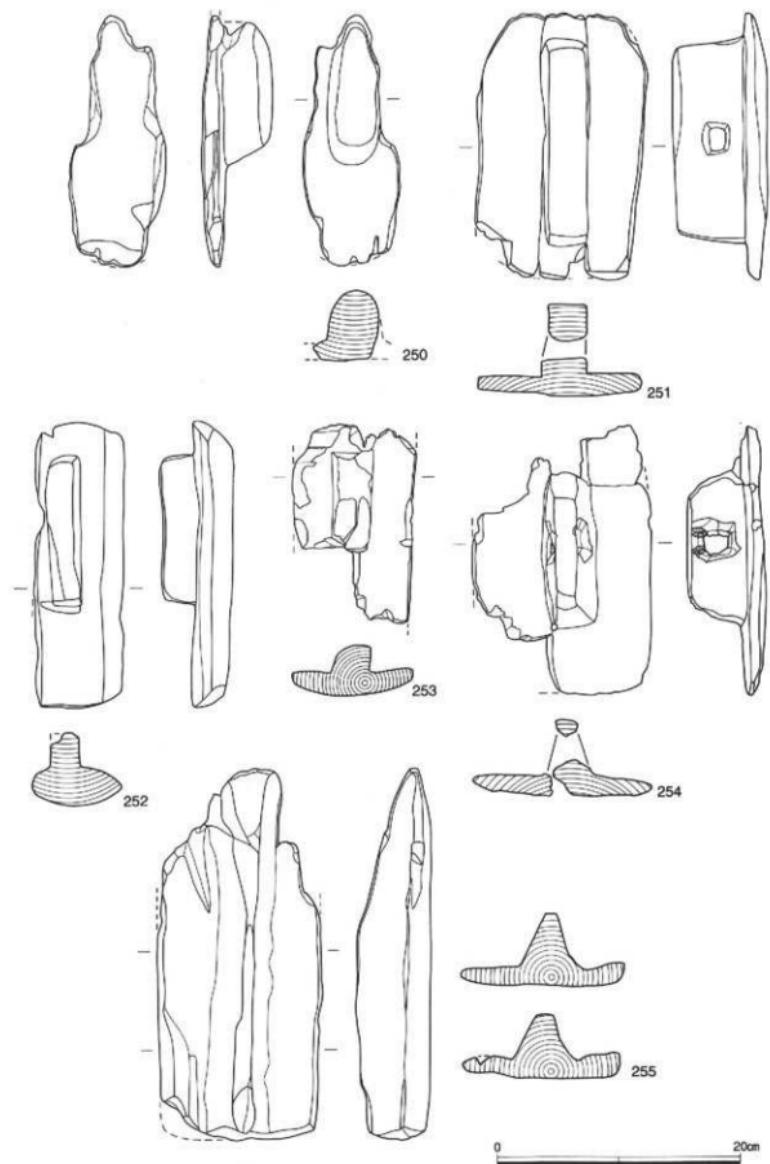
f 白

白は大型臼が2点、小型臼が10点ある。大型臼はいずれも自然流路（SR01）の第Ⅲ層~第V層より出土したもので弥生時代中期に属する。樹種はクスノキの芯持ち材。小型臼は弥生時代後期が1点、他は全て弥生時代中期に属する。樹種はタブノキが1点、クリが9点と、クリが多用されている。大型臼についての出土状況等の詳細は平成4年度の発掘調査概報（註13）、平成5年度の発掘調査概報（註14）、及び遺構編（註15）に掲載されている。

第47図256は平成4年度の調査で発見されたものであり、出土状況は自然流路（SR01）の北岸に上下を逆にした倒立状態で、底面は第V層に密着していた（図版34）。この出土状況から256は弥生中期後半の時期の所産と考えられる。直径がおよそ65cmを超える丸太を縦木取りし、内面を削り貫いてある。最大直径61.1cm、底径51.8cm、高さ54.4cmで、径は上面側に向かってやや広がりを持ち、側面方向から見ると逆台形を呈する。中央の芯材部分は腐食のため抜け落ちている。上面から見ると縁を4~5cmほど



第45図 農具32（鎌・鎌柄）



第46図 農具33（銅）

残して内側を掘り鉢状に削り込んでいる。外側は八方にスカシを彫り込み、さらに各スカシ穴間も貫通させ、残りの間の部分を断面が五角形を呈する柱状に加工してある。スカシは側面から見た平面形は長橢円形、縦方向の断面は三角形で、上面は浅く下面は奥深くまで削り込まれている。また高さ約18~20cmのスカシ穴内壁には明瞭な加工痕がほぼ全周している。スカシは装飾的な意味合いのほか白本体の軽量化をはかるためのものと思われる。スカシ穴の下方には炭化した痕が見られる。内面・外面とも全体的に風化や摩滅が激しいため加工痕は見られない。

第48図257は平成5年度に7区の調査で発見された白である。調査区の東端、自然流路の第III層下部付近に横倒しの状態で出土した(図版34)。出土層位から弥生時代中期後半と考えられる。土圧のためか押しつぶされたような状態で、本体の約半分が欠損していた。256よりもやや小型ではあるが同型の大型白で、外側に橢円形のスカシが八方に入っていたと思われる。残存する径は54.2cm、高さは56.0cmを測る。やはり中央の芯材部分が抜け落ちている。内面側に一部炭化跡がある。側面に残るスカシ穴は4ヶ所あり、256と同様の加工がなされている。

小型白は第49図にまとめた。258~267は木取りと形態の特徴から小型白とした。木取りは267を除いてすべて輪切りにした状態の芯持ち材である。形状から見れば容器の未製品ともとれるが、容器の場合、木取りは継木取りもしくは横木取り柾目・板目であり(註16)、芯材部分を使わないことから区別できる。直径は10~19.8cm、高さは7.9~12.7cmで、側面から見ると逆台形で底の厚い掘り鉢形を呈する。大概のものは側面が自然面のままであるが、263・264などのように側面を削って整形しているものもある。

258は腐蝕のため芯材部分が抜け落ちている。内側面は内湾している。口縁部分の残存状態が悪く正確な高さは分からない。底部は丸底状になっている。259も258と同じ特徴を持っている。内側面は使い込まれたためか表面が光沢を持っている。260も芯材部分にクラックが入っている。全体に風化が著しく加工痕などはっきりしない。261はタブノキ材で一番小型の白である。上面は内湾しているが風化が激しい。262は上面が浅く窪んでいる程度で芯材部分にクラックがある。一部火を受け炭化している。底は丸底である。263・264はサイズが異なるが全く同じつくりをしている。側面の加工痕は底部から口縁部方向に削られている。上面は浅く窪んでいる程度である。底面は膨らんだ丸底である。265は1/4程度残存している。復元直径は約12cmになる。266は1/3程度残存している。復元直径は13cmほどになる。267は欠損部分が多く原形の復元が難しい。上面はかなり深く内湾し、底は丸底になっている。木取りは芯持ちではないが形状の特徴から小型白に含めた。

註13 内藤朝雄・塚本裕巳他『角江遺跡 平成4年度発掘調査概報』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
1993.3.31

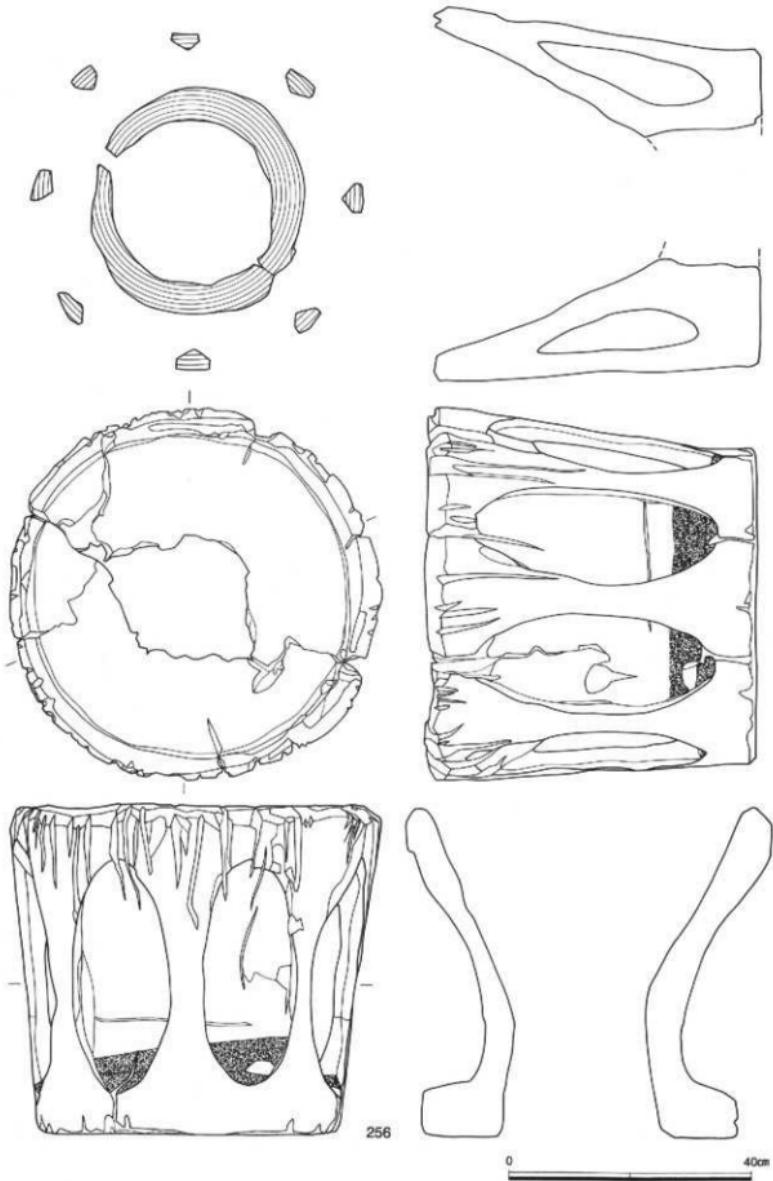
註14 塚本裕巳・中嶋郁夫『角江遺跡 平成5年度発掘調査概報』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
1994.3.31

註15 佐野五十三・中嶋郁夫他『角江遺跡II(遺構編)』1996.3.31

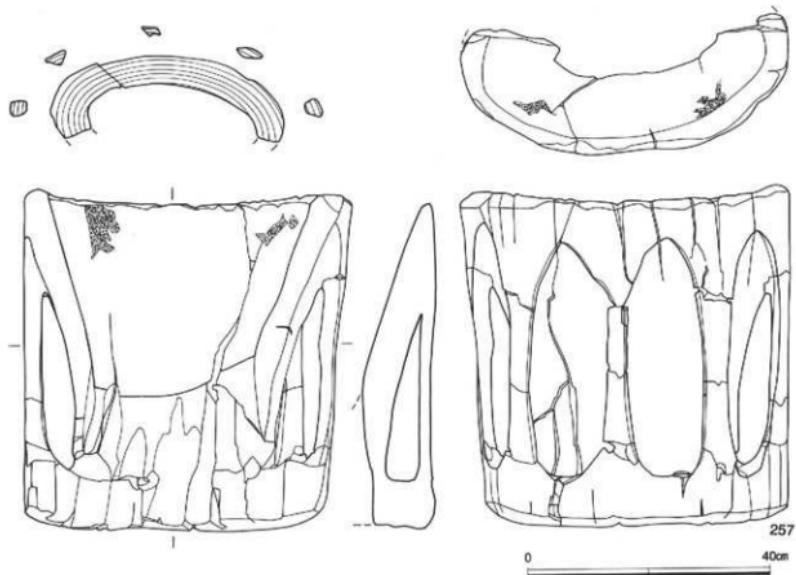
註16 I 容器の項目参照。

g 横井

横井は第50図にまとめた16点と他7点の合計23点がある。8層下部水田の畦畔(1SK02)で出土した277を除き、ほとんどが自然流路(SR01)の包含層から出土している。268~273・283は弥生時代中期、274~281・他5点は弥生時代後期に属する。282と他2点は所属時期が不明。樹種はクヌギ節・コナラ節が中心で、次いでアカガシ亜属、その他サカキ、ヤブツバキ、ケヤキ、シャンボなどがある。本遺跡



第47図 農具34(曰1)

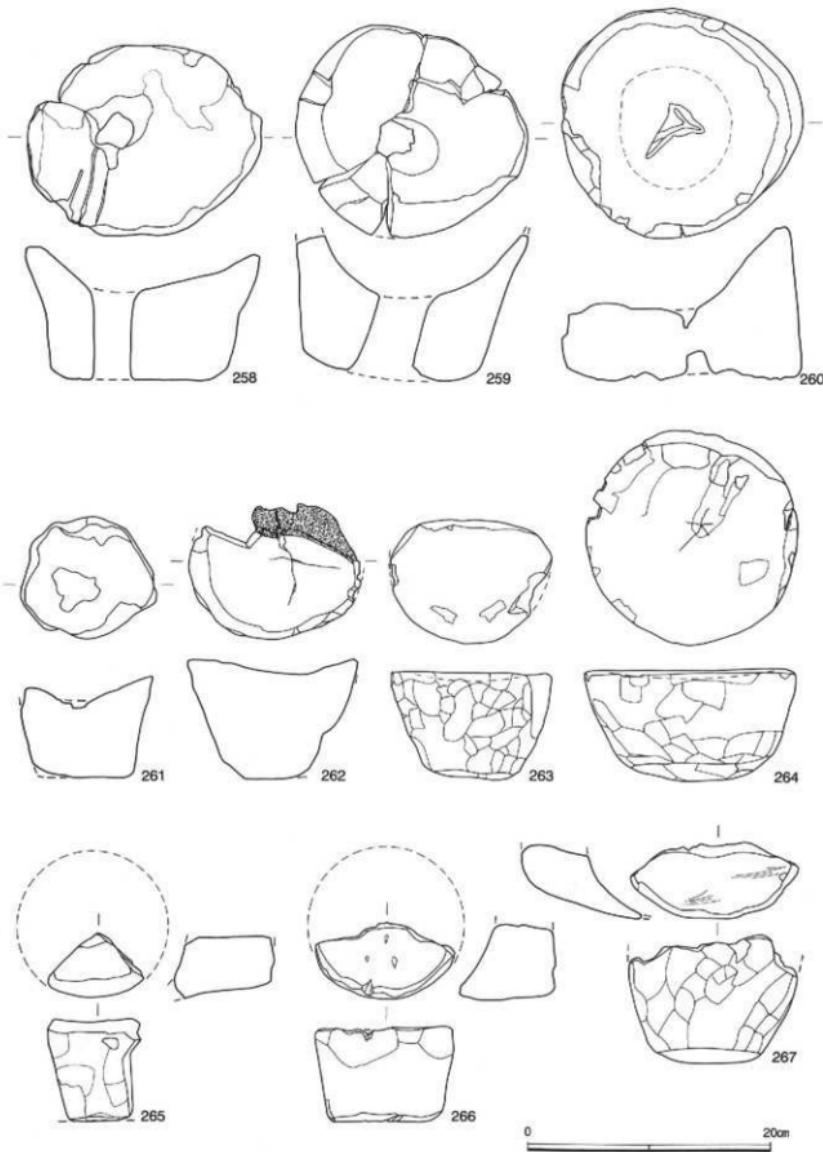


第48図 農具35(臼2)

内で出土した堅杵はほとんどが完成品であり、未製品と思われる資料は278の1点しかない。堅杵の形態の特徴では、搗き部から握部へは屈曲していく。特に目立った装飾のものは見られないが269・279には搗き部と握部の境に突帯のようなものが削り出されている。また握部には算盤玉状の節帶がある。節帶には二節式と短節式とあるがここで見られる節帶は短節式である。弥生時代の中・後期を通じてこの同じ形態の堅杵が使われていたものと考えられる。また木取りについては中期の堅杵が削材を使っているのに対し、後期の堅杵は芯持ち材を使ってつくられているものが多い。

268は芯持ち材の堅杵の搗き部の破片である。269は握部の破片で、節帶は短節式で搗き部との境に突帯を持つものであろう。実物では下の突帯のほうが明瞭に削り出されている(図版36)のに対し上の突帯はぼんやりとつくり出していることや、同時期の堅杵の節帶の形状からも短節式の可能性がある。表面は滑らかで一部炭化している。270も節帶もしくは突帯部分の破片と思われる。271は搗き部の片側部分で削材から加工されている。握部との境から8cmほど上に0.4cmほどの段差がついているが、それも全体ではなく1/2周程度である。搗き部端は使い込まれたため丸く磨滅している。272はやや細身の搗き部で、断面の形状は隅丸の方形に近い。各面には無数の線状の刃物痕が見られる。273は全体に風化がひどく進み土圧のためか潰れている。搗き部が片方欠損している。搗き部端は尖っている。283は全長が147.1cmあり遺跡内の堅杵のなかでは最大である。クヌギ節の削材から加工されている。搗き部の表面には加工痕がある。裏面は半分ほど欠損しているが上下の搗き部端は残っている。握部から搗き部へ徐々に太くなり最大直径は搗き部端にある。端面は平坦である。

274はまだ全面に加工時の痕跡が残っている。つくりの荒さから未製品の可能性もある。275は全体に



第49図 農具36（小型臼）

押し潰されたようになっている。接合点はないが同一個体である。掲き部端は丸くなっている。276も握部で欠損しているが他の部分の残りは良い。277は水田畦畔から出土した堅杵。割材から加工され全体に細身で握部の突起もない。風化が激しいためもろくなっている。278は下方の掲き部を欠く。芯持ち材が使われ、表面には一部樹皮も付いている。形状がほぼ完成されているが樹皮が付いていることから未製品と考えたほうがよいだろう。279は完形品。残存状態が非常に良い。掲き部の形状が上と下とで若干異なる。上の掲き部は短い円柱形を呈するが、下の掲き部は端部に行くほど径が大きくなり長さもある。上の掲き部が短いのは使い減りのためとも考えられる。また掲き部と握部の境には僅かに段差が付けられている。装飾のためか。280は掲き部端部片。割材を使っている。281も掲き部分の片側。282は出土した地点が不明となってしまっているが、間違いなく弥生時代の堅杵の節節である。

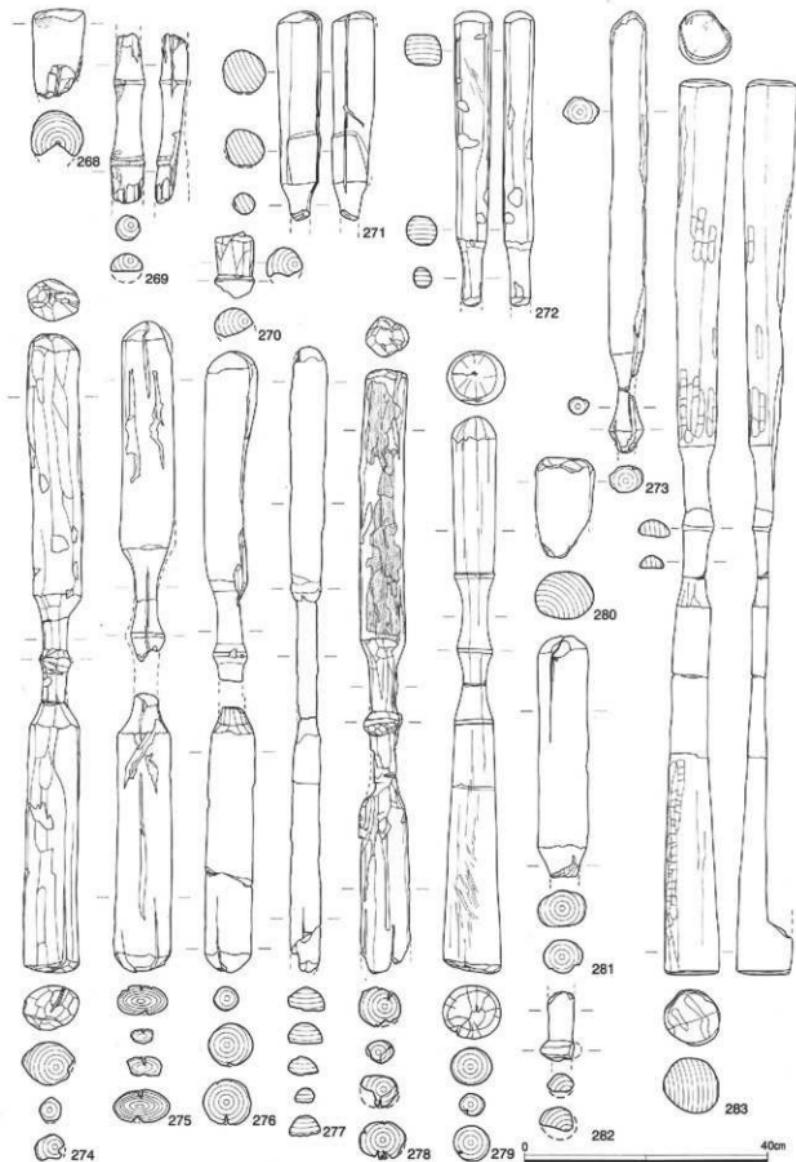
h 横樋

横樋と思われる木製品は5点出土している。第51図にまとめた284～288はいずれも自然流路(SR01)の第III層～第IV層より出土し、出土層位が不明の287以外は弥生時代中期に属する。樹種はクヌギ節やアカガシ亞属、他にサクラもあり、主に芯持ち材が使われている。284はクヌギ節の割材で作られた横樋である。長さは完結していると思われ、端部は丸く磨滅している。握りは身(敲打部)よりもやや細く削られ、径も3～4cmほどの円形である。身は約21cmと長く、使い込まれたため中央部分が8cmほどにわたって窪んでいる。285は握りと身の半分が欠損している。握りの付け根ははっきりとした段になっている。286も芯持ち材を使っている。表面の風化が著しく握りの途中で折損している。身の中央がややへこんでいる。287は最大直径が約9cmと大きい。握りは欠損している。288も欠損している部分が大きく原形を復元できない。握りは一部残っている。

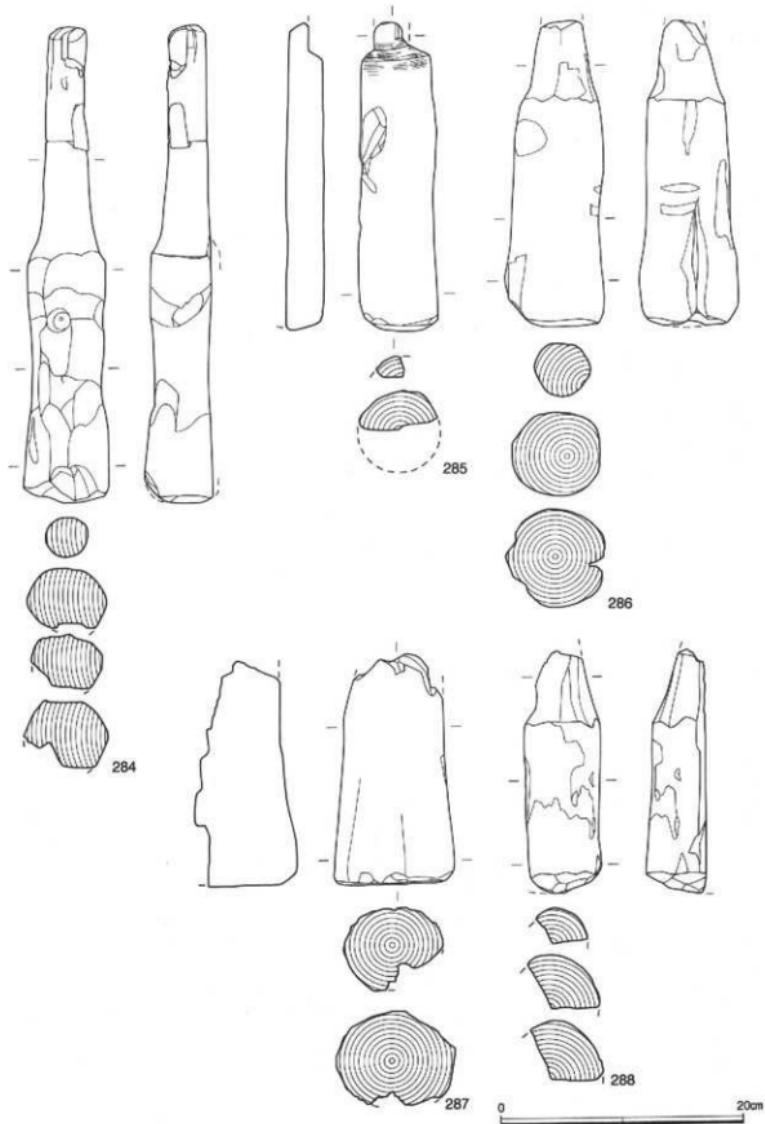
i その他

第52図にまとめた289～293の主要な用途は農具と思われる。しかし類似例がないことや残存度が悪く形状が分からぬものもあるため器種名を付けなかったためその他としてまとめた。289～291は自然流路(SR01)の包含層から出土したもので樹種はアカガシ亞属である。289は上部が細く棒状に削られ、なにかの柄ではないかと思われる。下方に向かって広がるようだが、身の形状が分からぬ。第I層から出土していることから弥生時代後期に属する。290も289と同じような形態をしているが、上下両端が欠損しているため原形は不明。弥生時代中期後半(第III層)。291は後期(第I層)に属する。バチ形を呈し上部は完結している。下部は細く削られ断面は方形になっている。下方は途中で折損している。292は完形品。未製品ではなく完成品と思われる。コナラ節の樹幹から枝分かれした部分を使っている。上部の平坦面は34.7cmの長さがある。上面は特に加工された痕跡はなく剖面のままである。断面形はまん中に膨らみを持ち、まったくの平坦面にしていない。柄(?)は湾曲しており断面は方形から五角形になっている。下端部は先端まで残っていて丸く仕上げてある。表面には加工痕が顕著に残っている。反柄かと思われたが上部が台部とすると34cmを超えて長すぎるため違う用途が考えられる。293は古墳時代の堀り貫き井戸(3SE04)の堀り方内(註17)から出土した。遺構は古墳時代に属するが、堀り方のほうから出土していることやクヌギ節の柾目材であること、及び形態の特徴から弥生時代中期の時期に見られる曲柄平鉗の身の刃部と思われる。上端部は欠損しやや風化している。表面は平坦だが後面は中央に稜線を持ち高くなっている。

註17 遺構についての詳細は『角江遺跡II(遺構編)』に掲載されている。本書では第4節 古墳時代の項目で触れている。



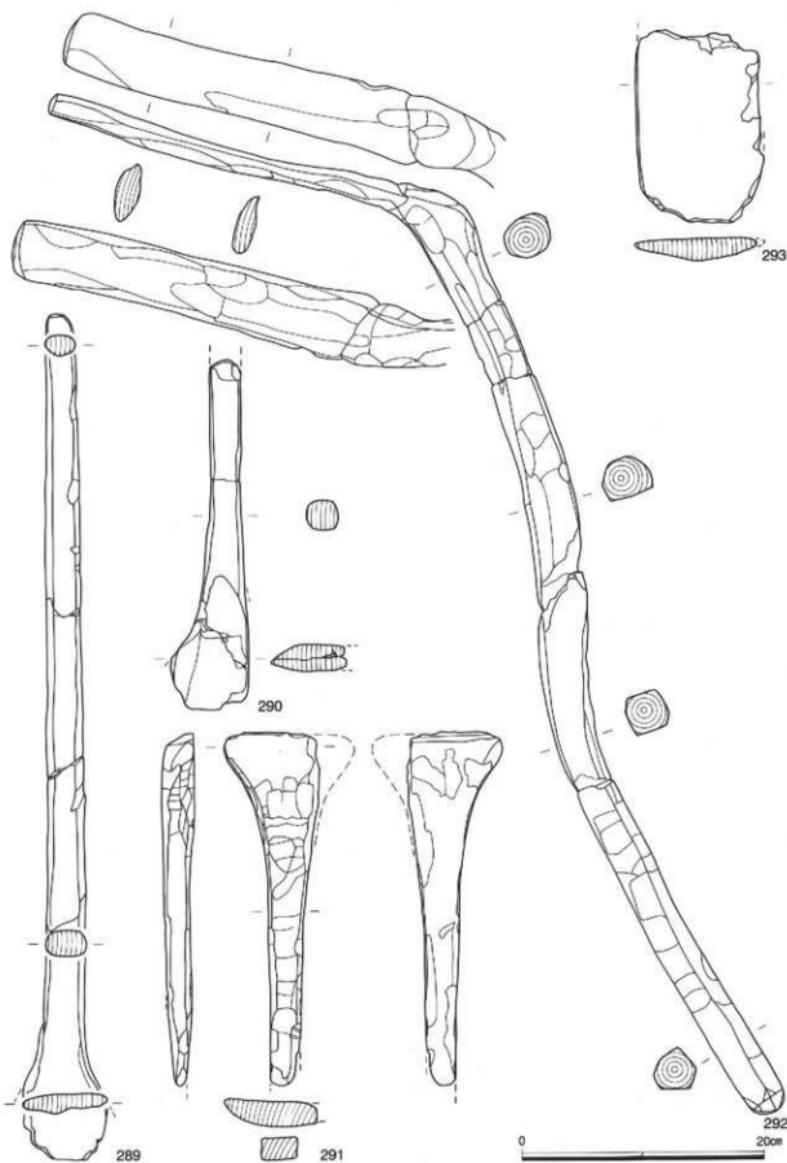
第50図 農具37(竖杆)



第51図 農具38（横柵）

〈主要参考文献〉

- 伊達宗泰・松下 勝「農耕」「三世紀の考古学」中巻 1981.4.15
黒崎 直「くわとすき」「弥生文化の研究 5」雄山閣 1985.10.5
山田昌久「新保遺跡出土木製品・加工材」「新保遺跡 I 〈本文編〉」群馬県教育委員会 1986.3.25
合田茂伸「弥生時代の杵と臼」「網干善教先生華甲記念考古學論集」網干善教先生華甲記念会 1988.9.23
樋上 昇「木製農耕具の地城色とその変遷」「年報 昭和63年度」(財)愛知県埋蔵文化財センター 1989.3
樋上 昇「弥生時代中期における木製農耕具の器種組成について」「岡島遺跡」(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990.3.31
「特集 稲作農耕と弥生文化」「季刊考古学」第37号 雄山閣 1991.11.1
上原真人他「木器集成図録 近畿原始篇」奈良国立文化財研究所 1993.3.30
「特集 先史時代の木工文化」「季刊考古学」第47号 雄山閣 1994.5.1
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念シンポジウム 第4回東日本埋蔵文化財研究会
第2回東海考古学フォーラム「古代における農具の変遷—稻作技術史を農具から見る—」(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994.11.26
黒崎 直「農耕具研究の諸課題」「展望考古学」考古学研究会 1995.6.30



第52図 農具39（その他農具）

B 工具

工具の柄も農具の柄と同様に「直柄」と「曲柄」に分けられる。周知のように「直柄」は伐採斧（大型蛤刃石斧）を装着する柄であり、「曲柄」は扁平片刃石斧や柱状片刃石斧等の加工斧を装着する柄と考えられている。第53図から第56図に掲載した工具柄のうち294～304・306～308、他1点の計15点は弥生時代中期に属する。この時期に属する工具柄はすべて自然流路（SR01）の第II～IV層より出土している。続く309～311は弥生時代後期に属する。309・310は自然流路（SR01）第I層、311は8層下部水田より出土した。「直柄」に使われた木材はクヌギ節が6点、アカガシ亜属が2点あった。また「曲柄」ではクヌギ節が9点、アカガシ亜属が2点であった。アカガシ亜属を主体に使う鎌・鋤などに比べ、工具柄に使われる材は圧倒的にクヌギが多いことが分かる。

a 伐採斧の柄（直柄）

直柄は製品が3点、未製品が5点ある。製品か未製品であるかの判断基準は石斧が装着される孔の有無で分けています。すべて弥生時代中期に属する。

製品は294～296で頭部上面にのみ段を持つ形態である。いずれも破損している。294は握りの途中で折損し装着孔も側面が一部壊れている。装着孔は最大約6.0×5.2cm、装着されていた石斧の断面は厚みのある楕円形と推される。斧柄幅も装着孔付近にふくらみを持つ。頭部先端は斜めに切断されているが、これはミカン割り材から必要な長さに切り落とされた時の痕跡がそのまま残っているものと思われる。295も断片だが直柄の一部と思われる。296は頭部の先端と握りが破損している。装着孔は最大7.5×4.0cm、やや幅広の石斧が装着されていたのであろう。破損しているがこれにも頭部上面に段がある。側面には加工時の痕跡が残っている。

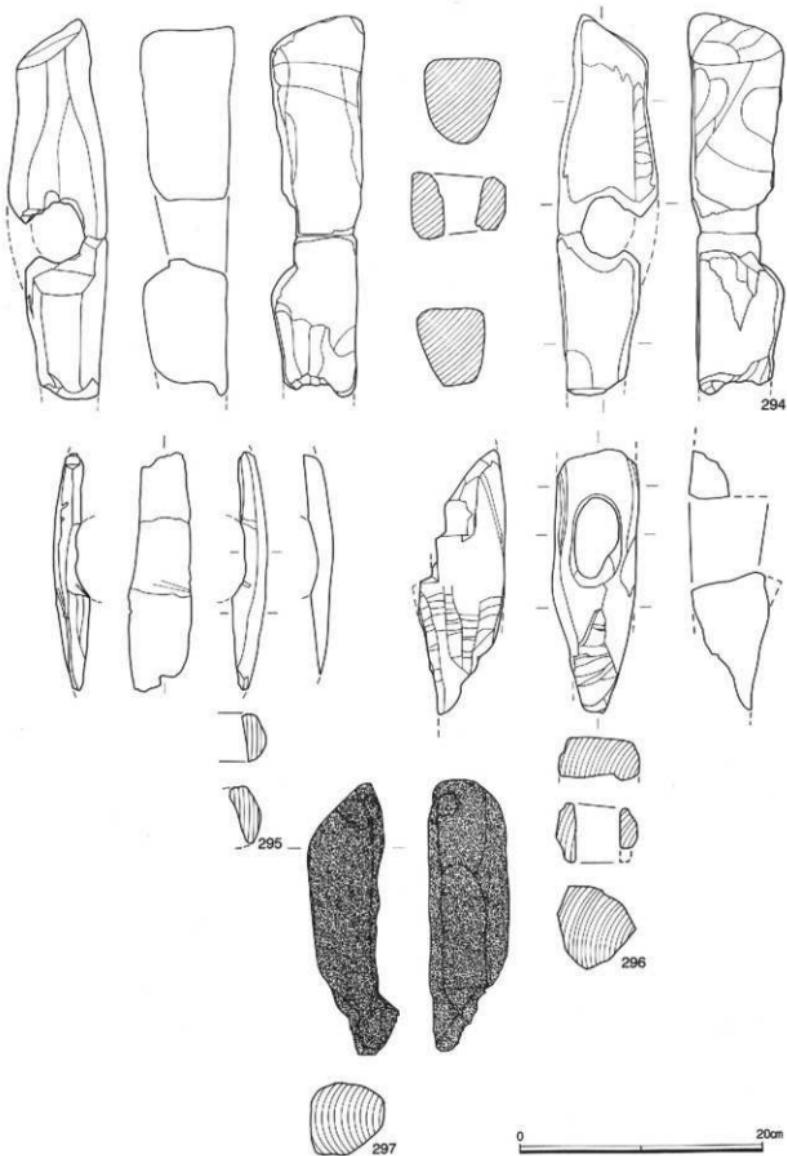
未製品は297～301でやはり頭部上面にのみ段を持つ。逆を言えば段があることによって直柄の未製品と判断できるとも言える。297は全面炭化し握りも破損している。頭部先端が刃先側に斜めに切り落とされているのは294と同じ原因と考えられる。298は全長57.2cmと非常に長い。全面に加工痕が顕著に残り、頭部から握り方向に向かって削られている。握りは頭部に比べて細くなっている。断面形はまだ全体に四角形である。角を落として整形する前の器面調整の段階であろう。しかしこの段階で既に頭部上面に段が削り込まれている。299は器面の加工痕は顕著に残っているがまだ作りが荒く、298よりさらに前の段階の未製品と思われる。角材から切り落とされた時の切断痕が頭部に残っている。頭部上面側には段の切り込みが入っている。また握り方向へ向かって細く削り込んでいる。300は握り先端が少し壊れているがほぼ完成時の長さを留めている未製品と思われる。頭部上面には段が切り込まれ、頭部下面側は平坦に加工されている。301はかなり整形の進んでいる未製品である。頭部は四方に面を残しているのに対し、握りは角を落として丸くしている。握りの途中で折損しているが頭部は完全に残っている。頭部上面の段は深く切り込まれ、下面も目印のためか浅く切り込まれている。

直柄に共通する特徴はミカン割り材から整形されていることと、頭部上面に段を持っていることである。また頭部の先端が厚く頑丈に作られ全体に重量感がある。これは木を切り倒す行為に伴う激しい衝撃に耐えうる構造となっているためであろう。

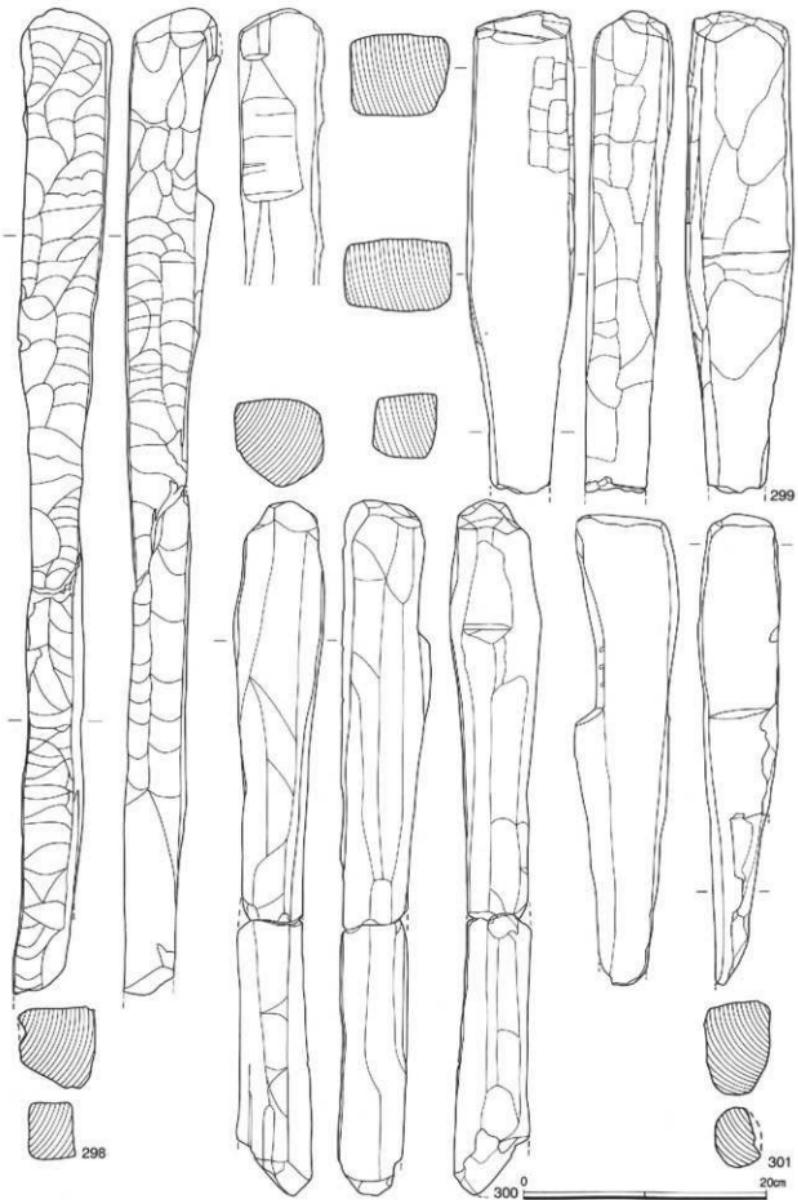
b 加工斧の柄（曲柄）

曲柄は一本式（302～307、310、311）と組み合わせ式（308・309）がある。直柄と同様に斧台のあるものを製品、ないものを未製品としている。着柄角度は60°から最大76°まであり、平均は約67°である。

302の握りは途中で折損している。斧台の装着面は長さ10×幅5cm、斧台後面との段差は1.6cmある。前面には緊縛のための紐かけが7cmほど削り込まれている。303は装着面が約8.1×4.2cm、段差は1.4cmある。前面に紐かけがつくりだされ、石斧を装着したときの緊縛痕（圧痕）がみられる。304は斧台の一部が壊れているが、握り部分がほぼ完全に残っている。握りは全長48.9cm、農耕具の曲柄に比べ



第53図 工具1（直柄・直柄未製品1）



第54図 工具2（直柄未製品2）

て柄が短い。丁寧に削られ先端は研磨されたように丸みを帯びている。握りと斧台の付け根は前面から見るとちょうど舟型隆起のような滴形をしている。斧台の左側面は一部浅く削られている。精巧なつくりではあるが石斧を装着する溝や面が加工されていないことから未製品とも考えられる。305は非常に小型の曲柄だが、斧台が欠損しているため完成品かどうか判断できない。小型のノミ状工具か小型の扁平片刃石斧などの曲柄の可能性もある。306も欠損が著しいが斧台前面に1.7cmの段差が付けられている。307もほぼ完成品に近く、全長は58.4cm。石斧の装着面は約6.6×4.6cm、段差1.3cm。前面には緊縛のための紐かけがつくられている。握りには全面に加工痕が見られる。

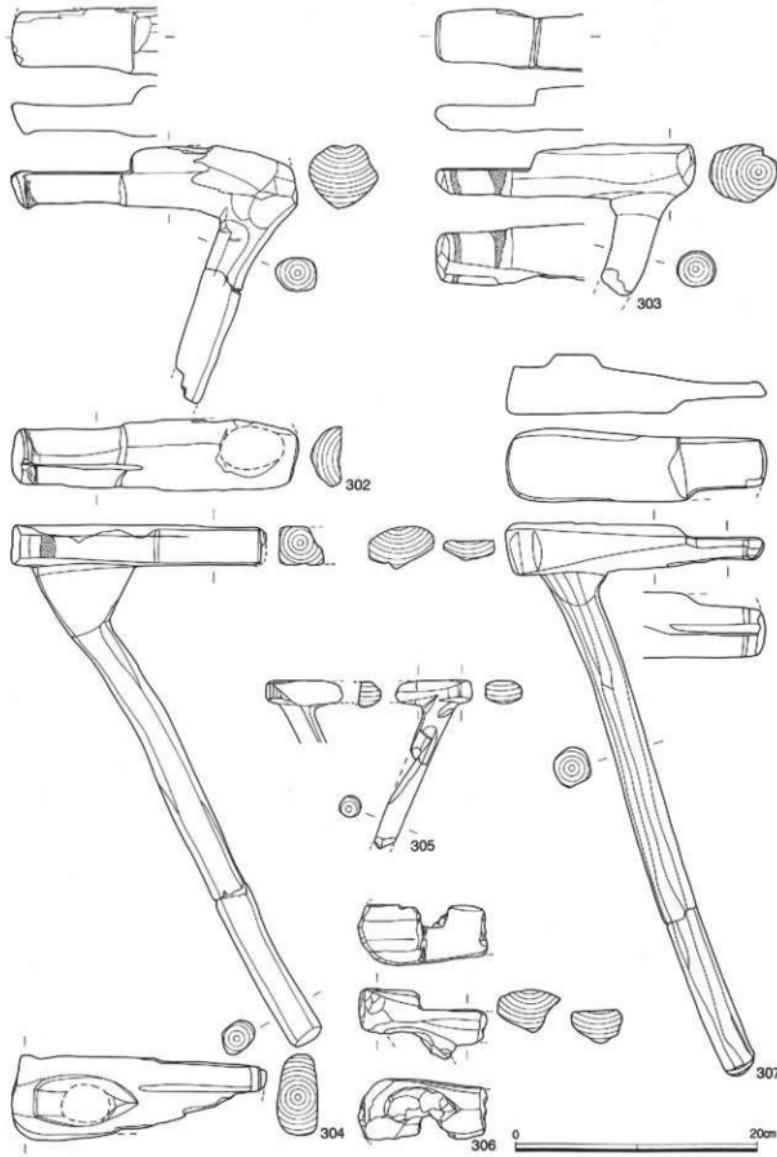
308・309はいずれも組み合わせ式曲柄の斧台と考えられるが、弥生中期と後期では若干つくりが異なるようである。中期に属する308は斧台の形状が方柱状で前面に細かい加工の痕跡がある。柄孔は3.4×3.1cmの円形で内面は綺麗に磨かれている。装着面はやや小さく2.6×3.4cm、段差も1.2cmである。前面に細かい加工痕が残り、前面には紐かけもつくり出されている。一方、後期に属する309は平坦な板状である。柄孔は3.8×2.9cmで隅丸方形に近い。損傷が激しいため正確ではないが装着面は5.2×5.0cm、段差は1.4cmある。

310・311は一本式の曲柄で弥生時代後期に属する。310は全体に炭化しており握りの先端を損失している。装着面は長軸が16.8cmと長く、幅は3.1cmある。また前面には紐かけが削り込まれ長軸に直交する方向の緊縛痕が明瞭に残っている。一見すると柱状片刃石斧の柄と思われるが、装着面の縦横の比率が石斧の長さ×幅の比率とはかなり違うことや、柱状片刃石斧が弥生時代後期まで残る例はほとんど見られないことなどから、加工斧の柄以外の用途の可能性もある。311の斧台と握りには接合点はないが同一個体と思われる。装着面は6.5×4.2cm、段差は2段になっており最大1.4cmある。8層下層水田から出土しているが、水田内には中期の遺物も混入していることからこれも中期に含まれる可能性がある。

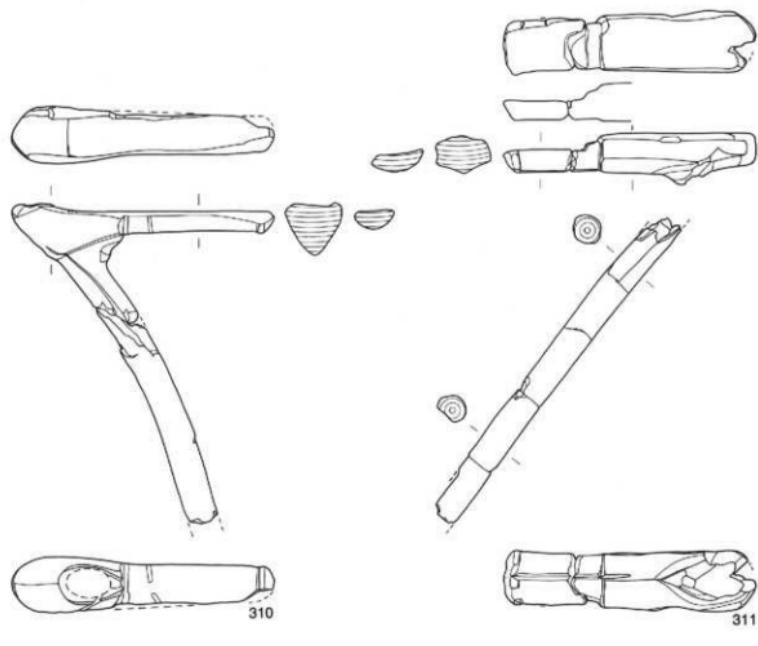
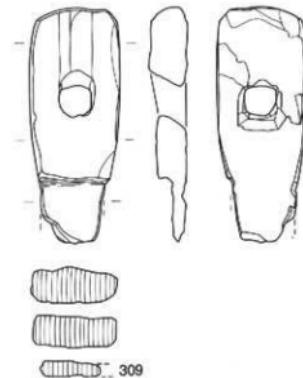
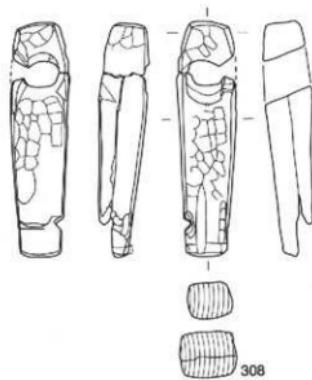
角江遺跡で出土した曲柄と共に通する特徴は、斧台前面に長軸方向に平行した切り込みが入っているものが302、304、307、308、311に見られることである（図版41）。この切り込みは長軸方向の中心よりややずれた位置にあり、6cmから長いものでは約10cmにわたり、その断面はV字状を呈する。同じような痕跡は遊戲具の「轆状琴（435・436）」の裏面にも見られる（図版58・59）。しかし同じ形態の農耕具の曲柄には見られない。工具の曲柄の場合、一段削り込まれた紐かけ部分にあることから、石斧を緊縛するために必要な切り込みとも考えられるが実際の用途は不明である。

角江遺跡では同じ自然流路（SR01）のなかから太型蛤刃石斧が63点、両刃石斧が5点、扁平片刃石斧が27点、柱状片刃石斧が6点（註18）出土している。静岡県内における石製工具の盛行期は弥生時代中期、特に中期後半期であり、後期に入ると一部の工具を除いて石製工具の存在は認められなくなる。これらの原因は鉄製工具の普及によると考えられているが、鉄器化は小型の工具から進み、大型の工具である伐採斧は鉄器化が遅れ後期になても若干残っている。また角江遺跡の伐採斧は比較的まとまった量が出土しているが、加工斧の出土数は扁平片刃石斧に比べ柱状片刃石斧の数が極端に少ない。しかしこれらの傾向は石製工具を持つ県内の他の遺跡でも見られることであり、角江遺跡でも同じ状況であったと言いうことができるであろう。これらの石斧を装着する柄とその未製品が出土していることは、農具と同様に工具の柄も集落内で製作されていたと考えられる。しかし石斧の製品の量に比べて未製品の出土量が非常に少ない。木製工具と石製工具とでは生産活動の場が異なるのであろうか。

註18 勝又直人『角江遺跡II 遺物編3(石器・金属製品)』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996.3.31



第55図 工具3（曲柄1）



第56図 工具 4 (曲柄 2)

C 紡織具

a 緯打具（刀杼）

緯打具または刀杼とも言う。本遺跡では312・313の2点が緯打具と考えられる。いずれも自然流路(SR01)の北縁に堆積していたラミナ層より出土している。出土した地点・層位から弥生時代中期後半のものと考えられる。312はほぼ完形の製品。樹種はサカキ。木取りは不明。その形態はすでに完成されたもので、非常に丁寧なつくりである。表面は緻密で、かなり使い込まれたものか刃部が磨滅している。上縁側に厚く丸みを持った縁を残し、緯糸を打つ下縁の部分は薄く両刃状になっている。また左右両端の縁辺はやや上方に反っている。長軸は65.2cmであることから握る部分を除くと布幅は約45cm内外であろう。313もサカキ材で木取りは板目。片側の端部が欠損している。同材質の破片も伴って出土しており、欠損した側の端部と思われる。312ほど丹念なつくりではなく、上縁側にも縁を持たないが、緯糸を打つ部分は同じくらいの厚みを持ち、両刃状になっている。312ほど典型的な形態の特徴を持っていないが、313も緯打具と思われる。

静岡県内では静岡市登呂遺跡でほぼ同一形態の緯打具が出土している。

b 編み台

編み台と思われる木製品が2点ある。314は自然流路(SR01)第I層から、316は8層上部水田から出土し、いずれも弥生時代後期に属するものと考えられる。314は長さ47.5cm、幅3.2cm、厚さは0.8cm。接合しないが同一個体と思われる破片も何片かある。刻まれた抉りの幅は0.9~1.7cmで、ほぼ2cm間隔で刻み付けられている。風化が著しく細部の整形や原形は不明である。316は片方の端部が残っているが途中で欠損しており全体の長さは不明。上端部に一定間隔で刻みが入っている。残存する長さは45.0cm、幅6.1cm、厚さは1.7cm。刻まれた抉り幅は1.2~1.6cmで、約8~9cm間隔で刻み付けられている。その他、刻み側に片寄った位置に1.1×0.6cmほどの橢円形または方形の孔が2ヶ所ある。また残存している片側の端部には切欠きがある。2点ともスギ材で、316は追い柾目。

各地で出土例のある編み台目盛板は蘿・菰などを編む道具と考えられており、どれも大型のものである。当遺跡で出土した2点は薄く小型であることから機織具の一部ではないかと考えられる。

c 織越具

315は緯糸を通す織越具と思われる。自然流路(SR01)下層より出土したもので、弥生時代中期に属すると思われる。平面形は細長い小判形、断面形は中央に厚みのある紡錘形を呈する。完形品で、長軸は12.0cm、短軸が3.6cm、最大厚は0.9cmある。ヒノキの板目材を使って作られている。中心に内法0.4×0.3cmの方形孔が両面側から穿たれている。図の上下両端には糸をかけたような浅い切り込みが入っている。中央の孔や両端の切り込みに緯糸を巻き付けていたと考えられる。近隣の類例資料では愛知県朝日遺跡で全く同形の木製品が出土している。

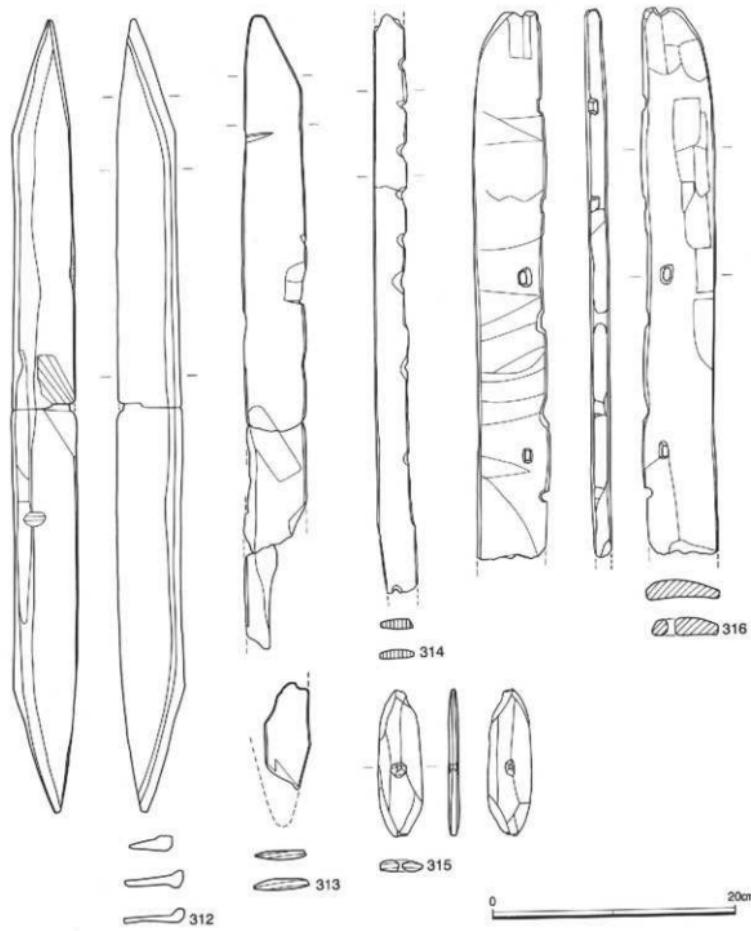
〈主要参考文献〉

角山幸洋「織物」「三世紀の考古学」中巻 1981.4.15

竹内晶子「織機」「弥生文化の研究5 道具と技術I」雄山閣出版 1985.10.5

竹内晶子 UP考古学選書9「弥生の布を織る」東京大学出版会 1989.5.25

(財)愛知県埋蔵文化財センター 「朝日遺跡III」 1992.3.31



第57図 紡織具（織機・編台他）

D 運搬具

a 船

船は自然流路 (SR01) の下層から 1 点 (317)、8 層上部水田から 1 点 (318) 出土した (図版43)。見つかった船 (317) は舳先部分で、舳先からの残存する長さは 90.1cm、幅 62.6cm、最大高は 17.4cm。側板は欠損しているため最大幅はもう少し大きくなるであろう。樹種はクリで板目材を使用している。出土した舳先部分を船首と考えると左側板に 8ヶ所、右側板に 3ヶ所、一辺が約 2.5~3.0cm ほどの方形孔が穿たれている。また舳先端に近いところには一辺が 3.0~3.5cm のひと回り大きな方形孔が貫通して

いる。内部には繩紐状のものが残存していた。船の上・下面とも加工されており、側面から見ると舳先上端部分がやや反り上がっている。

318は丸木船の舳先部分と考えられる。残存する長さも24.0cmほどしかない。樹種はスギで、木取りは削り貫かれた側が木表になる板目材である。全体に風化が著しく加工時の痕跡はまったく見られない。底面も剝離欠損しているものと思われる。右側面の欠けている部分は孔のように見えるが人為的にあけられた孔ではなく死節などの傷跡と思われる。

317は自然流路の包含層である下層から出土している。具体的な層位名は不確かではあるが、調査開始当初にこの自然流路の堆積層を上層・中層・下層と分層していたことから、本書で言う第IV層（中期中葉～中期後半）から第V層（中期初頭～中期中葉）までのあいだより出土したものと考えられる。317は弥生時代中期後半、もしくは中期初頭にまで遡る船の可能性もある。8層上層水田より出土した318は弥生時代後期に属する船であろう。これまでに出土している弥生時代の船（註19）は丸太を削り貫いてつくられた、いわゆる丸木舟が知られるが、角江遺跡から出土した船はその構造から丸木舟の上に別部材として取り付けられたものと考えられる。静岡県内では静岡市登呂遺跡、田方郡亘山町山木遺跡から丸木舟が出土しているが、別部材と考えられる類例資料は現在のところ確認されていない。しかし一方でまったく丸木舟ではないとも言い切れない。早急な結論は避けたいが、確実に弥生時代の船とされる類例が少ないなか、この構造を持つ船は刳舟から準構造船への構造的発展段階を考える上で注目すべきものである。

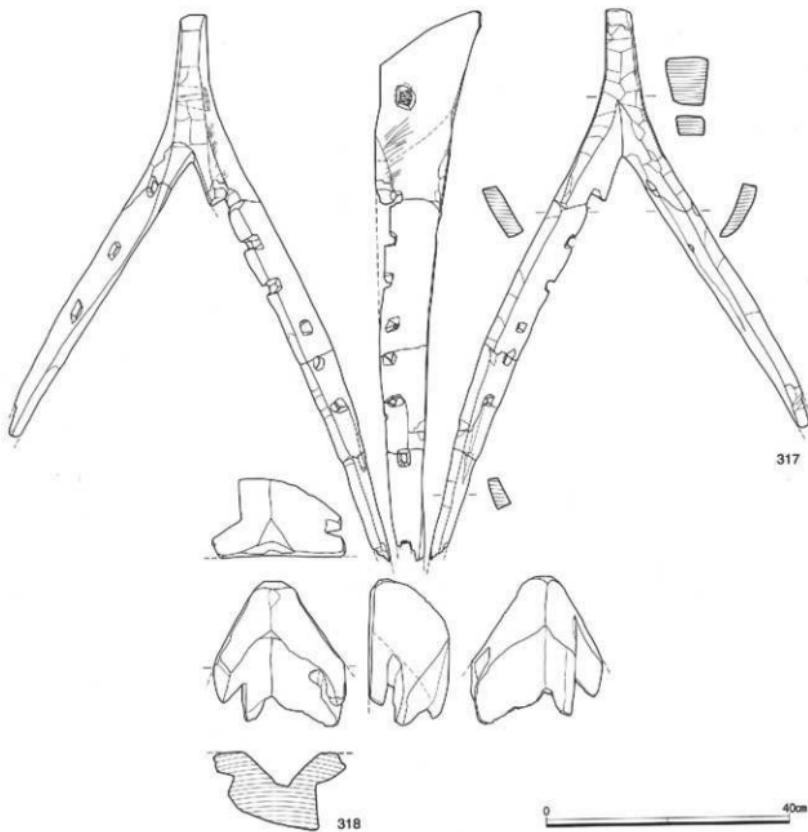
註19 この時期の船の形状や構造については、一部、遺跡から出土した模型の船（舟形木製品）でも見ることが出来る（第78図祭具2）。

b 樅状木製品

「樅」は一木鋤や掘り棒などの形態と類似しているため、ここに分類してまとめたものがすべて樅であるとは言えない。一木鋤や掘り棒その他に分類されてもよい可能性がある。そのためここでは便宜上「樅状木製品」と呼ぶ（註20）。樅は使用方法によってバドルとオールに分けられている（註21）。角江遺跡から出土した樅状木製品はすべて一木式のオールに属するものである。

樅状木製品を形態的に分類すると、柄と身の境界がはっきりとして、一見、一木鋤によく似ている形態のもの（I類）と、全体に断面は扁平で下方に行くほど幅広になるバチ形のもの（II類）、柄から身にかけて明瞭な境目を持たず緩やかなカーブを持つ板状のもの（III類）に分けられる。III類の数量は少なく果たして樅として良いものか疑問である。資料の大半はI類とII類になる。I類・II類とも弥生時代中期～後期にかけて存在する。また長軸方向の中央に稜線をもつものが多く見られる。I類は現代のオールタイプに良く似ている。身は断面の中央に膨らみをもつ板状で、肩は張らず丸いなで肩になっている。柄の断面は円形になる。柄が完全に残るのは338の1点のみである。I類は一木鋤との区別が困難だが、ここでは肩がつくり出されているか否かを一木鋤との判別要因としている。II類は全体に板状になっており、柄と身の境界がなく、最大幅は下方にある。身は長く、中心に稜線が通り断面が菱形になっているものもある。しかし身の幅が狭く柄も厚みがないため、樅として使われていたものかどうか疑問がある。

第59～62図にまとめた樅状木製品はすべて自然流路（SR01）包含層から出土したものである。319～332の14点は自然流路（SR01）の第II層（中期後半～後期前葉）～第V層（中期初頭～中期中葉）より出土したもので弥生時代中期に属する。333～344は自然流路（SR01）の第I層より出土したもので弥生時代後期に属する。樹種は中期の資料ではサカキの板目材が多い。次いでアカガシ亞属ほか、ケヤキ・ツブ



第58図 運搬具1（船）

ラジイ・クリ・ヒノキ・スギがある。後期ではヒノキ・アカガシ亜属がいくつか見られ、他にコナラ節・クヌギ節・ヒノキ・クリ・キリがある。使われている樹種は多種類あり、特定の樹種が選択されている傾向はない。形が完全に残っているものが多くほとんど欠損している。

319～326はⅠ類の形態を持つ中期の櫂状木製品である。319・320・324～326は身の片面に長軸方向中心に隆起した稜線を持つ。319は身の部分で柄の付け根がわずかに残っている。火を受け炭化しているために原形は不明。320は身と柄に接合点はないが同一個体である。身は柄の付け根から幅が広がり下方に向かってすぼまる紡錘形を呈する。321は柄のほうは怪が上部へ行くほど大きくなり途中で折損している。器面は磨かれ全体に丸味を帯びている。身は下方へ向かって徐々に狭くなり先端はやや尖っている。下端は磨滅している。322もほぼ321と同じ形態である。323も身の部分で最上部の中心に柄が付いていた痕跡がある。柄の断面形は3.3cm前後幅の楕円形と思われる。全体綺麗に磨かれている。身の上部には

斜め方向の圧痕がある。324は破片だが両面に稜線がある。上端部には柄が付いていた痕跡がある。325は肩が小さく細身のものである。柄は上端部の付け根で折れている。下端は磨滅し潰れている。326は2.5cm幅の柄が付くものと思われる。表面の中央にははっきりした稜線があるのに対し裏面は平坦になっている。327～330はII類に属する中期の櫂状木製品。327は薄い板状を呈するもので柄は欠損している。328も同じような形態の櫂状木製品である。上部に行くほど身が厚くなり中心に弱い稜線がある。329はこの稜線がはっきりしている。アカガシ亜属の板目材である。330は身から柄の部分まで残っている。身と柄の境はなく上部の方ほど身が厚い。331・332はIII類に含まれる。いずれも針葉樹材で身の部分が長くやや厚身である。331はヒノキ材で全体に黒く炭化している。小さな肩をつくり出してあるがその他の整形が荒くはっきりしていない。332はスギ材で全体に風化している。下端部は完結しているが上端部は欠損している。身の長さは約60cmほどと非常に長い。

333～336はI類の形態を持つ後期の櫂状木製品である。333・334はヒノキの板目材を使った同じような形態を持つ櫂状木製品で表面は一部炭化している。特に334は身の片面が湾曲し窪んでいる。柄の断面形は円形を呈する。身と柄の境には側面側に刻み目が付いている。刻み目は $0.5 \times 1.5\text{cm}$ ほどで右側に3ヶ所、左側に1ヶ所ある。335は丸肩で中央に明瞭な稜線がある。柄は幅約2.0cmほどある。欠損部分が多く原形は不明。336も片面の中央にははっきりとした稜線がある。337はヒノキの板目材で半分以上炭化している。柄は丸く身は板状になっているが身と肩の境界がない。338は大型の櫂で図版は縮尺1/8で掲載している。柄がほぼ完全に残っていることから明らかに櫂として間違いない製品であろう。柄は約120cm前後あり途中は接合できない部分もあるが同一個体である。柄の先端は瘤のように膨らんでいる。身は風化が著しく進み元の形状はわからない。339～342はII類の形態を持つ櫂状木製品である。いずれも身が板状で中央に稜線がある。339は柄の残存度が高いが上下両端とも欠損している。340～344もほぼ同形態のもので身は薄く扁平である。

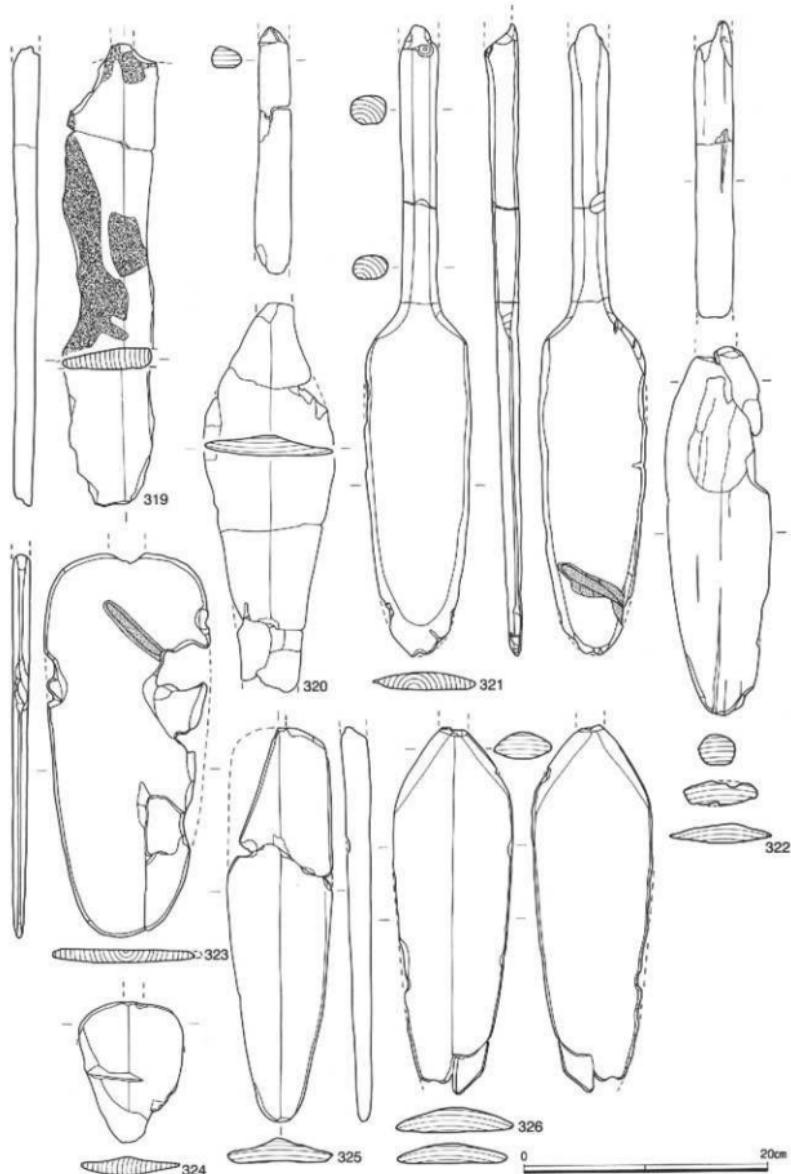
註20 『木器集成図録(近畿原始篇)』(上原 1993)では櫂は「漁撈具」に分類されているが、本書では運搬具の項目に置いた。

註21 『木器集成図録(近畿原始篇)』(上原 1993)の「E 漁獵具」の項目参照。

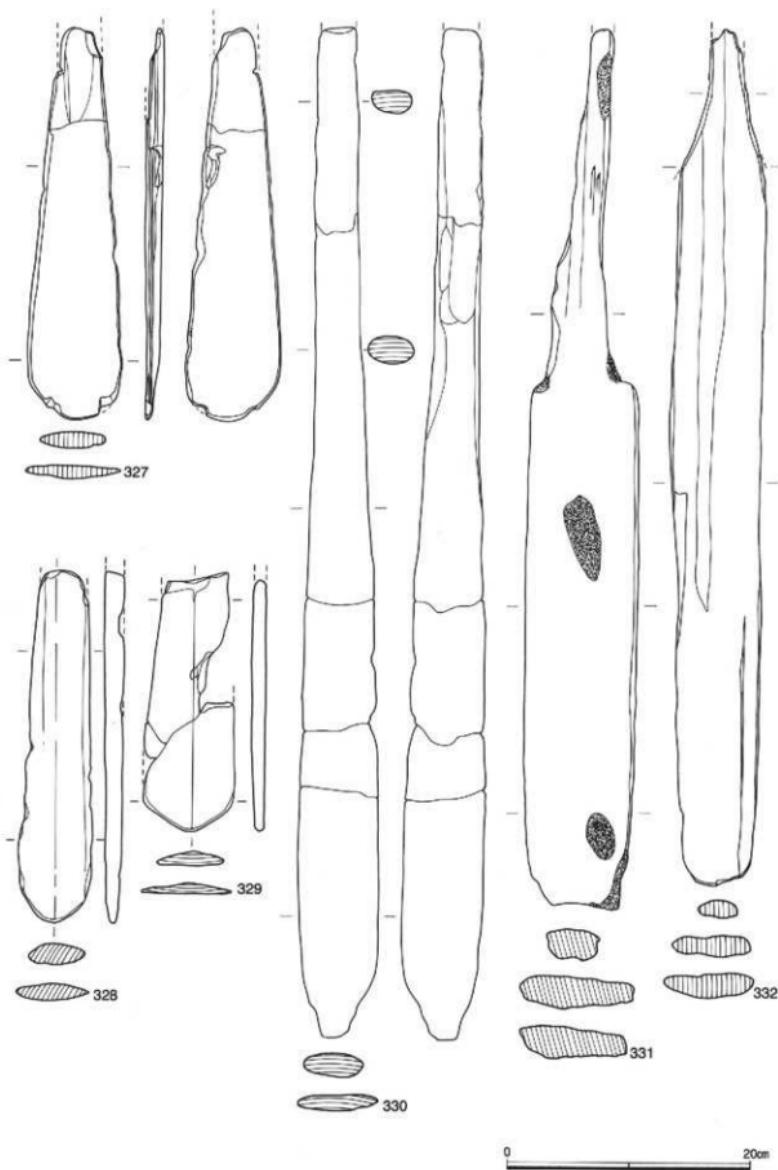
c アカカキ状木製品

アカカキの語源は船底に溜まった水(アカ)を汲み出す(かき出す)ことに由来する。ここで言うアカカキ状木製品とはそのアカカキの形態に類似したものを集め掲載している。したがってその用途でないものも含まれている可能性がある。アカカキ状木製品の形態上最大の特徴は、一端にチリトリ状の掃き出し部分を持っているということである。またすべて一本を削抜いたもので、柄が付き、側面が高く立ち上がっている。このような形態のものが弥生時代中期から後期にかけて9点ある。以下、個別に解説する。

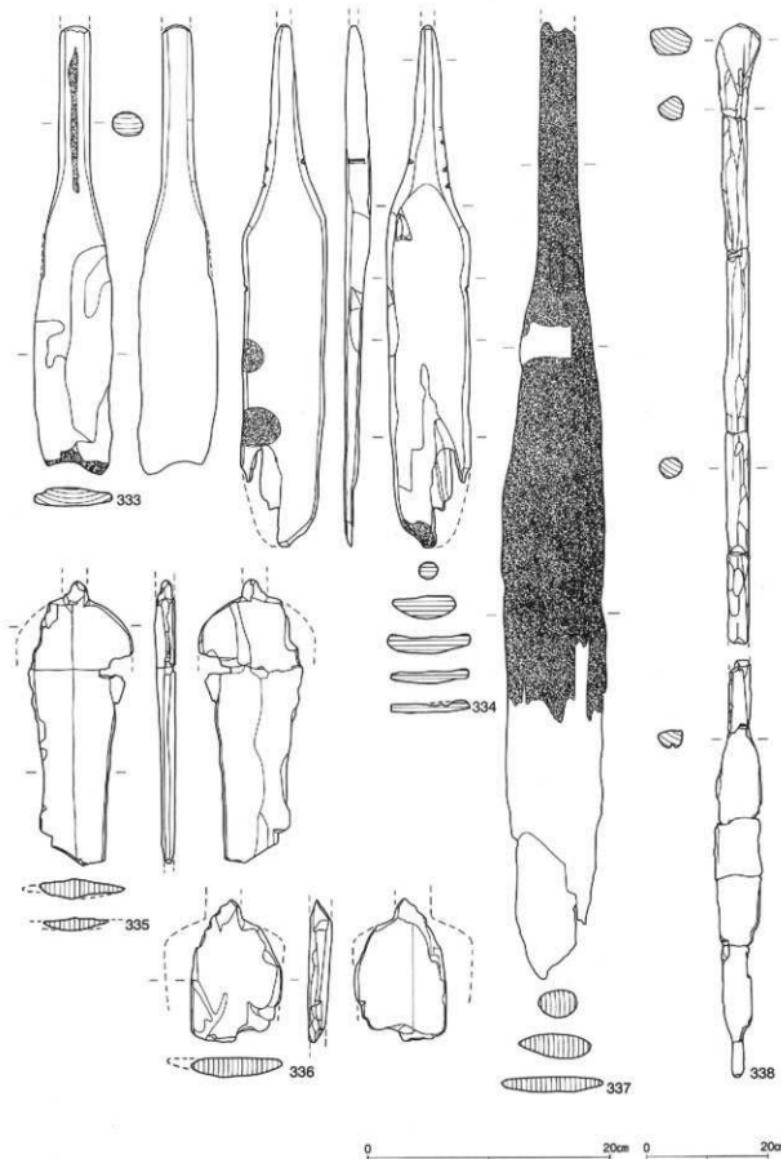
第63図345～348は弥生時代中期に属する。345～347は自然流路(SR01)の中層またはIII～IV層より出土している。345はスギの板目材で作られている。1/2ほど欠損し全体に風化が著しい。側面の立ち上がりは2.7cmある。柄の痕跡はないが肩は角がなく丸くなっている。346は器面が厚く頑丈な作りである。側面の立ち上がりは3.8cmと深く削り抜かれている。裏面は内底面側に反り上がり、掃き出し部分はやや薄くなっている。柄は欠損しているが手を差し込んで握れるような柄孔が切られていた可能性がある。347は欠損部分が多くもとの形状が想定できないが、掃き出し部分があることからアカカキ状木製品に含めた。348はこのなかで唯一大畦内から出土しているが大畦内の堆積土はもともと自然流路(SR01)から来ていることからも弥生時代中期のものとした。欠損がひどく柄も残っていない。また材



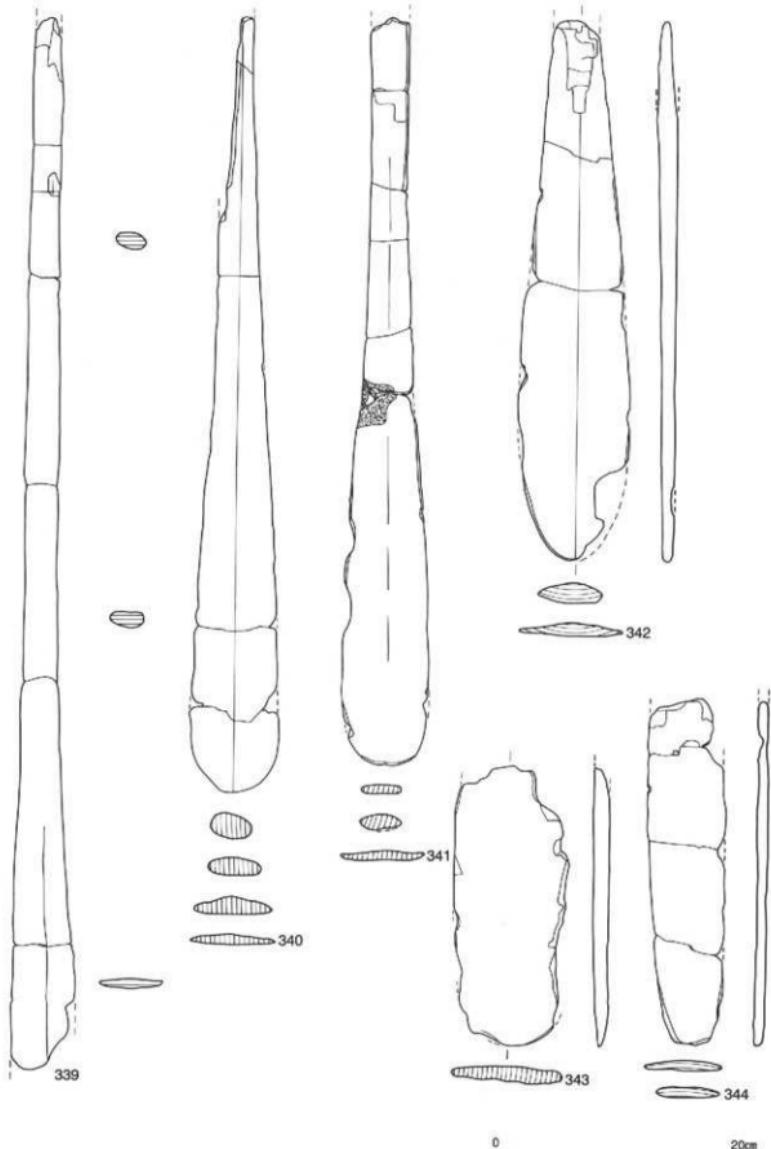
第59図 運搬具2（櫛状木製品1）



第60図 運搬具 3 (櫟木製品 2)



第61図 運搬具4 (櫟木製品3)



第62図 運搬具 5 (縦状木製品 4)

はケヤキ、木取りも横木取り杠目と、一見、容器のような作りだが掃き出し部分を有している。縦断面を見ると前内側面は厚みがあり、内底面は薄く掃き出し部分は反り上がっている。

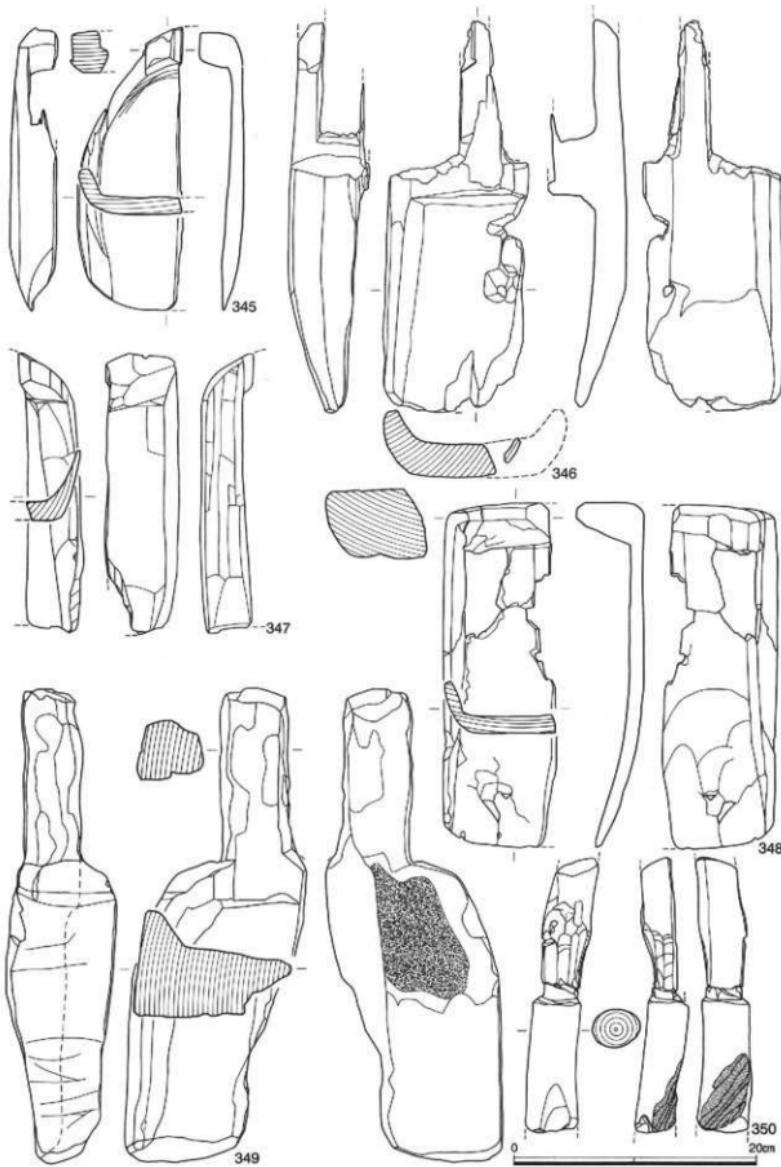
第63図349、第64図351～354はいずれも自然流路(SR01)第I層より出土したもので弥生時代後期に属する。349は全長が38.9cmと大型で形状はまさしく現在のチリトリの形状をしている。器面は厚く側面の立ち上がりは低い。全体の整形も荒いことから未製品の可能性もある。裏面は一部炭化している。351・353は扁平な薄い作りで立ち上がりも浅い。おそらくアカカキとしての機能を果たさないであろう。別の用途に使われたものとも考えられる。352も整形の荒さから未製品と考えることも出来るが、アカカキとするには大型過ぎるように思われる。器面全体に加工痕が残っているのは完成品ではないであろう。裏面には主に中央付近に無数の刃物痕がある。作業台として転用されたと考えられる。354は柄を欠損しているほかは原形がはっきり分かる。形状は手前側が丸く、掃き出しきは直線的である。左右側面も直立に立ち上がるのではなく緩やかに湾曲している。前側面は肉厚で底面に対し垂直気味に立ち上がる。その外面には欠損部分があり、断面が円形の柄が付いていたものと思われる。内面全体に付着物がある。

d 背負子

弥生時代後期に属する背負子が1点出土している。第63図350は自然流路(SR01)第I層より出土している。材質はクリの芯持ち材で作られている。器面は磨かれたように滑らかである。残存している破片の中央は外周から削り込まれていている。上部は裏半分が欠損している。表は中央のくびれに向かって削られた加工痕がある。下部は裏面に斜め方向の圧痕がある。角江遺跡と同じ浜松市梶子遺跡で出土しているY字形木製品、同市伊場遺跡、沼津市雌鹿塚遺跡から出土している背負子と痕跡の特徴が極めて似ていることから本資料も背負子とした。

〈主要参考文献〉

- 安井良三「船－和歌山県串本・笠嶋遺跡出土の船底板に関して－」『三世紀の考古学』中巻 1981.4.15
中西靖人「船と航路」『弥生文化の研究』第7巻 雄山閣 1986.1.20
上原真人「木器集成図録(近畿原始篇)」奈良国立文化財研究所 1993.3.30
黒崎 直「生活のなかの構造物－家・棚・木道・船－」『季刊 考古学』第47号 1994.5.1
宮下知良「伊場・梶子遺跡出土の「背負子」について」『浜松市博物館館報VII』浜松市博物館 1995.2.21



第63図 運搬具 6 (アカカキ状木製品 1・背負子)



第64図 運搬具7 (アカカキ状木製品2)

E 漁労具

a 網枠（たも）

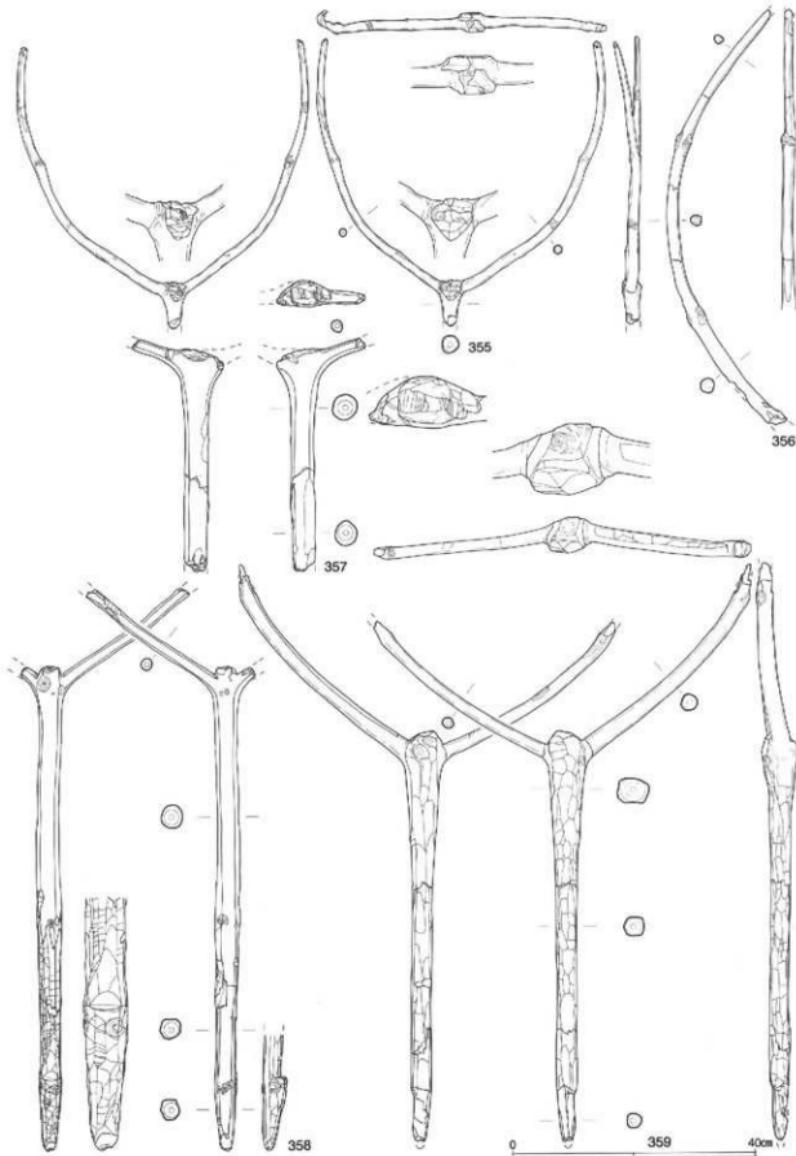
出土した木製品のうち形状から網枠（たも）と判断したものは10点ある。355～359は残存状態が良好で形態の特徴を留めている。その他の5点は枠の一部、又は柄の一部と思われるものである。いずれもとう網枠である。資料のなかに叉手網・四ツ手網の部材と思われるものは見られなかった。

とう網枠はすべて自然流路（SR01）の包含層中から出土しており（図版64）、弥生時代後期（第Ⅰ層）が1点、弥生時代中期（Ⅲ～V層）が9点ある。樹種はイヌガヤ、二葉松類、サカキ、イヌマキなどの針葉樹を多用している。図化したとう網枠はいずれも一木からつくり出されたもので、柄は木の幹、枠は左右対称に枝別れした部分を利用している。枠や枠木に網を取り付けるための小孔を穿孔したものは見られない。

355は枠木が完全に残っている。枠木は枝の両端を重ねて輪状にすると、復元直徑が約35～40cm程になると思われる。枠木部分は小枝をはらい落とした自然木で素木のままである。枠木にはそれほど目立った加工はなく先端から15～16cm下までは枝の片側半分が薄く削られている。重なる部分を削って結合しやすいように加工してあるのであろう。355には結合したときの緊縛痕がある。同じような枠木を削った痕跡は356・358・359にも見られ、359などは枝の付け根近くから内側面が削られている。356やその他4点はとう網枠の枠木部分と思われる。

柄が完全な形状で残っているのは、358で79.2cm、359で67.2cmある。柄の断面直径は2.8～4.2cmほどの大さがある。枠木より上部の幹は切り落とされている（第65図の拡大図参照）。358は柄の上端が真横に切断されている。柄の下方44cmほどの部分は丁寧に加工されており、表面側は平らに削られ、裏面は加工痕が顕著に残る。末端には取っ手状に加工された部分があり、裏面側に段が切り込まれている（図版49）。柄を手で持つとちょうど片手がこの段部分にかかり、手から抜け落ちたり滑らないような仕組みとなっているのであろう。末端は先細りになっている。359の柄は枠の付け根から末端まで全面にわたって加工されているため横断面が方形に近い。表面には加工痕が顕著に残っている。また末端から9.2cm上まで細く削られている。357とその他1点は柄と枠の一部と思われる。残存状態は良くないが中央の幹の切断痕などからとう網枠と判断した。

今回出土したとう網枠のなかには枠木のみからなるものはないと思われる。しかし資料のなかにはこれに類似するものが存在する。武器に分類した「弓」の364～367（弥生時代後期：イヌマキ）は形状を見ると枠木の可能性も考えられる。後述する「弓」と多用される樹種や加工の仕方がよく似ているが、枠木は丸木面の一辺が途中から削られていることや横断面の形状の違いなどからそれと区別している。



第65図 漁撈具（網枠（タモ））

F 武器

a 弓

弥生時代の弓は27点出土している。角江遺跡から出土した弓はすべて丸木弓（単弓）に属する。弓として分けた木製品はほとんど欠損しているものばかりである。完全な形で残っているものはない。復元推定値でも80～123cmほどの丸木弓だったものと思われる。

弥生時代後期に属する弓は8点、弥生時代中期に属する弓は18点、および出土層位不明が1点ある。27点のうち3点は弥生時代後期の水田から出土したもので、他24点はすべて自然流路（SR01）の包含層より出土している。

樹種は出土した27点のうち25点がイヌマキで、ほかはイヌガヤ1点、不明が1点ある。イヌマキは全体の9割を超える、明らかに意図的にイヌマキを選択していたと言える（註22）。

弓の形状の特徴は、直徑約1.4～3.0cmの細身の木を使い、片面を丸木面、もう一方の面を削り込んでいる。そのため断面は算盤玉（木の葉）形に似た形状をしている。削られた面側には加工された時の痕跡が顕著に残っている。一方、丸木面側は節目の出っ張りがなく表面が滑らかであることから、素木の面をそのまま使っているのではなく、小枝等の節目を削り表面を磨いて調整していたと思われる。弓幹は弦部分に近いほうが薄く削り込まれ、弓幹中央は太くなっている。角江遺跡の場合、弦部分が欠損しているものは、この弓幹の特徴を基準に製品と認定している。弦部分の形状は丸木面から削り出されている（註23）ものだが、本彌か末彌であるかの区別が非常に困難である。全体の数に比べて弦自体が残っている場合が少ないのも目立つ。そのため本稿では末彌・本彌の分別は行わず、図版は弓幹の細いほうを上位に、太いほうを下位に置いている。

第66図360～367は弥生時代後期に属する（註24）。360は上部先端は欠損し、そのすぐ下が長さ5cmほど浅く削られている。361は上端部の形状が弦と思われたが弓幹が円形であることから弓であるかは疑わしい。362は弦のすぐ下に幅約1mmほどの浅い線刻が切り込まれている（図版51）。364～367については前項でも触れたが、形態から弓に含めてはいるが、「網枠」の枠木とも類似している（註25）。先端の形状は弦というより有頭状に加工されている。

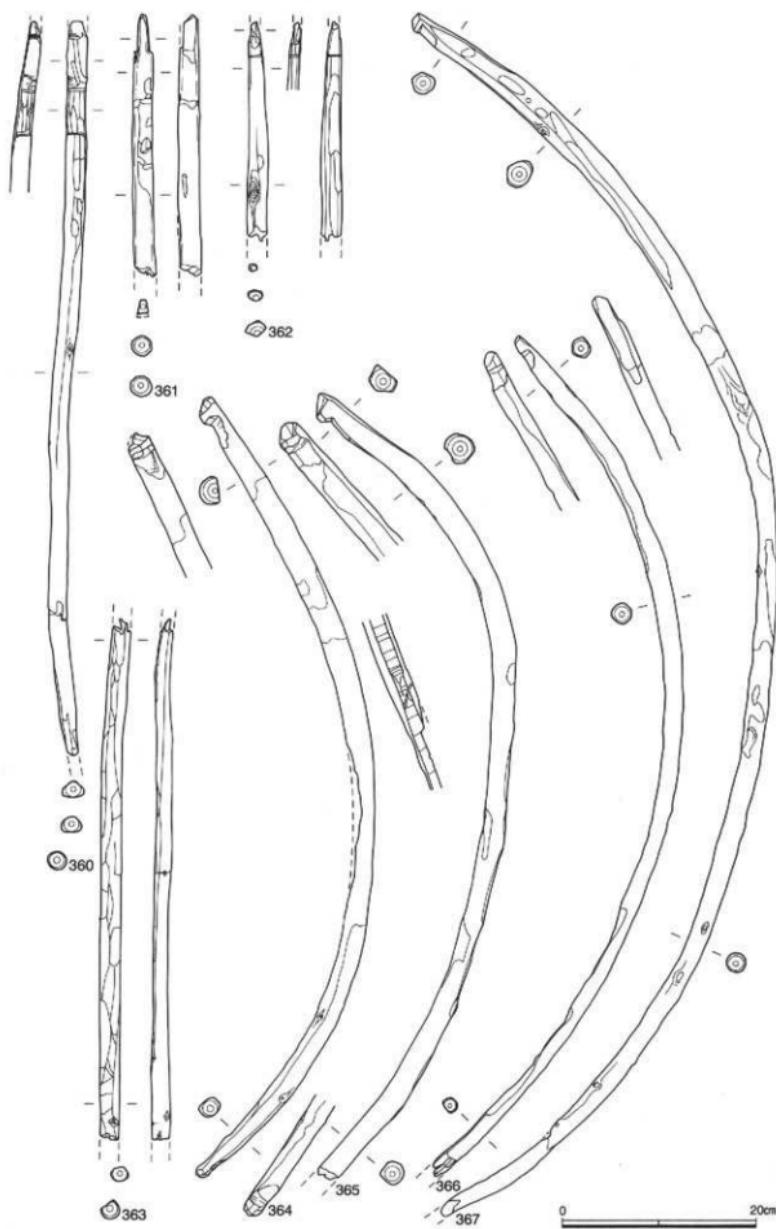
第67・68図368～385は弥生時代中期に属する。全て自然流路（SR01）の包含層である第III～V層、および中層より出土した。368は約90cmほどの弓になると思われる。片面はかなり削り込まれ、他方の面は丁寧に磨かれている。369は361と同様に先端が弦と思われたが弓幹全体が3.0cm径と太く、弓として実用品となるか疑わしい。幹部分は一部炭化している。370は弦の片方が壊れているが残存する長さだけでも120cmを超える。弦部分の窪みは弦の圧痕か。371の弓幹は節が瘤のように盛り上がっている。372の弓幹には長軸に直交する方向の刃物痕が數ヵ所ある。373は弦の先端と弓幹との境とに浅い切り込みがある。弓幹が細く小型の弓であろうか。377の弓幹には加工痕が顕著に残っている。素木面は丁寧に磨かれている。376・379～385は弦部分は残っていないが先述の特徴から弓としたものである。380は弓幹の途中で欠損しているものだが、その欠損部分は図版51の拡大写真で見えるように刃物痕があり、自然に折れた痕跡とは考えにくい。意図的に刃物を使って壊されたものとも考えられる。

註22 西日本各地から出土する弓の材は圧倒的にイヌガヤが多いのに対し、東海地域で出土する弓はイヌマキが多用されている。植生の違いによる要因も考えられるが、樹種同定で本遺跡でも同様の結果となった。

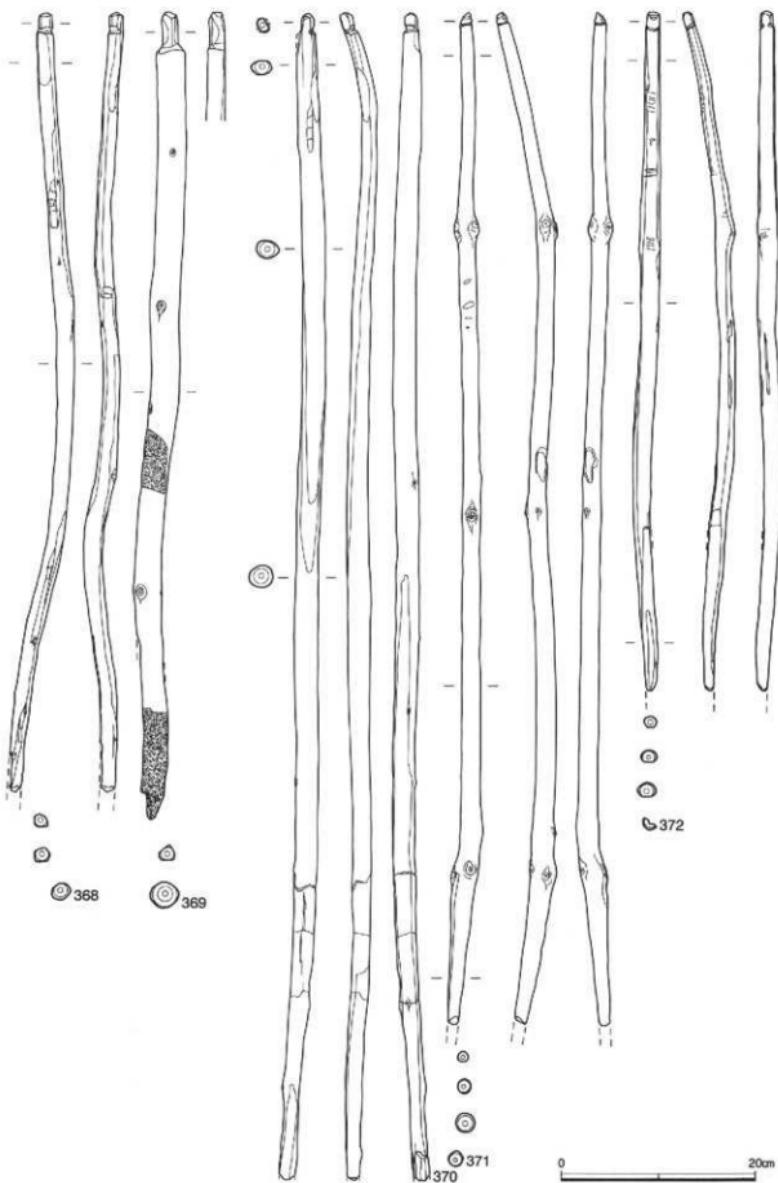
註23 写真図版の拡大写真を参照。

註24 第66・67図は図版内に収めるため縮尺を1/5としてある。

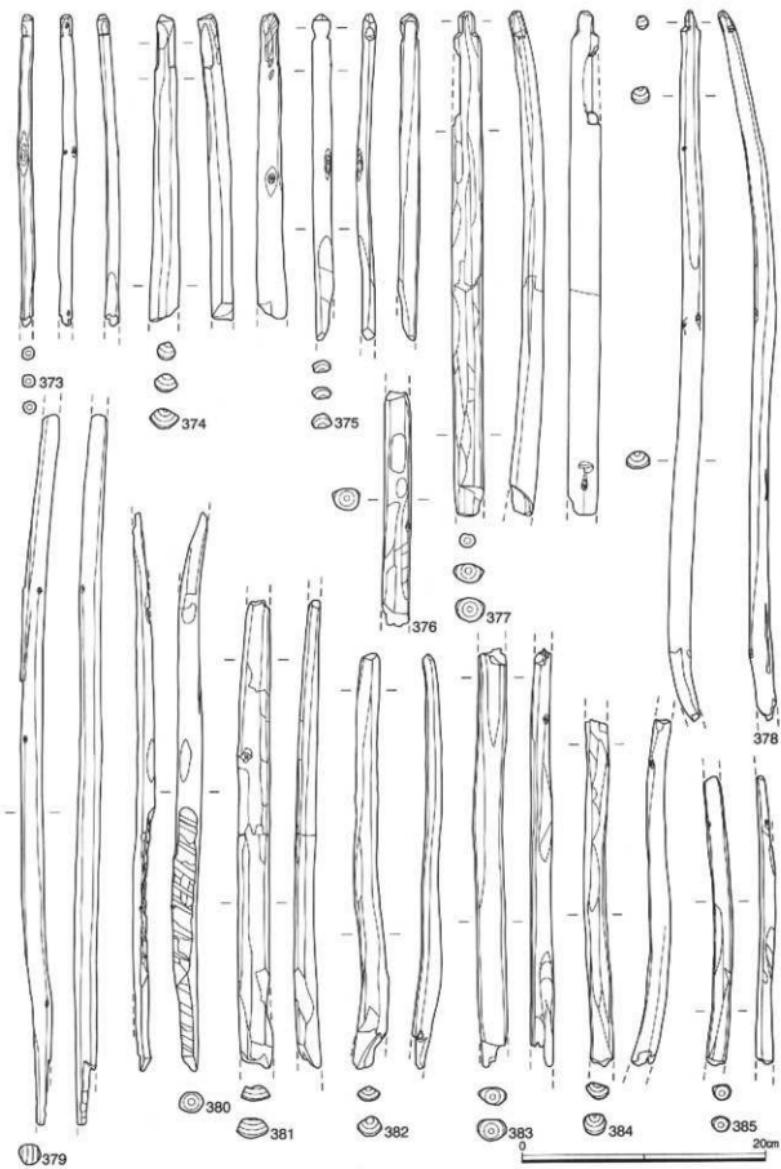
註25 前項、漁撈具（網枠）参照。



第56図 武器1（弓1）



第67図 武器2(弓2)



第68図 武器3（弓3）

b 梢

15~20cm前後の破片が4点ある。樹種はすべてモミの板目材。同じ樹種であることから同一個体の可能性もあるが接合点はない。いずれも板面にあけられた貫通孔に沿って縦割れしているため元の原形はわからない。

第69図386・389は自然流路(SR01)中層より出土している(図版64)ことから弥生時代中期後半、387は8層上層水田中、388は自然流路(SR01)第I層より出土することから弥生時代後期に属すると考えられる。8層上層水田は後期の遺構として捉えているが、水田客土に自然流路が洪水などで氾濫した時の第III層を含むため、387も弥生時代中期後半の可能性がある。

別個体とは言い切れないものの、4点の梢は構造的に共通するところが多い。まず板の厚みは0.8~1.15cmとどれも近い値である。386の上縁、388の下縁は磨滅しており梢の端部と思われる。特に388は下から2本の穿孔列が他の孔より小さく、上段の穿孔列の間隔とも異なり、386も同じ特徴が見られる。貫通した小孔は径が0.2~0.3cm、縦方向の間隔は0.85~2.0cm、横方向は0.4~1.3cm間隔で穿孔されている。横方向の孔と孔の間に紐縞のような黒ずんだ圧痕がある。紐縞の緊縛痕であろう。389にはこれが顕著に見られ、あるいは意図的に溝を切り込んでいたものかもしれない。また孔は主軸に直交する方向、つまり横方向はほぼ等間隔で平行して並んでいるのに対し、主軸方向の列は真っ直ぐではなく一定していない。

387・388の板面には表裏両面とも加工痕が顕著に見られる。加工痕は幅0.2~0.3cmほどの細長い削り痕で主軸よりやや斜め方向に削られている。板目材をヤリガンナのような工具で削り込んで板状に作られたと考えられる。他の2点には保存処理後の観察ではこの痕跡は見られなかったが、同じような製作方法であったものと思われる。また387・388には表裏の両面に赤色と黒色の顔料(註26)が鮮明に残っている。387は両面とも赤色顔料が塗布されている。上端部分に顔料の濃いところがある。何かの紋様が描かれていたものか。388も両面に赤色顔料が塗られているが、全体の半分ほどに濃淡のある黒色顔料の塗布された部分がある。これも紋様の一部であろうか。

同じような類例資料は愛知県朝日遺跡(註27)でモミ属で作られた柵があり、西日本各地でも出土した例が多く知られている。整然と並ぶ小孔の列やモミの板目材を使用していることなどが共通している。

註26 (財)愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡III』 1992.3.31

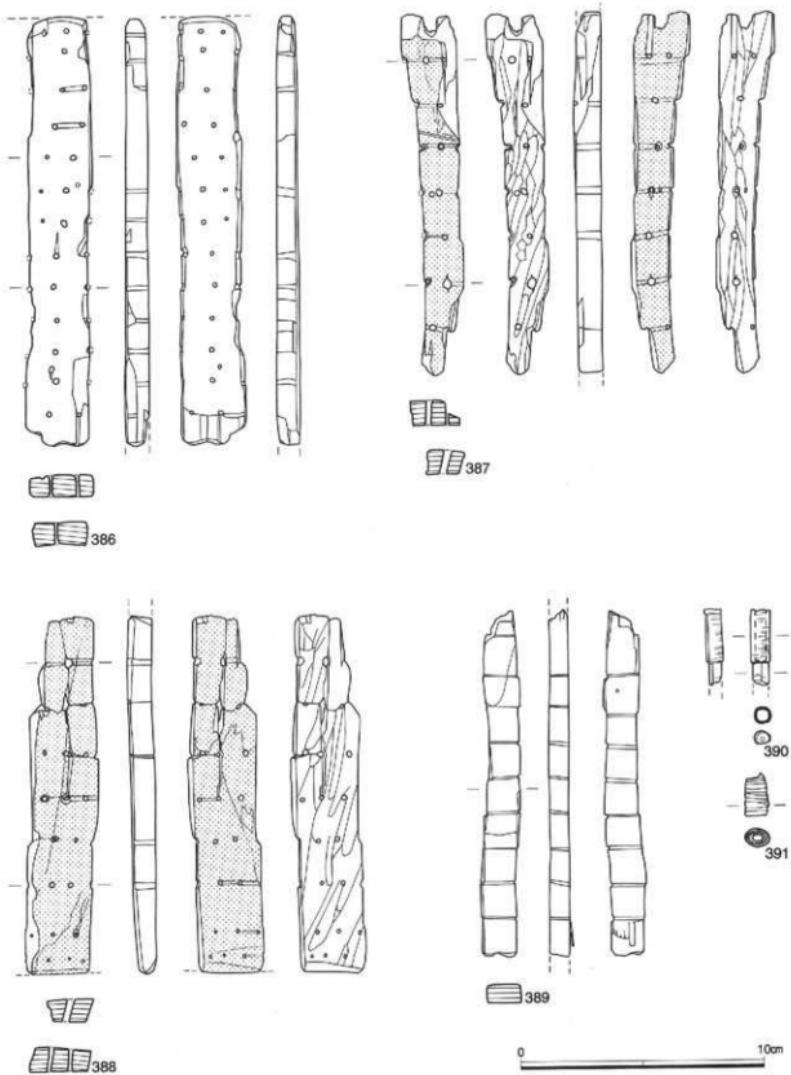
註27 顔料については原料の特定や科学的分析は行っていない。

c 矢

矢柄の先端が2点出土している。いずれも弥生時代中期に属するものと思われる。第69図390は自然流路(SR01)中層より出土した(図版64)。材質は竹笹類。直徑0.7cmの中空の芯に樹皮を重ね合わせるように巻き付け、表面を漆で固めてある。樹皮の中心には長さ2.1cm、径0.4cmの孔が通っている。この孔に有茎の矢尻を装着すると考えられる。391は同じく中空の芯に樹皮が巻き付けられたものだが巻き解けている。樹皮の幅は約0.15cmほどである。漆の痕跡は見られない。上下の天地も不明である。本遺跡では同質の矢尻、いわゆる木鐵は見つかっていないが、有茎の銅鐵が1点と、石鐵にも有茎・無茎の磨製・打製石鐵が十数点出土している(註28)。

註28 勝又直人『角江遺跡II 遺物編3(石器・金属製品他)』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

1996.3.31



第69図 武器4 (柄・矢)

G 食事具

a 矛子形木製品

第70図392は形状の特徴から矛子形木製品とした(註29)。自然流路(SR01)中層より出土していることから弥生時代中期に属する(図版42)。樹種はクヌギ節で、木取りは板目、正面が木表になる。身の一部が欠損しているが、ほぼ完形に近く残存状態は良い。柄は完全に残っており19.8cmの長さがある。付け根付近は横断面が長方形だが、グリップエンドは多角形になり先端は有頭状になっている。身は長さが16.6cm、平面形はU字形を呈する。先端に行くほど薄手になる。柄の付け根から先端にいく途中まで縁を残している。中央がくり込まれており、横断面から見るとやや浅い窪みになっている。

b 匙

393は身だけの部分で柄は欠損している。樹種はネジキ、木取りは板目。自然流路(SR01)の第V層より出土していることから弥生時代中期初頭～中葉に属する。身は長さ16.0cm、幅6.8cmあり、上面の中央部分が三角形に窪んでいる。身は全体に厚みがある。裏面の一部が炭化している。柄は身に対して約30°の角度で付いていたと思われる。付け根付近の柄の断面は方形に近い。

註29 身は偏平で柄はまっすぐ、側面から見ると身と柄が一直線であることから、矛子形木製品の名称を用いた。

H 装身具

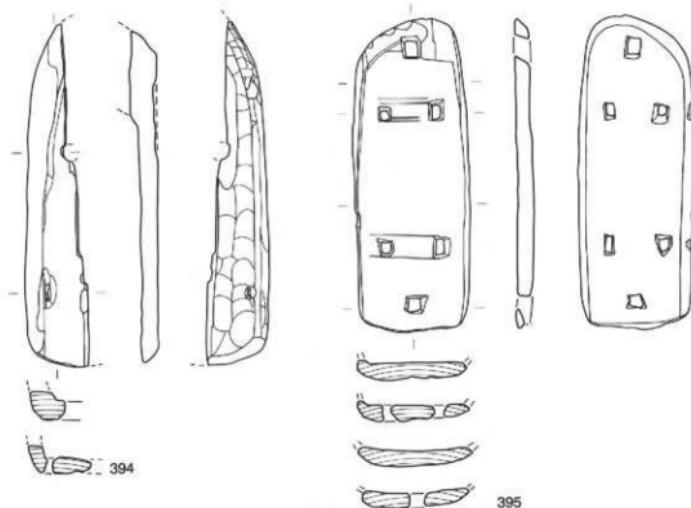
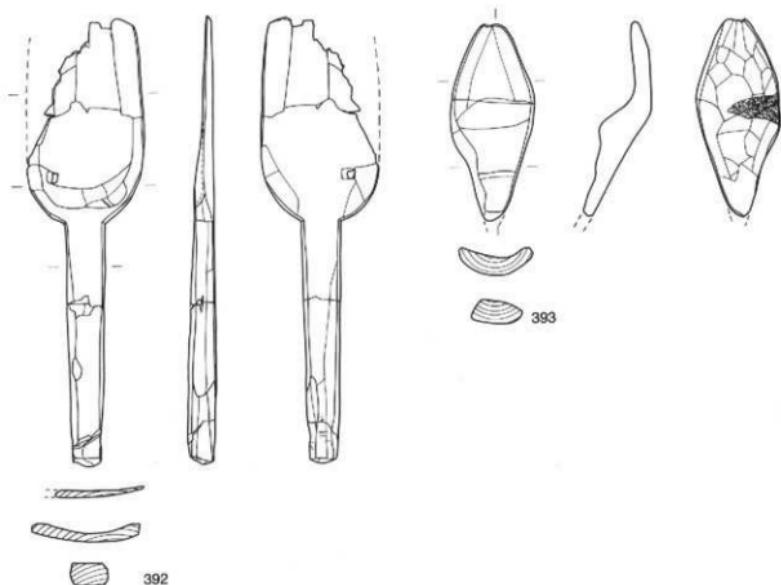
a 木履

木履と思われる木器が2点出土している。いずれも8層上部水田から見つかったもので、弥生時代後期に属するものと考えられる。

394はヒノキ材で木取りは板目、正面側が木表になる。全体の約1／3ほど残存しており縫折れしている。最大長は28.2cmで、縁部分を除くと約23cmある。表面は周縁部に約2.4cm幅の側壁があぐり、下端部は掃き出し状になっている。底面の厚さは1.3～1.5cm。裏面側は平坦な底を造り出している。正面側は風化が著しいに対し、裏面側は加工痕が鮮明に残っている。孔は2ヶ所あり、裏面側まで貫通している。上部の孔は円形で復元すると直径約1.4cm、下部の孔は縦長の長方形に近く0.9×0.8cmである。

395の樹種はツガ属、木取りは板目で正面側が木表となっている。ほぼ完形に近い形状を残している。最大長は25.7cm、幅が9.6cmある。底面の厚さは約1.4cm。394と同じく正面には周縁部に最大2.0cm幅の側壁があぐっていたと思われるが欠損している。下端部は薄手で掃き出し状になっている。横断面を見るにやや上面側に湾曲し、裏面側も丸みをもった底が造り出されている。395には底面に貫通した方形の孔が6ヶ所ある。孔は上下端の孔がやや大きくなる約1.2cm方形であるのに対し、中の4ヶ所は0.8～1.0cm方形孔である。この、中央4ヶ所の孔には上段に二重線、下段は上下に一本ずつの横方向の線刻がある。孔を開ける位置に印をつけて穿孔したと考えられる。また左側面の裏側にはこの孔と平行する位置に圧痕がある。孔に紐を通し縛っていた可能性もある。

木履は、他遺跡の例では福岡県福岡市拾六町ツイジ遺跡、那珂久平遺跡、辻田遺跡、佐賀県小城郡石木遺跡などの北部九州の遺跡から少數出土している。周縁に側壁を持つ点では共通しているが、下方側が掃き出し状になっていること、底面に貫通した柄孔を持つことなど、これまでの例と異なる点も多くある。類例資料の少ないなか、この2点の木器を木履とは断定しがたいものの、形状や大きさから用途を履き物とした。また水田から出土していることや底面に穿孔されていることから、田下駄の祖形とも考えられるだろうか。



0 20cm

第70図 食事具・装身具（杓子・匙・木履）

I 容器

a 高杯

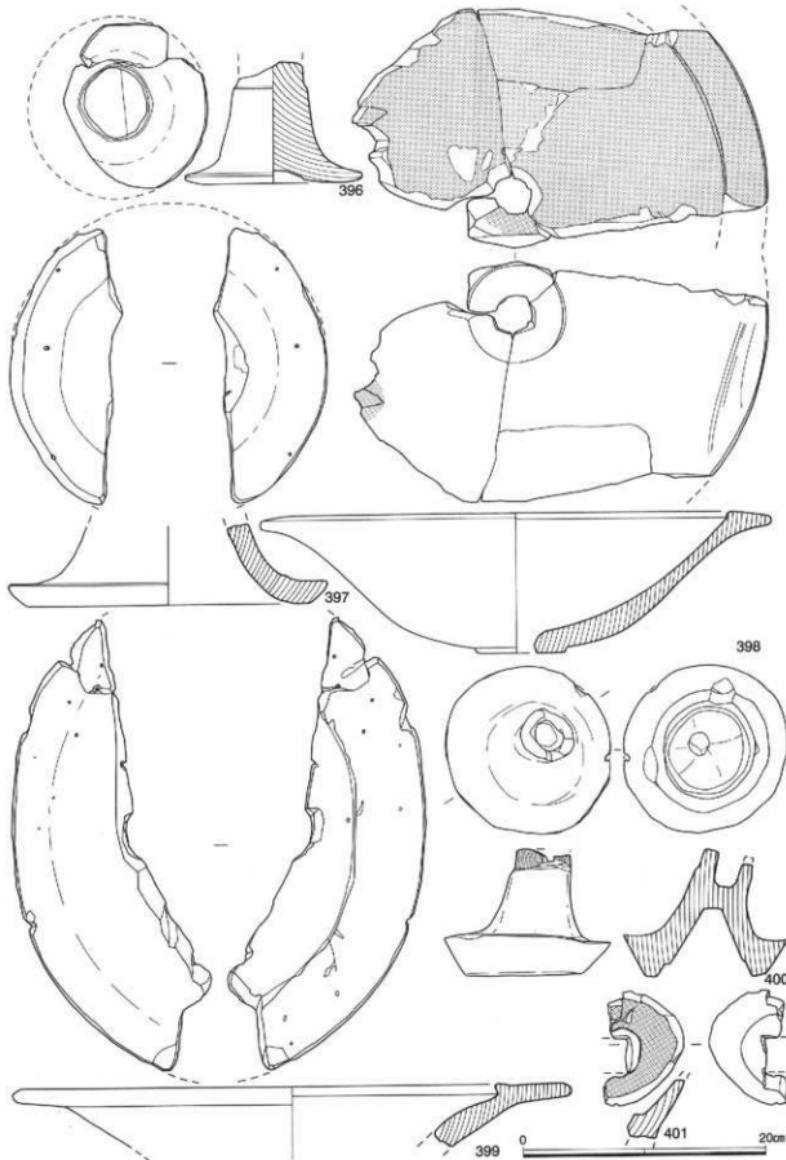
高杯（註30）は杯部と脚部を合わせて15点ある。すべて弥生時代の自然流路（SR01）の包含層より出土している。第III層より出土した高杯が最も多く、弥生時代中期、特に中期後半の時期に集中している。樹種はケヤキ材が12点、ムクロジ材が1点ある（註31）。ケヤキ材が多用されるのは容器全般に言えることだが、高杯にはその傾向が顕著に見られる。木取りはすべて横木取り柾目である。

高杯は杯部と脚部とから成る、いわゆる組合せ式の高杯で、一木式に該当するものはない。組合せ式は杯部と脚部を雇い柄で結合する方法と、杯部と脚部の間に脚柱部を入れる方法などがある。どの形態であったかは脚部（400）だけでは判断できないが、結合部が残っている杯部（398・401）を見る限りでは後者の3材から成る形態の高杯であったと思われる。

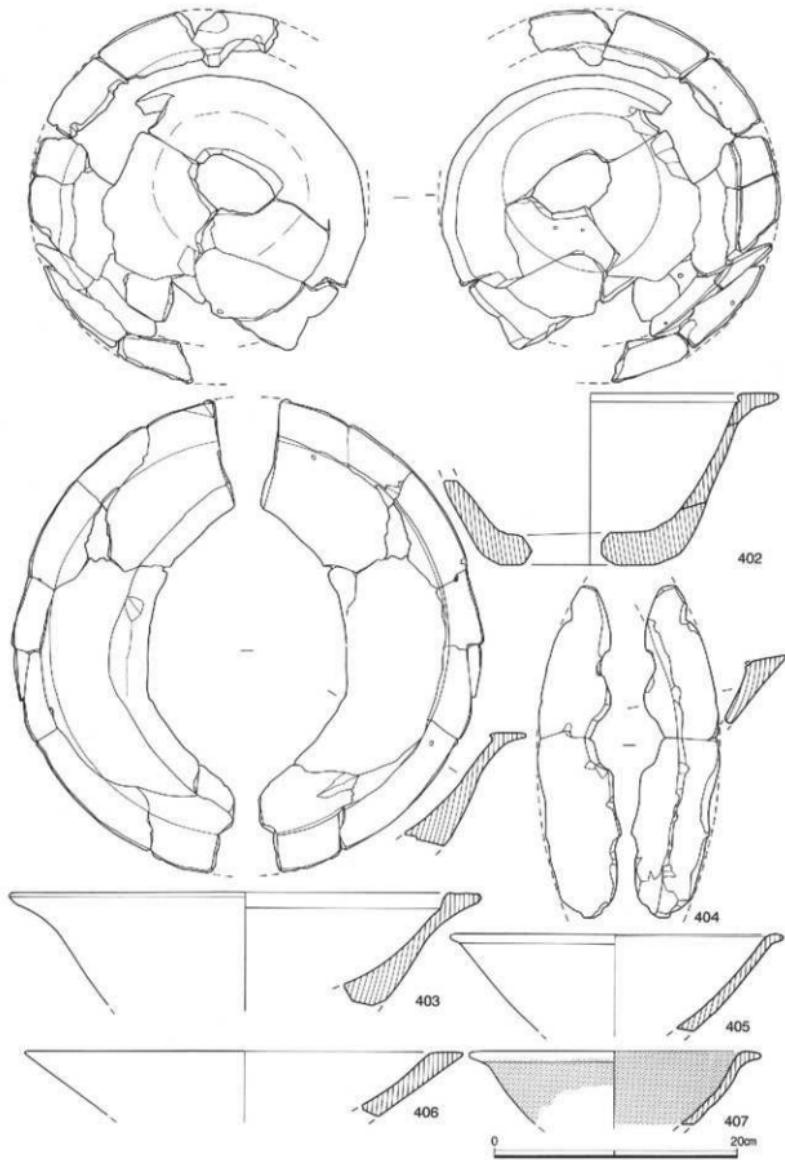
第71図396・397・400、他1点は組合せ式の高杯の脚部。396は上端部と裾の一部が欠損している。復元最大径は14.8cm。脚柱部分の径は約6cmほどある。底部より8cmほどの高さのところには浅い段差があり外周を巡っている。底部裏面の中央は浅く彫り窪められている。397も1/2以上欠損している。復元最大径は26.6cmとかなり大型の高杯の底部と思われる。底部裏面は大きく彫り込まれ、器面の厚さは約1.8cmほどになっている。400はほぼ完形の脚部である。最大直径は13.8cm、脚柱は約5cm径である。脚柱部はかなり傾き歪んでいる。底部裏面は円錐状に削りぬかれており、底部から高さ1cmほどのところに段差が施されている。底部外面は裾部分が横から見ると逆台形を呈し受け皿状になっている。上端部は396と同様の浅い段差がある。また中央には径2.1cm、深さ2.8cmの円形の枘孔が穿たれている。段差部分には压痕も認められることから複雑な加工の凹凸を持った脚柱部あるいは杯部が差し込まれていたものと思われる。

398・399・401～407、他2点は杯部である。398は直径を復元すると42.0cmになる大型の高杯である。杯部は底部から膨らみをもって広がり、さらに口唇部で大きく外反する。口縁部は約3.4cm幅ほど水平になっている部分がある。底部付近の器厚は1.1～1.9cm、一番薄いところでは0.4cmである。底部中央には直径3.0cmの孔があり、その裏面は直径7.4cmほどの円形にくり出された結合部がある。器面には内面側全体に黒色顔料が塗られている（註32）。外面にも一部黒色顔料が残っている部分があることからおそらく全面に塗布されていたものと思われる。樹種は1点だけ例外のムクロジ材である。399は復元直径が45.8cmと398よりもさらに一回り大きい。器形は上部に行くほど大きく外反し、約6cmの幅がある広い口縁部を持つ。401は杯部の結合部分であろう。器形は他の杯部よりも底部から急激に立ち上がっている。内面側には黒色顔料が塗布されている。枘孔は方形で残存している一端は2.9cmである。402は401と同じように底部からの立ち上がりが急で深さがある。復元直径は30.8cmで全体にやや歪んでおり、底部の穿孔は長楕円形で中心よりずれている。口縁部から0.7cmほど下には細い溝が内面側の周囲に巡っている。403は復元直径が38.8cmの杯部。底部は残存していない。404は口縁部の一部と思われる。正円に復元すると直径が約62cmになってしまふには疑問がある。口縁は3.5cm幅で平坦に加工されている。405も杯部で復元直径が25.0cm。器形は湾曲せず斜めに立ち上がり、口唇部が小さく外反する。406の口縁は平坦に削られている。復元直径は36.0cm。外面は口縁部から下部にかけて直線的だが内面側はやや湾曲している。407は復元直径が24.0cmで口縁部が強く外反している。内・外面ともに黒色顔料が塗布されていたものと思われる。

高杯をすべて円形と仮定すると398は復元した最大直径が42.0cm、390にいたっては45.8cmとなる。これらの大型の高杯をつくるために必要な木材は、最低でも直径が1m以上のケヤキ材が必要である。容器は通常、広葉樹の横木取り材から作られる場合が多い。特に口径部が柾目となる横木取り柾目と言われる木取り方法である。広葉樹は放射組織が発達しているため性質上放射状に分割される。また木



第71図 容器1（高杯1）



第72図 容器2（高杯2）

取りする場合、特に容器は亞みを避けるために隨や心材、樹皮に近い部分などは使わない。これらの条件を満たそうとすると直径40cmを超える高杯をつくるためには、ケヤキも直径1mを超えるものが必要である。直径が1mを超える大ケヤキは現在では滅多に見られない。しかし当時の植生では簡単に手に入るほど近接したところに、それもかなりの数の大木が存在していたのか。また県内では鉄製工具が普及していないと考えられている弥生時代中期後半期に、非効率的な石製工具でどのように大木を切り倒したのか。いくつか疑問として残るが、このような製品が実在するのは非常に興味深いことである。

註30 木製容器は「剖物」・「挽物」・「指物」・「曲物」に大別できる。弥生時代の木製容器の大半は剖物または挽物に分類されるが、高杯が木工用轆轤を使用したものか否かについては様々な考え方がある。観察の結果、角江遺跡の高杯には轆轤製作に特徴的な痕跡である爪痕や轆轤目はなかった。また角江遺跡の他の容器のなかにも轆轤を使って作られた可能性のあるものは見られなかったため、当遺跡から出土した容器はすべて剖物であり、挽物はないと考えている。

註31 15点中、破片2点の樹種同定は行っていない。

註32 黒色顔料については科学的分析を行っていないため原料の特定をしていない。顔料が塗布されたのは高杯に限らず他の容器にも見られる。また容器以外にも用途不明木製品のなかにも数点ある。

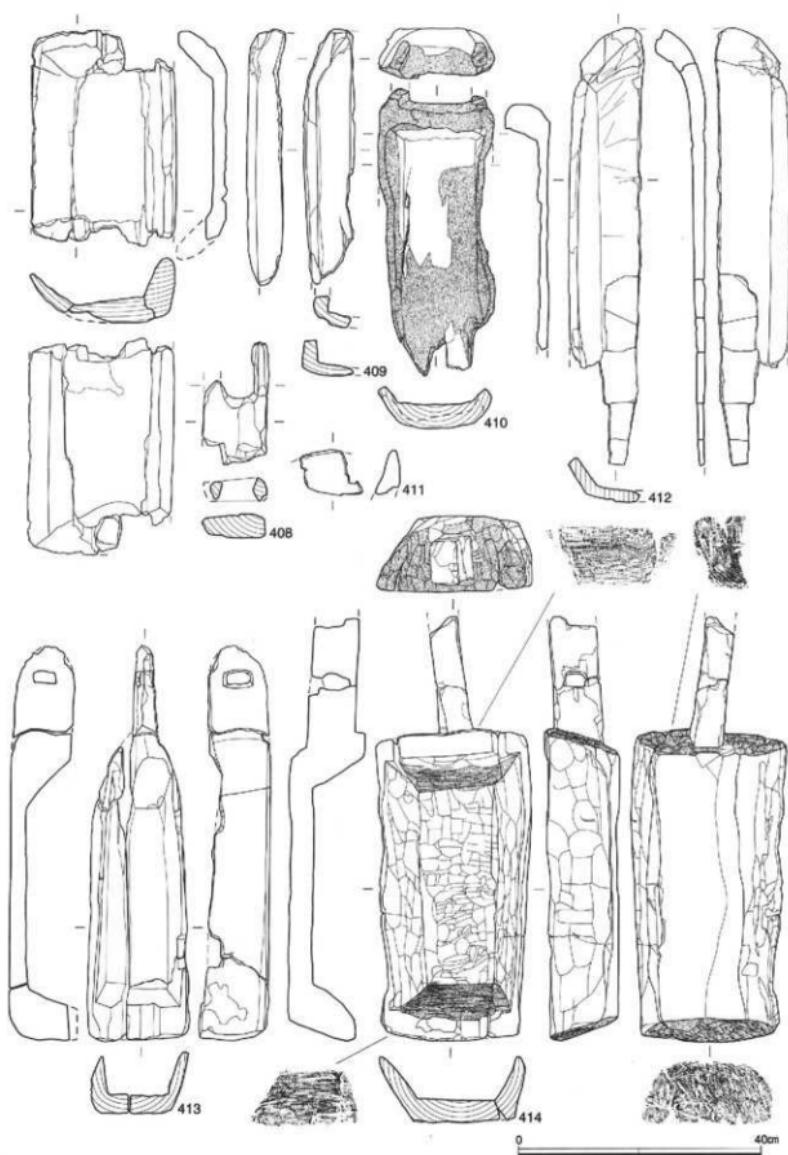
b 構・盤

槽は短辺に把手の付いているもの（I）と把手のないものの（II）とに大別する。把手付きのなかには棒状の把手がつくもの（a）と短辺中央に突きだした把手に横から穿孔した方形孔のあるもの（b）とがある。

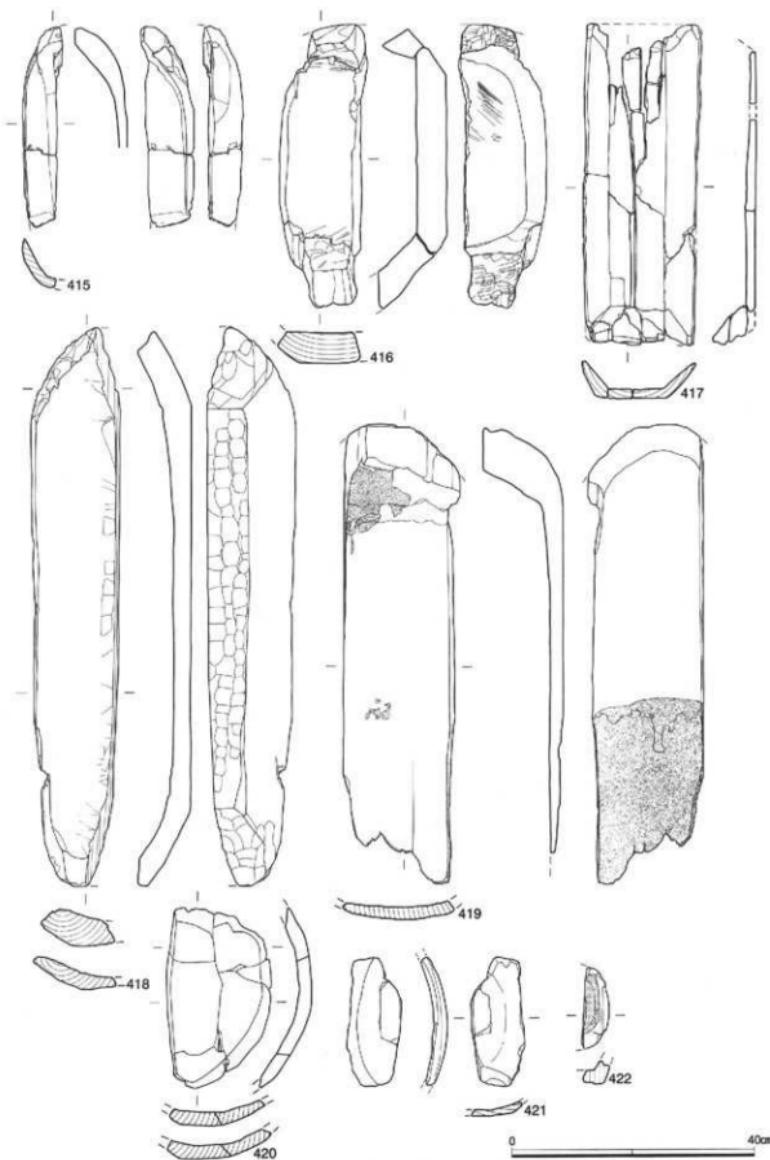
まず第73図410は自然流路（SR01）の中層から出土した。弥生時代中期後半～後期前葉に比定される。短辺側の左右両端に突起が1本づつ残っている。上面側は炭化しており火を受けたことによって萎縮し歪んでいるが底面側は炭化していない。欠損しているため全長は計測できない。この時期に出土する同タイプの槽は田舟として機能分類される例が多い。しかしここでは短辺に棒状の把手が付く槽（I-a）として扱う。

I-bとした穿孔の把手があるものは弥生時代後期の層から出土したものに限られている。I-bはそれぞれ個性的な形をしているがどれも長方形を呈する。408・413・414の樹種はクリ、いずれも半裁材を削りぬいてつくられている。408は風化が著しく歪んでいる。接合点はないがどちらかの短辺に把手が付く槽であったと考えられる。413（図版64）はやや小振りで容器部分の形状は把手に近くなるにつれ幅が狭くなり、その先に把手が付いた細長い形をしている。把手は平面側から見ると縦に付いており、先端寄りに両側から穿たれた3.9×2.1cmの方形孔がある。414（図版64）はかなり厚手の大型で、加工痕がほぼ全面に残っている粗製品である。把手は一方の短辺中央に縦に付いている。把手のほぼ中央に3.3×2.6cmの方形孔がある。

把手のないもの（II）は長方形または長楕円形の槽である。412は自然流路（SR01）中層より出土した弥生時代中期の槽である。残存している部分から長楕円形でかなり大型のものであったと思われる。415～419は弥生時代後期の槽である。415は側面の破片。長楕円形の槽と思われる。416は長辺側が欠損している。かなり厚手で底は5cm以上ある。加工痕が顕著に残っていることから未製品の可能性もある。417は8層上部水田から出土した槽で破損が著しい。器形は長方形。短辺は厚みがあるのに対し長辺は薄手につくられている。418は長楕円形の槽で縦割れて1/2ほど欠損している。底面は方形に削られ、加工痕が顕著に残っている。419は欠損部分が多く風化が激しい。内面の一部と底面の約1/3が炭化してい



第73図 容器3（槽1）



第74図 容器4(槽2・盤)

る。その他、409・411（弥生時代中期）は断片だが底部または器壁の一部であろう。

槽はクリ材が数点あるものの様々な種類の樹種がある。大半がケヤキ材であった高杯と比べ、槽に使われる材は特定されていないようである。

盤は420～422の3点ある。いずれも破損しており原形を留めるものはない。自然流路（SR01）中層または第III層より出土し、弥生時代中期に属する。420は2cmほどの厚さで緩やかに湾曲している。421も器形がわからないが槽円形か。厚みは1cmほどである。422は槽円形で内面には黒色顔料が塗布されている。

c 片口

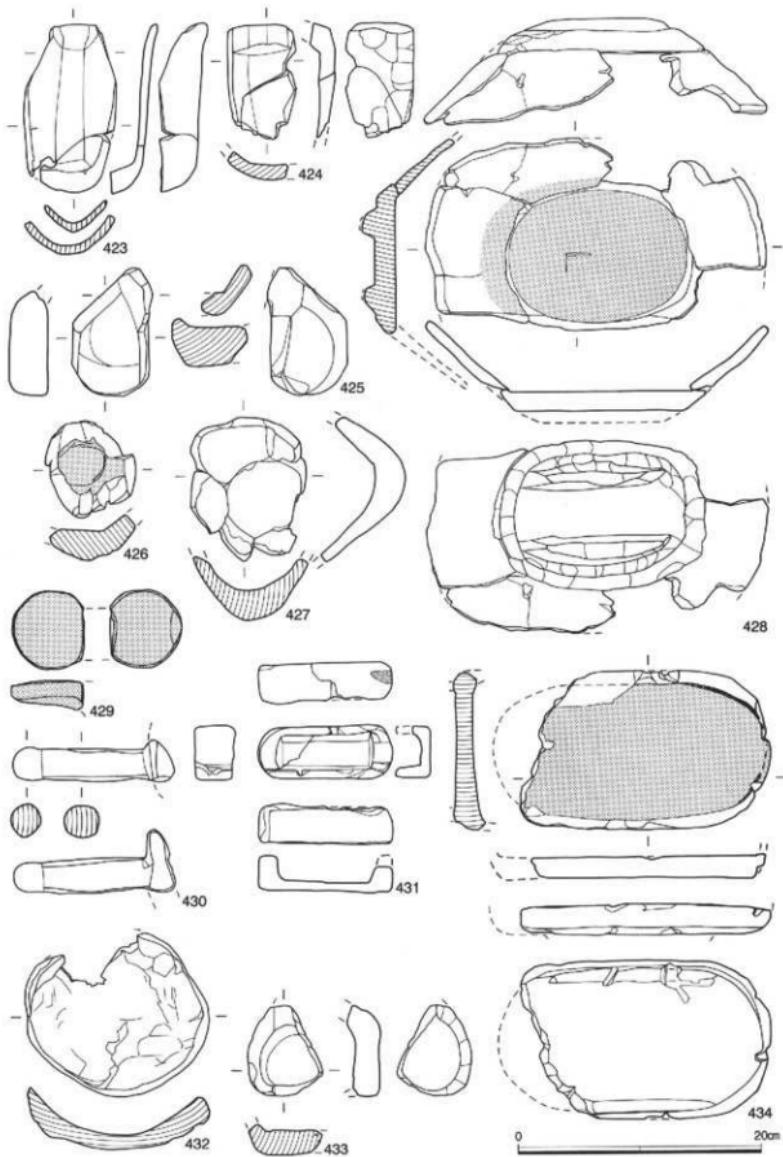
小型の片口が1点ある。第75図423は自然流路（SR01）中層より出土した。弥生時代中期に属する。片手に収まるほどの小型品で、表面は滑らかに仕上げられている。注ぎ口はややすばり外側に向かって反っている。

d その他

424～434はその形態や木取り方法から容器としたものである。様々な器形があるため特定の名称を付せず、その他の容器として収録した。424～431は弥生時代中期後半～後期前葉、432～434は後期に属する。またこのほかにも図化しなかったが容器と思われる断片が21点ある（第16表）。以下、掲載順に解説する。

424は欠損部分が多く元の形状は分からぬが、横木取りであることや湾曲した形状から削物の一部と考えられる。ケンボナシ属。425も同じ樹種の小型の削物である。内底や底面が滴形を呈していることから、上端に注ぎ口が付く片口の可能性がある。426は内面と外面の一部に黒色顔料が塗布されている。内底は円形に加工されているが外面は風化が著しい。427は丸底で厚みがあり、内面は深く削りぬかれている。口縁部は残っていない。428は平面は槽円形、側面から見ると逆台形状の削物で、底面に低い台脚がある。台脚は底面から削り出されたもので高さは約1cm、長軸方向に平行してのびる一対の脚である。内底は平坦な槽円形で中央付近にL字状の傷がある。側縁は内湾せず、上面に向かって真っ直ぐに大きく開く。また黒色顔料が塗布されていたと思われるが、内底一帯に残存しているのみである。429は容器の把手と思われる。全面に黒色顔料が塗られている。丸形で全体丁寧に磨かれており中央部に膨らみを持っている。430も容器の棒状把手と思われる。先端は有頭状に丸く加工されている。断面は円形で中央部にやや膨らみを持つ。根本は容器本体の一部であろう。431は小型の容器である。中央部は方形に削りぬかれ、2.2cmの深さがある。外側の四方の角は削り落として丸くしてある。側面の一部に圧痕がある。

432は浅い皿状の木製品である。内面側に刃物痕が残っている。一方、底面側には整形した痕跡を見あたらない。433は425の形態と類似していることから同じく小型の片口であろうか。434は428と同一形態の台脚付きの容器と思われる。底部は欠損部を復元すると約23cmほどあり、428よりも一回り大型の容器になるであろう。平行した台脚は底部の縁寄りに付いているが、欠損しているため高さは不明。



第75図 容器5（その他容器）

J 遊戯具

a 琴

琴は合計3点出土している。1点は槽作りの琴、2点は棒状の琴である。いずれも自然流路(SR01)包含層より出土している。

435と436はほぼ同サイズ・同形態の棒状の琴である。いずれも琴本体の断面が半円形を呈し、琴頭に集弦孔を持ち、琴尾には4つの突起、琴尾裏面は先端に向かって薄く削られたり、また有段になっている。さらにこの削り込みのほぼ中央に琴の長軸に並行しているV字状の切り込みがある(註33)。

435はほぼ完形品。残存状態は非常に良く逸品と言えるものである。自然流路(SR01)の第I層より出土し弥生時代後期前葉に属する。材質はヒノキで、半裁材を削り込んで作られている。表面には加工された時の刃物痕が明瞭に残っている。琴頭の集弦孔は平坦面側から穿孔され、裏面は琴の長軸に直交する方向に0.5cm幅で切り込まれている。全体に非常に丁寧な作りである。琴尾には3つの突起のほかにもう1突起あった痕跡があることから4突起と考えられる。裏面は段になるよう切り込まれ、琴尾先端は1.0cmと薄い。琴尾の突起根元の両脇には、明らかに弦が張られていたと思われる摩耗痕がある(図版59)。弦は突起に結びつけられて、集弦孔側へ引っ張られていたと思われる。この痕跡は弦の張り方や弦の本数を明らかにする上で重要な意味を持つものであろう。

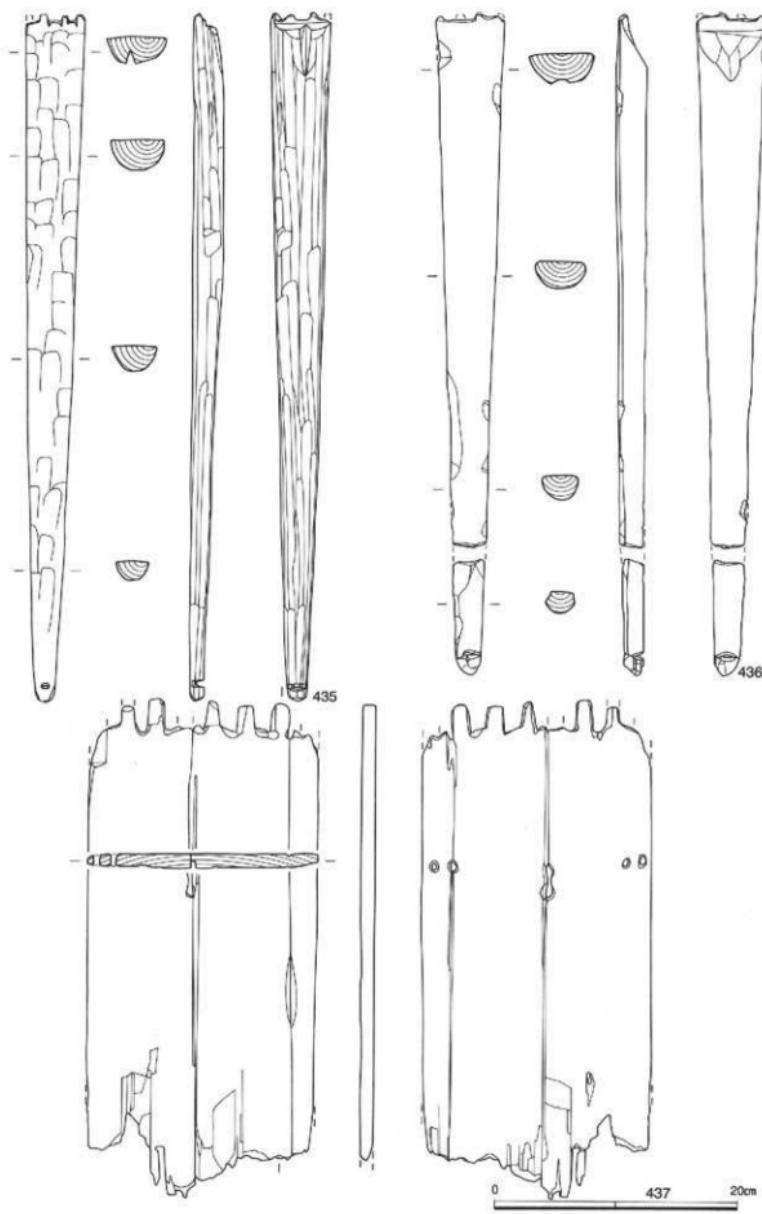
436は途中琴頭近くで折損しているものの、ほぼ全形を復元できる。435とほぼ同一の形態を持つ琴である。自然流路(SR01)の第II層より出土し、時期は弥生時代中期後半～後期前葉と考えられる。材質はクリで、半裁材を削り込んで作られている。クリ材のためであろうか残存状態は良くない。琴頭には集弦孔があるが435に比べて粗悪な作りである。琴尾は突起の痕跡が残っており、435と同じく4突起であったと思われる。裏面はかなり深く削られ、琴尾先端はわずかに0.8cmと薄くなっている。

437は「槽作り」と言われる琴の琴板部分で、本来共鳴槽を作り。槽作りの琴は自然流路(SR01)第II層より出土しており、概ね弥生時代中期に属するが、厳密に言えば弥生時代中期後葉～後期前葉の時期である。材質はヒノキで、ほぼ平坦な板目板を使っている。全体に風化が著しく進んでおり、はっきりとした加工痕や原形が留めない部分もある。437は琴尾側であり、琴尾先端から約40cmほどのところで折損している。また琴板のみで共鳴槽は伴っていない。左右両脇には琴板と共に槽とを固定結縛するための孔が2ヶ所ずつ開けられている。結縛孔はいずれも直径約0.6cm前後の円形の孔である。それ以外に中央で縦割れた部分にも孔らしきものが認められるが、全体に腐食しているために欠損前のものか後のものかはわからない。琴尾側には5つの突起が残っているが、残存している突起の間隔や欠損の痕跡から合計8突起あった可能性がある。突起先端及び付け根等に弦(註34)を緊縛したような痕は見られない。

註33 同じようなV字状の切り込みは、工具の項目に掲載した加工斧の柄(曲柄)台部裏面にも見られる(図版41)。

註34 弦は残存しない。弦の材質も不明。弦のかけ方(張り方)によって弦の数が異なることも考えられるが、8突起が8弦であった可能性が高い。

第76図に掲載した槽作りや棒状の琴3点以外にも、琴に類似する形態を持つ木製品が3点確認されている。部分的には琴と類似した構造を持っているが、どれも琴とする決定的な根拠に欠けるためにこの3点は琴の中に収録せず、用途不明木製品として扱うこととした。いずれも自然流路(SR01)包含層から出土している。



第76図 遊戯具(琴)

K 祭祀具

a 武器形木製品

第77図438・440は自然流路（SR01）第I層より出土した弥生時代後期に属する武器形木製品である。続く441・442も自然流路（SR01）より出土し、概ね弥生時代中期に属する。

438はクヌギ節の柾目材でつくられた製品である。上下両端は欠損しているが剣形木製品と思われる。上部は復元した最大幅が約7.3cmほどあり、表裏両面の中心に稜が通っている。断面形が菱形を呈し、両脇へいくほど刃物のように薄くなっている。下部は棒状で径は2cm前後、下方へいくに従って幅広になっていく。440は刀形か。片側面には背があり、もう一方は刃物のように薄く削られている。また上部は使用のためかあるいは磨かれたためか加工痕が見られない。下方8cmほどは加工痕が顕著に見られ、だんだん細く尖らせている。茎を表現しているのであろうか。

441は鋭い刃部はないが形状から刀形と考えられる。下部の抉りの入った加工は茎を表しているものか。442は中期中葉～中期後半期の剣形木製品で完全な形で残っている。樹種はコウヤマキ。剣の上部は約30cmほどの長さがあり、全体に細身で薄い板状を呈する。上端から3cmはさらに薄く、先は鋭く尖らせてある。中央には稜が通り断面形は菱形になっている。茎は両脇から削り出されており、長さは6cmほどある。

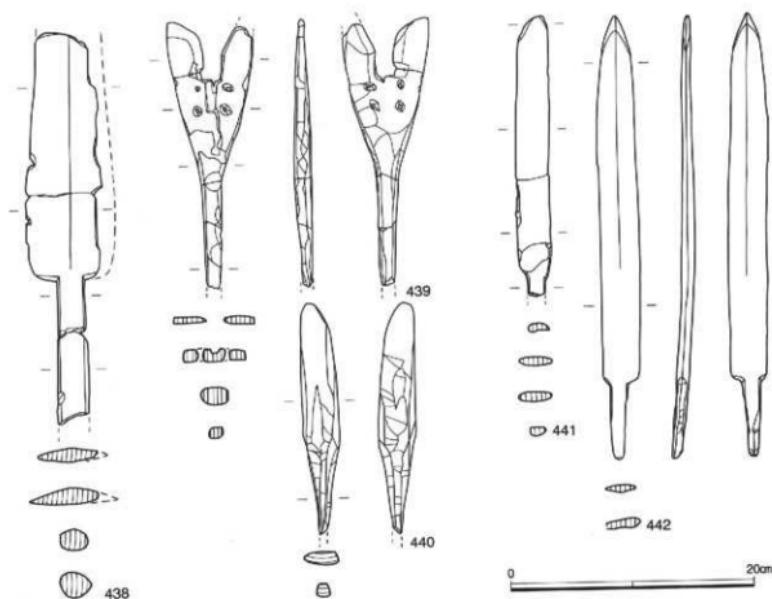
b 舟形木製品

弥生時代の舟形木製品は合計7点ある。このうち弥生時代中期に属する舟形は5点（443～446・449）、後期に属する舟形は2点（447・448）ある。いずれも自然流路（SR01）の包含層より出土している。

舟形に使われている樹種は、弥生中期ではヒノキ、スギ、サカキ、クロベ？、弥生後期ではタブノキ、ヒノキが選択されている。木目（木取り）はすべて板目。

出土した舟形木製品はいずれも内面をくり抜き、立体的に表現されたものである。しかし個々の造りを見ると、単純に板材の両端を尖らせて内部を浅く削ただけのものや、一方、それに比して表面を磨いて滑らかに仕上げている非常に丁寧な造りのものまである。また構造的には、上面先端に船首（舳）を表現したと思われる切り込みがあるものや、くり抜かれた内部の上下端に舷を支えるための隔壁を表現したと思われる削り出しがあるものなど、模造品とは思えないほど精巧な造りをしている。全長は17.4cmから最大59.2cmを測るものまである。また全長に対して舷の幅が狭く、全体に細長い形態の舟形が多く見られる。

第78図443は片側面は欠損しているがほぼ全長は復元できる。最大幅は復元すると約5.8cmほどあったと思われる。船首と船尾との区別は不明確で、舳先両端は破損している。船底面は平坦で、側面は加工痕が顕著に残っている。深くくり抜かれた内部の上下端には舷を支えるための隔壁を表現したと思われる削り出しがある（図版61）。隔壁と思われる削り出しあるは0.5cmほどの厚さがあるが著しく破損しているため幅や高さは分からない。444・445はほぼ同じような形態の舟形木製品である。全体に板状を呈し、上面側が浅く窪んでいる。長軸の両端部は細く削られている。他の舟形に比べ造りはいたって粗雑な感がある。446は資料中最大の舟形で59.2cmを測る大型品である。船底面側の一端には孔らしきところがあるが人為的な加工か節穴か判別できない。これを人為的な孔と考えると、こちら側が船首であろう。上面周囲は欠損している。内面は平坦に加工され刃物痕が多数残っている。船底面も平坦で加工時の痕跡がまったく残らないほど非常に丁寧に磨かれている。しかし側面は加工時の痕跡が顕著に残っている。449は446とは対照的に小型の舟形である。内部は深くくり抜かれて側面や船底は約0.2cmとかなり薄くなっている。内面と底面の両端が黒く変色している。

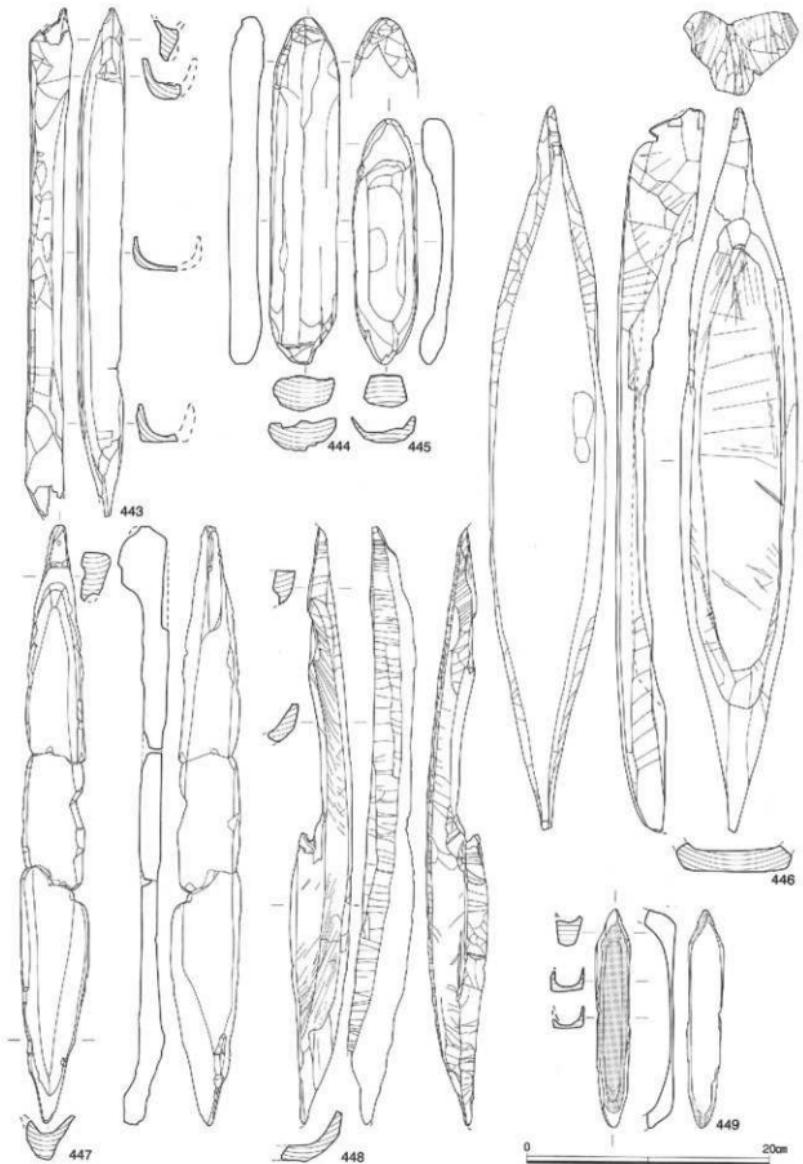


第77図 祭祀具1（武器形他）

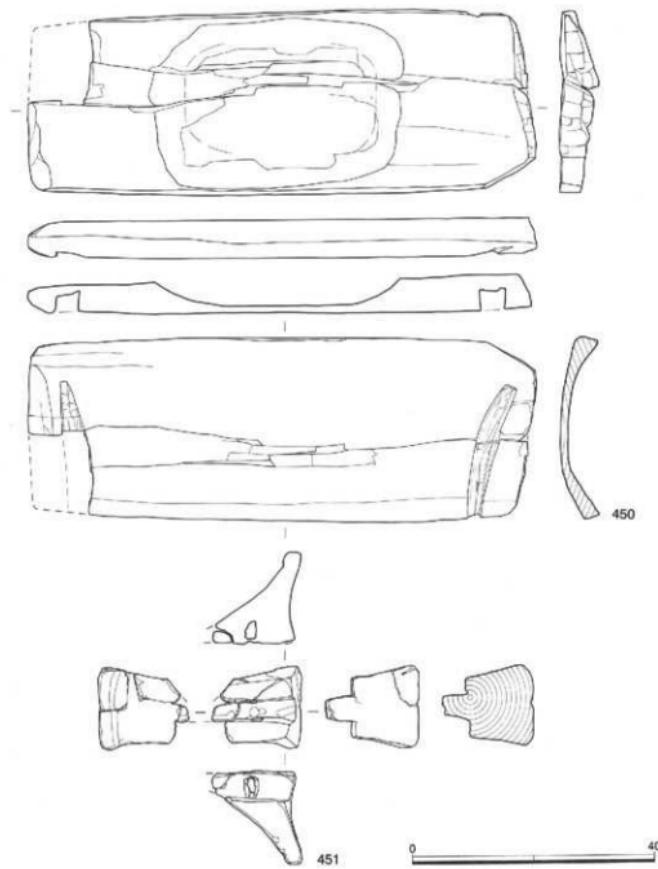
447・448は弥生時代後期の舟形で、ほぼ同じ大きさである。447の一端には貫通していない小さな孔と別の部材をはめ込むためと思われる切り込みがある（図版63）。これらの加工は船首側を表現していると考えられる。残存状態が悪く脆弱で両側面は欠損している。448は $1/2$ ほど欠損しているが舟形と分かる製品である。上面の上端部にはごく浅い切り込みがある。これも船首の表現の一部か。全面に加工時の刃物の痕跡が残っていることから未製品とも考えられる。内面は削りぬかれ、引きずられたような刃物痕が無数にある（図版63）。側面から底面にかけての加工は荒削りである。

c その他

第77図439は杖の一部と考えられる。自然流路（SR01）の第Ⅰ層より出土した後期に属するもので、樹種はアカガシ亜属である。全体は厚さ1 cmほどの板状で、上部は逆三角形を呈し先端は二又に分かれている。その中央部には長さ2.7cm、幅0.8cm、深さ0.4cmほどの溝が切り込まれている。溝は片面側にしか見られない。その溝の両脇には4ヶ所の孔がある。孔は径が約0.8cmほどの円形で左右両側に2ヶ所ずつある。下部は柄または軸部となっている。端部は折損しているためもとの長さは不明だが、下端部へいくほど細くなっていく。表面はかなり劣化しているが表面は磨かれ丸味を帯びていたと思われる。上部の構造はこれで完結しているものではなく、おそらくもう一対の二又の木製品を溝にはめ込んで十字状に組み合わせてあったのではないかと思われる。両脇にある孔の用途は特定できない。



第78図 祭祀具2（舟形）



第79図 雜具（腰掛・各種部材）

L. 雜具

a 腰掛

長方形の座板が1点出土している。第79図450は最大長が83.5cmほどもある大型品である。樹種はツブラジイの板目材で、座板上面側が木表になるよう木取りされている。座板上面の中央には尻受けが加工されている。尻受けは座板の約半分ほどの面積を占め、隅丸方形を呈し、長軸が約42cm、短軸が約28cm、深いところで約4.4cmほど彫り込まれている。このため尻受けの底は非常に薄くなり、腐蝕もあってか破損が著しい。座板の下面是短軸方向の左右両端にややカーブした溝が彫り込まれている。溝は幅4cm、深さ4cmほどで、片側面側は貫通しているが、一方は先端が細くなり途中で終わっている。この溝に脚

になる部材を取り付けたものと思われる。座板の端面は板材から伐り出した時の切断痕がはっきりと残っている。尻受けが彫り込まれている点では未製品とは思われないが、左右が不整形であったり、端面に加工痕が残るなど造りはやや粗雑な感じがある。

b 各種部材

451はケヤキの芯材部分でつくられた製品である。上面は平らに削られた面から幅2.6cm、厚さ4cmほど突出した部分があり、その側面から方形孔が貫通している。方形孔は両側から穿孔され刃物痕も顕著に残っている。下面の曲面部分は床面から約45°の角度があり、下から0.8cmのところはわずかに段になっている。当初この製品の用途は上面の突出した部分を別の部材の溝に差し込んで組み合わせる製品、つまり机もしくは腰掛の脚であろうと考えた。しかし上面の形状だけを見ると本遺跡でも出土している鏡(註35)の把手部分に非常によく似ている。脚か、または鏡とする確実な根拠はないため、実際の用途や天地左右は分からず、用途不明木製品の中に含めるべきかもしれない。

註35 第II章 第5節 A農具の項目参照。

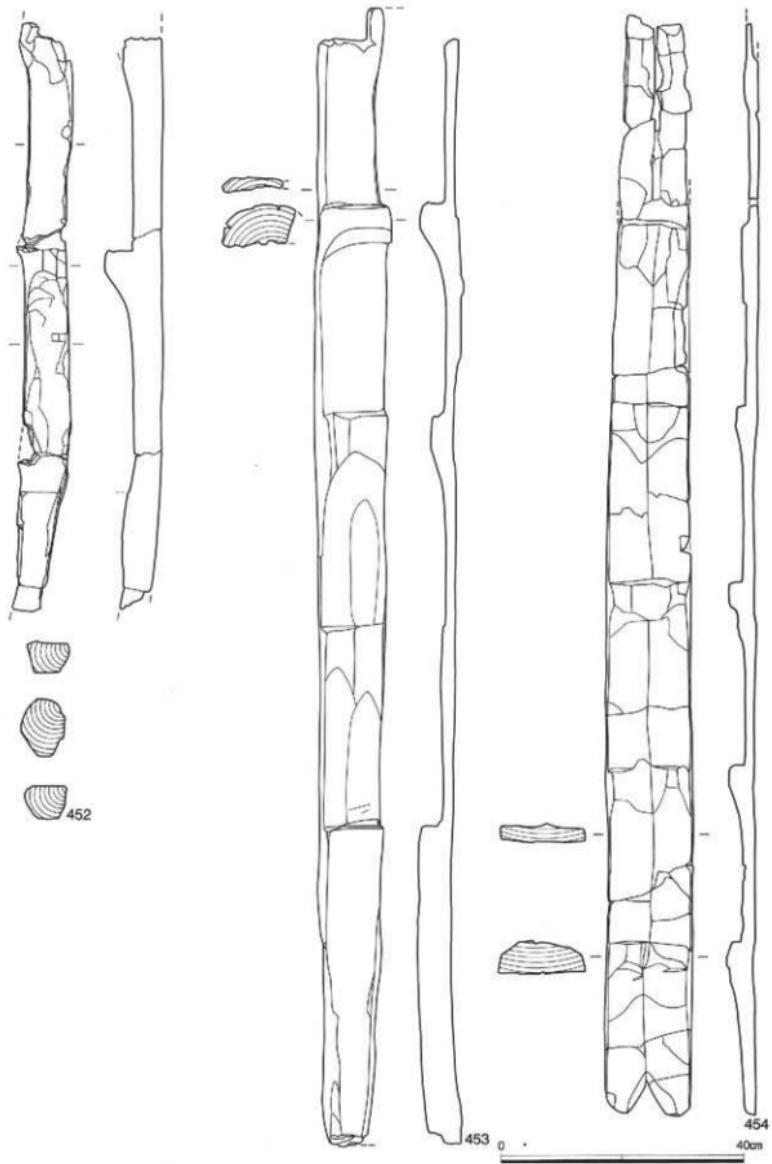
M 建築材

a 梯子

梯子は第80～83図に収めた452～469と他5点、合計23点ある。大半が丸太材または半裁材から削り出された一本梯子である。使われる樹種はクリ材が多く、全体の約56%、約半数以上を占めている。クリ材以外にはクヌギ節、ユズリハ属、ネムノキ、クスノキ、ハリギリ、ヒノキ、ツブライ、スダジイ、二葉松類などの材がある。

弥生時代中期に属する製品は5点ある。このうち3点は調査区北側で検出された溝状遺構より出土した梯子である。他2点は自然流路(SR01)の包含層である。第80図452は破損個所は多いが幅の狭い梯子と思われる。足掛けの段差は4.6cm、間隔は約36cm前後ある。裏は平坦面になっている。453・454、他1点は溝状遺構(5SD33・34)より出土した梯子である。453は溝状遺構(5SD33)にほぼ直交する方向で出土している。中央部分で縦割れている。半裁材の木表面側に足掛けが削り出されている。段差4.2cm、足掛けの間隔は約33～35cmある。上端部には出納がつくり出されている。454は溝状遺構(9SD34)に横たわるような状態で出土している(図版64)。上端側は南側に、下端部は北側に向いている。下端部より4段目の裏面側は横木で支えられている。出土状況から溝を渡るために架けられていたものとも考えられる。下端はまん中が抉り込まれたW字形を呈する。段差は2.4cmと浅く、足掛けの間隔は30cm前後である。上端部は著しく風化し破損している。木取りは板目である。他2点は足掛け部分が残っていることから梯子の断片と判断した。

弥生時代後期に属する製品は18点ある。このうちの13点が自然流路(SR01)の第I層より出土している。第81図455は幅が10cm以下と非常に狭い。破損が著しく原形や木取りは不明。456は同一個体と思われるが接合点がない。全体に腐蝕が激しくわずかに足掛けが残っている。457は上下端部が欠損している。半裁材から加工されている。458は20.4cmの幅広の梯子である。木取りは板目。上端部は欠損し3段の足掛けが残っている。段差は3.2～4.0cm。足掛けの間隔は2段目が20cm、3段目は30cmある。下端部はW字形に加工されている。459・460はいずれも断片で風化が激しい。第82図461は残存状態が悪い。数カ所に節があり良材とは言えない。上端は火を受け炭化している。462はヒノキ材の梯子でやはり節が多い。上下とも欠損し、さらに裏面は木目に沿って芯材部分が抜け落ちている。463は芯持ち材で幅も極端に狭い。しかし3段の足掛けが確認できる。464も芯持ち材で足掛けが1ヶ所ある。465は多量の



第80図 建築材1(梯子1)

自然木とともに8層上部水田より出土した梯子である。幅広で最大幅は24.2cmを測る。表面には丸太面が残っている。裏面には平坦に加工したときの刃物痕が顕著に残っている。段差は4.2~6.2cmと高く、足掛けの間隔は30cm前後で平均的である。466やその他3点は足掛けでかろうじて梯子とわかる断片である。第83図467は遺跡内では最大の梯子で197.2cmある。一見、足掛けと足掛けの間にスリット状に見えるが、人為的にあけられたのか、または芯持ち材のため芯材部分が抜け落ちているためか、いずれにしても風化が著しく意図的なものかどうかは判断できない。468は全面火を受けて炭化し、大きく歪んでいる。一部接合点がないところがあるが同一個体である。469は非常に残りが良い。ただかなり荒いつくりで、加工時の刃物痕も顕著なことから未製品の可能性もある。表面の高い部分は丸太面がそのままである。下端部はW字形の抉り込みを入れる途中だったのか。段差は3.8cm、足掛けの間隔は34.0cmある。左側面には1.0~1.5cm幅の圧痕が2ヶ所ある(図版65)。しかし緊縛などによる圧痕ではなく、意図的に切り込みを入れたような痕跡である。

梯子では弥生時代中期よりも後期の資料数が多い。静岡県内では静岡市登呂遺跡や同川合遺跡、同瀬名遺跡、垂山町山木遺跡より出土した梯子がある。やはり後期の資料が多い。樹種については、クリ材以外は特定の樹種を使っていないことから、手近な原材でつくられていたのではないかと思われる。原材も板材からつくり出されるものよりも、丸太材や半裁材から直接足掛けを削り出しているものが多く見られる。形態では完形品がなく全体の形状を復元できるものがない。ただ幅については10~15cm前後の狭いタイプと、20cm以上の幅広のタイプがある。中・後期ともにどちらのタイプもあることから時期差ではないと思われる。幅の大小によって用途や使われる場所などが異なるのであろうか。また足掛けの間隔は30~35cm前後ものが最も多い。欠損資料が多く残存状態が悪かったことからほとんどのものには端部の加工が残っていないが、453の出柄や、454・458のW字形の下端部など特徴的と言える。

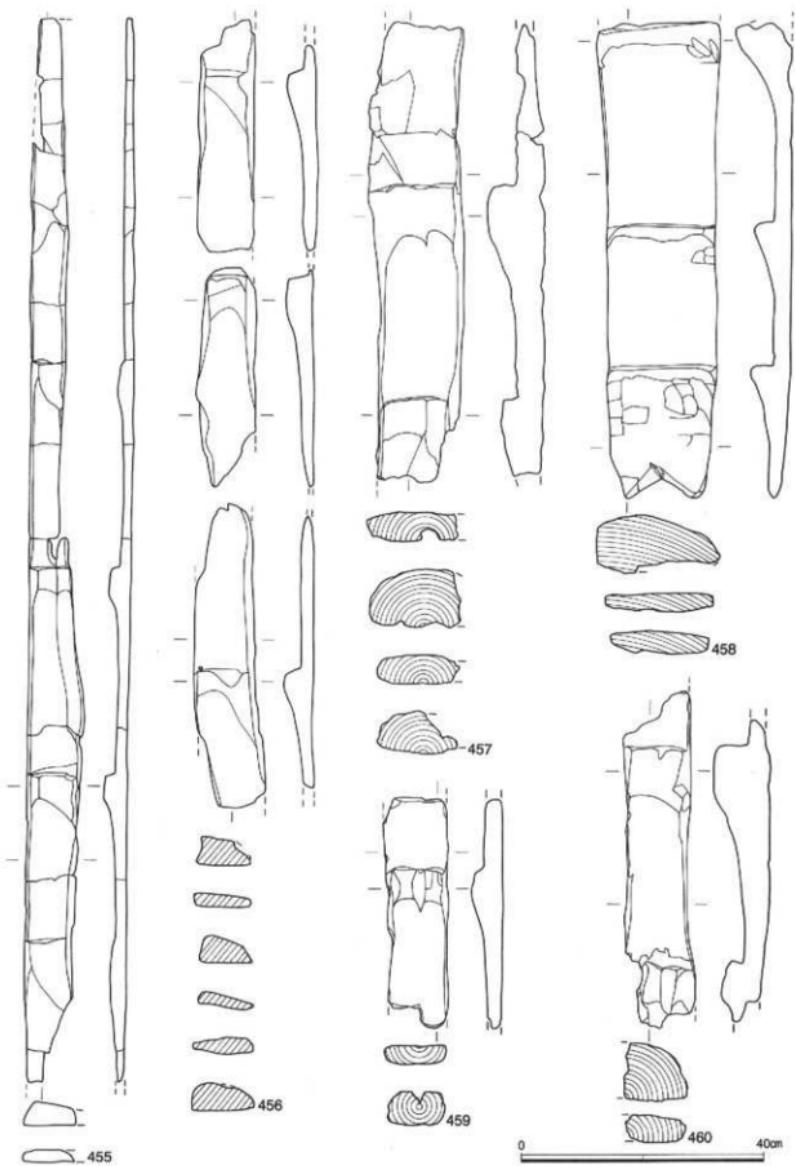
b 柄材

第84図の470~475は弥生時代中期、477~479は後期の資料である。樹種は数種類あり、イヌマキ、クリ、ヒサカキ、カヤ?、ネジキなどがある。すべて芯持ち材でつくられている。

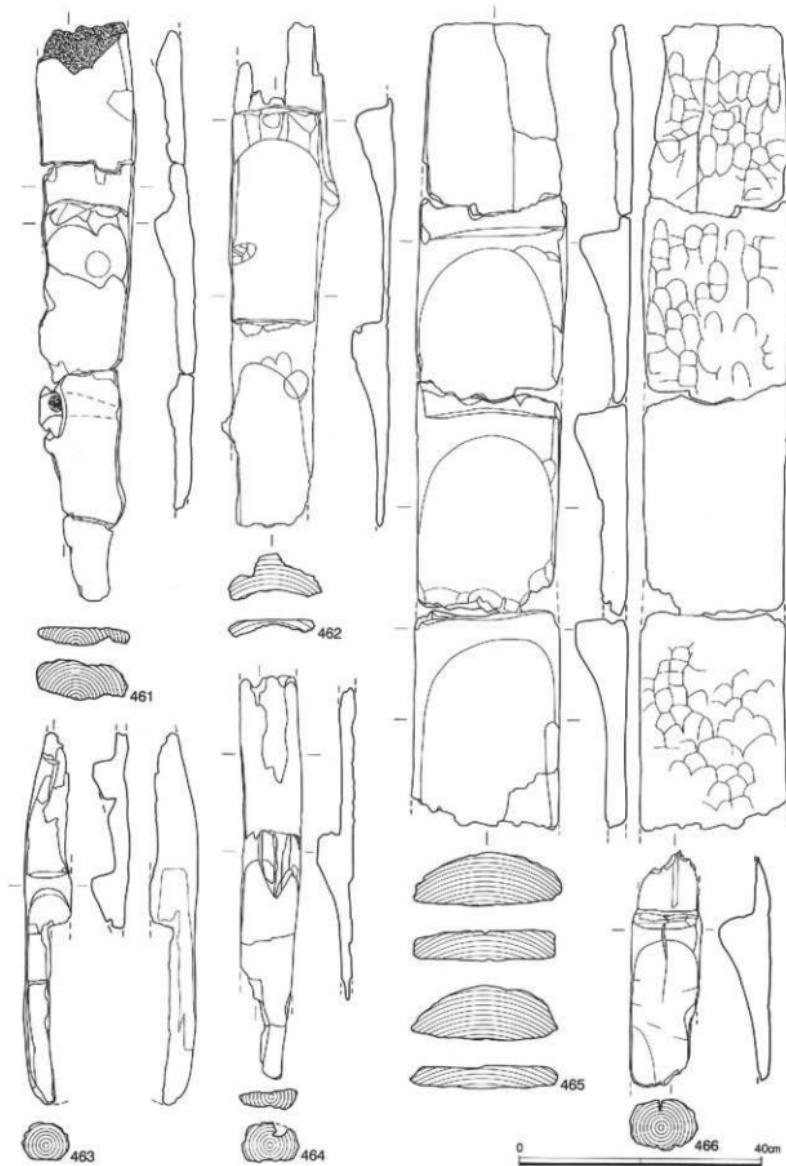
弥生時代中期の柄材はすべて自然流路(SR01)の包含層より出土している。470は直径が約5cmほどの丸木から軸部が削り出されている。頭部と軸部との間には1cmほどの段差がある。頭頂部はフラットな平坦面である。軸部は方形で、その四方の角は面取りしてある。下端部は炭化している。471も一部火を受けて炭化しており下端部が欠損している。頭頂部は中央に向かって四方から削り込まれ、刃物痕も残っている。472は残存状態が非常に良い。頭頂部は471と同じ加工が施されている。他の柄材に比べて頭部は細長く、軸部もさらに細い。軸部のほぼ中ほどには長方形の孔が穿たれている。孔は縦1.2cm、横0.7cmで両側面からの穿孔である。加工痕は顕著に残っているが磨かれたような仕上げは見られない。473はほぼ完形品だが、風化が著しく進み原形が不明確である。474は軸部の下端が炭化している。頭部が大きすぎる感があり別用途の可能性がある。475も大型の完形品。頭部の外周面は丸木面をそのまま使っている。軸部には細かい加工痕が4面とも見られる。下端部は四方向から切り込まれ、その中央部は最後に折り取られたような痕跡がある。

弥生時代後期の柄材は数が少ない。後期の資料は自然流路(SR01)の第I層、8層上部水田より出土している。477は475と同一形態の製品である。製作方法もサイズもほとんど同じだが、軸部の中央に貫通していない孔の痕跡がある。丁寧に切られた孔ではなくかなり粗雑な加工で、断面形は彫り鉢状を呈する。479の頭頂部は平坦面で頭部の外周面は丸木面である。軸部は断面形が長方形を呈する。軸部に比べて頭部の分量が大きい。

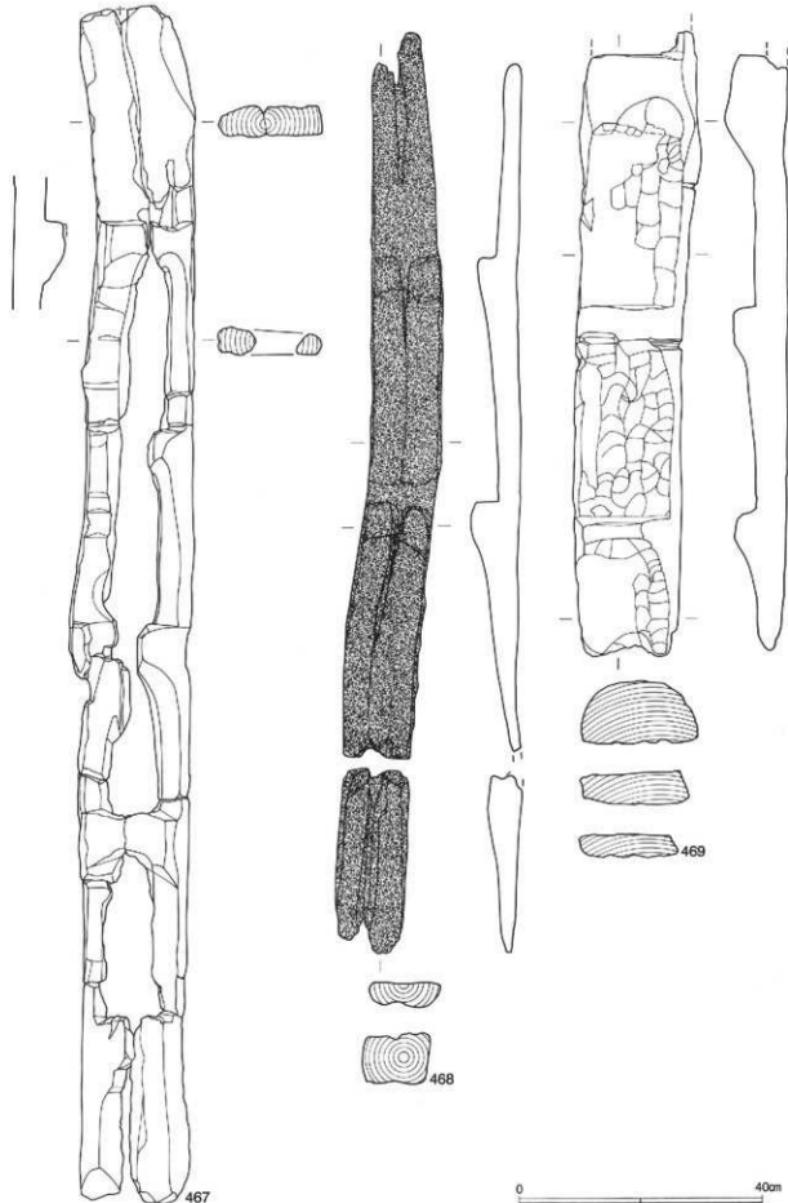
478は自然流路(SR01)より出土しているが層位不明のため時期が確定できない。頭部外周面は丸木面



第81図 建築材 2 (梯子 2)



第82図 建築材3 (梯子3)



第83図 建築材4 (梯子4)

を残していることから、直径約7cm程のイヌマキを使っていることがわかる。軸部は直径3.0cmまで削り込まれている。縦方向に細い加工痕が全周に残っている。下端部は炭化している。

枘材の用途は柱材に差し込まれた横架材（架・桁材）が抜けないようにするための栓（ダボ）の役割をするものと考えられる。472の枘孔はこのような栓（ダボ）として打ち込まれ貫通した部分へさらに楔状の製品が差し込まれたと思われる。475・477などの大型品はかなり大型の建物か、主柱に近い場所に使われたものであろう。このような枘材の存在は、弥生時代に既に、複雑な加工を要する建物の構造材の組み方があり、それらを加工するための工具も充実していたことを示す重要な資料であろう。

c 鼠返し

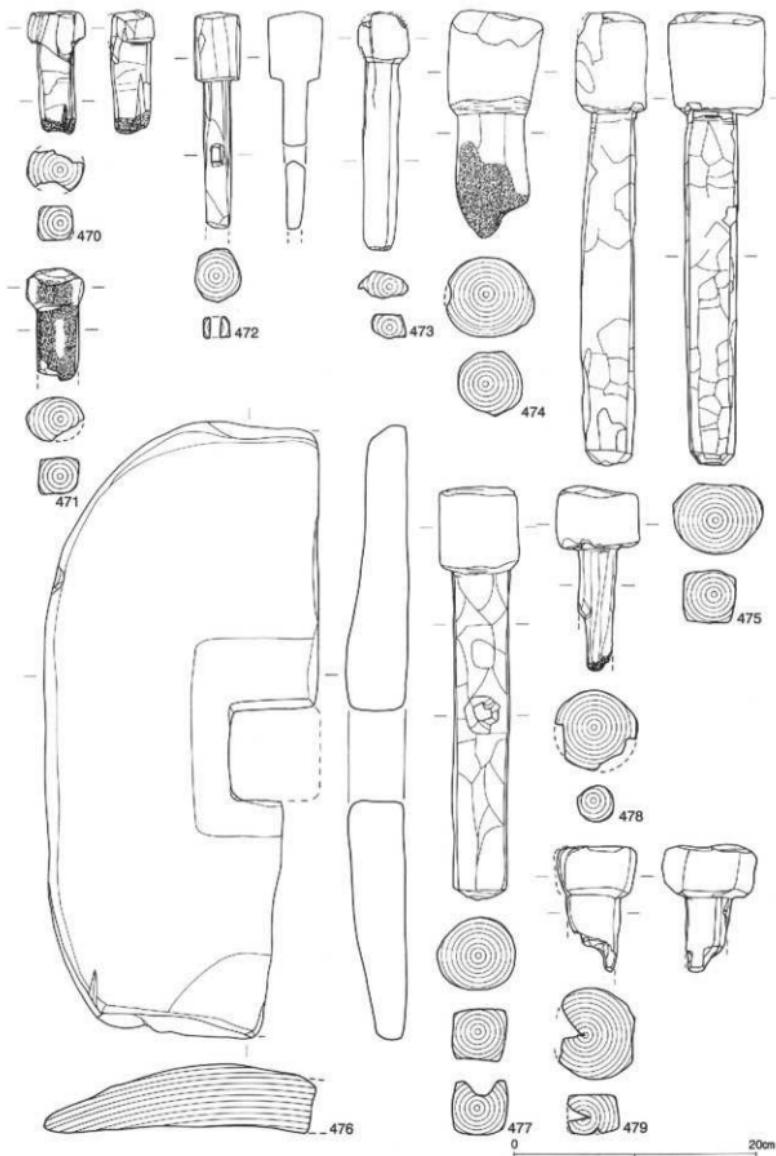
当遺跡で出土した鼠返しは第84図476の1点のみであった。自然流路（SR01）の第I層より出土した。原材はクリの板目材が使われている。平面形態は隅丸の長方形で、欠損している部分を復元すると最大長50.8cm、最大幅は約34cmほどになると思われる。中央部に位置する孔は一辺が約7.5cmのほぼ正方形を呈するものと思われる。中央部がその方形孔に沿って隆起している。隆起は緩やかで明瞭な稜線を伴なわない。鼠返しは最大で5.7cmの厚さがある。裏面は平坦で約半分ほど炭化している。県内ではやはり静岡市登呂遺跡、同川合遺跡、瀬名遺跡、蘿山町山木遺跡から多量の鼠返しが出土している。しかし遺跡内からは梯子や垂木など多量に出土しているのに対して鼠返しの出土量は極端に少ない。

d 柱

柱は自然流路（SR01）の包含層より出土したものと、溝状遺構より出土したもの、および柱穴に残っていた柱根などがある。柱根は柱穴のなかに残っていた柱の断片である。残存状態が極めて悪く図化も写真撮影も出来ない状態であったが、樹種同定はかろうじて可能であった。同定の結果は第16表に掲載してある。一方、図化できた柱は第85図480・481のみである。

480・481は弥生時代中期に属する。480は自然流路（SR01）の第IV層より出土した。直径約11cmほどのクリの丸木である。頭頂部には出柄がつくり出されている。出柄の長さは8cmほどで直径3.9cmの円柱状を呈する。上面はフラットな平坦面ではなく出柄の根本に向かって浅く窪んでいる。下方は火を受けて炭化している。481は調査区の北端、5・6区、9区にまたがって検出された東西方向に平行した2本の溝の南溝（5SD33）より出土した（図版64）。溝に横たわるように、底面に接していることから弥生時代中期の製品と思われる。直径約12cmほどのイヌマキの丸太でつくられている。先端の一部と下端部が欠損している他はほぼ完形に近く全長は256.6cmを測る。削り出し部分の長さは69.6cm、円柱部分は187cmある。削り出し部分は丸太から角柱状に削り出してあり断面は9.2×6.6cmの長方形を呈する。四面とも刃物痕が明瞭に残っている。上部の20cmほど、先端に向かって細く削られている。また削り出し部分の根本から約10cmほど浅く括れたようにへこんでいるのは鼠返しが装着されていた部分と考えられる。円柱部分は節痕が見られないほど滑らかであることから自然の丸太面のままではなく、表面が仕上げに磨かれていると思われる。下方は地中に埋め込まれていたため腐蝕したものとすれば、地表面から床まで約150cmほどの高さがあったと思われる。この柱は削り出し部分が若干短いが、先端の加工が二次的である可能性も加味すれば、蘿山町山木遺跡ほかで出土している柱と同じ、高床倉庫の柱であったと考えられる。

柱根は弥生時代後期が2点、弥生時代には属するが時期不明が2点ある。後期の2点は柱穴の底面にわずかに残っていたもので原形を留めないとほど腐蝕している。樹種同定の結果はクリ材とユズリハ属材であった。時期不明の2点は一方は自然流路（SR01）の包含層より出土し、他方は柱穴より出土している。いずれもクリ材である。やはり計測不可能なほど朽ち果てている。



第84図 建築材 5 (鼠返し・枘材)

本遺跡でも柱に使われる樹種はクリ材が多く、縄紋時代・弥生時代を通じて柱材はクリ材が多いという傾向と合致している。

e 台輪

ほぼ完形に近い台輪が2点出土している。いずれも8層下部水田につくられた畦畔(1SK01・7SK02)の横木として使われていたと考えられる。一部、畦畔から外れて散乱した状態で出土している(註36)。

第85図482はクリの板目材。直径が約17cmほどあった丸太を半裁し、さらに自然面側を落として板状にしてある。両側面は整形せず自然の丸木面を残してある。全長253.4cm、平坦面には4ヶ所の枘孔が切られている。両端の孔は約5cm四方の方形孔で、中央の孔は3.5×6.0cmの長方形を呈する。枘孔は表面の両面から穿たれている。中央の孔の間隔は約23cm、この孔とそれぞれの端の孔との間隔は100~110cmである。483はコジイの板目材で、こちらは整形された板材を使っている。全長は482よりも20cmほど長く272.0cmを測る。表面には全面に加工痕が見られるが、裏面は風化が著しく進み加工痕がわからない。4ヶ所の枘孔はいずれも両側穿孔で、両端が約3.5×6cm、中央の孔は一回り小さく4.0×5.0cmの長方形である。枘孔の間隔は上から119.4cm、17.6cm、116.8cmである。また片側面にだけ約40cmほどにわたって削られた部分がある。

当初、用途は両者とも床材を支える台輪と考えていた。しかし厚さが4.6~6.0cmの板では床より上部の構造物を支えるには薄すぎるのではないかと思われる。台輪というよりも梁・桁などの横架材である可能性も考えられる。

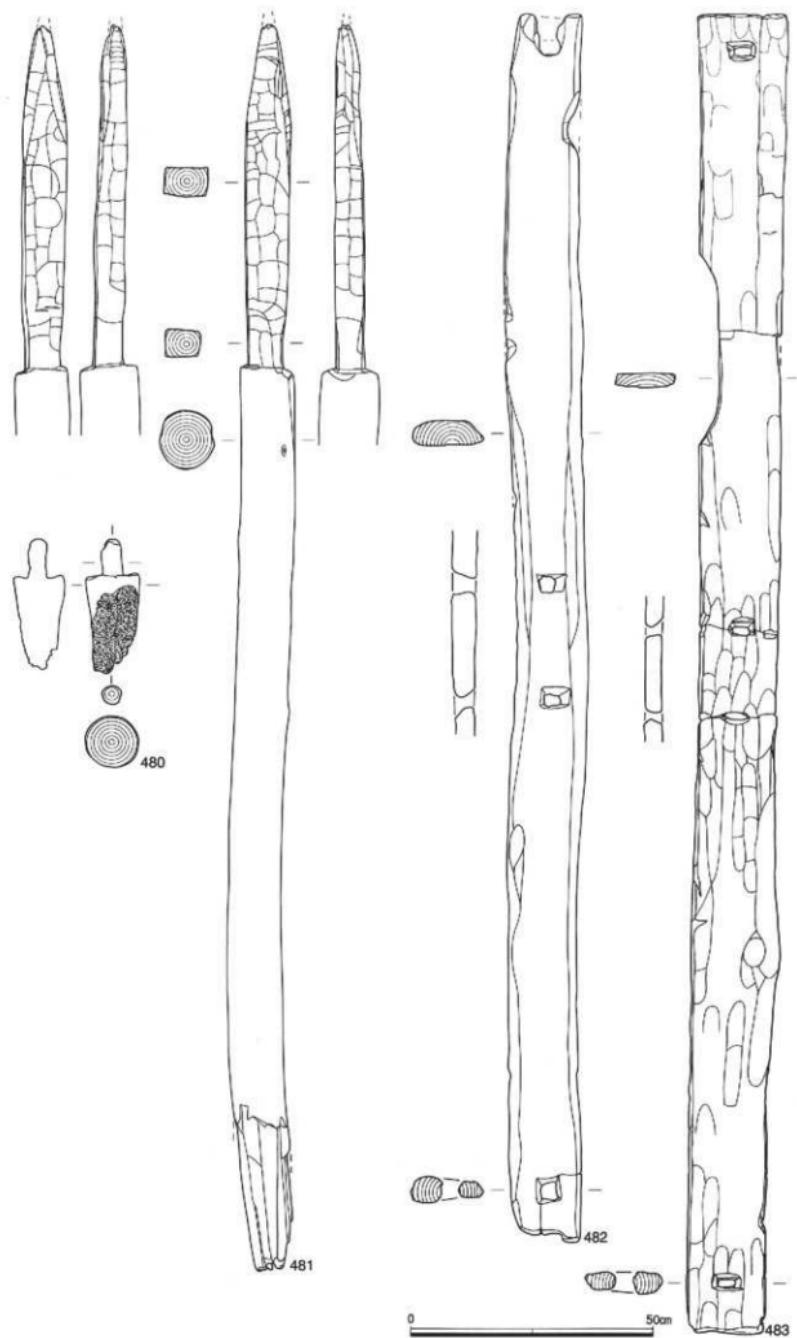
註36 詳細は『角江遺跡II 遺構編』(1996.3.30) 参照。

f 垂木

垂木は第86・87図にまとめた14点がある。弥生時代中期に属するのは1点のみで、他はすべて後期に属する。またほとんどが芯持ちの丸木でつくられている。樹木の種類はイヌマキが一番多く、続いてシャンボ、コナラ節、クヌギ節、クリ、クロベ、エゴノキ属などがある。

弥生時代中期の資料は485のみである。自然流路(SR01)中層より出土している。L字形の切り込みには長さがあり幅のある大型材に架けられていたと思われる。切り込み部分や先端には加工痕がある。表面には樹皮が付着している。折損しているため全長は不明。

垂木は弥生時代後期の資料が圧倒的に多い。13点中7点は自然流路(SR01)の第I層、その他は8層上部・下部水田より出土している。8層水田より出土した垂木のなかには畦畔の横木としてつかわれていたものもある。また図の上部にしたほうはすべて根本部分である。484は約4cmほどの自然木で樹皮が全面に付着している。486・487はほぼ同一形態の垂木である。486はほぼ全面に樹皮が付着している。下端部は斜めに切断されたようになっている。抉り込まれたなかにもう一段浅く段差がある。487は唯一板目材でつくられた垂木である。木表面に抉りが入り断面形は逆台形を呈する。下方は部分的に火を受けて炭化している。488も直径5.5cmほどの丸太を利用した垂木と考えられる。489の抉りはやや他と異なるが、やはり2.7cmの段差をつくり出している。490は完形品で2ヶ所に抉りが入っている。2ヶ所の抉りは切り込み方向が同一である。一部に樹皮が付着している。491の下端部は炭化している。頭頂部は斜めに切断され加工痕が顕著に残っている。492~497は直径4cm前後の丸木でつくられた長さ150cmを超える垂木である。492は上端部の表面に10cmほどの切り込みと裏側に小さな切り込みがある(図版68)。小枝は刃物で切断された痕跡がある。493は残存状態が非常に悪く大きく歪んでいる。樹皮がわずかに付着している。494は上下先端を尖らせてある。表面には節痕や虫食い、細かい傷が多い。495は上



第85図 建築材 6 (柱・台輪)

端が有頭状に加工されている。L字形の抉りは先端から21cmほど下に入っている。一部樹皮が付着している。496は完形品、8層下部水田の畦畔(7SK02)の横木材のなかから出土している。495のように先端が有頭状に加工されているが、その裏面はL字形に切り込まれている。抉りは下端部の同じ面側にもあり(図版58)、最下端面は真っ直ぐに切断されている。497も完形、266.9cmの長さがある。やはり抉りは2ヶ所が同方向にあり、その間隔は約200cmほどある。しかし抉りはL字形をせず粗雑な切り込みである(図版58)。表面は一部平坦に削られ加工痕も顕著に残っている。また節痕も払い落とされたままの状態で磨かれてはいない。

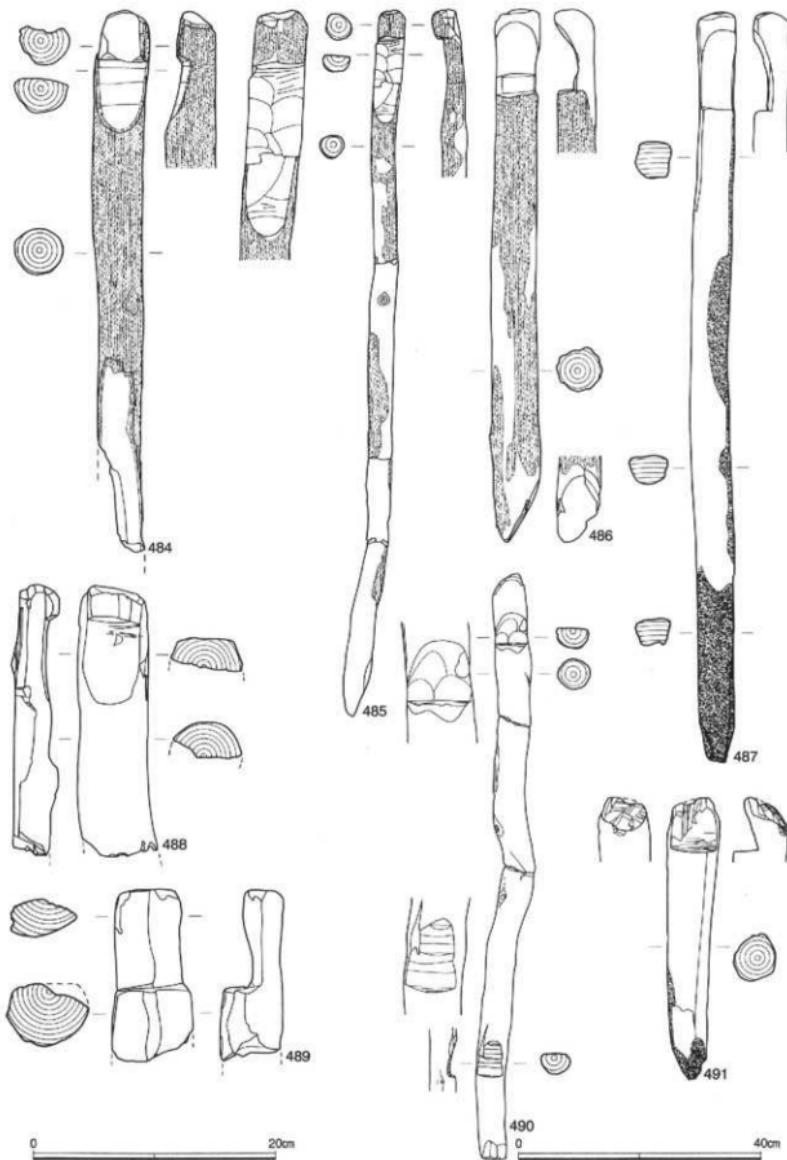
垂木に分類した製品は完全な形態を残しているものが少なく平均全長や抉りの間隔などを知り得ることができない。しかし裏面に別の抉りを持つものや先端に有頭状の加工が施してあるものなど様々な形態の特徴がある。

g その他

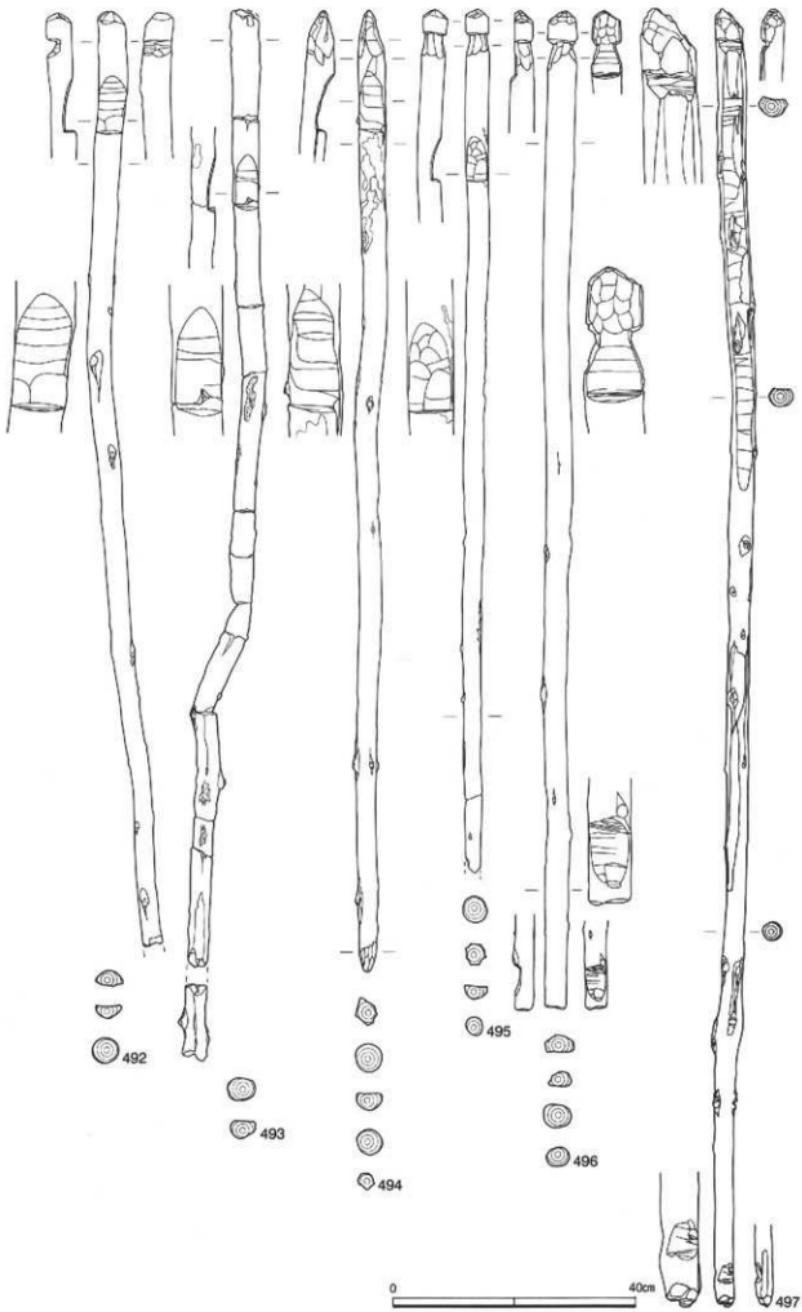
第88~90図には、建築部材と考えられるがその部位や用途が特定できない製品をその他としてまとめた(註37)。ただ所属する時期をみると弥生時代中期の資料はただ1点のみで、ほか28点は全て後期の資料となっている。樹種は約8割がスギ、ヒノキ、イヌマキ、モミ属などの針葉樹を使っており、広葉樹はクリやコナラ節等がごく僅かに見られるだけである。広葉樹が多用されている角江遺跡の木製品のなかで、建築部材については例外的に針葉樹が多いのは特徴のひとつと言えよう。

唯一、弥生時代中期の498は表面に段差を有する部材である。厚みのある左側には3ヶ所の穿孔があり間隔は17~20cm前後、薄く削られた右側には2ヶ所認められ孔の間隔は32cmほどある。左側の孔の一つに相対する右側面に浅い圧痕がある。別の部材とを固定するため緊縛した痕跡の可能性がある。また右側面にはL字形に抉られた部分がある。

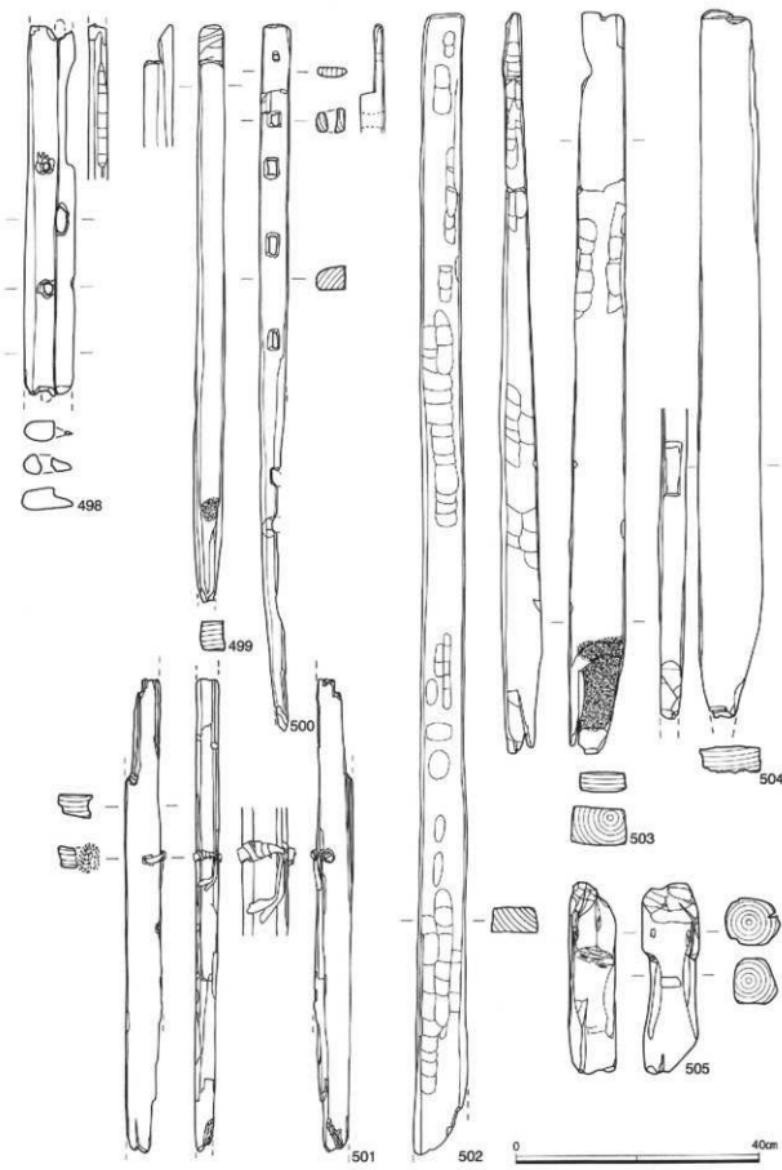
499~522、他4点は弥生時代後期に属する。自然流路(SR01)第I層からは16点、8層上部・下部水田より出土したものが各6点づつある。499は表裏面は加工面で両側面は剖面の角材(板目)である。上部には切り込まれた段差があり、下部には一部炭化した痕がありその下方は著しく風化している。500は一辺が5cmほどの角材で上部にL字形に切り込まれた段差を有する(図版71)。穿孔箇所が7ヶ所ある。上部の穿孔は別部材と相交織状に組み合わせ固定するため栓が差し込まれた孔と考えられる。下方の穿孔は約3.6×2.4cmほどの一回り大きい孔で間隔は均等ではない。501は欠損部分が多く原形が分からぬが厚さ4cmほどの板目板材であったと思われる。右側の中程の穿孔部分に緊縛された状態の樹皮が残っている。右側面は凹面状に浅く窪み、この凹面に別材の凸面を組み合わせ樹皮で緊縛し固定されていたと考えられる。樹皮のなかにこの別材と思われる木片が残っている。樹皮は幅0.9cmほどで穿孔部分に何重にも通され結び目もある(図版71)。502~504は比較的厚みのある細長い角材である。502は加工痕が見られる。503は下方に幅広になる。左上部に切欠きがあり下端部は炭化している。504の左側面には8.0×2.4cmの方形の圧痕がある。505は芯持ち材で両側面から抉りが入っている。506以降は板材をまとめてある。507は厚さ2.5cmほどの板材で3ヶ所の長方形孔がある。上から2番目の穿孔には紐ズレのような痕跡がある(図版71拡大写真)。形状は左右非対称である。508には上下に横長の大きな枘孔、側面端に縦長の小さな枘孔がある。穿孔に特別な規則性は見られない。510は穿孔途中の痕跡がある。512は非常に保存状態の良い製品である。正面側と両側面には全面に加工痕があるが、木表面はその加工痕がまったく見えなくなるほど磨滅している。上下に約2.6×2.4cmの方形孔がありその間隔は67cmほどある。上端から5cmは1cmほどの段差が切られている。513も512と同じような特徴を持った製品である。こちらは上下に段差が切られ、下方の穿孔脇には緊縛されていたものと思われる圧痕が見られる。514・515は風化が著しく進み残存状態が悪い。516は上端に長さ6.8cmの出枘がつくり出されて



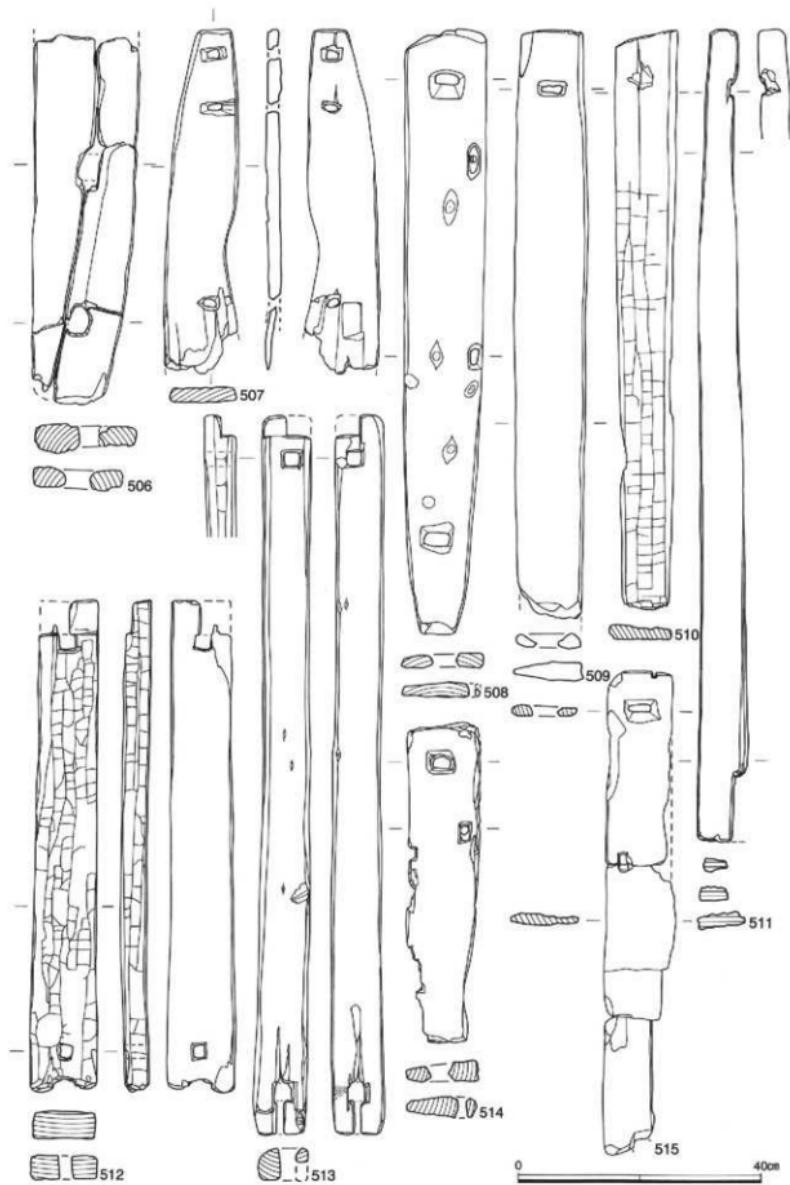
第86図 建築材7 (垂木1)



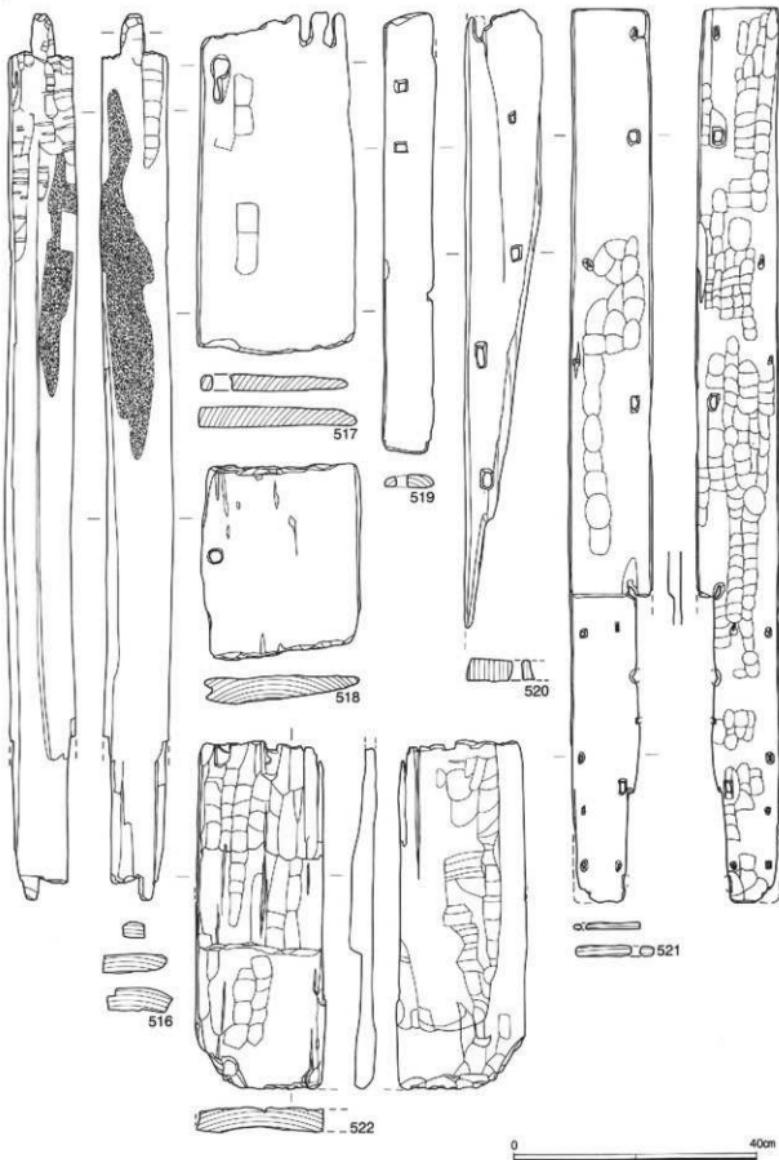
第87図 建築材 8 (垂木 2)



第88図 建築材 9 (各種部材 1)



第89図 建築材10（各種部材2）



第90図 建築材11（各種部材3）

いる。正面は木表面のままで木裏面には面調整の加工痕がある。両面とも部分的に炭化している。517・518は厚みのある板材。518の左側面は溝が切られ凹面になっている。上下は二次的に切断されたものと思われる。円形孔は節穴である。519・520も方形の枘孔のある板材。521は屋根板材か壁板材と思われる板目板である。2.2cmの薄板で途中浅い段差がありさらに薄くなる。両面とも一面に面調整の加工痕が見られる。穿孔箇所は大小13ヶ所あり左右側面側に片寄っている。穿孔間隔は不均等で規則性は見られない。板材同志を緊縛固定するための穿孔であろう。522はヒノキの板目材。両面とも面調整の加工痕が明瞭に残っている。木表面には約2cmほどの段差が切り込まれている。さらに上方に向かってだんだん薄く削られている。

前述したように建築部材には針葉樹が非常に多用されている傾向がある。また鋸・鋤などの農具に使われる板材は圧倒的に柾目板が多いのに比べ、建築部材には板目材が多い。その他に含まれる板材は用途の特定できない部材が多いものの、部分的にでも板材の巻手方法がわかるものがある。いずれにしてもこれらの部材は今後の資料の増加とともに再検討が必要になろう。

註37 用途が特定できないためすべて天地左右は不明。

N 土木材

a 矢板

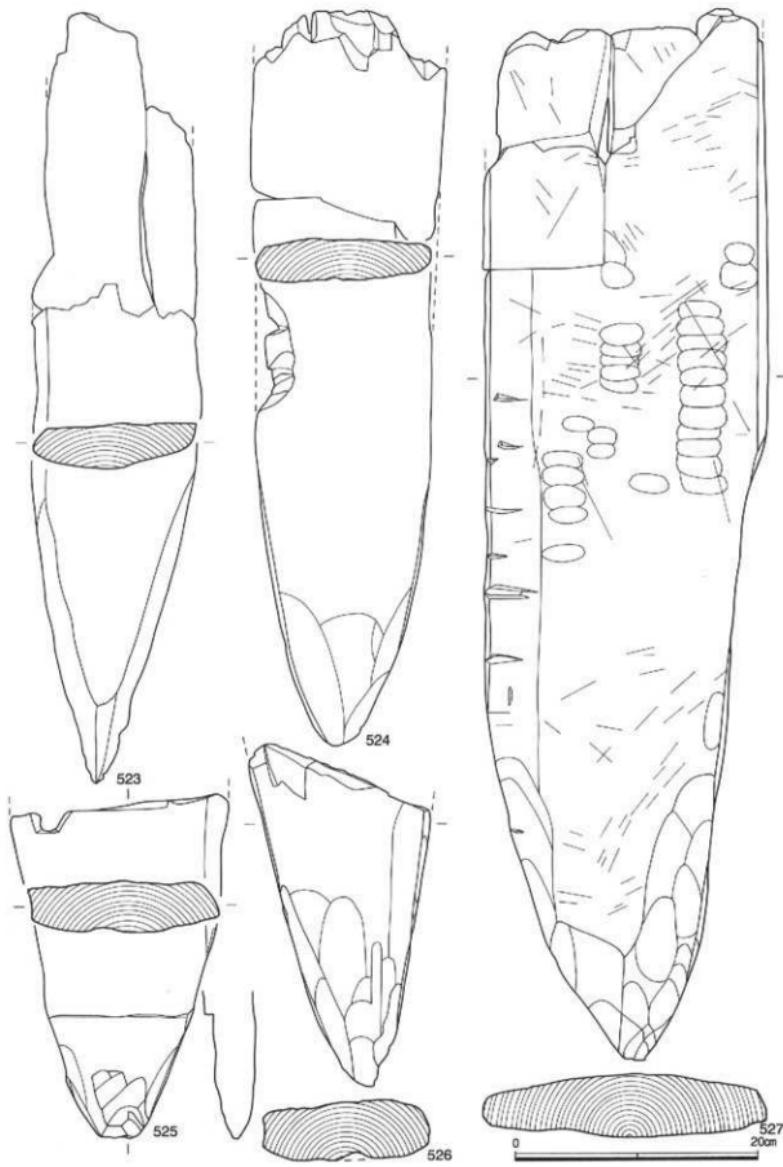
第91図にまとめた矢板は自然流路(SR01)北側の砂留杭列に使われていたものである(註38)。

523～527は弥生時代後期に属する。図版掲載していないがもう1点は自然流路(SR01)の包含層中より出土した中期の資料がある。矢板の樹種(註39)は広葉樹材が多用され、525のみ針葉樹材である。矢板は幅が14cmから広いものでは23cmほど、厚さは4～5cmの板目板からつくられている。板材の下端部は両脇から斜めに削り落とされ先端に向かって細く尖る逆三角形を呈する。上端部はいずれも欠損しており完形の資料はない。

523は風化が著しく加工痕はほとんど見られない。524は板目の整形板からつくられた矢板で先端に加工痕が残っている。525は先端部分の破片で逆三角形を呈する。木表面側には0.6cmほどの段差がある。段差は矢板の機能に直接関係があるものとは思われないことから、別の用途に使われていた部材を矢板に再加工した転用品の可能性がある。先端には加工痕が顕著に残っている。526も先端部分の破片である。表裏両側面を削り落とし先端を尖らせてある。527は最も大型の矢板である。芯材に近い部分が使われている。表面には面調整の加工痕の上一面に無数の細い刃物痕や左側面側には長軸に直交する方向に浅い刃物傷が付いている。先端を細くするための両脇の加工は左右非対称になっている。図版掲載しなかった矢板は広葉樹材で長さは1m以上あったものと思われる。長軸方向の中央に稜線が通っているが、製材時のものと考えられる。他の面は丸太材から分割されたときの割面がそのまま残り、面調整はされていない。

註38 「角江遺跡II 遺構編」(1996.3.30) を参照。

註39 矢板は樹種同定を行っていない。



第91図 土木材（矢板）

0 用途不明木製品

第92～118図には用途が特定できなかった木製品を収録している。この中にはこれまでに述べてきたA農具～N 土木材のいずれにも属さないと思われるものすべてが含まれている。集成するにあたり、用途不明木製品は類似形態ごとに分類し掲載することを優先した。その結果、形状によって大別し「棒状木製品」、「板状木製品」、「その他の木製品」の3項目に分けた。

以下、この3つの項目に分けて解説する。

a 棒状木製品

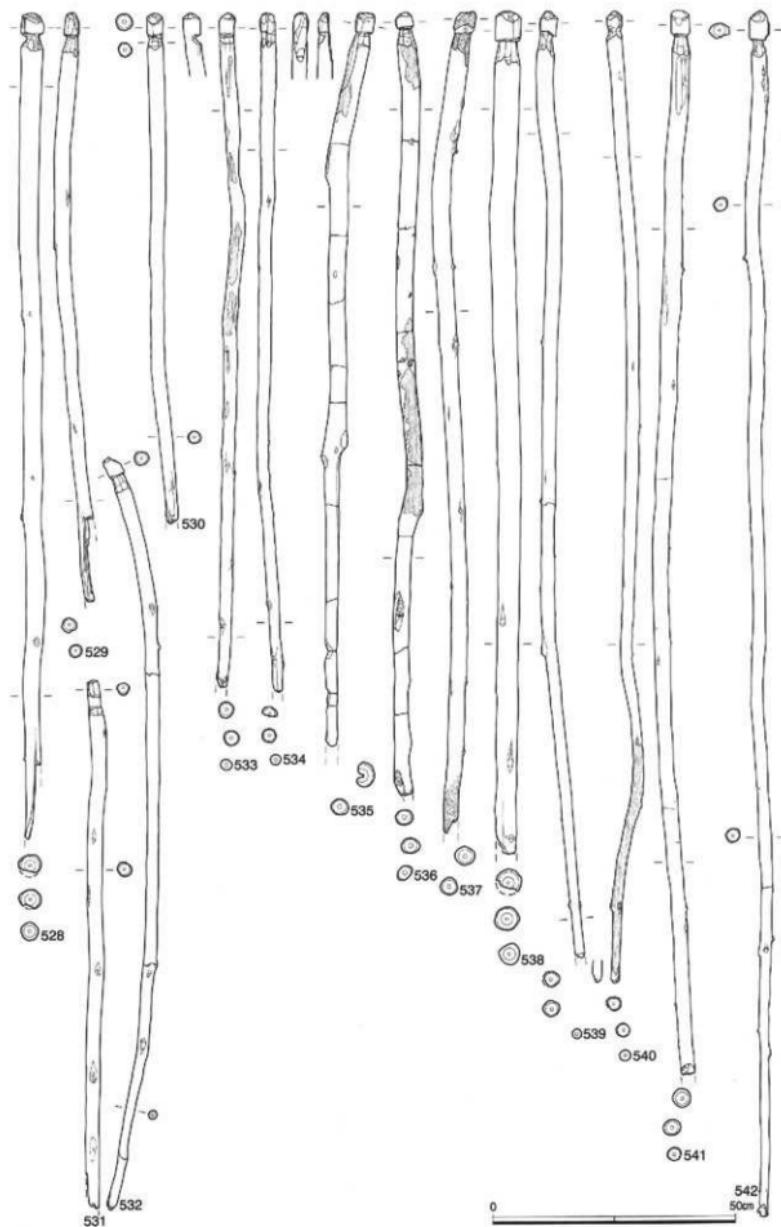
「棒状木製品」は自然の丸木状になっている製品か、または加工されているが断面形が円形に近い製品など、その名の通り細長い「棒」状を呈している木製品を言う。これらをさらに「有頭棒状木製品」と「棒状木製品」とに細分した。

有頭棒状木製品

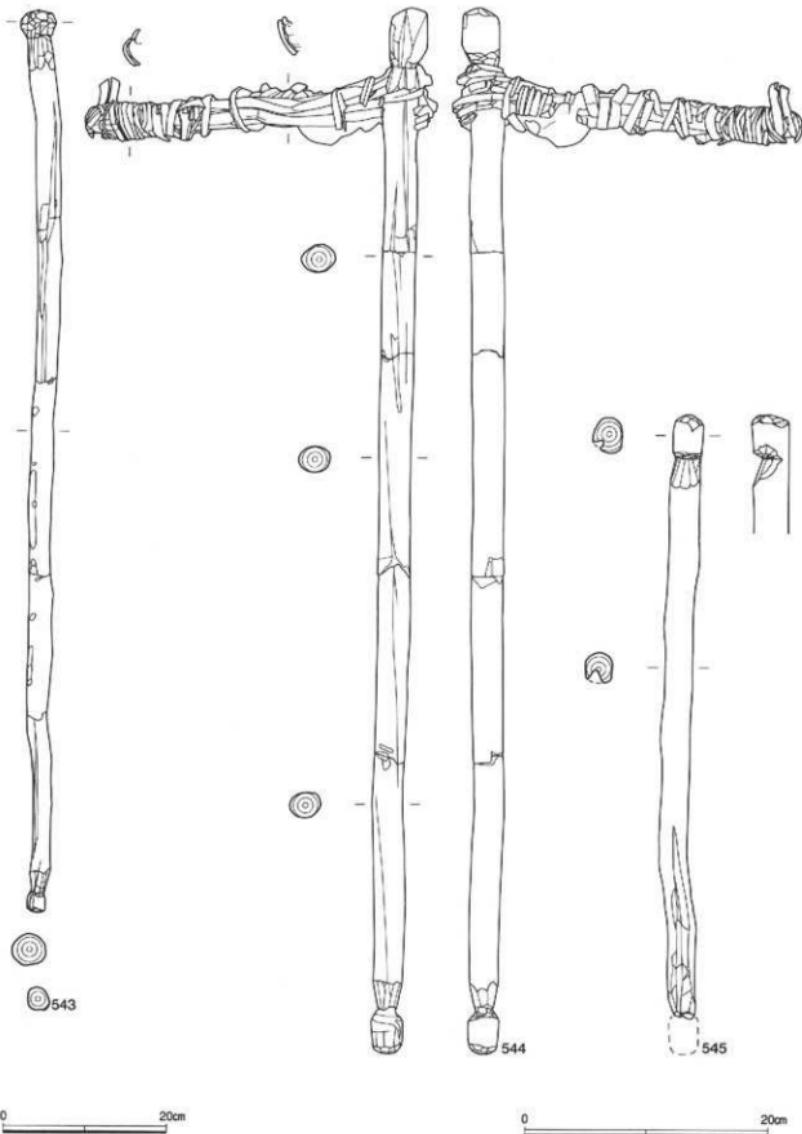
「有頭棒状」の加工は上端（先端）から約3～4cmほど下方が周囲から切り込まれ、ちょうどどこけしの頭部のように頭状の突起がつくり出されているのが最大の特徴である。遺跡内から出土した有頭棒状木製品は93点ある。このうちの50点を第92～96図に収めた。ほか43点は紙面の制約上、図版掲載はせず、第17・18表に出土遺構・層位、法量を掲載してある。有頭棒状木製品は有頭状の加工が両側にあるもの（543～557）と、片側にあるもの（528～542、558～577）とに分けて図版組みをした。また便宜的に1mを超える片側の有頭棒状木製品は第92図にまとめて掲載した。一方、1mを超える両側有頭棒状木製品は第93～95図のなかに分けて掲載した。

第92図528～542、他4点は1～2mを超える片側にのみ有頭状の加工が見られる有頭棒状木製品である（註40）。出土層位不明の528・529と弥生時代中期に属する532を除いては、全て弥生時代後期に属する。出土した遺構は8層水田より出土した2点以外は、大半が自然流路（SR01）の第I層より出土している。樹種同定を行った15点中14点がイヌマキで、ヒサカギが1点、針葉樹材が圧倒的に多い。どれも木の樹幹部分ではなく、直径3～4cmの細い枝の部分を利用していると思われる。このうち6点には表面に樹皮が付着している。樹皮の付着状態から見ても器面調整されているものは少ないと考えて良いだろう。丸木のまま、枝の根本方向を有頭状に加工しただけに入念な調整や整形は行われていないといった傾向がある。528は先端に切り落とされたときのものと見られる切断痕がある。529～532の表面には虫食いのような痕がある。533は先端の加工が有頭状というよりも深さ1.5cmほどの切り込みになっている。534は有頭状の加工がある表面とは反対の裏面側が先端から10cmほど平坦に削られている。535・536は広葉樹材の有頭棒状木製品のため折損箇所が多く非常にもらい。表面には樹皮が付着して残っている。537は上端部と下端部がわずかに炭化している。538は比較的の残存状態が良い。直径は5cm前後でやや太めの材でつくられている。539は先端にゆくほど細くなっている。540はほぼ完形品で有頭状の加工は一端にしかなかったものと思われる。下端部には樹皮が残っている。541の上端部は磨耗し、下端部は斜め（角度25°）に切断された痕跡がある。これもほぼ完形だったと思われる。542は全体に著しく風化している。下端部は切断されたようではやはり完形品かと思われる。

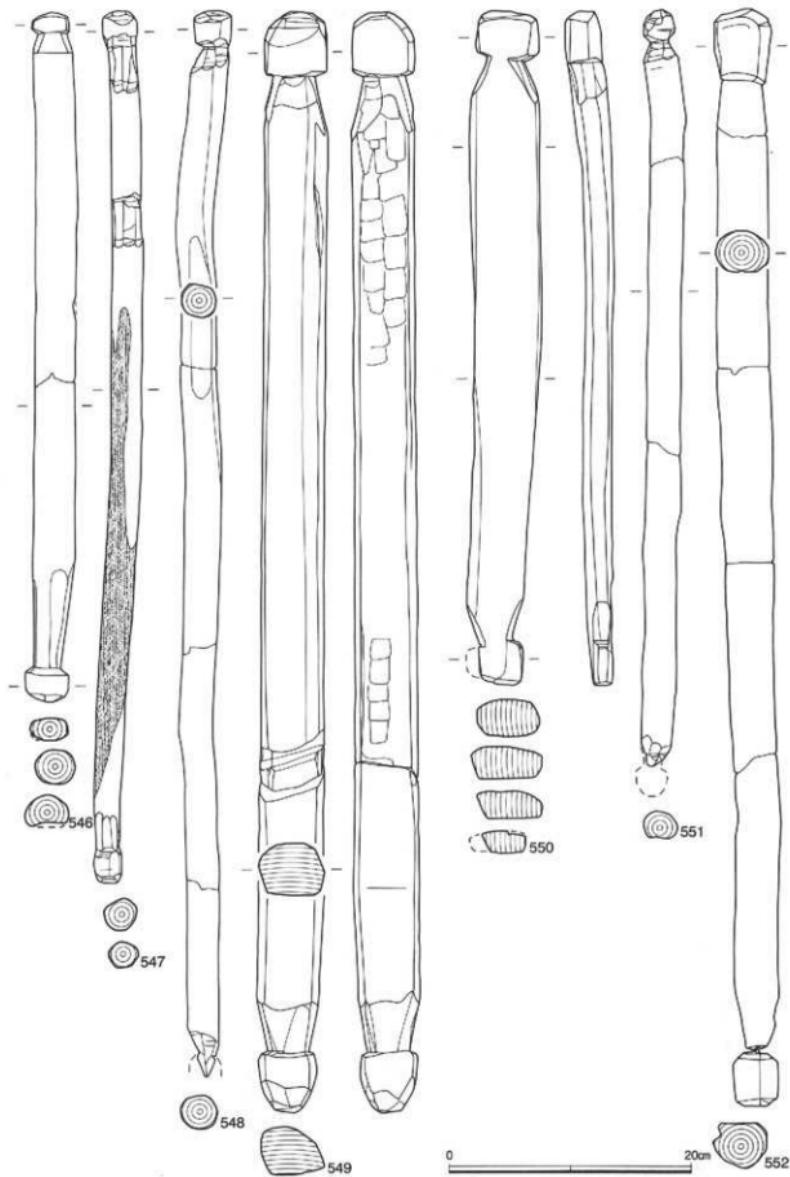
第96図558～877、他39点は1m未満の有頭棒状木製品（片側）である。1m未満のなかにはもともと長かったのが折損して短くなってしまったものも含まれるであろう。59点中14点について樹種同定できている。やはりイヌマキが多く、ほかヒノキ、クリがある。ほとんどが欠損品であり完全な形状であるのは569・570のみである。两者ともに有頭状の加工は片方にしかない。559は頭のつくり出しの大きさから建築材の柄材の可能性もある。561の片面側を削り込む加工は武器の弓の加工に似ている。562は有頭状



第92図 用途不明木製品 1 (有頭棒状木製品 1)



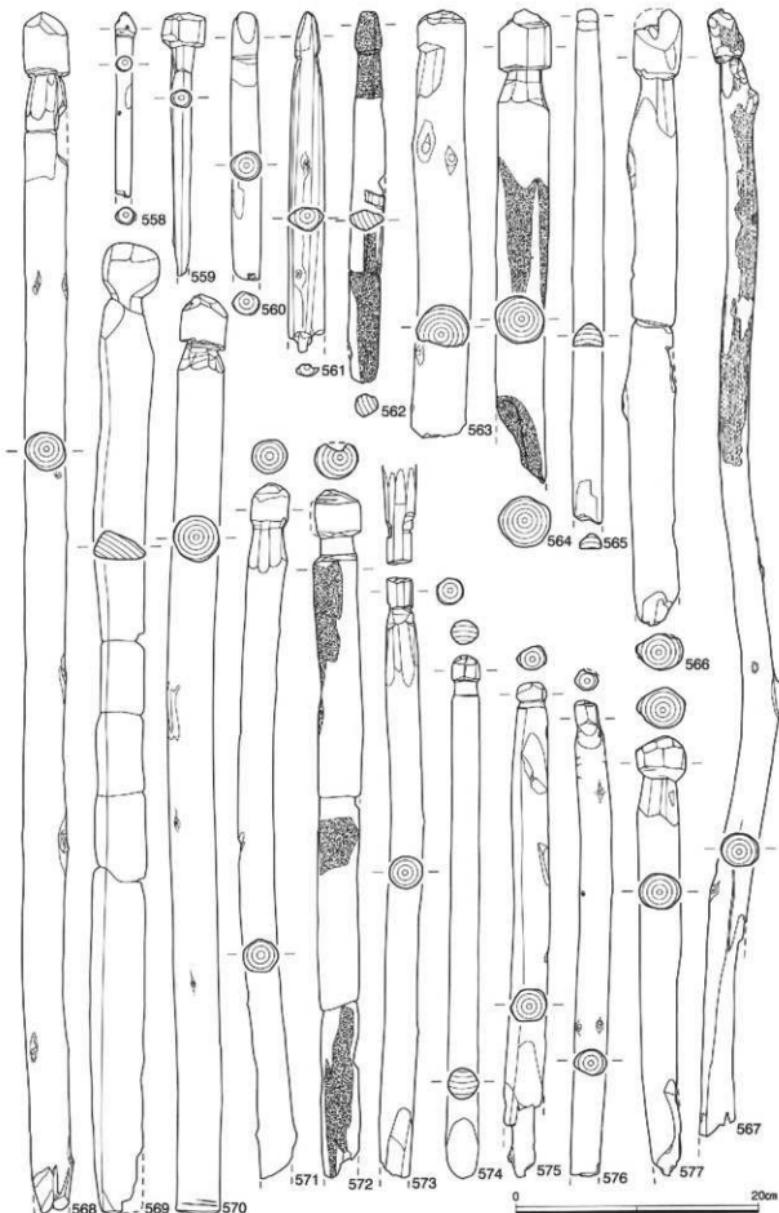
第93図 用途不明木製品 2 (有頭棒状木製品 2)



第94図 用途不明木製品 3 (有頭棒状木製品 3)



第95図 用途不明木製品 4 (有頭棒状木製品 4)



第96図 用途不明木製品 5 (有頭棒状木製品 5)

の加工が片面にしかない。567は樹皮が付着している。562・564・572は火を受け炭化している。565は裏面側が平坦面で断面は半円形になっている。また芯持ち材以外の製品は562・565・569・574がある。割材から取えて整形していることから見ても、単純な丸木材でつくられた有頭棒状製品とは異質なものであろう。

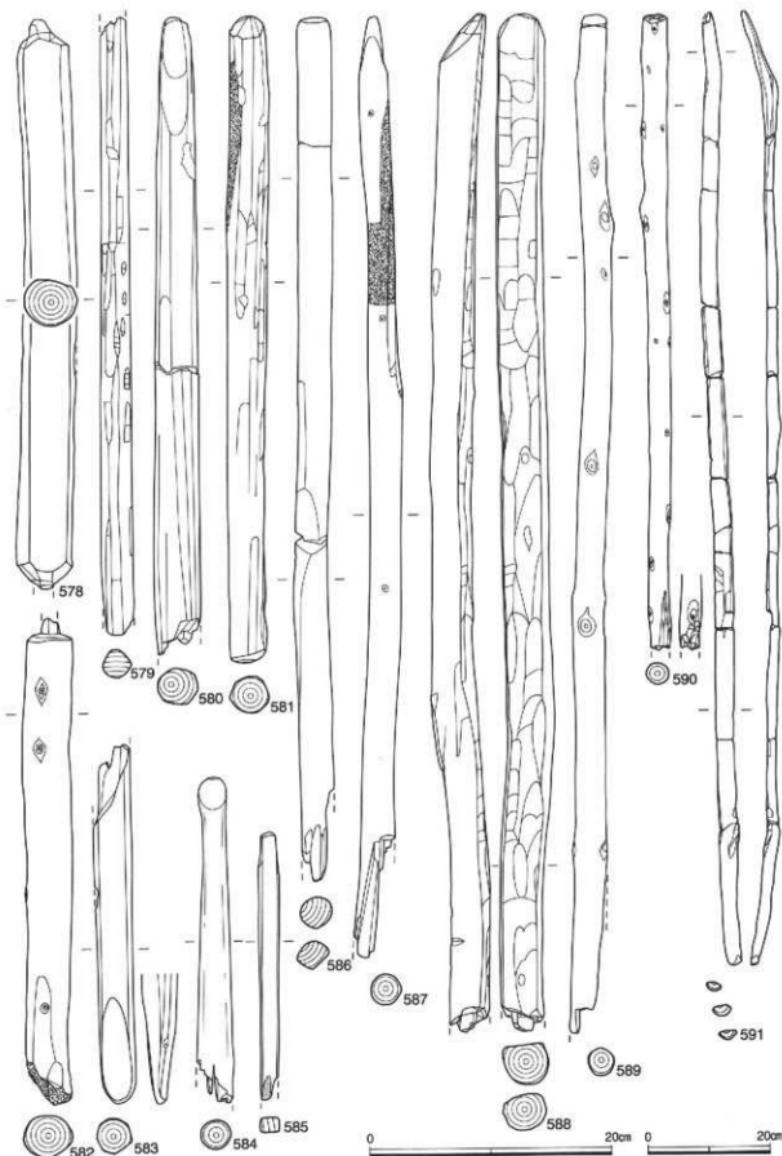
第93～95図543～557は上・下両端に有頭棒状の加工がある木製品である。このうち544・545は有頭棒状木製品にツル状のものが巻き付いていた製品である。弥生時代中期のものが9点、後期のものが9点、層位不明が1点ある。8層水田から出土した556・559を除いて、すべて自然流路(SR01)の包含層より出土している。樹種はサカキやイヌマキなどの針葉樹が多い。550以外はすべて芯持ち材。543・556・557は1mを超える製品。544～555は50cm前後から1m未満の製品である。第93図はいずれもサカキ材が使われている。543は上部の有頭は大きく全面加工され、下部は小さい。棒状の表面は磨かれたように滑らかである。544・545は有頭棒状木製品に樹皮が巻き付いた状態で出土した。544は有頭下のちょうど括れた部分にツル状のものが巻き付いた状態で出土した(図版72)。ツル状のものの樹種はアカマツ。長さ24cmほどの数本のツルを芯にしてそのまわりは同材でグルグル巻きに巻かれている。ツル状のものは棒に対して直角に付いている。有頭状の加工は上下とも同じで表面は節目が見えないほど滑らかに磨かれている。同じようなツル巻き状のものはツル部分のみ第117図の757・758・760が出土している。545は残念ながら巻き付いていた樹皮が脆くはぎれてしまっていたが、樹皮は樹種同定の結果、根・松であった。棒状の部分は片方欠損しているが、有頭状というよりは切り込み状に加工されている。546はタイミングチバナ材で全長56.6cmの製品。上部の有頭状はやや偏平につくられている。547は樹皮が付着している。上端部より15cmほど下のところが4cmにわたって浅く削り込まれている。549は自然流路(SR01)の第I層と第III層の異なる層から出土した製品が接合した。割材から削り込まれた製品で断面形は方形に近い。裏面には面調整の加工痕が明瞭に残っている。550は棒状というより板状に近い。木取りは柾目、55.3cmという長さから織機の一部とも考えられようか。553はイヌガヤ材。上方部の太い方を削って全体の太さを均等にしている。554はアカガシ亜属でつくられている。表面は磨かれたように滑らかである。555は芯持ち材だが全面加工されており加工痕が明瞭に残っている。上部は一端から切り込まれるように加工され、裏面は平坦となっている。556も柾目材で割材からつくられている。遺跡内ではあまり見られないクロマツ材を使っている。557も正面側が平坦に削られている。

片側にしかない製品に比べて両端に加工のあるものは用途の推定がより可能になるであろう。両端に有頭状の加工が残っている製品はその長さによってそれぞれ用途が異なると思われる。例えば、1mを超えるものは建築材、なかでも垂木や棟木、あるいは横架材などの用途が考えられる。また50cm前後から1m未満のものは紡織具の一部などであろうか。また片側に有頭状の加工が残っている製品も1mを超えるものは建築材などの用途を考えるのが妥当だろう。1m未満のものは欠損品であるため用途は特定できない。いずれにしても有頭棒状木製品は単体で使われるものではなく、構造物や道具の部材として使われていたものであろう。

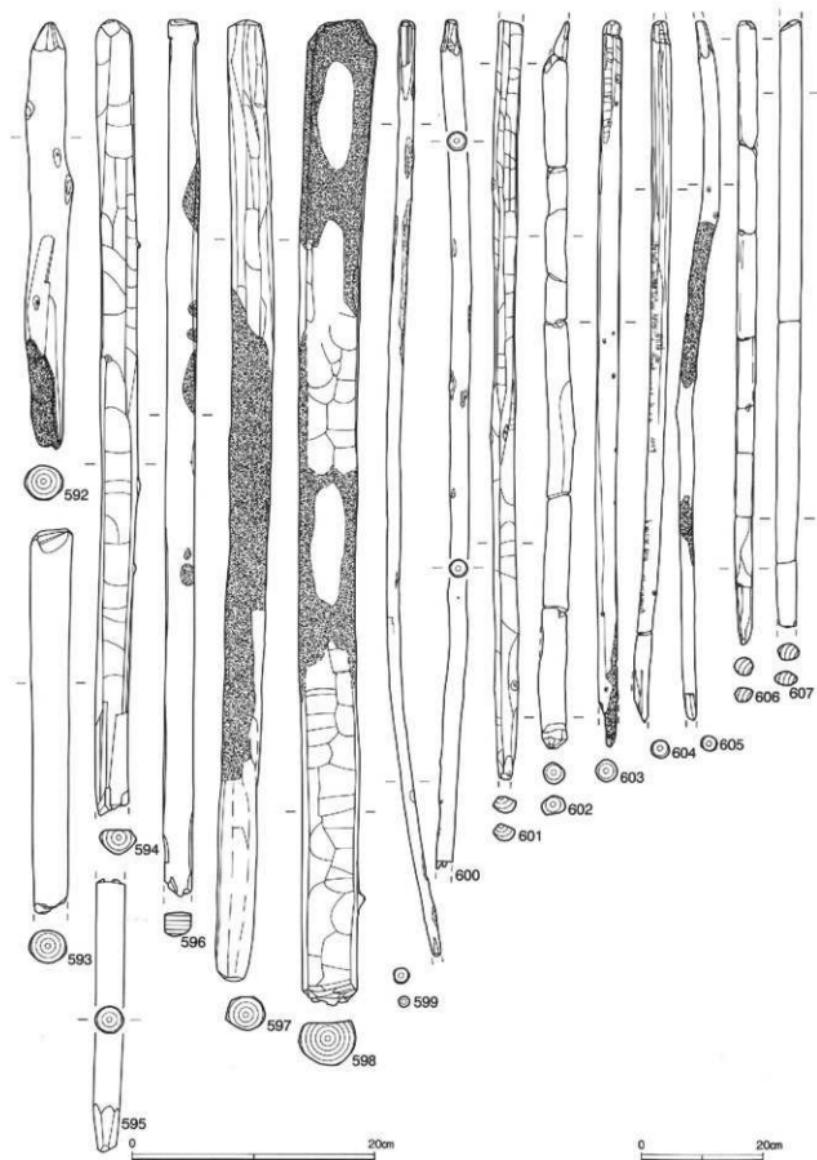
棒状木製品

一方、棒状木製品については芯持ちの丸木材に加工された製品を中心にして第97～100図578～625にまとめた。多くは直径3～4cmの丸木材を使っている。完形で残存しているものは少なく、片側もしくは両端を失っている製品もあるため長さは一律ではない。長いものでは2mを超える製品もある。数の制約から49点中、樹種同定を行ったのは15点のみである。針葉樹のイヌマキ、イヌガヤ、サカキが多く、そのほかにはヤツツバキ、ヒサカキがある。棒状木製品が出土した遺構はやはり自然流路(SR01)の包含層からの出土が大多数を占める。他には8層上・下部水田、溝状遺構などから出土している。

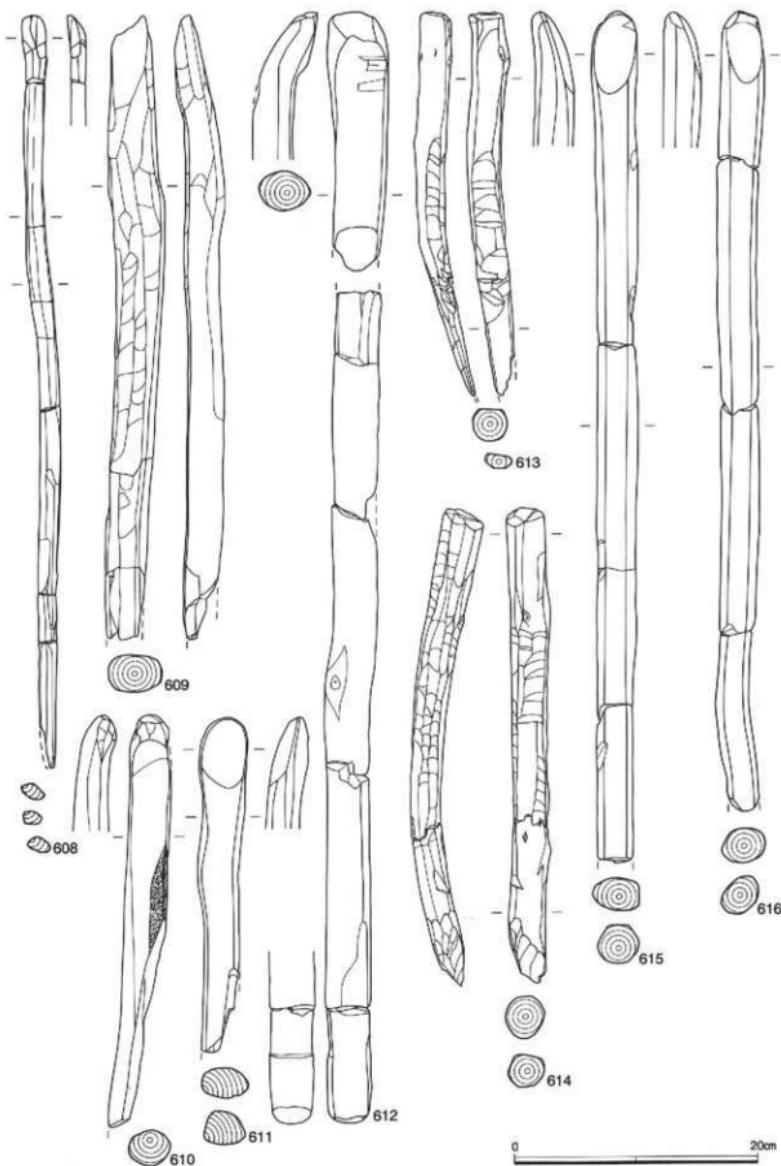
578～592は弥生時代中期に属する資料である。578・582は端部に突起状の加工がある。579・586・585



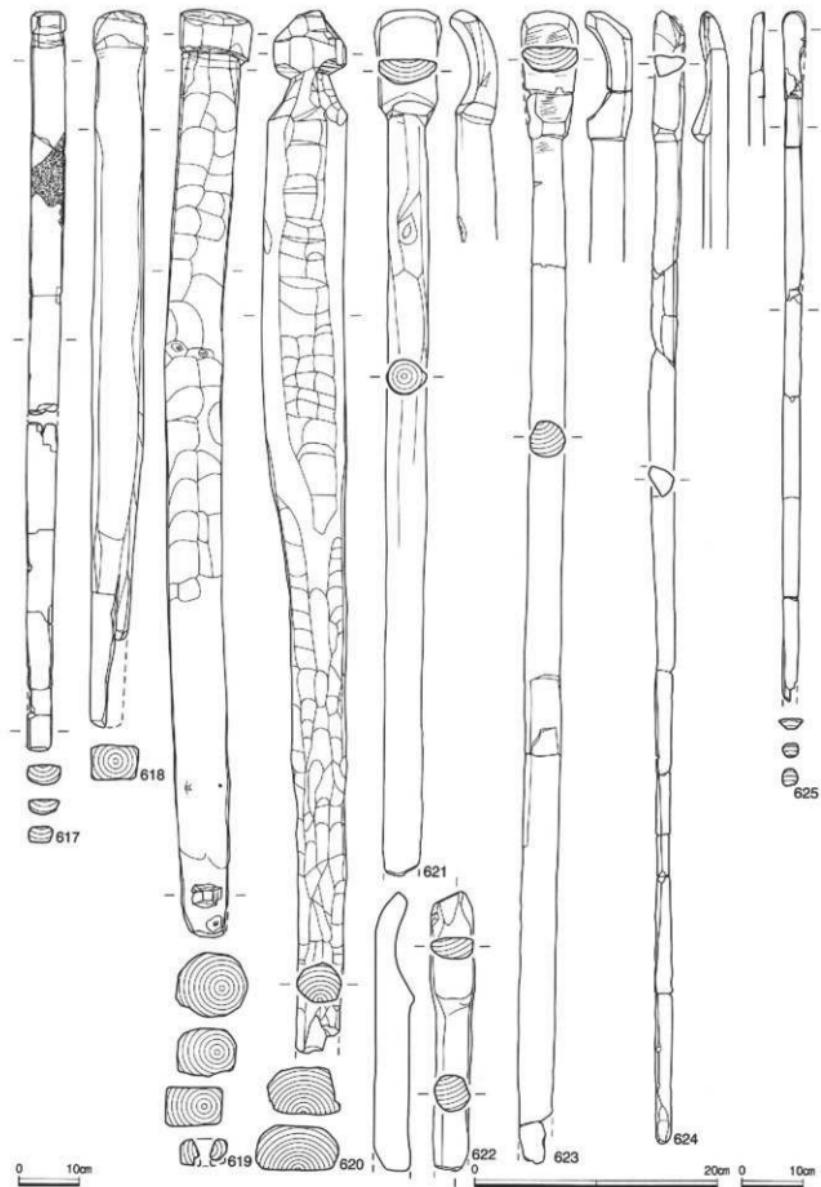
第97図 用途不明木製品 6 (棒状木製品 1)



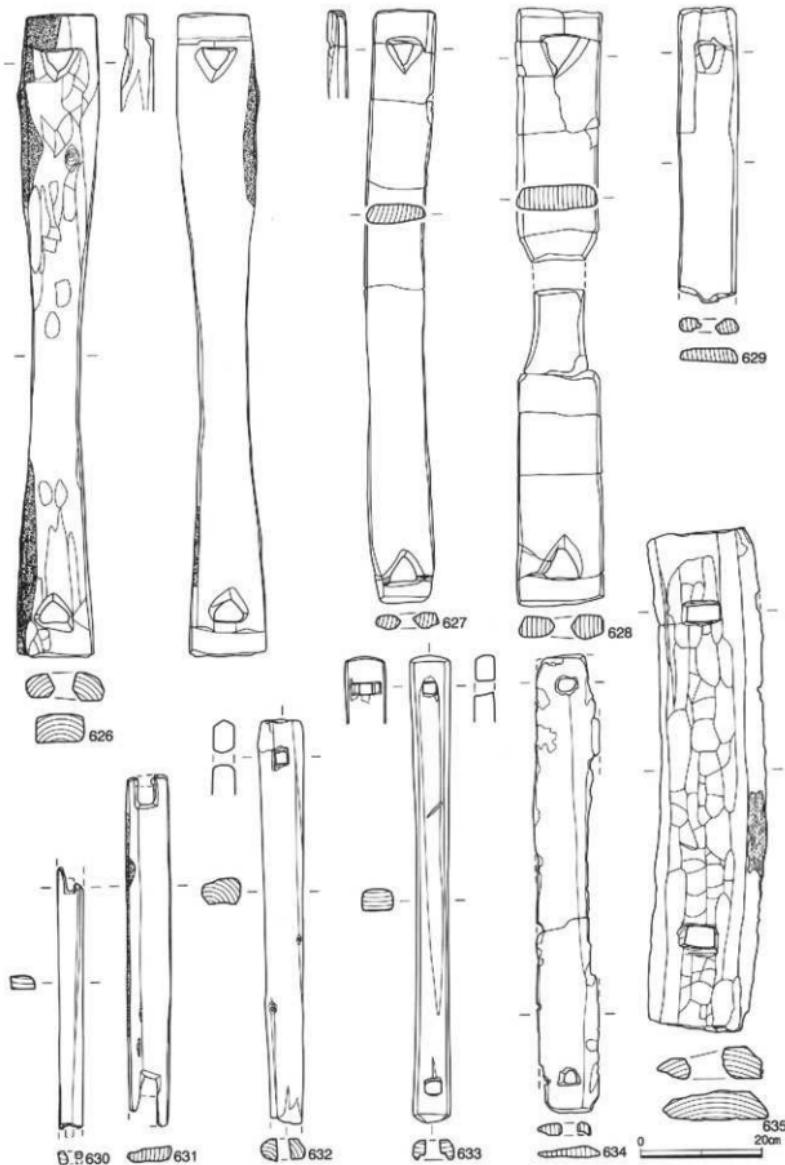
第98図 用途不明木製品 7 (棒状木製品 2)



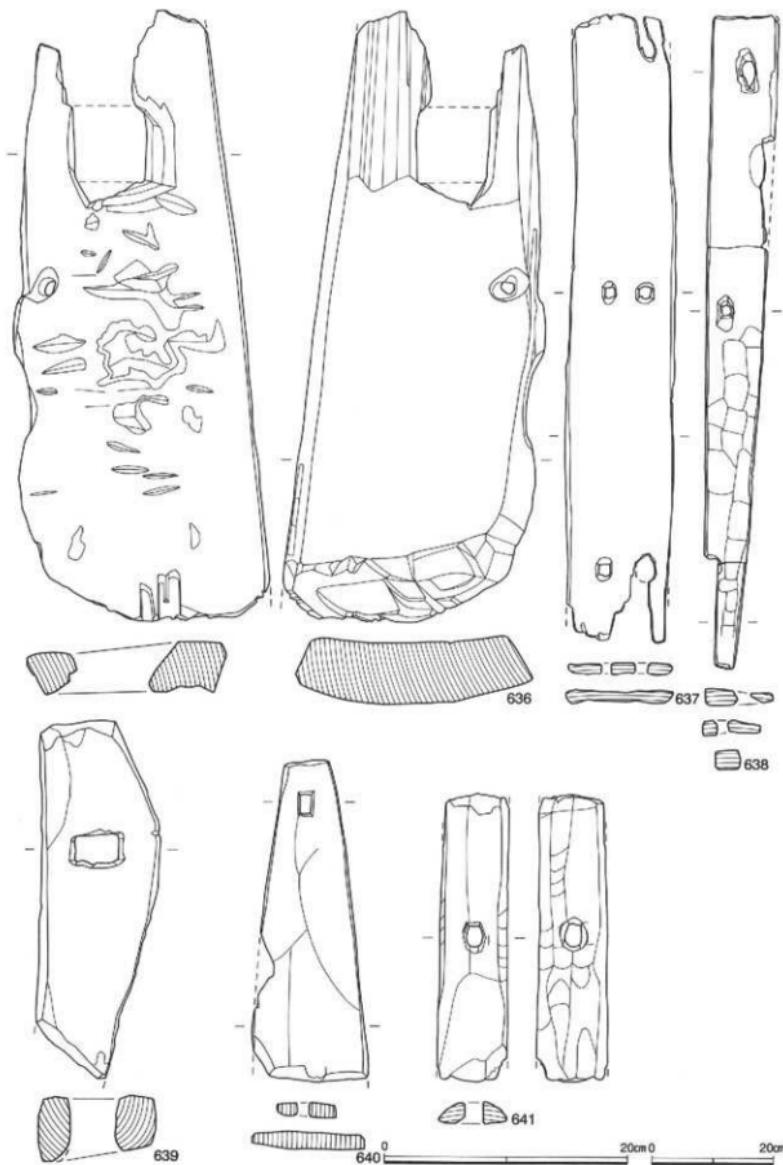
第99図 用途不明木製品 8



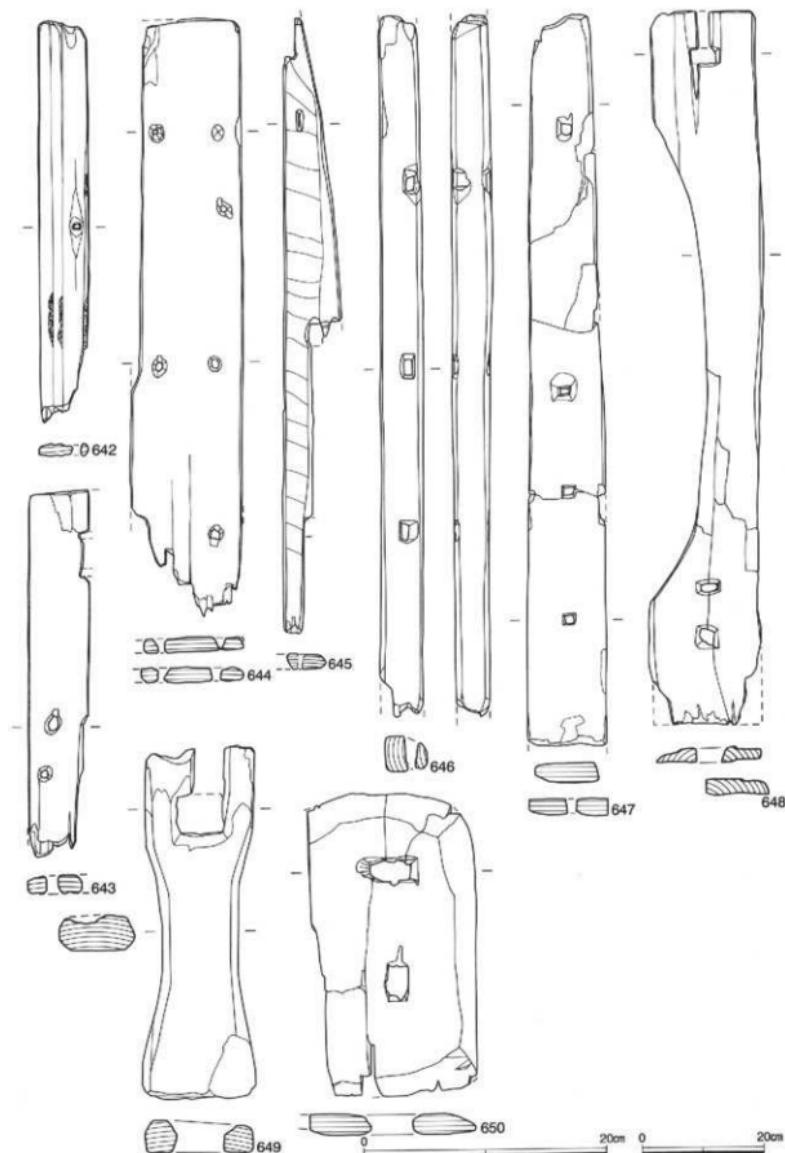
第100図 用途不明木製品 9



第101図 用途不明木製品10



第102図 用途不明木製品11



第103図 用途不明木製品12

は丸木材ではなく割材から整形されている。580・581は芯持ち材であるが全面加工されている。580の上端部は磨滅し先端が丸くなっている。581・582・587・592は火を受けて炭化している。588は正面側が平坦面になっている。上端部は斜めに削り落とされている。

593～607は弥生時代後期の棒状木製品。596～598・603・605は火を受け炭化している。597は完形品で全面に加工痕がある。598は一面だけ平坦面を削り出してあり面調整の刃物痕が顕著である。600は先端が突起状に加工されている。また603の先端も段が切り込まれた細かい加工が施されている。604は表面に長軸に直交する方向の圧痕が無数に見られる。なにかが巻き付けられていた痕跡か。596・606・607は割材から整形された製品。606・607は広葉樹材で表面の加工が丁寧なことから農耕具の直柄の可能性も考えられる。

第99図は左半分が弥生時代中期の製品で、右半分が後期の製品である。609と613・614は同じ形態の特徴を持つ製品。全面加工痕が残っている。軸部は芯持ち材から削られて面がつくり出されているが、先端へ行くほど薄く細く削られ、全体に緩やかに湾曲している。同図版のその他は先端部分が一回り大きくやや反り返っている棒状木製品である。いずれの製品も先端がかなり使い込まれたためか著しく磨滅している。先端の磨滅状態から掘り棒のような用途が考えられる。612にはグリップエンドらしき加工も残っている。

617～620は非常に特徴的な棒状製品でそれぞれが個性的な形態を持っている。頭を削り出してあることから有頭状とも言えるが、形態は他に類例がない。617は一部炭化しており、途中折損した部分には接合点がない。断面形は方形に近い。下端部には枘孔かと思われる方形孔が側面から抜いている。618は上端に円形の頭をつくり出した角柱状を呈する製品である。下端部は完結していると思われる。619もやはり円形の頭を残し下方部は角柱状に削られている。下端には正面側から貫通した方形孔がある。全面調整の加工痕が顕著に見られる。620もやはり上端部に頭をつくり出している。直径7cmほどの半裁材から加工したものと思われ正面側には丸木面が残っている部分がある。下端に行くほど細く削られている。全体に大きく反っている。

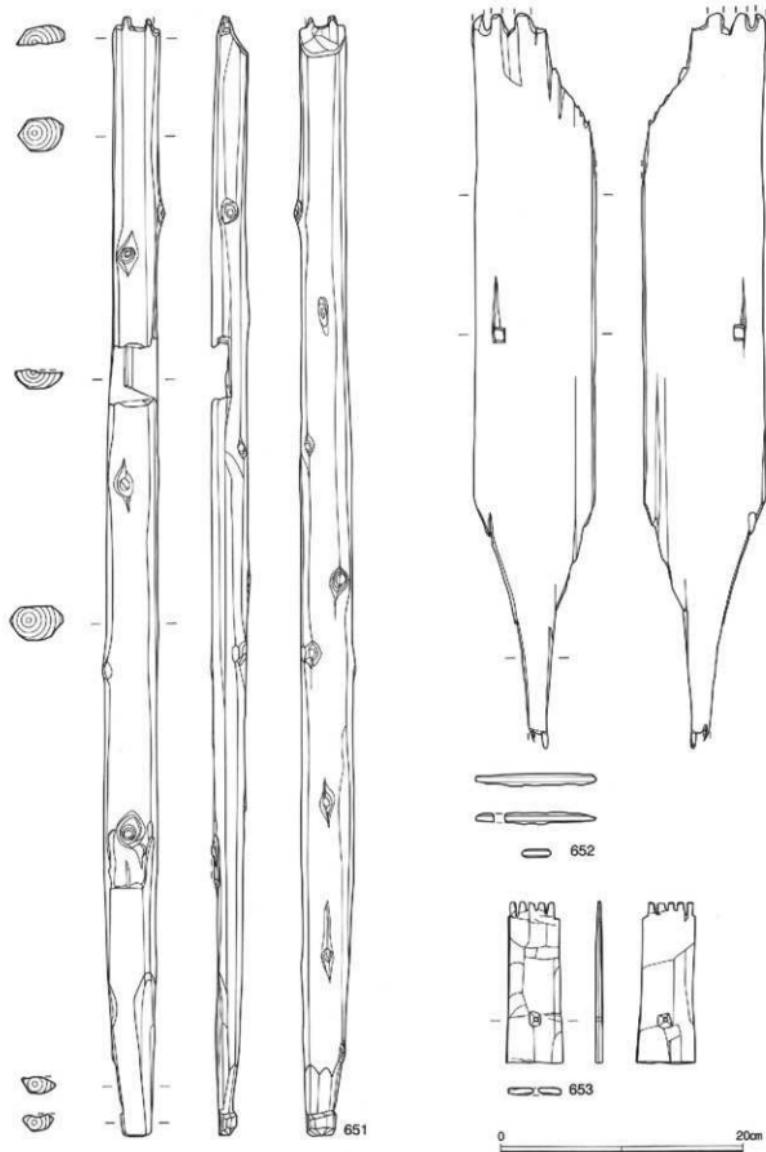
621～625は先端部に同じような形態を持つ棒状木製品である。先端はちょうど匙のような形に似ている。何かを受けるように曲面状に削られ、棒状部分とともに全面研磨されている。軸部はすべて円形断面である。すべて弥生時代中期に属する製品で自然流路(SR01)の中層より出土している。樹種はサカキ、ヒサカキ、ヤブツバキがある。

棒状木製品のなかでは有頭棒状も棒状も、弥生時代中期と後期とでは特別な違いは見られない。強いて違いを述べれば中期にくらべ後期の資料には炭化したものが多く見られる。また621～625のように弥生時代中期にしか見られない製品も特徴的である。資料の数では有頭状の加工がある棒状木製品が非常に多く、集落内では幅広い用途に使われていた製品であったと思われる。樹種同定は全体の3割程度しか行っていないが、棒状木製品に多用されるのはやはりイスマキ、イヌガヤや、あまり大木にならないサカキなどが多い傾向にある。

註40 片側に有頭状の加工があるものはもう一端が欠損している資料が多いため、片側にしかないとは言い切れない。

b 板状木製品

「板状木製品」は偏平な「板」状を呈しているものである。ここでは枘孔のある板状木製品を集めている(註41)。板状木製品は第101～103図と第117図の一部に掲載している。第101～103図には枘孔のある板状木製品、第117図には樹皮が巻き付いている板状木製品を収録している。626～629は三角形の枘孔



第104図 用途不明木製品13

が切られている珍しい製品である。完形に近い形状のものは626～628で形態も類似している。629以外は弥生時代後期の製品である。枘孔は逆三角形を呈し、一辺の長さは約4cm。上下の枘孔は頂点同志が向き合うように穿孔されている。626は中央がやや細く括れている。木裏面は三角形の枘孔の底辺の近くを浅く切り込まれ段差になっている。一部火を受け炭化している。627はクリの柾目材。下方の三角形枘孔の底辺の両脇に緊縛のためと思われる紐ズレのような圧痕がある。628は別々に出土したもので上下に接合点はないが同一個体と思われる。中央部は大きく括れている。いずれもコジイの柾目材。629は表面の風化が激しいがやはり三角形の枘孔がある製品である。

630～635は上下両端に方形の枘孔を持つ板状木製品。633は残存状態が良い。上部の枘孔は裏面側はさらに大きな枘が切られている。634は風化が激しくぼろぼろになっている。635は大型の板状で、丸太材を横割りした板で両側面には樹皮も付着している。木表面側には面調整の加工痕が顕著に残っている。

636～641は弥生時代中期、642～650、他4点は後期に属する。いずれも枘孔のある板材だが欠損部分が多く原形が分からぬ。644はほぼ左右対称の穿孔列になっている。648は大型の板材で3ヶ所の方形孔とともに左側の側面が大きく抉れている。建築部材の可能性がある。

761は薄い板材に2ヶ所、樹皮が巻き付いた状態で出土した。一番下にもう1ヶ所あったと思われるが残存していない。板面には短軸方向に平行した線状痕が数条ある。762も柾目の薄板でさらに短軸方向に平行する方向に削り込まれた痕跡がある。板と板同志を縫じ合わせていたところが1ヶ所あるが、組み合わせた相方の板が樹皮のなかに残っている。

板材も有頭棒状・棒状木製品と同様に構造物や道具を構成する部材の一部であろう。大型製品のなかには建築材に含まれるものもあるであろう。板状木製品の樹種同定はすべて行った。掲載した30点のうち半数をスギ、ヒノキが占めている。その他はコウヤマキ、スダジイ、クリ、クスノキ、クロマツ、ムクロジなど雑多な樹木がある。

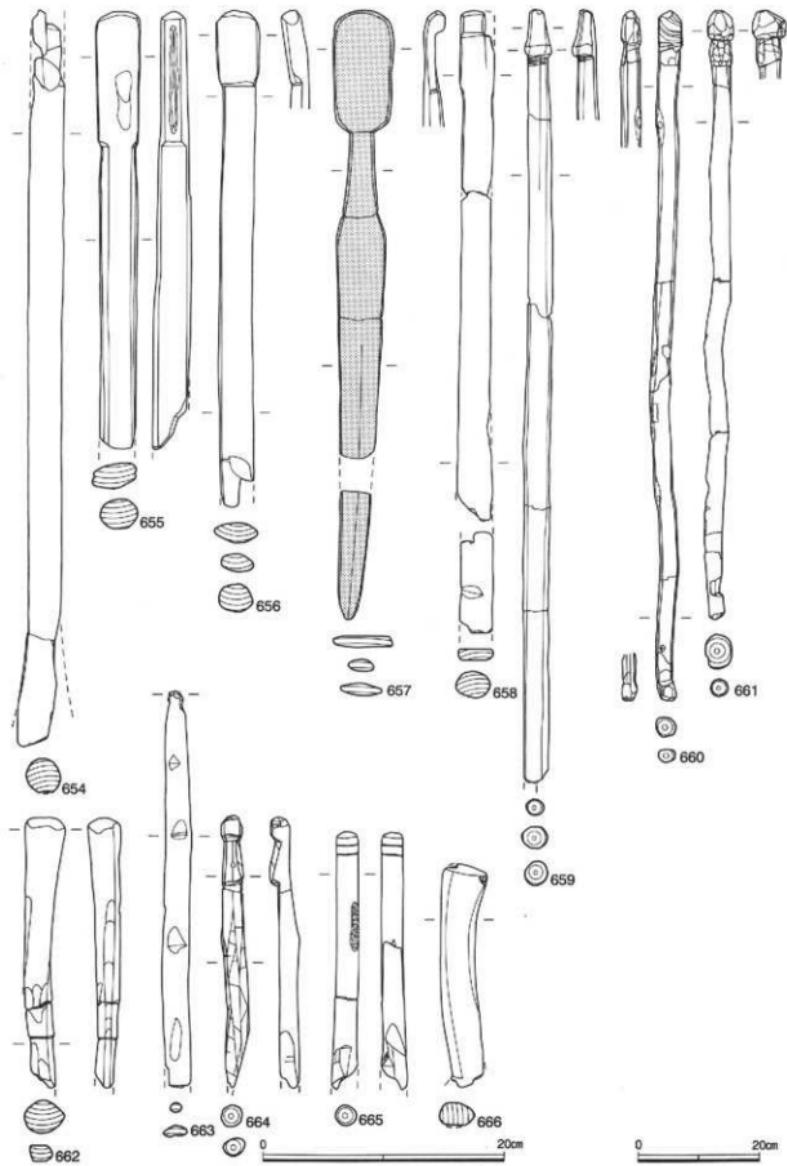
註41 楔孔の無い板状木製品は第6・7表のそれぞれにある「整形板」のことを示す。紙面の制約上、今回の集成では楔孔のある板状木製品のみ図面掲載した。

c その他の木製品

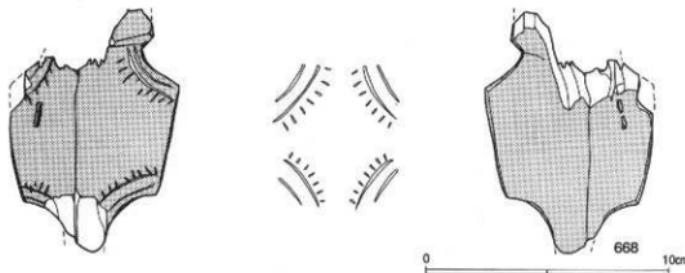
「その他の木製品」は「棒状」、「板状」などの形態から外れるものである。多くは何らかの製品や部材として機能していたと考えられる形状をしているが、類例が無く、用途が特定できないものである。また「その他…」の中には、加工痕跡が顕著に見られる資料や板状に整形された加工途中の資料、さらに樹皮やツル状の巻き付いた製品や籠編物も含まれている。

第104図から第118図にまとめたのはその他の木製品としている製品である。その内訳は、第104～113図には何らかの製品として加工されているもの、第114図には加工痕が顕著に見られるもの、第115～116図には整形された板材、第117図には樹皮製品、第118図には籠編物を掲載した。

第104図の3点は形態の特徴が琴に似ているものである。部分的には琴と類似した構造を持っているが、どれも琴とする決定的な根拠に欠けるため、この3点は琴の中に分類せず、用途不明木製品として扱うこととした。いずれも自然流路(SR01)の包含層から出土している。651は自然流路の第I層より出土している。ほとんど自然木のままである部分が多く、コウヤマキの枝、もしくは若木を使ったものであろうか。全面風化しており、はっきりした加工痕は見られない。直径約5cm前後の丸木から削り出された製品と思われるが、小枝の節が多く、あまり材を選別してつくられた良品とは言えない。表面は幅約3cm前後の面を削り出している。上端部は棒状の琴と非常によく似た構造をしている。先端に小さな2本の突起があり、裏面は上端に向かって抉るように削られている(図版80)。下端部表面は平坦なのに



第105図 用途不明木製品14



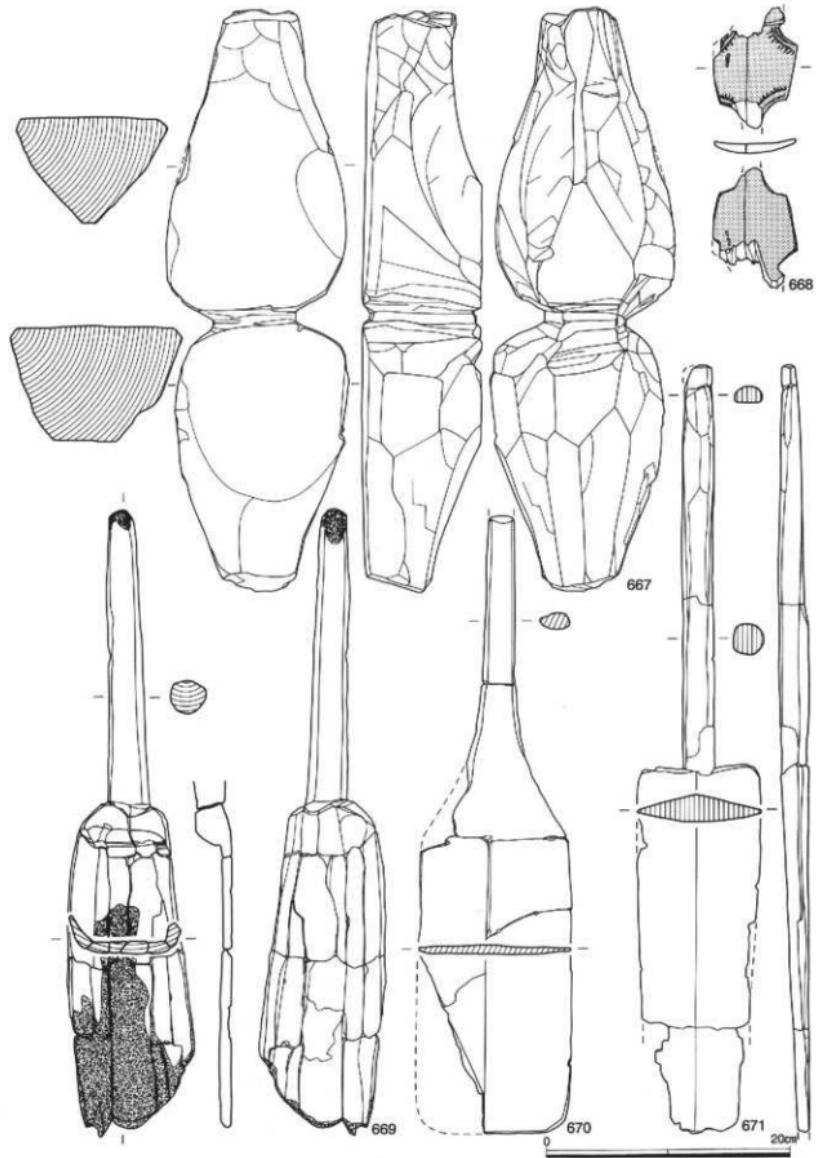
第106図 用途不明木製品（668）拡大図・線刻紋様模様図

対して裏面は有頭状に加工されている。体部の途中に長さ4.5cm、1.5cmほど切断されている部分があるが、意図的な構造であったのか、転用された後で二次的に加工されたものかは不明。652も自然流路（SR01）の第1層から出土した板状の木製品で、弥生時代後期前葉に否定される。材質はコウヤマキで約1cm厚ほどの偏平な板目板である。表裏面ともに損傷がひどく加工痕もみられない。上端部には琴尾に見られるような突起がある。現存するのは3突起だが、板幅から合計6突起があったものと思われる。上部は幅約10cmほどで、上端から40cmあたりより下の部分は両脇から下方方向へ先細りに加工されている。下端部にはわずかに小片がついているが、もとの構造は復元できない。中央左端側には約0.9cmの方形の枘孔が穿たれている。653は自然流路（SR01）の中程の層からの出土で弥生時代中期に属する。材質はヒノキの板目の薄板状を呈している。最大厚は0.6cmで、突起方向の先端はさらに0.2cmと薄くなっている。その先端に5つの突起がつくり出されている。突起は切り込みが深いところと浅いところがあり、それぞれの長さは一定していない。下方中央には方形に近い幅約1.0cmの孔があけられている。下端は鋭利な刃物で切断された可能性がある。原形がわからぬため、転用などによって二次的に切断されたものかどうか不明。

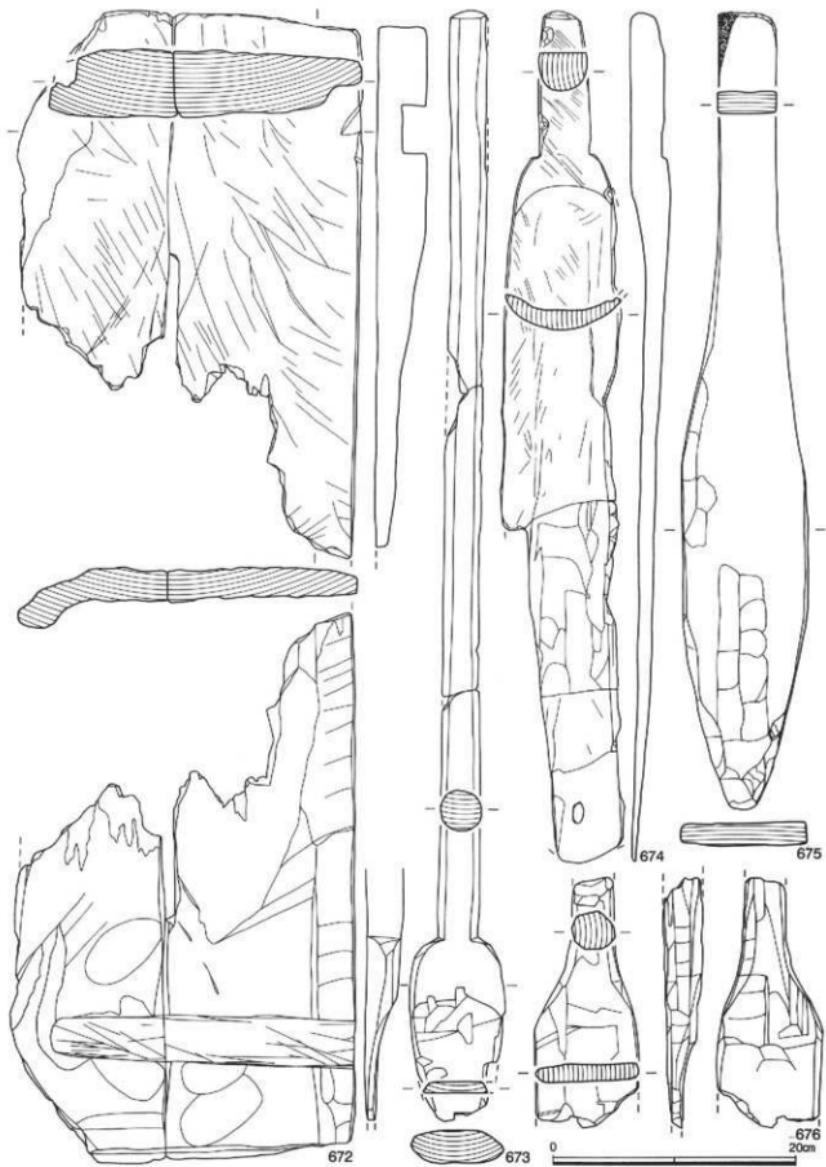
第105図にまとめた用途不明木製品は細長い棒状を呈する。655の頭部は偏平で、軸部は楕円形である。頭部の両側面には浅い溝が切り込まれている。657はアカガシ亜属の板目材。小判形の頭部から下は細く括れ、少し広がって先端に向かって細く尖る。中央には弱い稜線が通り、先端部近くの断面形は菱形を呈する。縁辺部はきれいに磨かれている。器面全体に黒い色の顔料が塗られている。剣形の模倣品か。658の上端部は鉤手状になっている。659～661は個性的な頭部をつくり出してある棒状木製品である。660の先端は節痕のような自然にできたものではなく、意図的に付けられた線刻模様と思われる。661の上端部は有頭状の加工が2つあり瘤のようになっている。662～666は工具の柄であろうか。663は正面側が丸木面で、裏面が削り込まれている。665の先端は丸く磨滅し二重の刻線が施されている。

第107図667は樹種がケヤキ材で木取りは横木取り柵目である特徴から容器とも考えられる。形状から片口の未製品と思われる。中央部分を切断する前の2連に連なっている段階の未製品であろうか。上面はフラットな平坦面で、裏面側は荒い整形痕がある。

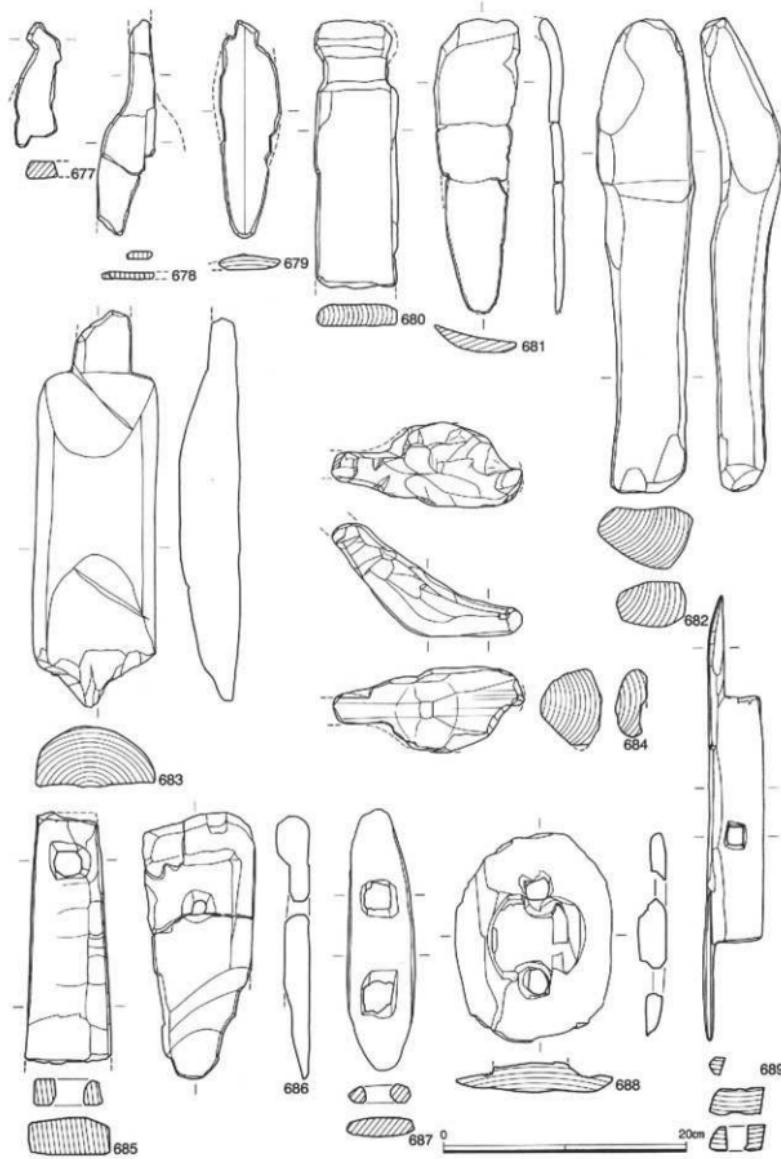
第107～108図に掲載した668～674は、既に製品として完成された形態を持つ。668は線刻模様のある全面に黒色顔料が厚く塗布された製品である。第106図にはその拡大図と線刻模様の復元図を示した。上下ともに欠損しており原形は不明。線刻模様は左右対称に復元すると図のようになる。669は長く細い軸部を持ち、身は幅の狭いチリトリ状を呈する。軸部の先端と身の下端部は火を受け炭化している。670は厚さ0.7cmほどの薄板で羽子板のような形をしている。下端縁辺は使用によるものか磨滅している。671も63



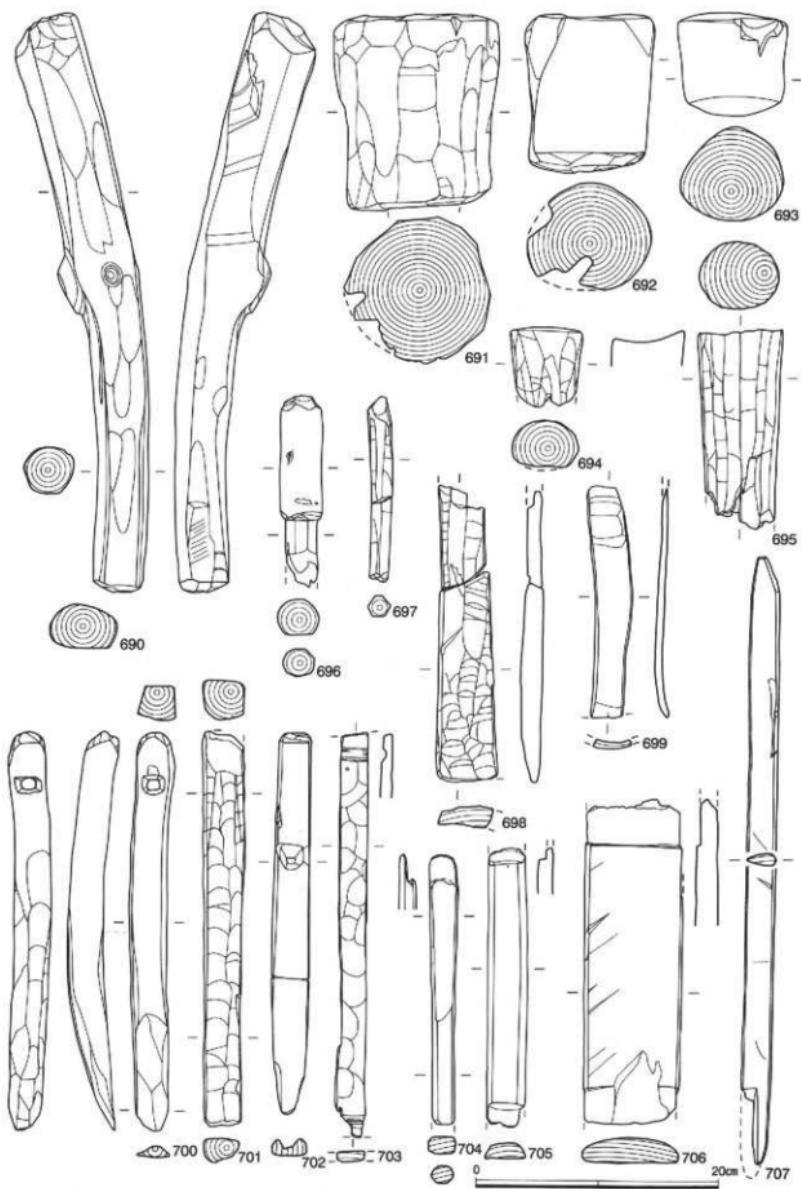
第107図 用途不明木製品15



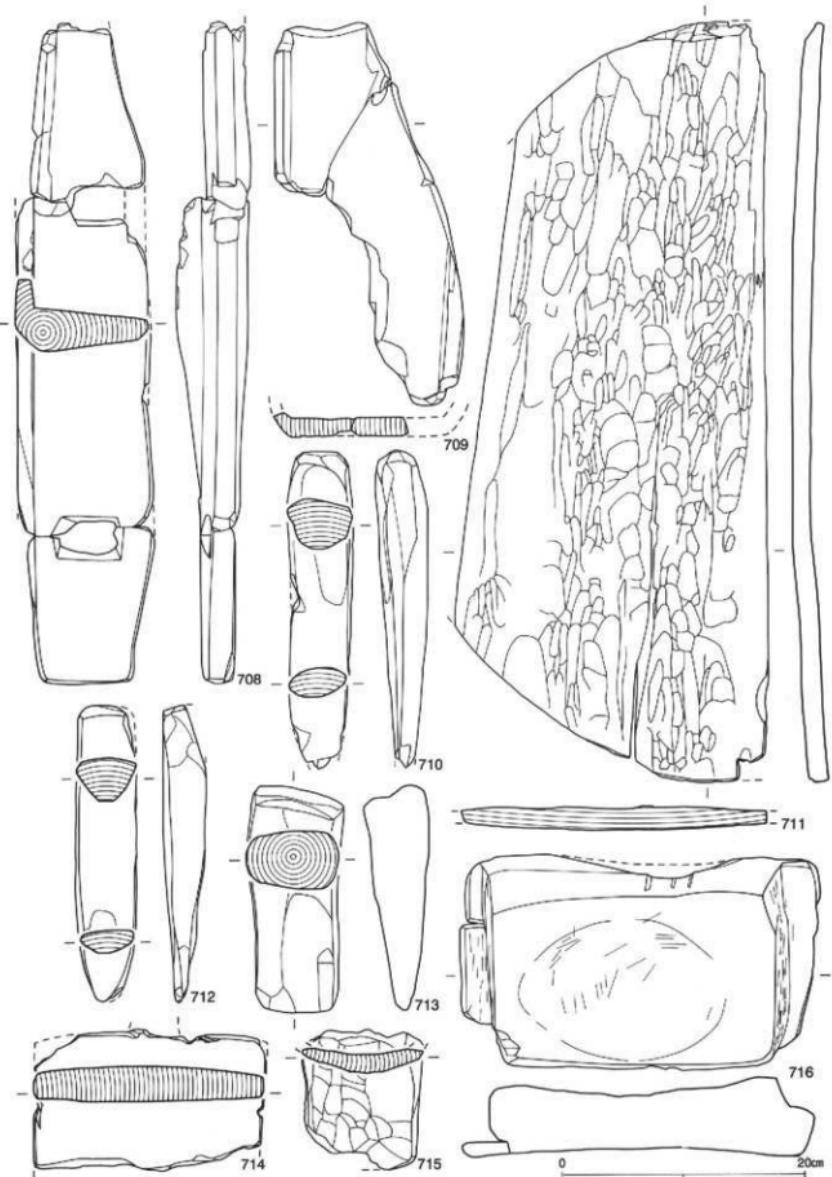
第108図 用途不明木製品16



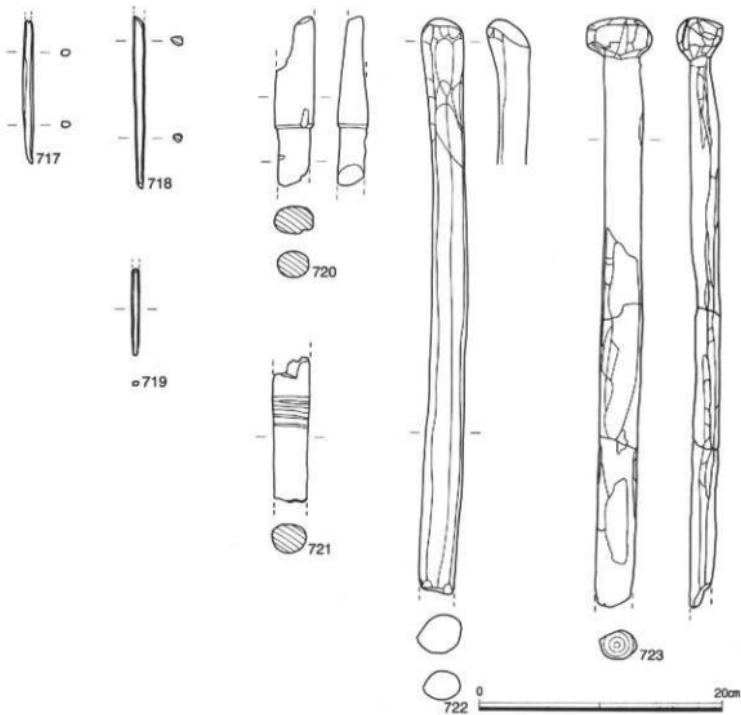
第109図 用途不明木製品17



第110図 用途不明木製品18



第111図 用途不明木製品19

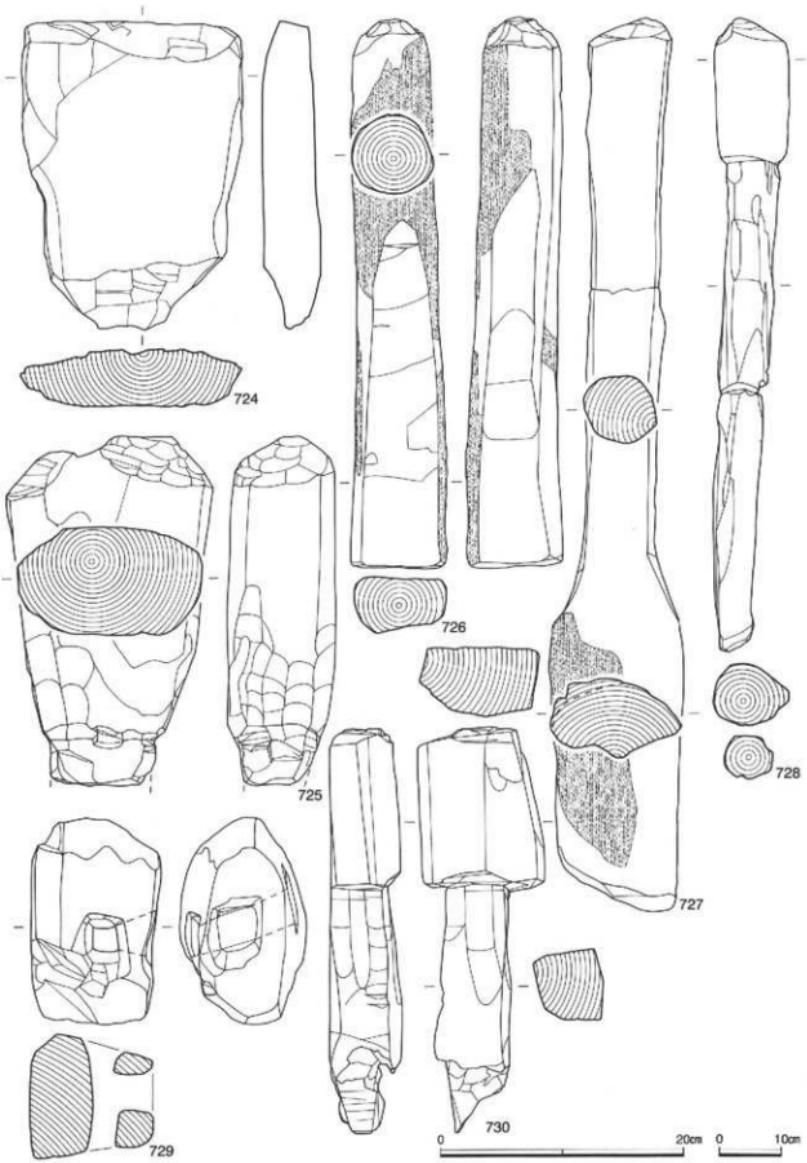


第112図 用途不明木製品20

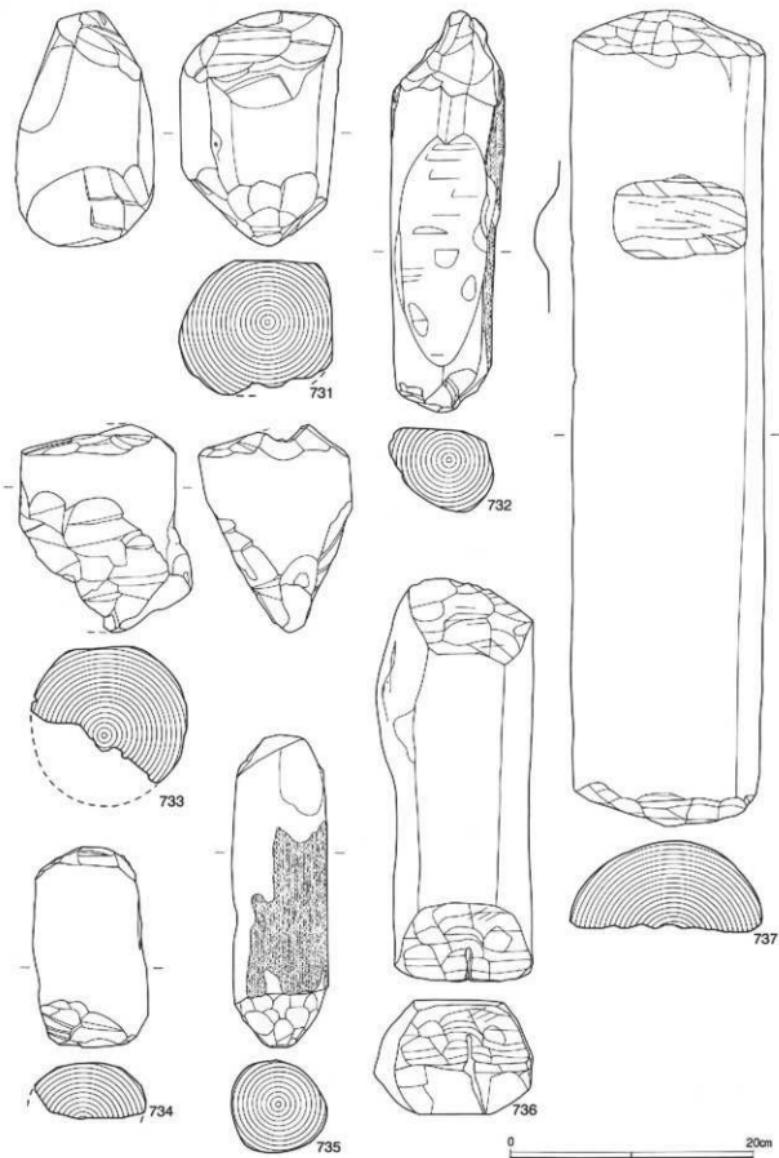
cmほどの完全な軸部を持つ製品である。軸部は円形断面だが身の部分には両面の中央に明瞭な稜線が通り断面は菱形を呈する。形態から鎌か柵などの用途が考えられるが、柄がやや短い感があるためどちらにも属せず用途不明木製品とした。672は5.5cmの厚みがある板状の木製品。表面には無数の細かい刃物痕があり(図版82)、裏面には長さ25cm、幅3.9cm、深さ2.0cmの溝が切られている。この溝に別材が差し込まれていた可能性が高く、机や椅子などの指物か、作業台などの用途が考えられる。673はほぼ完形品。柄は約75cmと真っ直ぐに長く丸い棒状である。先端はちょうど匙のような形で浅く削られている。674は10cmほどの軸部を持ち、その断面は半月形。身は浅く削られており先端にいくほど薄くなっている。鎌のような用途が考えられようか。

第108図675から第111図までは各種の部材や未完成品と思われるものなどを集めて収録した。682・684は匙や杓子の未完成品か。688は2ヶ所の穿孔に紐を通し蓋のような用途が考えられる。

690は工具柄の未完成品か。691～695は芯持ち材。外周側は加工されている。707は左側面が刃をつくり出しているように薄くなっている。刀柄にしては細すぎるとか。709は容器の一部か。710・712・713は木材を分割するときなどに使われる楔か。711は厚さ1.7cmほどのヒノキの板目板である。上下は曲線になっているが復元しても円形にはならない。表面には約1cm内外の幅の狭い刃物痕が全面にある(図版



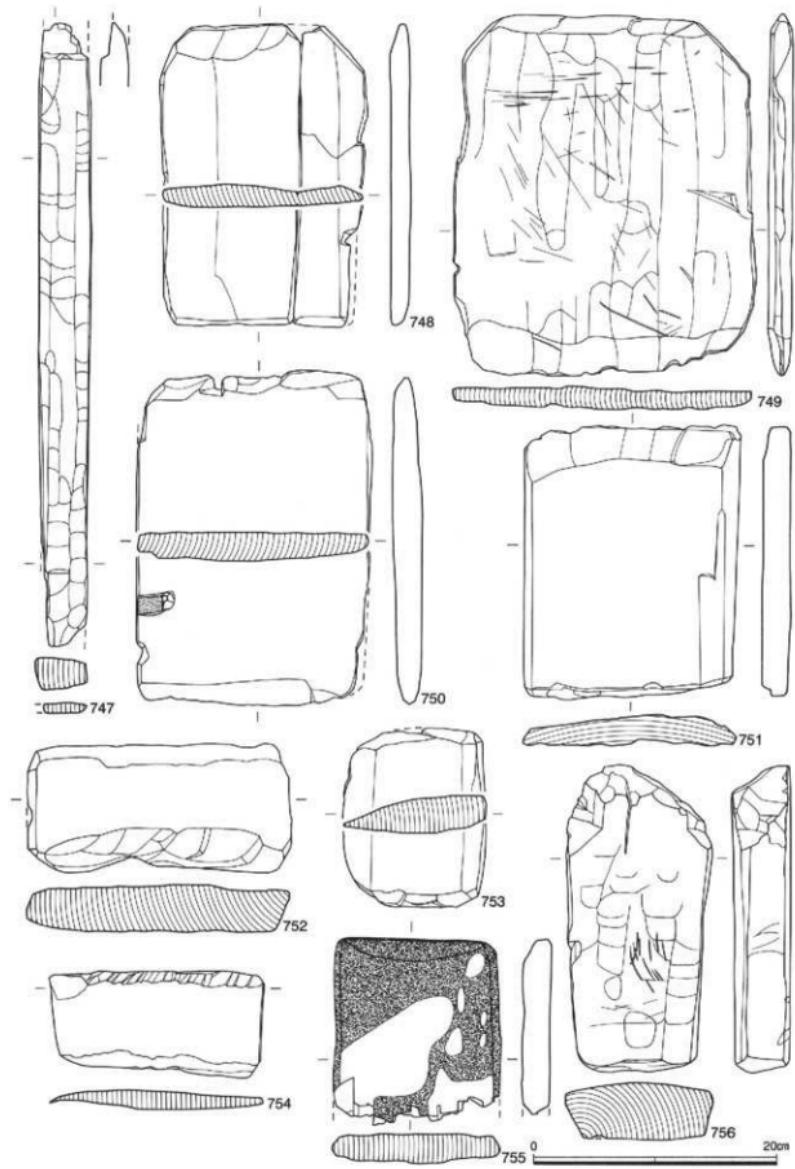
第113図 用途不明木製品21



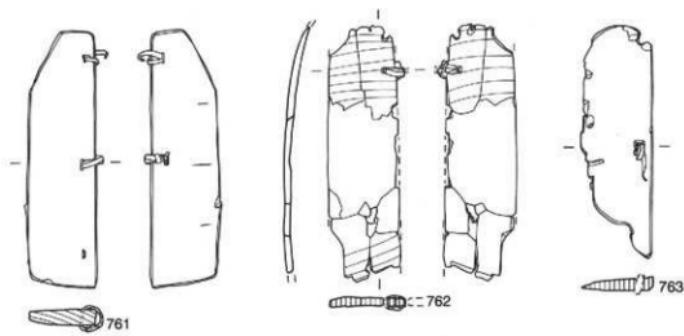
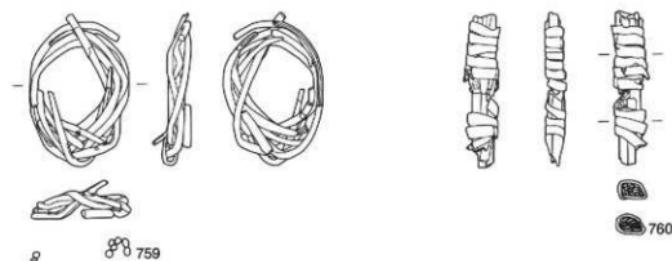
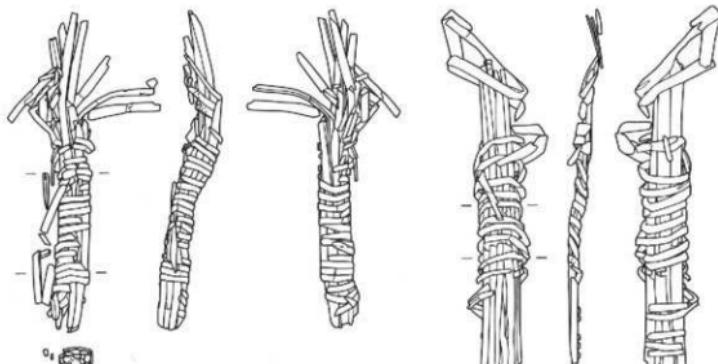
第114図 用途不明木製品22（加工痕資料）



第115図 用途不明木製品23（整形板材1）



第116図 用途不明木製品24(整形板材2)



0 20cm

第117図 用途不明木製品25（樹皮製品）

85)。痕跡からヤリガンナ状の鉄製工具を使って面調整されたものと思われる。714は上面側に柄がついていたような痕跡がある。716は中央部分が浅く窪んでいる。

第112図717～719は細く削られた棒状木製品。中世の箸状木製品の可能性もあり得る。720～723は柄の一部と考えられる。721には幅0.5～0.7cmの樹皮が巻き付いていた。脆くなってしまってはいるが木の表面に痕跡が残っている(図版86)。

第113図にまとめた木製品は意図的な加工がされているものの用途が特定できない。部材の一部か未完成品と思われる。725は木の枝分かれした股の部分。726・727には樹皮が付着している。729は柱の一部か。

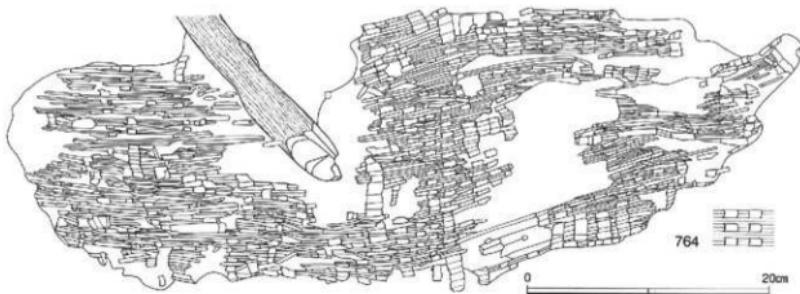
第114図には特に整形されているものではないが、切断痕が顕著なものを集めた。いずれも工具の痕跡がはっきりとわかる(図版88)。

第115・116図には整形されている板材の一部を掲載した。744～745の板目板は面調整の加工痕が顕著に残っている。その他の短いものは整形された板材から必要な長さを分割切断した際、余った端材と思われる。いずれも上下に切断痕が残っている。

第117図757～760はツル巻き状のものである。757・758・760は数本のツルを軸にして回りに同材のツルが巻き付いている。同じようなものが有頭棒状木製品(544)の抉られた部分に巻き付いていた例がある。759はツルが輪状に巻いてある。このほかにも図化しなかったがツルや樹皮が遺跡内から多量に出土している。これらは第20表に掲載した。

第118図764は樹皮と茎状の植物を使って織ってある編物である。2区の自然流路(SR01)第III層面の湧水点(2SD25)内より出土している。時期は弥生時代中期に属する。縦方向に幅0.5～1.5cmの樹皮、横方向に約0.2～0.5cmほどの太さの茎状の植物を2本取りにして編み込んでいる(註42)。樹皮と樹皮との間は約0.5cmと一定の間隔になっている。上部の木片は自然木。

註42 第118図の模式図参照。



第118図 用途不明木製品26(籠編物)

第12表 弥生時代出土木製品 1

第13表 弥生時代出土木製品 2

第14章 弥生時代出土木製品 3

第15表 弥生時代出土木製品 4

第16表 弥生時代出土木製品 5

第17表 弥生時代出土木製品 6

第18表 弥生時代出土木製品7

番号	大類別	中類別	小類別	形態	材種	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	目	説明	測定番号
1	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	34.00	5.50	2.00	漆器	(付)	W1-937
2	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	18.00	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-1000
3	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	22.00	4.00	2.00	漆器	(付)	W1-1380
4	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	25.00	6.70	4.00	漆器	(付)	W1-146
5	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	39.00	4.20	2.00	漆器	(付)	W1-151
6	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	2.00	1.00	0.50	漆器	(付)	W1-1472
7	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	7.10	6.00	2.70	漆器	(付)	W1-956
8	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	17.00	3.10	2.00	漆器	(付)	W1-1007
9	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	32.25	3.85	2.00	漆器	(付)	W1-1056
10	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	1.00	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-733
11	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	16.00	3.00	2.00	漆器	(付)	W1-1466
12	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	11.00	3.70	2.00	漆器	(付)	W1-1441
13	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	17.00	4.20	2.00	漆器	(付)	W1-1512
14	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	11.00	3.60	2.00	漆器	(付)	W1-1190
15	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	9.00	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-1104
16	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	70.00	—	—	漆器	(付)	W1-276
17	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	43.00	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-237
18	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	16.00	3.00	2.00	漆器	(付)	W1-1351
19	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	34.00	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-1033
20	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	14.00	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-47
21	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	115.00	4.50	2.00	漆器	(付)	W1-159
22	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	13.00	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-1228
23	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	21.00	4.50	2.00	漆器	(付)	W1-1288
24	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	13.00	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-774
25	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	15.00	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-1134
26	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	45.00	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-1459
27	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	2.00	4.70	2.00	漆器	(付)	W1-1464
28	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	23.00	3.80	2.00	漆器	(付)	W1-1303
29	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	3.00	3.00	2.00	漆器	(付)	W1-100
30	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	4.50	4.00	2.00	漆器	(付)	W1-1480
31	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	25.00	3.40	2.00	漆器	(付)	W1-1198
32	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	21.00	4.00	2.00	漆器	(付)	W1-71
33	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	71.00	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-1186
34	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	72.00	3.40	2.00	漆器	(付)	W1-211
35	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	33.00	3.80	2.00	漆器	(付)	W1-1326
36	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	8.00	3.00	2.00	漆器	(付)	W1-171
37	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	164.00	3.00	2.00	漆器	(付)	W1-162
38	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	166.70	2.40	2.00	漆器	(付)	W1-134
39	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	130.00	5.50	2.00	漆器	(付)	W1-146
40	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	26.10	3.50	2.00	漆器	(付)	W1-1647
41	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	21.00	3.00	2.00	漆器	(付)	W1-1114
42	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	3.00	3.00	2.00	漆器	(付)	W2-237
43	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	22.00	3.40	2.00	漆器	(付)	W1-1307
44	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	73.00	3.80	2.00	漆器	(付)	W1-208
45	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	73.00	3.40	2.00	漆器	(付)	W1-207
46	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	20.00	4.70	2.00	T-4156	漆器付	W1-193
47	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	113.00	4.00	2.00	T-4144	漆器付	W1-146
48	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	134.00	4.20	2.00	T-4144	漆器付	W1-943
49	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	113.00	4.40	2.00	T-4144	漆器付	W1-1383
50	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	118.00	4.50	2.00	T-4144	漆器付	W1-67
51	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	118.00	3.10	2.00	T-4144	漆器付	W1-144
52	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	118.00	3.20	2.00	T-4144	漆器付	W1-45
53	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	118.00	3.30	2.00	T-4144	漆器付	W1-2007
54	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	99.00	2.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-21
55	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	21.00	4.70	2.00	T-4174	漆器付	W1-157
56	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	33.00	4.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-141
57	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	72.00	3.00	2.00	T-4174	漆器付	W1-1702
58	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	21.00	3.00	2.00	T-4174	漆器付	W1-1185
59	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	58.00	—	—	T-4174	漆器付	W1-1442
60	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	21.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1451
61	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	48.70	4.00	2.00	T-4174	漆器付	W1-1307
62	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	65.00	4.10	2.00	T-4174	漆器付	W1-1304
63	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	66.00	3.00	2.00	T-4174	漆器付	W1-21
64	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	53.00	—	—	T-4174	漆器付	W1-1407
65	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	24.00	4.40	2.00	T-4174	漆器付	W1-907
66	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	17.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-60
67	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	53.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-90
68	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	70.70	3.40	2.00	T-4174	漆器付	W1-124
69	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	33.00	3.00	2.00	T-4174	漆器付	W1-72
70	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	94.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-188
71	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	93.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
72	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	113.00	3.70	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
73	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	65.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1451
74	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	21.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1307
75	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
76	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
77	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
78	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
79	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
80	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
81	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
82	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
83	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
84	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
85	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
86	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
87	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
88	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
89	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
90	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
91	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
92	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
93	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
94	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
95	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
96	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
97	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
98	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
99	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
100	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
101	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
102	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
103	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
104	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
105	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
106	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
107	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
108	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
109	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
110	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
111	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
112	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
113	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
114	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
115	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1441
116	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.50	2.00	T-4174	漆器付	W1-1443
117	漆器	漆器	漆器	漆器	漆器	76.00	3.80	2.00	T-4174	漆器付	W1-1442
118	漆器	漆器									

第19表 弥生時代出土木製品 8

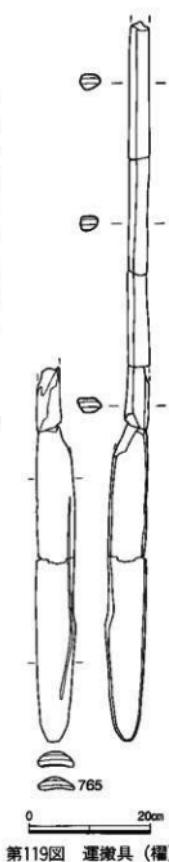
第20表 弥生時代出土木製品 9

第6節 繩紋時代

1 包含層（15層）出土木製品

7区深掘区の15層面、縄紋時代の自然流路が形成される直前の旧地形面から木製品が出土している。大半は自然木であったが、製品はほぼ完形に近い状態の櫂（註1）が1点出土している。時期は縄紋時代後期末から晩期初頭を下るものではない。765はいわゆるオール形の櫂である。全長118.1cm、最大幅6.6cm、断面の厚みは軸部で2.6cm、オール部で2.2cm。サカキの板目材を使い一本で作られているものである。軸部の先端は欠損しているがほぼ原型を留めている。軸部の断面形は円形に近く、長さは約66cm残っている。オール部分は完全に残っており約51cmを測る。身は比較的厚みがあり、全くの偏平形ではなく断面から見ると表面側に湾曲している。幅はあまり広がらず細身で、軸部から下は肩部がない。オール部の先端は幅1.5cmほどにわたって潰れたようにすり減っている。

註1 弥生時代に属する「櫂」は農耕具の「一木鋤」との区別が容易でないため、「櫂状木製品」という名称を使っている。しかし765は形態や出土状況からも明らかにオールの形態を持つものであるため「櫂」の名称を用いている。



第119図 運搬具（櫂）

第III章 まとめ

第1節 木製品の材質について

角江遺跡から出土した木製品の樹種については、資料の一部を採取して標本プレパラートを作成し、樹種同定を行っている(註1)。樹種同定については東北大学理学研究科の鈴木三男氏に依頼し、総数2025点に及ぶ資料のうち製品を中心にして854点の樹種を調べた(註2)。今回の樹種同定は縄文時代から中・近世に至るまでの木製品全般に渡って行ったが、特に資料数の多い弥生時代について注目すると、非常に興味深い結果が得られた。その代表的な傾向の一つとして広葉樹材を多用していることが挙げられる。また製品によって特定の樹種を選択していることも分かった。詳細については「特論1」にあるため、ここではどのような原材を使ってつくられたのか、完成品から想定できる例をいくつか挙げてみたい。

例えば、農具では、第32図166の二連の鍬未製品はクヌギ節の柾目材で、最大幅は21.8cmある。広葉樹材の分割方法から考えると、この板材はミカン割り材から製材されたものであり、立木状態の直径を心材も加味して復元すると、直径が約50cmの樹幹をもつクヌギだったことが推測される。直径が50cmとすると幹周は157cmあったことになる。鍬・鋤未製品のなかで最大の幅を持つのは第30図159でアカガシ亜属の柾目板である。資料の最大幅は29.4cm、同様に復元すると直径は約65cmに及ぶと考えられる。幹周は2mを超える。また臼は縦木取りだが、それでも直径が65cm以上のクスノキの丸太が必要であろう。

自然流路(SR01)より出土した船の材はクリである。木取りは板目であることから半裁材をくり貫いてつくられたと想定される。最大幅は62.6cmを測るが、欠損しているためもう少し幅が広がるであろう。単純に計算しても、直径が約70cmのクリ材が必要である。幹周に直すと220cmにもなる。

一方、容器では、398や399・403の木製高杯が正円形であったとすれば、復元すると398は最大直径が42.0cm、399は45.8cm、403は38.8cmを測る。容器の木取り方法は横木取り柾目が一般的である。資料はいずれもこの木取り方法でつくられている。399の高杯を削り出してつくるためには、半径が50cm以上、直径にすると約1mの樹幹を持つケヤキが必要だったことになる。しかし容器の場合、歪みを出さないように、通常、心材部分は避けて辺材のみを使う。ケヤキ材にどの程度の心材があったか想定できないが、辺材部分しか使っていない容器であつたら、直径が1m20cmは必要であろう。幹周は3m80cm近い大木である。またケヤキ材は枝が細く放射状に開くため、使える樹幹は根本に近いほうしかない。

このように遺跡から出土した木製加工品から、当時の立木の直径を推測できるものがある。視点を考えれば、直径1m以上の樹幹を持つ大木が実際に存在し、それをふんだんに使用していたと考えられるのである。樹種同定の結果にもあるように、周辺に豊かな照葉樹林が存在していた可能性がある(註3)。当時の周辺の自然環境は現代の景観とは大きく異なり、豊かな原生林が存在し、直径が1mを超える樹木が身近に豊富にあったと思われる。遺跡から出土した木製品のなかで大多数を占めるのは、やはりアカガシ亜属であろう。カシ、クヌギ、コナラは農耕具に多用されたのはもちろん、自然流路周辺には大量の整形板が貯木されていたことからも、豊富な木材資源があったと考えられる。角江遺跡の北西側には三方原台地南縁の海食崖があり、標高約30m前後の丘陵地となっている。台地の周辺は浸食谷が発達し、遺跡に接する東神田川の浸食谷は第1砂堤列によって塞がれている。遺跡自体はこの第1砂堤列上に立地している(註4)。のことから周辺の植生は、小高い丘陵地にはカシや、クヌギ、コナラなどの大木が生育する原生林が存在し、ケヤキやクスノキ、スギ、ヒノキ、アカマツなどの雑木林がひろ

がり、丘陵に形成された谷筋にはあまり大木にならないタイミンタチバナなどの小高木が生育していたと思われる。出土した多くの木製品はこの手近にある在地の材を使ってつくられていたと考えられる。また樹種の多さから、大木に限らず谷地に分布するような小高木、いわゆる雑木も手当たり次第に使っていたと思われる。

一方、遺跡からはコウヤマキ材でつくられた製品も數点出土している。コウヤマキ材は西日本各地で多用されているが、東海地域での出土例は数少ない。コウヤマキ材で作られた製品は櫛(419)や剣形木製品(442)、用途不明木製品(632)、また琴に類似した形態をもつ製品とした651・652も同材である。これらの一部は搬入品であることも考えられる。

註1 標本プレパラートの作成については第1章第2節の資料整理の方法で述べた。

註2 樹種同定の結果は、依頼した鈴木三男氏より玉稿を賜った。本書には「特論1」『静岡県浜松市角江遺跡出土木製品の樹種』として掲載した。

註3 特論1「静岡県浜松市角江遺跡出土木製品の樹種」を参照。

註4 角江遺跡の地理的環境については『角江遺跡II 遺構編』に詳細な見解がある。

第2節 弥生時代の木製品の加工生産について

角江遺跡から出土した木製品は農耕具を始めとして、工具、紡織具、運搬具、漁獵具、武器、容器、建築材などさまざまな種類がある。なかでも鍬鋤や直柄の未完成品が数多く見られることは、弥生時代に遺跡内(集落内)で木器の生産活動が盛んに行われていたことを示す。

鍬・鋤の未製品や、丸太へ整形段階の未製品は、自然流路(SR01)周辺に集中して出土している。出土状況からこれらの未製品は流路の岸部付近に貯木されていた可能性もある。集落に接する自然流路(SR01)は水田へ水を供給する河川であり、集落の水場、廃棄場所であると同時に、材木の貯木場としての役割もあったのであろう。

これらの木製品を加工する工具も当然問題となる。東海地域に鉄製工具が普及した時期は弥生時代後期と言っているが、それより以前は石製工具が一般的である。遺跡内より発見された磨製石斧から石製工具が盛んに使用されていたことがわかる。前述したように原材は手近にあったと思われるが、樹幹が1mを超えるような大木を石製工具で切り倒していたことも想定される。伐採から運搬、分割、製材までの行程にはかなりの労力を必要とするであろう。石製工具は完成品が出土しているものの、集落内で石製工具がつくられたことを示す未製品資料は見つかっていないことから生産活動を知る手がかりとなるものは見られない。

一方、角江遺跡では鉄製工具の出土例はない。弥生時代後期には東海地域でも鉄製工具はある程度普及していたと考えられている(註5)。遺跡から出土した石製工具は後期に入ると数が激減していることからも、すでに鉄製工具が使われ始めていたと考えても良いだろう。また製品資料に残る加工痕や製品の精度から鉄製工具が存在していたことはほぼ間違いないであろう。例えば、用途不明木製品第111図711(弥生後期)の表面にはヤリガンナ状の工具で削られたものと思われる痕跡が顕著に残っている。このように工具自体は発見されなかったが、製品資料から鉄製工具の存在が想定できる。

調査後の資料整理の結果、弥生時代中期から後期にかけて木製品の加工生産が集落内で盛んに行われていたことが明らかとなった。また前項で触れたように原材も手近な材を使っていたと考えられる。しかし、切り出した原材がどのように運ばれたか、また分割はどのように行われたかなど不明な点も多い。今後の資料の増加によって明らかとなることを期待したい。

第3節 建築材から想定される構造物について

出土した弥生時代の建築材の種類から、集落内に高床倉庫があった可能性が高い。例えば、長さ2mを超える台輪または横枠材（第85図482・483）からは、梁行きかまたは桁行きが2間ほどの倉庫を考えられる。また出柄がつくり出された梯子（第80図453）には明らかに鼠返しが装着され、高床倉庫の入口に使用したものと思われる。さらに長さ3mに及ぶ丸木の柱（第85図481）はつくり出された長方形の出柄から鼠返しが装着され、上部は壁板と組み合わされたであろう。第90図521などは壁板材と考えられる。このような建築材の出土量はけで多いものではなく、むしろ少ないほうであろう。また何棟の高床倉庫があったかなどの問題までは言及できないが、遺物から集落の構造物を想定できる資料である。また弥生中期～後期の両時期にわたって出土していることから弥生時代を通じて集落内に高床倉庫のような施設が存在していたことを示しているであろう。一般の竪穴住居に伴う建築材は特定できないが、垂木や2m前後の有頭棒状木製品はそれにあたる可能性がある。

また枘材（グボ栓）の存在は、柱などの大型材を組み合わせる構造物が多くあったことを示す資料と言えよう。一方で枘材を必要とする継手の加工はかなり複雑で精巧な加工技術が要求される。工具の充実と加工技術の高さはすでに弥生時代に確立していたと考えられる。

建築材には炭化した材が多く目立つ。それが火災によって炭化したものか、意図的に燃やされた廃材なのかは資料から判別できない。しかし端部だけが焦げているものの場合は燃やされたものではないだろう。消失家屋の燃え残りが廃棄された可能性もあるだろう。

第4節 琴について

角江遺跡から出土した木製品のなかで最も注目されたものと言えば琴であろう。いずれも自然流路（SR01）の包含層より出土したもので、弥生時代中期～後期に属する。弥生時代中期に遡る資料は全国的に例が少なく、極めて貴重な発見であったと言えよう。琴については放送大学の笠原 淑氏（音楽学）に考察を依頼した（註6）。第76図435～437は自然流路（SR01）の覆土より出土したもので、435は弥生時代後期前半の覆土から、436・437は中期後葉～後期前葉の覆土から発見された。ほかに、当初、琴と思われたが決定的な根拠が欠けるため用途不明木製品とした651～653などの類似資料もある。

このような琴は全国でも40数例出土しており、静岡県内でも静岡市登呂遺跡で1例、同小黒遺跡で1例がある。琴が出土している遺跡は西日本一帯に多く分布しているが、近年では東日本の各地でも出土例が増えつつある。そのようななかで角江遺跡から出土した琴は1遺跡から異なる2つの形態があることや、弥生時代中期と後期と2時期にわたっていることなど極めて珍しい例と言える。また435の琴の突起には弦が張られていたと思われる痕跡が残っていること、437は槽作りの琴としては古い時期に属し、琴尾の突起はこれまでに例のない8突起の可能性があることなど特筆すべき点が多くある。これらの特徴を持った琴が集落内で日常的に使われていたものか、祭的な道具として珍重されていたものか、発見例から判断することは難しい。また琴の系譜自体も未だ明らかになっていない現状がある。様々な点で弥生時代の弦楽器の新たな発見例として問題点を呼ぶことになるであろう。

註6 琴の考察については依頼した笠原 淑氏より玉稿を賜った。本書には「特論2」「角江遺跡出土の琴ならびに琴状木製品」として掲載した。

謝 辞

本報告の終わりにあたり、整理作業のなかで多くの方々から御指導・御助言をいただいた。また資料整理にかかわった方々には2年間にわたって御協力いただいた。ここに御芳名を列挙し、深く感謝を申し上げたい。

五十音順、敬称略

指導助言をいただいた方々

荒井 格 笠原 潔 斎藤明彦 鈴木三男 山田昌久

資料整理

技術補助員 平井豊子

整理作業員 稲垣訓子 宇佐見由紀子 佐藤容子 新村佳子 杉山久美子 高田清子 宅見寿美子

原川佐伎子 平井高代 望月夏江

特論 1

静岡県浜松市角江遺跡出土木製品の樹種

東北大・理学研究科 鈴木三男
(財) 静岡県埋蔵文化財研究所

角江遺跡は浜松市中心部の西方約6キロ、浜名湖に流れ込む新川の流れる低湿地にあり、ここから出土した木製品の樹種を調査した。木製品は弥生時代中期及び後期を中心とした、鎌鉗などの農具、それらの柄、石斧柄、曲物、刺物などの容器、建築材、弓などの武具、舟や櫓などの漁労運搬具、その他用途が明確でないものなど、多種多様であり、合計984点の樹種の調査を行った。その結果、表1を見るように、50タイプ（ここではこれを便宜的に樹種と呼ぶ）の樹木及び竹苞類が認められた。

以下に、これらの樹種の同定の根拠となった材形質と、木製品の種類について記載し、それらの代表的な標本の顕微鏡写真を図版1～16に示した。また、個々の木製品の同定結果は木製品の一覧表（171～179頁）に付記した。

同定された樹種

1 カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. イチイ科

図版1:1a-c (No. 4493)

出土材の保存性が極めてよい針葉樹材で、材は淡黄褐色、年輪は目立たず、樹脂細胞はなく、仮道管と放射組織からなる。早材部には方形の仮道管が整然と並び、晩材部ではやや細く厚壁となる。仮道管内壁には顯著ならせん肥厚があり、2～3本づつまとまって走る。放射組織は柔細胞からなり背が低く、分野壁孔は小さい。これらの形質からイチイ科のカヤの材と同定した。イチイとはらせん肥厚が2～3本づつまとまつてはしない事により、イヌガヤとは樹脂細胞を欠くことにより区別される。

カヤは東北地方南部以南の暖温帯に広く生える常緑針葉樹で、幹径1メートル、樹高25メートルの大高木となる。幹は通直で材の木理も通直、堅く粘りがあり、緻密で弹性が強く、切削加工が容易で木肌美しく、保存性も高くて、極めて優秀な針葉樹材である。建築材、各種器具材など実に多様な用途があるが、碁盤、将棋盤などの特用がある。特に、古来、一本の木彫彫に重用されている。当遺跡出土材は弥生中期の建築材と用途不明品1点づつで、大量の木製品が出土したわりには利用が少ないと言える。

2 イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch. イヌガヤ科

図版1:2a-c (No. 2492)

年輪が全く目立たない淡黄褐色の針葉樹材で、カヤに比べ、早材から晩材への移行は極めて不明瞭である。年輪内に樹脂細胞が多数散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。仮道管の内壁には明瞭ならせん肥厚がある。これらの形質からイヌガヤの材と同定した。

イヌガヤは本州以南の温暖地に生育する常緑小高木で、高さ10メートル、幹径30センチくらいになる。材は堅く粘りがあり、緻密だが加工性に難がある。カヤ同様の用途があるが、材質が劣り、また、材が小さいのでそれほど利用はない。むしろ、枝が通直で曲げに強く粘りがあることから、手網の枠、牛の鼻輪等の用途がある。本遺跡出土材は手網枠、弓、鎌の柄が各1点で、その他用途不明品の棒状の製品が6点ある。

3 イヌマキ属 *Podocarpus* マキ科

図版1：3 a-c (No. 4561)

イヌガヤ同様年輪の全く目立たない針葉樹材で、樹脂細胞が年輪内に均一に分布している。イヌガヤからは顕著ならせん肥厚を持たないことで容易に区別されるが、イヌガヤでもあて材の部分ではらせん肥厚が形成されないときもあるし、保存状態によっては細胞壁が腐朽して顕微鏡下でその存在を確認出来ないようなときもあり、イヌマキ属との区別が困難になる時がある。しかし、イヌガヤの樹脂細胞の水平壁はほぼ水平に位置して、厚く数珠状に肥厚するのに対しイヌマキ属ではしばしば斜目に位置して大変薄く平滑であること、さらに分野壁孔がイヌガヤでは開孔部の狭いトウヒ型であるのに対し、イヌマキでは広いスギヘヒノキ型であること、などで区別出来る。

イヌマキ属には房総半島南部以南西の暖地に生えるイヌマキ *Podocarpus macrophyllus* (Thunb.) Lambert とさらに南方の紀伊半島以南に生えるナギ *Podocarpus nagi* (Thunb.) Zoll. et Moritzi があるが、材構造での両者の区別は難しい。しかしながら現在では静岡県内でもしばしば植栽されはするものの、その天然分布がはるか南方に限られることから当遺跡出土材はイヌマキであると考えられる。

イヌマキは樹高15メートル、幹径80センチくらいになる常緑高木で、地際からしばしば萌芽枝を出し、その萌芽枝は通直で成長がよい。材は木理通直で堅く粘りがあり、樹脂が多くて耐湿性、耐朽性に優れる。枝材は粘りがあって曲げに強い。カヤ同様に建築材、器具材などに使われるが、水温特に強いので琉球地方では土台、柱材に重用している。当遺跡出土材は83点もあり、28点が丸木弓であるほか、手網の枠、鎌の柄、建築材（垂木）等の他、用途不明品が多数ある。これらの用材は基本的にはイヌガヤと同一であるが、イヌガヤに比べてはるかに多数が使われていることに特徴がある。

4 モミ属 *Abies* マツ科

図版2：4 a-c (No. 4522)

年輪の明瞭な針葉樹材で、早材、晩材とも幅広く、早材から晩材への移行は緩やかからやや急である。放射組織は柔細胞のみからなり、その垂直、水平壁には多数の単壁孔がある。これらの形質からモミ属の材と同定した。

モミ属には全国の暖温帯に広く分布するモミ *Abies firma* Sieb. et Zucc. のほか、太平洋側地域では冷温帯に多いウラジロモミ *Abies homolepis* Sieb. et Zucc.、亜高山帯に多いシラベ *Abies veitchii* Lindley 等があり、その材構造での区別は困難である。しかし、分布から当遺跡出土材はモミであるとみなされる。

モミは東北地方中部以南の本州、四国、九州の暖温帯から冷温帯下部にかけて普通に生える針葉樹で、幹径1.5メートル、樹高30メートルになる大高木である。材は木理通直で割裂性がよく、加工は容易だが、肌目が粗く、軽軟で、狂いややすい等の欠点がある。各種建築材、箱ものなどの器具材、小細工もの、棺桶、卒塔婆などの用途がある。当遺跡出土材は樋、建築材など8点である。

5 アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科

図版2：5 a-c (No. 3962)

早材、晩材とも幅広い針葉樹材で、早材から晩材への移行は緩やかである。年輪内に垂直樹脂道が散在する。放射組織は単列と紡錘状の2形があり、後者は水平樹脂道を持つ。放射組織は放射仮道管、柔細胞、分泌細胞からなり、放射仮道管の内壁は顕著に肥厚し、その先端は鋸い歯牙状となる。分野壁孔は大型の窓状で通常1分野に1個ある。これらの形質からアカマツの材と同定した。

アカマツは本州、四国、九州の冷温帯から暖温帯にかけてもともと普通に生える針葉樹で、特に瘦せ地や二次林に多い。幹径1メートル、樹高30メートルになり、材は木理通直で重硬、樹脂分が多く、保

存性がよい。アカマツはクロマツとともに一つの短枝に2本の針葉が束生し(二葉松類)、1本の針葉にある維管束が二つの部分からなる複維管束亞属に属して、材質が堅いのに対して、ヒメコマツなどは、1本の短枝に5本の針葉が束生し(五葉松類)、維管束が1本のみからなる単維管束亞属に属し、材は柔らかい。アカマツの材は建築材、各種器具材、土木用材、製鉄用の炭材、薄く剥いで繩にするなど、広い用途がある。当遺跡出土材は8点あり、弥生中期のものは農具の柄が1点、弥生後期の用途不明品(柄に巻いた繩)の1点づつのみで、あとは時代が不明だったり、中世の柱材やシガラである。

6 クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科

図版2:6a-c(No.3964)

アカマツに良く似た材だが、放射仮道管の内壁の肥厚がやや未発達で、先端が丸くなり、鋭くとがらないことで区別される。

クロマツはアカマツ同様本州、四国、九州に広く分布するが、それに比べ海岸部に限定される。幹径1メートル、樹高30メートルになり、材質、用途はアカマツ同様である。当遺跡出土材は7点あり、弥生中期の継が1点、弥生後期の用途不明品が1点、その他中世の建築材や用途不明品である。

7 二葉松類 *Pinus subgenus Diploxylon* マツ科

上述のごとく、アカマツとクロマツは放射仮道管の内壁の歯牙状肥厚の顕著さ、特に先端の鋭さで区別されるが、材の保存が悪く、そのいずれとも判定できなかったものを「二葉松類」とした。五葉松類からは放射仮道管の内壁の肥厚が顕著であること(五葉松類ではやや肥厚するものの歯牙状になることはない)で区別される。

アカマツ、クロマツとも同様な用途があるが、二葉松類とした当遺跡出土材は10点で、弥生中期の手綱の枠が3点、農具の膝柄が1点、弥生時代のつる巻の綱が1点、その他、柱、梯子、斧の膝柄などである。

8 ツガ属 *Tsuga* マツ科

図版3:7a-c(No.3924)

年輪の明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。垂直、水平の樹脂道とともに欠き、放射組織は放射仮道管と柔細胞からなる。柔細胞の垂直、水平壁はモミ属同様、厚く肥厚し、多数の单壁孔がある。これらの形質からツガ属の材と同定した。ツガ属には関東以西の本州、四国、九州の暖温帯上部から冷温帯下部にかけて広く分布するツガ *Tsuga sieboldii* Carr. と、亜高山帯に分布するコメツガ *Tsuga diversifolia* (Maxim.) Masters があるが、その分布から当遺跡出土材はツガであると考えられる。

ツガは幹径80センチ、樹高30メートルくらいになる高木で、材は木理通直で、重硬で、保存性は中位である。建築材、箱ものなどの各種器具材等に用いる。当遺跡出土材は弥生後期の履き物と弥生時代の用途不明品各1点である。

9 コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

図版3:8a-c(No.4192)

材質が大変均質な針葉樹材で、晩材部は幅狭く、早材から晩材への移行はやや急である。仮道管と放射組織のみからなり、放射組織は柔細胞からなる。分野壁孔が特徴的で、大型で菱形を丸く膨らました窓状で1分野あたり通常1個、時に2個ある。これらの形質からコウヤマキの材と同定した。

コウヤマキは福島県と本州中部以西、紀伊半島、中国、四国、九州の冷温帯下部に生える針葉樹で、幹径1メートル、樹高30メートルの大高木となる。材は比較的軽いが堅く強靭で、木理通直で、年輪が目立たなく均質であり、加工性よく、仕上がりが美しい、そしてなにより耐朽性、特に耐湿性に優れ、日本産の針葉樹でもっとも材質がよい。材質がよいから建築材を始めありとあらゆる用途に用いることが出来るが、資源量が少ないため、特にコウヤマキを必要とする桶類に用いられる。当遺跡出土材は7点で、弥生時代中期の形代（劍形）が1点、後期の琴が2点、剣物、用途不明品が各1点あり、その他中世の用途不明品2点である。コウヤマキは特に幾内地方の弥生時代から古代にかけてもっともよく用いられた樹種であり、木棺や巨大建築物の建築材の他、様々な部材、祭祀具などに広く多量に使われた結果、資源が枯渇してその後はあまり用いられなくなったと考えられている。当遺跡出土材、特に劍形や琴などは移入品である可能性が考えられる。

10 スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D. Don スギ科

図版3:9 a-c (No. 4527)

年輪の明瞭な針葉樹材で、遺跡出土材は黒褐色となる。年輪幅は通常広く、広い早材部と比較的広い晩材部からなり、早材から晩材への移行は揺るやかからかなり急なものまで変異があり、特に老齢材に由来する部分は年輪幅が大変狭く、晩材部もわずかで、早材から晩材への移行は急であり、ヒノキ材にてくる。樹脂細胞は主に晩材部にやや接線方向に連なって散在する。樹脂細胞中には黒褐色の物質が充填しており、細胞の水平壁は平滑で薄いか、やや厚く、少数数珠状に肥厚する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、垂直、水平壁は平滑、分野壁孔は大型の梢円形で開孔部は厚いレンズ状となり、スギ型で、1分野通常2個ある。以上の形質からスギの材と同定した。スギの遺跡出土材は年輪幅が広いこと、黒褐色の色調、際だった早晚材などでモミ材によく似るので、肉眼での識別は難しい。

スギは本州から九州までの冷温帯から暖温帯に広く分布する針葉樹だが、日本海側に多い。しかし、古くから利用されてきているので本来の天然分布はよくわからない。幹径2メートル、樹高35メートルを超える大高木で、材は木理通直で割裂性がよく、軽軟で強靭、加工性がよく仕上げは中位であるが大材が多量に得られるので、大型から個人住宅まで建築物のありとあらゆるところ、ありとあらゆる器具材、その他、国産材ではもっとも広い用途がある。古くから利用されてきており、福井県鳥浜貝塚遺跡の縄文時代の前期の丸木舟を始め、静岡市の登呂遺跡の大量の矢板や建築材など、非常に大量に用いられてきているが、特によく用いられるのは東海地方と本州日本海側に限られる。当遺跡出土材はわずか40点で、弥生時代中期では用途が不明な板材等が多く、後期では建築材、アカカキなどの剣物がある。

11 ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc. ヒノキ科

図版4:10 a-c (No. 3946)

年輪のあまり目立たない針葉樹材で、遺跡出土材はスギより明るい褐色を呈する。年輪幅が通常狭く、均等で、木目が美しい。晩材部は幅狭く早材から晩材への移行は急である。樹脂細胞は晩材部付近に散在する。樹脂細胞はスギ同様黒褐色部物質で充填されるが、水平壁は通常厚く肥厚し、結節状となる。放射組織は柔細胞からなり、分野壁孔はやや大きめの円形で開孔部は幅の狭いレンズ状で斜めに位置し、トウヒ型～ヒノキ型で1分野あたり通常2個ある。以上の形質からヒノキの材と同定した。

ヒノキは関東地方以西の冷温帯から暖温帯上部に分布する針葉樹で、幹径1メートル、樹高35メートル以上になる。材は木理通直で割裂性が大変よく、軽軟で、加工性が大変良い。材は緻密、強靭で、耐朽性に特に優れ、光沢美しく、芳香がある。日本産の針葉樹ではコウヤマキに次いで優秀な木材で、大型建築物から個人住宅までのあらゆる建築材、様々な器具材、仏像、彫刻物、曲物など実に広い用途が

ある。畿内地方の弥生時代から古代の建築物や生活の様々な器具類、容器類、祭祀具、木簡などに広く使われている。当遺跡出土材は 115 点ともっと多く、曲物、大型曲物を転用した井戸枠材、形代、建築材、樋状木器、アカカキなど、様々である。

12 クロベ *Thuja standishii* (Gordon) Carr. ヒノキ科

図版 4 : 11 a-c (No. 4517)

スギとヒノキの中間のように見える針葉樹材で、年輪幅は広く、早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞はヒノキと同様で、分野壁孔は小さく、開孔部はレンズ型でヒノキ型～スギ型、1 分野あたり 2-4 個ある。これらの形質からクロベの材と同定した。

クロベ（別名ネズコ）は青森県から中部地方までの本州と四国の冷温帯に分布する針葉樹で、樹高 25 メートル、幹径 60 センチくらいになる。材は軽軟で木理通直で割裂性がよく、また加工がしやすい。耐朽性もありヒノキ材とほとんど同じ様な用途がある。当遺跡出土材は弥生中期の舟形 1 点がクロベ（？）で、弥生後期の垂木と用途不明品各 1 点づつである。

13 ヒノキ科 Cupressaceae

年輪の明瞭な針葉樹材で、樹脂細胞は晩材部付近に散在し、黒褐色の物質で充填され、水平壁が結節状になるものの、保存が悪く分野壁孔が全く観察できないため、ヒノキとクロベのいずれか、あるいは他の樹種であるかが不明なものである。弥生中期の舟形と用途不明品、弥生後期のアカカキ、それに中世の箸各 1 点である。これらはヒノキあるいはクロベの用途とよく一致している。

14 クマシデ節 *Carpinus sect. Distegocarpus* カバノキ科

図版 4 : 12 a-c (No. 3929)

丸みを帯びた薄壁の小道管が数個放射方向に複合して全体として放射方向に並ぶ散孔材で、道管の穿孔は單一と横棒が多くない階段状、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。木部柔細胞は 1 細胞幅の接線状で晩材部でよく目立つ。放射組織は 2-3 細胞幅のスマートな紡錘形で、同性に近い異性である。以上の形質からカバノキ科クマシデ属のうち、クマシデ節のクマシデ *Carpinus japonica* Blume かサワシバ *Carpinus cordata* Blume の材と同定した。

クマシデは東北地方南部以南の本州、四国、九州の冷温帯下部から暖温帯に広く生える落葉小高木で、幹径 30 センチ、樹高 10 メートルくらいになる。サワシバは北海道から九州にかけての冷温帯から暖温帯上部の特に沢沿いに多い落葉小高木で、幹径 30 センチ、樹高 10 メートルくらいになる。サワシバの材は堅硬で強烈、粘りがあり、肌は粗く加工は困難であり、床柱、柄物などの用途がある。クマシデの材はサワシバに似て同様の用途がある。本遺跡出土材は時期不詳の用途不明品 1 点である。

15 クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

図版 5 : 13 a-c (No. 4538)

年輪の始めに梢円形の大道管が 1-3 層並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって火炎状の紋をなす環孔材で、心材部はタンニン様物質が変質したもので漆黒となり、材は堅くなつて保存性が大良い。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、道管内壁には薄壁のチローシグが発達する。木部柔組織は散在状あるいは単接線状で晩材部で目立つ。放射組織は單列同性、道管-放射組織間の壁孔はサイズが不揃いな梢円形でその長軸の向きは様々である。これらの形質からクリの材と同定した。

クリは北海道南部以南の全国の冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉高木で、幹径1メートル、樹高20メートルに達する。成長が早く、材はやや堅硬で割裂容易、耐朽性、特に耐湿性に優れる優秀な木材である。大材が得られるので大型建築物の柱材や土台、各種器具材をはじめ、ありとあらゆる用途がある。また特に耐湿性と耐朽性に優れているので土木用材、木造の橋、鉄道枕木などの特用がある。材質の優秀さと人里近くに多く生えることから古くから多用され、特に縄文時代はクリ文化といわれるほど、堅穴住居の柱材、杭材、丸木舟、割物容器、燃料材と実によく使われてきている。当遺跡では63点出土し、高床建物の柱、梯子、ネズミ返し、小型の臼、農具の鎌、柄類、琴、櫛状木器など様々である。

16 スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima ブナ科

図版5:14 a-c(No. 4135)

年輪の始めに丸い中へ大型の道管が間隔を置いて1層並び、晩材部ではクリ同様薄壁多角形の小道管が集まって火炎状となる環孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、木部柔組織は散在状及び単接線状で晩材部で目立つ。放射組織は単列同性で道管-放射組織間壁孔は梢円形でしばしば縦に棚状に並ぶ、などの形質からシイ属のスダジイの材と同定した。

スダジイは照葉樹林を特徴づける樹種で、東北地方南部の沿岸部以南の本州、諸国、九州に広く分布する常緑高木で、幹径1メートル、樹高20メートルになる。材はやや堅硬で緻密、肌は粗く加工性はあまり良くない、保存性が低く、各種器具材、柄物等に使われる。当遺跡出土材は農具の柄、垂木、梯子、柱など10点である。

17 ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科

図版5:15 a-c(No. 4519)

スダジイに極めて良く似た材だが集合放射組織をもっていることにより区別される。

ツブラジイ(別名コジイ)は関東地方南部以西の暖地に分布し、スダジイが海岸部に多いのに対し、これは内陸部に多い。材質、用途はスダジイと全く同じで、本遺跡出土材は10点あり、それらの用途もスダジイとほとんど一緒である。

18 シイ又はクリ ブナ科

道管の配列がクリ及びスダジイ、コジイと基本的に一緒な材で、乾燥収縮など保存性が悪いため詳細な同定が出来なかったもの。用途不明品1点がある。

19 アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

図版6:16 a-c(No. 4118)

出土材はしばしば暗赤褐色をして、中へ大型の丸い道管が単独で、放射方向に配列する放射孔材で、道管の穿孔は單一、木部柔組織は1-3細胞幅の独立帶状、放射組織には単列同性と大きな複合状の2種があり、道管-放射組織間壁孔は縦長の梢円形で棚状に配列する、等の形質からブナ科コナラ属のうち、常緑性のカシ類、すなわちアカガシ亜属の材と同定した。

カシ類は照葉樹林を特徴づける種群で、東北地方南部以南に沢山の種類があり、多くは高木となる。材は堅硬で木理通直、緻密で割裂性よく、弾性があって強靭であり、建築材を始め各種農具類、柄物、木刀など多くの用途がある。本遺跡出土材は111点とヒノキに次いで多く、その大部分は鎌、鋤の農具と、その柄、斧柄、櫛状木製品、横樋、堅杵などである。これは西日本から関東地方南部までの弥生時代の遺跡と全く同じ傾向である。

20 クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

図版 6 : 17 a-c (No. 3574)

年輪の始めに丸い大道管が 1 ないし数列並び、晩材部では中～小型の丸い道管が単独で放射方向に並ぶ環孔材で、道管の穿孔は单一、木部柔組織は 2 ～ 3 細胞幅の独立帶状で晩材部でよく目立つ。放射組織は單列同性と複合放射組織があり、後者はしばしば結晶細胞を含む。道管-放射組織間壁孔はアカガシ亜属と同じく柵状である。以上の形質からコナラ属のうち、落葉性のコナラ亜属の中のクヌギ節のクヌギ、アベマキのいずれかの材であると同定した。

クヌギ *Quercus acutissima* Carr. は東北地方南部以南の暖温帯の、特に二次林や河辺の水湿地によく生える落葉高木で、樹高 15 メートル、幹径 60 センチくらいになる。幹は通直にのび、成長が早く、材はやや堅硬で木理は粗く、割裂が容易である。柄類、柵類、車軸、舟の櫓などに用いる。アベマキ *Quercus variabilis* Blume は主に東海地方以西の暖地に生える落葉高木で、材質、用途等はほとんどクヌギと同じである。クヌギ節の材は縄文時代から利用され、特に弥生時代以降においては杼目の大板が大量に用いられる。関東以北や中部地方の内陸部では木製の農具はほとんどがクヌギ節の材である。当遺跡では 99 点と大量に出土し、鋤歛の柄がもっとも多く、それに鋤歛の本体、堅杵、建築材など、様々に用いられている。当遺跡より東の静岡県東部、神奈川県、千葉県南部の弥生～古墳時代の遺跡では鋤歛類はほとんどカシ類に限られるのに対し、当遺跡では少なからずクヌギ節の用いられているところに特徴がある。

21 コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

図版 6 : 18 a-c (No. 4128)

年輪の始めに丸い大道管が 1 ～ 数層並び、そこから順次径を減じて晩材部ではクリ同様、薄壁多角形の小道管が多数集まって火炎状となる環孔材で、道管の穿孔は单一、木部柔組織は 2 ～ 3 細胞幅の独立帶状で晩材部でよく目立つ。放射組織は單列同性と複合状があり、道管-放射組織間の壁孔はカシ類同様柵状となる。以上の形質からコナラ亜属のうち、コナラ節のコナラ、ミズナラなどの材と同定した。

コナラ節には全国の山野に普通で特に二次林に多いコナラ *Quercus serrata* Thunb.、暖温帯から冷温帯にやや希に産するナラガシワ *Quercus aliena* Blume、冷温帯に多いミズナラ *Quercus mongolica* Fish. var. *grosseserrata* Rhd.、冷温帯から亜寒帯にあるカシワ *Quercus dentata* Thunb. などがあるが、その分布から見て当遺跡出土材はコナラ、ナラガシワあるいはミズナラと考えられる。

コナラは幹径 60 センチ、樹高 15 メートルくらいになる落葉高木で、材はやや堅硬で肌目は粗く、割裂容易で、建築材、各種器具材、特に柄物、細工物など、特に薪炭材に用いる。ミズナラは幹径 1 メートル、樹高 20 メートルを超える大木となり、材質もコナラより優れていて、特に家具材に重用される。ナラガシワは木材の資源量が少なく、あまりもちいられない。本遺跡出土材は 46 点あり、歛などの農具がもっとも多く、その他、堅杵、柄物、建築材などクヌギ節と同様の利用が図られている。同時代の他の遺跡ではコナラ節の利用は極めて少なく、特に鋤歛への利用はいずれの遺跡でのほんの数例があるにすぎないのが一般的だが、当遺跡はそれが多いことに特徴がある。

22 エノキ属 *Celtis* sp. ニレ科

図版 7 : 19 a～c (No. 3704)

遺跡出土材は淡黒褐色で、保存性は悪く、年輪始めに大道管が 1 ～ 数層並び、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって接線方向に長い塊をつくり、全体として波状の紋をなす環孔材で、

道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は3-5細胞幅の紡錘形をしたものから大きく、周囲に鞘細胞を持つものまで変異があり、異性である。これらの形質からニレ科のエノキ属の材と同定した。

エノキ属には東北地方南部以南の暖温帯に広く分布し、特に二次林や屋敷林に多いエノキ *Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* Nakai と、それより冷涼な北海道から九州にかけての冷温帯に多いエゾエノキ *Celtis jessoensis* Koidz. があり、両者の材構造での区別は困難であるが、その分布と、普遍性から当遺跡出土材はエノキである可能性が高い。エノキ材は材質がやや劣るが大材が得易く、建築、器具材などの用途があり、当遺跡出土材は農具の鍔と鍔の膝柄各1点である。

23 ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科

図版7:20 a~c (No. 4471)

エノキに良く似た環孔材だが遺跡出土材は赤褐色を呈し、保存性がよい。年輪始めの大道管の層数が1~2層程度と少ないと、放射組織は背があまり高くない紡錘形で、鞘細胞は無く、上下端に大きな結晶細胞を持つことでエノキ属から区別され、ケヤキの材であることがわかる。

ケヤキは青森県から鹿児島県までの暖温帯から冷温帯にかけて広く分布する落葉広葉樹で、幹径1.5メートル、樹高25メートルを超える大木となる。材質に優れ、大材が得られることがあって、大きな建物の建築材に、木目が美しく加工が容易であることがあって、各種家具内装や大型彫刻物、臼、杵、太鼓、剣物容器、漆器木地など、実に多様に用いられる。当遺跡からは36点が出土し、そのうちの30点が剣物、挽物、高壺、漆器碗などの容器で、現在と同じ用途に多用されていたことがわかる。

24 ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. クワ科

図版7:21 a~c (No. 4180)

遺跡出土材がしばしば赤褐色を帯び、保存性がよく、年輪始めに大きな梢円形の道管が1-3層に並び、順次径を減じて、晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって塊となったものが散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は多少大きめの小孔紋で交互状、小道管の内壁には顯著ならせん肥厚があってエノキ属やケヤキに見似る。放射組織は3-7細胞幅の紡錘形で、単列の翼部が発達し、異性である。以上の形質から、ヤマグワの材と同定した。

ヤマグワは広く全国の山野に分布する落葉高木で幹径40センチ、樹高15メートルくらいになり、特に沢沿いに多い。材はやや堅硬で韌性にとみ、木理は粗いが光沢があって美しく、特に保存性に優れている。和風建築の内装材や家具材、強さを必要とする各種器具材、彫刻材などに用いる。当遺跡からは鍔と刀柄各1点である。

25 モクレン属 *Magnolia* モクレン科

図版8:22 a~c (No. 3680)

暗赤褐色を帯びた出土材で、薄壁で多角形の小道管が複合したものが密に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は階段状で、道管内には薄壁のチローシスがたくさんある。放射組織は多くは2細胞幅でスマートで、道管-放射組織間の壁孔は梢円形で交互状で密にある。以上の形質からモクレン属の材と同定した。

モクレン属にはいくつかの種があるが、当遺跡出土材は北海道から九州の冷温帯から暖温帯上部に広く分布するホオノキ *Magnolia obovata* Thunb. か、同様な分布をするがやや暖温帯に多く、特に二次林に普通に生えるコブシ *Magnolia kobus* DC. のいずれかである可能性が高い。ホオノキは幹径50セン

チ、樹高 20 メートルになる落葉高木で、成長が早く、幹が直通に成長する性質がある。材は軽軟で年輪が目立たず均質であり、加工が容易で、建具、箱物、版木、下駄などによく用いられる。コブシも材質は軽軟、均一で加工性がよく、ホオノキと同様に用いられるが材質は劣る。当遺跡出土材は鉛の膝柄が 1 点である。

26 クスノキ *Cinnamomum camphora* (Linn.) Sieb. et Zucc. クスノキ科

図版 8 : 23 a~c (No. 2886)

丸くやや厚壁の中型の道管が単独あるいは 2 個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪界に向けて道管径はかなり小さくなる。道管の穿孔は單一あるいは横棒の少ない階段状で、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、道管内にはチローシスが発達し、横断面でもよく見える。柔組織は周囲状でときどき大型の油細胞が混じり、横断面で道管のように見えることがある。放射組織は 2~3 細胞幅の異性で、背の低い紡錘状であり、直立細胞に大きく膨らんだ油細胞が混じる。遺跡出土材でも芳香を保持している。以上の形質からクスノキの材と同定した。

クスノキは関東南部以南の暖温帯に生える常緑高木で、成長が早く幹径 1 メートル、樹高 20 メートルを超える大木となる。材は肌理は粗だが加工性がよく、特有の芳香物質を含み、虫害に強い。大材が得られるので建築材、器具材、大型彫刻などによく用いられ、遺跡からは大型の剣物容器、特に西日本では丸舟舟などが特徴的である。当遺跡出土材は剣物の容器、鎧甲、大型の臼、梯子、用途不明品など 17 点である。なお、クスノキの臼は西日本の弥生時代ではときどき見られる。

27 タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. クスノキ科

図版 8 : 24 a~c (No. 3658)

丸く壁がやや厚い小道管が単独あるいは数個放射方向に複合してまばらに均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は横棒の少ない階段状あるいは單一である。柔組織は周囲状でときどきやや大型の油細胞が混じる。放射組織は 2~3 細胞幅の異性で、背の低い紡錘状であり、上下端にある直立細胞にわずかに膨らんだ油細胞が混じる。以上の形質からクスノキ科のタブノキの材と同定した。

タブノキは照葉樹林を特徴づける常緑高木で、幹径 1 メートル、樹高 15 メートルくらいになり、海岸部に多い。材はやや堅く、肌理粗く、美しい杰が出るが、割裂困難で加工性はあまり良くない。建築材、家具、器具材、細工物などに使われる。当遺跡出土材は臼と舟形が 1 点づつである。

28 シロダモ *Neolitsea sericea* (Blume) Koidz. クスノキ科

図版 9 : 25 a~c (No. 4474)

タブノキより一回り小さく、多少とも角張った薄壁の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合して均一に散在する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管の穿孔は單一及び横棒の少ない階段状。道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、木部柔組織は周囲状で、希にやや膨らんで油細胞となる。放射組織は 2~3 細胞幅の異性で、直立細胞がわずかに膨らんで油細胞となる。これらの形質からシロダモの材と同定した。

シロダモは照葉樹林の特徴的な樹種だが、タブノキより内部にまで生えている。幹径 30 センチ、樹高 10 メートルくらいになる常緑小高木で、材は柔らかく均質で加工が容易だが、資源量が少ないのであまり利用されない。当遺跡出土材は用途不明品 1 点である。

29 ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

図版 9 : 26 a~c (No. 3577)

保存性の良い出土材で、微細な薄壁多角形の道管がほとんど単独で均一に分布する散孔材で、年輪始めに一回り大きい道管が一列に並ぶ。道管の穿孔は横棒が 10 本くらいの階段状で、側壁の壁孔も階段状である。木部柔組織は散在状、放射組織は 2 細胞幅で背の低い異性、直立細胞がときどき大きく膨らんで中に大きな結晶を一つ持つ。以上の形質からヤブツバキの材と同定した。

ヤブツバキは照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、東北地方以南の沿岸部から、関東以西では内陸部まで広く分布し、幹径 30 センチ、樹高 10 メートルくらいになる。材質は極めて堅くて粘りけがあり、割裂、加工は困難だが、柄物、滑り台、滑車、軸轆部品など強度を必要とする部分によく用いられ、遺跡出土材では柄物などの他、隼などの特用もある。当遺跡出土材は堅朧 2 点と用途不明品 3 点である。

30 サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

図版 9 : 27 a~c (No. 4419)

薄壁で多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪は全く目立たず、道管の穿孔は横棒の多い階段状である。木部柔組織は散在状、放射組織はほぼ単列の異性で背は高く、平伏及び直立細胞となる。これらの形質からツバキ科のサカキの材と同定した。

サカキも照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、関東南部以西に分布し、西南日本では普遍的な樹種であり、幹径 30 センチ、樹高 8 メートルくらいになる。材は堅く粘りがあり、割裂困難で、萌芽枝がまっすぐよく伸びることから柄物に重用される。当遺跡出土材は 91 点もあり、そのほとんどが鍛錬などの農具あるいは石斧などの藤柄である。その他、棒状の用途不明品や柵状木器、手網の枠や舟形もある。

31 ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科

図版 10 : 28 a~c (No. 4418)

サカキに良く似た散孔材で、道管はやや太く、放射組織が単列翼部の長い紡錘形の 1~3 細胞幅の異性であることなどにより区別される。

ヒサカキも照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、幹径 20 センチ、樹高 7 メートルくらいになり、サカキやヤブツバキよりも涼しいところまで分布していて、人々の生活にもっとも身近な木の一つである。材は堅く緻密で粘りがあり、加工は容易でなく、小工ものなどの用途しかない。当遺跡出土材は棒状の用途不明品、農具藤柄など、11 点である。

32 サクラ属 *Prunus* バラ科

図版 10 : 29 a~c (No. 4214)

丸い小道管が単独あるいは主に放射方向に数個複合して均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は单一、側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状、内壁にらせん肥厚がある。木部柔組織は散在状で、放射組織は 1~5 細胞幅くらいの同性にやや近い異性、構成細胞は大振りである。これらの形質からバラ科のサクラ属の材と同定した。

サクラ属には多数の種があるが、特徴的な形質が見られない限り、種の特定は困難である。もっとも普遍的なヤマザクラ *Prunus jamasakura* Sieb. ex Koidz. は本州から九州の冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉高木で、幹径 60 センチ、樹高 10 メートルになる。材はやや堅く緻密で保存性、耐朽性がよく、加工も容易で優れた広葉樹材である。繩文時代以来、建築材、漆器木地などに使われてきているが、当遺跡出土材は横板 1 点で、あまり類例がない用材である。

33 ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科

図版 10 : 30 a~c (No. 4092)

丸い大道管が年輪始めに 1~2 層並び、順次径を減じて晩材部ではやや壁の厚い丸い小道管が単独あるいは数個放射方向に複合したものがまばらに散在する環孔材で、道管の穿孔は單一、木部柔組織は周囲状及び翼状で、特に晩材部で目立つ。放射組織は 2~4 細胞幅くらいの同性で、輪郭が不整である。以上の形質からマメ科のネムノキの材と同定した。

ネムノキは東北地方中部以南の全国の山野、沢沿いに広く分布する落葉小高木で、幹径 30 センチ、樹高 7 メートルくらいになる。材は軽軟で脆く、保存、耐朽性も低く、各種器具材に使われる程度である。当遺跡出土材は弥生中期の梯子 1 点である。

34 ユズリハ属 *Daphniphyllum* ユズリハ科

図版 11 : 31 a~c (No. 3566)

放射方向にやや長い薄壁長方形の微細な道管が単独で均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は横棒の大変多い階段状で、木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織は 2 細胞幅で背が高く、典型的な異性である。これらの形質からユズリハ属の材と同定した。

ユズリハ属には福島県以南の照葉樹林帯に生えるユズリハ *Daphniphyllum macropodium* Miq. とほぼ同じ地域特に海岸部に生えるヒメユズリハ *Daphniphyllum teijsmannii* Zoll. ex Kurz.、それに本州及び北海道の日本海側の多雪地帯に生える常緑低木のエゾユズリハ *Daphniphyllum macropodium* Miq. var. *humile* (Maxim.) Rosenthal があるが、当遺跡出土材はその分布からユズリハかヒメユズリハのいずれかと考えられる。いずれも幹径 30 センチ、樹高 8 メートルくらいになる常緑小高木で、ヒメユズリハの方がやや小さい。材は柔らかく緻密で、加工しやすく、箱物、漆器木地、小細工物などに用いる。福井県島浜貝塚遺跡の縄文前期の石斧柄にはこの樹種が圧倒的に多く利用されているが、ここでも農具膝柄が 2 点、それに梯子、建築材など合計 6 点がある。

35 ヌルデ *Rhus javanica* L. var. *roxburghii* (DC.) Rheder ウルシ科

図版 11 : 32 a~c (No. 4102)

年輪の始めに中~大型の梢円形の道管が単独あるいは 2 個複合して 2~4 層くらいに並び、晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集合して斜上した接線方向に長い塊となる環孔材で、道管の穿孔は單一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織等は層階状を示さず、放射組織は 1~2 細胞幅の同性で、背は低く、接線面での輪郭がそここの不整形を示す。道管一放組織間壁孔は横長の梢円形で大振りである。以上の形質からウルシ科のヌルデの材と同定した。

ヌルデは北海道から九州まで、全国の山野に普通の落葉小高木で、特に二次林に多く、幹径 30 センチ、樹高 7 メートルくらいになる。材は軽軟でもろいが、切削加工が容易であり、小細工物、釣りの浮木、下駄などに用いることがある。当遺跡出土材は広歛の柄が 1 点である。

36 ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科

図版 11 : 33 a~c (No. 3664)

年輪の始めに丸い中~大道管が 1~3 層あり、晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって塊をなす環孔材で、木部柔組織は周囲状及び独立帶状で、特に後者はしばしば極めて幅広くなり、晩材部でよく目立つ。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。柔組織は明確な層階状を示さず、放射組織は 2~4 細胞幅で背はあまり高くなく同性、接線面での輪郭が

でこぼこして不整である。以上の形質からムクロジの材と同定した。

ムクロジは関東南部以南の暖温帯に生える落葉小高木で、幹径 40 センチ、樹高 10 メートルくらいになるが、しばしば神社や寺院に植えられ、野生状態のものはあまり見られず、日本に本来自生しているものではない可能性が考えられる。材は軽軟で肌目粗く、脆いので箱物、小細工物、下駄などに用いられるはするが、たいたした用途はない。むしろ、実を石鹼の代用（サボニンを含む）にしたり、種子を羽根つきの羽根の玉にしたりする。当遺跡出土材は弥生中期の高坏、剣物、用途不明品各 1 点である。

37 ニシキギ属 *Euonymus* ニシキギ科

図版 12 : 34 a~c (No. 3638)

多角形で微細な道管が単独で均一に密に分布する散孔材で、年輪は不明瞭、道管の穿孔は單一、木部柔組織は散在状で目立たず、放射組織は単列同性で背は高くない。これらの形質からニシキギ属の材と同定した。

ニシキギ属には全国の冷温帯から暖温帯にかけての山野に広く分布する落葉性のニシキギ *Euonymus alatus* (Thunb.) Sieb.、マユミ *Euonymus sieboldianus* Blume、ツリバナ *Euonymus oxyphyllus* Miq. など、また暖地の海岸付近に生える常緑性のマサキなど多数の種がある。これらは低木のもののが多いが、マユミは幹径 30 センチ、樹高 8 メートルくらいになり、材は堅くて重く緻密で質が良く、各種器具材、小細工ものに用いられ、弓の特用がある。当遺跡出土材は剣物容器 1 点で、ニシキギ属の剣物は珍しい。

38 ケンボナシ属 *Hovenia* クロウメモドキ科

図版 12 : 35 a~c (No. 4210)

年輪のはじめに単独あるいは 2 個放射方向に複合した梢円形の大道管が 1~3 層並び、順次径を減じて晚材部では厚壁で外形多角形、内腔円形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合したもののが散在する環孔材。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は微細な小孔紋で交互状に密にある。木部柔組織は周囲状、晚材部では翼状となり、層階状には配列しない。放射組織は 1~5 細胞幅くらいの異性で、単列翼部はあまり高くなないので比較的綺麗な紡錘形となる。これらの形質からケンボナシ属の材と同定した。

ケンボナシ属には本州、四国、九州の冷温帯から暖温帯上部に分布するケンボナシ *Hovenia dulcis* Thunb. と西日本に多く分布するケンボナシ *Hovenia tomentella* (Makino) Nakai があるが、材構造での区別は困難である。ただ、その分布から本遺跡の出土材はケンボナシであるとみなせる。ケンボナシの材は肌目は粗いが木理は美しく、加工性もよいので家具、指物、各種器具材として用いられる。当遺跡出土材は剣物容器が 3 点である。

39 ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai ウコギ科

図版 12 : 36 a~c (No. 4529)

年輪の始めに梢円形の大道管が一層に並び、孔圏外では薄壁多角形の小道管が多数複合して接線～斜上の幅広い帯となった紋をなす環孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状に密に配列する。放射組織は 2~6 細胞幅の綺麗な紡錘形でほぼ同性、上下端の 1 細胞が方形～直立細胞となる。以上の形質からハリギリの材と同定した。

ハリギリは全国の冷温帯から暖温帯にかけて広く分布する落葉高木で、幹径 60 センチ、樹高 15 メートルになる。材は堅さ、重さ中くらいで脆いが、光沢があって美しく、加工容易なので建築の装飾的部材、家具、箱もの、各種調度品などに用いられる。本遺跡出土材は弥生後期の梯子 1 点である。

40 ネジキ *Lyonia ovalifolia* (Wall.) Drude var. *elliptica* (Sieb. et Zucc.) Hand.-Mazz. ツツジ科

図版 13 : 37 a~c (No. 3792)

薄壁多角形の小道管がほとんど単独で年輪内に均一に分布する散孔材で、道管径は年輪界に向かってわずかづつ小さくなる。道管の穿孔板は丸みのある楕円形で、穿孔は階段状で横棒は 10-15 本くらいと多くない。木部柔組織は散在状で量少なく、目立たない。放射組織は単列と多列があり、前者と後者の単列の翼部は背が高い直立細胞のみからなる。多列放射組織は 2-4 細胞幅で紡錘形の多列部と背の高い単列の翼部からなる。これらの形質からツツジ科のネジキの材と同定した。

ネジキは東北南部以南の温暖地に生える落葉小高木で、幹径 20 センチ、樹高 7 メートルくらいになる。材はやや重く堅硬で強度はあるが、その名通り纖維がねじれているため狂いややすく、割れやすいので製材して使われることはほとんどなく、枝をそのまま柄物などに用いる。当遺跡出土材は建築材とみなせる有頭の棒 2 点と、農具の柄と思われるもの 1 点である。

41 シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科

図版 13 : 38 a~c (No. 4179)

薄壁多角形の微細な道管が単独あるいは 2 個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、道管径は年輪界に向けてわずかに小さくなる。道管の穿孔は單一あるいは横棒が 10 本以下と少ない階段状、道管内壁にはらせん肥厚が見える。木部柔組織は散在状で量少なく、目立たない。放射組織は単列と多列があり、前者と後者の単列の翼部は背が高い直立細胞のみからなる。多列部は輪郭があまり綺麗でない紡錘形で、3-5 細胞幅、構成細胞の大きさは不揃いである。以上の形質からツツジ科のシャシャンボの材と同定した。

シャシャンボは関東地方以西の温暖地に生える常緑低木で、高さ 3 メートルくらいになり、特に尾根などやや乾いたところに多い。材は粘りがあるが太くならないのでほとんど利用されない。当遺跡出土材は垂木とされるもの 2 点、堅杵とされるもの 1 点と用途不明品 1 点であるが、堅杵とされているものはシャシャンボの茎の太さからして問題があり、誤同定かもしれない。

42 タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* Lev. ヤブコウジ科

図版 13 : 39 a~c (No. 3771)

薄壁でやや丸みを帯びた多角形の小道管が単独あるいは 2-3 個放射方向に複合して量少なく均一に散在する散孔材で、道管径は年輪内でほとんど変わらず、年輪は全く目立たない。道管の穿孔は單一、道管相互の壁孔は微少孔紋で交互状に密に配列する。木部柔組織は周囲状、纖維細胞は隔壁を持つ。放射組織は単列と多列があり、前者は極めて背の高い直立細胞のみからなる。多列放射組織は 3-10 細胞と大きく、極めて背が高い。構成細胞は大振りで不整形、時に結晶を持つ。以上の形質からタイミンタチバナの材と同定した。

タイミンタチバナは千葉県南部以南西の温暖地、特に海岸近くに生える常緑小高木で、幹径 10 センチ、樹高 6 メートルくらいになる。材はやや重く堅硬で、保存性も良いが狂いややすく、小細工ものなどに使われるにすぎない。当遺跡出土材は農具の膝柄、棒状の建築材、用途不明品各 1 点である。

43 カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. カキノキ科

図版 14 : 40 a~c (No. 3936)

単独あるいは2個放射方向に複合した小型で梢円形の道管が数少なく、まばらに分布する散孔材で、道管の穿孔は单一、道管相互の壁孔は微少孔紋で交互状に密に配列する。木部柔組織は短接線状となる。放射組織は2列の異性で背は低く、層階状に配列する。以上の形質からカキノキの材と同定した。

カキノキは東北地方以南で広く栽培される落葉小高木で幹径30センチ、樹高10メートルくらいになる。変種のヤマガキは本州中部以南西に野生し同様の大きさとなる。材は極めて堅く緻密で、肌理が密であり、加工は容易であり、家屋の内装的部分、寄せ木、木象眼、ゴルフのヘッドなどに用いる。当遺跡出土材は時代不詳の用途不明品1点である。

44 エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科

図版14:41a~c (No. 4317)

薄壁の小道管が放射方向に2~6個複合したもののが散在する散孔材で、道管径は晚材部ではかなり小さくなる。道管の穿孔は横棒の少ない階段状、木部柔組織は1細胞幅の独立帶状で晚材部でよく目立つ。放射組織は2~3細胞幅の異性で、単列の翼部が高い。以上の形質からエゴノキ属の材と同定した。

エゴノキ属には全国の山野にごく普通なエゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc.、それより山間部に多いハクウンボク *Styrax obassia* Sieb. et Zucc.などがあるが、分布からは当遺跡出土材はエゴノキの可能性が高い。エゴノキの材は堅く粘りがあって緻密であり、床柱、柵物、玩具、各種器具、小細工ものなどの用途がある。当遺跡出土材は垂木が1点である。

45 クロバイ *Symplocos prunifolia* Sieb. et Zucc. ハイノキ科

図版14:42a~c (No. 4378)

薄壁多角形で多少丸みを帯びた小道管が単独あるいは時に2個複合して均一に、高密度に分布する散孔材で、道管の穿孔は横棒が多数(40本以上)の階段状、内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は散在状で目立たず、放射組織は単列及び2~3細胞幅の多列で、前者及び後者の単列の翼部は直立細胞のみからなる。以上の形質からハイノキ科のクロバイの材と同定した。

クロバイは照葉樹林に特徴的な樹種で、千葉県南部以南西の温暖地に生え、幹径20センチ、樹高8メートルくらいになる常緑小高木である。材は均質でやや堅く緻密で、加工性もよいが資源が少ないので木材としてはあまり利用されず、むしろ媒染用の灰をとる。当遺跡出土材は弥生後期の農具の柄(?)と用途不明品、それに中世の挽物容器各1点である。

46 トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

図版15:43a~c (No. 4202)

年輪のはじめに単独あるいは2個放射方向に複合した梢円形の大道管が1~3層並び、順次径を減じて晚材部では厚壁で外形多角形、内腔円形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合したものが散在する環孔材。道管の穿孔は单一、側壁の壁孔は微細孔紋で交互状に密に配列する。木部柔組織は周囲状、晚材部では量が多くなり翼状、時に連合翼状となる。放射組織は1~2細胞幅の同性で、背は低く、サイズがほとんど揃う。これらの形質からトネリコ属の材と同定した。

トネリコ属には北海道から本州の主に冷温帯の水湿地に多いヤチダモ *Fraxinus mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim.、東北から本州中部の冷温帯にあるトネリコ *Fraxinus japonica* Blume、本州の冷温帯から暖温帯上部に分布するヤマトアオダモ *Fraxinus longicuspis* Sieb. et Zucc.、関東以西の暖温帯上部に分布するシオジ *Fraxinus platypoda* Oliv.など多数の種があるが、材構造は互いに似ていて種の識別は困難である。当遺跡近くに生育していた可能性が強く高木となるのはヤマトアオダモとシオジ

で、幹径 60 センチ、樹高 15 メートルくらいになる落葉高木である。材はやや柔らかく弾力があり、木理通直で美しく、保存性が高く加工も容易な優秀な広葉樹材である。建築材、各種器具材、特に家具、運動具の用途がある。当遺跡出土材は弥生後期の刳物容器、中世の漆器椀、それに時代不詳との用途不明品各 1 点である。

47 キリ *Paulownia tomentosa* (Thunb.) Steud. ゴマノハグサ科

図版 15 : 44 a~c (No. 3642)

薄壁で横円形の大道管が年輪はじめに 1~3 層並び、順次径を減じて晩材部では単独あるいは 2 個複合した薄壁多角形の中へ小道管がまばらに分布する環孔材。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で、交互状である。木部柔組織の量が多く、材の大きな部分を占める。纖維細胞も薄壁で径が大きく、短い。放射組織は 1~3 細胞幅で背の低い同性で小さく、輪郭は不整である。これらの形質からキリの材と同定した。

キリは成長の早い落葉小高木で、幹径 40 センチ、樹高 10 メートルくらいになる。本州中部以西に分布するとされているが古くから東北地方でも植栽されており、天然分布は明らかでない。材は極めて軽軟で木目は非常に美しく加工性がよく、防音、防湿、防熱効果に優れている優秀な木材で、家屋の内装材、器具材、家具、特に箱ものなどに広く用いられる。当遺跡出土材は弥生後期の柾状木製品 1 点であるが、その材質からは櫛としての機能は疑わしい。

48 ニワトコ *Sambucus racemosa* L. sub sp. *sieboldiana* (Miq.) Hara スイカズラ科

図版 15 : 45 a~c (No. 3950)

丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が多数複合して波状の紋をなす散孔材で、晩材部に向けて径が順次小さくなり、年輪界付近では纖維状仮道管とともに接線方向に扁平な長方形となって年輪界を際だたせる特徴がある。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状である。木部柔組織は目立たず、放射組織は幅広く背が高く、ほぼ同性、構成細胞は大振りで粗雑である。これらの形質からニワトコの材と同定した。

ニワトコは全国の冷温帯、暖温帯に広く分布する落葉小高木で、幹径 20 センチ、樹高 8 メートルくらいになる。材は軽軟で肌目は緻密だが脆い。小細工もの、寄せ木細工などに用いられる。当遺跡出土材は時期不詳の柾状木製品 1 点である。

49 竹箒類 Bamboo イネ科

図版 16 : 46 a~c (No. 3956)

中心側に原生木部腔、左右に丸くて大きな一対の後生木部道管、外側に節部があって、それを厚壁で緻密な纖維組織が覆つて 1 本の維管束をなしていることから、イネ科のタケ亜科の材と同定した。タケ亜科にはマダケ *Phyllostachys bambusoides* Sieb. et Zucc.、ヤダケ *Pseudosasa japonica* (Sieb. et Zucc. Steud.) Makino、チシマザサ *Sasa kurilensis* (Rupr.) Makino et Shibata など沢山の種類があるが、顕微鏡的には区別はできない。当遺跡出土材は弥生中期の矢柄と平安の曲物の木釘が各 1 点、その他 2 点である。

角江遺跡における用材の特徴

1. 時期による用材傾向

樹種を調査した 854 点のうち、同定できなかった 3 点を除いた 851 点の中から表 1 に示すように 50 タイプの樹種が同定された。このうち、ヒノキ科、二葉松類、スダジイまたはクリとしたものはそれぞれすでに同定されている樹種のいずれかに所属するかが保存不良のため確定しなかったもので、実質的にはこれらを除いた 47 樹種と言うことになる。47 樹種のうち、針葉樹が 11 種で広葉樹が 36 種ある。調査した試料全体で見ると針葉樹は 298 点で 34.9%、広葉樹は 547 点で 64.1% を占め、広葉樹が多いことがわかる。

ここで同定された広葉樹が落葉樹か常緑樹かを判断し集計したものが表 2 である。この表では弥生中期の出土数が多いものの順に並べてある。これらを特に試料が多く得られた弥生中期と後期で見いくと、弥生中期では 370 点が調べられ、うち、針葉樹は 74 点で 20%、広葉樹が 294 点で 79.5% を占める。また落葉樹は 142 点で 38.4% を占め、常緑樹のほうが 151 点 (40.8%) が多い。針葉樹は 10 種が同定され、もっと多いのはイヌマキ属で 10.3%、あとはずっと少なくヒノキの 3.0% がこれに次いでおり、松類がアカマツ、クロマツ、二葉松類あわせて 1.7%、スギ (1.6%)、イヌガヤ (1.1%) であり、あとはモミ属、カヤ、コウヤマキ、クロベなどわずかしかない。広葉樹は 23 種あり、カシ類 (アカガシ亜属) とクヌギ節がもっとも多い 17% を占め、ついでサカキの 12.4% が目立つ。その他はケヤキ (6.8%)、コナラ節 (5.9%)、クリ (5.1%)、クスノキ (4.3%) 等がやや多い他は数点づつの出土である。

弥生後期では 299 点が調べられたが、針葉樹は 115 点で 38.5% を占め、10 種が同定された。もっと多いのは弥生中期同様イヌマキ属で 12.7% を占め、ついでヒノキが 11% もあることは注意を引く。ついでスギも 8.4% と多くなっていて、その他はイヌガヤ (1.7%)、コウヤマキ (1.3%)、それに松類、ツガ属、クロベなどがわずかにある。このように弥生後期の針葉樹は中期に比べ、ヒノキ、スギが増えたことが特徴的である。一方広葉樹は 182 点で 60.9% を占め、24 種が同定された。弥生後期では弥生中期に比べ、針葉樹が増えて広葉樹の比率が減った分、落葉樹も常緑樹もそれぞれ 26.1% と 34.8% と減っている。その中でもっと多いのはやはりカシ類で 14% を占め、ついでサカキ (12.7%)、クリ (10.4%) が多く、クヌギ節 (7.4%)、コナラ節 (4.3%) が比較的多いほかはいずれも数点づつの出土である。これら広葉樹材の出土傾向はクヌギ節やクリの比率で多少の変動はあるものの、弥生中期のそれと基本的に変わっていないものと見ることが出来る。

その他弥生時代としか時期が限定されなかつたものが 35 点あり、それらは比率的にはクリがやや多いものの、この弥生中期、後期の傾向と基本的に同じとみなせる。そして、時期が不詳のもの及び弥生以降の時期のものをあわせて表 1 では「それ以外」として集計したが、それらは全部で 150 点あり、その内訳は針葉樹が 7 種で 99 点も占め、その大部分はヒノキで 69 点もあり、また松類は 15 点と比較的多い。広葉樹は 16 種で 47 点と少なく、クヌギ、コナラ、クリが多く、カシ類が少ない。これらは弥生時代のものを含んでいると同時にそれ以後、平安、中世、近世のものを含んでおり、ヒノキが多いことは平安・中世の曲物及びそれを転用した井戸材が多く出土していることに依る。そして、カシ類が少なくむしろクヌギ節やコナラ節が増えることはカシ類の木製農具や石斧直柄などへの集中的利用が、関東南部以西九州までの地域の、弥生時代及び古墳時代に限られた用材であることとの反映であることとよく一致する。

2. 同定された樹種の特徴

ここで量が多く調べられた弥生中期と後期で見ると、ここに同定された常緑樹はそのほとんどが照葉樹林に特徴的な樹種であり、角江遺跡のある東海地方の沿岸部で生育していたと想定される樹種ばかりである。これに対して、落葉樹では、ケヤキ、クリ、クヌギ、コナラなどやはり遺跡周辺に普通に生育していて、それを利用したと考えられるものが大部分を占めるものの、わずかではあるが遺跡周辺で生

表1. 角江遺跡の木製品の樹種構成

樹種名	弥生中期	%	弥生後期	%	弥生時代	それ以外	合計	%
カヤ(カヤ?含む)	2	0.5					2	0.2
イスガヤ	4	1.1	5	1.7			9	1.1
イスマキ属	38	10.3	38	12.7	3	4	83	9.7
モミ属	3	0.8	4	1.3		1	8	0.9
アカマツ	1	0.3	1	0.3		6	8	0.9
クロマツ	1	0.3	1	0.3	1	4	7	0.8
二葉松類	4	1.1			1	5	10	1.2
ツガ属			1	0.3	1		2	0.2
コウヤマキ	1	0.3	4	1.3		2	7	0.8
スギ	6	1.6	25	8.4	2	7	40	4.7
ヒノキ	11	3.0	33	11.0	2	69	115	13.5
クロベ(クロベ?含む)	1	0.3	2	0.7			3	0.4
ヒノキ科	2	0.5	1	0.3		1	4	0.5
針葉樹小計	74	20.0	115	38.46	10	99	298	34.9
クマシデ節						1	1	0.1
クリ	19	5.1	31	10.4	7	6	63	7.4
スダジイ	5	1.4	3	1.0	1	1	10	1.2
ツブラジイ	3	0.8	6	2.0		1	10	1.2
スダジイ又はクリ	1	0.3					1	0.1
アカガシ亞属	63	17.0	42	14.0	3	3	111	13.0
クヌギ節	63	17.0	22	7.4	3	11	99	11.6
コナラ節	22	5.9	13	4.3	4	7	46	5.4
エノキ属	1	0.3	1	0.3			2	0.2
ケヤキ	25	6.8	5	1.7	1	5	36	4.2
ヤマグワ					1	1	2	0.2
モクレン属	1	0.3					1	0.1
クスノキ	16	4.3	1	0.3			17	2.0
タブノキ	1	0.3	1	0.3			2	0.2
シロダモ			1	0.3			1	0.1
ヤブツバキ	4	1.1	1	0.3			5	0.6
サカキ	46	12.4	38	12.7	3	4	91	10.7
ヒサカキ	7	1.9	3	1.0	1		11	1.3
サクラ属	1	0.3					1	0.1
ネムノキ	1	0.3					1	0.1
ユズリハ属	2	0.5	3	1.0		1	6	0.7
ヌルデ			1	0.3			1	0.1
ムクロジ	3	0.8					3	0.4
ニシキギ属					1		1	0.1
ケンボナシ属	3	0.8					3	0.4
ハリギリ			1	0.3			1	0.1
ネジキ	3	0.8	1	0.3			4	0.5
シャシャンボ	2	0.5	2	0.7		2	6	0.7
タイミンタチバナ	2	0.5	1	0.3			3	0.4
カキノキ					1		1	0.1
エゴノキ属			1	0.3			1	0.1
クロバイ			2	0.7		1	3	0.4
トネリコ属			1	0.3		2	3	0.4
キリ			1	0.3			1	0.1
ニワトコ					1		1	0.1
広葉樹小計	294	79.5	182	60.87	25	47	548	64.2
竹籠類	1	0.3				3	4	0.5
同定不能	1	0.3	2	0.7			3	0.4
合計	370	100.1	299	100.1	35	150	854	99.9

表2. 角江遺跡の木製品の樹種組成の特徴

樹種名	生活形	弥生中期	%	弥生後期	%	弥生時代	それ以外	合計	%
イヌマキ属	C	38	10.3	38	12.7	3	4	83	9.7
ヒノキ	C	11	3.0	33	11.0	2	69	115	13.5
スギ	C	6	1.6	25	8.4	2	7	40	4.7
イヌガヤ	C	4	1.1	5	1.7			9	1.1
二葉松類	C	4	1.1			1	5	10	1.2
モミ属	C	3	0.8	4	1.3		1	8	0.9
ヒノキ科	C	2	0.5	1	0.3		1	4	0.5
カヤ(カヤ?含む)	C	2	0.5					2	0.2
コウヤマキ	C	1	0.3	4	1.3		2	7	0.8
クロベ(クロベ?含む)	C	1	0.3	2	0.7			3	0.4
アカマツ	C	1	0.3	1	0.3		6	8	0.9
クロマツ	C	1	0.3	1	0.3	1	4	7	0.8
ツガ属	C			1	0.3	1		2	0.2
針葉樹小計		74	20.0	115	38.5	10	99	298	34.9
クヌギ節	D	63	17.0	22	7.4	3	11	99	11.6
ケヤキ	D	25	6.8	5	1.7	1	5	36	4.2
コナラ節	D	22	5.9	13	4.3	4	7	46	5.4
クリ	D	19	5.1	31	10.4	7	6	63	7.4
ネジキ	D	3	0.8	1	0.3			4	0.5
ムクロジ	D	3	0.8					3	0.4
ケンボナシ属	D	3	0.8					3	0.4
エノキ属	D	1	0.3	1	0.3			2	0.2
モクレン属	D	1	0.3					1	0.1
サクラ属	D	1	0.3					1	0.1
ネムノキ	D	1	0.3					1	0.1
ヌルデ	D			1	0.3			1	0.1
ハリギリ	D			1	0.3			1	0.1
エゴノキ属	D			1	0.3			1	0.1
トネリコ属	D			1	0.3		2	3	0.4
キリ	D			1	0.3			1	0.1
クマシテ節	D						1	1	0.1
ヤマグワ	D					1	1	2	0.2
カキノキ	D						1	1	0.1
ニワトコ	D						1	1	0.1
落葉樹小計		142	38.4	78	26.1	16	35	270	31.6
アカガシ亞属	E	63	17.0	42	14.0	3	3	111	13.0
サカキ	E	46	12.4	38	12.7	3	4	91	10.7
クスノキ	E	16	4.3	1	0.3			17	2.0
ヒサカキ	E	7	1.9	3	1.0	1		11	1.3
スダジイ	E	5	1.4	3	1.0	1	1	10	1.2
ヤブツバキ	E	4	1.1	1	0.3			5	0.6
ツブライ	E	3	0.8	6	2.0		1	10	1.2
ユズリハ属	E	2	0.5	3	1.0		1	6	0.7
シャシャンボ	E	2	0.5	2	0.7		2	6	0.7
タイミンタチバナ	E	2	0.5	1	0.3			3	0.4
タブノキ	E	1	0.3	1	0.3			2	0.2
クロバイ	E			2	0.7		1	3	0.4
シロダモ	E			1	0.3			1	0.1
ニシキギ属	E					1		1	0.1
常緑樹小計		151	40.8	104	34.8	9	13	277	32.4
スダジイ又はクリ	?	1	0.3					1	0.1
広葉樹小計		294	79.5	182	60.9	25	48	548	64.1
竹苞類		1	0.3				3	4	0.5
同定不能		1	0.3	2	0.7			3	0.4
合計		370	100.1	299	100.1	35	150	854	99.9

C:針葉樹、D:落葉広葉樹、E:常緑広葉樹

育していたとは考えにくいケンボナシ属、ハリギリ、トネリコ属などもある。針葉樹で見るとヒノキが特徴的である。木曽及び鈴鹿地方でのヒノキの天然林の存在は十分想定されるが、角江遺跡の直ぐ周辺に存在していたかは疑わしい。それは前節で述べたごとくヒノキ材の利用の比率が「それ以外」とした時期に向けて多くなり、これは幾内地方における古代でのヒノキ材の多用に一致する。ヒノキ材を現地で得て利用していたというよりはむしろ、幾内方面からのヒノキ材の移入を想定する方が素直であろうことは、わずかな出土であるがコウヤマキ材もそのように考えられることで支持される。

以上見てきたように、当遺跡出土材の用材は、現地性のものが大部分を占めるものの、若干の移入品があったといえる。

3. 角江遺跡における樹種選択

出土木製品を大まかに農工具、建築材、容器、漁労運搬具、武具、形代、その他、用途不明品の8カテゴリーに分けたものが表3である。農工具としたものは318点あり、その内訳を見ると表4となる。木製農具の中心は様々な形態をした鍬、鋤で129点あるが、もっとも多いのはカシ類のもので73点あり、57%をしめる。ついで多いのはクヌギ節とコナラ節でそれぞれ27点(21%)と22点(17%)あり、この3種で全体の95%をしめる。関東地方南部(千葉県国府関遺跡:能城・鈴木1993;常代遺跡:能城・鈴木1996)以西の弥生~古墳時代にかけての木製農具の樹種はそのほとんどがカシ類でしめられるのが一般的であり(山田1993)、それよりも北東部の東北地方(仙台市中在家遺跡:鈴木他1996)、中部地方の内陸部(長野県石川条理遺跡:鈴木他、未発表)ではもっぱらクヌギ節の材が使われるようになる。そしてその中間にあら関東地方中北部(群馬県新保遺跡:鈴木・能城1986)や北陸地方(金沢市畝田遺跡:鈴木・能城1991a)ではカシ類とクヌギ節が同程度に利用されていて、ちょうど両者の移行帯と言える。このように見てくると静岡県内の遺跡がそうであるように(登呂遺跡:亘理1949;山木遺跡:亘理・山内1962)、当角江遺跡も基本的には「カシ類ゾーン」に位置しているが、カシ類ゾーンにある遺跡としてはカシ類に比べクヌギ節、コナラ節をあわせた比率が57:48と大きいことに特徴がある。それとともにクヌギ節ゾーンではその使用樹種はほとんどクヌギ節に集中しているのに比べ、クヌギ節とコナラ節がほとんど同じくらい利用されているのも特徴的である。縄文時代から古代にかけてコナラ節の材は関東、中部、北陸、東北などで使用されてきているが、その利用頻度は決して多くなく、比較的多いと言えるのは関東地方中北部などでの竪穴式住居の建築材(群馬県勝保沢中ノ山遺跡:鈴木・能城1988)や燃料材などで(山田1993)、農具への利用は大変少ない。鍬に泥除けが着くとき、鍬本体がカシ類に対して泥除けはクヌギ節(金沢市畝田遺跡:鈴木・能城1991a)、あるいは本体がクヌギ節に対してクリ(仙台市中在家遺跡:鈴木他1996)など、異なった樹種を用いている例は認められるが、当遺跡ではそのような器種の違いによる使い分けは認め難く、鍬鋤類への使用樹種の選択性が完全には確立していない状態を示すのであろう。

これらの鍬鋤類に直柄、あるいは膝柄で装着される柄は106点が調べられ、そのほぼ半分をサカキ(55点)が占める。ついで多いのはクヌギ節(19点)、カシ類(9点)でその他の樹種は少ない。サカキはほとんどが膝柄であり、それに対しクヌギ節、カシ類は直柄である。このクヌギ、カシの直柄への利用は鉄製となった現在の鍬や鋤(シャベルを含む)と同じ用材であるのに対し、弥生~古代で特徴的な膝柄には現在と全く違う樹種が使われていることが特徴的である。しかし、この農具の膝柄の利用樹種も遺跡によって大きな違いを見せる。一般には雑多な広葉樹材が用いられ、散孔材が多い(群馬県新保遺跡:鈴木・能城1986;仙台市中在家遺跡:鈴木他1996)。当遺跡ほどではないがサカキへの集中が認められる例に千葉県南部の国府関遺跡があり(能城・鈴木1993)、千葉県南部から東海地方にかけての地域でサカキの柄類への使用例があるものの、その他の地域ではその使用はほとんど認められないことが、

時代は少し下がるが香川県の古代の下川津遺跡（能城・鈴木 1990）ではサカキ自体は他の木製品として出土しているにも関わらず、柄としての出土が1点もないなどの例からわかる。

石斧などの柄は25点あり、そのうち19点がクヌギ節で、他にカシ類（4点）、シイ類、マツ類が1点づつであり、クヌギ節への集中が特徴的である。クヌギ類とカシ類は多くが直柄であるが、千葉県南部～東海地方の大型蛤刃などの石斧柄はそのほとんどがカシ類であり（千葉県国府関遺跡：能城・鈴木 1993；常代遺跡：能城・鈴木 1996）、クヌギ節を使うのはカシ類の材が得られない東北地方（仙台市中在家遺跡：鈴木他 1996）などであり、カシ類が十分手に入ったと推定される当遺跡でこのような選択が行われているのは奇異であり、その理由はわからない。そのほか、堅杵にはやはりクヌギ節がよく使われ、これは千葉県南部の遺跡とも共通する用材であるが、同様な用材が期待される横槌がカシ類が多いことは特徴的である。白には小型のものにはクリ、大型のものはクスノキときちんと樹種が選択されている。

建築材には垂木、柱、ネズミ返しなど87点が調べられたが、クリが多い（23点）ものの、イヌマキ属（12点）、ヒノキ（11点）、スギ（10点）等の他、実に多様な樹種が利用されており、特別な傾向というには認められない（表3）。容器の樹種を見るとケヤキが30点ともっとも多く、ついでヒノキが29点あり、その他クリ（6点）、クスノキ（5点）の他、いろいろな樹種がある。ヒノキはもっぱら曲物あるいは桶などの製品であり、ケヤキ、クリ、クスノキなどは削物などの容器である。このような用材は他の遺跡とよく一致する。

漁労運搬具（表5）としたのは舟、櫂、アカカキ及び手網枠で、舟はスギとクリ、櫂状木製品はサカキ、カシ類、ヒノキ、クリなど多様である。手網枠はイヌマキ属、マツ類、サカキとイヌガヤでサカキの2例を除いて針葉樹であり、うなづける用材である。アカカキはヒノキ、クリ、スギ、それにイヌマキ属と多様性に富んでいる。

武具としたものは丸木弓と楯などである。丸木弓は29点調べられたが、ただ1点のイヌガヤを除いてはすべてイヌマキ属である。これは記載文中で述べたようにその分布からはナギではなくイヌマキだと判断されるものである。丸木弓は繩文時代から古代にかけて全国的に遺物として出土するが、その大部分はイヌガヤであり、イヌマキの丸木弓の出土は東海地方に限られる。農具へのカシ材の多様など本遺跡と共に見える千葉県の国府関遺跡では弓18点のうち17点が、常代遺跡では10点中9点がイヌガヤであるのに対し、静岡県では東部の山木、登呂、雌鹿塚、西部の耳川、櫛子など、そして愛知県の猿東、瓜郷、岡島、朝日の各遺跡などでは丸木弓は圧倒的にイヌマキである。しかしこの傾向はさらに西進すると、滋賀県の入江内湖、国友遺跡など及び奈良県の唐古・鏡遺跡ではイヌガヤとなり、さらに西の大坂の鬼虎川、池上、山賀遺跡ではカヤとなるなど、地域による用材の違いを際だてている（山田 1993）。ここにあげた千葉県南部から東海、近畿にいたる地域は生育量の多少の違いはあるがイヌマキ、イヌガヤ、カヤのいずれもが天然分布していたと考えられる。それにも関わらず地域によって丸木弓に使う樹種が異なることの理由は今のところわかっていない。なお、楯はいずれもがモミである。仙台市の中在家南遺跡ではクリとケヤキ（鈴木他 1996）、千葉県の国府関遺跡ではトチノキ（能城・鈴木 1993）、石川県の西念・南新保遺跡ではケンボナシ属（鈴木・能城 1992）、それに程近い南新保D遺跡ではモミが出土している（鈴木・能城 1996）。この様に木製楯の樹種は、比較的大材が得られること、加工性が良いこと、それに重すぎる材ではないことを満足すれば樹種を特に選ぶことはないのかもしれない。

形代としたものは15点あるが、そのうち11点は舟形で、ヒノキが6点と多く、他はスギ、クロベ（？）、ヒノキ科、サカキ、タブノキといろいろな材を使っている。剣形及び刀形は4点で、コウヤマキ、イヌマキ、カシ類、クヌギ節各1点と、樹種を全く選んでいないようである。その他の項目に入っているが木簡は2点で、中世のものであり、いずれもヒノキであることは幾内地方との関連がうかがえる。

この木簡を含めて少数の製品が出土したものを「その他」として表6に示した。大型曲物を転用した

表3. 角江遺跡の木製品の種別の樹種構成

樹種名	農工具	建築材	容器	漁労運搬具	武具	形代	その他	用途不明	合計
カヤ(カヤ?含む)		1						1	2
イヌガヤ	1			1	1			6	9
イヌマキ	2	12		5	28	1	1	34	83
モミ属		2			4		2		8
アカマツとクロマツ	5	4		3			2	11	25
ツガ属							1	1	2
コウヤマキ			1			1	2	3	7
スギ		10	2	4		1	5	18	40
ヒノキ	3	11	29	7		6	21	38	115
クロベ(クロベ?含む)		1				1		1	3
ヒノキ科					1	1	1	1	4
クマシデ節								1	1
クリ	17	23	6	6			3	8	63
スダジイ	6	3	1	1			1	8	20
スダジイ又はクリ								1	1
アカガシ属	93			7		1	1	9	111
クヌギ節	80	2	1	1		1	1	13	99
コナラ節	28	4			1			13	46
エノキ属		2							2
ケヤキ	1		30	1			1	3	36
ヤマグワ	1							1	2
モクレン属		1							1
クスノキ	5	1	5					6	17
タブノキ	1					1			2
シロダモ								1	1
ヤブツバキ	2							3	5
サカキ	57	1		9		1		23	91
ヒサカキ	2	1	1					7	11
サクラ属	1								1
ネムノキ		1							1
ユズリハ属	2	3						1	6
ヌルデ	1								1
ムクロジ			2					1	3
ニシキギ属				1					1
ケンボナシ属				3					3
ハリギリ		1							1
ネジキ	1	2				1			4
シャシャンボ	1	2						3	6
タイミンタチバナ	1	1						1	3
カキ								1	1
エゴノキ属		1							1
クロバイ	1		1					1	3
トネリコ属			2					1	3
キリ				1					1
ニワトコ							1		1
竹篭類			1		1		1	1	4
同定不能	3								3
合計	318	87	86	48	34	15	45	221	854

表4. 角江遺跡の農耕具の樹種

	鋤歎	農具柄	斧柄	鎌柄	堅杵	臼	横槌	その他	合計
アカガシ亜属	73	9	4		2		3	2	93
クヌギ節	27	19	19	2	11		1	1	80
サカキ	1	55					1		57
コナラ節	22	3			3				28
クリ	1	2				9		5	17
スグジイとコジイ		5	1						6
アカマツとクロマツ	1	2	1					1	5
クスノキ	2					2		1	5
ヒノキ								3	3
ヒサカキ		2							2
ユズリハ属		2							2
エノキ属		1						1	2
イヌマキ					2				2
ヤブツバキ						2			2
クロバイ		1							1
タイミンタチバナ		1							1
ヌルデ		1							1
ネジキ		1							1
モクレン属		1							1
ヤマグワ	1								1
イヌガヤ					1				1
ケヤキ						1			1
サクラ属							1		1
シャシャンボ						1			1
タブノキ							1		1
同定不能	1	1				1			3
合計	129	106	25	5	21	12	6	14	318

表5. 渔労漁撈具の樹種

	櫛状木製品	手網	アカカキ	舟	合計
サカキ	7	2			9
アカガシ亜属	7				7
ヒノキ	5		2		7
クリ	3		2	1	6
イヌマキ属		4	1		5
スギ	1		2	1	4
二葉松類		3			3
キリ	1				1
クヌギ節	1				1
ケヤキ	1				1
コナラ節	1				1
コジイ	1				1
イヌガヤ		1			1
ヒノキ科			1		1
合計	28	10	8	2	48

表 5. その他の木製品の樹種

標本番号	樹種	製品種類	時代
2908	アカマツ	シガラ	中世
3628	アカガシ亜属	つえ	弥生後期
4275	二葉松類	ツル巻	弥生
3869	ツガ属	はきもの	弥生後期
4412	ヒノキ	はきもの	弥生後期
4409	ヒノキ	井戸材	古墳後期
4410	ヒノキ	井戸材	古墳後期
4389	ヒノキ	井戸材	奈良
4392	ヒノキ	井戸材	平安
4395	ヒノキ	井戸材	平安
4388	ヒノキ	井戸材	中世
4390	ヒノキ	井戸材	中世
4391	ヒノキ	井戸材	中世
4361	モミ属	井戸材	古墳後期
4393	ヒノキ	井戸側板	平安
4396	ヒノキ	井戸側板	平安
4398	ヒノキ	井戸側板	平安
4399	ヒノキ	井戸側板	平安
4373	クリ	下駄	近世
4192	コウヤマキ	楽器	弥生後期
4247	コウヤマキ	楽器	弥生後期
2557	ヒノキ	楽器	弥生中期
4209	クリ	楽器	板状琴
4414	ヒノキ	楽器	板状琴
4194	ヒノキ	楽器	板状琴
2569	ヒノキ	器具	縫越具
4211	ケヤキ	器具	机の足
3651	スギ	器具	織機
3652	スギ	器具	織機
4521	クリ	器具	台輪
4519	ツブラジイ	器具	台輪
3612	ネジキ	匙	弥生中期
3956	竹笹類	竹	—
4489	スギ	木材	中世
3603	スギ	箸	弥生?
3862	ヒノキ	箸	—
3620	ヒノキ科	箸	中世
3621	モミ属	箸	弥生中期
3861	ヒノキ	箸状木製品	中世
4411	スギ	部材	平安
3950	ニワトコ	棒状木製品	—
3860	ヒノキ	木簡	中世
3859	ヒノキ	木簡?	中世
3922	クヌギ節	木片	—
4572	イヌマキ	有頭棒	弥生後期

井戸材はほとんどがヒノキであるのは容器としての曲物の用材と同じである。

弥生時代の琴はコウヤマキが2点、ヒノキが3点、クリが1点である。コウヤマキは記載の項で述べたように現地性でなく移入であると考えられ、弥生時代の琴の樹種調査例は少なく、貴重な結果である。その他、履き物、下駄にはヒノキ、ツガ属、クリが、箸にはスギ、ヒノキ、モミなどの針葉樹が使われていることなどがわかった。

用途不明品としたものはその形状から機能を特定できなかったもので、221点あり、主な樹種はヒノキ(38点)、イヌマキ(34点)、サカキ(23点)、スギ(18点)、クヌギ節、コナラ節(ともに13点)、マツ類(11点)などである。このうち、ヒノキ、スギは板、あるいは四角棒状の木製品であり、イヌマキは弓あるいは掘り棒状のもの、サカキは柄状のものがほとんどである。これらは用途不明品としたものの、組成が全体の組成と基本的に一致することから、これまで述べてきた木製品のいすれかに相当するものがほとんどと思われる。

静岡県東部の弥生～古墳時代にかけての遺跡の用材でもっとも特徴的なことはスギ材の多用である。登呂、山木、雑鹿塚遺跡などでは板、柱などの建築材に限らず削物容器などありとあらゆる用途にスギ材が使われている(能城修1991)。このようなスギの多用は太平洋側では千葉県南部まで認められ、日本海側では福井県、石川県で著しい(鈴木・能城1991b、山田1993)。これに対して静岡県西部から愛知県、三重県など伊勢湾地域ではスギはあるもののその比率は小さく、ヒノキ及び広葉樹が優勢である(山田1993)。当遺跡でも広葉樹が多く、針葉樹の中ではヒノキが断然多く、スギは大変少ない。このようにスギ材の利用に関して静岡県内でも東部と西部で大きな違いがあることが当遺跡でも確認された。

まとめ

以上見てきたように、当遺跡では854点の試料から実質的には47タイプの樹種が同定され、その結果、その組成は針葉樹が35%、それに常緑広葉樹と落葉広葉樹が32%づつであり、現地性の材と移入材で構成されていること、現地性の材の樹種組成からは照葉樹林の存在が強く示唆された。それらの用材を見ると鍔・鉢などの農具にカシ類が多く用いられ、この地域の一般的傾向に一致するものの、クヌギ節、コナラ節材も少なからず用いられ、特にコナラ節材の鍔鉢への利用は他ではまれにしか見られないことに特徴があることがわかった。また、それらや斧の柄にサカキが多用され、これも東海地方の遺跡に特徴的であることがわかった。丸木弓の用材がイヌマキに集中することも東海地方の他の遺跡とよく一致し、これはこの地方にだけ見られる特徴であることがわかった。また、静岡県東部地方で特徴的なスギ材の多様が本遺跡では認められず、むしろ伊勢湾地域と共通した現象であることがわかった。

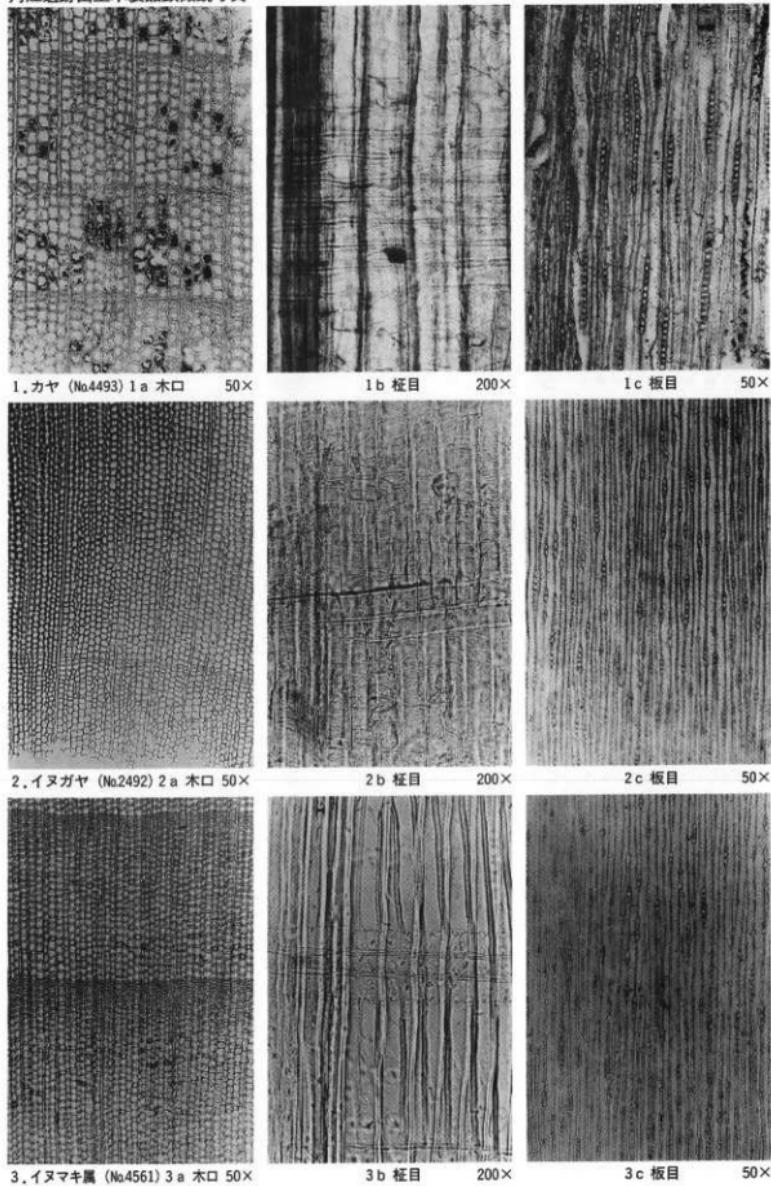
引用文献

- 能城修一・鈴木三男.1990. 下川津遺跡から出土木製品の樹種分析報告. 香川県教育委員会「下川津遺跡」: 533-567.
- 能城修一・鈴木三男.1993. 国府関遺跡から出土した木製品の樹種. 長生郡市文化財センター「国府関遺跡群」: 285-306.
- 能城修一・鈴木三男.1996. 君津市常代遺跡から出土した木製品の樹種. 君津市文化財センター「常代遺跡群」: 826-861.
- 能城修一・車崎正彦・鈴木三男・石川治夫. 静岡県沼津市雑鹿塚遺跡出土木製品の用材. 金沢大学教養部論集(人文科学編) 28 (2):43-63.
- 鈴木三男・能城修一.1986. 新保遺跡出土加工木の樹種. 群馬県教育委員会「新保遺跡I 弥生・古墳時代大溝編」: 71-94.

- 鈴木三男・能城修一.1988. 群馬県勝保沢中ノ山遺跡出土炭化材の樹種. 群馬県教育委員会「勝保沢中ノ山遺跡」:180-192.
- 鈴木三男・能城修一.1991 a. 金沢市歎田遺跡から出土した木製品の樹種. 石川県埋蔵文化財センター「歎田遺跡」:165-189.
- 鈴木三男・能城修一.1991 b. 角谷遺跡群出土木製品の樹種. 三方町教育委員会「角谷遺跡群」:65-82.
- 鈴木三男・能城修一.1992. 金沢市西念・南新保遺跡出土木製品の樹種. 金沢市教育委員会「金沢市西念・南新保遺跡III」:285-294.
- 鈴木三男・能城修一.1996. 金沢市西念・南新保遺跡、南新保 D 遺跡出土木製品の樹種. 金沢市教育委員会「金沢市西念・南新保遺跡IV」:25-29.
- 亘理俊次.1949. 木材. 日本考古学協会「登呂」:83-91.
- 亘理俊次・山内文.1962. 木材. 築地書館「葦山村山木遺跡」:95-101.
- 山田昌久.1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成. 植生史研究特別第1号、242 pp.

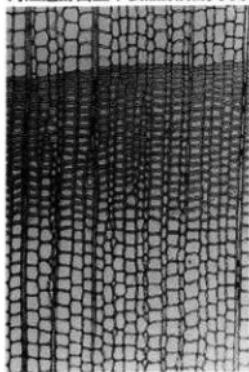
図版 1

角江遺跡出土木製品顕微鏡写真

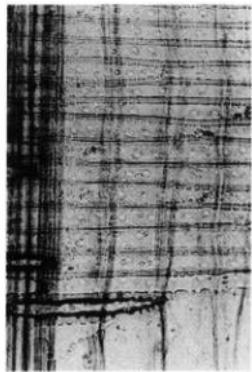


図版2

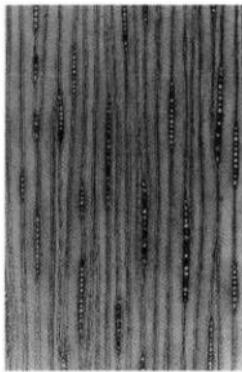
角江遺跡出土木製品顕微鏡写真



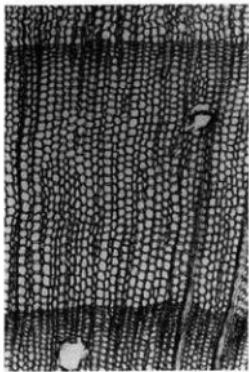
4. モミ属 (No.4522) 4 a 木口 50×



4 b 杠目 200×



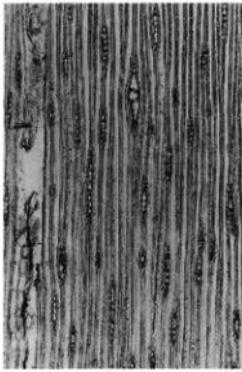
4 c 板目 50×



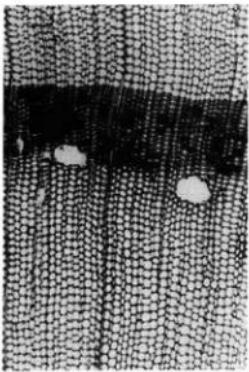
5. アカマツ (No.3962) 5 a 木口 50×



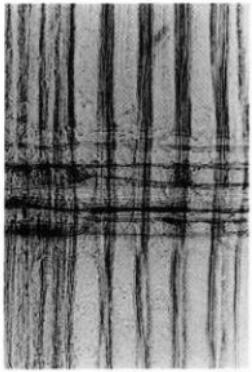
5 b 杠目 200×



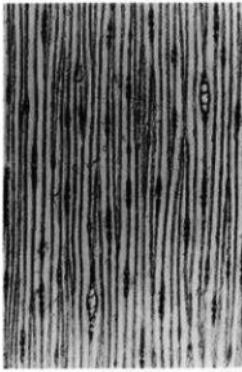
5 c 板目 50×



6. クロマツ (No.3964) 6 a 木口 50×

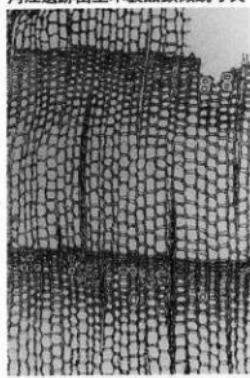


6 b 杠目 200×

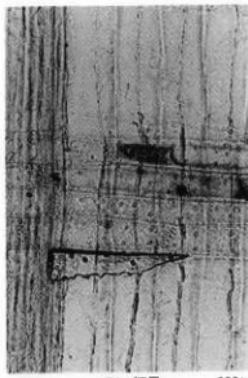


6 c 板目 50×

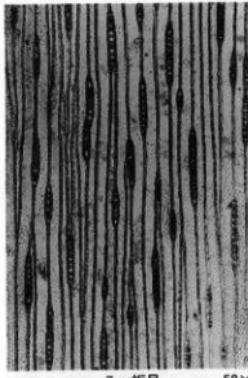
角江遺跡出土木製品顕微鏡写真



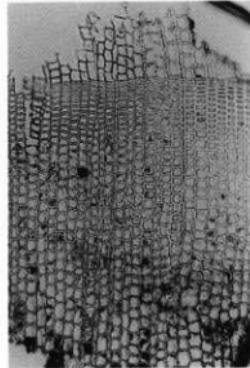
7. ツガ属 (No.3924) 7 a 木口 50×



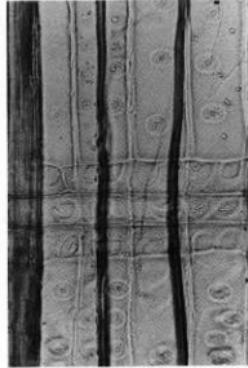
7 b 横目 200×



7 c 板目 50×



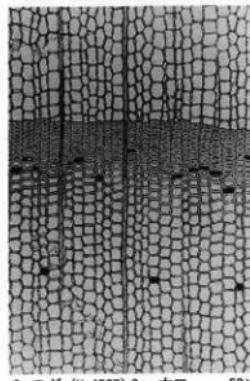
8. コウヤマキ (No.4192) 8 a 木口 50×



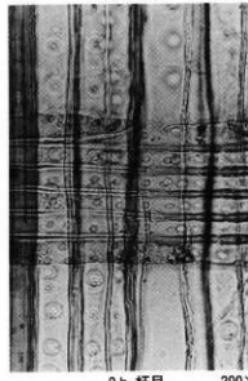
8 b 横目 200×



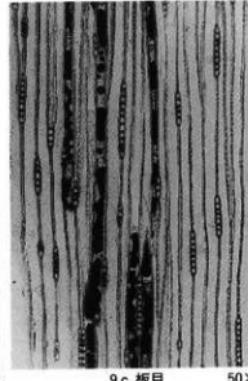
8 c 板目 50×



9. スギ (No.4527) 9 a 木口 50×



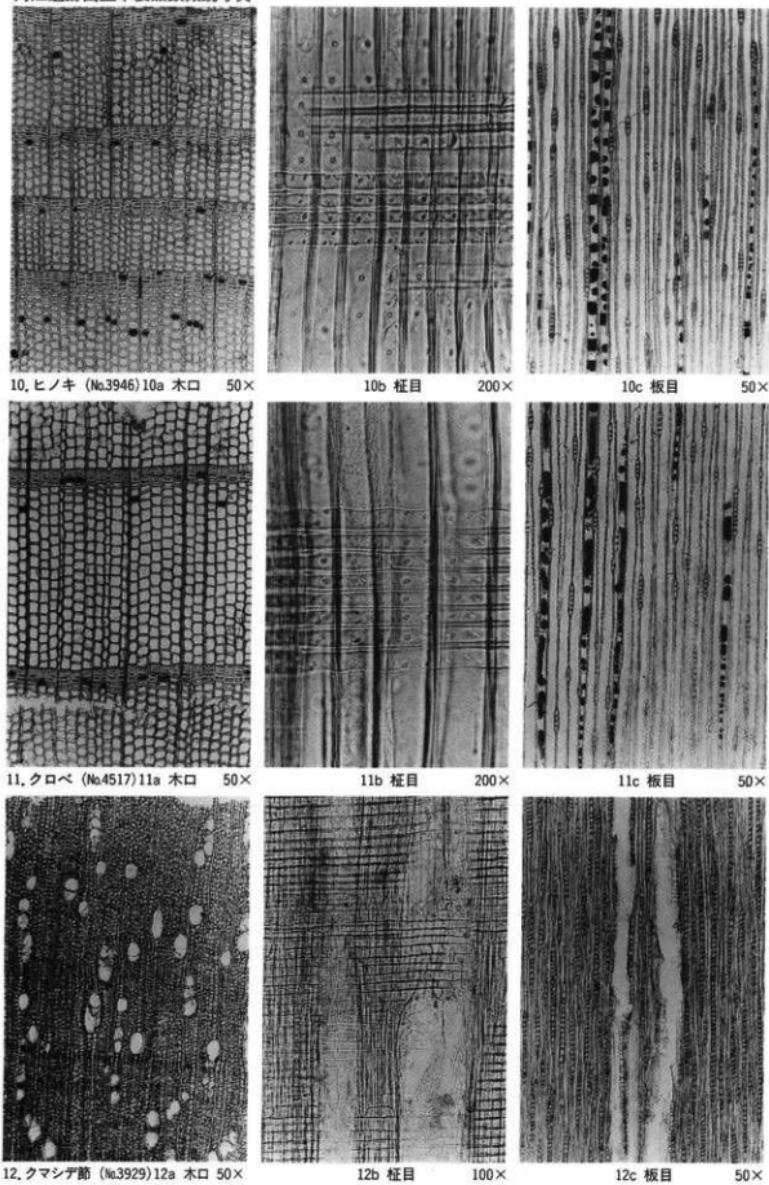
9 b 横目 200×



9 c 板目 50×

図版4

角江遺跡出土木製品顕微鏡写真



10. ヒノキ (No.3946) 10a 木口 50×

10b 柾目 200×

10c 板目 50×

11. クロベ (No.4517) 11a 木口 50×

11b 柾目 200×

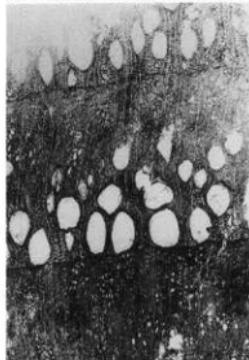
11c 板目 50×

12. クマシデ節 (No.3929) 12a 木口 50×

12b 柾目 100×

12c 板目 50×

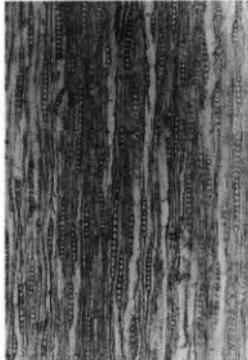
角江遺跡出土木製品顕微鏡写真



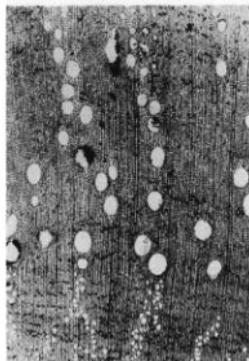
13. クリ (No.4538) 13a 木口 20×



13b 柄目 100×



13c 板目 50×



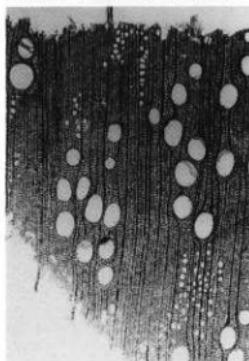
14. スダシイ (No.4135) 14a 木口 20×



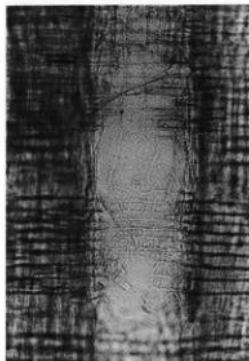
14b 柄目 100×



14c 板目 50×



15. ツブラジイ (No.4519) 15a 木口 20×



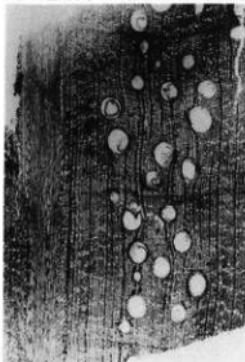
15b 柄目 100×



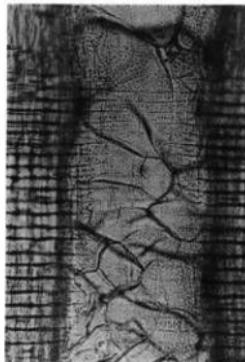
15c 板目 50×

図版 6

角江遺跡出土木製品顕微鏡写真



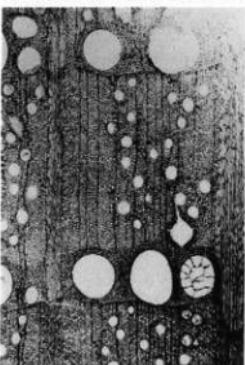
16. アカガシ亞属 (No.4118) 16a 木口 20×



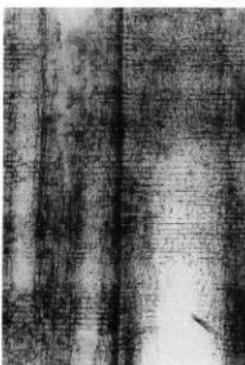
16b 柄目 100×



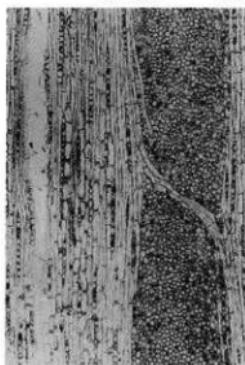
16c 板目 50×



17. クヌギ節 (No.3574) 17a 木口 20×



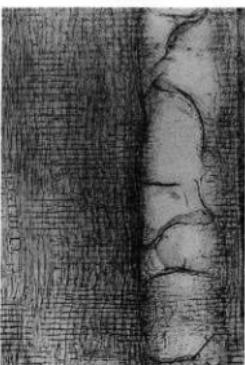
17b 柄目 50×



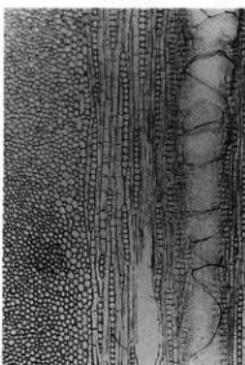
17c 板目 50×



18. コナラ節 (No.4128) 18a 木口 20×



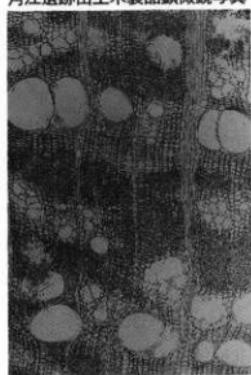
18b 柄目 50×



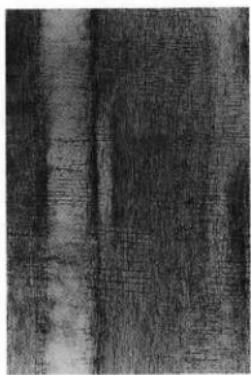
18c 板目 50×

図版 7

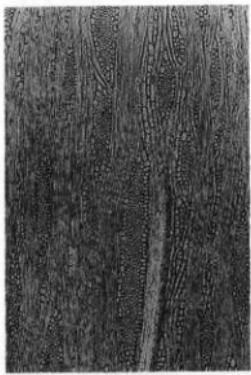
角江遺跡出土木製品顯微鏡写真



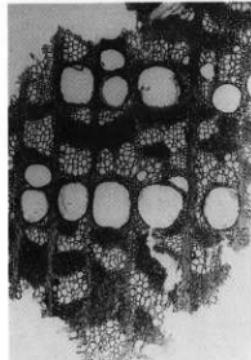
19. エノキ属 (No.3704) 19a 木口 50×



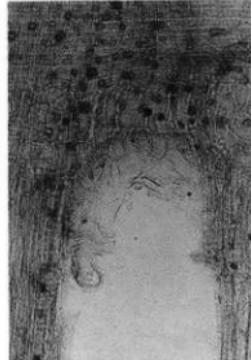
19b 柾目 50×



19c 板目 50×



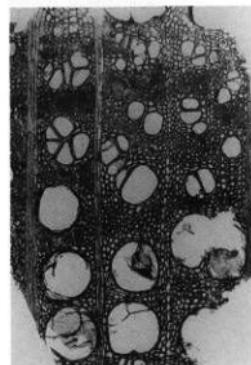
20. ケヤキ (No.4471) 20a 木口 20×



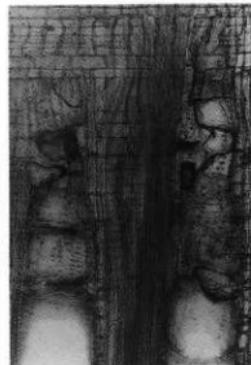
20b 柾目 100×



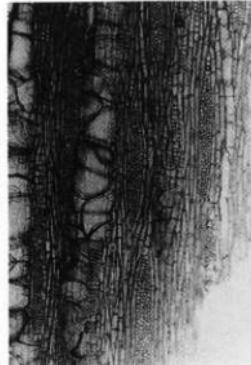
20c 板目 50×



21. ヤマグワ (No.4180) 21a 木口 50×



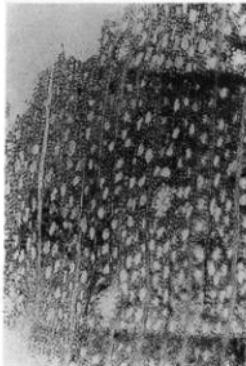
21b 柾目 100×



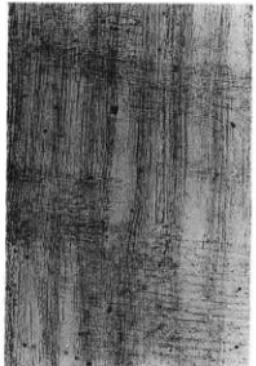
21c 板目 50×

図版8

角江遺跡出土木製品顕微鏡写真



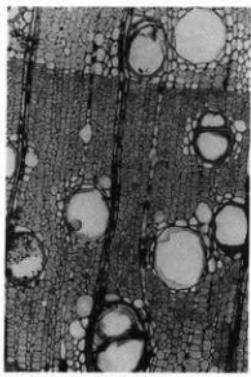
22. モクレン属 (No.3680) 22a 木口 50×



22b 柄目 100×



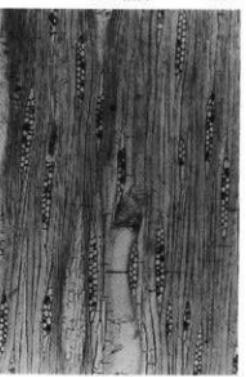
22c 板目 50×



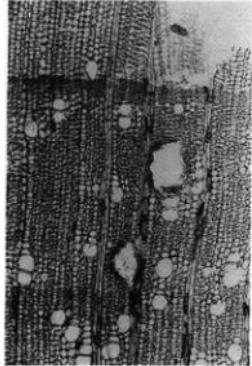
23. クスノキ (No.2886) 23a 木口 50×



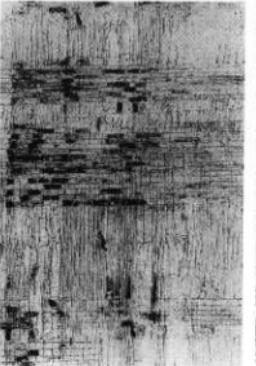
23b 柄目 50×



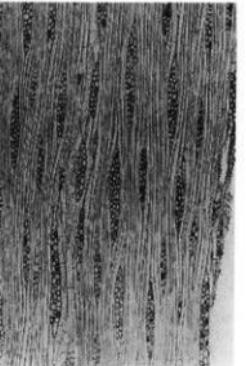
23c 板目 50×



24. タブノキ (No.3658) 24a 木口 50%



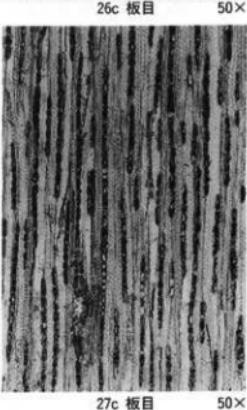
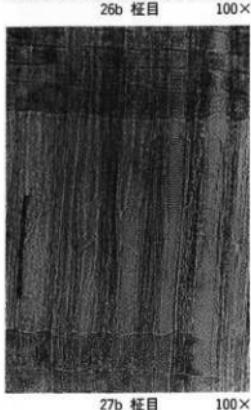
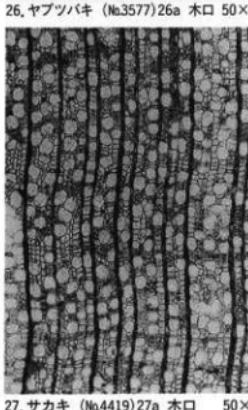
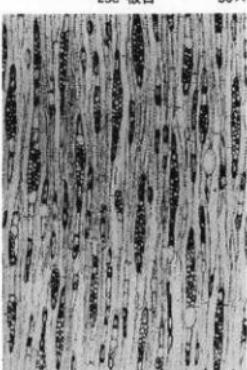
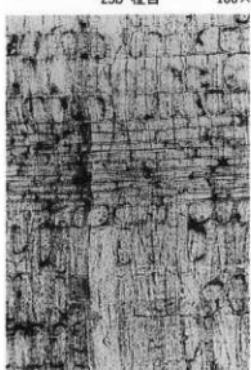
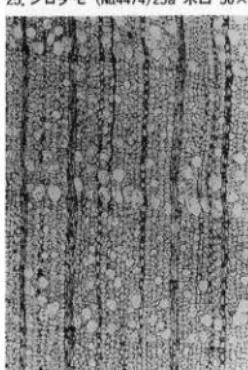
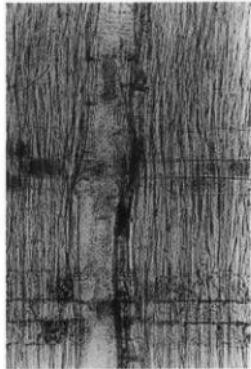
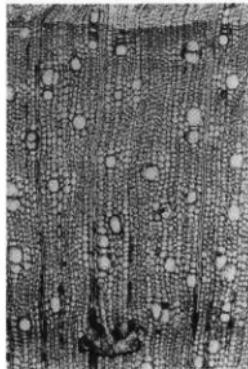
24b 柄目 50%



24c 板目 50%

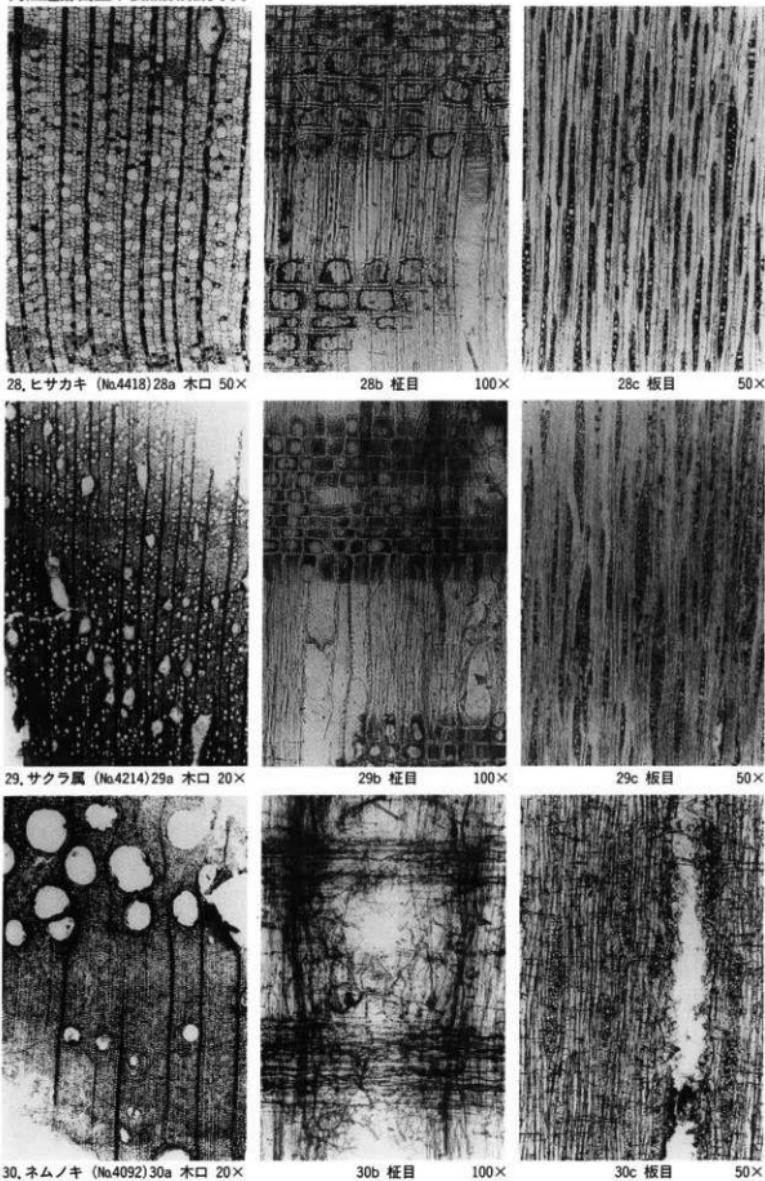
図版 9

角江遺跡出土木製品顯微鏡写真



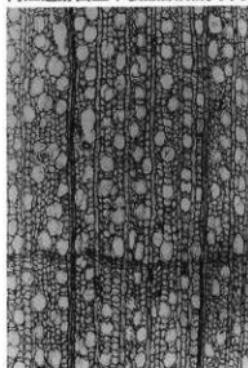
図版10

角江遺跡出土木製品顕微鏡写真

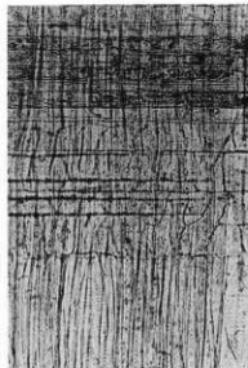


図版11

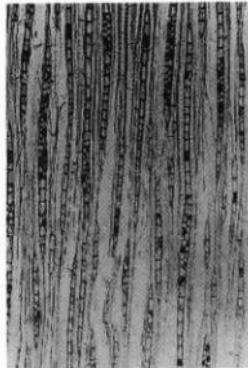
角江遺跡出土木製品顕微鏡写真



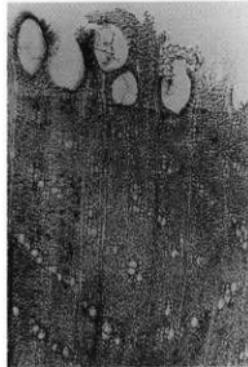
31. ユズリハ属 (No.3566) 31a 木口 50×



31b 棒目 100×



31c 板目 50×



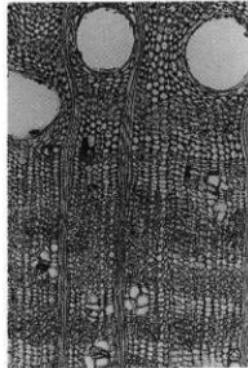
32. ヌルデ (No.4102) 32a 木口 50×



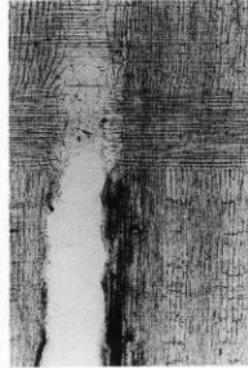
32b 棒目 100×



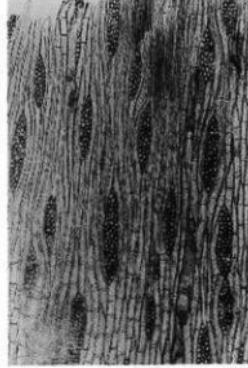
32c 板目 50×



33. ムクロジ (No.3664) 33a 木口 50×



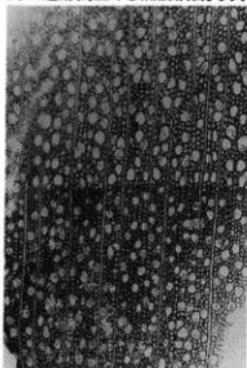
33b 棒目 50×



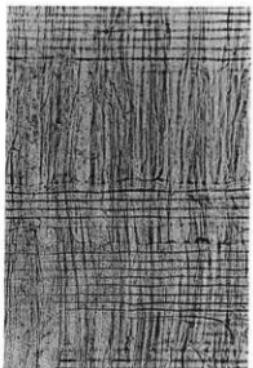
33c 板目 50×

図版12

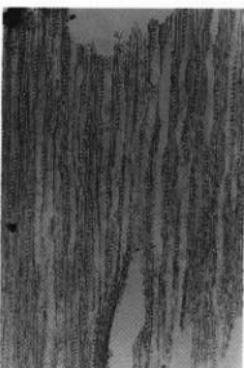
角江遺跡出土木製品顕微鏡写真



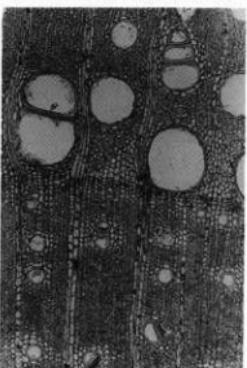
34. ニシキギ属 (No3638) 34a 木口 50×



34b 横目 100×



34c 板目 50×



35. ケンボナシ属 (No4210) 35a 木口 50×



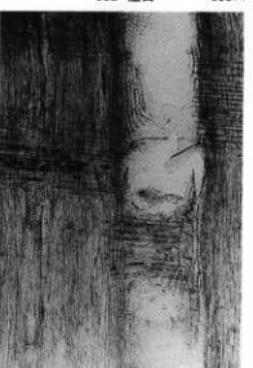
35b 横目 100×



35c 板目 50×



36. ハリギリ (No4529) 36a 木口 50×

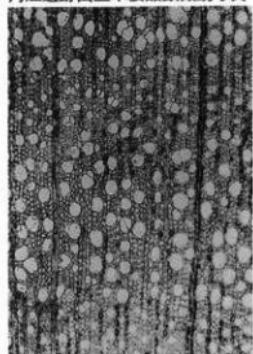


36b 横目 50×



36c 板目 50×

角江遺跡出土木製品顕微鏡写真



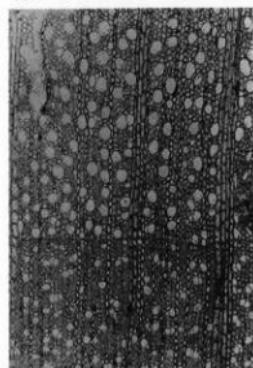
37. ネジキ (No.3792) 37a 木口 50×



37b 横目 200×



37c 板目 50×



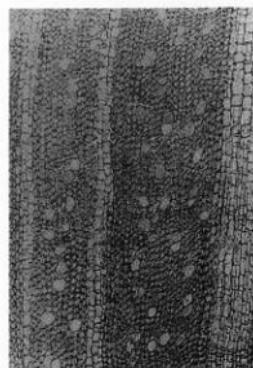
38. シャシャンボ (No.4179) 38a 木口 50×



38b 横目 100×



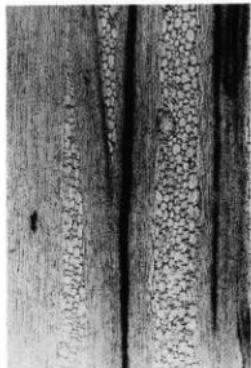
38c 板目 50×



39. タイミンタチバナ (No.3771) 39a 木口 50×



39b 横目 50×



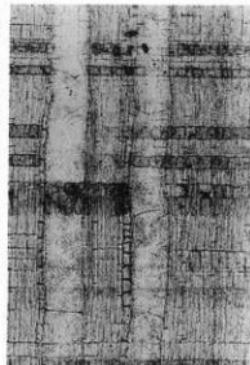
39c 板目 50×

図版14

角江遺跡出土木製品類微鏡写真



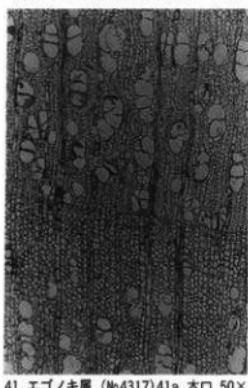
40. カキノキ (No.3936) 40a 木口 20×



40b 柄目 50×



40c 板目 50×



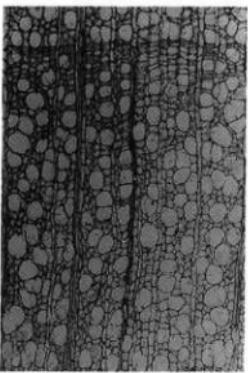
41. エゴノキ属 (No.4317) 41a 木口 50×



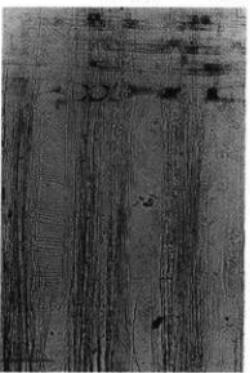
41b 柄目 100×



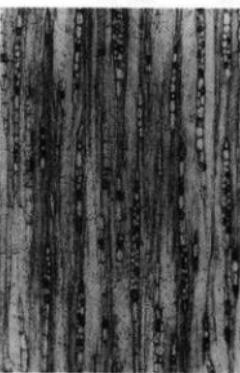
41c 板目 50×



42. クロバイ (No.4378) 42a 木口 50×

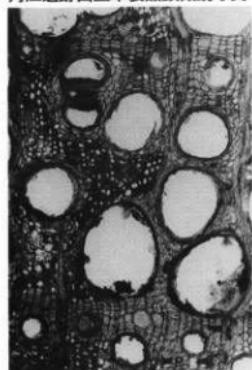


42b 柄目 100×



42c 板目 50×

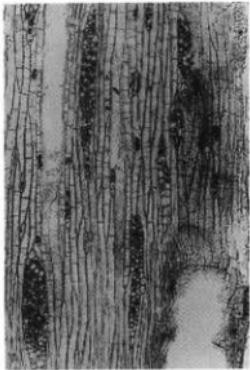
角江遺跡出土木製品顯微鏡写真



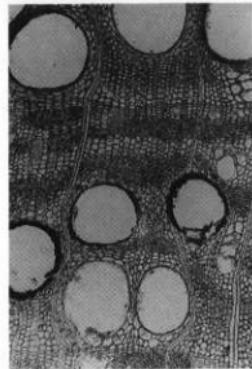
43. ノリコ属 (No.4202) 43a 木口 50×



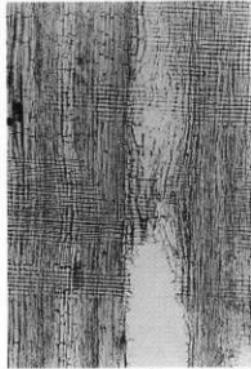
43b 柱目 50×



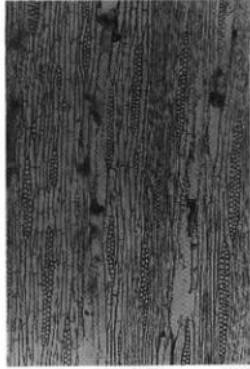
43c 板目 50×



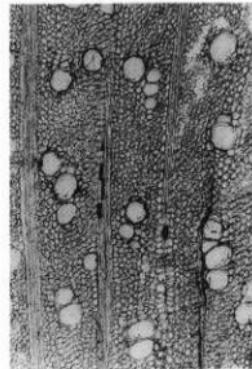
44. キリ (No.3642) 44a 木口 50×



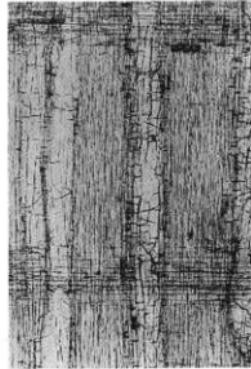
44b 柱目 50×



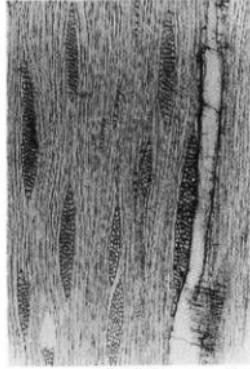
44c 板目 50×



45. ニワトコ (No.3950) 45a 木口 50×



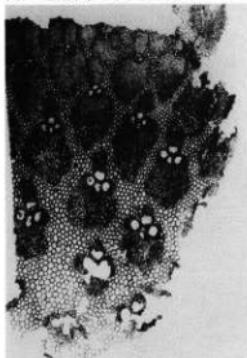
45b 柱目 50×



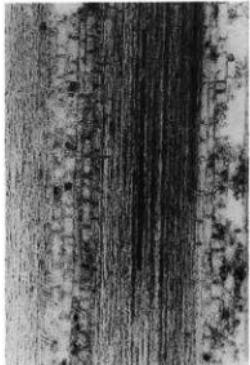
45c 板目 50×

図版16

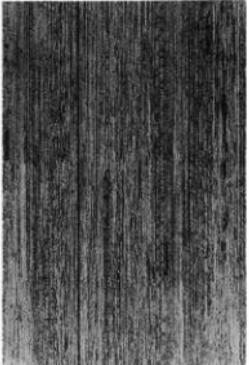
角江遺跡出土木製品顕微鏡写真



46. 竹籃類 (No.3956) 46a 木口 20×



46b 棒目 200×



46c 板目 50×

角江遺跡出土の琴ならびに琴状木製品

放送大学 笠原 漢

角江遺跡から出土した琴およびこれに類似した琴状の木製品は、以下の点から注目を引いた。第一に、從来琴の出土が知られていなかった静岡県西部地域からの出土であったこと¹⁾、第二にその数が五点にも上ったこと、第三に異なった種類の琴と目されるものがまとまって出土したこと²⁾、第四にそれらの遺物のいずれもが、從来から知られていた出土琴に比べて特異な構造を示していたことである。

このうち、第一から第三までの点は、佐鳴湖に程近い東神田川沿いの遺跡という立地条件から地下水が豊富であり、そのため木製品の残存度が高かった結果として説明が付くであろう。注目すべきは、第四の点である。以下、この点に焦点を当てながら、個々の遺物に対して、これまでに出土した弥生時代以降の琴³⁾との比較を中心に検討を加えていく。

出土琴の分類 弥生時代以降の遺跡から出土する琴の分類に関して、從来主に用いられてきたのは、水野正好氏による分類法である⁴⁾。水野氏は、出土琴を「板作り」の琴と「槽作り」の琴とに大きく分け、さらに前者を三群五種に、後者を二群四種に分類した。

奈良国立文化財研究所発行の『木器集成図録 近畿原始篇』⁵⁾は、出土琴を頭部の平面形・胴部の断面形・尾部の突起数の三つの視点から分類したが、胴部の断面形に基づく分類に関して言えば、出土琴を大きく I 類（板作りの琴）と II 類（槽作りの琴）とに分けている点で水野氏の分類を踏襲していると言つてよかろう。

これに対して、筆者は、これらの分類で板作りの琴に分類されているもののうち、古墳時代の遺跡から出土する、琴頭に向かって先細りになる棒状の琴体を有し、琴体断面が二等辺三角形をなし、突起裏面を大きく削り込んでいる五突起の琴（水野氏の分類の「板作りの琴」の第 1 群第 2 種ならびに第 3 群第 1 種、『木器集成図録 近畿原始篇』の分類の I C 類に当たる）、およびその前身に当たると思われる弥生時代の遺物を、板作りの琴から分離して第三種の琴として独立させた方が良いと考えている⁶⁾。以下の記述にあたっては、この分類に従うものとする。

槽作りの琴（琴板） 437 は、槽作りの琴の琴板である。琴尾側（突起のある側）の残片で、現存長 40.7 cm、最大幅 18.9 cm、最厚 1.2 cm を測る。最も琴尾寄りの二個一組からなる槽結縛孔が左右に残存している。槽作りの琴の中には、こうした槽結縛孔の脇の琴板側面から木釘を打って結縛を補強している例があるが、この琴の場合にはそうした痕は見られず、槽は琴板と結縛されただけで固定されていたようである。

槽結縛孔に挟まれた中央割れ目上の穴は、人工的に掘られたもののように見えるが、響孔としては、琴尾に寄りすぎている。響孔でないとしたら、楽器としての機構上意味をなさない孔であるため、埋没後の腐食により生じたものではないかと思われる。琴頭側が欠損しているために、響孔の有無や集弦機構は不明である。小口板の取り付け位置を示す手掛かりとなるような痕跡は観察できない。ヒノキ製であるが、ヒノキは、スギと並んで、琴の製作に最もよく使われる材である。

この琴で注目されるのは、以下の三点である。

第一は、弥生時代中期後葉ないし後期前葉に比定されるこの琴は、後代の和琴の系譜に繋がる琴の遺物としては最も古い遺物の一つであるという点である。槽作りの琴で弥生前期に遡るもののはまだ出土が報告されておらず、角江の琴と同時代の可能性のあるものも、現在までに数点の出土が知られているに過ぎない⁷⁾。

第二は、琴幅が 18.9 cm と狭い点である。これまでに出土した槽作りの琴の琴板で全長と最大幅（いずれも琴尾幅）の両方が分かることを大きさの順に挙げれば、茂原市国府関遺跡出土琴（161.2 cm × 35.7 cm）⁹⁾、春日市辻田遺跡出土琴のうちの一点（148.8 cm × 29.4 cm）¹⁰⁾、金沢市西念・南新保遺跡出土琴（139.4 cm × 28.0 cm）¹¹⁾、守山市下長遺跡出土琴（115 cm × 25 cm）¹²⁾となる。他に、半折しているために元の幅は不明なもの、全長が分かるものに、滋賀県野洲町市三宅東遺跡出土琴（161.3 cm）¹³⁾、守山市笠原南遺跡出土琴（130 cm）¹⁴⁾、新潟県刈羽村西谷遺跡出土琴（120.6 cm）¹⁵⁾があり、数値は報告されていないが滋賀県新旭町針江浜遺跡出土琴¹⁶⁾も実測図から推計すると 131 cm 程度になる。また、琴頭側を欠損するため全長は不明であるが、現存長だけでも 1 m を超えるものに福岡県夜須町惣利遺跡出土琴（現存長 118.5 cm）¹⁷⁾、守山市服部遺跡出土琴（現存長 118 cm）¹⁸⁾、大津市湖西線遺跡出土琴（現存長 110 cm）¹⁹⁾、東大阪市西ノ辻遺跡出土琴（現存長 105.5 cm）²⁰⁾がある。これに対して、角江の琴は、全長・全幅とも分かる上記四点の琴と類似のプロポーションを持っていたとすれば全長 85.3~95.7 cm 程度になるはずであり、上記の諸例と比べて、琴尾幅 20.4 cm を測る岡山市南方益田遺跡出土琴²¹⁾とともに、比較的小型の琴に属することが理解されよう。

ただ、槽作りの琴では、最近、前原市上籠子遺跡から琴尾幅 14 cm ほどの琴が、堺市下田遺跡から琴央幅 13.1 cm の琴が²²⁾、御所市南郷大東遺跡からは幅 14 cm の琴が出土している²³⁾。これらが実用の琴であったか、それとも祭記用のミニチュアであったかに関しては、現在の段階では判断を避けたいが、往時には從来想像されていた以上に小型の琴が存在していた可能性があることを指摘しておきたい。

角江の琴で注目される第三の点は、元来八突起を持っていたと推測される点である。この琴の場合、現存する五突起の中間にもう一突起が、その両側にさらに各一突起があったことが残痕から推測されるが²⁴⁾、八突起の琴の出土は他に例を見ない。槽作りの琴で元来の突起数が分かるもの多くは六突起であり²⁵⁾、例外は南郷大東遺跡出土琴（五突起）・上籠子遺跡出土琴・西ノ辻遺跡出土琴（共に七突起）、それにこの角江の琴に過ぎない。後代の和琴もまた六突起である。和琴の祖形を示す最も古い資料の一つである角江の琴が八突起を、上籠子遺跡出土琴が七突起を、それぞれ示す点は、和琴に至る日本の琴の系譜を考える上で重大な意味を持っている。

なお、槽結縛孔の位置から考えると、槽の穂（側板）は、その先端の削りだし部分が欠失してしまった両側端の突起の下にまで延びてこれを支える構造を取っていたことが想像される。琴板に槽が結縛された状態で出土した服部遺跡出土琴がこうした構造を示している。

棒状琴（二点） 古墳時代になると、先に述べたような特色ある形態の五突起の棒状琴が登場する。現在までに、以下の遺跡からの出土が知られている。

兵庫県篠山町	蘿池北遺跡	（古墳前期） ²⁶⁾
滋賀県新旭町	森浜遺跡	（古墳中期） ²⁷⁾
橿原市	四条大田中遺跡	（古墳中期、二点） ²⁸⁾
兵庫県出石町	持狭遺跡	（古墳中期） ²⁹⁾
木更津市	菅生遺跡	（古墳後期） ³⁰⁾

実のところ、これらの木製品が琴であったかどうかに関しては十分な議論がなされていない。このタイプの琴を演奏している様子を象った埴輪が出土していないこともあって、これらの木製品が琴であるかどうかはまだ証明されていないのであるが、これらの木製品の突起が弦を掛ける以外の用途に用いられたとは考えにくいくこと、四条大田中遺跡出土品のうちの一点が豊かな装飾を持っており、実用品であったと考えるのが難しいこと、琴頭側に集弦用の孔と思われるものが開けられていること、そして何よりも、これから紹介する角江の出土品のうちの一点の突起付け根部分に弦を掛けたことによると思われる磨耗痕が観察されることなどから、現在の段階としては、これを琴の類の何らかの撥弦楽器と見なして

おいてよいと思われる。

ところで、從来板作りの琴として紹介されてきた木製品の中に、一点だけ、この琴の前身と思われる遺物があった。櫛原市四分遺跡（櫛原京下層遺跡）出土の琴（弥生後期）がそれで²⁰、他の板作りの琴がいずれも四突起もしくは六突起であるのに対してこの琴だけが五突起である点、他の板作りの琴に比べて部厚い、しかも琴頭に向かって次第に先細りになっていく胴を持ってる点、突起裏面を突起先端に向かって斜めに削り込んでいる点など、古墳時代の棒状琴と共通する特徴を備えているところから、筆者はこの琴を古墳時代の棒状琴の先駆をなすものと考えてきた²¹。

ところが、角江遺跡からは、これも古墳時代の棒状琴の前身をなすと思われる四突起の棒状木製品が二点出土した。

436（弥生中期後葉～後期前葉）は、途中で折損しているが、復原長 54.3 cm、最大幅（琴尾幅）5.7 cm、最大厚 2.5 cm を測る。古墳時代の棒状琴の多くはこのほぼ二倍の幅を持つが、菅生遺跡出土のものだけは細身で、これとほぼ同サイズである。外形が琴頭方向に向かって次第に細くなっている点は、古墳時代の遺物と共通している。ただし、古墳時代の遺物はいずれも琴体断面が二等辺三角形をなし、稜が立っているのに対して、436 の断面は隅丸のほぼ半円形をなしている。

突起裏面を大きく削り込んでいる点は、古墳時代の遺物と共に通し、しかもその削り込み方は古墳時代の遺物に見るとそっくりである。ただし、その削り込み部分のほぼ中央にさらに抉りがあるのは、古墳時代の遺物には見られない特徴である。この抉り込みが正中線からややずれている点は、多少気になる。

琴頭部には平滑面から孔を穿ち、その反対側からはV字状の切り込みを入れてそこに孔を開口させている。そうした孔の開口のさせ方は次に紹介する 435 や菅生遺跡出土琴と機構的に共通するが、加工の仕方はこれら二点ほど洗練されていない。

琴尾部は磨損が激しいが、突起痕から本来四突起を持っていたことが分かる。

樹種がクリ材というは、古墳時代の棒状琴のみならず、板作りの琴・稽作の琴に微しても例を見ない。ただし四分遺跡出土琴も、アカガシという、琴としては珍しい材を使っている。

435（弥生後期前葉）は、現存長 56.4 cm、最大幅（琴尾幅）5.0 cm、最大厚 2.6 cm を測り、436 とはほぼ同サイズである。突起先端を僅かに欠くが、本来の長さは現存長とほとんど変わらなかったであろう。胴が琴頭方向に向かって先細りになっていく点や、断面がほぼ半円形で稜を立てていない点は、436 と同じである。樹種がヒノキである点は、板作りや稽作の琴の多くと共に通する。

突起裏面は 436 や古墳時代の出土例ほど大きく削っておらず、その点では四分遺跡出土琴に似ている。突起付け根部分に段を作っているのは、他の棒状琴には見られない特徴である。突起裏面の削り込み中央からやや外れた位置に溝を掘っている点は 436 と共に通するが、その溝が正中線からずれている点はやはり気に掛かる。

琴頭部の平滑面から貫通孔を掘り、その反対側では底面が平らな溝を琴体を横断するような形で掘つて孔をこの溝上に開口させている点は、菅生遺跡出土のものとそっくりである。弦は平滑面側からこの孔に入り、左右に分かれて結ばれていたことを思わせる²²。

突起は、残存する三つに加えて残痕が一つあり、元来は四突起であったことが分かる。中央二突起間の左右と、現存する側端の突起の内側に磨耗痕があるところから、弦は突起基部に結び付けられ、それぞれ内側に引っ張られて張られていたと推定される。磨耗痕から推測すると、四突起で四弦の琴であったと思われる（中央の突起間に二弦が走り、両側の突起間には各一弦が走る。）

これら二点の四突起の木製品は、上述のような構造から、古墳時代の棒状琴の前身と判断される。これが正しいとすると、古墳時代の棒状琴の前身にあたるものとして弥生時代後期には角江遺跡出土の二

点のような四突起の琴と四分遺跡出土琴のような五突起の琴とが存在していたことになるが、当時これら二種類の琴が共存していたのか、それともこの時代に角江遺跡の二点のような四突起の琴から四分遺跡出土琴のような五突起の琴へと短期間に「進化」したものかは分からぬ。類例の出土を待ちたい。

琴状木製品 角江遺跡からは、この他、板作りの琴を思わせる形態の木製品が二点出土している。どちらも板作りの琴としては機能的に説明が付かない孔が開けられているために琴と断定できないでいるのであるが、次にそれを紹介しよう。

652(弥生後期前葉)は、現存長60.4cm、幅10.2cm、厚さ1.0cmで、サイズ的には板作りの琴と見なしてもおかしくない。三突起が残るが、その脇の欠損部分から推定すると、元は六突起であったことが想像される。突起の反対側は、羽子板の柄のように細められ、その先端部分は、そこにU字状か環状の樂弦機構があったことを思わせるような残存状態になっている。これらの点からすれば、この木製品は板作りの琴と判断されるところであるが、それに対する否定材料となっているのが中央部のやや端に開けられた四角い孔である。この孔は機能的に説明が付かず、この木製品を琴として認定できない理由となっている。樹種がコウヤマキというのも、他の琴に類例を見ない。

板作りの琴は、横作りの琴に比べて規格性が希薄であり、作りもしばしば粗雑である³³⁾。そうしたところから、筆者は、横作りの琴が公的な性格の楽器であったのに対し、板作りの琴は私的な性格の、個人持つた楽器ではなかったか、という印象を持っている。そうであったとすれば、板作りの琴を制作する場合に、わざわざ板材を切り出さず、既存の板材を転用したこともあるかも知れない³⁴⁾。そうであったとすれば、この孔は、第一次加工の際に開けられたものが、琴への転用後に残ったものとも考えられる。ただ、そうした仮定に頼ってこの木製品を琴と断定することは危険であろう。その一方で、こうしたサイズ・形状の木製品で琴以外の用途を持つものというのも考えにくい。現在の段階としては琴状の用途不明木製品と言わざるを得ないが、有突起の木製品に関しては、今後、総合的な視点からの研究が必要であろう。

653(弥生中期以降)は現在五突起を残すが、一側縁を失っているようで、元来は六突起であった可能性が強い。現存長13.1cm、最大幅4.7cm、最大厚0.6cmを測るが、幅は、従来知られていた板作りの琴の中で最も幅の狭い天理市布留遺跡出土琴(最大幅5.5cm。古墳後期)や兵庫県春日町山垣遺跡出土琴(最大幅5.5cm。奈良時代)と比べても細く、厚さも他の板作りの琴に比べてやや薄い。これに次ぐ値を取るのは、布留遺跡出土琴(厚さ0.8cm)であり、他の板作りの琴はいずれも厚さが1cmを超える。現存する五突起は、張弦に耐えられたかどうかが疑問視されるほどの細さである³⁵⁾。突起間の切れ込みは、付け根の線が崩っておらず、ややぞんざいな作り方に見える。ヒノキ製であるが、この点は他の出土例と比べて問題ない。

突起先端から9cmほど離れた場所の板中央を両面から抉り、その中央に一辺0.3~0.4cmほどの不整形の四角い孔を開口させている。この貫通孔の琴尾寄りの端をかすめるように、琴板を横断する形で切線が切り込まれている。琴頭寄りの端は、貫通孔付近の切線を切り込んだのと同じと思われる刃物で両面から切断されているが、切断線は直線をなしておらず、切り口も雑なまま放置されている。

中央の貫通孔が機能的に説明が付かないために、板作りの琴として認定できず、用途不明の琴状木製品に分類したのであるが、整理担当者と検討を重ねるうちに浮かび上がってきたのが、この木製品が横作りの琴を象ったミニチュアであった可能性である。槽を装着している様子を表すための細工を施した痕跡は見られないが、この木製品を横作りの琴のミニチュアと見なせば、中央の孔は集弦孔を表したものと理解することができ、また突起の細さも琴板自体の薄さも説明が付く。琴頭方向で幅を広げている点も、琴壇輪にしばしば見られるような幅広の琴頭部の表現と理解することが可能である。

琴のミニチュアについては実態がまだ十分解明されておらず、また、琴頭寄りの切断面が祭祀用品と

してはやや粗雑にすぎるように思われるため、現在の段階としては用途不明木製品に分類しておくが、
柾作りの琴のミニチュアであった可能性が強いことを指摘しておきたい。

注

- 1) 周知のように、静岡市内では登呂遺跡と小黒遺跡から、愛知県内では木曾川町門間沼遺跡から、各一点の柾作りの琴が出土している。
- 2) 古墳時代の例であるが、滋賀県新旭町森浜遺跡から柾作りの琴と後述の棒状琴と一緒に出土した例がある（滋賀県教育委員会、「森浜遺跡発掘調査報告書」、1978年。兼康保明、「古代の琴」、「月刊文化財」、1977年10月。）
- 3) 大和言葉で「コト」と呼ばれるこれらのロングツイター属の楽器に対して中国起源の七弦琴を意味する「琴」という漢字を当てることには異論があろうが、ここでは慣習に従ってこの漢字表記を用いることにする。
- 4) 水野正好、「琴の誕生とその展開」、「考古学雑誌」、第66卷1号、1980年。
- 5) 奈良国立文化財研究所、「木器集成図録 近畿原始篇」（奈良国立文化財研究所史料第36冊）、1993年。ただし、同図録は、「箆状木製品」、すなわち「縄文琴」とも呼ばれる縄文・弥生時代の二突起の木製品も分類対象に含めている。
- 6) 抽稿、「出土琴の研究」（1）、「放送大学研究年報」第12号、1994年。
- 7) 弥生中・後期の柾作りの琴は、これまでに以下の遺跡からの出土が知られている（ただし、弥生後期末以降のものは省く）。彦根市松原内湖遺跡（弥生中期か。滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会、「松原内湖発掘調査報告書II」、1992年）・前原市上鍬子遺跡（弥生中期後葉～後期。前原市教育委員会、「上鍬子遺跡——みえてきた伊都国人のくらし 出土木製遺物の概要——」、1996年。同遺跡からはもう一点柾作りの琴が出土している）・草津市中沢遺跡（弥生後期。（財）滋賀県文化財保護協会、「滋賀文化財だより」第118号、1987年9月）・東大阪市新家遺跡（弥生後期、二点。大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター、「新家（その1）——近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書——」、1987年。（財）大阪文化財センター、「新家（その2）——近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書——」、1984年）・春日市辻田遺跡（弥生後期、二点。福岡県教育委員会、「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第12集 春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査」、1979年）。
- 8) （財）長生都市文化財センター、「千葉県茂原市国府関遺跡群」（（財）長生都市文化財センター調査報告書第15冊）、1993年。
- 9) 福岡県教育委員会、「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第12集 春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査」。
- 10) 金沢市・金沢市教育委員会、「西念・南新保III」、1992年。
- 11) 滋賀県埋蔵文化財センター、「滋賀埋文ニュース」第121号、1990年4月。
- 12) 杉本源蔵、「市三宅東遺跡出土の琴状木製品」、「滋賀考古」創刊号、1989年3月。滋賀県埋蔵文化財センター、「滋賀埋文ニュース」第101号、1988年8月。
- 13) 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会、「笠原南遺跡発掘調査報告書」、1987年。
- 14) 田海義正、「刈羽村西谷遺跡出土の木製琴」、「新潟考古学談話会報」第1号、1988年。
- 15) （財）滋賀県文化財保護協会、「滋賀文化財だより」第201・202号、1994年11月。
- 16) 山崎和文、「調査ノート 出土琴に見る和琴成立への可能性」、「佐賀県立博物館・美術館報」No.110、1995年8月。

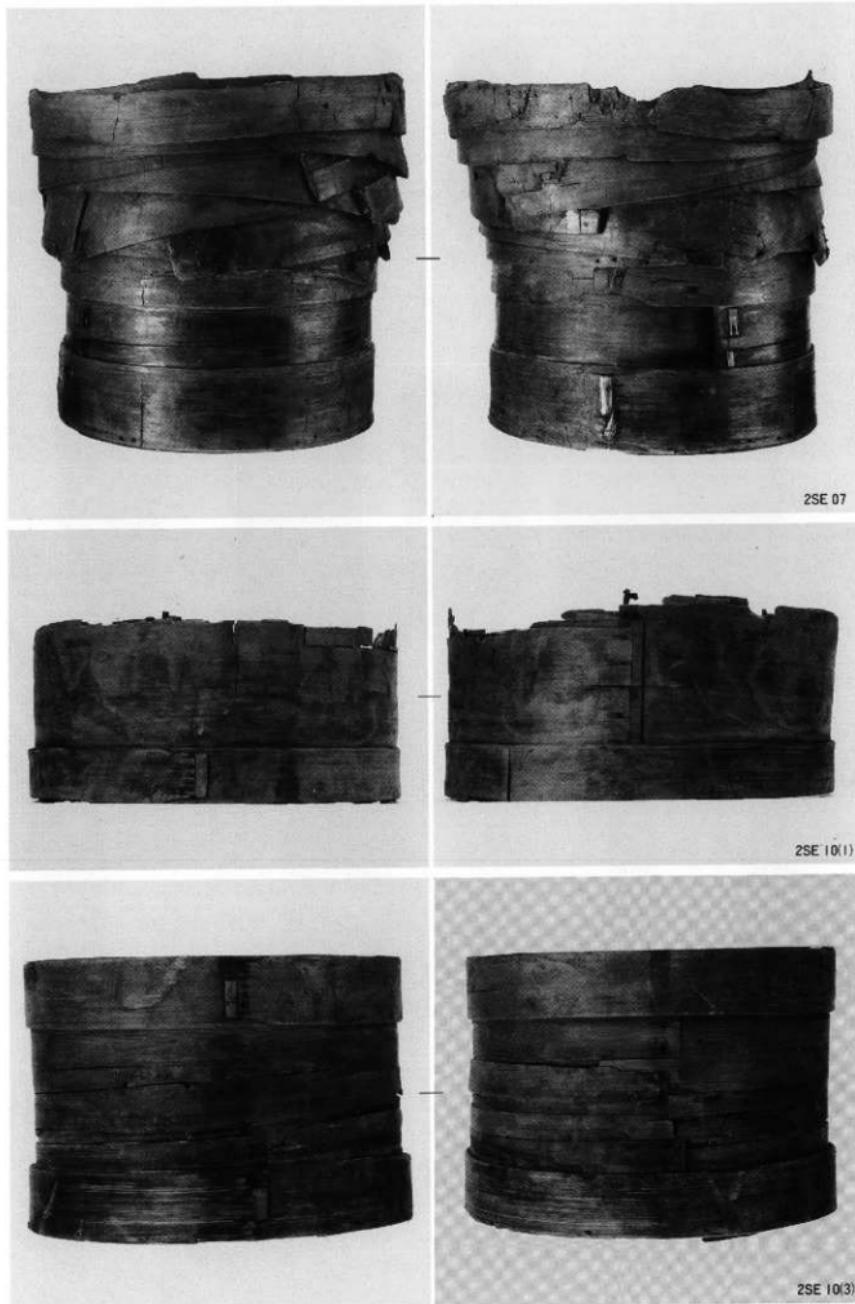
- 17) 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会、「服部遺跡発掘調査報告書——滋賀県守山市服部町所在——」、1984年。
- 18) 湖西線関係遺跡調査団・田辺昭三、「湖西線関係遺跡調査報告書」、1973年。
- 19) 数値は、佐賀県立博物館の山崎和文氏の計測による。
- 20) 乗岡実・武田恭彰・草原孝典、「南方釜田遺跡出土の古墳時代琴」、『考古学雑誌』第72巻4号、1987年4月。
- 21) 西村歩、「古墳時代木器の一様相——堺市下田遺跡の調査成果より——」、「第12回近畿地方埋蔵文化財研究会資料」、1994年。(財)大阪府文化財協会、「第9回泉州の遺跡展——平成5年度発掘調査成果・堺市下田遺跡の銅鐸と木製品——」展図録、1994年。
- 22) 『アサヒグラフ』1995年12月29日付け増大号。
- 23) 消失した両側端の突起のうち、一方の突起の付け根の線だけが、他の突起間の付け根の線よりも先端寄りに突出しているように見えるが、これは現存する突起間の付け根の線が腐食によって深まつたためであって、元来の突起の付け根の線は全体にもう少し先端寄りに位置していたものと思われる。
- 24) 六突起であったことが確認されるのは、前述の辻田(二点。一点は出土時の写真により確認)、西念・南新保、国府闇、下長、南方釜田、服部の各遺跡から出土した琴である。
- 25) 篠山町教育委員会、「古代祖先の歩み」、1980年。
- 26) 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会、「森浜遺跡発掘調査報告書」。兼康保明、「古代の琴」。
- 27) 横原市千塚資料館、秋期特別展「古代の琴」展図録、1992年、ほか。
- 28) 兵庫県教育委員会、「出石町特許遺跡遺物説明会資料」、1991年。
- 29) 大場磐雄・乙益重隆編、「上総菅生遺跡」、中央公論美術出版社、1980年。大場磐雄、「菅生発見の『やまとごと』」(上・下)、季刊「ドルメン」、1973年、9月号、11月号。
- 30) 奈良国立文化財研究所、「飛鳥・藤原京発掘調査報告III」、1980年。奈良国立文化財研究所、「木器集成図録 近畿原始篇」。
- 31) 抽横、「出土琴の研究」(1)。
- 32) 四条大田中から出土した二点の棒状琴のうち、琴頭部が残るものは、平滑面から孔を途中まで開け、側方からも孔を開けてこれと連結し、弦を側方の孔から出して琴頭に結び付けたことを推測させるような集弦構造を取っている(側方の孔から挿入した糸巻き状の棒に弦を巻き付けたとも解釈される)。他の一点は、琴頭部を欠損している。葭池北遺跡出土のものは孔を平滑面から裏面に貫通させただけであり、森浜遺跡出土のものと特許遺跡出土のものは琴頭部を欠失しているため、集弦構造は不明である。
- 33) 棒作りの琴の多くは六突起であり、構造的にも類似し、大きさも1mを超えるものが大半であるのに対し、板作りの琴には四突起のものと六突起のものが混在し、外形も多様である。作り方も、小黒遺跡出土琴の集弦孔の開け方が未熟な点や布留遺跡出土琴の突起付け根の線が不揃いな点に見られるように、垢抜けない面がある。
- 34) この可能性は、愛知県埋蔵文化財センターの石黒立人氏から指摘された。
- 35) 布留遺跡出土琴の突起も、同様の細さである。

(追記)

本稿校正中に、島根県八雲村前田遺跡から五突起の棒作りの琴(古墳後期)がほぼ完形で出土した。

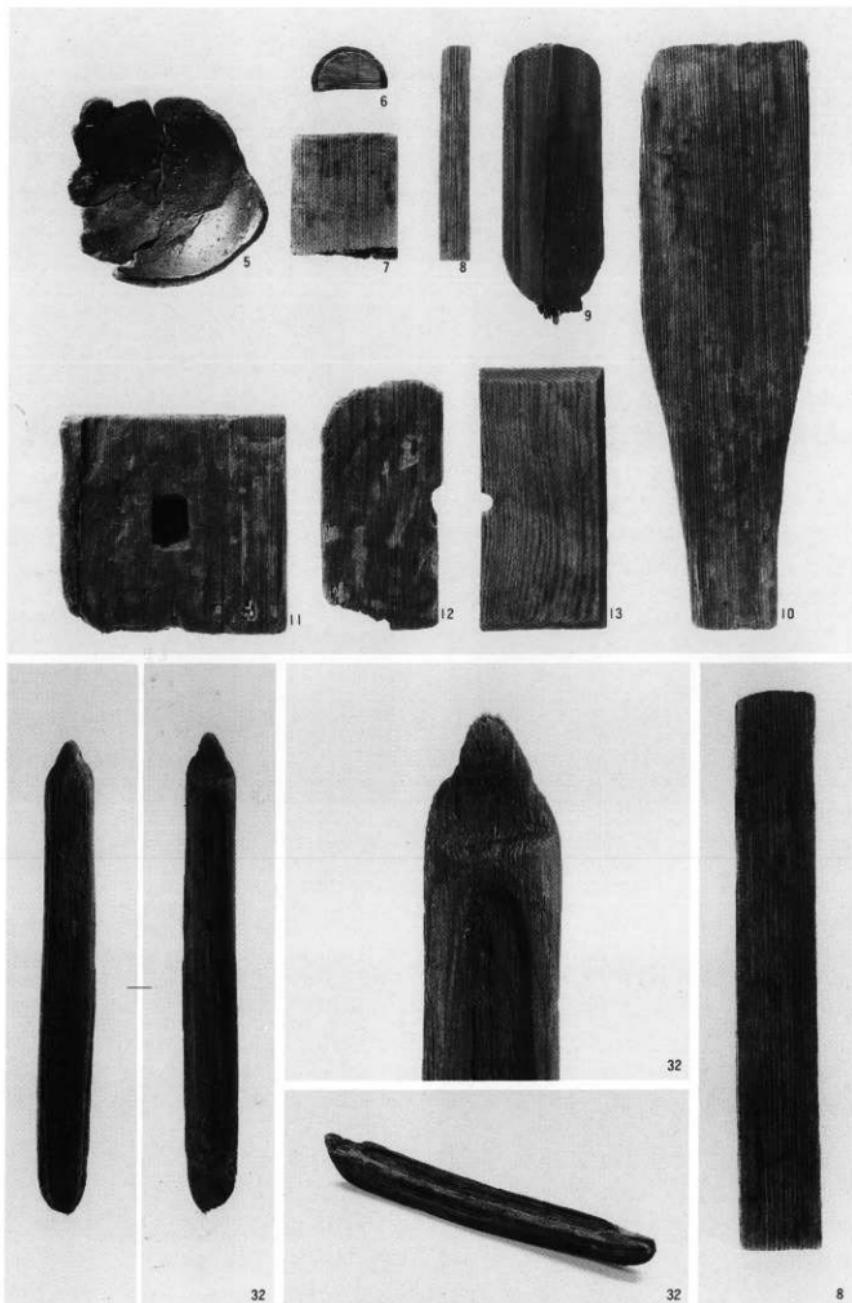
図 版

(写 真)

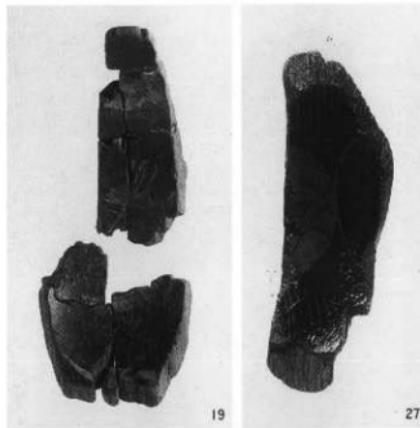


曲物井戸（2SE 07・2SE 10下層）出土木製品

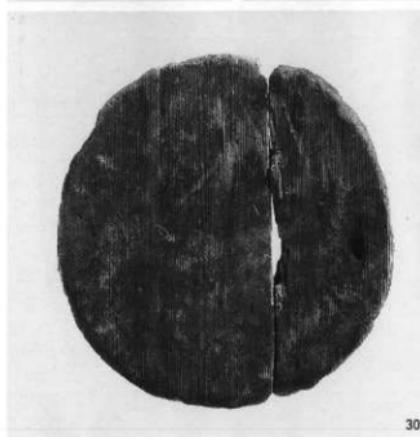
図版2



素堀井戸 (4SF 01) 出土木製品・木簡及び舟形木製品



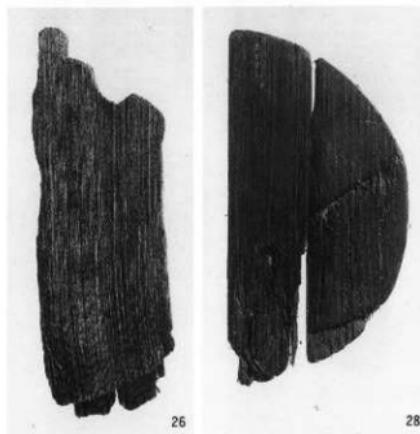
15



30



14



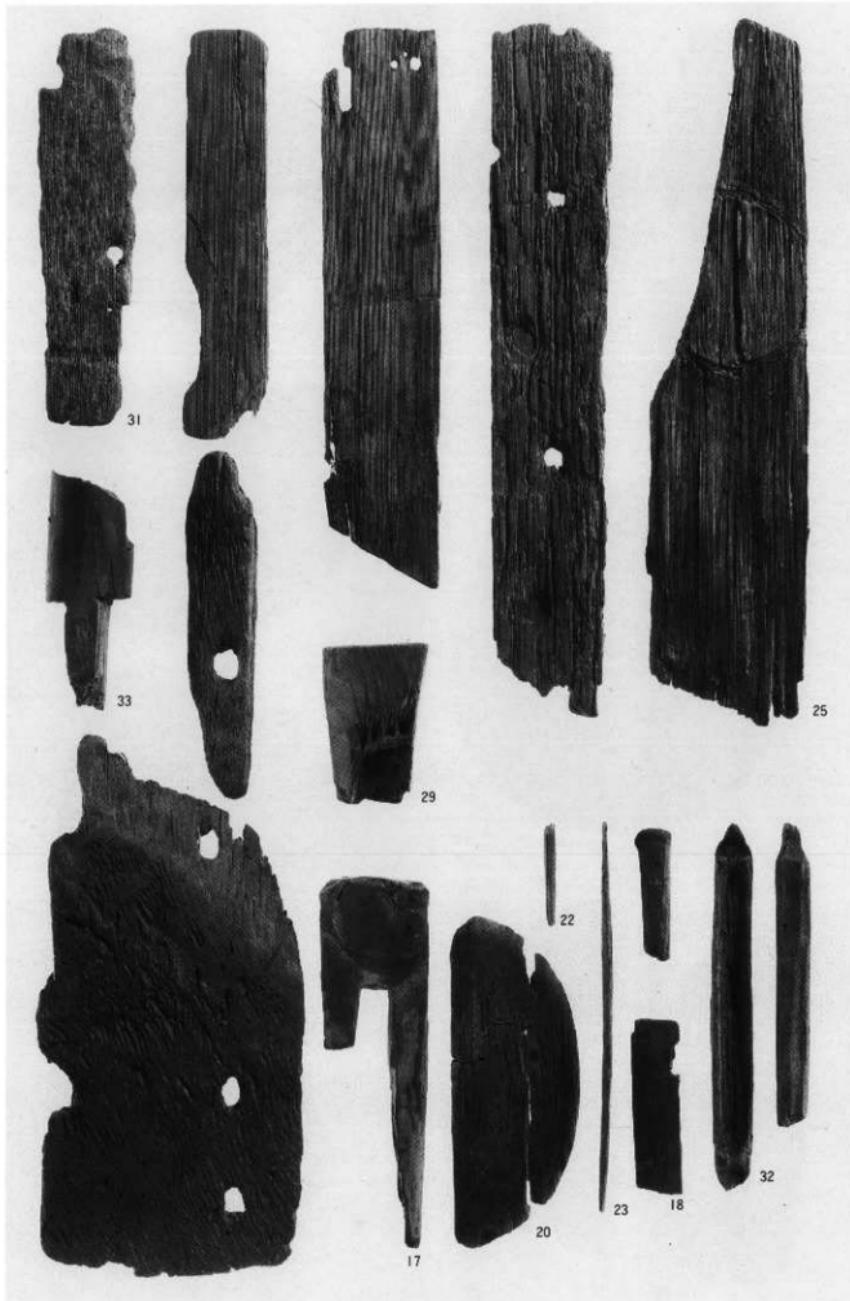
28



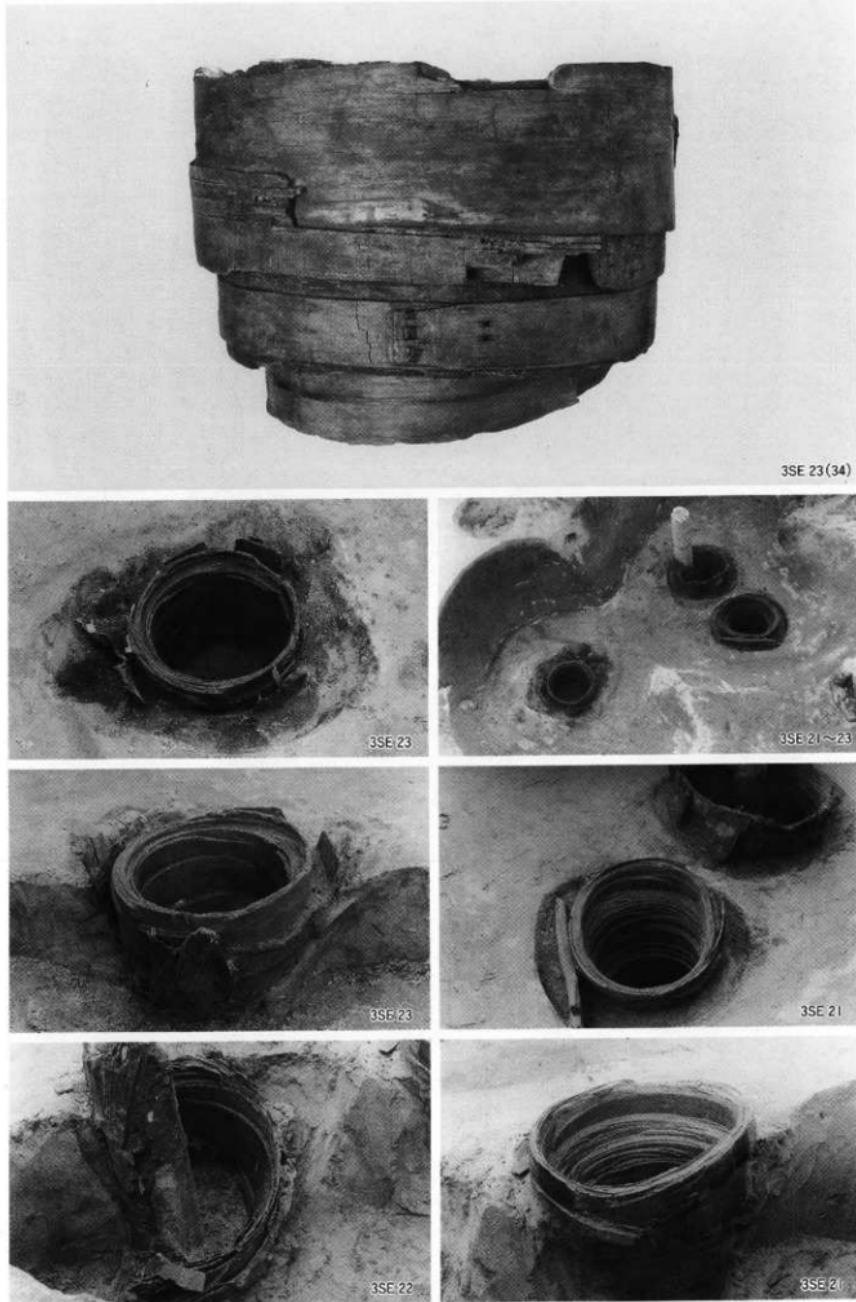
5

中世造構・包含層出土木製品（漆椀・曲物）

図版 4

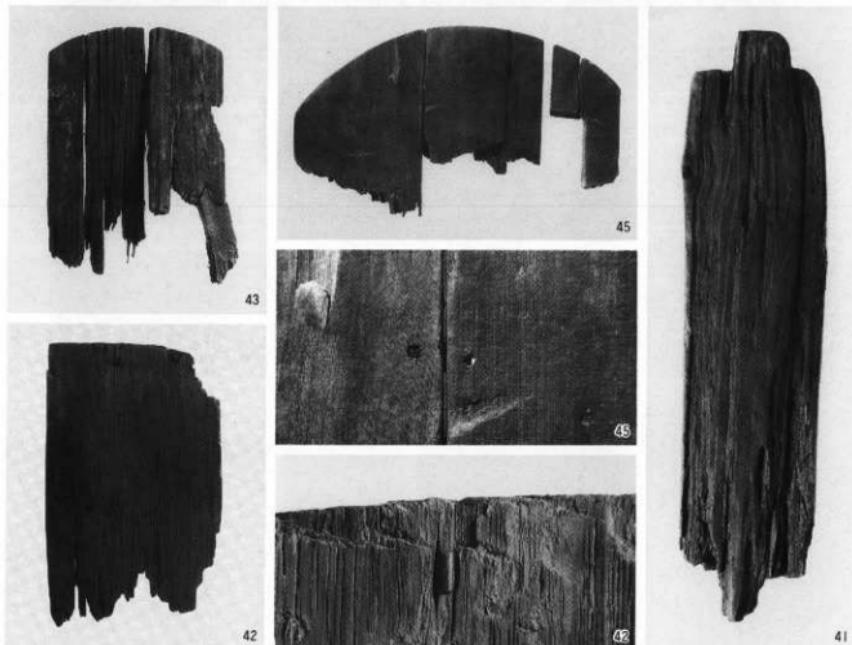
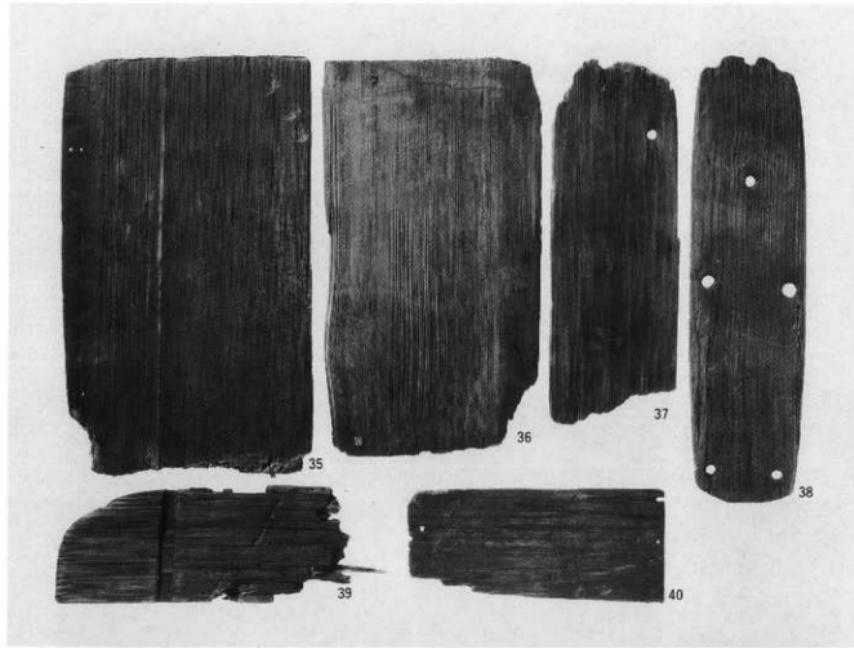


中・近世遺構・包含層出土木製品

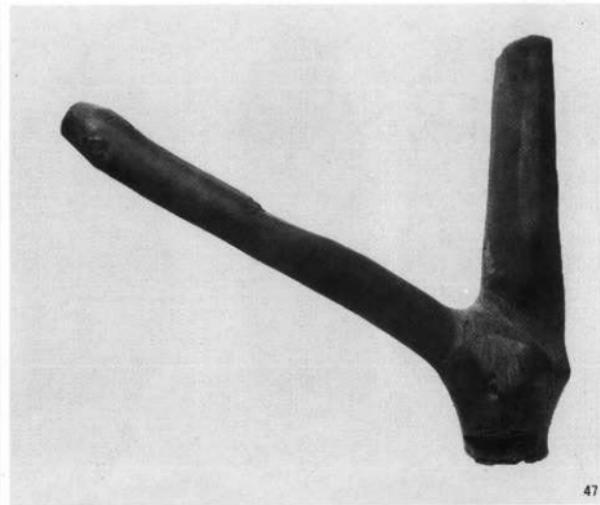
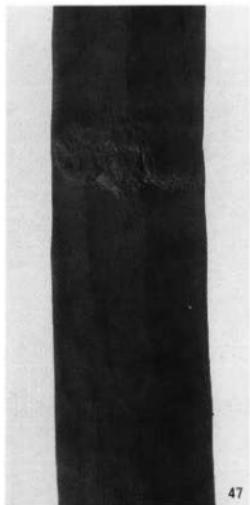


曲物井戸（3SE 23）、曲物井戸（3SE 21~23）検出状況

図版 6

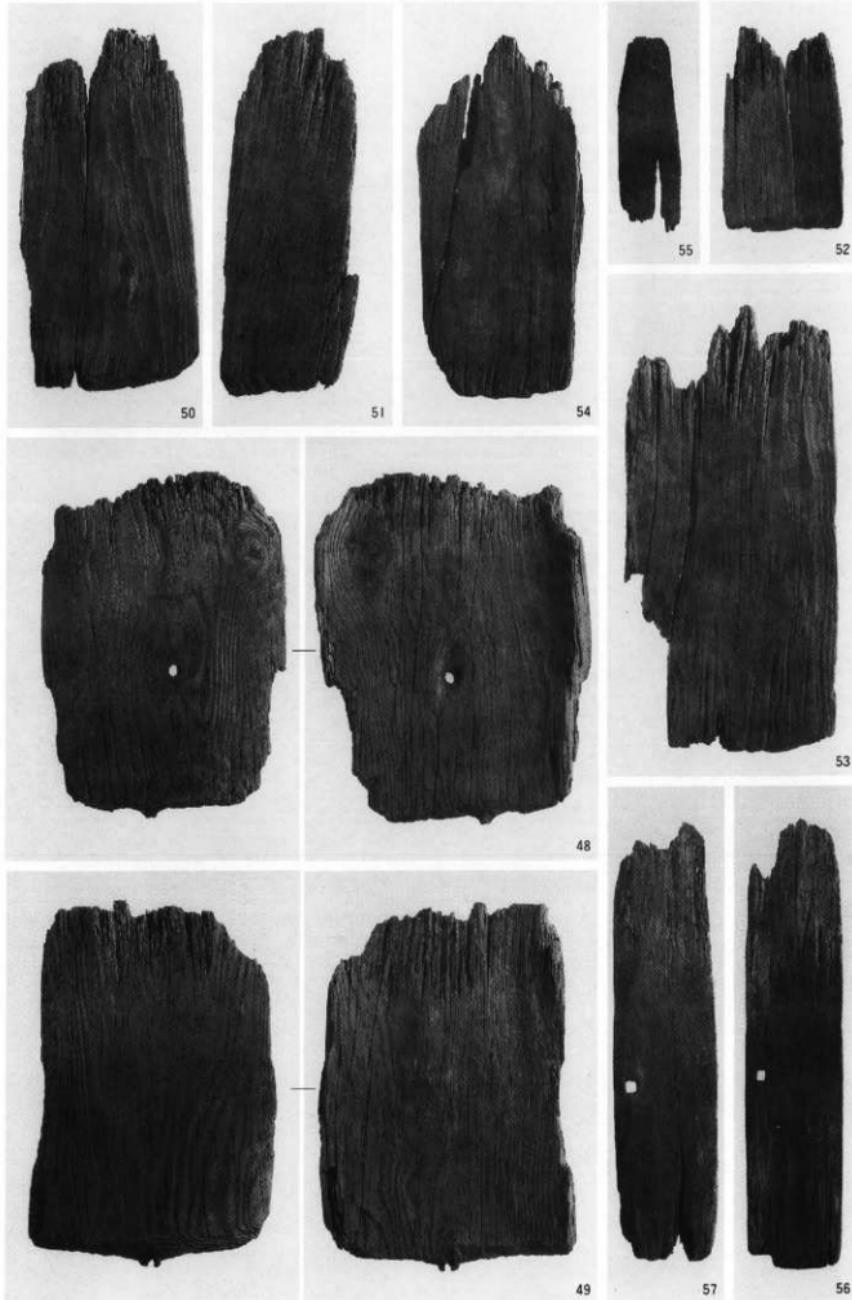


曲物井戸 (3SE 21~23) 出土木製品

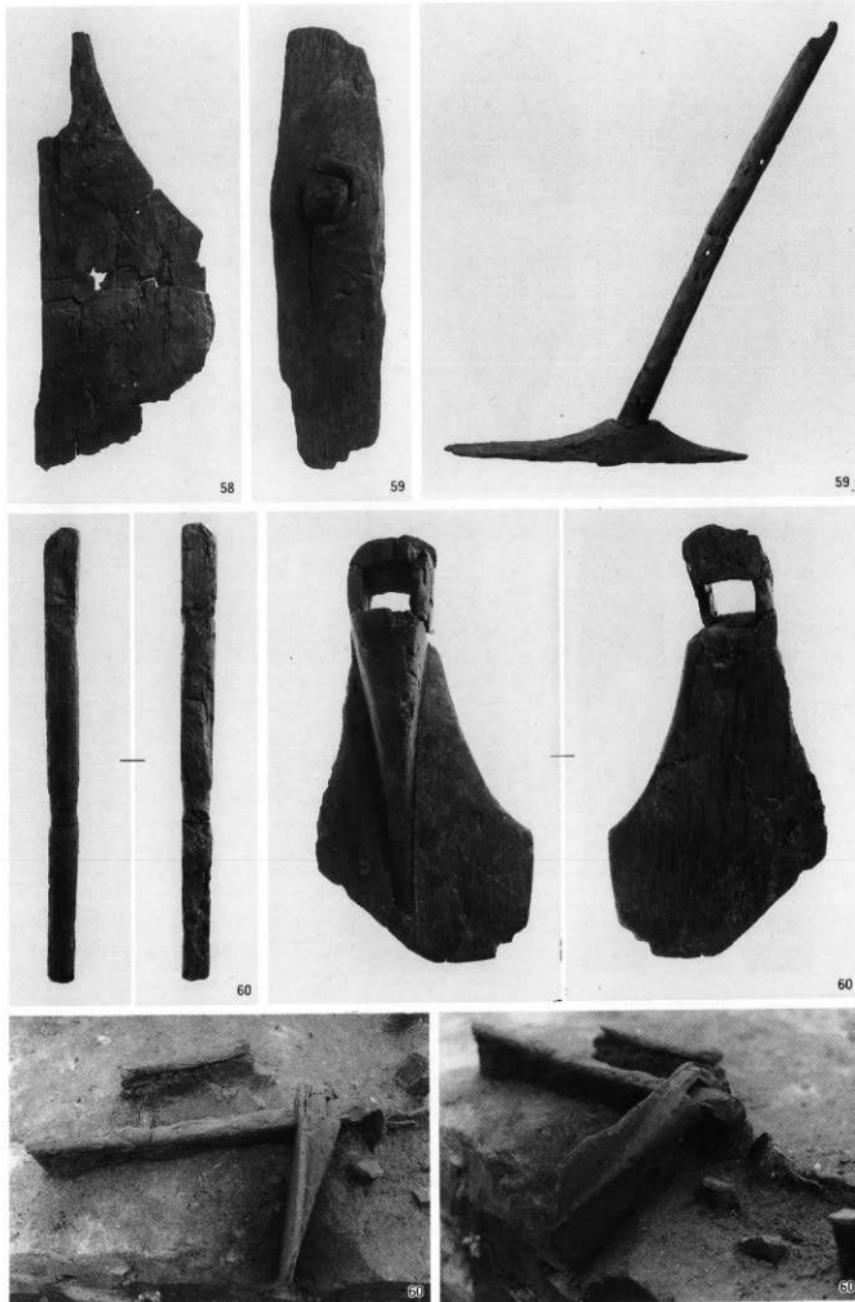


素堀り井戸（9SF 25）出土木製品・出土状況、削り貫き井戸（3SE 04）検出状況

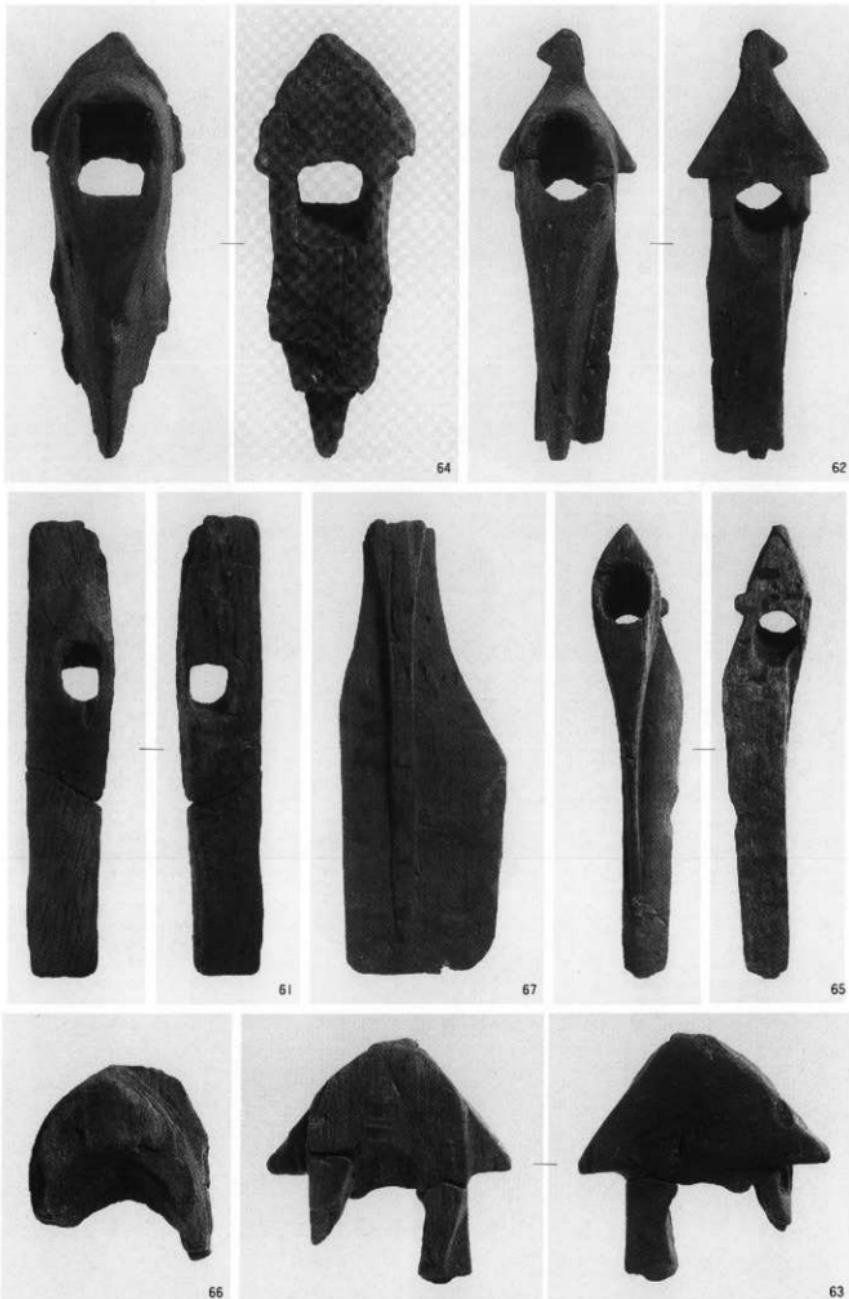
図版 8



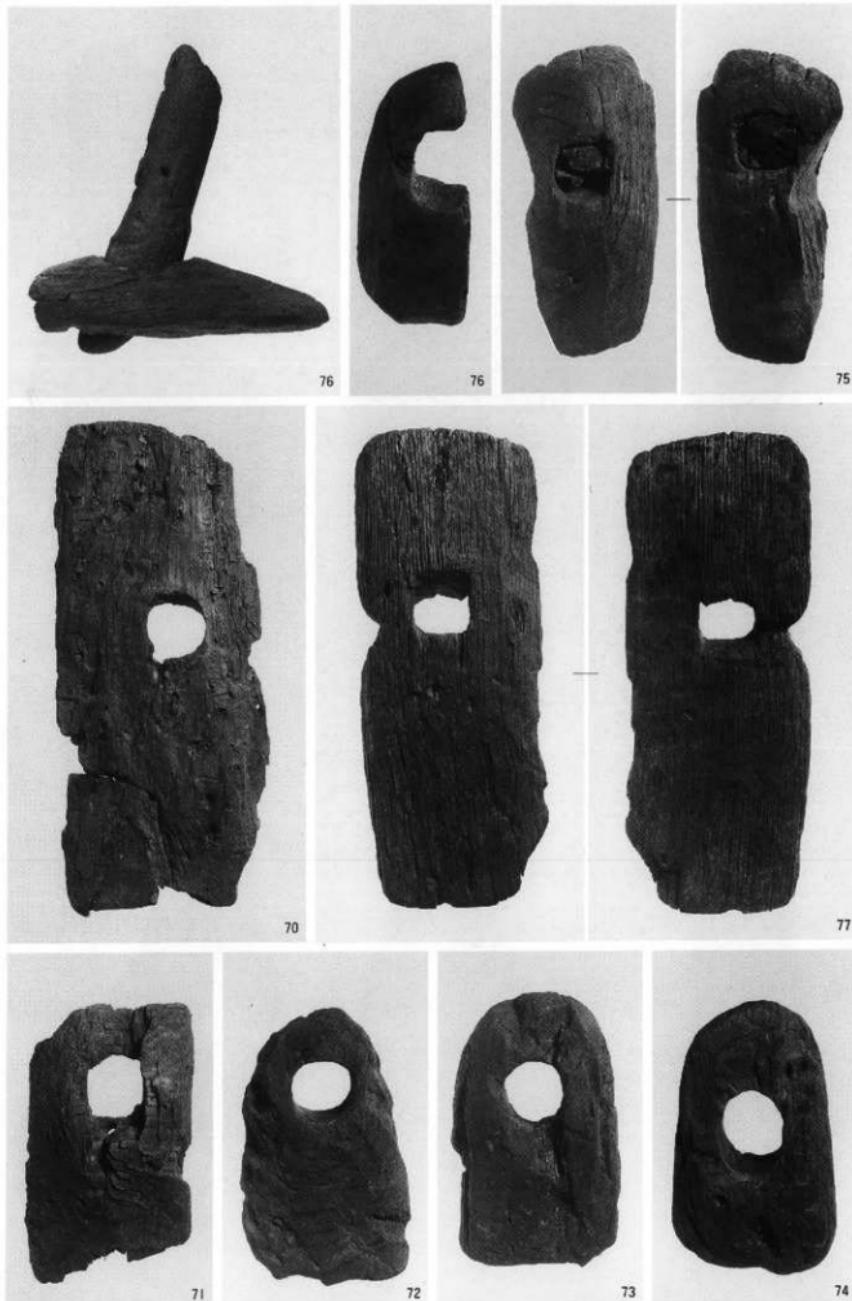
刺り貫き井戸（3SE 04）出土木製品



農具（直柄平鋤）、平鋤（60）出土状況



農具（直柄平鋤）



農具（直柄平鋤）



69



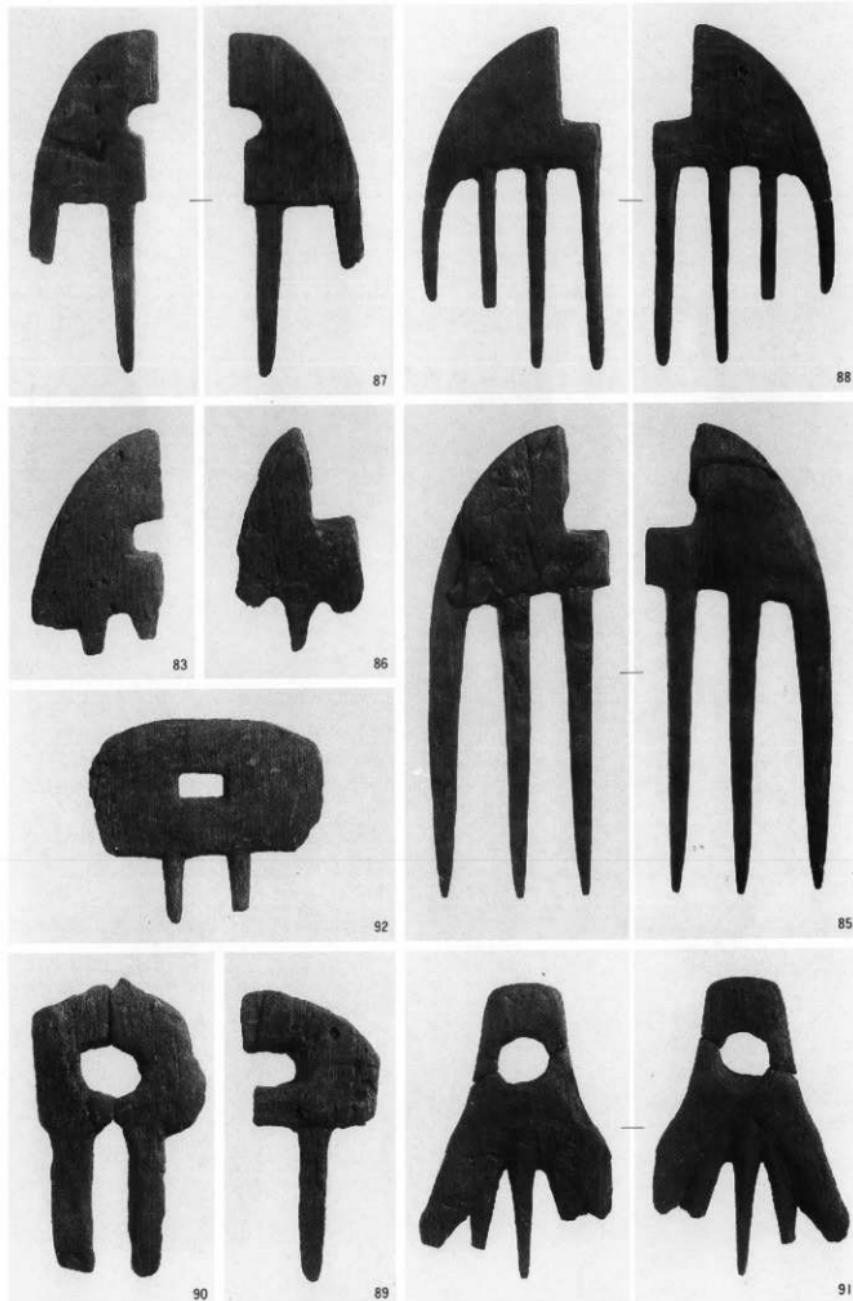
78



68

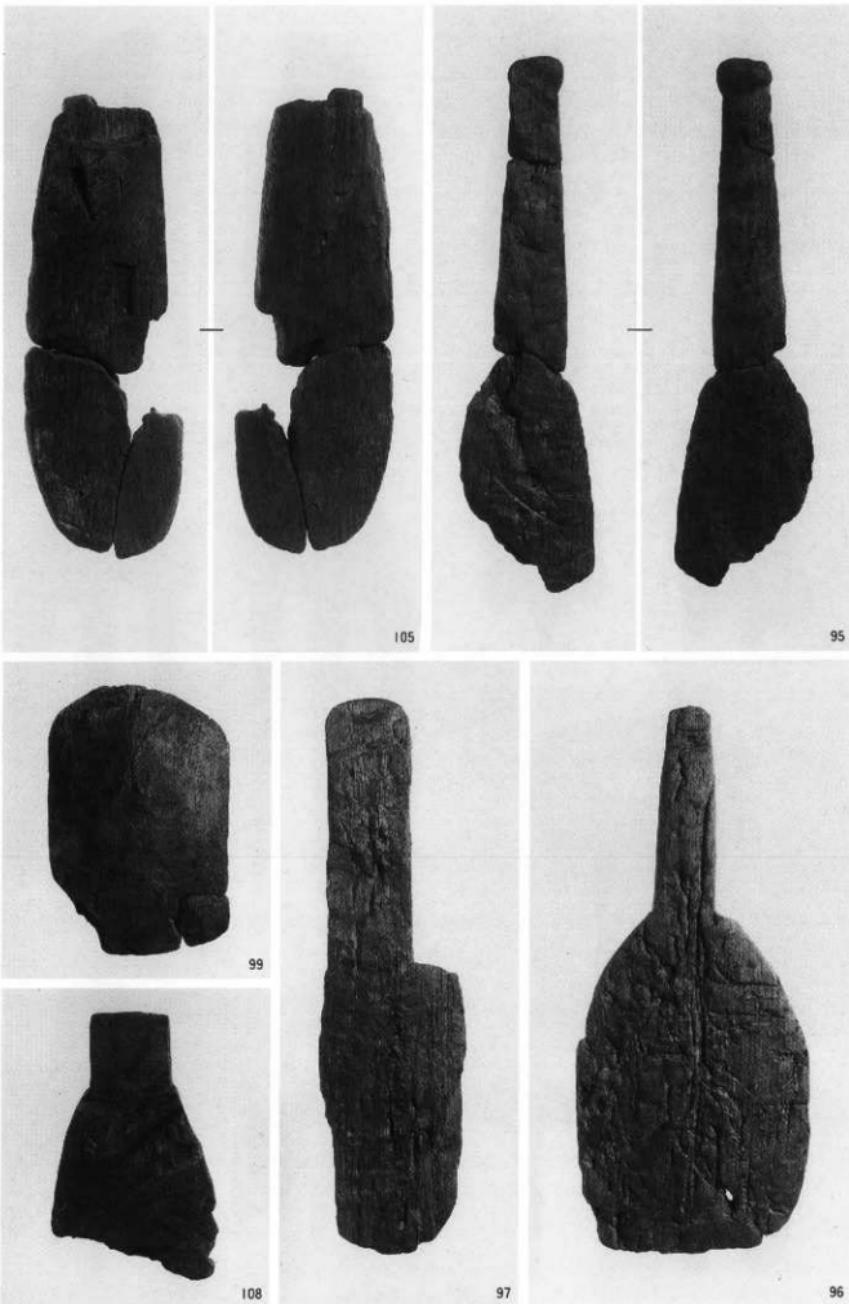


79

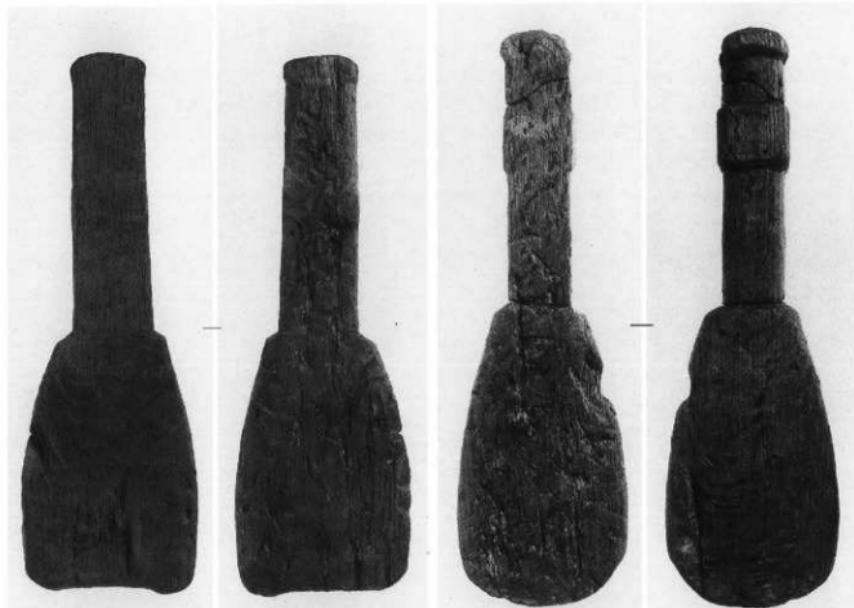


農具（直柄又鋤）

図版14

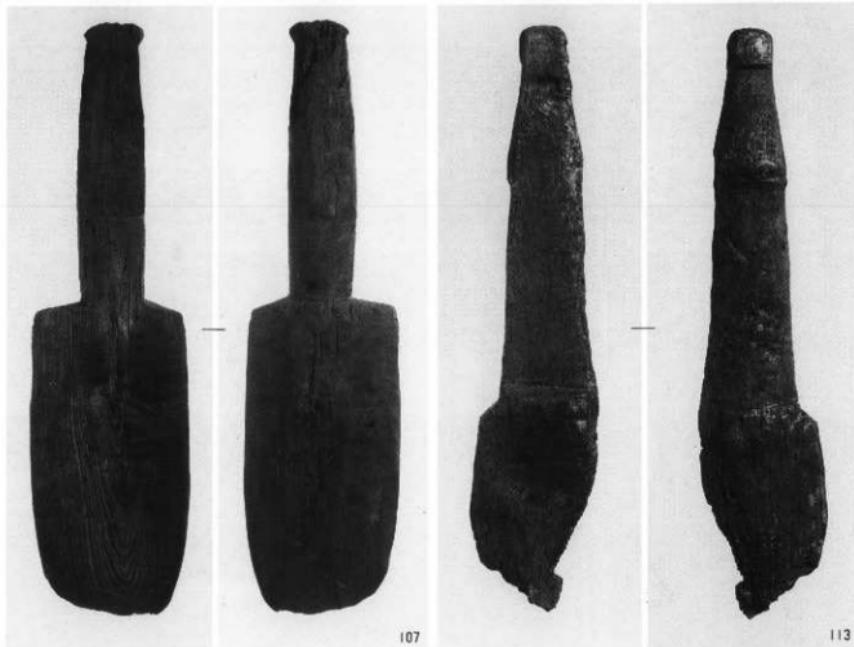


農具（曲柄平鉈）



106

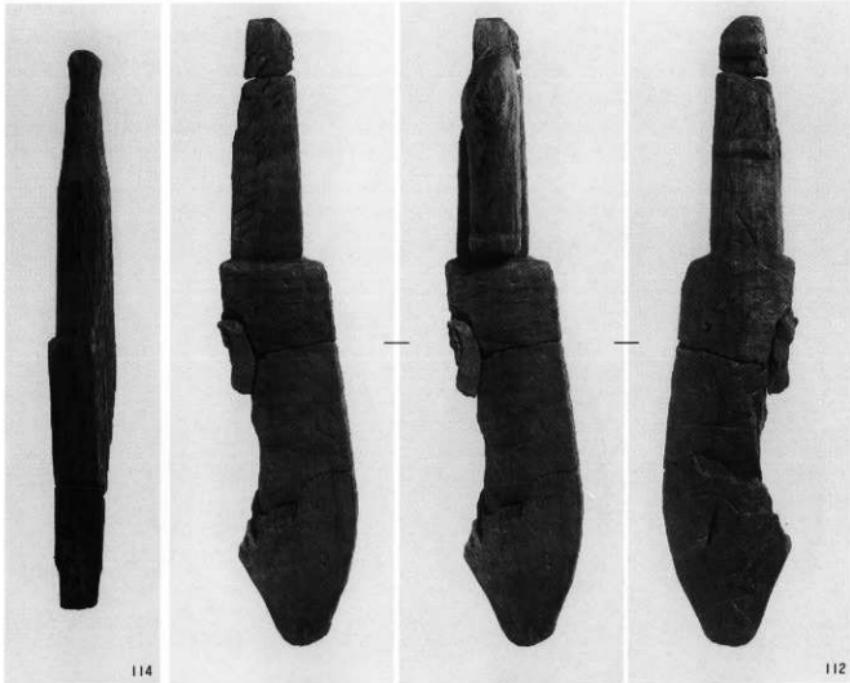
111



107

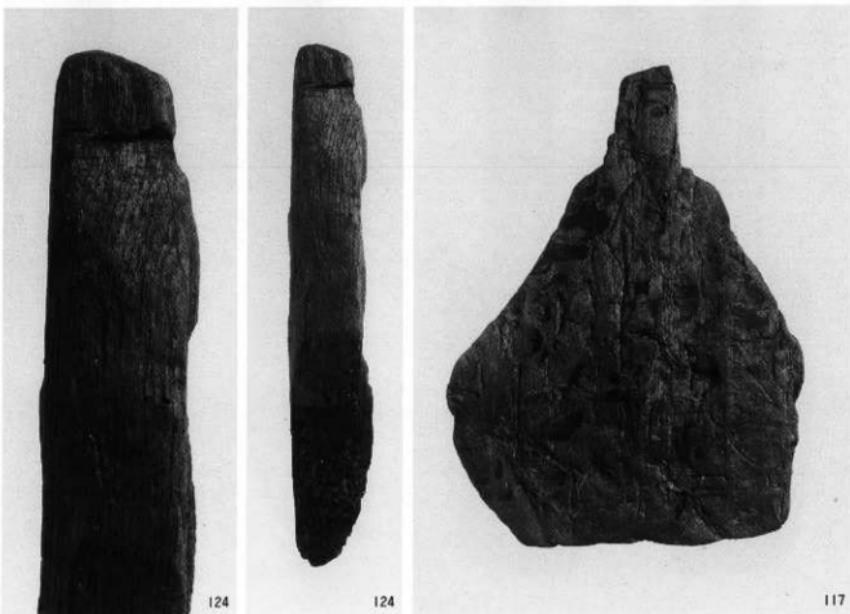
113

農具（曲柄平鋤）



114

112



124

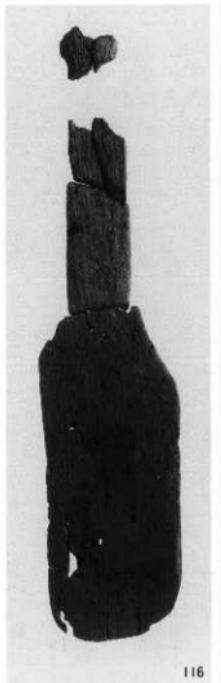
124

117

農具（曲柄平鋤）



115



116



120



121

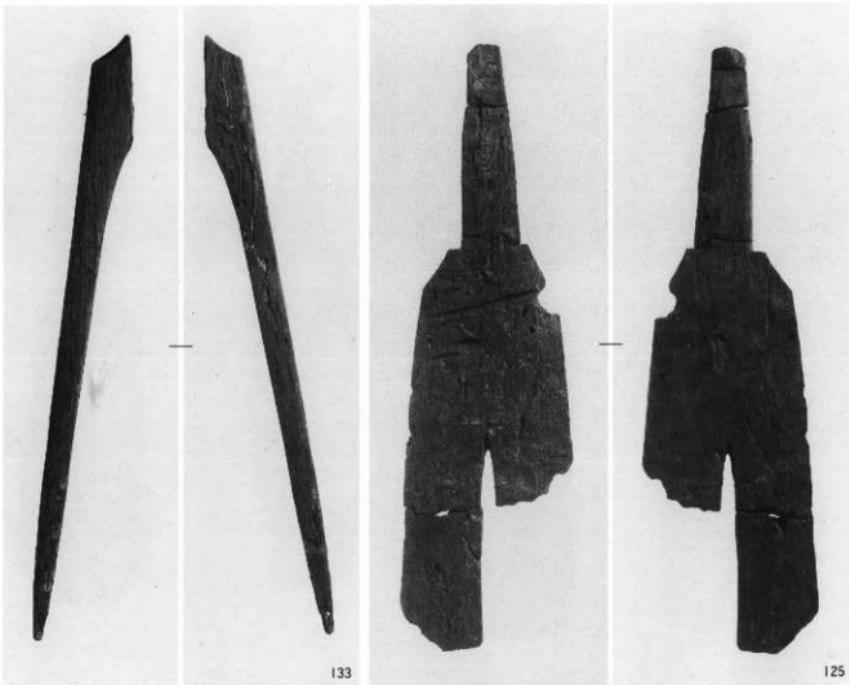


119



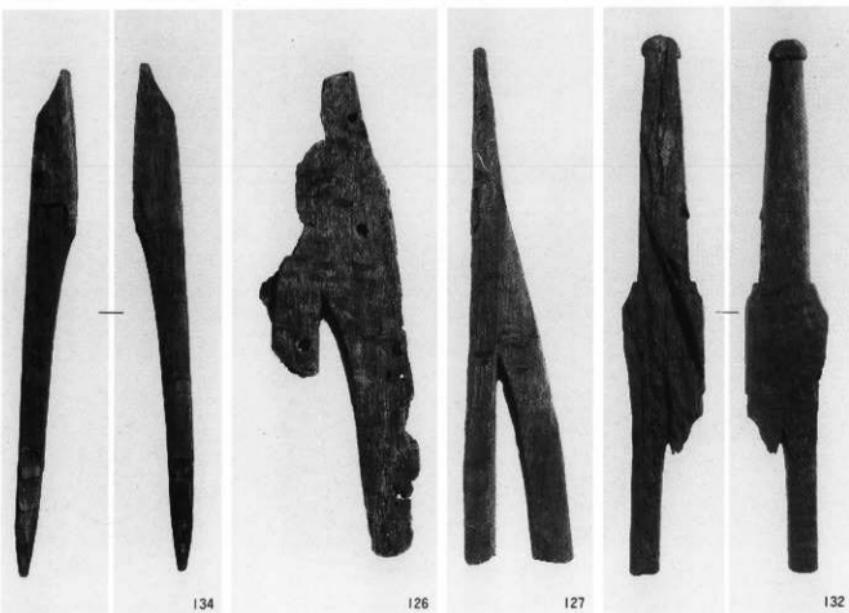
122

農具（曲柄平鋤）



133

125



134

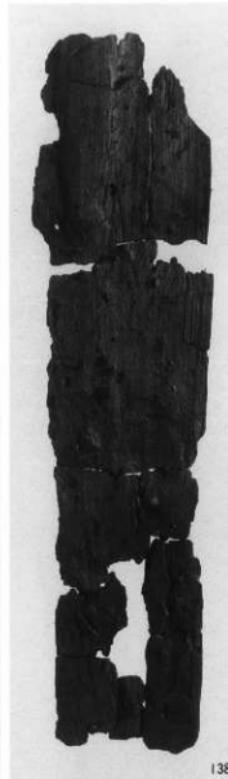
126

127

128



140



138



141



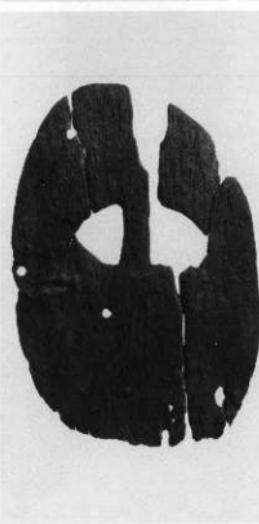
142



139

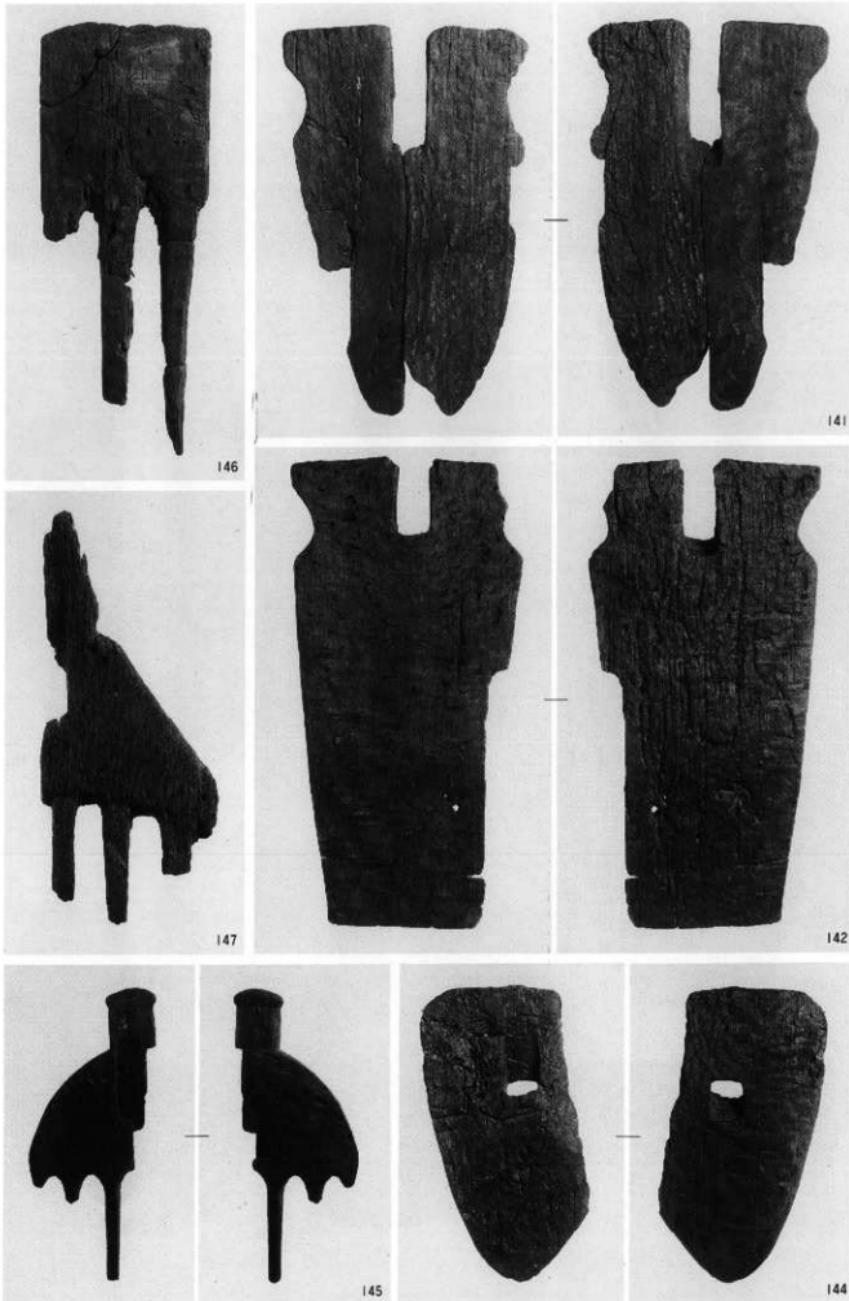


144

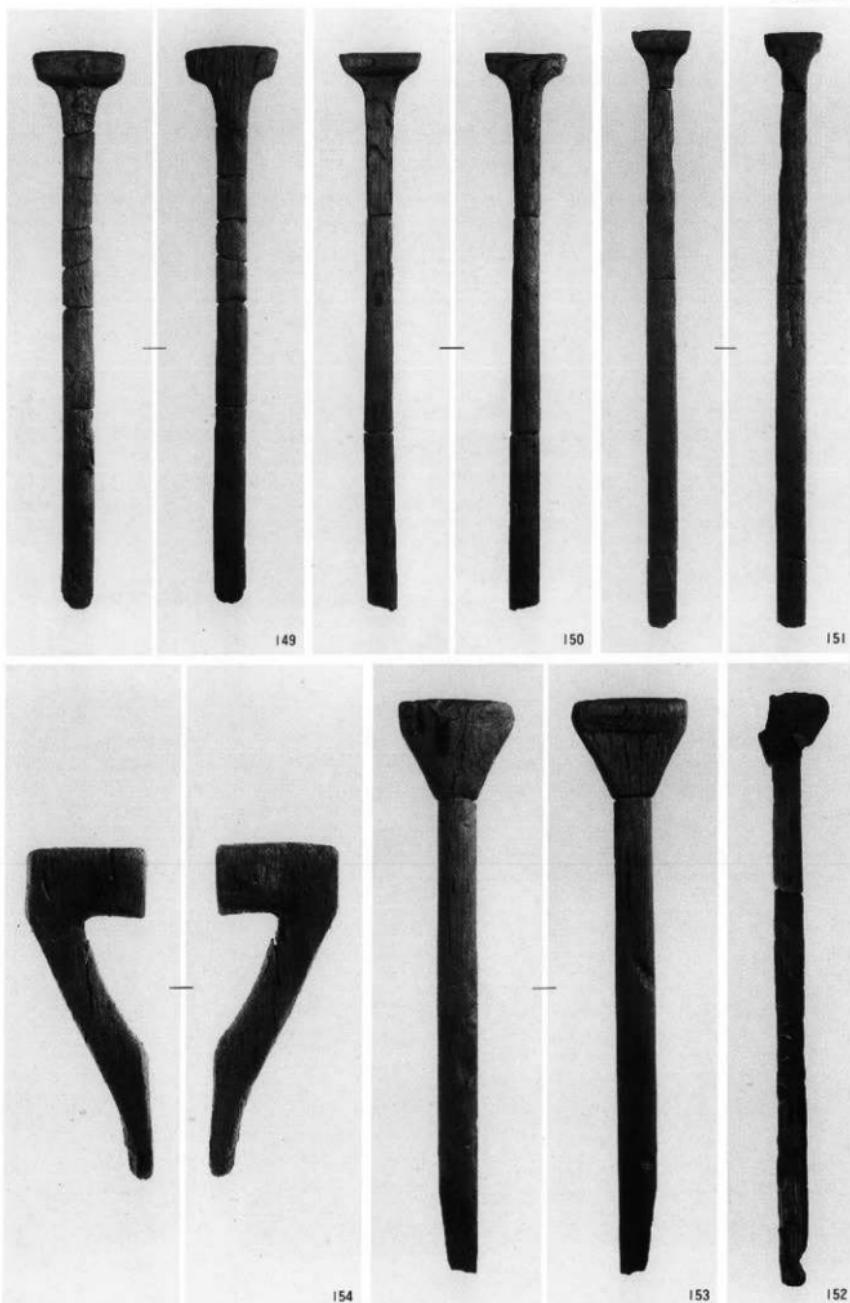


143

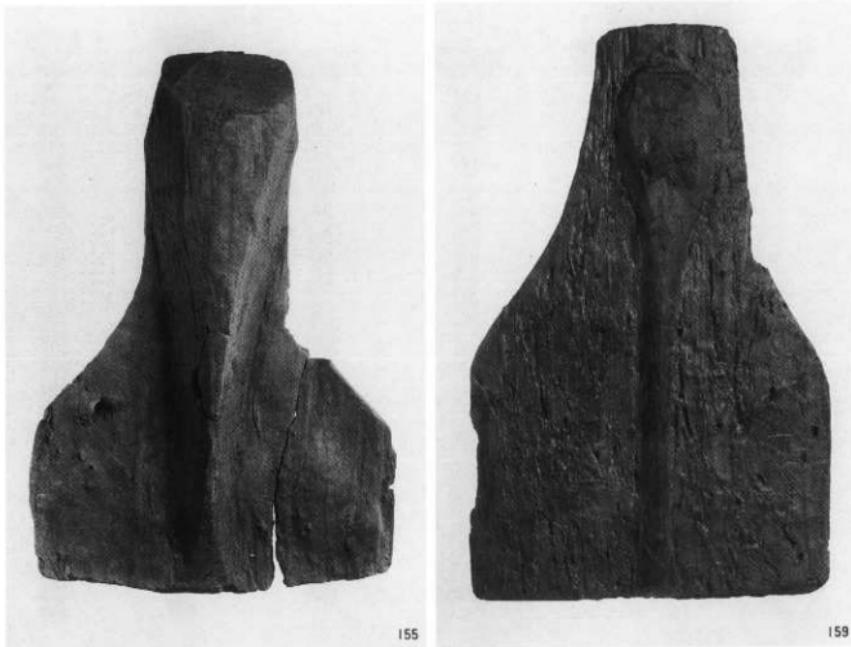
農具（一木鋤・組み合わせ平鋤）



農具（組み合わせ平鋤・又鋤）



農具（鋤の柄）



155

159



156

157

農具（未製品）



160



162



163



158

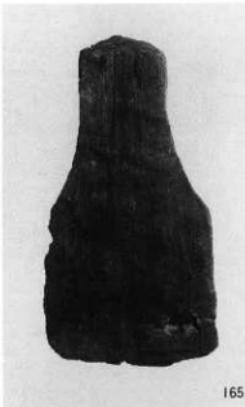


168



169

農具（未製品）



農具（未製品）



171



176



180



181



172



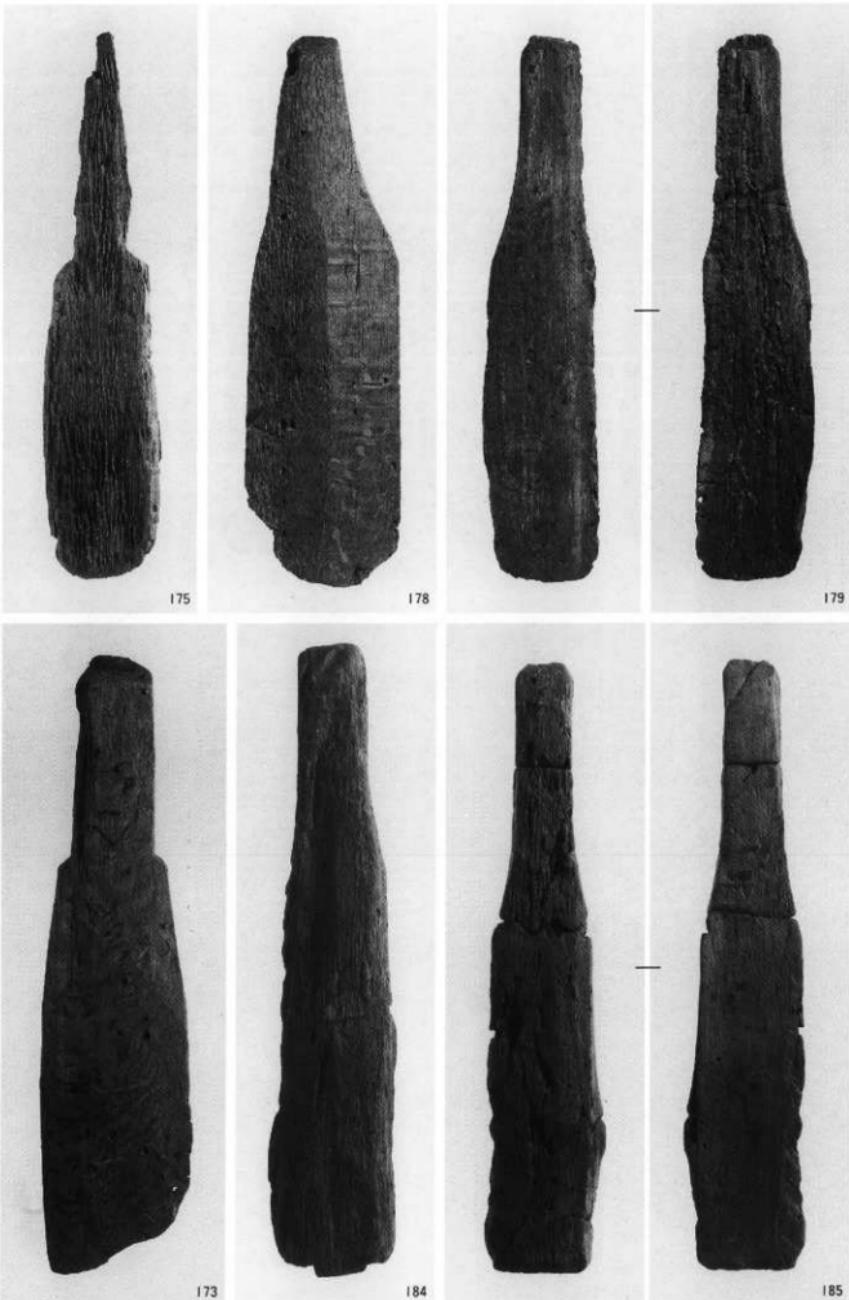
177



183



182



農具（未製品）



186



189



192

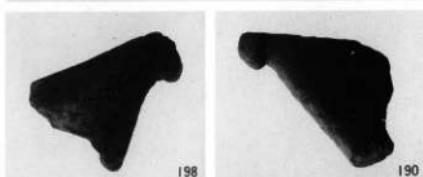
206



188



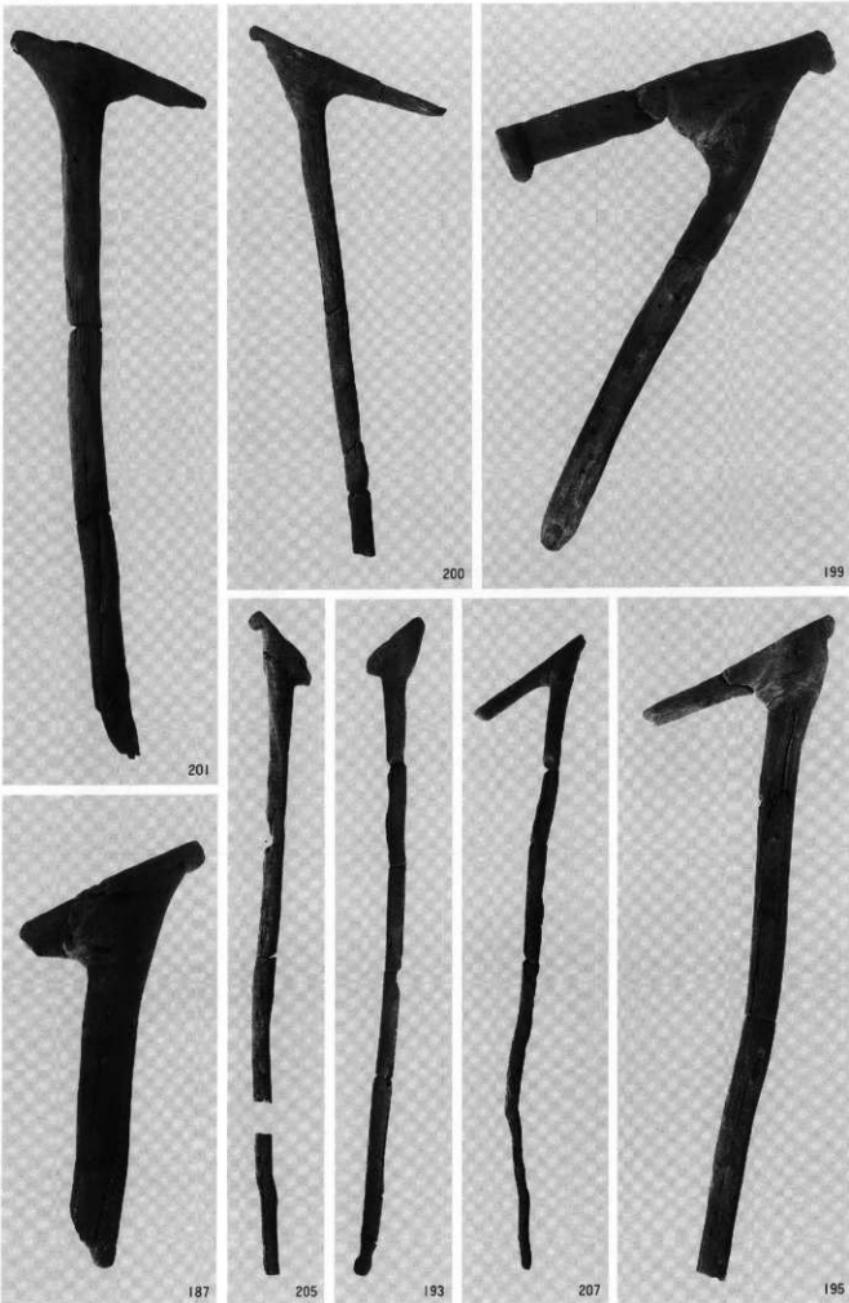
191



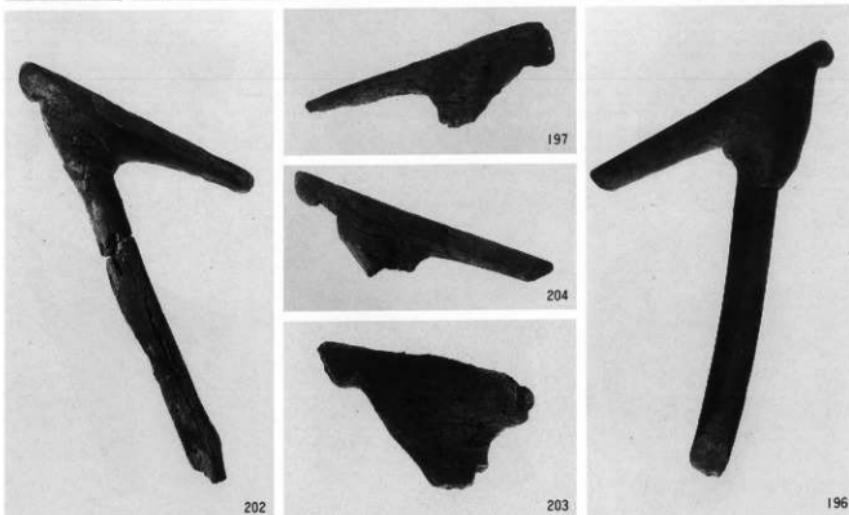
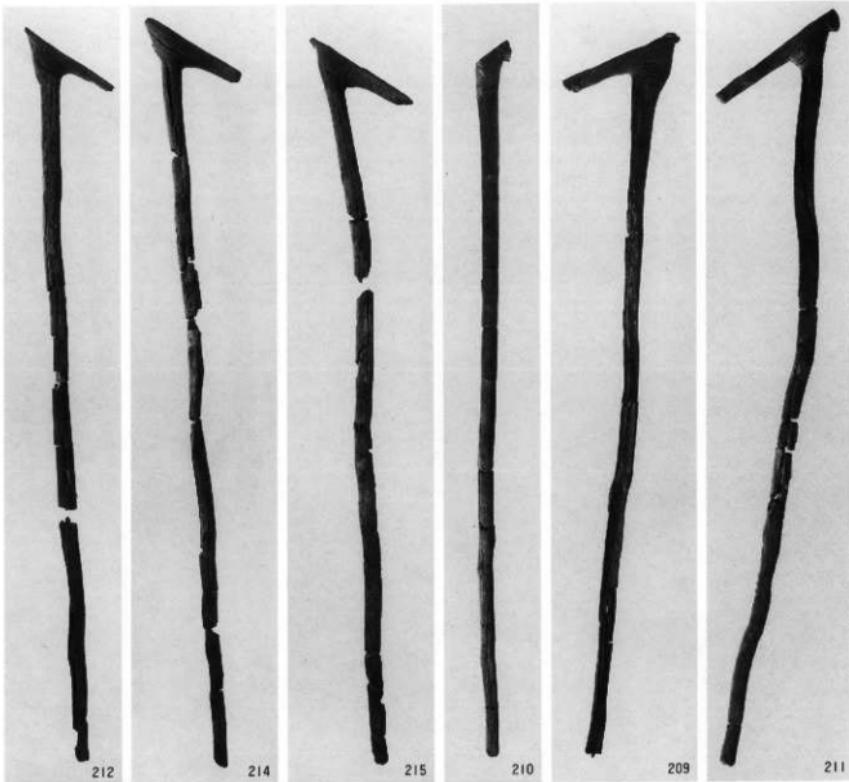
198

199

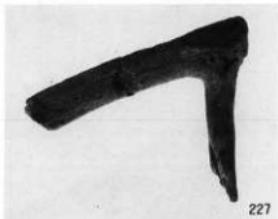
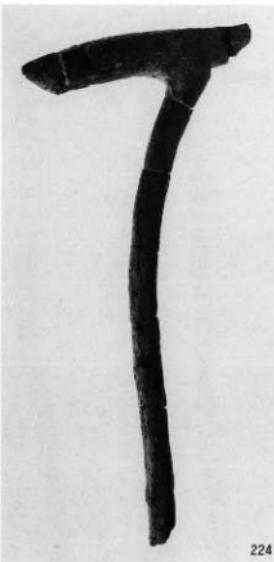
農具（曲柄）



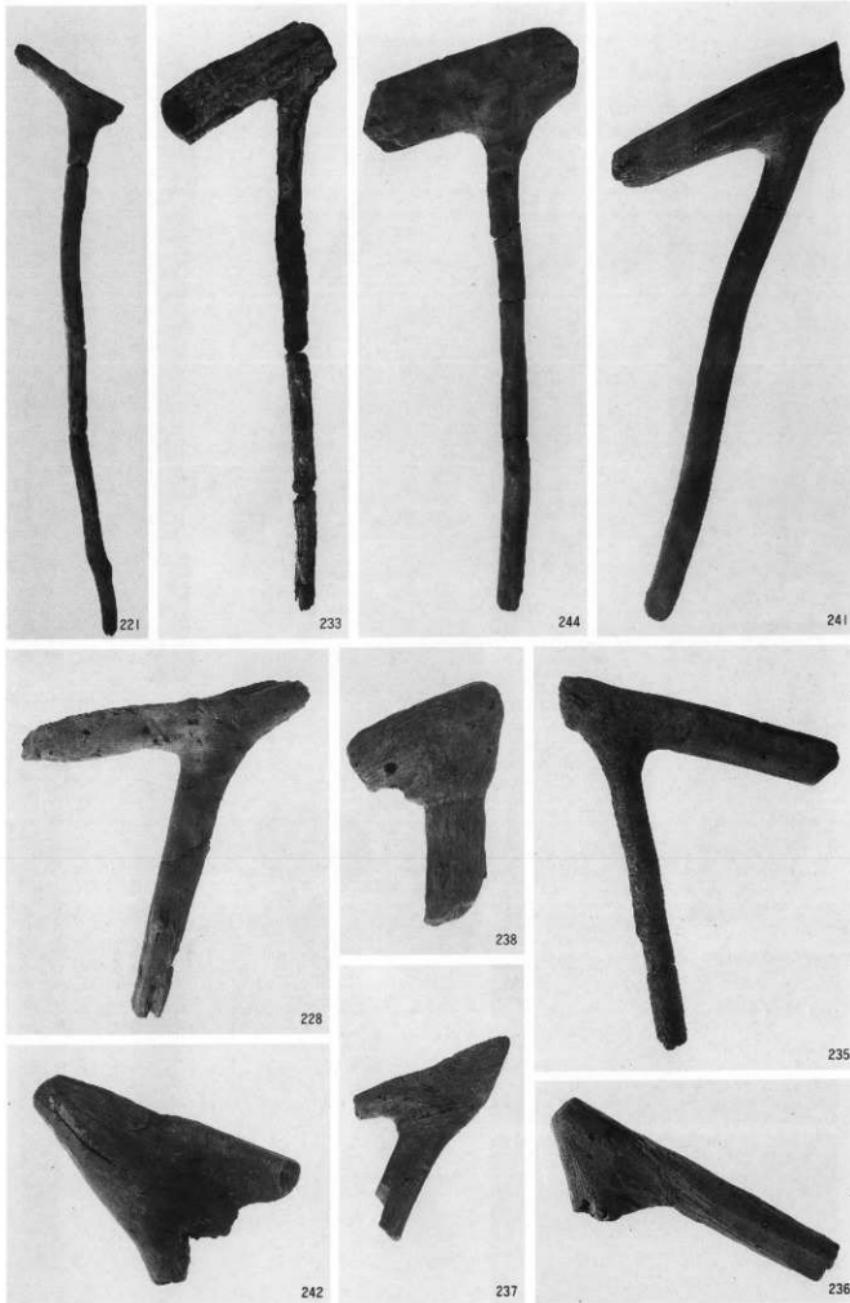
農具（曲柄）



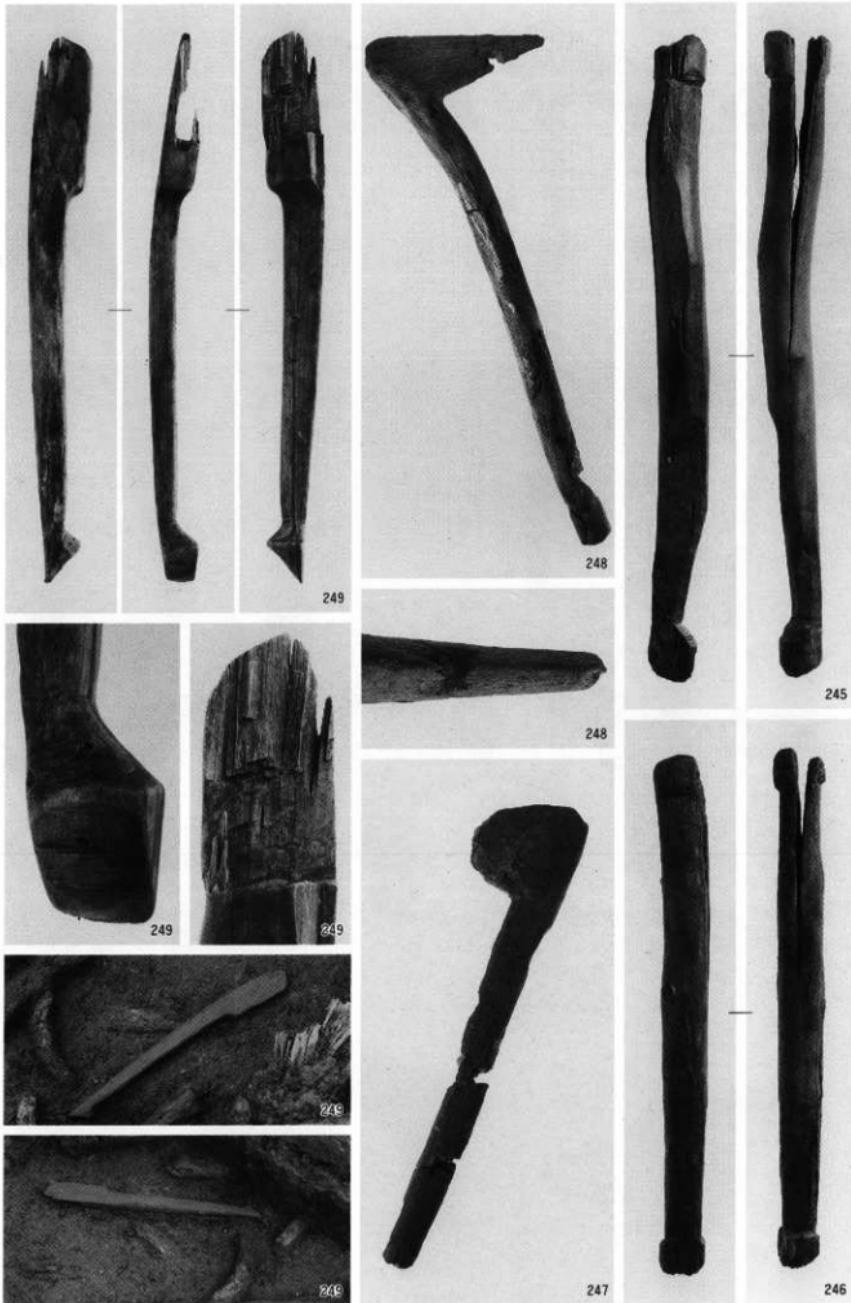
農具（曲柄）



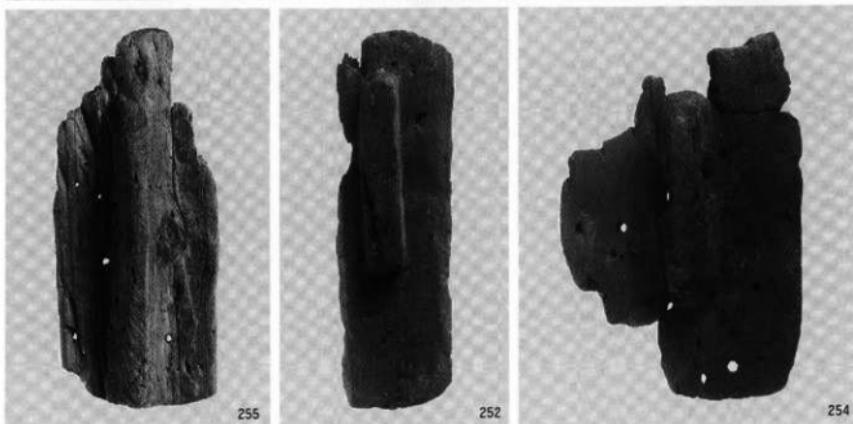
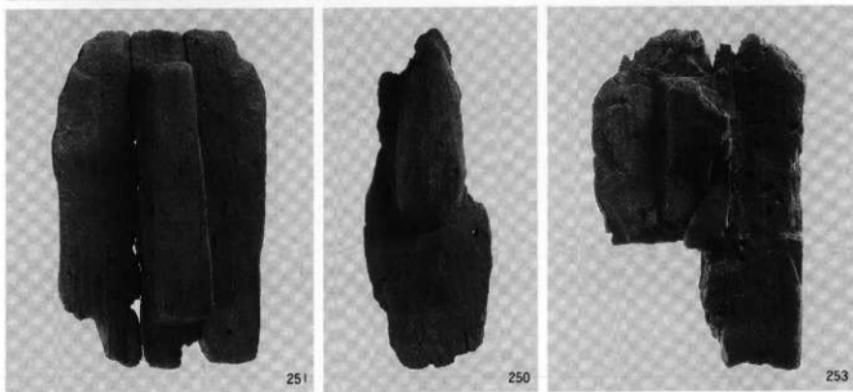
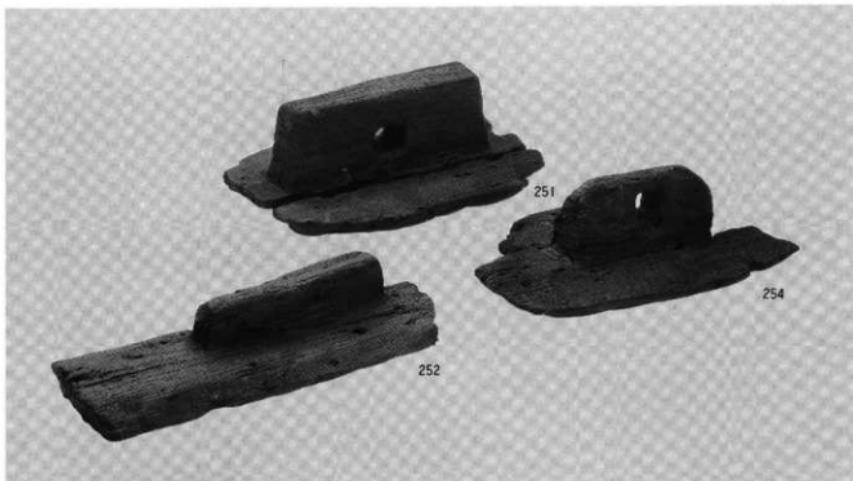
農具（曲柄未製品）



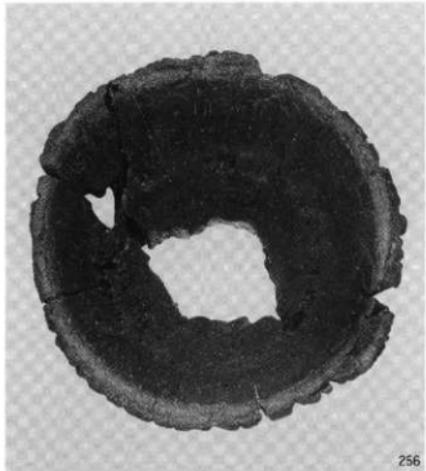
農具（曲柄未製品）



農具（鎌・鎌柄）、鎌柄（249）出土状況



農具（鐵）



256



256



256



256

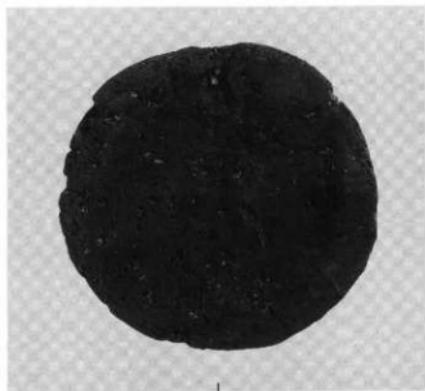


256

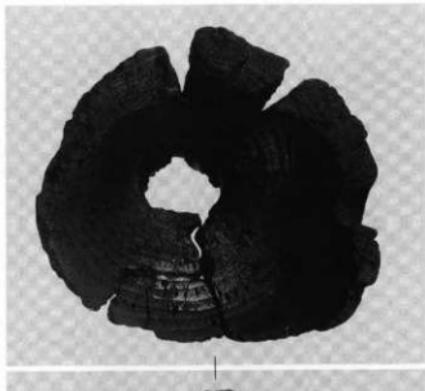


257

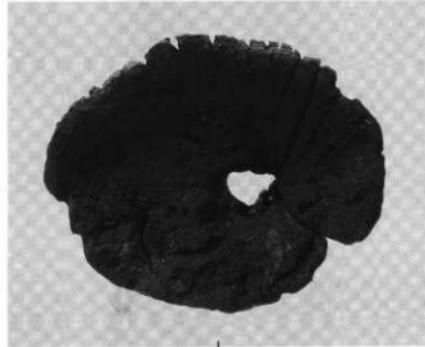
農具（臼）、臼（256・257）出土状況



264



259

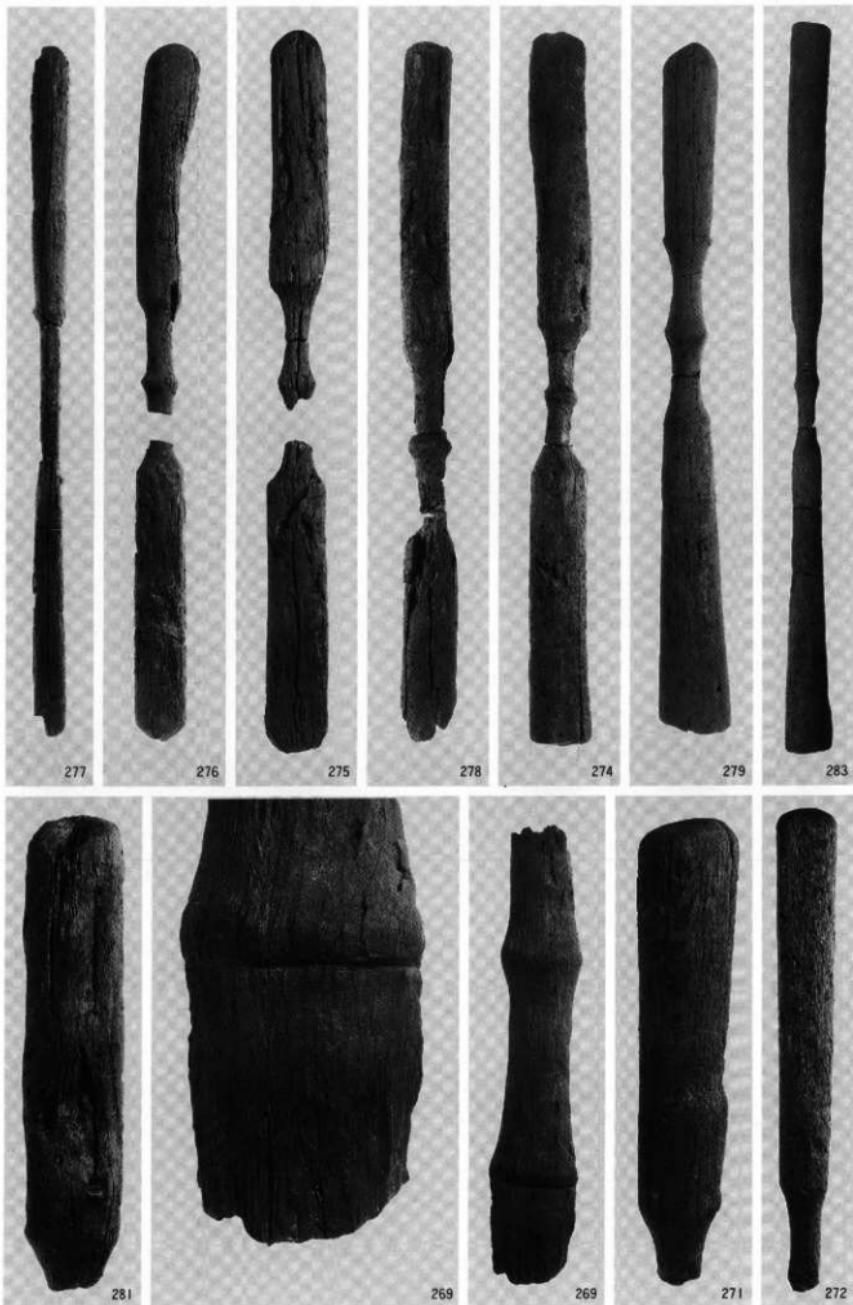


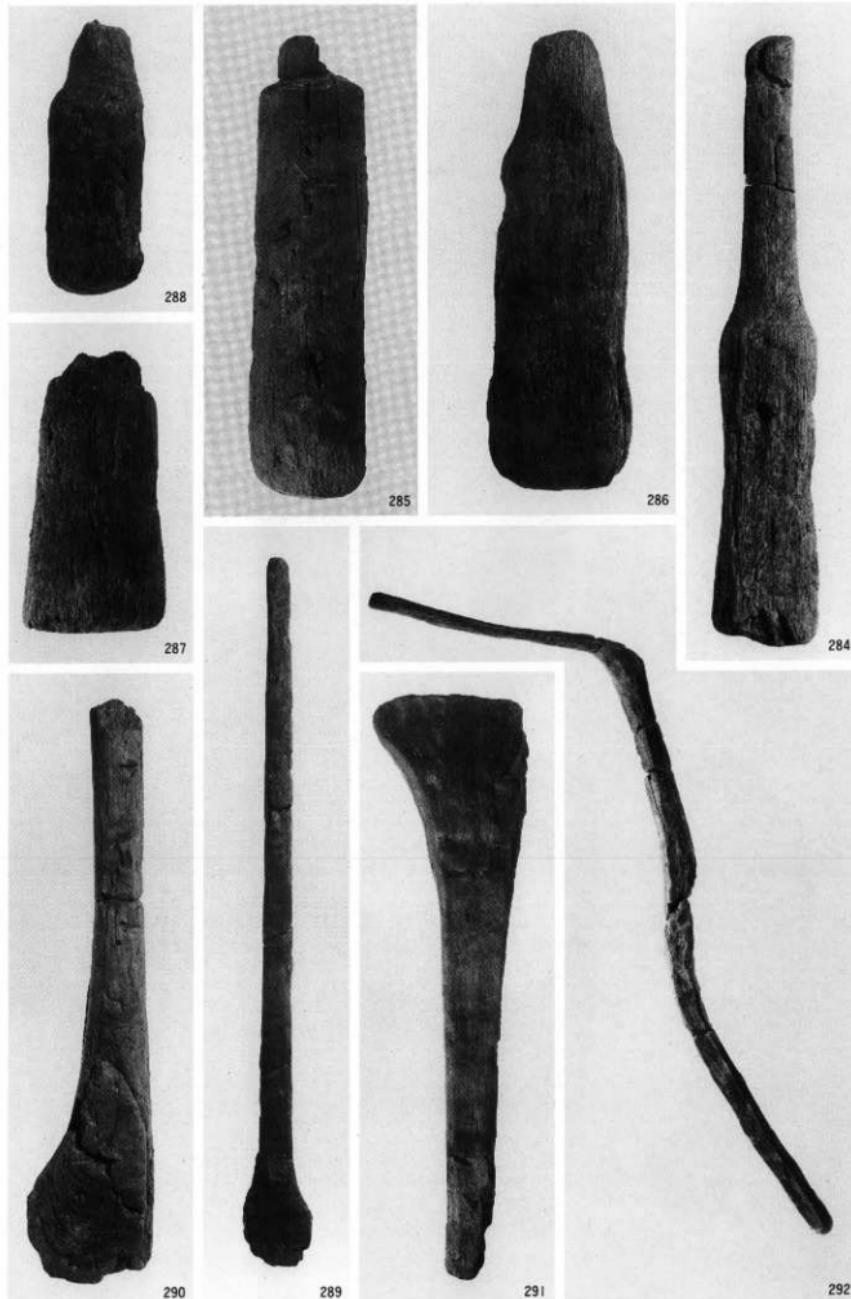
258



260

図版36

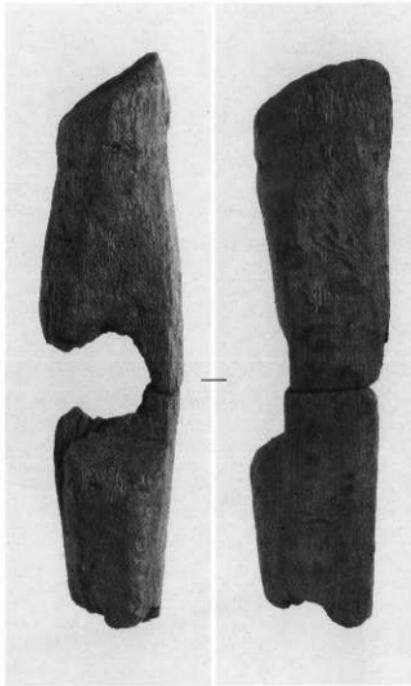




農具（横櫛・その他農具）



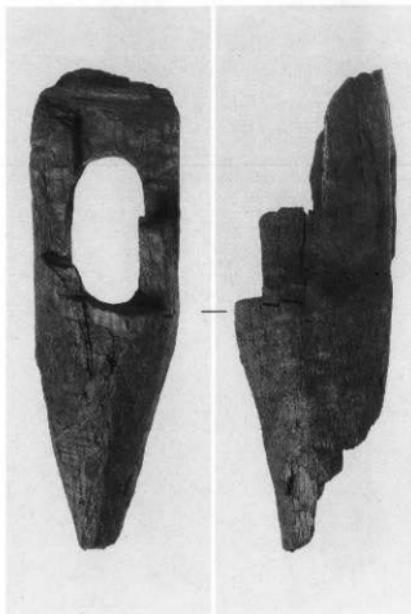
299



294



297



296



300

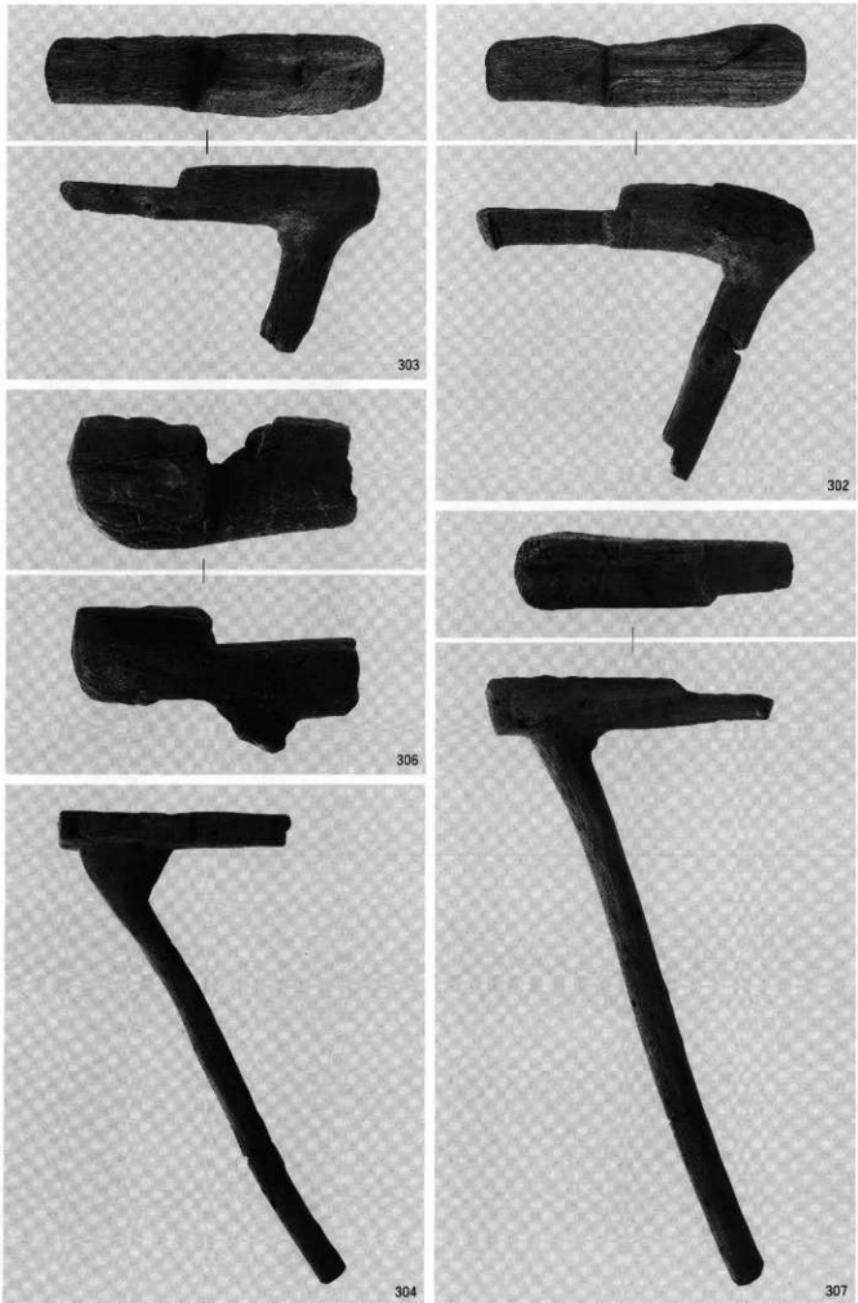


300

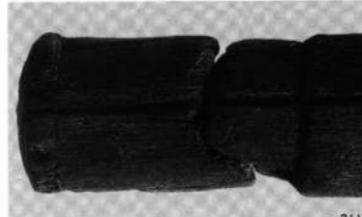
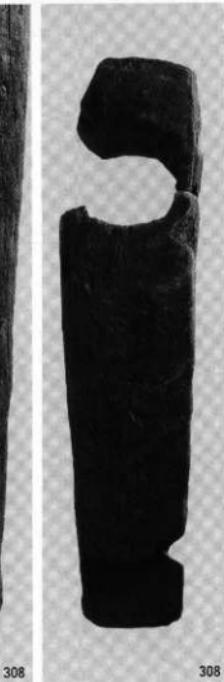


301

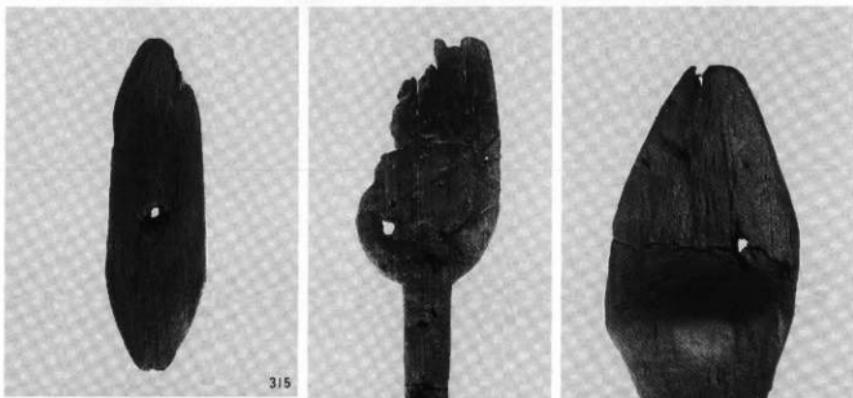
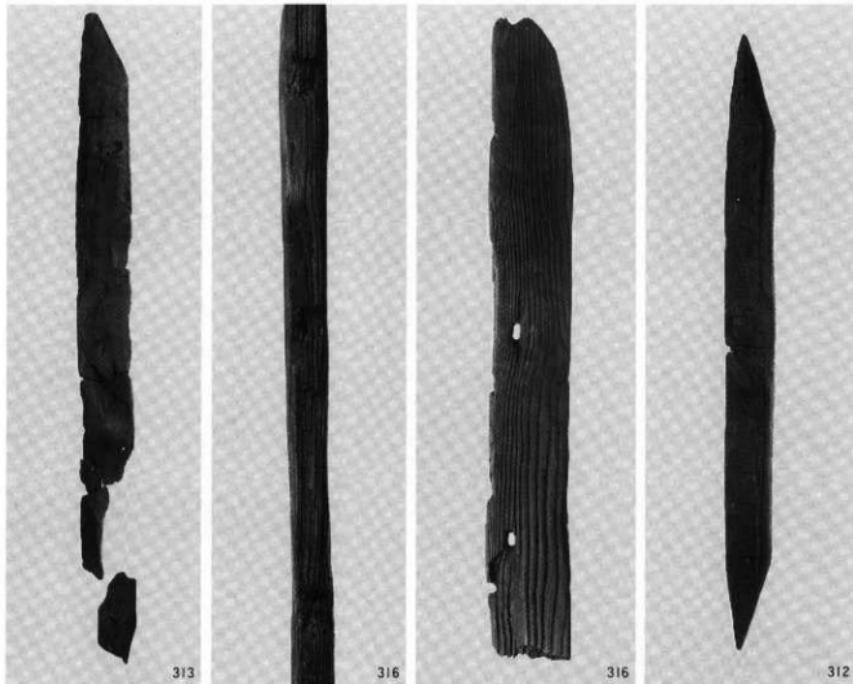
図版40



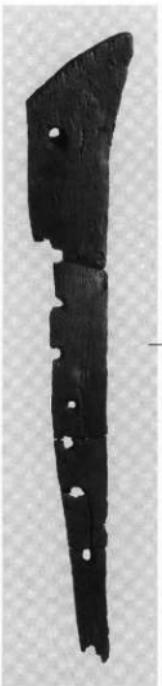
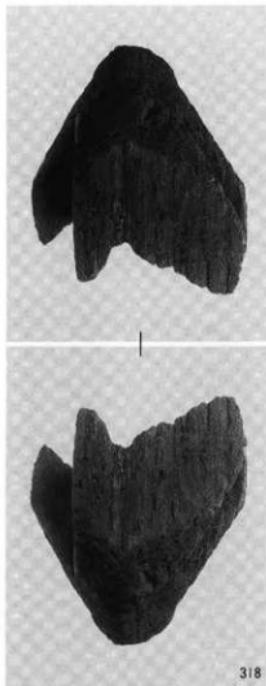
工具（曲柄）



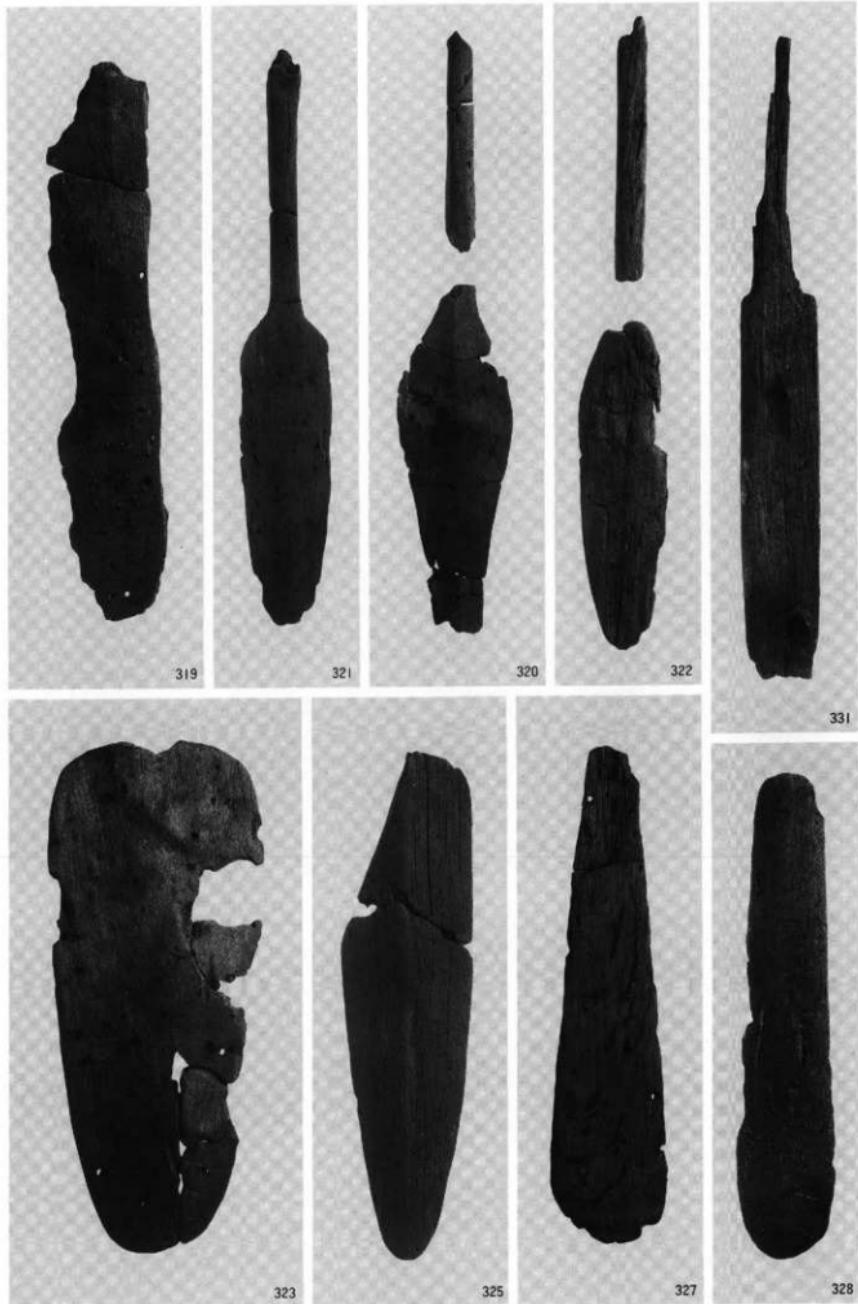
工具（曲柄）



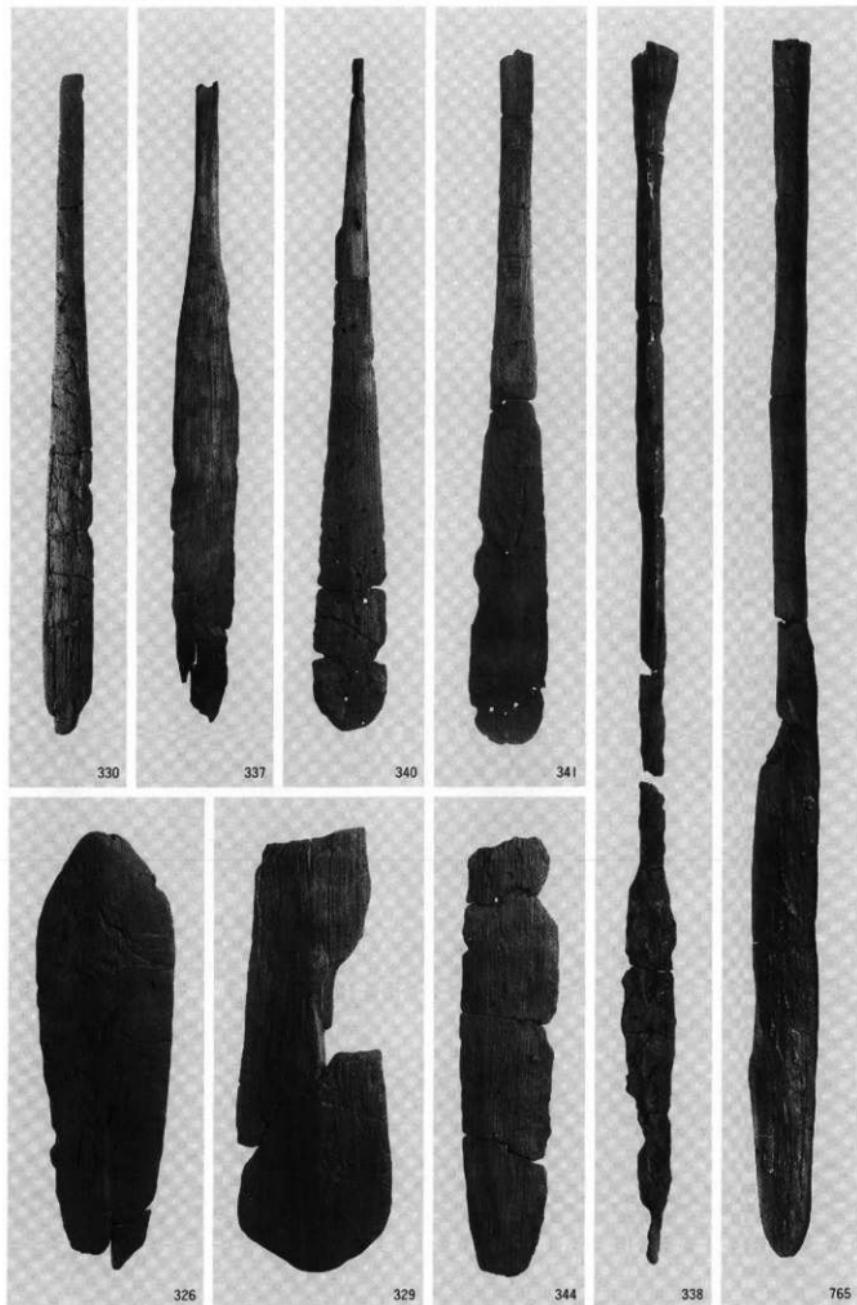
紡織具（織機・編台）、食事具（杓子・匙）



運搬具（船）、船（317）出土状況

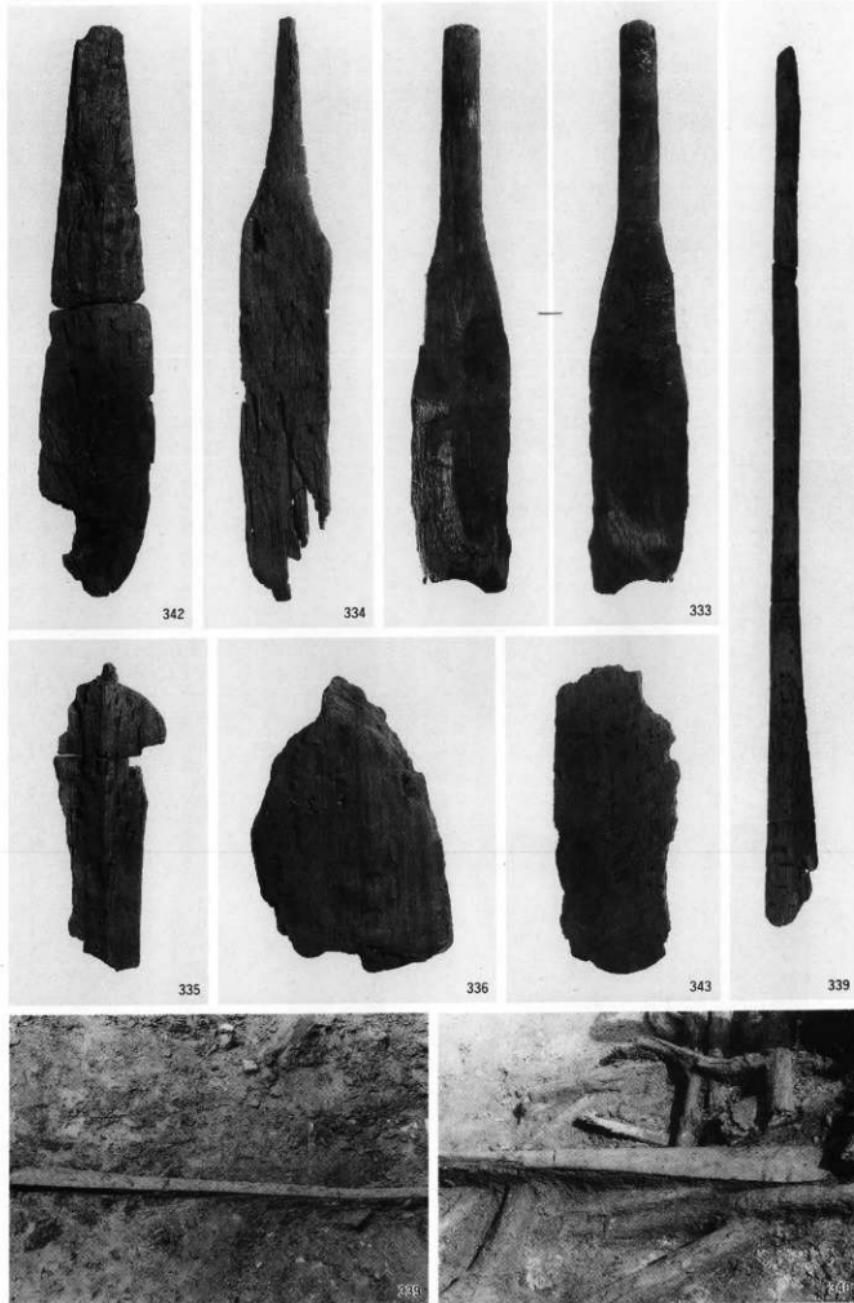


運搬具（櫟木製品）

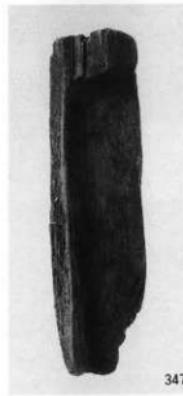
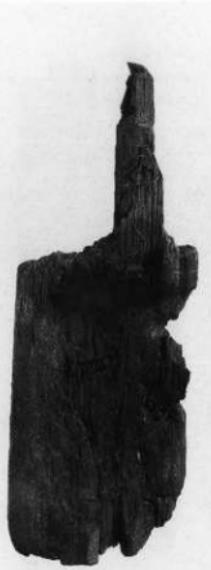
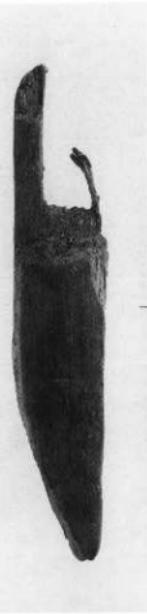


運搬具（櫛状木製品）

図版46



運搬具（櫂状木製品）、櫂状木製品（339・340）出土状況



運搬具（アカカキ状木製品・背負子）



352



352

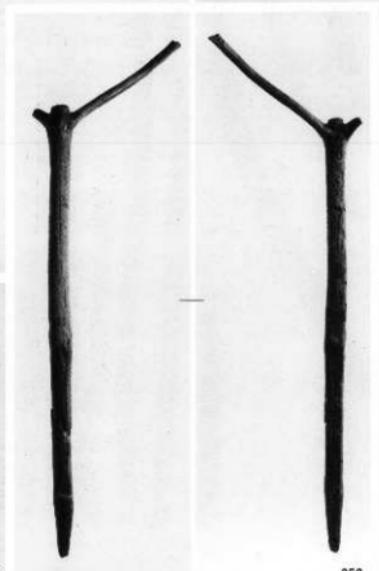
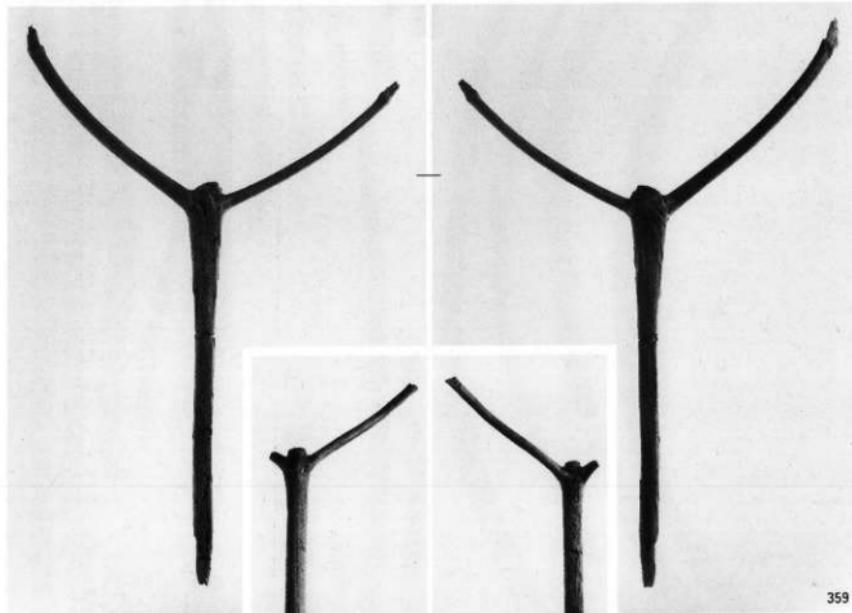
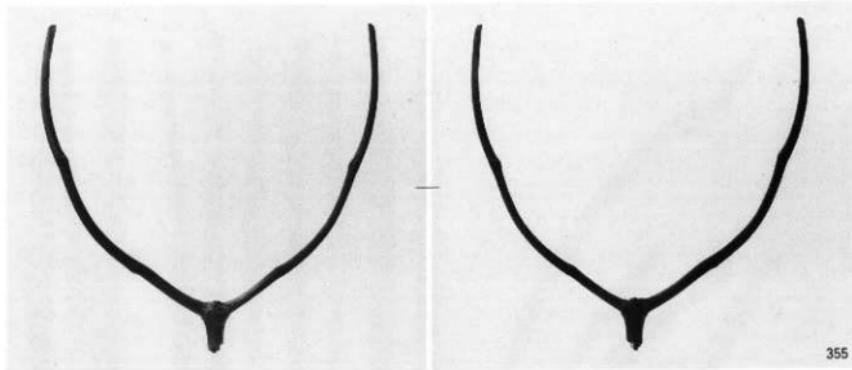


353

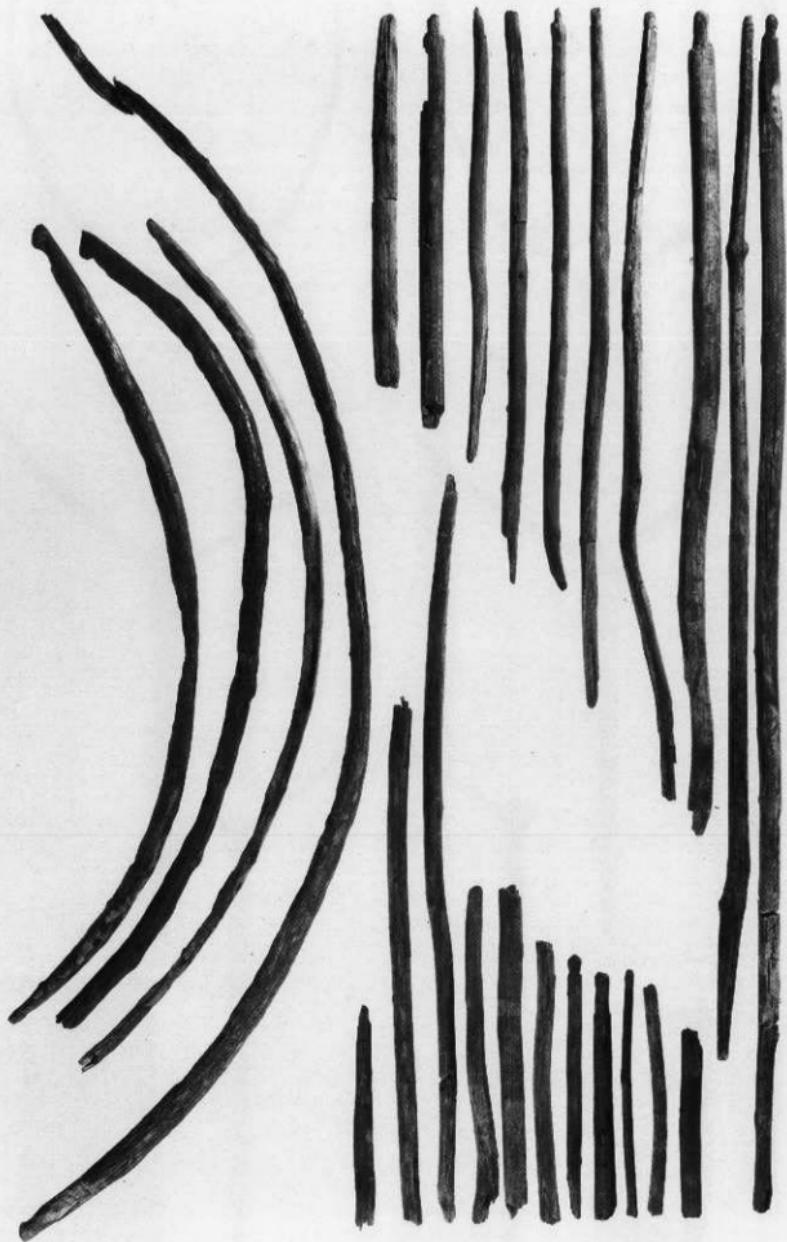
351

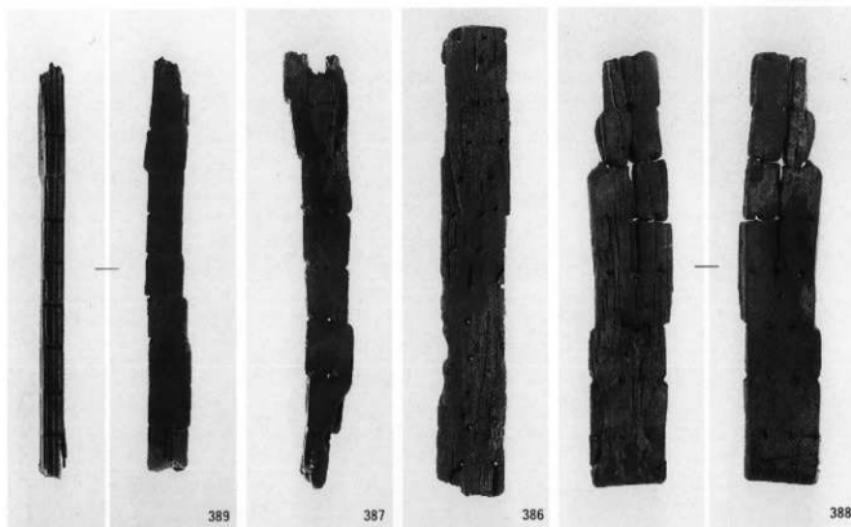
蓮撇具（アカカキ状木製品）

354



漁撈具（網枠（タモ））



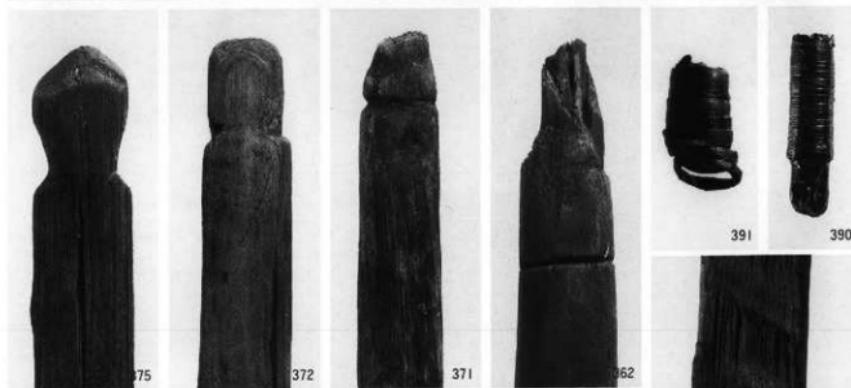


389

387

386

388



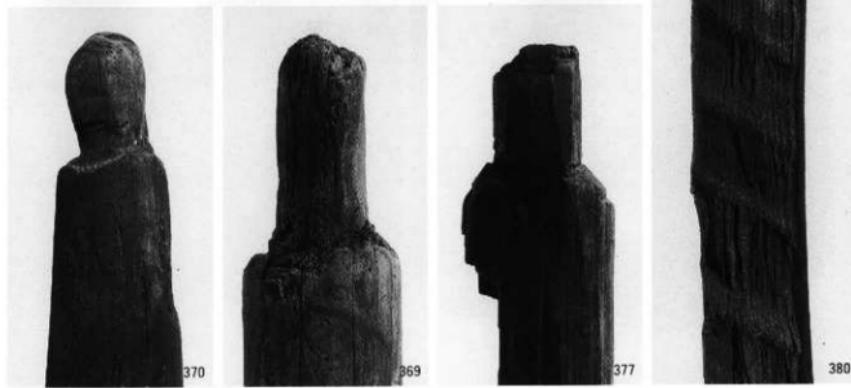
375

372

371

391

390

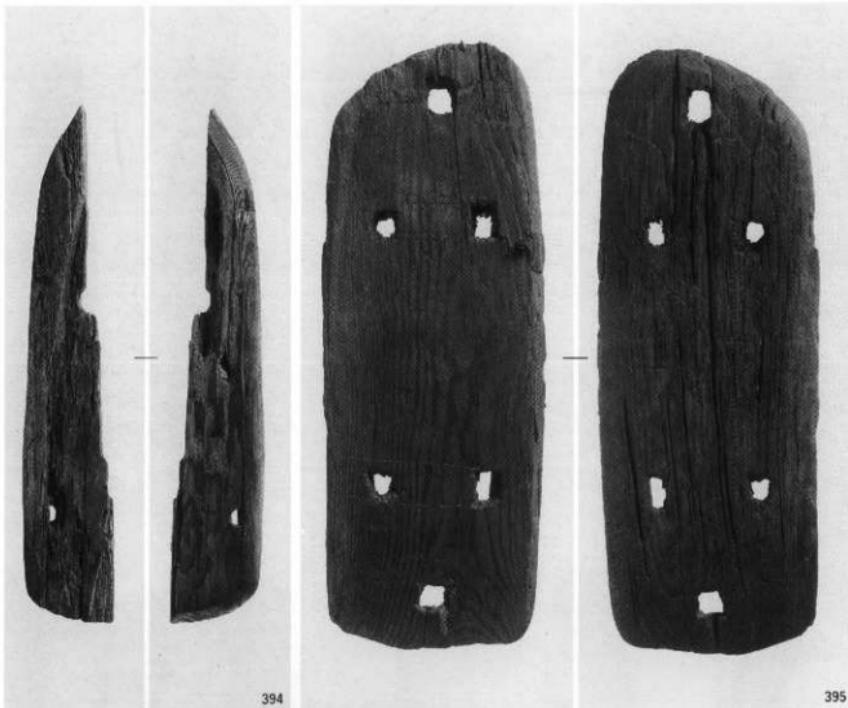


370

369

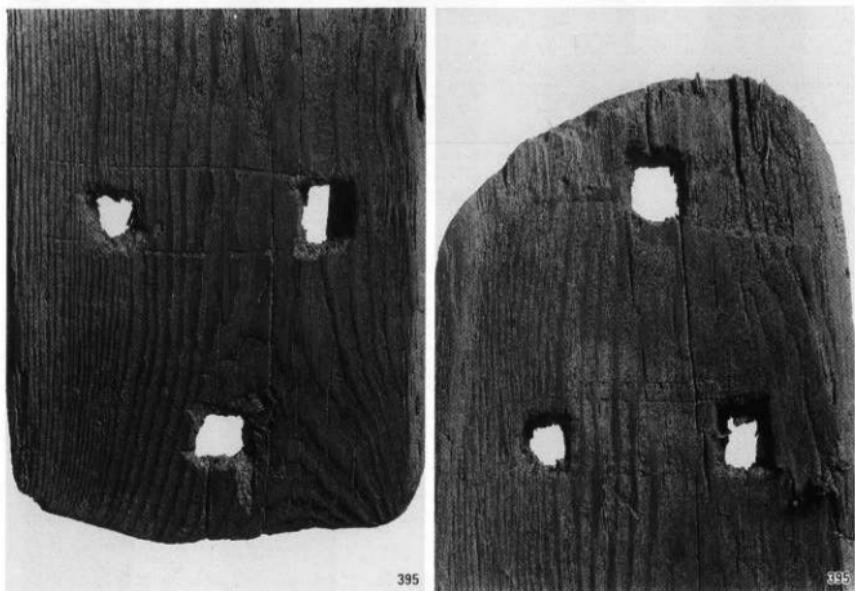
377

380



394

395



395

396

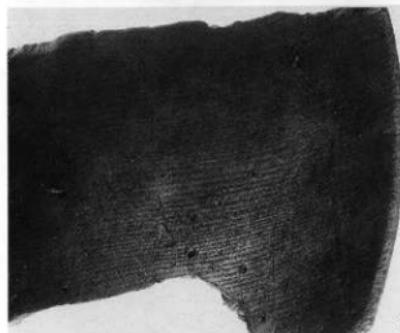
装身具（木履）



398



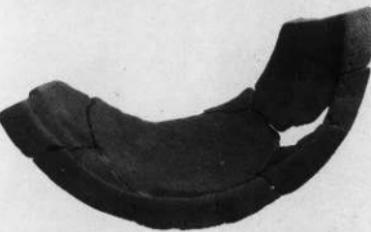
398



398



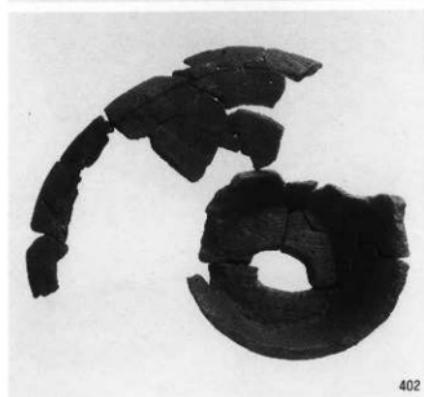
398



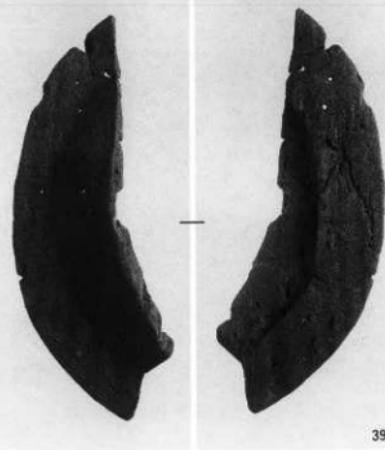
400



401

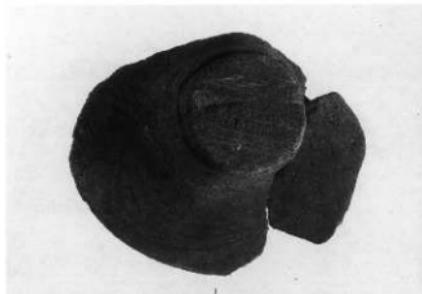


402

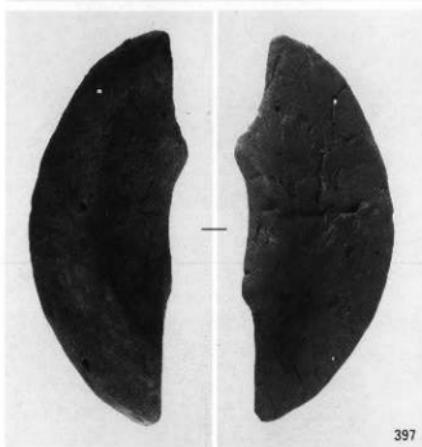


399

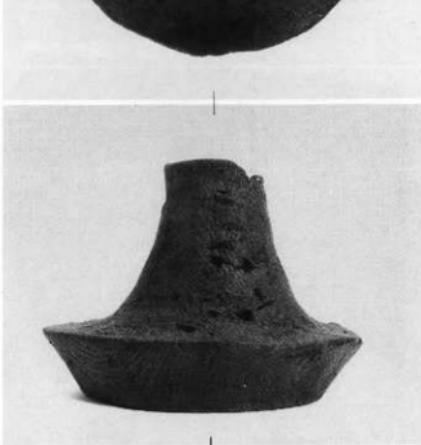
容器（高杯）



396



397



|



400

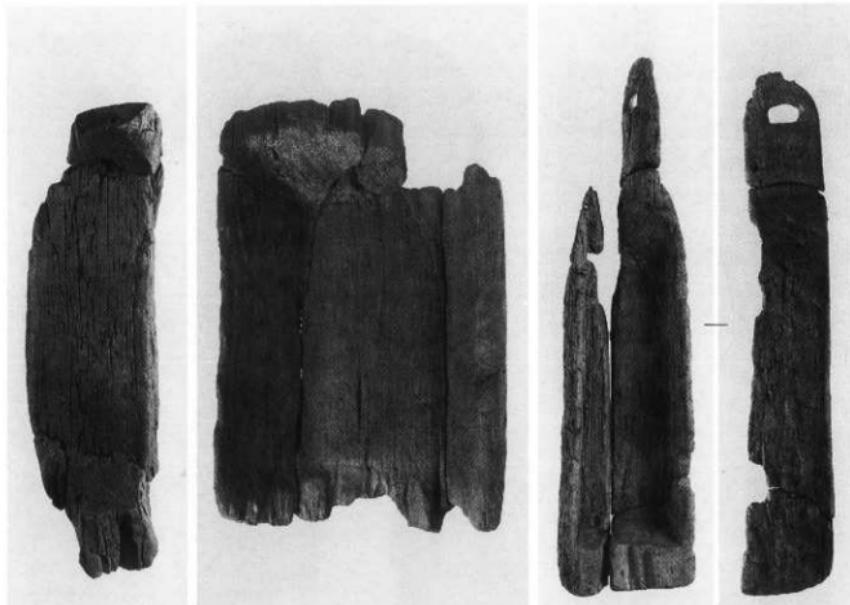


405



404

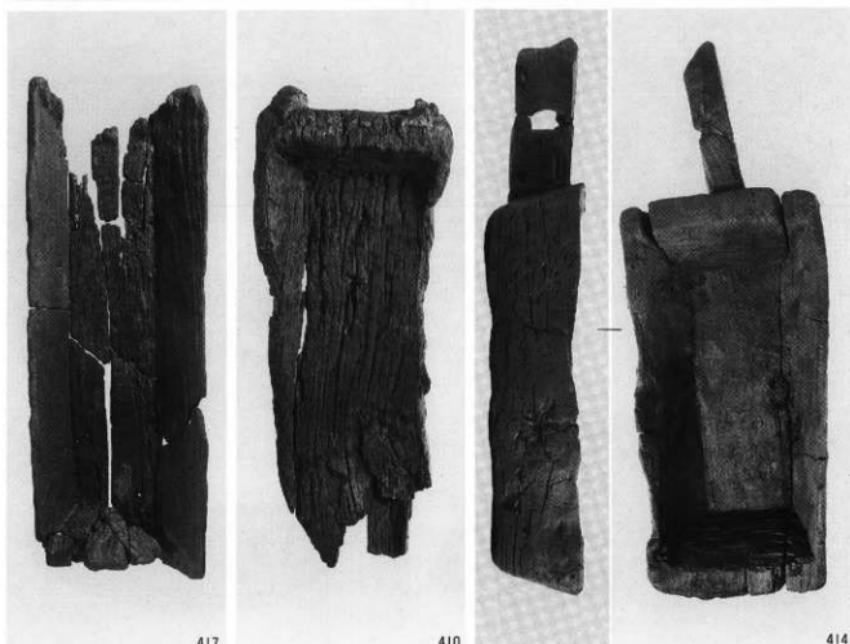
容器（高杯）



416

408

413

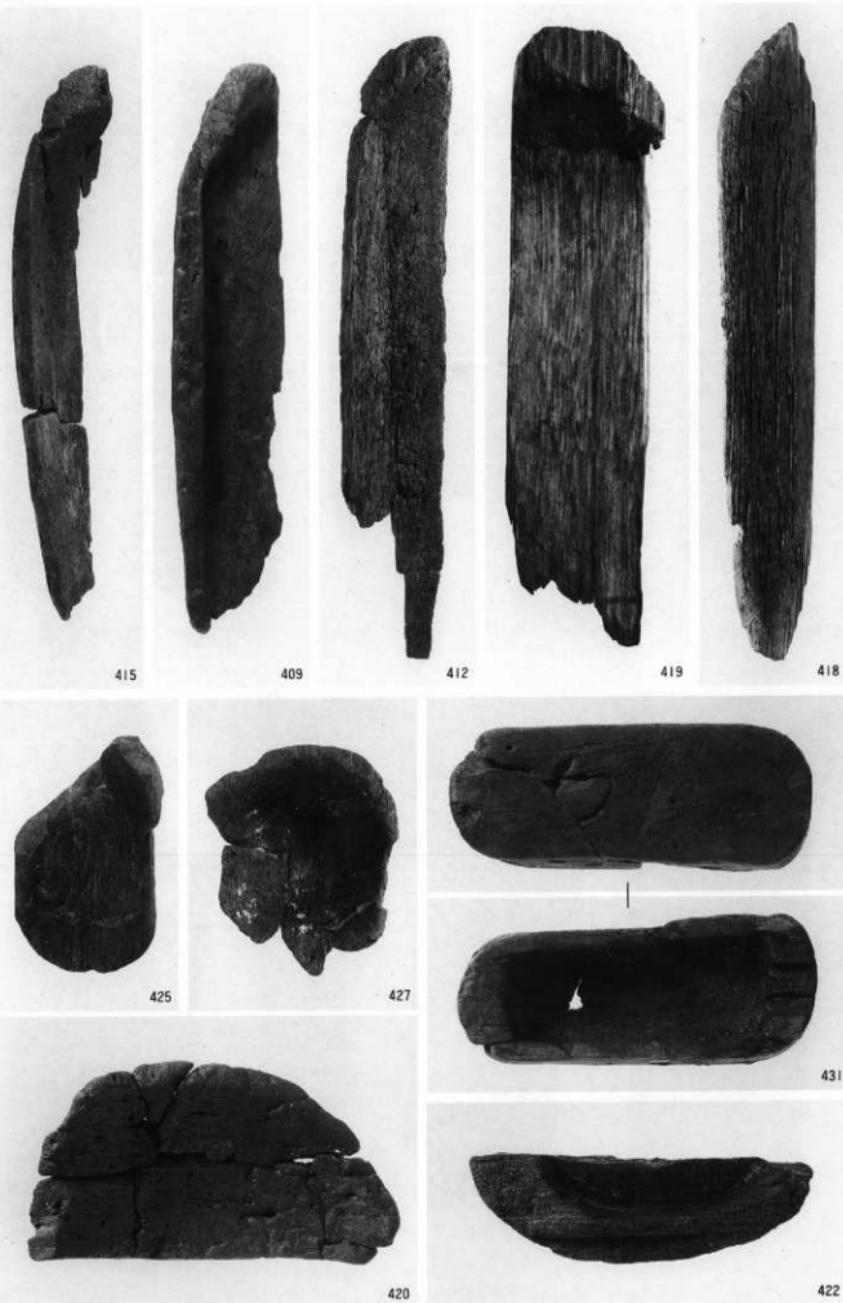


417

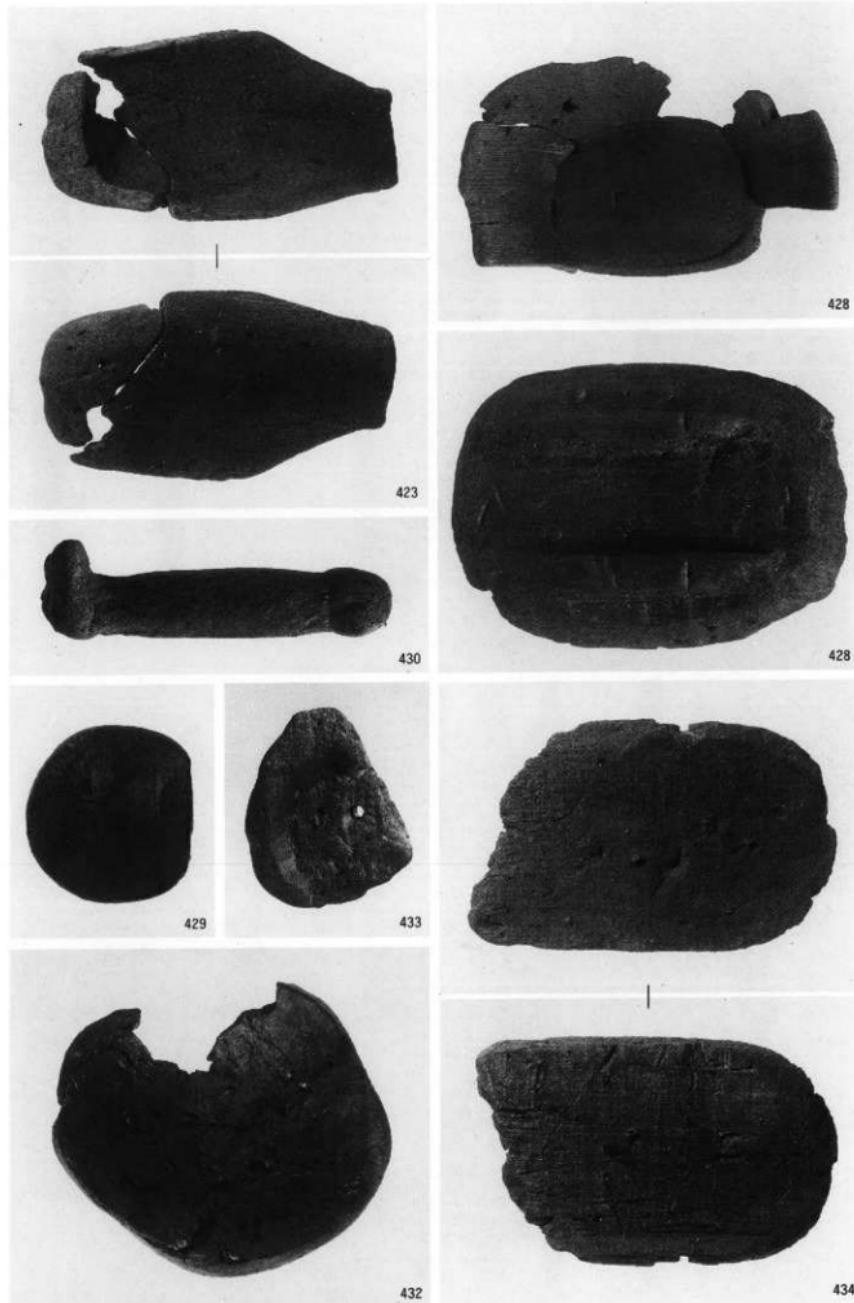
410

414

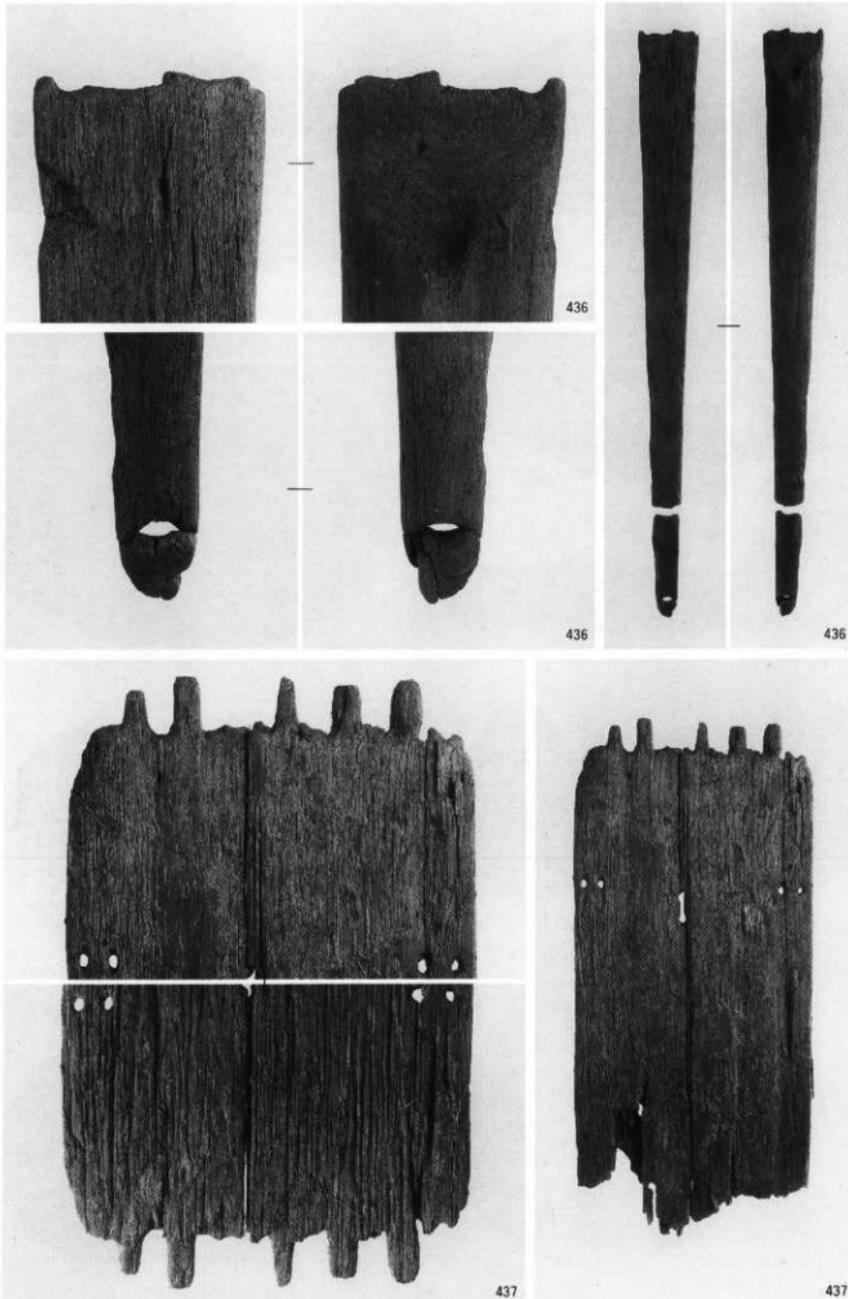
容器（槽）



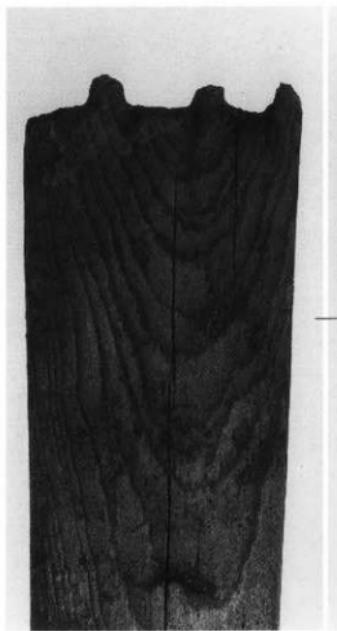
容器（槽・盤・その他容器）



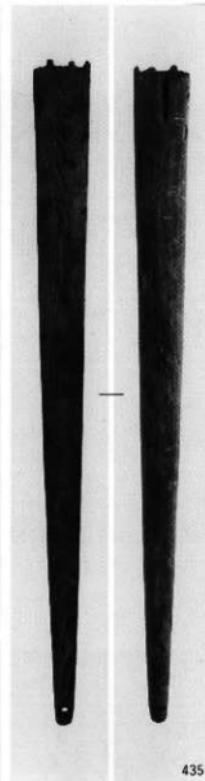
容器（その他容器）



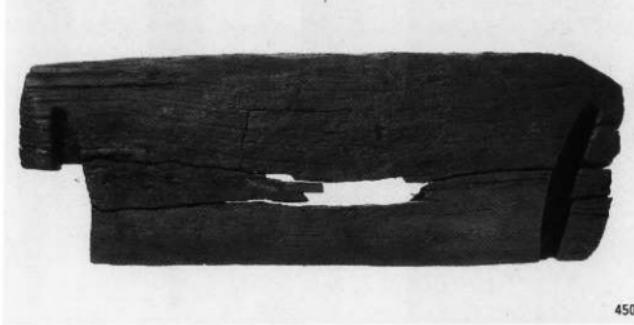
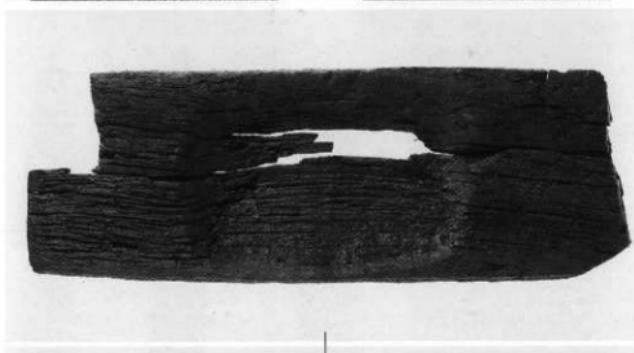
遊戯具（琴）



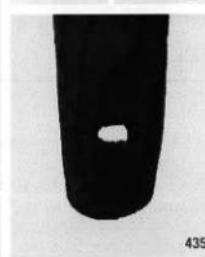
435



435



450



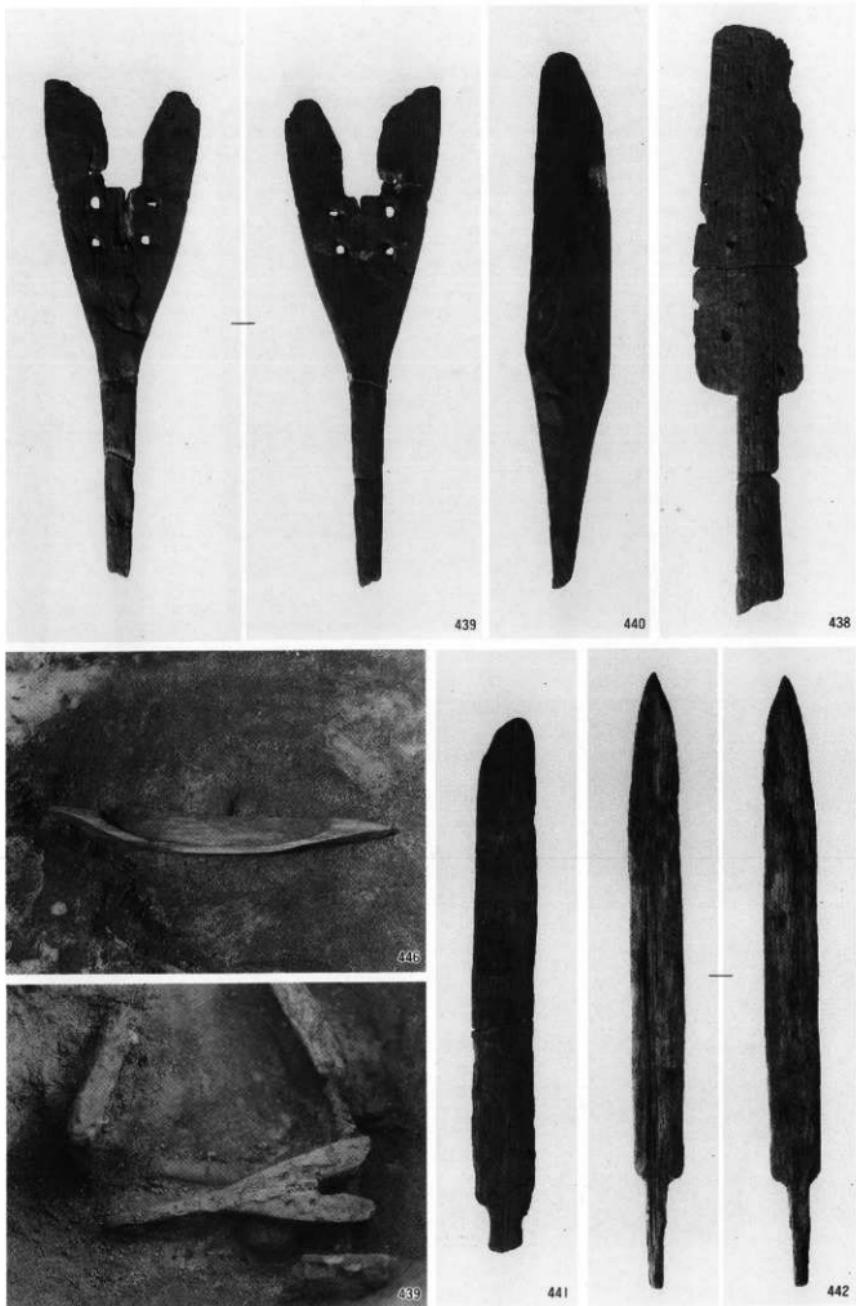
451



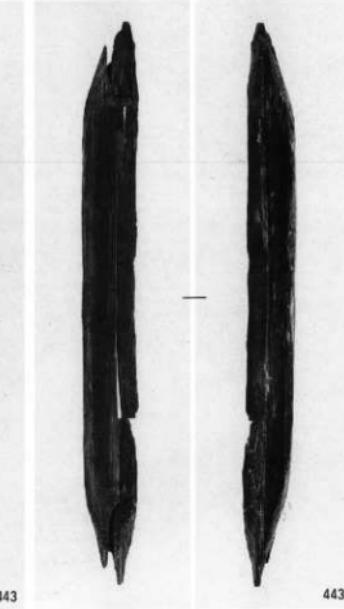
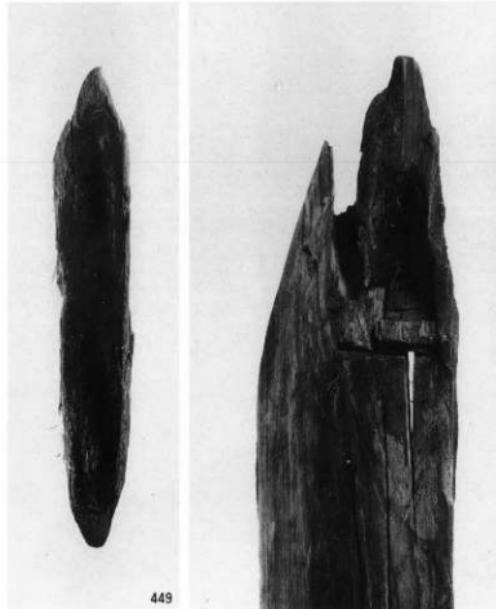
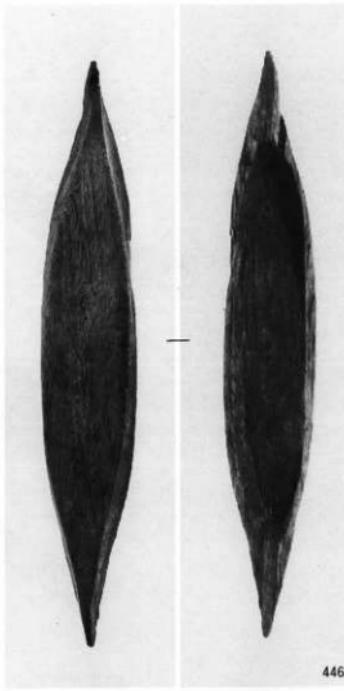
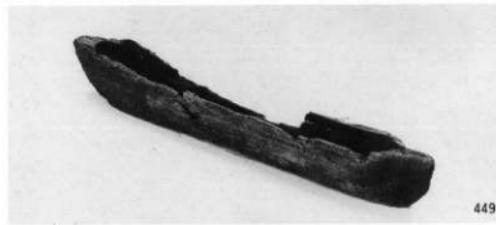
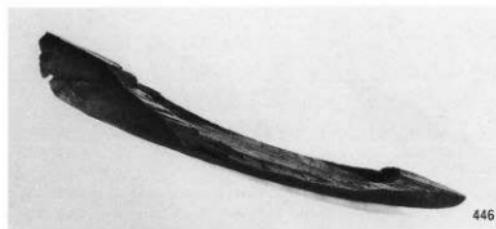
451

遊戯具（琴）、雄具（腰掛・各種部材）

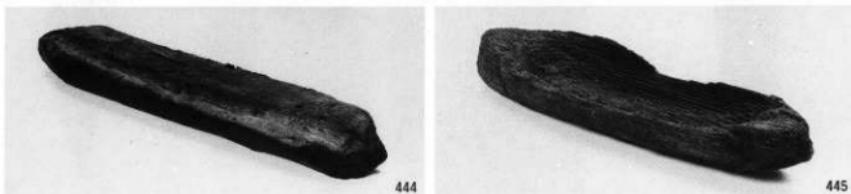
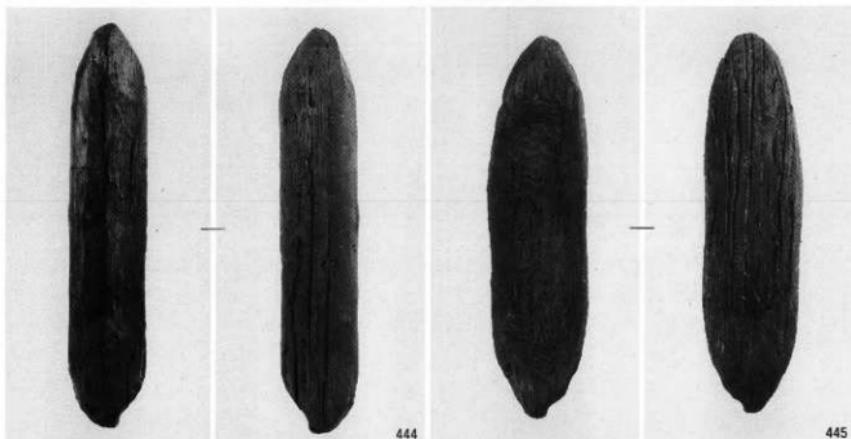
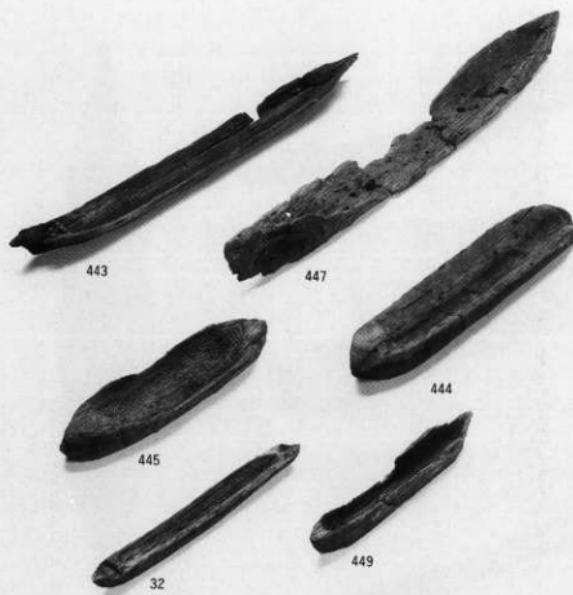
図版60



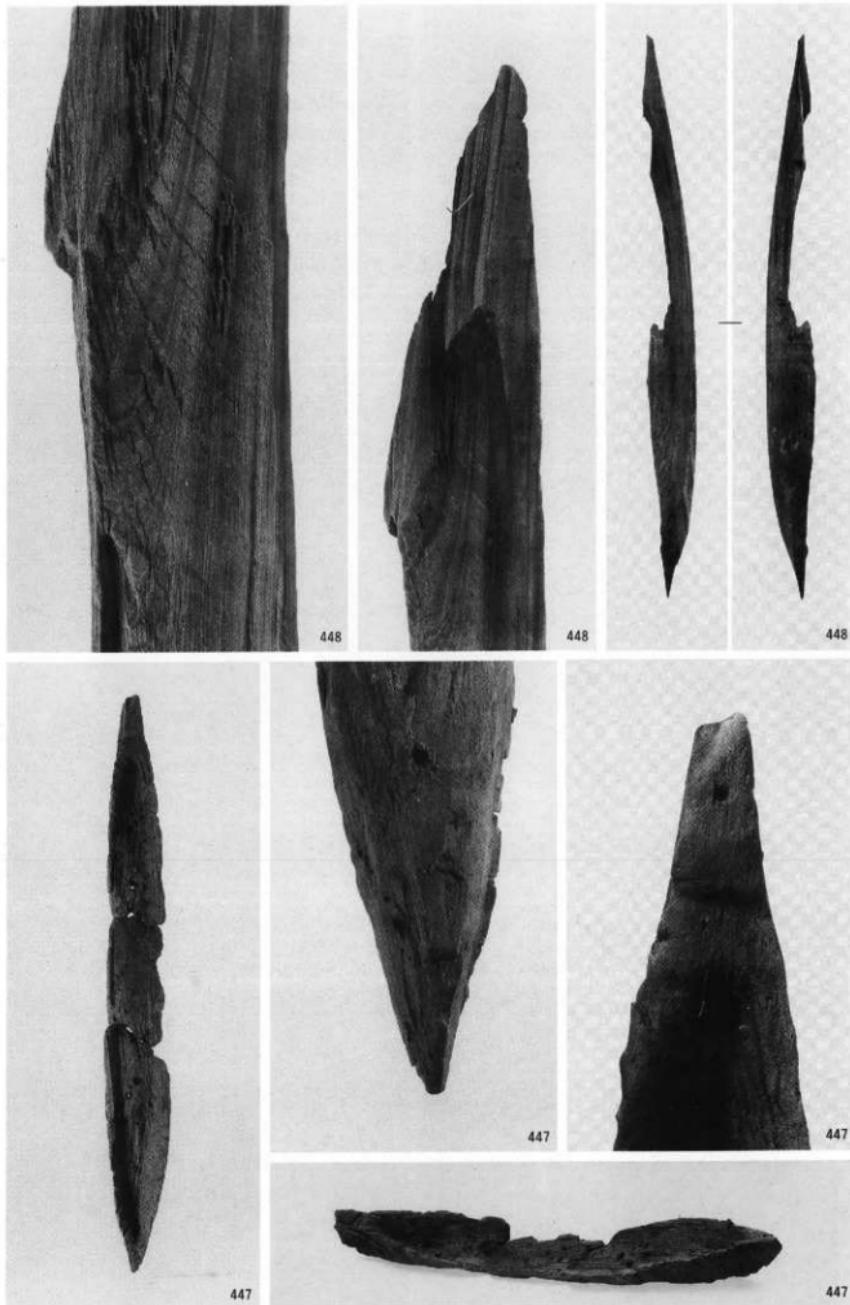
祭祀具（武器形他）、舟形（446）・杖？（439）出土状況



祭祀具（舟形）



祭祀具（舟形）



祭祀具（舟形）

図版64



481



454



359



454



4323



850

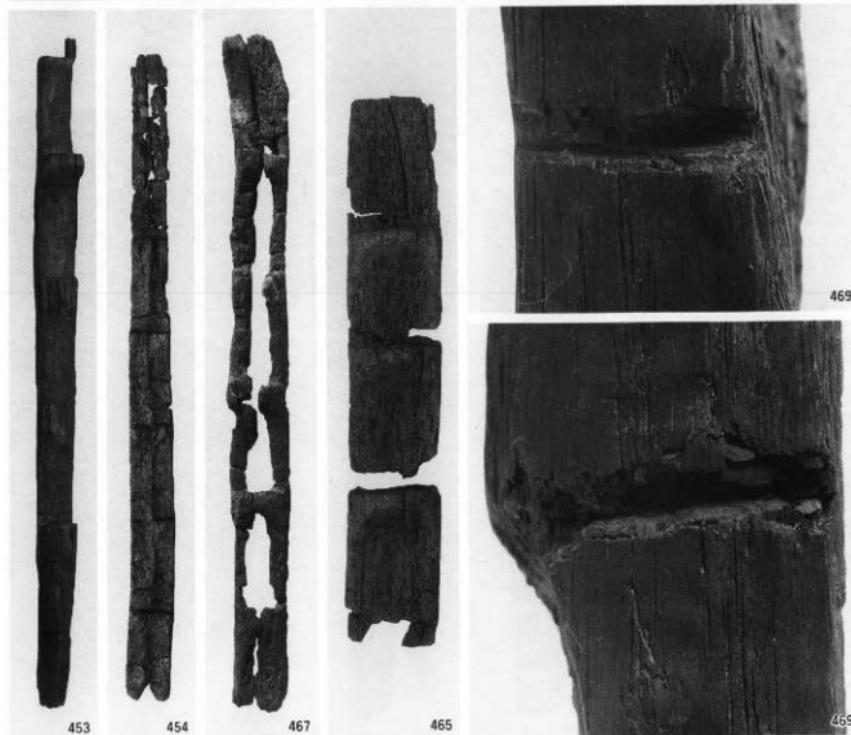
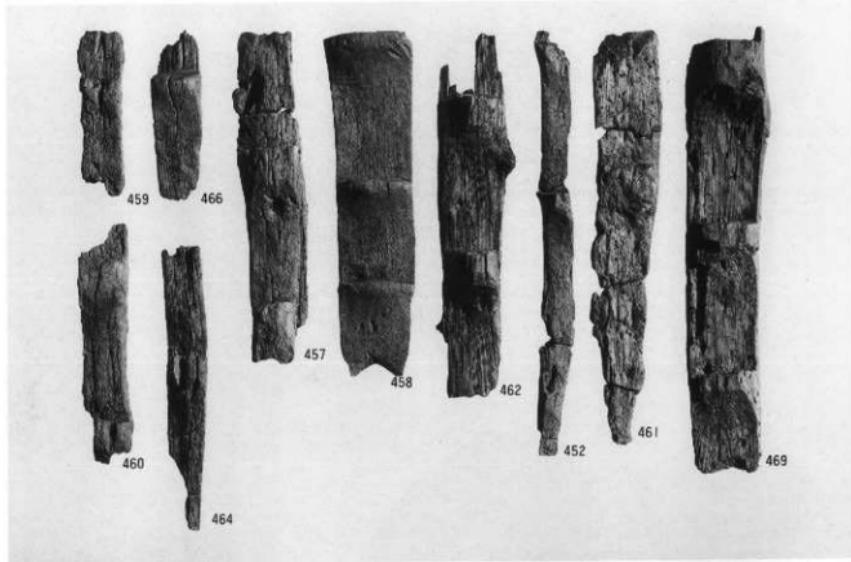


413

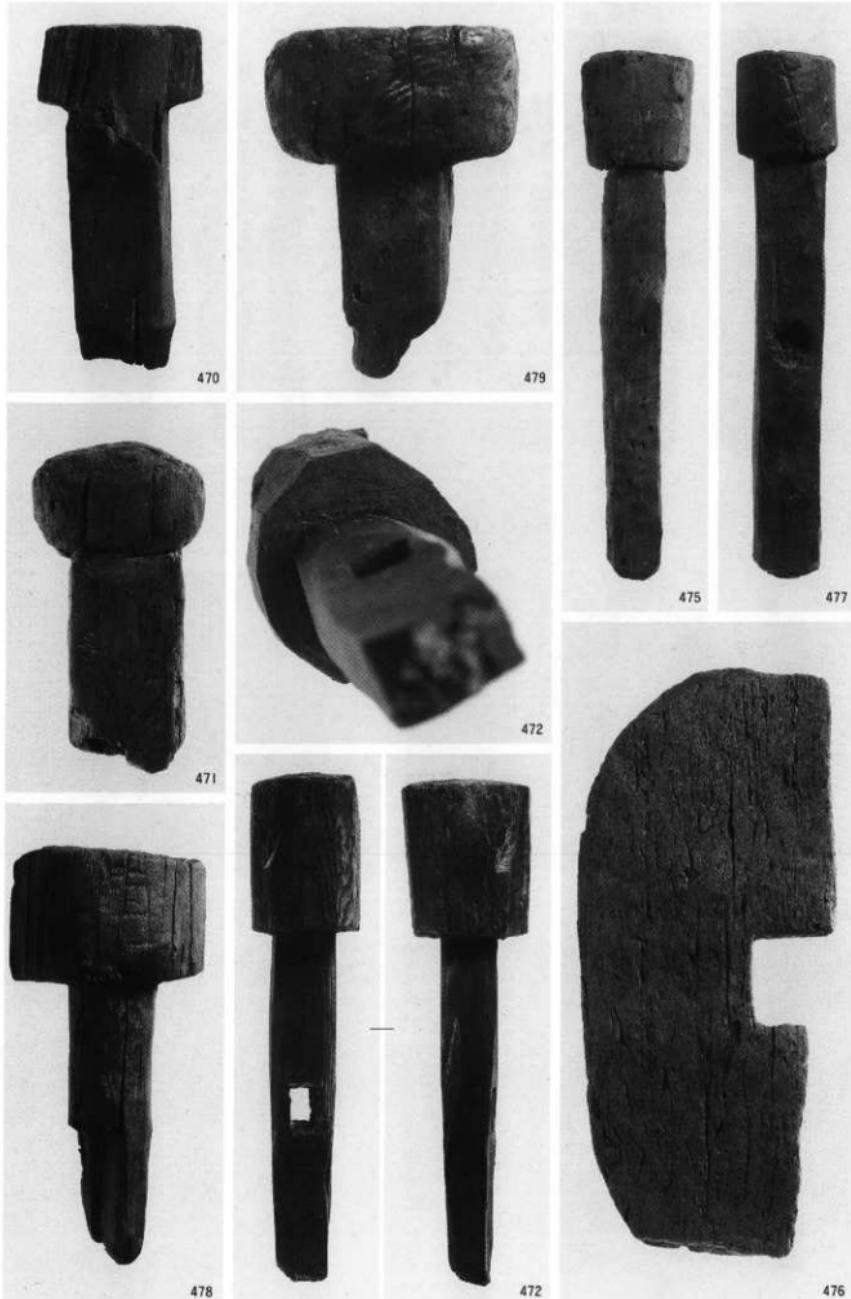


359

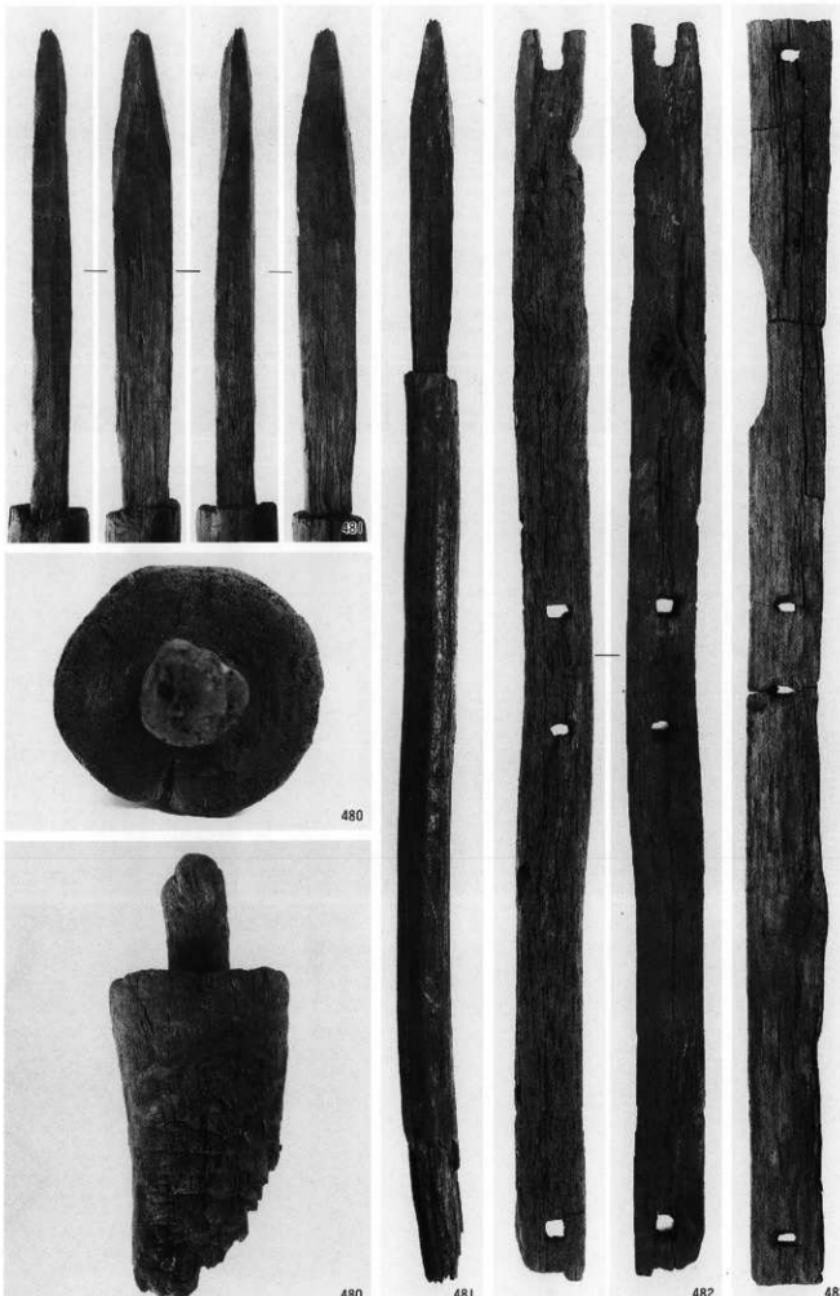
弥生時代の木製品出土状況



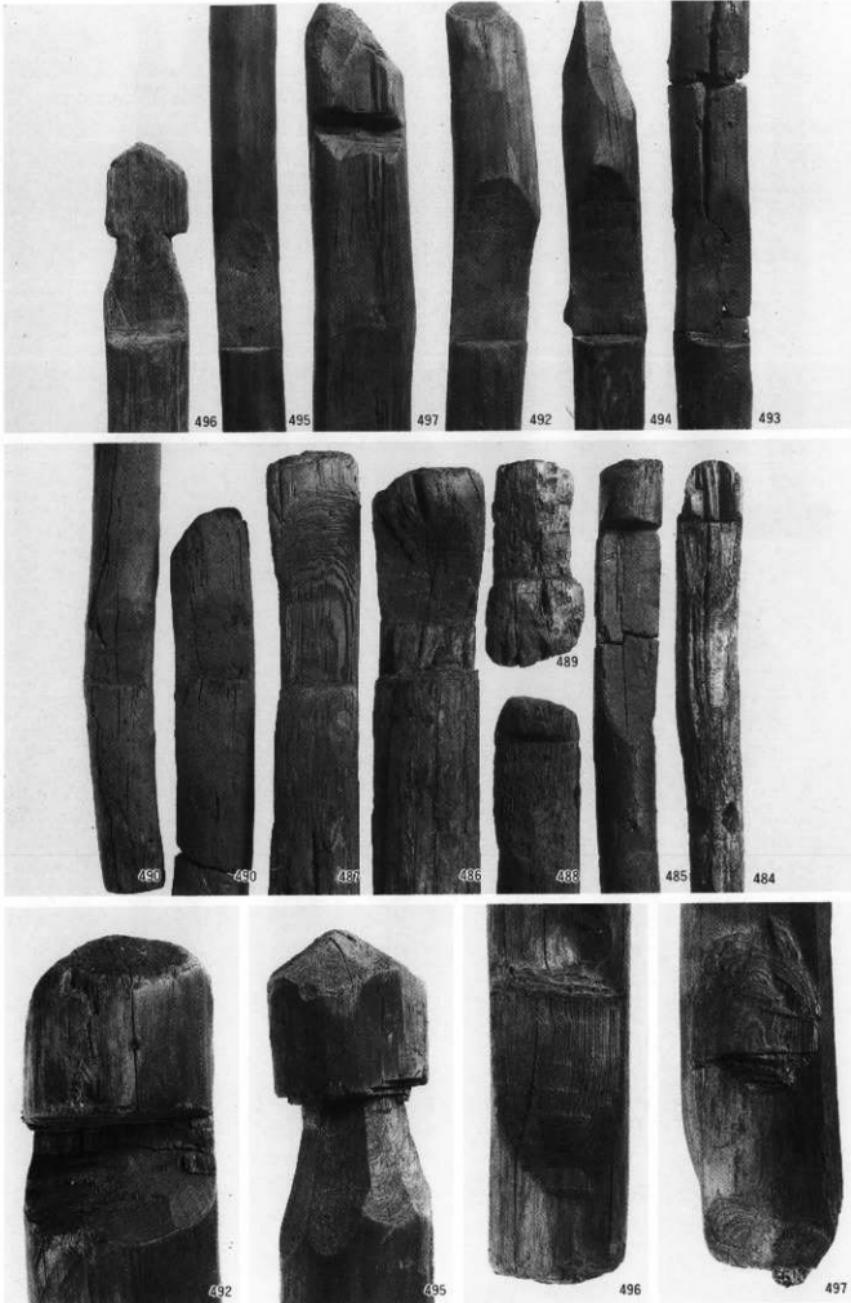
建築材（梯子）



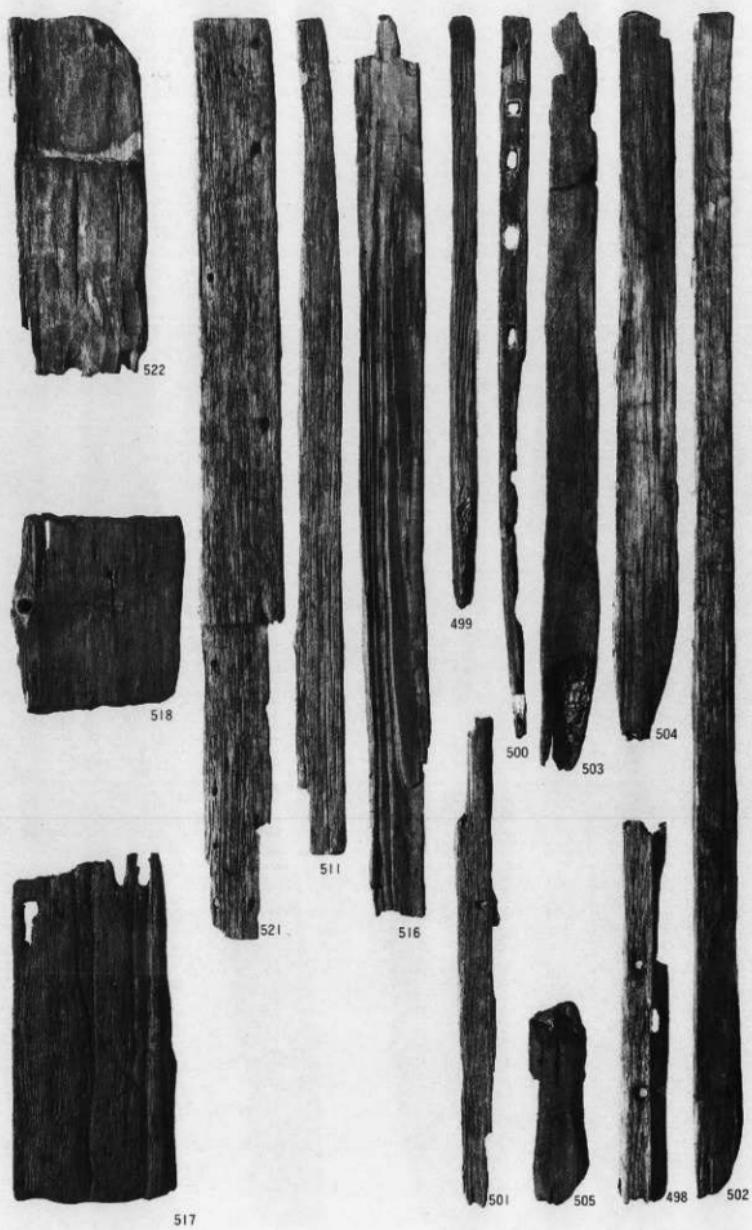
建築材（鼠返し・枘材）



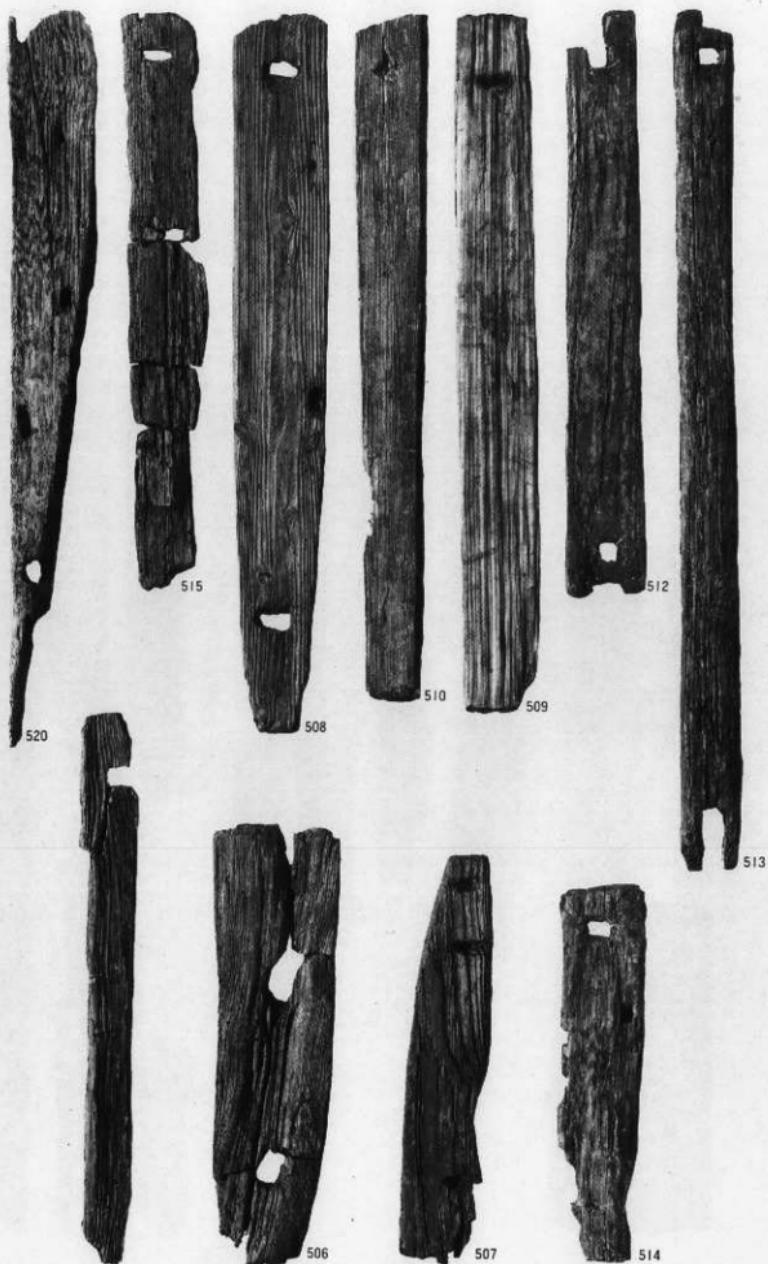
建築材（柱・台輪）



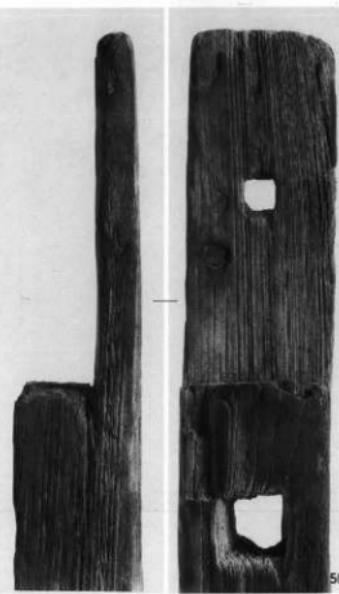
建築材（垂木）

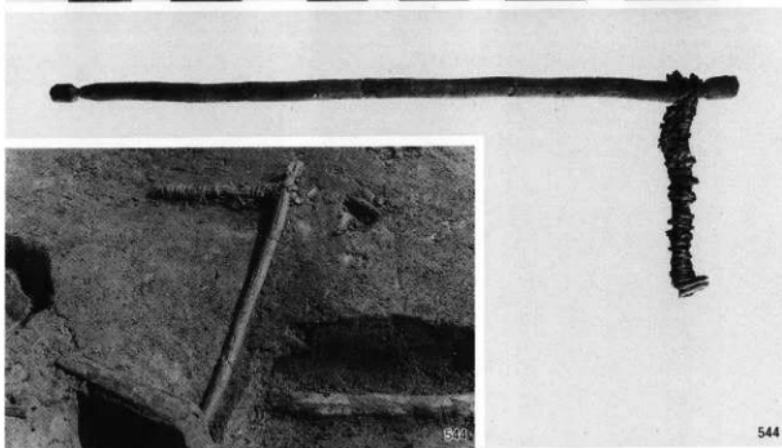
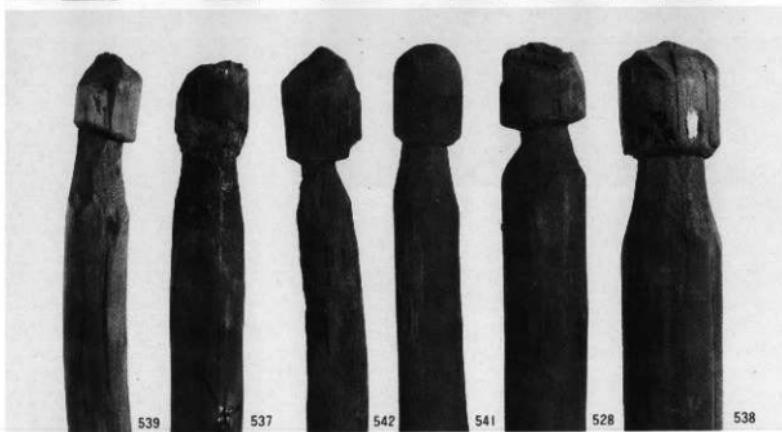
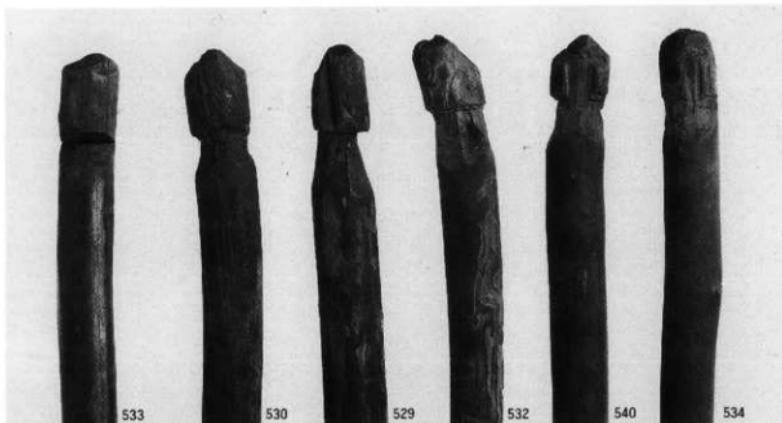


建築材（各種部材）

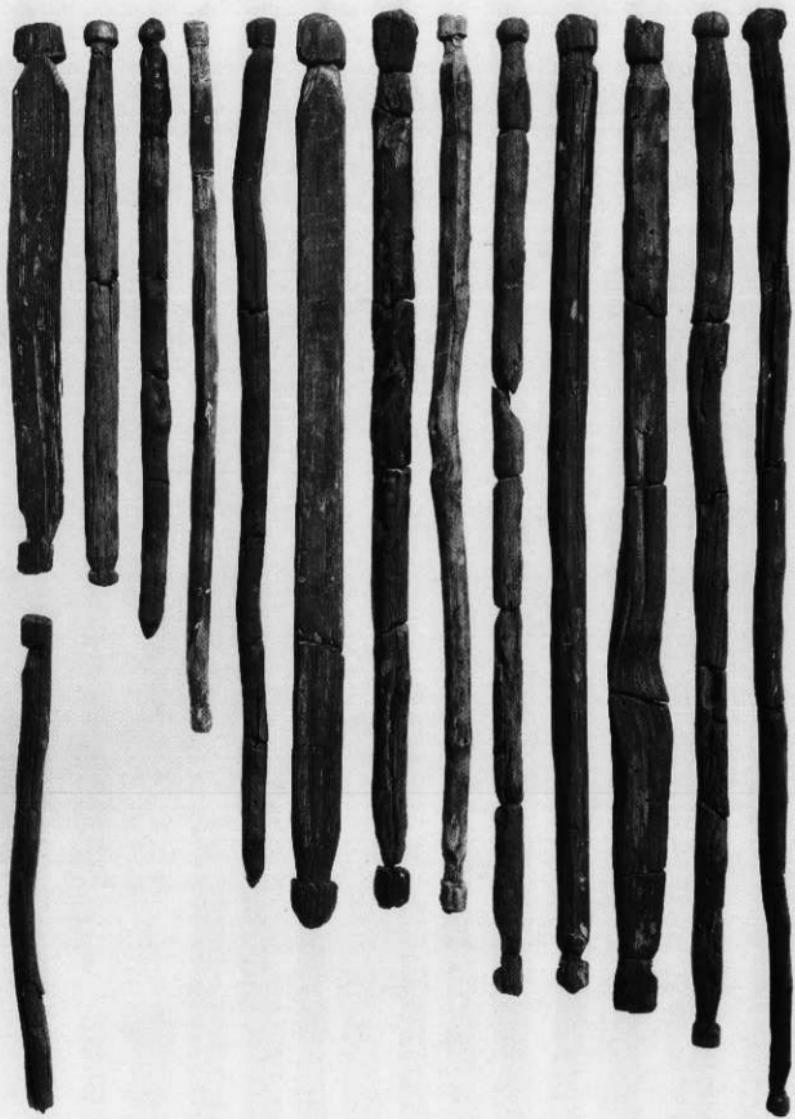


建築材（各種部材）



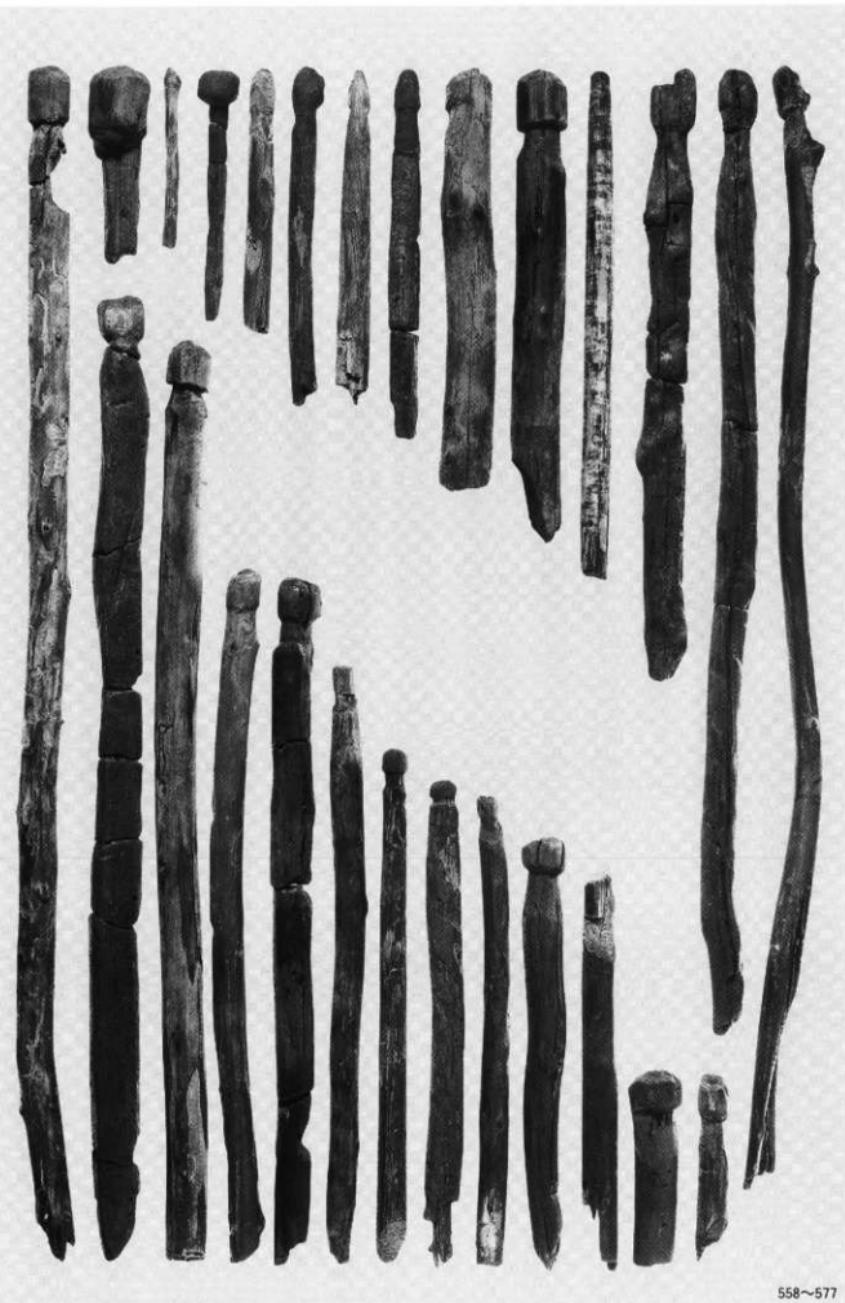


用途不明木製品（有頭棒状）

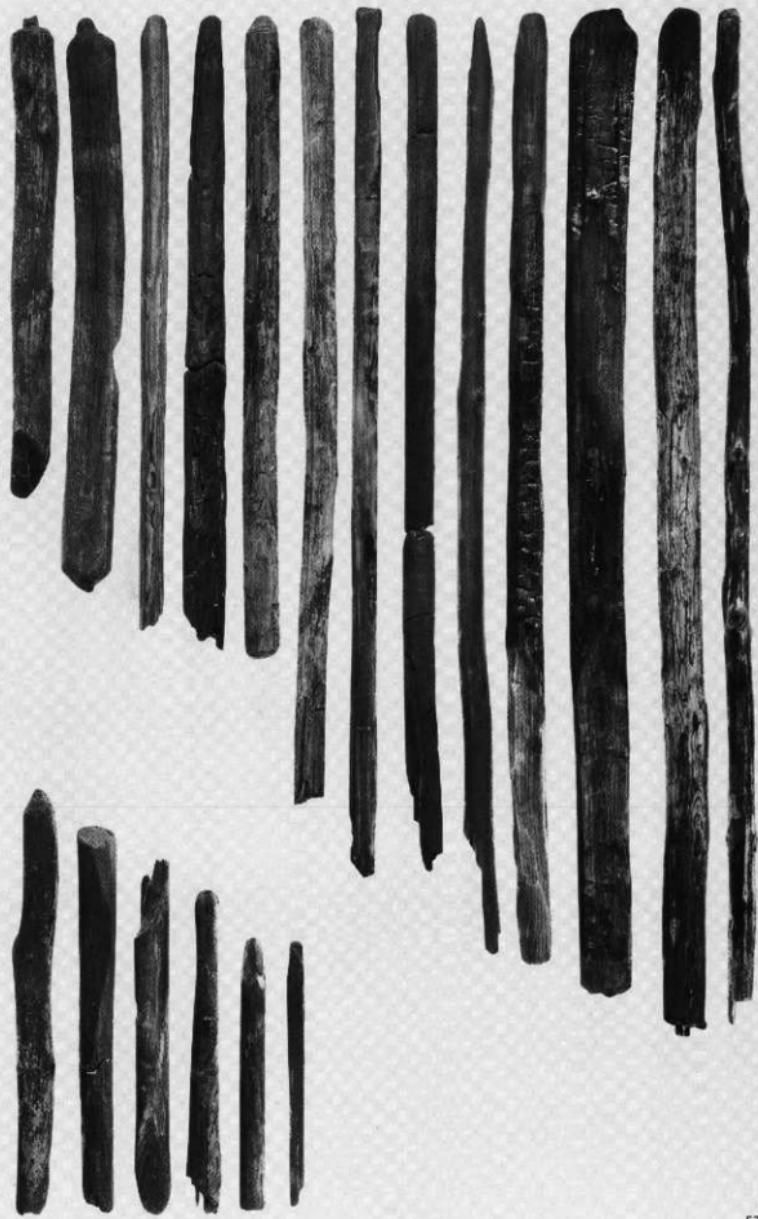


543・545~557

用途不明木製品（有頭棒状）

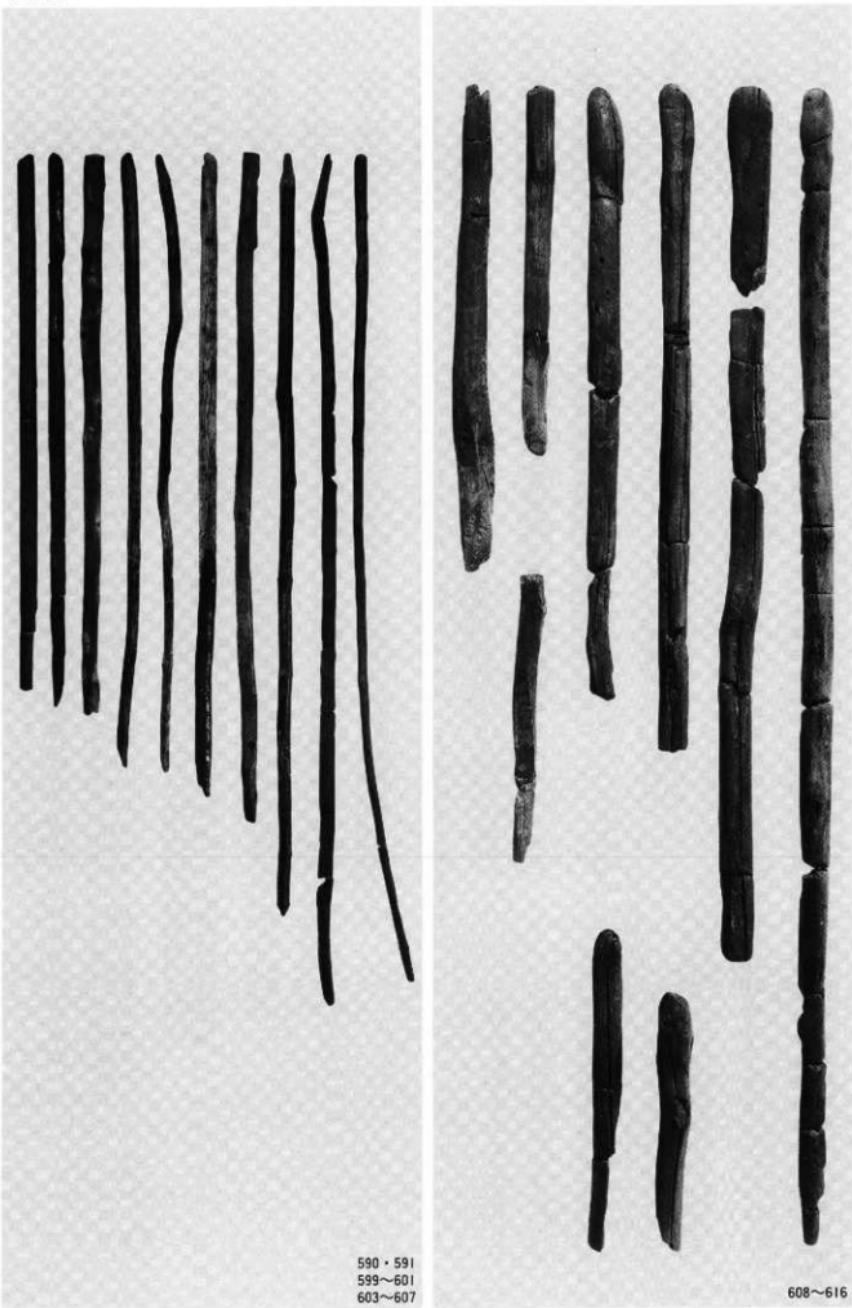


用途不明木製品（有頭棒状）



用途不明木製品（棒状）

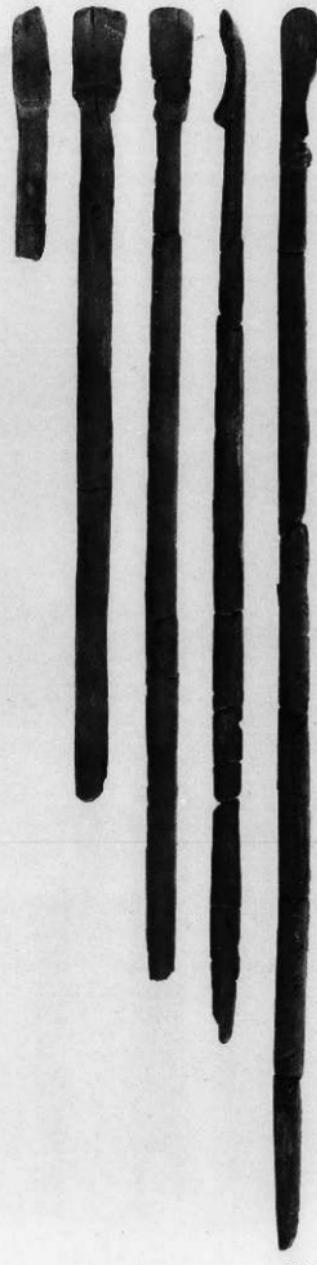
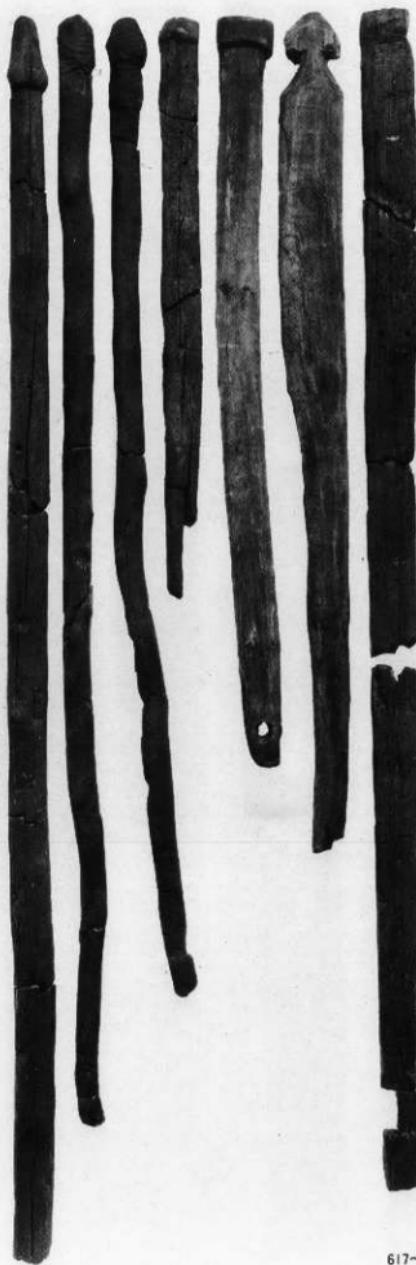
578~589
592~598



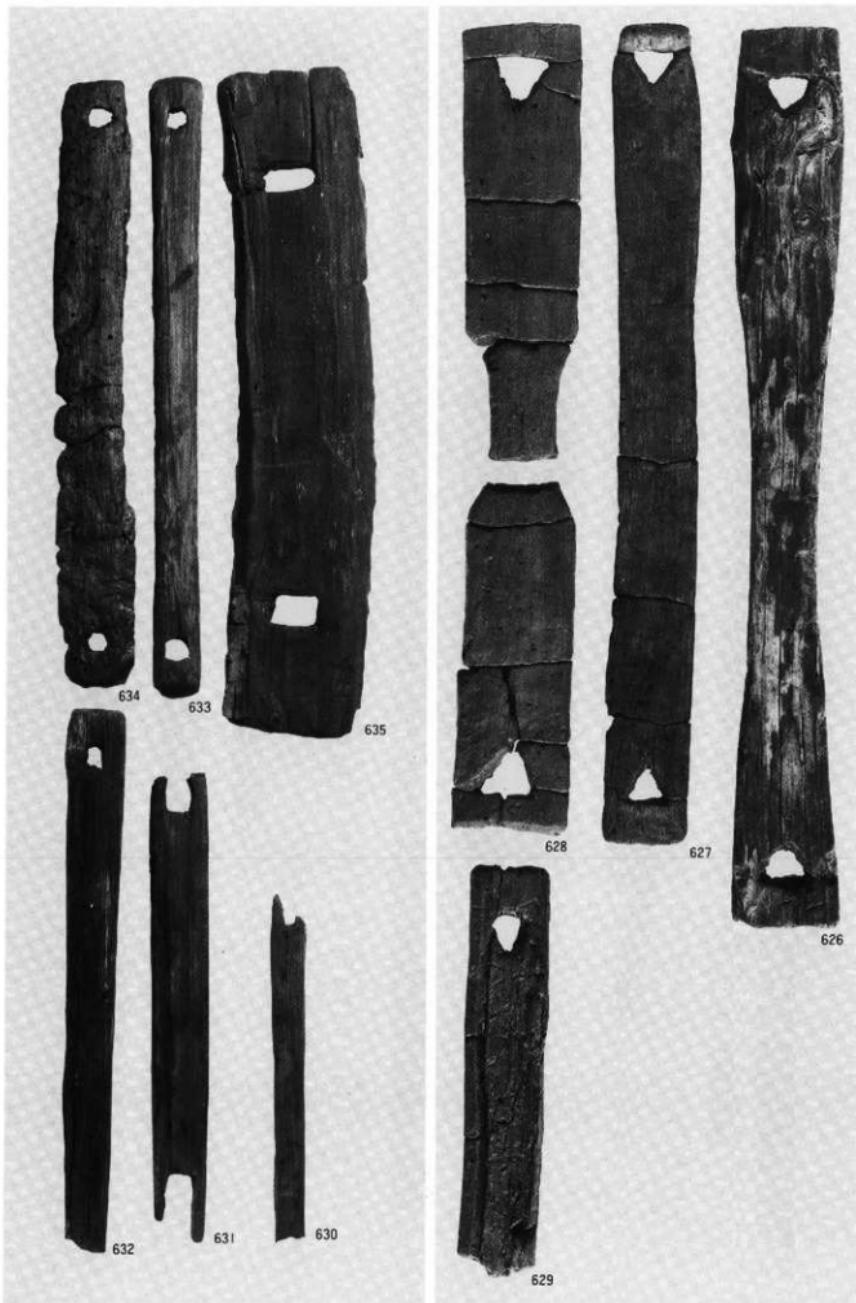
590・591
599～601
603～607

608～616

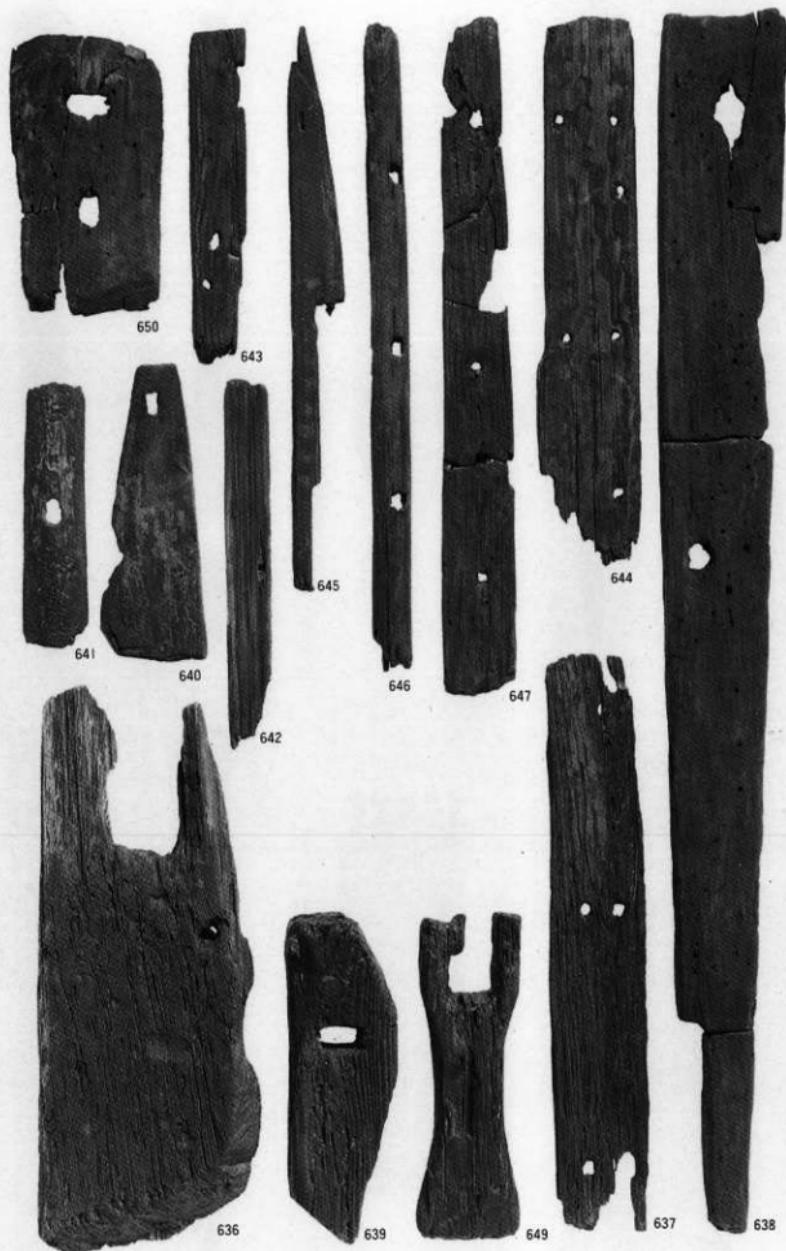
用途不明木製品（棒状他）

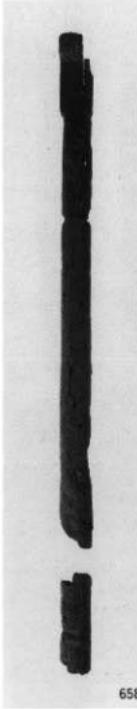
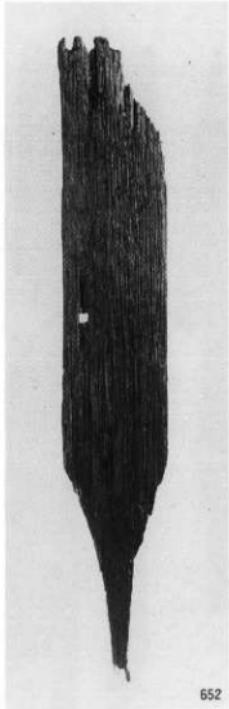
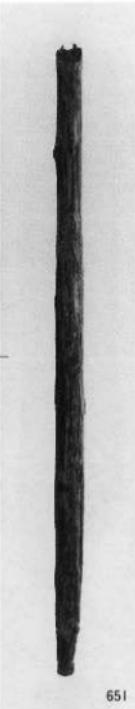
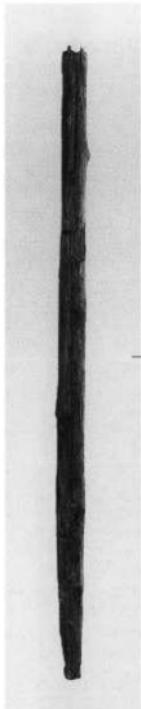


用途不明木製品



用途不明木製品





651

652

658

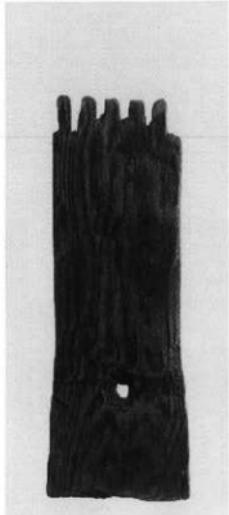
657



651



651



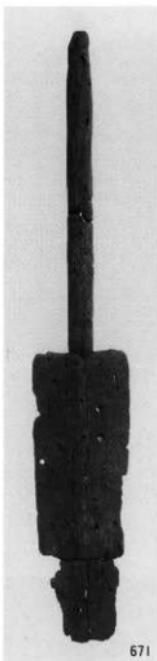
653



656



655



671



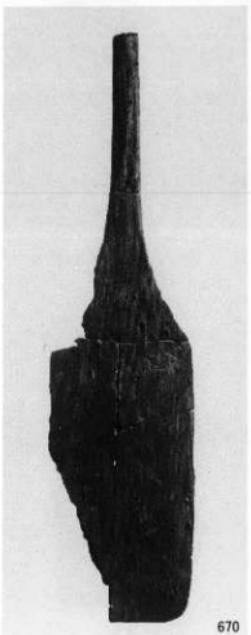
666



669



668



670



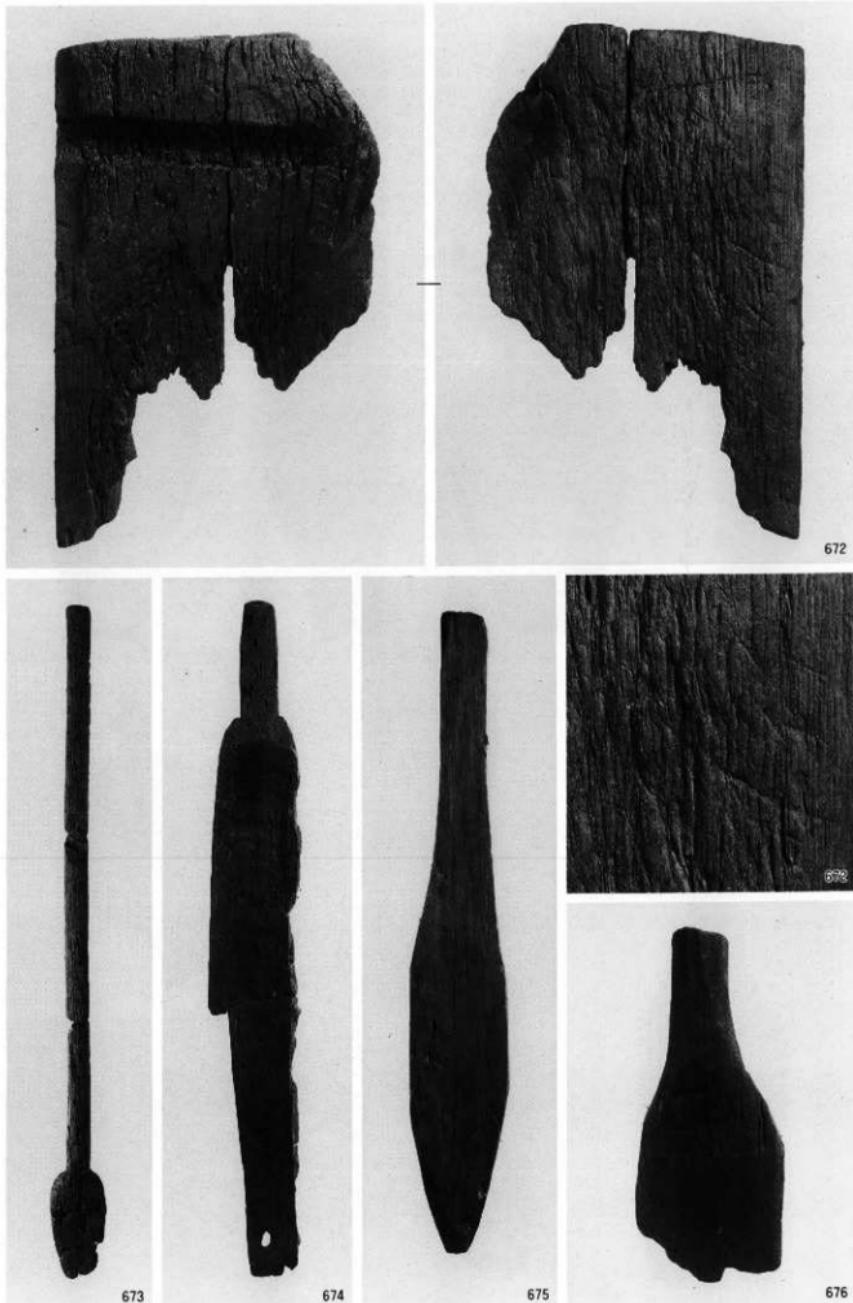
669



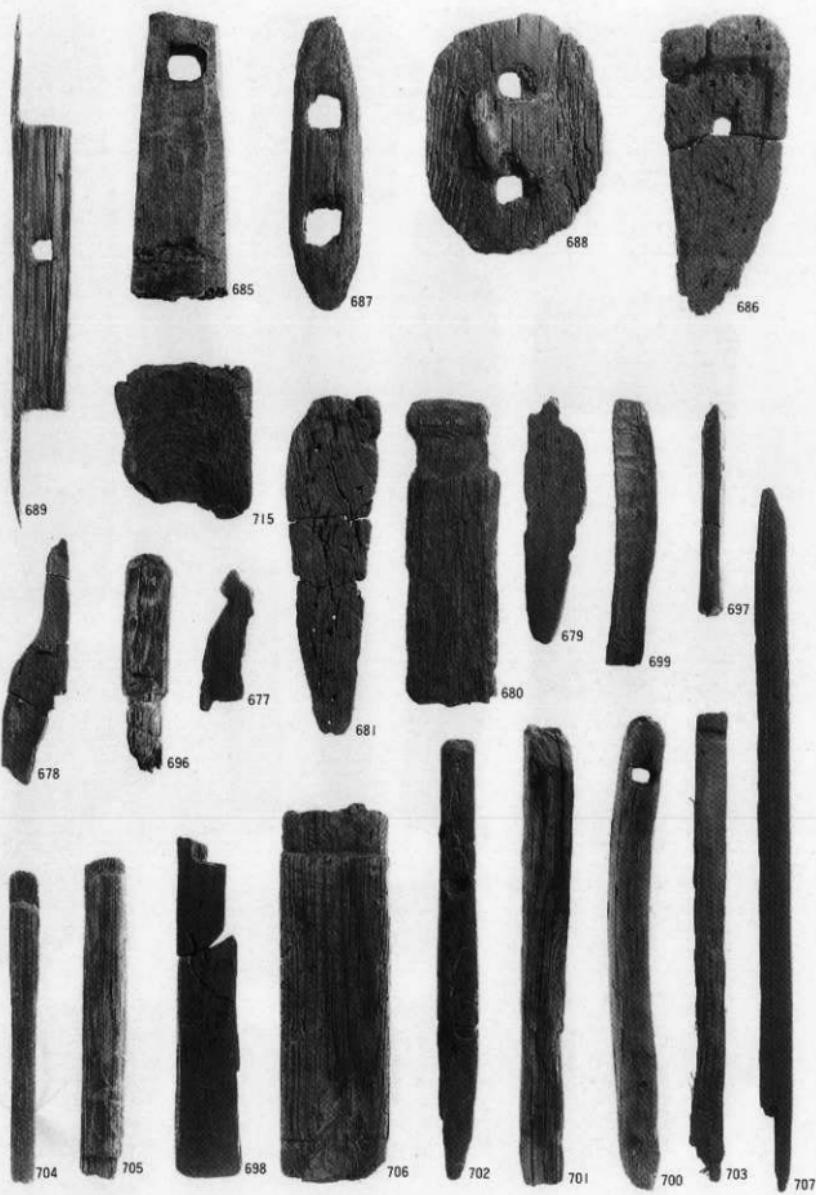
669

用途不明木製品

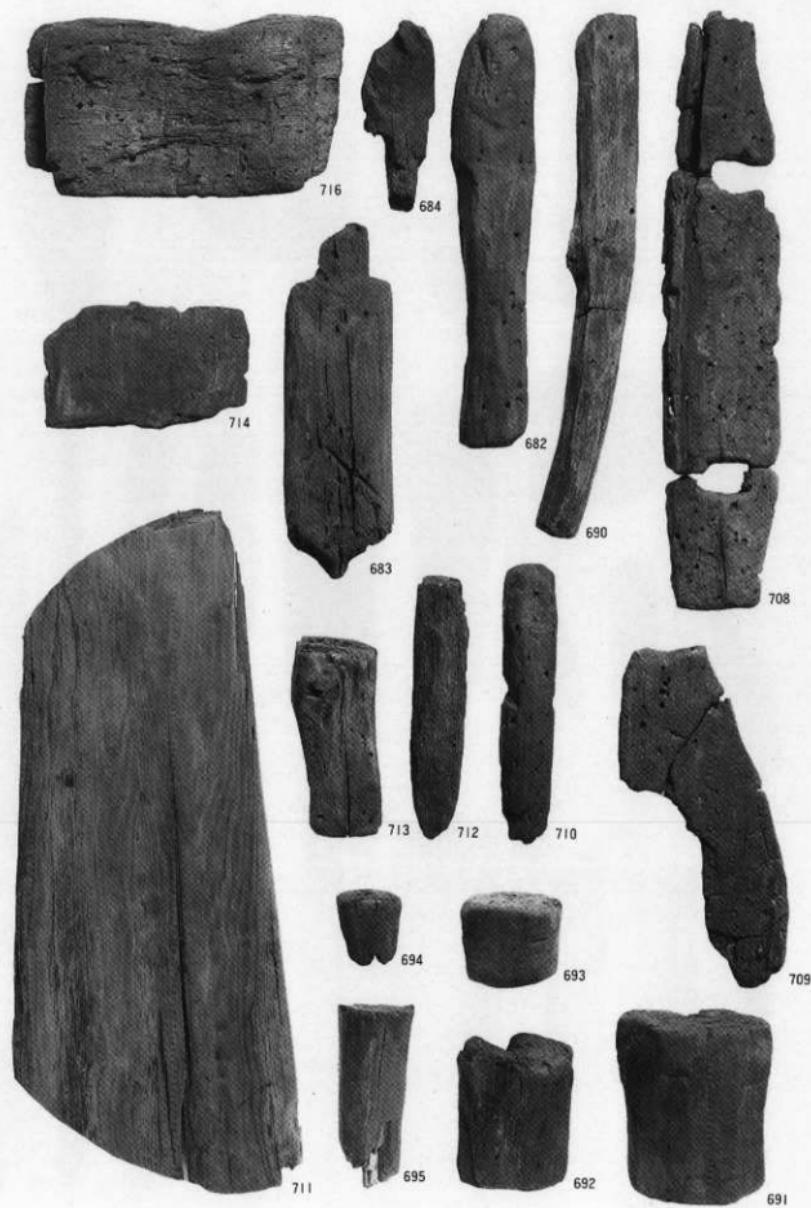
図版82

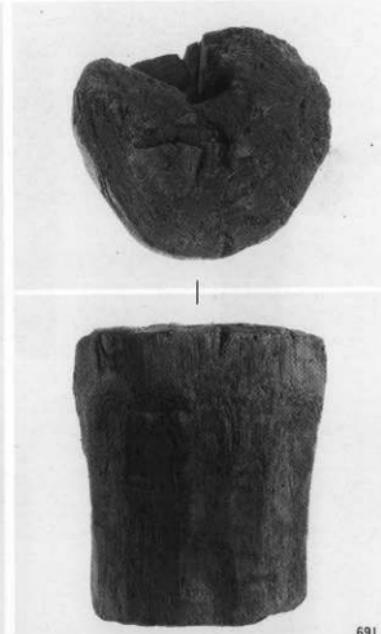
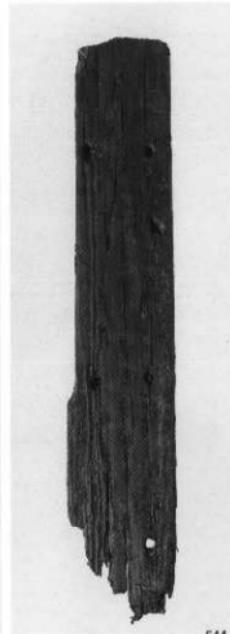
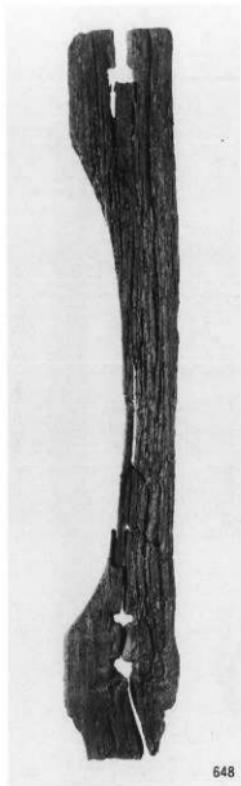


用途不明木製品



用途不明木製品





用途不明木製品



720



721



721



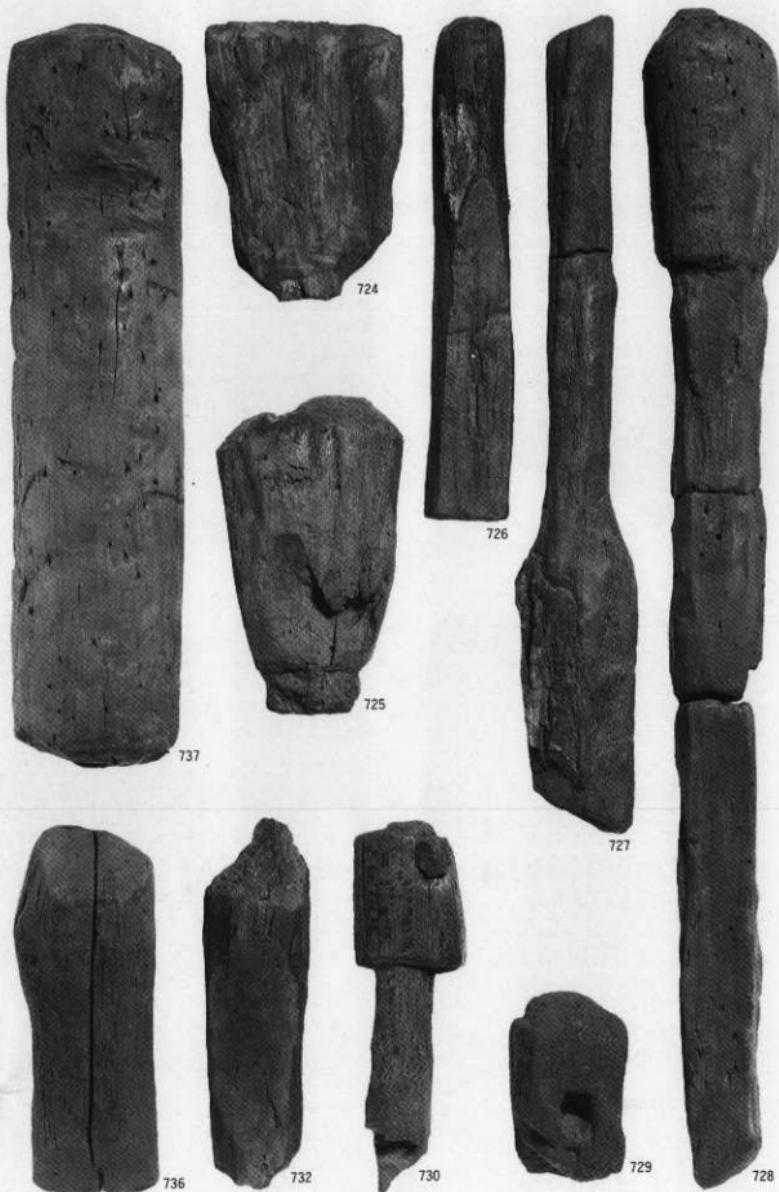
722



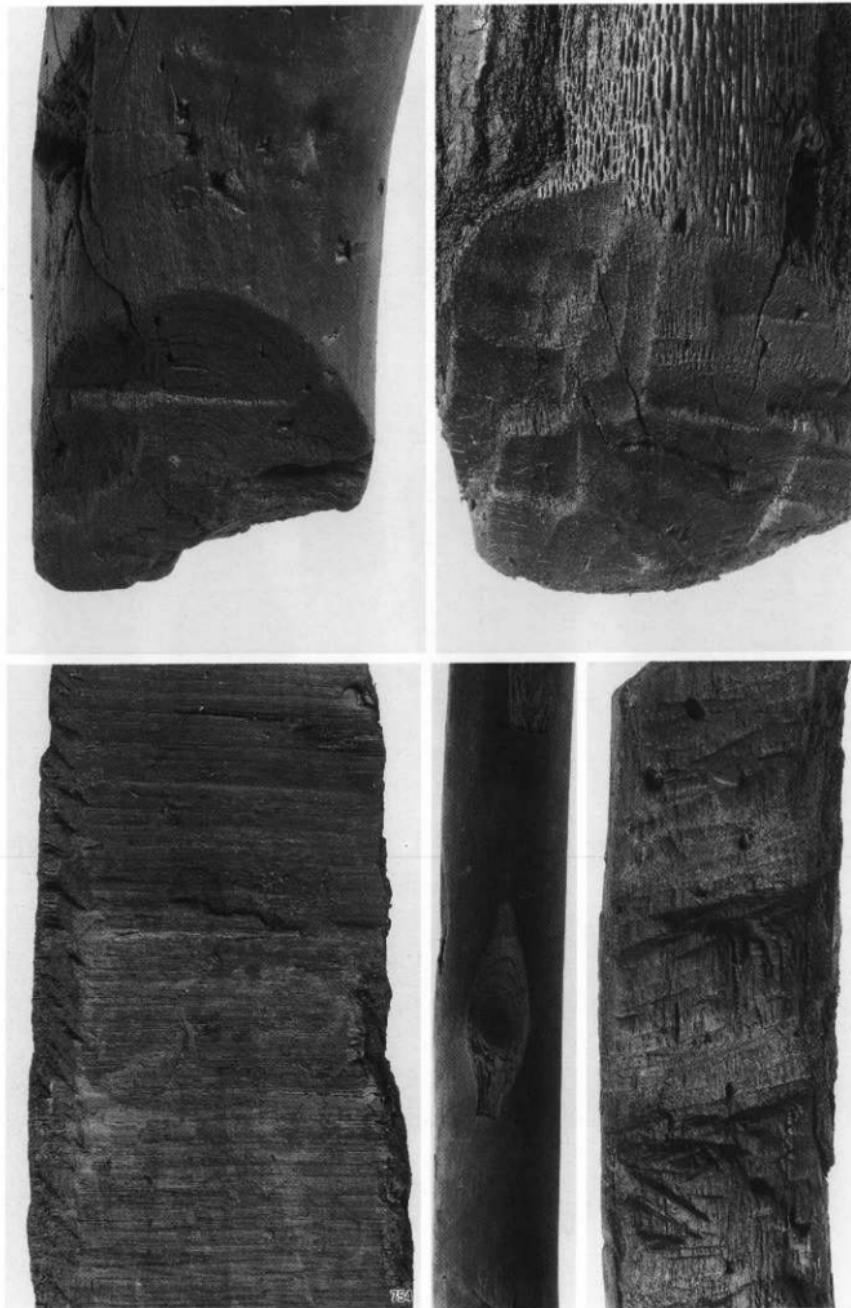
750



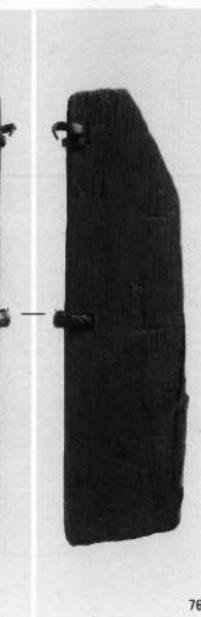
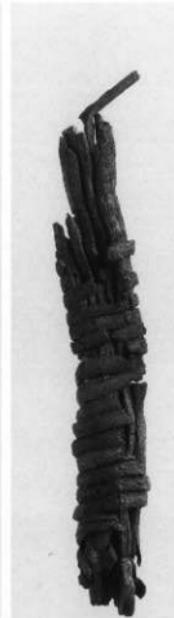
750



用途不明木製品（加工痕資料他）



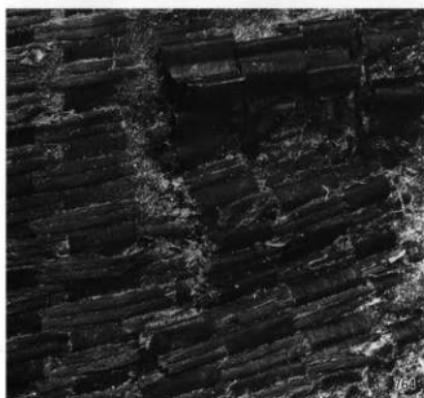
用途不明木製品（加工痕資料）



用途不明木製品（樹皮製品）



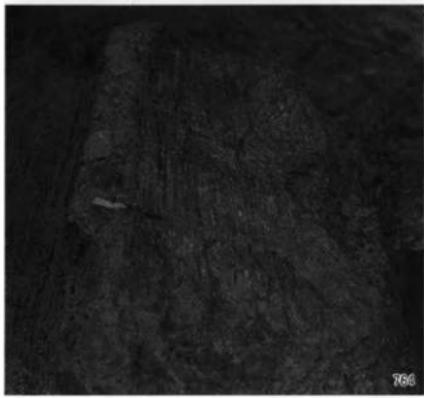
764



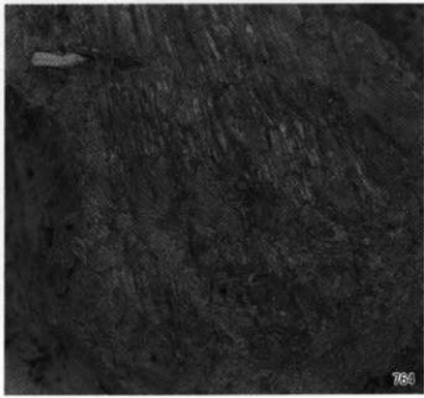
765



766



766



766

用途不明木製品（籠編物）

報告書抄録

ふりがな	かくえいせき
書名	角江遺跡II 遺物編2 木製品
副書名	二級河川新川住宅地関連公共施設整備促進(中小)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第69集
編著者名	佐野五十三・中川律子(旧姓伊藤) 特論1「静岡県浜松市角江遺跡出土木製品の樹種」東北大学助教授 鈴木三男 特論2「角江遺跡出土の琴ならびに琴状木製品」放送大学助教授 笠原潔
編集機関	静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒424 静岡県清水市江尻台町18-5 TEL 0543-67-1171㈹
発行年月日	1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
角江遺跡	静岡県浜松市 入野町 15174他	22202		34° 41' 51"	137° 36' 33"	19910401 19940331	12,496m ² (延べ 36,454 m ²)	二級河川新川住宅地 関連公共施設整備促進 (中小)工事

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
角江遺跡	集落跡	弥生中期～後期	溝 方形周溝墓 土器棺墓 土坑、柱穴	鋤、建築材、柱根、籠編物	<ul style="list-style-type: none"> ・鋤、鍬などの農耕具は豊富な器種を持ち、その未製品は製作工程や生産活動が想定される資料である。 ・臼(弥生中期)は、側面に8方向の透かしが入ったものが2点ある。
		古代～中世	溝、井戸跡 土坑	漆碗、曲物、田下駄 木簡、背負子、井戸枠、用途不明木製品	<ul style="list-style-type: none"> ・臼(弥生中期)は、側面に8方向の透かしが入ったものが2点ある。 ・琴は、槽作り(弥生中期)が、1点、槽状(弥生中期・後期)が2点ある。槽作りの琴は、これまでに例がない8突起のものである。
	河川跡	繩紋～弥生後期		農具(鋤、鎌、その未製品、膝柄)、鎌、鍬、臼、堅杵、横柵、石斧柄、紡織具、船、たも、弓、櫛、食事具、容器、琴、祭祀具、雜具、建築材、土木材、用途不明木製品	
	水田跡 包含層	弥生後期～中世 弥生～近世		橋、蓑身具、建築材、用途不明木製品 下駄、漆碗、舟形、曲物、用途不明木製品	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第69集

角江遺跡II

遺物編2（木製品）

平成3～7年度二級河川新川住宅宅地関連公共施設
整備促進（中小）工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成8年3月31日

編 集 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
行 〒424 清水市江尻台町18番5号
TEL(0543)67-1171～1173
FAX(0543)63-1174

印刷所 黒船印刷株式会社
〒422 静岡市登呂二丁目4番25号
TEL(054)286-0236㈹